

ゾイドワイルドエヴォ  
リユーション アフ  
ターZERO

ゼネラル・ターキン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ゾイドワイルドから200年後、新地球暦1245年、世界はネオデスメタル帝国によって支配され、各地で帝国に対するレジスタンスが立ち上がり、再び戦乱の時代を迎えていた。

そんな中、帝国に捕らえられていた伝説のビーストライガーにシーザーと名付け、相棒となった少年ウィルは謎の少女エマと共に旅に出かけ、その戦いに巻き込まれ、人とゾイドが共存する世界を目指すために戦う物語である。

# 目次

第1話	「ライガーと少年」	1
第2話	「襲いかかる竜爪」	7
第3話	「旅立ち」	23
第4話	「奴隷都市」	29
第5話	「赤い翼」	42
第6話	「弾幕の幻狐」	53
第7話	「ウィルの試練」	73
第8話	「電撃の参謀」	85
第9話	「ラプトルの少女」	102
第10話	「最凶ゾイドの系譜」	118
第11話	「駆け抜ける、ウルフ」	132
第12話	「レジスタンス召集」	150
第13話	「スナイプテラを攻略せよ」	165
第14話	「皇子と少女」	182
第15話	「ロボットの都市」	194
第16話	「ディメパルサーと少女」	209
第17話	「脅威!ダブルドライブパンサー」	233
第18話	「再会」	258
第19話	「新帝国誕生」	272
第20話	「皇帝出陣」	287
第21話	「灼熱の破壊竜」	303

	第22話「甦れ、シーザー」	326			
	第23話「新生！ライジングライガー」				
345	第24話「立ちはだかる竜爪」	372			
	第25話「決戦！デスロッキー」				
389	第26話「新皇帝誕生」	411			
	第27話「囚われのエマ」	432			
	第28話「漆黒の戦士 闇のライガー」				
453	第29話「激突、シーザーVSダーククライ				
	ガー」	472			
	第30話「甦るオメガレックス」				
	第31話「それぞれの道」	493			
	第32話「暗黒の破壊要塞」				
	第33話「南極の決戦」				
	第34話「超進化、シーザー」				
	第35話「決着、ダークライガー」				
609	第36話「ワイルドブラスト、ギルラプ				
	ター」	633			
	第37話「復活、二大破壊龍」	656			
	第38話「グラビティキャノン始動」				
678	第39話「迎え撃て、二大破壊龍」				

705

第40話「狙い撃て、ゴールド」――

第41話「海底神殿」――

第42話「ギルラプターの男」――

第43話「ダブルギルラプター」――

974

第50話「帝都奇襲」――

第51話「最強龍の目覚め」――

第52話「デスレックス獄炎龍」――

803

第44話「旧デスメタルの遺産」――

1047

第53話「究極完全龍 アルティメット

ゼログライジス」――

834

第45話「先帝復活」――

第54話「最終決戦 シーザーVSアル

ティメットゼログライジス」――

第46話「古の皇帝龍」――

第55話（最終話）「未来を切り拓け、ラ

第47話「同盟軍集結」――

イガー」――

第48話「デスレックス紫龍」――

944

1113

第49話「二大破壊龍を奪還せよ」――

924

10281003



# 第1話 「ライガーと少年」

アラシ率いるフリーダム団がデスメタル帝国を壊滅させてから200年後の新地球暦1245年、デスメタルに代わって新たに建国された強大な軍事国家ネオデスメタル帝国によって世界の8割が植民地化され、支配される時代になっていた。

各地で圧政を敷くネオデスメタル帝国に立ち向かうため、反ネオデスメタルのレジスタンスが抵抗を開始し、その反乱を鎮圧するためにネオデスメタルの名将の1人であるジェームズ・カーター大佐率いるギルラプター部隊とキャノンブル部隊がレジスタンスのラプトリア部隊と交戦を開始していた。

ギルラプター隊がラプトリア隊を圧倒し、戦況は帝国が優勢であった。

「現在、我が軍のギルラプター、キャノンブル隊が反乱軍を押しています。このまま行けば、制圧は容易でしょう。」

「だが、しかし、妙だ。物量ではこちらが圧倒的に有利なはずなのに、何の策も無しに我がネオデスメタルに立ち向かうとは…」

「所詮、反乱軍の考えることなど、浅はかに過ぎません。」

「本国に輸送予定で、基地に保管されている例のライオン種は無事か？」

「それは心配ありません。あそこは戦場から離れている辺境の地ですから、まず見付かることはありません。」

そんな中、帝国軍の支配を受けていない辺境の村タルトに1人の少年が村の周囲を散策していた。少年の名はウイル、ある仕事で消息不明となった父親のようなゾイド乗りになるため、自分の相棒ゾイドを見つげるため、1人旅をしていた。

旅の途中、ウイルは人気の無い古びた工場を見つげる。沸き上がる好奇心を抑えられず、立ち入り禁止のテープを振り分け、無意識のうちに中に入ってしまった。しかし、その施設は帝国軍施設であり、施設に入ったウイルはあるゾイドを見つげる。

そのゾイドは1200年以上前に帝国と共和国の戦争を終結させ、一度滅びた地球を再生させ、地球を悪の魔の手から救った伝説のゾイド、ビーストライガーだった。ライガーは逃げられないよう、拘束され、苦しそうにしていた。

ウイルは苦しそうなライガーを助けるため、目についたスイツチを押し、その拘束を外した。拘束を外されたライガーはウイルを警戒している。それを見たウイルは、



「怖がらなくていい！俺は敵じゃない！だから、大丈夫さ！」

それを聞いて首を傾げるライガー、

「そうだ！お前、俺の相棒にならないか？俺とお前なら、きつと合う！俺と一緒にいかないか？お前の名はシーザーって名にしよう！どうだ？」

少し警戒心がなくなり、ウイルに近づくライガー、しかし、そこに同盟軍の部隊を制圧したカーター大佐率いる帝国軍部隊が戻り、ウイルとライガーを目撃してしまう！

「その少年、そのライガーは我々帝国軍の所有物だ！君のような子供が持つべき物ではない！返したまえ！」

ライガーを返すよう、ウイルに言うカーター大佐、しかし、帝国軍を見て怯えているライガーを見たウイルは、

「シーザーをこんな目に遭わせるお前らに渡すつもりはない！」

そう言い、自爆スイッチを押し、ライガーのкокピットに乗り、施設から脱出する。カーター大佐や帝国軍兵士もキャノンブルやギルラプターに乗って脱出し、後を追う。

シーザーは後を追うギルラプターを蹴散らすもまだウイルを相棒と認めていないため、シーザーとのシンクロが合わず、カーター大佐のキャノンブルに吹っ飛ばされてしまう。

コクピットから吹っ飛ばされたウイル、

「悪いようにはしない。さあ、そのライガーを返すんだ!」

カーター大佐はシーザーを返すよう、何度も言うが、それでも断るウイル、

「シーザー、お前だけでも逃げる!」

と言つてシーザーを守ろうとするウイル、シーザーは少し躊躇していた。

「早く逃げるんだ!」 兵士がウイルに銃を突きつけたその時、突然、シーザーが吠え、シーザーの身体が発光し、シーザーの身体からゾイドキーが現れた。

「まさか、あれだけ従わせることができなかつたライガーがあの子を相棒と認めたのか!」

キーの出現に驚愕するカーター大佐、兵士を蹴キーの出現に驚愕するカーター大佐、兵士を蹴散らしたシーザーに乗ったウイルは、

「ようし、シーザー、あいつらを倒すぜ! 切り拓け! シーザー! 俺の魂と共に! 進化解放!! エヴォブラスト!!」

キーを差し、ウイルの掛け声と共にエヴォブラストするシーザー、

「面白い! ならばこちらにも敬意を持つて挑もう! キャノンブル! 兵器解放! マシンブラスト!!」

カーター大佐の掛け声と共にマシンブラストするキャノンブル、ウイルを相棒と認め

たシーザーはウィルと上手くシンクロし、キャノンブルの9連キャノン砲をかわし、突っ込んでくるキャノンブルと激突する。

「ビーストオブクロブレイク!!」

激突の末、シーザーはキャノンブルの角を折る。

「バカな！私のキャノンブルがここまで！」

驚愕するカーター大佐、キャノンブルに勝ったウィルはそのままシーザーと共に逃げる。

「まさか、真のワイルドプラストを目撃することになるとは！いずれ、殿下にもあのようになって欲しいものだ！」

逃げるウィルとシーザーを見てカーター大佐はどこか嬉しそうだつた。

一方、戦場から離れた場所に真つ二つにされたラプトルとクワガの残骸の上にピンク色の髪とおかつぱのようなショートカット、そして少女のような中性的な顔立ちをした美少年が座り、その隣にはギルラプターエンペラーがいた。帝国軍のコナー少佐からライガーが逃げたという報告を受ける少年、

「そうか、となると次のゾイド狩りはライガーだな！」

ギルラプターエンペラーを従えるその少年はネオデスメタル帝国の皇位継承者にして帝国の皇子アーネスト・ギャラガーだつた。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 第2話 「襲いかかる竜爪」

帝国軍施設で拘束されていたピーストライガーを助け、そのライガーにシーザーと名付け、絆を結び、ジエームズ・カーター大佐のキャノンブルを撃破したウイルは故郷のタルト村に戻っていた。

「あんまり、村にシーザーを歩き回らせたなら、村の皆驚くかな？ 取り敢えず、目立たないように帰るか！」

そう言つてシーザーと共に家に戻るウイル、家には母マリナがいた。

「ウイル！ 一体何処に行つてたの？ 心配してたのよ！」

心配そうに言うマリナ。

「ごめんなさい！ でも、母さん、聞いてくれよ！ 俺、ついに相棒ゾイド見つけたんだ！ 俺のシーザーだよ！」

近くに寄るシーザー、そこへ、ウイルが戻つたと知つて叔父のリチャードが現れる。

「シーザーだつて？ そのゾイド、ライオン種のゾイドじゃないか！ 何処で見つけたんだ？」

リチャードの問いにウイルは、

「実は帝国軍つて奴らのところで捕まってて助けてやったんだ！」

「帝国軍だと！」

それを聞いて驚くりチャード、

「ウイル、今すぐにもいいから、そのゾイドを野生に還すんだ！」

それを聞いたウイルは、

「何でだよ？ シーザーは俺の相棒だ！」

リチャードは落ち着いたように、

「いいか！ お前がそのゾイドを帝国軍から脱走させたということはいずれ、帝国軍が

この村に攻めて来るんだぞ！」

「大丈夫だよ！ また来るんだつたら、また蹴散らせばいいさ！ それにシーザーと絆を

結んでワイルドブラストまでして、帝国のキャノンブルを倒したんだよ！」

ゾイドキーを取り出し、得意げに言うウイル、

「ウイル、帝国軍はお前が思っているほど、甘い連中じゃない！ この村は辺境の地だから、帝国の支配を受けず、戦争にも巻き込まれなかった！ もし、帝国軍が来たら、ライガードどころか、村ごと吹き飛ばされるぞ！」

ウイルを説得し続けるリチャード、

「もう、叔父さんのわからずや！なんと言おうとシーザーは俺の相棒だ！来るんだっ  
たら、俺が守ってやるさ！」

そう言つて家から出るウィル、リチャードは出ていくウィルを心配そうに見てい  
た。

同時刻、カーター大佐の部隊が駐留する駐屯地。そこにアグリビッド・コナー少佐の  
乗るバズートルと帝国皇子アーネスト・ギャラガーの乗るギルラプターエンペラーが駐  
屯地に戻つて来た。

それぞれコクピットから降りるコナー少佐とアーネスト、互いに敬礼するカー  
ター大佐とコナー少佐、

「カーター大佐、殿下を連れ戻しました！ご苦労、コナー少佐！殿下！よくぞ、お戻り  
になられました！」

横目で角の折れたキャノンブルを見るアーネスト、

「ライガーが逃げ出して、しかもキャノンブルまで撃破されたそうじゃないか！」

それに対し、カーター大佐は、

「油断がありました！何せ、敵はワイルドブラストまでしましたから！」

それを聞いて少し驚くアーネスト、

「ワイルドブラスト？あれだけ、調教しても従わなかったライガーが絆を結んだって言うのか？」

「はい、予想以上の敵でした！私のキャノンブルをあそこまで追い詰めましたから！」

それを聞いたアーネストは、

「何なら、ライガーの捕獲は僕がやろうか？僕のギルラプターなら造作もないけど！」

それを聞いて割り込むコナー少佐、

「いけません！殿下は帝都に戻るよう、皇帝陛下から命ぜられていますので！」

しかし、アーネストは、

「それはあんた達がこの付近の反乱軍を制圧してからの話だろ？それに制圧した反乱軍はあれで全部じゃないはずだ！その間に僕がライガーを捕獲すればいい話さ！」

「なりません！なら、私がライガーを捕獲します！」

それに対し、アーネストは、



「足の遅いバズートルじや、ライガーの捕獲は無理だ！スピード、パワー共に優れた僕のギルラプターが適任さ！」

「しかしー！」

引き留めようとするコナー少佐、しかし、カーター大佐は、

「わかりました！では、殿下はライガーの捕獲に回り、私とコナー少佐は引き続き、反乱軍の制圧に勤めます！」

「よし、じゃあ、ライガーを持って来るよー！」

そう言つてギルラプターに乗つてその場を立ち去るアーネスト、コナー少佐はカーター大佐に、

「よろしいのですか？」

「いいんだ！第一、いくら引き留めようとしても殿下は譲歩しないだろうし、それに本国の皇帝陛下から好きにやらせるよう命ぜられている。これ以上、殿下を束縛するわけにもいかない！」

それに対し、コナー少佐は、

「しかし、殿下のギルラプターは確かに強力ですが、一体だけでは危険です！念のため、援軍を出しましょう！」

しかし、カーター大佐は、

「いや、その必要はない！一体なのは向こうも同じ！それに出しても、殿下は拒否するだろう！それにあのライガーの少年は中々見所がある！あの少年と戦うことになれば、殿下にも何かしら、変化が起きるだろう！」

「はあ〜？」

カーター大佐の言葉に理解できないコナー少佐、再び場所は変わり、村の外れにウイルとシーザーがいた。

「たく、村を巻き込みたくない気持ちはわかるけど、だからって村だけ無事ならそれでいいはずがないよ！第一、シーザーはあの帝国軍に酷い目に遭ってたんだぞ！助けるのが普通じゃないか！」

イラついているウイルを心配そうに見るシーザー、

「大丈夫だよ！お前は俺の相棒だ！何があっても俺が守ってやるよ！」

少し離れた場所に双眼鏡でウイルとシーザーを見つけたアーネスト、

「あれか！ライガーを奪った奴だから、反乱軍の者かと踏んでいたが、まさか、あんなガキだとは！力尽くまで取り返すのは簡単だが、ここは一般人の振りして近付いて高圧電流で機能停止させて持って帰る方が得策だな！ギルラプター！お前はここで待っている！」

と言い、ウイルとシーザーに近づくとアーネスト、近付いたアーネストに気づいたウイ

ルは、

「なんだ？あいつ？見かけない顔だな！」

アーネストはウイルに話しかける。

「ねえ！そのゾイド！もしかして、君の？」

アーネストの問いにウイルは、

「そうだよ！俺の相棒のシーザーさ！」

「シーザー？」

首を傾げるアーネスト、

「そう、ビーストライガーの名前さ！」

その言葉に、

「へえ、君、ゾイドが好きなんだね！」

「もしかして、お前もゾイドが好きなのか？」

ウイルの質問にアーネストは、

「そうだよ！僕の名はレイル！相棒はギルラプター！」

それを聞いてウイルは、

「ギルラプター！スゲエ！なあ、レイル、お前の相棒を見せてくれよ！」

「いいよ！でもその前に君のシーザーを見せてくれないかな？」

それに対し、ウィルは、

「いいぜ！俺のシーザーは凄いいんだぜ！」

シーザーに近づくアーネストはポケットからそつと携帯用の高压電流を取り出し、それに気づいたシーザーはアーネストを払いのけてしまふ。吹っ飛ばされるアーネスト、

「おい、シーザー！何するんだよ！」

シーザーを叱るウィル、しかし、ウィルは落ちた高压電流を見て驚く。立ち上がるアーネスト、

「バレたら、しょうがない！こうなつたら、力尽くでライガーを奪い返す！」

その時、アーネストの背後からギルラプターエンペラーが飛び出し、シーザーを吹っ飛ばす。攻撃されたシーザーは驚き、村の方へ逃げ、ギルラプターも後を追う。突然の攻撃に驚くウィル、

「なんだ？あのギルラプター？あんなの見たことないぞ！」

驚くウィルに、

「あれが僕のギルラプター、ギルラプターエンペラー！ギルラプターの中でもパワー、スピード共に優れた最強のギルラプターさ！」

「レイル！お前、いきなり何すんだ！」

アーネストの胸ぐらを掴むウィル、しかし、アーネストはそれを払いのけ、拳銃を向

ける。

「お前、まさか、帝国軍か！」

ウイルの質問にアーネストは、

「それに答えるつもりはない！ さあ、あのライガーを返すんだ！」

その時、突然、石が降ってきて、アーネストの右手に当たり、拳銃を落とす。と同時に少女が現れ、

「さあ、早く！ ライガーを助けに行つて上げて！」

突然のことに驚くウイル、

「君、誰？」

それに対し、少女は、

「説明は後よ！ それより、ライガーを！」

「そうだ！ シーザーと村が危ない！」

少女と一緒に村に向かうウイル、

「あれはエマ、何故、あいつがこんなところに？」

二人の後を追うアーネスト、一方、村では、シーザーとギルラプターが戦っていた！ シーザーの攻撃を尽くかわし、シーザーをぶつ飛ばすギルラプター、騒動を見たりチャードとマリナは、

「あのゾイドは？」

マリナの質問に、

「ああ、あれは世界でも一体しかないギルラプターの亜種、ギルラプターエンペラー！しかも、帝国では皇位継承者のみ搭乗が許されるゾイド！そのゾイドが何故、この村に？」

銃を持った村人達が、

「よそ者め！村から出てけ！」

とギルラプターに向けて発砲する。しかし、ギルラプターには通用せず、ギルラプターは前足で村人達を蹴散らす。シーザーはすかさず、ギルラプターに攻撃するが、ギルラプターはその攻撃をかわし、尻尾で尻ぎ払う。ウイルと少女はシーザーの元に着き、

「大丈夫か？シーザー！」

すかさず、襲いかかるギルラプター、しかし、リチャードの乗ったキャタルガがギルラプターをぶっ飛ばす。

「こうなってしまった以上、戦うしかない！キャタルガ！本能 解放！ワイルドブラ ストー！！」

ワイルドブラストするリチャードのキャタルガ、すかさず、ギルラプターのコクピットに乗るアーネスト、ギルラプターに向かつて攻撃するキャタルガ、しかし、ギルラプターには通用せず、キャタルガも吹っ飛ばされてしまう。　　シーザーに乗ったウイイルは態勢を建て直し、

「レイル、俺が相手だ！これ以上、村を巻き込みな！」

アーネストは、

「僕だって、こんなへんぴな村に用はない！用があるのはそのライガーだ！とつとと返しやがれ！」

それに対し、ウイイルは、

「シーザーは俺の相棒だ！」

「そいつは僕の所有物だ！だから、そいつは僕のものだ！」

それに対し、ウイイルは、

「ゾイドは物じゃねえ！相棒だ！それにレイル、お前、一体、何者だ？」

「もはや、隠す必要はない！僕の名はギヤラガー、アーネスト・ギヤラガー！帝国の皇帝になる男だ！」

それを聞いたリチャードは、

「ギヤラガー？まさか、デスレックスとジェノスピノを操る皇帝ギヤラガー三世の息子で、ギルラプターエンペラーを操る帝国の皇子はあの少年か！」

「お前は許さねえ！いくぞ、シーザー！切り拓け！シーザー！俺の魂と共に進化 解放！エヴォブラストー!!」

「あれがワイルドブラストの進化形、エヴォブラスト！あのライガーと絆を結ぶなんてあの子、何者？」

驚愕する少女、

「いくぞ！ピーストオブクローブレイク！」

突っ込むシーザー、しかし、ギルラプターは難なくかわす。

「もう一度だ」

しかし、またもやかわされる。それに対し、少女は、

「真っ直ぐじゃ駄目！攻撃パターンを変えて！」

少女のアドバースにウィルは、

「わかった！ピーストオブクローブレイク！」

それを見たアーネストは、

「また、同じパターンか！」

と言い、かわすが、シーザーすかさず、態勢を変え、よけるギルラプターに一撃を喰



らわす、ギルラプターの身体に傷が付く。アーネストは、

「かすり傷だが、僕のギルラプターに傷を負わすとは！」

「ようし、いいぞ、シーザー！もう一度だ！」

しかし、ギルラプターはすかさず、よけ、尻尾で尻ぎ払ってしまふ。

「確かにそのライガーは強い！だが、乗っているお前はライガーの力を完全に引き出してないようだね！」　　そう言い、シーザーに突進するギルラプター、ぶつ飛ばされるウイルとシーザー、

「いい加減、そのライガーを返したらどうだ？」

しかし、ウイルは、

「何と言おうと絶対に渡さねえ！」

「相変わらず強情な奴だな！そんなにライガーと一緒にいたいなら、帝国に入ったらどうだ？僕、帝国の皇子だから、父上に頼んで、ここの総督にしてあげるよ！そうすれば、この村守れるし、ライガーの世話だってちゃんと保証してあげる！悪くない話だろ？」

しかし、それを聞いて怯えるシーザー、それを見たウイルは、

「ふざけんな！シーザーがこんなに怯えてるんだ！シーザーに何したか、知らないけど、ゾイドを苦しめるお前らはどうせ、ゾイドを道具としか思っていないんだろ？そんな

奴に渡してたまるかー！」

アーネストはため息をついて、

「どこまで頑固な奴だ！仕方ない、この際、スクラップにしても持つて帰るか！」  
そう言い、コクピットからデスメタルキーを取り出し、

「ギルラプター、強制 解放！デスブラストー！」

デスブラストし、

「真・瞬撃殺！」

凄まじいスピードでシーザーを攻撃するギルラプター、ギルラプターのスピードについていけず、その猛攻を受けるシーザー、少女は、

「まずいわー！ライガーもあの子もギルラプターのスピードについていけない！このままじゃ、ライガーとあの子が！」

ギルラプターの攻撃でシーザーの身体に傷が付き、足を崩し、倒れるシーザー、それを見たアーネストは、

「カーターのキャノンブルを倒したっていうから、少しは歯ごたえがあると思っただが、この程度か！なら、これで終わりにしてやる！」

その時、ギルラプターのコクピットから通信が入る。通信の相手はカーター大佐だった。

「殿下、皇帝陛下が直ちに帝都に帰還せよとのご命令が出た！」  
通信を聞いたアーネストは、

「バカな！目の前にライガーがいるのに！」通信のカーター大佐は、

「今は皇帝陛下のご命令が最優先だ！ましてや、これ以上、民間人を戦闘に巻き込むわけにはいかない！」

それを聞いたアーネストは、通信を切り、デスメタルキーを取り外し、ギルラプターのデスプラストを解除し、ウイルとシーザーを睨み付ける。

「運が良かったようだな！だが、覚えておけ！ライガーは必ず潰す！そして、エマ、お前もだ！」

そう言って、そのまま立ち去るアーネスト、それを見て安心するウイル、少女がウイルとシーザーの元に立ち寄り、

「君、大丈夫？」

「ありがとう！大丈夫だよ！ところで、君は？」

「あたしはエマ、エマ・コンラッド！あなたのライガーを助けに来たの！」

「そうなのか！さつきはありがとう！君のアドバイスがなかったら、俺とシーザーはあのまま負けていたよ！」

「あたしはただ、君とライガーの力になりたかっただけ！それより、早くライガーを直

してあげなきや！」

「ああ、そうだ！早くシーザーを！」

ギルラプターに乗って駐屯地に向かうアーネスト、

「倒し損ねたが、あのライガーは必ず倒す！僕が次期皇帝として父上に認められるためにもっと強くなる！」

T o b e c o n t i n u e d

### 第3話 「旅立ち」

辺境の村、タルト、ギルラプターエンペラーの攻撃で傷ついたシーザーをエマが直していた。そこへ道具を持ったウイルが、

「こんな家だから、簡単な道具しかないけど。」

「大丈夫よ！幸い、それほど傷じやないし、それにこの子、シーザーって言うのね。すつごくあなたのこと信頼してるわ！」

それを聞いたウイルは、

「シーザーを知っているの？」

「ええ、知っているわ！それに私はシーザーを助けに来たの！」

「じゃあ、あの帝国軍は？」

質問を投げかけるウイルにエマは、

「そう、あれはネオデスメタル帝国、ゾイドを軍事兵器化して各地を制圧している帝国よ！今、多くの人々とゾイドがああ帝国に苦しめられているの！」

「さつき、ギルラプターに乗ったギヤラガーって奴も帝国軍？」

「そうよ、帝国の皇子にして次期皇帝アーネスト・ギヤラガー！」

「あいつ、お前のこと知ってたみたいだけど、知り合いなの？」

「ええ、ちよつとね：。」

答えたエマは悲しそうな目をしていて。

シーザーとギルラプターの戦いで荒廃

した村を見て、

「俺のせいだ！俺がシーザーを助けたせいで村を巻き込んだ！やつぱり、叔父さんの言う通りにシーザーを野生に返すべきだった！」

落ち込むウイルに、

「そんなことないわ！だってあなたがシーザーを助けなかったら、シーザーはもつと酷い目に遭ってたかもしれないし、それに野生に還したってまた帝国軍に、捕まっていたかもしれないわ！」

「でも、それでも村を巻き込んでしまったことに変わりない：。」

さらに落ち込むウイルに、エマはそつとウイルの手を優しく握り、

「もう、男の子なんだから、しつかりしなさい！あなたが悩んでしまったら、シーザーも悩んでしまうわ！それにシーザーに聞いてみなさい！本当にあなたが間違っているのか!!」

「君、もしかして、シーザーの言葉がわかるの？」

エマは、

「何となくね！それにシーザーと会うのは初めてじゃない気がするの！まるで、大昔にも会ったような気がするの！」

そう言い、シーザーの修理を終え、

「さ、もう大丈夫よ！次は村の復旧作業に行かなきゃ！」

そう言い、壊れた家の復旧を手伝いに行くエマ、シーザーはウイルをじつと見つめている。何かを伝えるように見るシーザーを見て、ウイルは、

「シーザー、俺はどうしたらいい？」

その時、ポケットに入っていたゾイドキーが光りだし、取り出したゾイドキーとシーザーを見て、

「お前、もしかして、自分と同じように苦しめられている人々とゾイドを助けたいと言っているのか？」

それを聞いてうなずくシーザー、そして、ウイルは何か吹っ切れたように家に向かった。

「旅に出る？」

ウイルの話聞いて驚くりチャード、ウイルは

「俺はこれ以上、村を巻き込みたくない！それにシーザーのように苦しめられている人々やゾイドがいるなら、助けてやりたい！そして、行方不明の父さんを探したいんだ

!

それを聞いたリチャードは、

「本当に行くつもりなのか？」

それを聞いてうなづくウイル、ウイル真剣そうな目を見て、

「わかった！お前の好きにしろ！だが、その代わり、シーザーをちゃんと守るんだぞ  
！」

それを聞いたウイルは、

「ありがとう！叔父さん！」

了承を得たウイルは、家を出て、エマと一緒に村の復旧作業を手伝いに行った。

リチャードを見て、マリナは、

「本当にあれでいいの？」

「いいんだ！ウイルにとつてはあの方がいいだろう！第一、いくら引き留めても考えを変えないだろうし、ずっと村に閉じ籠もりだったあいつに広い世界を見てやりたいし、それにあいつは兄さんに似て、無鉄砲だが、他人を気遣う優しさもある。」

リチャードは安心したように言った。村の復旧作業が終わり、夜が明けた後、

ウイルはエマやシーザーと共に旅に出る準備をした。リチャードはウイルに、

「いいか、外の世界は広く、そして、危険が多い！絶対、命を危険に晒すことはするな



！」

それに対し、エマは、

「大丈夫です！私がちゃんと世話しますから！」

それを聞いたウイルは、不機嫌そうに

「何だよ！お前は俺の姉さんじゃないんだぞ！」

エマは、

「あなた、ゾイドのメンテナンス、あまり知らないじゃない！もし、シーザーが怪我したら、直せないわよ！それにあなたいくつなの？」

「14だけど！」

それを聞いたエマはクスツと笑って、

「なあんだ！私の方が一つお姉さんじゃない！」

「え、そうなの？」

驚くウイル、二人を見てリチャードは、

「ここから、あまり揉めるな！とにかく二人とも気を付けるように！そして、エマ！

ウイルを頼んだぞ！」

「はい！」

エマの元気そうな返事を聞いて不満そうなウイル、

ウイルとエマはシーザーに乗

り、リチャードとマリナ、村人達がみえなくなるまで手を振った。

「ウイル、外は広くてお前の知らないことはたくさんある！だが、中には残酷なところもあり、お前はそれに直面することになる！そしてお前の父で私の兄が行方不明になったこともいざれ知ることになるだろう！」リチャードは手を振りながら、心の中で、これから起きることを予言するように言った。

T o b e c o n t i n u e d

## 第4話 「奴隸都市」

「いけいけ！シーザー！もっと早くだ！」

初めてシーザーと旅に出たウィルは嬉しそうで、ウィルの言葉に答えるようにシーザーは勢いよく走り出した。コクピットの中でウィルの後ろでしがみついているエマは、

「きやあああ！ちよつとウィル！もうちよつとゆつくり走りなさい！」

「なんだよ！せつかく旅に出たんだから、いいじゃないか！」

「もう、子供ね！それにあんまり無茶したら、シーザーが可哀想じゃない！それにメンテナンスと修理する道具を探さなきゃ！」

「じゃあ、あの街ならあるんじゃない！」

ウィルが指さしたのは見るからに都会だった。そのまま前進しようとしたとき、エマが、

「待ってー！」

エマの言葉を聞いて止まるウィルとシーザー、シーザーから降りたウィルとエマはゆつくり近づいて街を見る。よく見ると街のあちこちに帝国の国旗が置かれていた。

ここは帝国の都市だった。

「シーザーと一緒に行くのは危険ね！シーザーは見つからないよう安全な場所で待ってあげなきゃ！」

「そうだな！ただでさえ、帝国軍に狙われているからな！シーザー！お前はここで待つててくれないか！」

シーザーはウイルの言うことを聞いて待ち、見つからないように茂みの中で寝そべった。ウイルとエマはそのまま街に向かった。

ウイルとエマが入った街は帝国の都市コルク、ビルが建ち並び、多くの人々が行き来し、中には富裕層の者も多くいた。街にはラプトルやキャノンブル等の帝国の主要ソイドや銀色、黒色の装甲服を纏った帝国の一般兵があちこち警備し、街を巡回していた。

しかし、人々は全く気にすることなく、平凡としていた。都市の店は商売繁盛しているのが多く、歩いている中、

「帝国がここを統治してから随分変わったわね！それまではあまり目立たない田舎だったんだから！」

「ホントよね！総督のブリューゲル大尉が私達のような市民にもいろいろと提供して下さったり、公共事業を行って失業者もいなくなり、ホントに感謝だわ！」

あちこちで、帝国の支配を歓迎する声が出て、

「帝国って意外といいことをしてる奴もいるんだな！」

少し感心するウイル、ウイルの言葉と周囲の声を聞いて少し複雑そうな顔をするエマ、そこに目的の店が見つかり、

「ウイル、私は道具を探すから、あなたは遠くへ行つちや駄目よ！」

「わかつてるよ！もう、子供じゃないんだから！」

エマが店に入ったとき、ウイルは、

「せっかく、初めて街に来たんだし、ちよつと回つてみるか！」

と言い、周囲を散策するウイル、散策している中、ウイルは目立たないところに立ち入り禁止と書かれた施設を見つける。

「なんだここ？見るからに入つちやいけないとこだけど、ここつて前にシーザーが閉じ込められていた場所に似ている！」

道具を買つて店を出るエマ、しかし、周りにウイルの姿は見えなかった。

「ウイル、ウイルー！もう、どこ行つたのよ！」

ウイルを探していったエマは施設で立ち往生していたウイルを見つける。

「ウイル、もうどこ行つたの？遠くに行つちや駄目つて言つたでしょ！」

ウイルを叱るエマに

「なあ、エマ、この施設どう思う？」

「どうって？ 一体何が気になるの？」

「だって、こんな街の外れで目立たないようにして、誰も近づけさせないようにしてるなんて変じゃない？」

「確かにそうね。ここには誰かに知られたくないっていう雰囲気が出てるわ！」

「ここ、シーザーが閉じ込められていた場所に似ているんだ！ 一体どうなっているのか調べる必要がある！」

「そうね。確かに無視出来ないわ！」

ウイルとエマは施設が何なのか入ろうとするが、周囲には兵士と機械兵と呼ばれるアンドロイド型のロボット兵が見張っていた。二人はすぐ目についたマンホールの蓋を開け、下水道の中を通って施設に入ることにした。

下水道を通り、通気孔を抜けてついに施設に入ったウイルとエマは、作業をしているゾイドと人々を見つけた。

だが、その光景はまるで都市とは正反対の残酷な光景だった。手足を鎖で繋がれた囚人と全身が錆び付いて老朽化したガノントラス、スコーパー、ラプトル、クワーガ等のゾイドが奴隷として働かされていたのだ。

重いものを運ばされている人々とゾイド達の周りには銃を持った一般兵と機械兵が

いつでも撃てる状態で監視していた。

そして、その中にはコルクを支配する総督ブリューゲル大尉がいた。そのとき、運搬に耐えられず、ガノンタスが足を崩して動きを停めた。一人の兵士が、

「おい、そののろ亀、休むな！」

兵士がボタンを押し、ガノンタスの身体中に取り付けられた高圧電流を流す。悲鳴を上げて苦しむガノンタス、ガノンタスが最後の力を振り絞って立ち上がろうとするが、ガノンタスは倒れ、目の光が消え、機能停止してしまった。それを見たブリューゲル大尉は、

「やれやれ、役に立たない奴だ！そいつは熔鋸炉に落として処分しろ！」

そのとき、ガノンタスと同じく、運搬に耐えられず、倒れた囚人がいた。その囚人は病気がちだった。兵士はガノンタスと同じようにスイッチを押して、高圧電流を浴びせようとしたとき、一人の囚人が反抗した。

「こいつは病気がちなんだ！あのガノンタスだつてもう動ける状態じゃなかった！少しは休ませたらどうだ！それに俺たちはお前らのために働いているんじゃない！」

そのとき、ブリューゲル大尉が腰から拳銃を取り出し、無言でその囚人を射殺する。その様子を見た囚人たちは静まりかえった。ブリューゲル大尉は、

「お前たちは帝国に逆らった罰としてここで働かされている！もし、逆らえば、こいつ

のように殺す！生き残りたかったら、ここで一生働くんだな！そいつもあのろ龜と一緒に熔鉱炉に落として処分しとけ！」

それを聞いて囚人たちはそのまま作業を続けた。

「ひびい……！」

それを見たエマはもう見ていられないような悲しい顔をしていた。ブリューゲル大尉の非情な行為に我慢できなくなったウィルは、ついに身を乗り出してしまふ。突然、現れたウィルにブリューゲル大尉は、

「何だ？貴様は！」

「ふざけんなよ！お前ら！ゾイドと人間の命を何だと思っているんだ！もう許さないぞー！」

ブリューゲル大尉に殴り込もうとするウィル、しかし、兵士にすぐさま取り押さえられてしまう。ブリューゲル大尉は、拳銃をウィルの頭に突き付け、

「本来なら、奴隷にするところだが、お前がいると、この連中が反乱を起こしてしまうからな！残念ながら、ここで死んでもらう。」

「ウィルー!!」

エマの叫び声と共にウィルのポケットのゾイドキーが光りだし、同時に壁を突き破ったゾイドが現れ、兵士を蹴散らす。それはシーザーだった。



「何だ？あのゾイドは！」

驚愕するブリューゲル大尉、

「シーザー、助けに来てくれたのか！」

ウイルの言葉にうなづくシーザー、そのとき、帝国のラプツールが現れ、シーザーに襲いかかってくる。ウイルはすかさず、シーザーに乗り、ラプツールを全て蹴散らす。しかし、蹴散らしたラプツールを風ぎ払ってブリューゲル大尉の操るガブリゲーター Mk-II が現れた。

ガブリゲーター Mk-II は灰色で、バイザーが付けられ、背中に対空射砲と二つのミサイルポッドが装備されていた。

「まさか、手配中のライオン種が出るとはな！こいつを捕まえて本国に持って帰れば、俺は四天王クラスに昇格する！」

ジャンプしてシーザーに噛みつきこうとするガブリゲーター、

「シーザー、よけろ！」

何とかかわすシーザー、しかし、ガブリゲーターはすかさず態勢を変え、再びシーザーを攻撃する。何とかそれをギリギリでかわす。

「こいつ、速い！」

驚くウイル、それを見たエマは、

「あのガブリゲーター、スピードに特化した改造型なのね！」

「ほお、意外といい神経してるじゃないか！それじゃ、本気を出そうか！」

そう言い、ブリューゲル大尉はコクピットからデスメタルキーを取り出し、

「ガブリゲーター、強制 解放！デスブラスト!!」

デスブラストしたガブリゲーターは再びシーザーに噛みつきこうと襲いかかってきた。ガブリゲーターのスピードに翻弄されながらもギリギリかわすシーザー、それを見たブリューゲル大尉は、

「逃げてばかりだな！デスブラストして私のガブリゲーターのアゴのリーチが長くなって、スピードが遅くなって安心したと思ってるのか？」

そう言い、すかさずよけたシーザーを尻尾で尻ぎ払い、シーザーは吹っ飛ばされる。

「これじゃ、つまらないな！なら、もっと面白くしよう！」

ガブリゲーターの体からデスモークが現れ、ガブリゲーターの姿が見えなくなった。姿が見えなくなり、戸惑うウィルとシーザー、突然、煙からミサイルが降ってシーザーに直撃する。ブリューゲル大尉は少し離れたところからガブリゲーターのミサイルを撃ってきたのだ。

姿が見えないため、ガブリゲーターの位置がわからないウィル、そのとき、シーザーが地面の匂いを嗅ぐような行動をとった。

「シーザー、もしかしてわかるのか？」

ウイルの問いにシーザーがうなずく。

「ようし、そこだな！」

ウイルの掛け声と共に動くシーザー、ウイルの掛け声と共に動くシーザー、

「切り拓け、シーザー！俺の魂と共に！進化 解放！エヴォブラストー！！」

エヴォブラストとして、煙を割り、そこにガブリゲーターが現れた。

「ビーストオブ……」

しかし、そのとき、ガブリゲーターが口を開いて襲いかかってくる。

「シーザー、よけろ！」

ガブリゲーターの噛みつきに何とか逃れる。再びガブリゲーターは煙の中に隠れた。

「何故だ？さっきのミスイルといい、何故、俺たちの位置がわかるんだ？」

そのとき、ウイルの脳裏にコクピットの中で そのとき、ウイルの脳裏にコクピットの中で赤外線スコープを着けたブリュッゲル大尉の姿が映った。

「そうか。あれだ！あれで俺たちの位置を知ってたんだ！でも、こちらからいくと、さっきの噛みつき攻撃を喰らってしまふ。どうすれば？」

そのとき、シーザーが何か考えがあるかのようにうなずく。

「シーザー！ようし、わかった！その手でいくぞ！」

ミサイルを撃ち込むブリューゲル大尉、

「フフフ、さすがにこれだけ撃てば、そろそろ限界かな？ようし、では、こちらからいくぞ！ガブリゲーター、噛みつけ！」

シーザーに再び噛みつきこうとするガブリゲーター、

「今だ！」

ウィルの掛け声と共にシーザーはよけ、

「ビーストオブクロブレイク!!」

ガブリゲーターに攻撃するシーザー、攻撃を喰らったガブリゲーターは吹っ飛ばされる。

「バカな！何故、わかった？」

驚愕するブリューゲル大尉にウィルは、

「そつちからでるのを待ってたのさ！それにシーザーは匂いで位置を知っていたからね！」

「フ、やるじゃないか！だが、これはどうかな？」

ブリューゲル大尉はボタンを出し、スイッチを押す。そのとき、地面が爆発した。下は水だった。

「しまった！」　水の中で溺れるシーザー、すかさず、シーザーをがぶりつくガブリゲーター、

「ハハハ、これでもう、身動きとれまい！こいつを本国に持って帰れば、出世の道も夢ではない！」

「ふぎけんな！ゾイドは出世の道具じゃねえ！」

「何とでも言え、どうせ貴様は身動きとれないからよ！そのまま噛み砕け！」

苦しむシーザー、

「ウイル、シーザー！」

そのとき、エマは近くにあったミサイル砲を見つける。ミサイル砲に近づいたエマは装置を作動し、

「ウイル、シーザー、今助けるわ！」

照準をガブリゲーターに向ける。

「ハハハ、そのまま砕けてしまいな！」

そのとき、ミサイルがガブリゲーターの口に直撃し、ガブリゲーターはシーザーを離す。

「くそ、あの小娘が！」

「ようし、反撃だ！シーザー！ビーストオブクロブレイク!!」

「グワアアア」

吹っ飛ばされるガブリゲーター、エマはウイルとシーザーの元に来て、

「みんなは脱出したわ！早く、私たちも！」

「ようし、俺たちも脱出だ！」

エマもシーザーに乗って脱出する。コクピットから出るブリューゲル大尉、そこへ一人の兵士が来て、

「大尉、大丈夫ですか？」

「心配ない！それより、軍を出せ！早くあのライガーを！それと、このことを知られないよう、市民に避難勧告を出し、反逆者が逃げたと伝えろ！」

施設から脱出した囚人やゾイドたちと共に逃げるウイルとエマ、シーザー、突然の騒動に市民は大パニックになっていた。ウイルとシーザーは逃げる市民を避けながら走るが、中には

「帝国の反逆者め！さっさとこの街から出ていけ！疫病神が！」

と石を投げつける市民までいた。そのときの と石を投げつける市民までいた。そのときのウイルとエマは複雑で悲しい気持ちだった。帝国に苦しめられている人々とゾイドを助けたのに帝国の市民からまるで悪人扱いされることを。ウイルとエマ、シーザーは帝国軍に追われながら、都市を出た。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 第5話 「赤い翼」

ブリューゲル大尉の操るガブリゲーター Mk-II を撃破し、奴隸となった人々とゾイドを解放したウイル達だが、そのまま帝国軍に追われることとなった。

後ろには、ラプトール、デイロフオス、キャノンブル等が追ってくる。シーザーはガブリゲーターとの戦いで、ダメージを追っていたため、帝国軍と戦うことは出来なかった。

追われる中、ウイルは向こうに何かあったか気づいたようにシーザーに指示を出し、シーザーは咄嗟に向きを変えた。帝国軍はその後を追うが、見失ってしまう。シーザーは茂みの中の洞窟に隠れたのだ。帝国軍はそのまま前進していった。ウイルは安心したように

「ふう、何とかまいたようだな！」

「でも、安心は出来ないわ！隠れている間にシーザーの傷を直さなきゃ！」

コルクで買った道具を出し、シーザーの手当てをするエマ、修理して、何時間か経つた後、ウイルは外の様子を見ようと出たが、すでにマシンプラストした4体のバズートルが待ち構えていた。



ついに帝国軍に捕まってしまったウイル達、連行された場所は帝国軍の空軍基地だった。ウイルとエマは同じ牢屋に入れられ、シーザーは別のところに移送させられた。牢屋に入れられたウイルは窓の外を見た。

そこには帝国軍ゾイドの演習が行われていた。演習を行っていたゾイドは帝国軍最強の飛行ゾイド、スナイプテラで、ライダーはかつて、キャノンブルでウイル、シーザーと戦ったカーター大佐だった。

スナイプテラの演習相手は空中のクワールガと地上のラプトール、デイロフォス、キャタルガ、バズートルだった。しかし、カーター大佐の操るスナイプテラは圧倒的な機動力で、そのゾイドを全滅させた。

しかし、地上で煙が晴れたところに一体のゾイドが残っていた。それはコナー少佐の操るもう一体のゾイド、ステゴゼーゲMk-IIだった。コナー少佐のステゴゼーゲMk-IIは黒いカラーリングに対空戦闘用の装備が施されていた。

スナイプテラに向けて攻撃するステゴゼーゲ、スナイプテラはその攻撃をかわすが、すかさず、撃ったステゴゼーゲの攻撃を喰らってしまう。

しかし、怯まず、態勢を立て直すスナイプテラ、続けて攻撃するステゴゼーゲ、演習場は今や、スナイプテラとステゴゼーゲMk-IIの一騎討ちとなっていた。その様子を見て二人の兵士が見ていた。

「一体、どちらが勝つんでしょう?」

「カーター大佐のスナイプテラは我が帝国軍最強の空戦ゾイドだ!しかし、コナー少佐のステゴゼーゲMk-IIもそう甘くない!前はコナー少佐のステゴゼーゲMk-IIが勝つたのだからな!」

方向を変えながら攻撃するステゴゼーゲMk-II、スナイプテラはその攻撃に翻弄されたと思いきや、真つ直ぐステゴゼーゲの方に向かった。

「制御トリガー解除!スナイプテラ、兵器 解放!マシンブラスト!!」

「カーター大佐は堂々と真正面の攻撃と来ましたか!なら、私も!ステゴゼーゲ、強制解放!デスブラスト!!」

「アブソルトショット!」

「ナイフオブファイティーン!」

互いに攻撃するスナイプテラとステゴゼーゲMk-II、しかし、スナイプテラはステゴゼーゲのナイフオブファイティーンを喰らうギリギリのところだけ、態勢を変え、ステゴゼーゲmark2の足を狙った。足を撃たれ、倒れるステゴゼーゲMk-II、その戦いに見惚れるウィル、

「演習終了!演習終了!」

スナイプテラとステゴゼーゲMk-IIからそれぞれ降りるカーター大佐とコナー少

佐、

「大佐、一段と腕を上げましたね！」

「いや、あれは賭けだった。下手したら、私が負けていただろう！」

「いえいえ、正直、私も勝てるか不安でした！」

二人は基地内に配備されている量産型スナイプテラを眺めていた。

「爽快だな！」

「反乱軍がクワガノスの化石を大量発掘したとの情報が入り、それに対抗するため、我が帝国も大佐のスナイプテラの量産型の開発に成功しました。もし、実戦投入されれば、反乱軍も抑えられるでしょう。」

「確かにその通りだ！だが、どんな理由があろうと市民を巻き込む戦闘と市民への圧政はするべきではない！」

「もちろんです！我が帝国軍人は皇帝陛下のために尽き、世界の秩序と市民を反乱軍から守るために戦っているのですから！」

「そうだな！しかし、悲しいことに反乱軍を支持する者もいるのも事実だ！」

そのとき、兵士がシーザーを再び調教しようとして取り押さえようとしたとき、シーザーが暴れ、兵士を蹴散らし、部屋を破壊した。非情ベルが鳴り、兵士は緊急態勢をとった。部屋を破壊したシーザーはウィルとエマが入れられた牢屋を破壊した。

「シーザー、来てくれたのか！ようし、脱出だ！」

ウィルとエマはシーザーに乗り、基地から脱出しようとする。しかし、基地の出口から出る瞬間、突然攻撃を受ける。それはコナー少佐のステゴゼーゲ Mk-II だった。

「あれはさっきのゾイド！」

「君か、大佐と殿下が言っていたライガーを逃がした少年というのは！あのときは、バズートルでいくつもりだったが、まさか、私のステゴゼーゲで相手することになるとは！」

「こうなったら、やるしかない！切り拓け、シーザー！俺の魂と共に、進化 解放！エヴォブラストー!!」

すかさず、コナー少佐もデスマタルキーを取り出し、

「ステゴゼーゲ、強制 解放！デスブラストー!!」

「ビーストオブクロブレイク！」

「ナイフオブファイティーン！」

互いにつつかるシーザーとステゴゼーゲ、しかし、ステゴゼーゲのナイフオブファイティーンがシーザーのビーストオブクロブレイクをはじいた。

「ならば、シーザー！後ろから回るぞ！」

後ろに回って攻撃するシーザー、しかし、ステゴゼーゲはすかさず、尻尾で攻撃する。それをよけたシーザーはステゴゼーゲの装甲に攻撃する。

「ビーストオブクロブレイク！」

しかし、ステゴゼーゲはびくともせず、全くの無傷だった。ステゴゼーゲの尻尾で風ぎ払われるシーザー、

「なんて、装甲だ！さつき戦ったガブリゲーターとはまるで比べ物にならない！」  
驚愕するウィルにコナー少佐は、

「私のステゴゼーゲは私専用として改造が施されたゾイドだ！帝国では大佐のスナイプテラと互角に渡り合える程の実力を持ち、今となつては私の誇りだ！」

再び、ナイフオブファイティンで、攻撃するステゴゼーゲ、それを何とかかわすシーザー、そのとき、空中にスナイプテラが現れた。

「コナー少佐、私にそのライガーの相手をさせてくれないか？」

「しかし、大佐！」

「君は基地の警護に必要だ！それにあのときの借りを返したいんでね！」

「わかりました。大佐！」

そう言い、デスブラストを解除して後退するステゴゼーゲ、

カーター大佐はウィルに、

「少年、まさか、ここで再会するとは思わなかったよ！」

「その声はあのときのキャノンブルのライダー！」

「覚えててくれたか。改めて自己紹介しよう！私はジェームズ・カーター！キャノンブルとこのスナイプテラのゾイド乗りにして帝国軍人だ！」

それを聞いたエマは、

「カーター大佐？まさか、こんなところで会ってしまうなんて！」

「また、シーザーを奪うつもりなんだろう？」

「結果的にはそうなるな！私は本国からそのライガーを持ち帰るよう命令されているからな！」

「だが、なんと言おうと、シーザーは俺の相棒だ！絶対に渡さねえ！」

「そう言うと思ったよ！なら、私と戦って、私のスナイプテラに勝ったら、見逃そう！だが、負けたら、そのライガーを渡して貰うよ！」

「上等だ！やってやるよ！」

それを聞いたエマは、

「待つて！いくらなんでもスナイプテラと戦うなんて無茶よ！ここは逃げない！」

「いや、逃げてもあいつは絶対に追いかけてくる！ここで奴を倒してこの基地から脱

出するぜ！」

「いい姿勢だ！では行くぞ！」

そう言ってシーザーに向けてガトリングを撃ち込むスナイプテラ、シーザーはそれを避けながら走る。

「相手は飛行ゾイド。ギリギリに引き付けて攻撃する！」

空中でガトリングで攻撃するスナイプテラ、そして、避けながら走るシーザー、スナイプテラがシーザーの近くに入るそのとき、

「今だ！シーザー！」

ウイルの掛け声と共にジャンプするシーザー、そしてそのまま攻撃する。

「ビーストオブクロブレイク！」

しかし、スナイプテラはすかさず避け、ガトリングをシーザーに撃ち込む。ガトリングを撃ち込まれ、態勢を崩し、倒れるシーザー、

「残念だが、その程度では私のスナイプテラを倒すことは出来ない！」

「くそ！どうすれば。」

そのとき、ウイルは基地内の鉄塔を見つけた。

「あれだ！行くぞ、シーザー！」

ウイルの言葉に答えるかのように鉄塔の方に向かうシーザー、それを見たカー

ター大佐は、

「なるほど、そういうことか！ならば、敢えて乗ろう！」

そのまま、鉄塔に向かうシーザーを追うスナイプテラ、スピードを上げて、すかさず、鉄塔に登るシーザー、てっぺんまで登ったシーザーは追うスナイプテラを待ち構えた。そのとき、

「今だ！ピーストオブクロブレイク！」

スナイプテラに向かってジャンプするシーザー、

「制御トリガー解除！スナイプテラ！兵器 解放！マシンブラストー！！アブソルート ショット!!」

すかさず、マシンブラストしてシーザーに撃ち込むスナイプテラ、足を撃ち込まれたシーザーは態勢を崩し、そのまま、落ちてしまう。

「うわああー！」

「きやああー！」

それを見たカーター大佐は、

「いい作戦だったが、私のスナイプテラはそう甘くはない！それに戦闘中、コクピットに女の子も一緒に乗せるのは感心しないな！しかし、さっきの声、どこか、聞き覚えのある声だが？まさか！」



立ち上がるシーザー、スナイプテラは再び、シーザーに狙いを定めた。

「ブリュール大尉のガブリゲーターを倒したそうだが、それでも私のスナイプテラには及ばなかったようだな！ 殿下には悪いが、ここで終わりにしよう！」

再び、アブソルートショットを撃とうとする。再び、アブソルートショットを撃とうとするカーター大佐、そのとき、突然、基地に爆発が起きた。

「一体なんだ？ 敵の奇襲か？」

通信の兵士は、

「わかりません！ しかし、攻撃を受けているのは確かなんですが、リーダーに全く反応無し！ 敵の姿がわかりません！」

次々と基地の至るところが爆発する。クワールが出撃するが、すぐに一体が撃墜され、他のクワールが攻撃しようとするが、姿が見えないため、攻撃が出来ず、次々と撃墜されてしまう。地上でも、ラプトル、デイロフオス、キャノンブル隊が出撃するが、次々と倒され、キャノンブルも足を撃ち抜かれ、倒れる。

「コナー少佐、そちらの状況は？」

「私のラプトル隊も全滅！ 反撃しようとしても敵の姿がわかりません！」

カーター大佐も敵を探すが、リーダーに反応がなく、全くわからない。そのとき、姿

の见えない何かがスナイプテラに向かって攻撃した。スナイプテラは何とかその攻撃をかわす。

「レーダーに全く反応無し、それに今の攻撃はガトリングによるもの！ということ  
は。」

カーター大佐は何かに気づいたように地上に攻撃する。

「アブソルートショット！」

姿の见えない何かはスナイプテラの攻撃を避ける。カーター大佐は、

「そこそ隠れず、姿を見せたらどうだ？グラッド・バレル元中尉！」

姿の见えない何かはシーザーの前に立つ。

「中尉は止めろ！俺は軍人でも帝国軍でもねえ！」

謎の男の声と共に、姿の见えない何かが姿を 謎の男の声と共に、姿の见えない何かが姿を現す。姿を見せたゾイドはガトリングフォックスだった。

ガトリングフォックスを見たウィルは、

「あのゾイド、父さんのマイロに似ている！」

ウィルの脳裏には父、デイビッドの相棒の白いハンターウルフのマイロが映った。

T o b e c o n t i n u e d

## 第6話 「弾幕の幻狐」

基地を襲撃し、絶対絶命のウィル達の危機を救ったのは、ガトリングフォックスだった。姿を見せたガトリングフォックスを見たカーター大佐は、

「まさか、ここで再び会うとは思わなかったよ！」

ガトリングフォックスのライダーは、

「へ、別にあんたに用があつて来たわけじゃねえ！この基地に用があつて来たんだよ！」

「グラッド・バレル！もし、投稿するなら、罪を許そう！もちろん、帝国軍の再入隊も許す！」

しかし、グラッドは、

「お断りだ！俺はもう二度とあそこに戻るのはごめんだぜ！」

「そう言うと思ったよ！なら、私と戦え！君にも借りがあるんでね！」

「おいおい、いくら、スナイプテラだからといって、俺とレックスに勝てるでも？」

「それはやってみなきゃわからない！」

そう言い、ガトリングフォックスに向けてガトリングを撃つスナイプテラ、ガトリングフォックスは走りながら避ける。そのままガトリングを撃ち続けるスナイプテラ、その様子を見たグラッドは、

「へ、いくら同じガトリングでも俺とレックスには勝てねえぜ！」

「ふ、この私が何の策も無しに撃ち続けたと思ってるのか？」

スナイプテラが空中で止まったとき、ガトリングフォックスは既に道を塞がれていた。

「しまった！」

「これなら、狙いが定める。覚悟しろ、グラッド・バレル！アブソルートショットー！」

ガトリングフォックスに向けて、アブソルートショットを撃つスナイプテラ、

「くそ、ここまでか！……なくんてね！いくぞ、レックス！」

グラッドの掛け声と共にアブソルートショットが当たる寸前にガトリングフォックスが身体をひねって避け、

「ファントムガトリングガン！」

スナイプテラに向けてファントムガトリングガンを撃つガトリングフォックス、左翼を撃ち抜かれるスナイプテラ、

「攻撃が当たる寸前に身体をひねって避けてそのまま攻撃するとは！ 敢えて乗ったにしても、かなり危険な行動だ！ それを躊躇せず、やるとは！」

驚愕するカーター大佐にグラッドは、

「伊達に同盟軍の総司令はやってねえ！ 俺とレックスは常に修羅場で生きてんだよ！」

「ふ、なるほどな！ 流石にちよつと油断したが、私のスナイプテラもそうヤワではない！」

態勢を立て直し、もう一度、アブソルートショットを撃とうとするスナイプテラ、その時、スナイプテラのコクピットから通信が入る。

「カーター大佐、反乱軍がこの基地に襲撃して来ました！」

「なんだと！ 規模はどれぐらいだ？」

「陸上には複数のラプトリア、スコープピア、ガノンタス、空中にはカプターと大量のクワガノスが！」

「なに！ 既にクワガノスを復元していたのか！」

「それだけではありません！ 陸上にファンングタイガー、パキケドス、アンキロックス、スパイデス、ハンターウルフ、グラキオサウルス、ボルカノ、空中にはソニックバードまでいます！」

基地の入口ではラプトル、デイロフォス、キャノンブルが同盟軍のラプトリア、スコーピア、ガノンタス部隊との撃ち合いになっているが、すぐさま、フアングタイガーが現れ、

「切り裂け、ゼル、私の魂と共に本能 解放！ワイルドブラストー！！」

ワイルドブラストし、ラプトル、デイロフ ワイルドブラストし、ラプトル、デイロフォス部隊を一瞬で蹴散らし、キャノンブル部隊がフアングタイガーに9連キャノン砲を撃ち込む。

しかし、フアングタイガーはその攻撃を全て避ける。二体のキャノンブルが突進しようとして襲いかかるが、それも避ける。フアングタイガーのライダーは、

「遅い！そんな武器に頼っているから、ゾイドの本来の力を発揮していないのだ！」

そう言い、フアングタイガーは全てのキャノンブルの9連キャノン砲を一瞬で真つ二つにする。そして、その背後にパキケドスが現れ、

「突き抜け、ウィーリー！俺の魂と共に、本能 解放！ワイルドブラストー！！」

ワイルドブラストして、全てのキャノンブル ワイルドブラストして、全てのキャノンブルを一蹴する。すぐさま、バズートル部隊が攻撃するが、パキケドスの横にいたアンキロックスが、

「振り抜け、バンプ！俺の魂と共に、本能 解放！ワイルドブラストー!!」  
ワイルドブラストと共にバズートルを蹴散らす。そしてそのとき、銀色のスパイデスがジャンプして現れ、

「突き刺せ、キール！俺の魂と共に、本能 解放！ワイルドブラストー!!」

ラプトル、デイロフォスを糸で絡みとつて、スパイダーポイズンを浴びせる。また、その横に若草色のハンターウルフもラプトル、デイロフォスを蹴散らす。

前線で無双するファングタイガーを蹴散らす。前線で無双するファングタイガーにコナー少佐のステゴゼーゲMk-IIが立ちはだかる。

「ここから先は通すわけにはいかない！」

ステゴゼーゲMk-IIを見たファングタイガーのライダーは、

「敵の大将とお見受けした。私と勝負せよ！」

「ふ、大将は私ではないが、その勝負受けてたとう！ステゴゼーゲ、強制 解放！デスブラストー!!」

「虎振！」

「ナイフオブファイフティーン！」

激突するファングタイガーとステゴゼーゲ、両者共に一步も譲らない。しかし、そのとき、両者共に一步も譲らない。しかし、そのとき、グラキオサウルス ボルカノが

現れ、キャノンブル、バズートル、ラプトル、デイロフォスがグラキオサウルスに向けて一斉に撃ち込むが、グラキオサウルスは無傷のまま、前進し、

「蹴散らせ、ゴルド！私の魂と共に、本能 解放！ワイルドブラストー！！グラランドハンマー！」

グラキオサウルスのグラランドハンマーでキャノンブル、バズートル、ラプトル、デイロフォスが一蹴される。空中にはカプターとクワガノスが帝国軍のクワীগと交戦し、その内の一体のクワガノスが、

「飛び抜け、クーデリア！私の魂と共に、進化 解放！エヴォブラストー！！」

クワীগの身体を一瞬で真つ二つにし、すぐさま、ソニックバードが翼で蹴散らす。戦況を見たコナー少佐は、通信でカーター大佐に、

「大佐、我が軍はほぼ全滅です！ここは撤退を！」

通信を聞いたカーター大佐は、

「く、まさか、私がガトリングフォックスとやりあっている間に襲撃して来るとは！どうやら、今回は私の負けのようだ！全軍、撤退！」

カーター大佐の命令と共に、スナイプテラについてコナー少佐のステゴゼーゲMk-IIと残りの帝国軍が基地から撤退していく。ガトリングフォックスが遠吠えを上げ、次々と同盟軍のゾイドが入り、帝国軍基地は完全に制圧された。 ウイルとエマはそ



の様子を見て唾然としていた。そのとき、ガトリングフォックスのコクピットからグラッドが降りてきた。ウイル、エマもシーザーから降り、グラッドにお礼を言おうとするが、グラッドはウイルに、

「おい、ガキ、いくら、ビーストライガーでもスナイプテラに勝てるわけないだろ！もつと相手のことを知って戦え！」

それを聞いてウイルはむっとして、

「なんだよ！俺をバカにしてるのか！それに俺はガキじゃねえ！」

「ウイル、あまりムキにならないの！」

エマはグラッドに頭を下げ、

「助けていただいてありがとうございます！」

お礼を言うエマにグラッドは、

「いや、礼には及ばない！」

「あなたなのね！帝国の脱走兵にして、唯一帝国に抗えるレジスタンスの総司令、グラッド・バレルというのは！」

「詳しいな嬢ちゃん、俺のファンかい？」

「いいえ、あなたのことを知らない人はいないわ！」

「そういう、嬢ちゃんだつて、有名人じゃないか！元帝国のゾイド学者エマ・コンラツド！」

それを聞いたウイルは、

「え！エマつて帝国にいたの!？」

「ええ、そうよ！」

「てめえだつて、有名人だろ！伝説のビーストライガーを脱走させたウイルつてガキ！」

「だから、俺はガキじゃねえつて！」

怒るウイルにグラッドはウイル、シーザー、エマの写真が入った手配書を出す。

「コルクの一件で、お前たちは帝国のお尋ね者として手配されている。俺たちは連行されたお前たちの保護とこの基地を制圧するために来たんだ！」

ウイルはグラッドに、

「助けに来たつて、あんたたち、何者だ？」

「やれやれ、何も知らないガキだな！俺たちはネオデスメタル帝国からゾイドと人々を解放するために戦っているレジスタンス、反ネオデスメタル同盟軍！そして、こいつは俺の相棒のガトリングフォックスのレックスだ！」

そのとき、帝国軍を蹴散らした同盟軍の精鋭部隊のメンバーが集結する。

「紹介しよう！俺たち同盟軍のメンバーを、フアングタイガーことゼルが相棒の城時ケン、ウィーリーことパキケドスが相棒のアレックス・バーンズ、バンブことアンキロックスが相棒のアッシュ・ブレインズ、キールことスパイデスが相棒で、潜入作業員ジョン・パーカー、クーデリアことクワガノスが相棒のジェニファー・クライス、ジャックことソニックバードが相棒で、精鋭部隊隊長クリス・マコーミック、ゴールドことグラキオサウルス ボルカノが相棒で同盟軍の副官、アーレン・クルーガー、そして、ハンターウルフが相棒で同盟軍に入ったばかりのリセルヴァ・ディアスだ！」

そこへ、街の町長と人々が現れた。

「同盟軍の皆さん、帝国の支配から解放していただきありがとうございます！」

「助かったよ！これで帝国の支配から解放される！」

礼を言う町長と人々にグラッドは、

「いや、そもそもそれが俺たち同盟軍の任務ですから！」

町の人々のおもてなしを受けて、町一番の店で食事を取るグラッドたち同盟軍とウィルたち、アレックスはグラッドに、

「なあ、グラッド、しばらくこの町にいるのか？」

「そうなるな！今回、戦闘に参加したクワガノスたちは復元したばかりで、まだライ

ダーたちを相棒と認めていないし、それにクワガノスたちの整備にはうつつつけの場所だ！それにここが制圧されたとなると、帝国軍だつて黙つてはいないだろう！」

ウイルは、基地に配備されてメンテナンスを受けているクワガノスを見ていた。

「あれがクワガノス！初めて見た！」

クワガノスに見惚れるウイルにグラッドは、

「ゾイドが好きなら、もつと詳しく知るべきだな！さっきの戦いだつてただやたらとピーストライガーの攻撃を当てるだけだつた！あれじゃ、スナイプテラには敵わないぞ！」

「もう、俺をバカにするなよ！」

「ウイル、いい加減にしなさい！」

場所は変わり、カーター大佐とコナー少佐が撤退した場所、そこは帝国の南方面を支配する総督にして、ネオデスメタル四天王の一人、ゲーチス・アツカーマン中将のいる基地だつた。アツカーマン中将に敬礼するカーター大佐とコナー少佐、

「ご無沙汰しております！アツカーマン中将！」

「カーター大佐にコナー少佐、よく来てくれた。士官学校以来だね！」

「はい、ですが、我が軍の空軍基地が反乱軍に制圧されてしまいました！ですが、この

失態は何としても償います！」

「まあまあ、そう焦るな。今回は相手が悪かった。それに君のスナイプテラはコナー少佐のステゴゼーゲ同様、かなりダメージは大きい！出撃は無理だ！」

「しかし！」

「心配はいらない！基地奪還の指揮は私自らとる！」

「中将自らですか？」

「ああ、それに今回の作戦にはある方も協力してくれる！」

「ある方とは？」

アッカーマン中将の横に壁越しで腕組みしているアーネストがいた。

「殿下！」

「今回の作戦には殿下が私の参謀として加わってくれ。君たちはこの基地の警護を任せる！」

「しかし、いくら殿下のギルラプターでもガトリングフォックスに勝てるとは!？」

「殿下のギルラプターはそう甘くはない！それに今回の作戦は殿下自ら考案したものでね！」

「殿下自らですか？」

「そうだ！だから、君たちは安心して警護に当たってくれ！」

二人のやり取りにアーネストは、

「もう、出撃してもいいかな？ いい加減、早く出たいんでね！」

「もちろんです！ では、手筈通りに！」

アツカーマン中将の許可を得て、ギルラプターエンペラーに乗って出撃するアーネスト、

「いよいよ、あのライガーを潰すときが来た！ それに反乱軍の大将のガトリングフォックスまで片付ければ、その実力を父上に認めてもらえる！」

その後にアツカーマン中将がナックルキング Mk-IIに乗って、部隊と共に出撃する。それを見たカーター大佐は、

「殿下が考案した作戦とはいったい？」

アーネストのギルラプターエンペラーが空軍基地に到着し、警護をしていたラプトリア、ガノンタス、スコープピア部隊を一瞬で蹴散らす。

警報が鳴り、グラッドとウィルたちは外の様子を見ると、目の前にギルラプターエンペラーが現れ、

「さあ、反乱軍の大将、さっさと姿を現せ、後、ライガーもいたら、そいつも出せ！」

「レイル……。」

ギルラプターエンペラーを見たエマは悲しそうな目をしていた。様子を見て、ア

レックスは、

「相手がギルラプターエンペラーとはいえ、所詮一人、俺たち全員がかかれば、勝てるはずだ！」

グラッドは、

「いや、俺たち精鋭部隊がいるこの基地に一人で行くなんてあまりに無謀すぎる！ここは俺とレックスが出て、奴の注意を引き付ける！お前たちは待機している！」

しかし、そのとき、ウィルがシーザーに乗って基地から出る。

「奴の狙いは俺だ！ここは俺に任せてくれ！」

「おい、待て！たく、困ったガキだ！」

ギルラプターエンペラーの前に立ちただかるシーザー、

「ギャラガー！」

「また、会えて嬉しいよ！」

「この前は、やられっぱなしだったが、今度はそうはいかないぞ！」

「へえ、そいつは楽しみだ！」

「切り拓け、シーザー！俺の魂と共に、進化 解放！エヴオプラストー！！ピーストオプ

クローブレイク！」

しかし、ギルラプターはさっと避け、尻尾でシーザーをぶっ飛ばす。

「そのライガー、随分怪我してるじゃないか！ま、カーターのスナイプテラにやられたんじゃないか！」

と言い、シーザーに突進するギルラプター、

「ブリュウゲルのガブリゲーターも倒したそうだが、まさか、このザマとはね！物足りなさすぎるけど、これで終わりにするよ！」

止めを指そうとするギルラプター、しかし、咄嗟にレックスが現れ、ギルラプターをぶっ飛ばす。

「たく、しょうがないガキだ！なら、俺とレックスが本当のゾイド乗りとしてのバトルを見せてやるよ！」

それを見て唾然とするウイル、

「俺たちが遊んでやるよ！皇子様！」

「ようやく、大将のお出ましか！相手にとって不足はないね！」

それぞれぶつかり合うレックスとギルラプター、前足でやり合い、レックスがギルラプターの背後に来てギルラプターがそれを尻尾で尻ぎ払おうとしたところを避け、突進するレックス、しかし、ギルラプターは怯まず、ジャンプしてレックスを踏み潰そうと



する。レックスはそれを避ける。ギルラプターはすかさず、避けたレックスを尻尾で尻ぎ払う。怯まず、態勢を建て直すレックス、

「なるほど、同盟軍の大将なのは伊達じゃないね！でもその程度かい！」

「俺とレックスを舐めていると痛い目見るぜ！いくぞ、レックス！」

グラッドはゾイドキーを取り出す。

「狙い撃て、レックス！俺の魂と共に、進化 解放！エヴォブラストー！！」

エヴォブラストしたレックスを見たウイルは驚愕していた。

「あれがガトリングフォックスのエヴォブラスト！」

「フアントムガトリングガン！」

ギルラプターは驚異的なスピードで攻撃を避けながらレックスに近づく。しかし、レックスは近づく寸前に避け、ギルラプターにフアントムガトリングガンを撃つ。

一旦は怯むも態勢を建て直すギルラプター、それを見たグラッドは、

「やるね！そのギルラプター中々、タフじゃないか！皇子様の実力も舐めたもんじゃないね！」

「僕の父上は、最凶のゾイド、デスレックスとジェノスピノを従える皇帝だ！その皇子たるこの僕がただ城にこもっているだけの男じゃないんだよ！！」

そう言って、猛スピードでレックスに近づくギルラプター、ギリギリで避けるレック

ス、

「今のは危なかった！確かに強い。でも今のままじゃ、俺とレックスには勝てねえぜ！てめえもそろそろ本気を出したら、どうなんだ？」

「僕に本気を出せと要求してくるなんて、そのうち後悔するよ！」

すかさず、デスメタルキーを取り出し、

「ギルラプター、強制 解放！デスブラストー！！真 瞬撃殺！」

猛スピードでレックスの方に向かうギルラプター、レックスはギルラプターにファントムガトリングガンを撃ち込む。直撃しても怯まず、近づくギルラプター、レックスも猛スピードでギルラプターに向かう。

互いにぶつかり合うレックスとギルラプター、ぶつかり合いの末、互いに弾かれる二体、そのとき、突然基地が攻撃を受ける。アツカーマン中將の操るナツクルコング

Mk-IIとその部隊が襲撃してきたのだ。それを見たグラッドは、

「そうか、奴が一人で来たのは奴自身を囿にして俺たちの注意を引き付け、その隙に攻撃することだったのか！」

グラッドは通信を開き、

「クリスたち精鋭部隊はナツクルコングMk-IIとその部隊の相手を、俺とレックスはこのまま奴を引き付ける！」 それに対し、クリスは、

「クルーガー將軍は？」

「今はゴルドの整備を行っている。とにかくお前たちで敵を食い止める！」

「了解！」

グラッドの指示で、精鋭部隊が基地から出る。それを見たアーネストは、

「フフ、今さら、出撃しても遅いよ！」

「おいおい、てめえの相手は俺だぜ！」

そのとき、シーザーも精鋭部隊についていく。

「おい！たく、融通の利かないガキだな！」

「よそ見してる場合じゃないよ！」

突進するギルラプター、それを避けるレックス、基地の周辺では、帝国軍が既に警備を突破していた。

「ナツクルコング、強制 解放！デスブラストー!!」

デスブラストしたナツクルコング Mk-II が次々と同盟軍のゾイドを蹴散らす。ケンのゼルとアレックスのウィーリーがナツクルコング Mk-II に一撃を食らわすが、ナツクルコングは物ともしない。

「く、こいつ強い！」

「流石にファンングタイガーやパキケドスと言えども、私のナツクルコング Mk-II に

は敵わないようだな！」

ナツクルコングに吹っ飛ばされるゼルとウィーリー、一気に劣勢に追い込まれた同盟軍、しかし、そこへシーザーが現れ、帝国軍のゾイドを蹴散らす。シーザーを見たアツカーマン中将は、

「ほう、あれがビーストライガーか！」

シーザーはナツクルコング Mk-II に向かい、攻撃する。

「ビーストオブクローブレイク！」

しかし、ナツクルコングには通用しない。

「甘いな！そんなんじや、このナツクルコングには通用しない！」

ナツクルコングに吹っ飛ばされるシーザー、絶対絶命のそのとき、整備を終えたクルーガーのゴールドが現れる。それを見たアツカーマン中将は、

「何!?もう、グラキオサウルス ボルカノの整備を終えたのか！」

「蹴散らせ、ゴールド！私の魂と共に、本「蹴散らせ、ゴールド！私の魂と共に、本能解放！ワイルドブラストー!!」グランドハンマー！」

ゴールドのグランドハンマーで次々と帝国軍のゾイドが一蹴され、ナツクルコング Mk-II もその攻撃を受ける。ナツクルコンは胸熱拳と装備しているガトリングとミサイ

ルで攻撃するが、ゴルドには全く通用しない。それを見たアツカーマン中将は、  
「流石にグラキオサウルス ボルカノを相手にするのはきついかな！」 通信を開き、

「殿下、グラキオサウルス ボルカノで我が軍は劣勢です！一旦、撤退を！」

通信を聞いたアーネストは、

「ち、せっかくももう少しだったのに！」

デスブラストを解除し、ギルラプターは後退していき、ナツクルコング Mk-II を始め、他の帝国軍部隊も撤退していく。ゴルドから降りるクルーガー、そこへウイルやグラッドたちが駆け寄り、

「助かったよ！クルーガー、」

「何とか間に合ったようだ！君たちもよく頑張ってくれた。もちろん、ウイル、君も！」

「俺は当然のことをしたまでです！」

それに対し、グラッドは、

「ま、無茶しすぎだな！」

ウイルを見たクルーガーは心の中で、

「ウイリアム・ロバートソン、なるほど、あいつによく似ている。どうやら、将来が楽

しみだ！  
To be continued

## 第7話 「ウイルの試練」

アーネストとアッカーマン中將率いる帝国軍を退けた同盟軍は基地の復旧とゾイドの整備を行っていた。そんな中、ウイルが一人で考え事をしていた。

基地の復旧と整備を手伝っていたエマはウイルが気になって彼の元に行った。

「一体、どうしたの?」

「俺とシーザーが苦戦したあのギルラプターやスナイプテラ相手に互角に戦ったガトリングフォックスの力を見て自分が情けなくなっちゃってしまっただけ。」

「あなたらしくないわね! そんなこと言うなんて。」

「俺が弱いから、シーザーだって強くなれないんだ! 俺が強くならなきゃ! そうだ!」

ウイルは何か決心したかのようにグラッドの元に行く。

「俺に弟子入り?」

「俺はもつと強くなりたいんだ! このままじゃ、シーザーだって強くなれない!」

「おいおい、バカ言うな! 俺たちは戦争をやっているんだ! 生きるか死ぬかの賭けをしてるんだぞ! そんな中でガキのお守りなんかできるか!」

「だから、俺はあんたに弟子入りしたいんだ！まだ他にも強い奴が現れるかもしれない。もっと強くなってみんなを守りたいんだ！」

「何度言っても駄目だ！」

そこにクルーガーが現れ、

「グラッド、彼の言う通りにしたらどうだ？」

「クルーガー？おいおい、あいつはまだガキだぜ！まさか戦争に連れていけと？」

「彼は本気だ！もちろん、戦争は甘くないことは承知だ！」

「しかし！」

「なら、こうしよう。ウィルがライガーに乗ってグラッドがレックスに乗って戦い、ウィルがグラッドに勝ったら、弟子入りを認めるってのはどうだ！」

それを聞いて驚くウィルとグラッド。

「ウィルとシーザーがああグラッドと！」

同時にそれを聞いたエマも驚いた。しかし、同時にそれを聞いたエマも驚いた。しかし、グラッドは承知したかのように、

「ふ、そいつは面白い！訓練にちようどいい！いいぜ、俺とレックスに勝ったら弟子入りを認めよう！ただし、負けたらさっさと退くんだな！」

「わかった！」



「ようし、決まりだな！といっても基地はさっきの戦場でボロボロだし、人のいない広い草原に場所を変えよう！」

ウィルはシーザーに、グラッドはレックスに乗って基地から遠く離れた山のところに移動する。対峙するシーザーとレックス、それをエマとクルーガーたちが見守っている。

「ウィル、シーザー……。」

エマは心配そうに両手を合わせてウィルとシーザーを見つめていた。グラッドはウィルに、

「いいか、さっきも言ったが、俺たちは戦争をやっているんだ！中途半端な戦いはしない！確実に俺たちを殺すつもりで来い！」

それを聞いたウィルとエマは驚愕した。

「殺すなんてそんな……！」

「ちよつと待てよ！これは弟子入りを認めてもらうための決闘なんだぜ！殺すなんてそんなこと出来ないよ！」

それを聞いたグラッドはため息をつき、

「甘い奴だ！だからお前はガキなんだ！そんなんじや、俺の弟子入りなんて到底無理だ！」

そう言い、レックスは光学迷彩で姿を隠す。それを見たアレックスとアツシユは、

「いきなり、光学迷彩を使った！」

「まずは小手調べってところかな！」

姿が見えず、戸惑うウィル、そのとき、姿を隠したレックスがシーザーに突進する。

「うわああ！……、そうだ！あのとときと同じだ！ガブリゲーターと戦ったときと！」

ブリュールゲル大尉の操るガブリゲーターとの戦いを思い出したウィルはシーザーに語りかける。

「シーザー、お前ならわかるよな？」

ウィルの言葉にシーザーはうなづき、シーザ ウィルの言葉にシーザーはうなづき、シーザーは地面の匂いを嗅ぐ。シーザーは匂いを嗅いだシーザーは動き、

「そこだ！」

シーザーはレックスに攻撃するが、レックスはさつと避け、シーザーに突進する。ぶつ飛ばされるシーザー、そのとき、レックスが姿を現し、

「ライガーの特性を理解しているのはいい！だが、俺に言わせれば、ただ、ライガーの

力に頼っているだけだ！」

それを聞いてハツとするウイル、

「いいか、よく聞け、ゾイドは乗り物でも、道具でも、ましてや機械でもねえ！俺たちと同じ命を持った生き物だ！　それがどういふことかわかるか？」

ゾイドも心を持つていふことだ！ゾイドの力に頼るな！ゾイドと心を通わせ、心と心をつにし、ゾイドと一体化しろ！それが出来なきや、到底帝国と戦うことなんて出来ないぜ！」

それを聞いたウイルは、

「心と心をつに！そうか、今までの俺はシーザーに頼つていた！だから、あのととき、ギルラプターやスナイプテラに敵わなかつたんだ！」

それを聞いたシーザーはウイルに語りかける　それを聞いたシーザーはウイルに語りかけるかのようにうなづく。

「そうだな、シーザー！俺はそれで自分を見失つていた！」

そう言い、ウイルは目を瞑り、シーザーも動きを止めた。それを見たアレックスとは、

「おいおい、止まったぞ！あれじゃ、グラッドとレックスの位置がわからないぞ！」

横に来たクルーガーは、

「ようやく気づいて来たようだな！ さあ、どう出る？」 姿を隠したレックスはシーザーの背後から攻撃しようとする。そのとき、ウィルは何か気付き、

「今だ！」

ウィルの掛け声と共にシーザーは避け、レックスに突進する。ぶつ飛ばされるレックス、驚いたグラッドは、

「よくわかったな！ まさか、勘じゃねえだろうな？」

「違うね！ シーザーの直感と俺の直感でわかったのさ！」

「ようやく、ましになったようだな！ なら、光学迷彩は止めて真つ向で勝負するぜ！」

そう言い、レックスはシーザーに真つ直ぐ突進する。シーザーはそれを避け、尻尾で攻撃する。直撃するも怯まず、レックスも尻尾で攻撃する。二体はそれぞれ向かい合いい、前足でやり合う。両者はほぼ互角の状態だった。

「やっと面白くなってきたじゃねえか！ では、そろそろ本気を出すか！」

グラッドはゾイドキーを取り出す。それを見たアレックスは、

「まさか、グラッドはもう本気を出すのか？」

それを見たクルーガーは、

「ここで、ワイルドブラストを発動か！ さあ、ウィル、どうする？」

「狙い撃て、レックス！ 俺の魂と共に、進化 解放！ エヴォブラスト！！ 俺とレックスの最大の攻撃を受けてみる！ ファントムガトリングガン！」

「シーザー！」

ウィルの掛け声と共にシーザーはスピードを上げ、レックスのファントムガトリングガンを避ける。

「よく避けたな！ だが、次は逃がさないぞ！」

そう言い、スピードを上げ、真つ直ぐシーザーに向かうレックス、

「いくぞ、シーザー！ 俺たちの力を見せるぞ！ 切り拓け、シーザー！ 俺の魂と共に、進化 解放！ エヴォブラスト！！」

「ファントムガトリングガン！」

真つ直ぐ猛スピードでファントムガトリングガンを撃ち込むレックス、シーザーに猛スピードでレックスに向かい、

「ビーストオブクロブレイク！」

互いにつつかり合うシーザーとレックス、ぶつかり合いの末、互いの装甲に傷が付き、両者共態勢を崩す。それを見たクルーガーは拍手をし、

「そこまで！ 素晴らしい戦いだっただよ！」

それを聞いたグラッドは、

「待てよ、まだ勝負は！」

「それ以上、戦ったら、ライガーとレックスも可愛そうだろ？それに今の激突で、ライガーとレックスも認めあつたそうだ！」

クルーガーの言葉通りに互いを見つめるシーザーとレックス、それを見たグラッドは、

「あなたには負けたよ！いいぜ、弟子入りを認めてやる！」

それを聞いて喜ぶウィル、

「ただし、さつきも言ったが、俺たちは戦争をやっているんだ！俺の言うことには黙って従えよ！」

少し不満そうな表情をするウィル、しかし、何か吹っ切れたように、

「わかった！」

「威勢はいいが、遊びでついてくるんじゃないぞ！」

「元より、覚悟は出来ている！俺はシーザーのように帝国に苦しめられているゾイドと人々を救うために旅してんだ！」

そこにエマがウィルの元に走り、ウィルに抱きつく。

「ちよつと、何するんだよ！エマ！」

「良かった！心配してたのよ！」

それを見てニヤニヤするグラッド、

「へえ、ピーストライガーもだが、お前には勿体ない嬢ちゃんだな！」

そこへ静観していたクルーガーたちも立ち寄り、クルーガーがウイルの元に行く。

「見事な戦いだったよ！ウイル、これからもよろしく！」

そこへアレックスがウイルの肩に手を置き、

「お前、スゲエ奴だぜ！オマケにこんなカワイコちゃんまでいるとは！」

「俺はアツシユ、よろしく！」

「俺はジョン、何かあったら俺がついて行ってやるぜ！」

「あたしはジェニファー、よろしくね！」

「俺はクリス、空の戦闘の専門だ！」

「私はケン、お前の戦い、見せてもらったぞ！」

同盟軍の精鋭たちから歓迎を受けるウイル、同盟軍の精鋭たちから歓迎を受けるウイル、基地の修理が終わった後、ウイルとグラッドは、少し離れたところに立ち、

「さっきの戦いを見ると昔の俺を思い出さず！レックスと会う前の俺もお前と一緒にだったからな！」

「俺と一緒？」

「俺はスラム街のところに生まれた。そこは市長や議員が賄賂やら横領やらの腐敗政治ばかりで、治安が最悪で、毎日、強盗やら、殺人が頻繁に起きて、俺が小さいときに両親に棄てられ、生きるために詐欺やら強盗やらやってたぜ！」

しかし、そんなとき、帝国軍が街を占領し、悪徳市長と議員をクーデターで失脚させて代わ悪徳市長と議員をクーデターで失脚させて代わ悪徳市長と議員をクーデターで失脚させて代わり、強盗や殺人も帝国軍によってあつという間に抑えられ、街に平和が訪れた。

俺は自分を変えるために帝国軍に入った！最もゾイドに乗るのは初めてだったため、中々言うことを聞いてくれず、落ちこぼれもいところだった！　しかし、そんな俺に上官からレックススを与えられた。ほとんどのゾイドは俺の言うことを聞いてくれなかったのにレックススだけは俺を認めた！

その後、レックススのおかげで俺は数々の功績を残し、中尉にまで登りつめた！最もそんときの俺もレックススの力に頼っていたがな！俺にとってレックススは相棒であり、家族だった！

だが、どうやら、俺はレックススの性能を試すための実験台として選ばれただけで、後にバイザーとチップを取り付け、四天王に献上するつもりだったらしい！　俺はそんな奴らが許せなくて、レックススのバイザーを外し、帝国から脱出し、それ以来、お尋ね



者となった。

その後は密輸業者として働いたが、クルーガーに会って、勧誘を受けた！　俺は断つたが、レックスは帝国に苦しめられ　俺は断つたが、レックスは帝国に苦しめられているゾイドと人々を助けたいと何度も語りかけるから、クルーガーと戦った。最もクルーガーの相棒のゴルドはグラキオサウルス　ボルカノだったから、ボロ負けしてしまったがな！」

「それで、変わったのか？」

「ああ、変わった！　今の俺は帝国を倒し、人間とゾイドが共存する世界を築くために戦っている！　クルーガーの言った通り、お前は大した奴だ！　これからもよろしくな、ウイル！」

「ああ！　つてそうだ！　シーザーのメンテしなきゃ！」

シーザーのメンテをするために走るウイル、グラッドの元にクルーガーが立ち寄る。

「グラッド、何故、あのときあんなことを言った？」

「さあな、ただ、俺のゾイド乗りとしての血がそう言えと言ったかもしれない！　ところで、あのデイビッドの息子ってのは本当にあのガキなのか？」

「ああ、私の目に狂いはなかった！　本当にあいつにそっくりだ！」

「あいつにデイビッドのことは教えないのか？」

「流石にあいつには刺激が強すぎる！だが、いずれ知ることになる！そして帝国軍と戦うことによる過酷さも！」

クルーガーはウィルの将来を楽しみにしながら

クルーガーはウィルの将来を楽しみにしながら言った。

T o b e c o n t i n u e d

## 第8話 「電撃の参謀」

帝国の北方、そこはかつて、ゾイドクライシスが起きる前の21世紀では大国の領土であり、寒冷地でもある。そこにはネオデスメタル四天王の一人である総督カーチス・グレッゲル准将がかつての21世紀の大国の首都に拠点を置いて支配していた。

グレッゲル准将の部屋に帝都にいるある人物から通信が入る。通信の相手は東方面を支配する総督にして四天王の一人、オハルト・デーニッツ中将だった。

「これはデーニッツ中将、私に何の用ですか？」

「グレッゲル准将、手配中のエマ・コンラッドを捕らえて欲しいのだが！」

「エマ・コンラッドというと、帝国から脱走したあの小娘ですか？」

「そうだ！実は私は皇帝陛下から命ぜられたある計画を遂行していて、その計画のためにはその小娘が必要なのだ！」

グレッゲル准将はその言葉に疑問を感じ、

「あの小娘は帝国の裏切り者、本来極刑にしてもおかしくはない！何故生かす必要が？」

デーニッツ中将は落ち着いたように、

「それは当然なんです、皇帝陛下から命ぜられた計画の遂行には何としてもあの小娘が必要なのです！ 処分はその後でよろしいでしょう！」

「それならば、あなたがディメパルサー Mk-II で出撃すればよいのでは？」

「いえ、私は計画のためにデスレックスを管理しているので、こちらから動くことができないのです！ なんせ、この前、兵士30人がデスレックスに喰われてしまいましたからね！」

「一体、なんです。その計画とは？」

「これは機密事項ですので、今度の帝国の式典で帝都に来た際にお話します！」

「わかりました！ ですが、一つお願いがあります。私のステイレイザーとキャノンブル、バズートル、ガブリゲーター部隊だけでは不安ですので、あなたのディメパルサーとデイロフォス部隊、そして親衛隊からギルラプタージョーカーを提供して頂けますか？」

「もちろん、そのつもりです！」

「それと、ブリュウゲル大尉もこちらによこしてもいいでしょうか？ コルクの一件は隠蔽したとはいえ、あのライガーに負けたのですから、あの男に名誉挽回の機会を与えては？」

「いいですね！では、彼に出撃命令を下します！」

通信を切ったグレッツゲル准将はステイレイザ 通信を切ったグレッツゲル准将はステイレイザの元に行き、出撃の準備をした。

場所は変わり、同盟軍の本拠地、ここではウィルとシーザーがグラッドの元で厳しい修行をしていた。ウィルとシーザーはガノンタスとスコープア、ラプトリア部隊と戦う訓練をしていた。

シーザーはワイルドブラストしたガノンタスの亀光砲を避けながら、進撃するが、横からラプトリア、スコープアが次々と襲いかかり、シーザーの身体に取りつき、シーザーは身動きが取れなくなってしまう。

「そこまで！」

ストップをかけたグラッドは、シーザーのコクピットにいるウィルに言う。

「砲撃の強いガノンタスを狙うのはいいが、それではラプトリアとスコープアが攻撃できる隙を与えてしまう！ガノンタスは砲撃は強いが、足は遅い。つまり、ガノンタスは遠距離射撃が得意なゾイドだ！」

対して、ラプトリアとスコープアは近距離攻撃が得意なゾイド！ガノンタスの亀光砲に注意し、まず、先に先制攻撃が取れるラプトリアとスコープアを狙い、距離を詰めたところでガノンタスを狙うんだ！」

グラッドのアドバイスを聞いたウィルは再び訓練を始め、ガノンタスの亀光砲を避けながら、ラプトルリアとスコープアの部隊を蹴散らし、

「切り拓け、シーザー！俺の魂と共に、進化 解放！エヴォブラストー！！ビーストオブクローブレイク！」

ガノンタス部隊にビーストオブクローブレイクで攻撃する。次々と倒れるガノンタス部隊、

「よし、そこまで！コツは掴んだようだな！だが、実戦の相手はガノンタスじゃなくてバズートルとキャノンブル、ラプトル、デイロフォスだ！バズートルはガノンタスより耐久性が高いから、今の攻撃の二倍は出さないと駄目だ！訓練は終了だ！」

整備士たちは訓練に参加しだ！訓練は終了だ！整備士たちは訓練に参加してくれたガノンタスたちの傷の修復と整備を頼む！」

様子を見ていたクリスにクルーガーが立ち寄る。

「どうだ！彼の成長ぶりは？」

「まずまずつてところかな！だが、何よりあのシーザーっていうビーストライガーが彼をよく信頼している。」

そこに同盟軍の兵士がクルーガーとグラッドの元に行き、

「コマンダー、帝国軍が不穏な動きを始めました！」

それを聞いたグラッドは、

「不穏な動き？すぐに全員、司令部で集めろ！」

グラッドの指示で、同盟軍の全てのメンバーが司令部に集まり、報告した兵士が説明した。

「ここから5 km離れた山岳地帯をカーチス・グレッゲル准将率いる帝国軍が占領して基地を建設しているとの情報が入りました！」

「四天王のグレッゲル准将が出撃してるとなると、これはほつとけないな！」

四天王の名を聞いたウイルは疑問を感じ、

「四天王って？」

ウイルの質問にグラッドは、

「帝国の各領域を支配する総督の中で最も最上位の地位に付いていて、帝国の中でも強力とされている奴らだ！前に戦ったナツクルコング Mk-II のアッカーマン中將もその1人だ！」

「四天王……。」

その言葉を聞いたウイルは少し恐れた。

「グレッゲルが何を企んでいるかはわからないが、放って置くわけにはいかない！よし、全軍出撃する！」

グラッドの出撃命令と共に同盟軍はグレッツゲル准将率いる帝国軍のいる山岳地帯に向かう。グラッドのレックスを先頭に歩く同盟軍、そのとき、目の前に一体の変わつた色をし、バイザーを付けているギルラプターがいた。そのギルラプターを見たウイラは、

「なんだ？あの変な色のギルラプターは？」

「あのギルラプターは……！」

シーザーのkokopittの中でウイルの後ろにしがみついているエマはそのギルラプターを見て怯えていた。それと同様にウルフに乗るリセルヴァ・ディアスは、怯えながらも憎悪を向けるような目をしていた。目の前のギルラプターを見たグラッドは、

「あれはギルラプター・ジョーカー！」

初めて聞くギルラプターの名にウイラは、

「ギルラプター・ジョーカー？」

「ああ、皇帝直属のギャラガー親衛隊のギルラプターにして、ゾイドの中でも高度な知性を持つゾイドだ！何故、あのギルラプターがここに？」

同盟軍をじつと見たギルラプター・ジョーカーはその場を去った。それを見たウイラは、

「あ、あいつ逃げていくぞ！」



ウイルの言葉にグラッドは落ち着いて、

「待て、下手に追っていたら、奴らの思うつぼだ！それに俺たちはあのギルラプターにかなり手こずらされているからな！といつても、黙っているわけにもいかない！」

よし、俺はあのギルラプターを追う！ウイルとリセルは俺についてこい！クルーガー將軍たちはここで待機してくれ！それとクリスとジェニファーはジャックとクーデリアで空から偵察してくれ！後、ウイル、戦闘中には、レディを連れていけないことだ！」

それを聞いたウイルは少し恥ずかしそうに、

「わ、わかったよ……！エマ、お前はここで待っていてくれ！」

「わかったわ！ウイル、気を付けてね！」

エマをシーザーのкокピットから降ろしたウイルはそのままグラッドのレックスとリセルのウルフについていった。

「いいか、陽動の可能性が高い！あのギルラプターと距離を明けて追う。俺から離れるな！」

グラッドの指示を聞いたウイルのシーザーとグラッドの指示を聞いたウイルのシーザーとリセルのウルフはグラッドのレックスの後ろについていき、グラッドはギルラプターと距離を明けながら、追いかけていった。

ギルラプターは険しい道を通りながら、走っていく。それを見たグラッドは、「一体、どこまでいくつもりだ？こんなところじゃ、基地建设など無理だ！」

そのとき、目の前に霧が現れ、ギルラプターは霧の中に入っていた。それを見たグラッドは、

「止まれ！」

グラッドの指示を聞いて止まるシーザーとウルフ、霧を見たグラッドは、

「どうやら、この先に奴らがいるらしいな！とにかく、このことをクルーガーたちに伝えよう！ウイルとリセルは俺から離れ……」

グラッドが後ろを向いた先には煙が現れ、既にシーザーとウルフの姿が見えなくなっていた。そして、前を見たら、既に霧が煙に変わっていた。

「どういうことだ？さっき霧だったのが、煙に変わっている！しかもこんなに早く広がるなんて！それにこの煙、自然のじゃない！これはガブリゲーターのデスマークだ！そうか、敵の狙いは俺たちを孤立させさせるためだったのか！」

グラッドはコクピットの通信を開き、

「クリス、そつちの状況は？」

通信のクリスは、

「森全体が煙で覆われている！しかもその後方にはデイメパルサーとデイロフオスの

部隊がいる！」

「ディメパルサーとデイロフオスの部隊までいるのか！これは少々厄介だな！とにかく、ウィルたちを見つけないと、それにこのままでは敵に見つかりやすい！光学迷彩を使うぞ、レックス！」

そう言つて、光学迷彩で姿を隠すレックス、ウィルとリセルはレックスを見失つて戸惑つていた。

「レックスの姿が見えない！ようし、シーザーの鼻で捜すか！」

シーザーに指示を出そうとするウィルにリセルは、

「待て、ウィル、下手に動いたら、奴らの思うつぼだ！ここは総司令が来るまで待つんだ！」

そのとき、突然、地面が爆発し、シーザーとウルフはその爆発に巻き込まれてしまった。爆発の音を聞いたグラッドは、

「今のは？まさか！」

急いで、爆発のあつたところに向かうレックス、しかし、そこにはシーザーとウルフの姿はなかった。「なんてこつた！ウィルとリセルを俺から外すことが目的だったのか！」

そのとき、他のゾイドの足音がし、グラッドはコクピットのセンサーを作動する。セ

ンサーには複数のガブリゲーターとキャノンブル、そして、バズートルがいた。センサーを見たグラッドは、

「今は光学迷彩で姿を隠しているが、あまり、目立つような動きをしたら、こちらの位置を知られてしまう！ここは慎重に捜すしかないようだな！」

そう言い、ゆつくり歩くレックス、一方、爆発に巻き込まれたシーザーとウルフは広い場所にいた。

「イテテ！」

起き上がるシーザーとウルフ、しかし、なんと目の前にはステイレイザーとガブリゲーターMk-IIが立っていた。それを見たウイルとリセルは驚愕した。ステイレイザーのкокピットには四天王のグレッツゲル准将が乗っていた。

「フフフ、念のため、ギルラプタージョーカーもよこして正解だったようだ！これである厄介なガトリングフォックスとグラキオサウルス、ボルカノはいない！」

ステイレイザーを見たウイルは、

「あれがステイレイザー！なんてデカイゾイドなんだ！」

「ハッハッハ、小僧！また会ったな！」

ウイルに話しかけたのはかつてコルクで敗れ、ウイルに話しかけたのはかつてコルクで敗れたブリューゲル大尉だった。

「あのときの借りを返してもらおうぜ！後、あのとき邪魔をしてくれた小娘も渡しな！」

それを聞いたウイルは、

「小娘？エマのことか！お前ら、エマに何の用だ？」

それを聞いたグレッゲル准将は、

「お前ごときの小僧にそれを知る必要はない！さつさと渡してもらおうか！」

「お前らが何を企んでいるかは知らないが、エマとシーザーは渡さないぜ！それにエマはここにはいない！」

「なに！デーニッツ中将の報告ではあの小僧 「なに！デーニッツ中将の報告ではあの小僧と一緒にだと聞いていたから、あのライガーをこちらに引き込んだのに！まあいい、キサマを捕らえてあの小娘を引きずり出す！」

シーザーに突進するステイレイザー、シーザーはそれを避けるが、横からガブリゲーターが遅いかかって、ぶつ飛ばされるシーザー、ガブリゲーターを見たグレッゲル准将は、

「ブリュール大尉、ライガーは私が相手する。お前はウルフの相手をして！」

「しかし！准将、あのライガーには借りが！」

「なあに、止めはお前にやるよ！それにあのウルフも潰しがいるだろ？」

ウルフを見たブリュウゲル大尉は、

「そうだな！相手にとって不足はない！」

そう言つて、ウルフに襲いかかるガブリゲーター、ウルフはさつと避ける。

「小僧、そのライガーとあの小娘を渡せば、罪を許してやるぞー！」

「お断りだ！そんなこと、エマとシーザーは望まない！」

「そうかい、なら、仕方ないな！制御トリガー解除、ステイレイザー、兵器 解放！マシンプラストー！！プラズマウォール！！」

マシンプラストとしてシーザーに突つ込むステイレイザー、シーザーはさつと避けるが、横からギルラプタージョーカーが突進する。

「相手が我々だけと思わないことだな！」

そう言い、避けたシーザーにプラズマウォールを当てる。

「ウワアアー！」

苦しむウイルとシーザー、そのとき、クルーガーたち同盟軍が待機している中で、エマは何 か感じとつたかのように、

「行かなきゃ、ウイルとシーザーのところ！」

それを見たアレックスは、

「おいおい、待てよ！周りは敵だらけなんだぜ！」

「でも行かなきゃ、ウィルとシーザーが！」

「待て、下手に動いたらお前の身が危ない！ここは待つのだ！彼にはグラッドがいる。」

落ち着いたように言うクルーガーに対して心配そうに森を見るエマ。一方、ウルフはガブリゲーターの攻撃を避けながら、そのスピードに翻弄されていた。避けるウルフを見たブリューゲル大尉は、

「おいおい、ウィルドブラストしないのか！ハウリングシャウトを使えば少しは楽しめるのに！」

「く、！」

ガブリゲーターの攻撃を避け続けるウルフ、それを見たブリューゲル大尉は、

「ああ？もしかして、ウィルドブラスト出来ないのか？だとしたら、とんだ期待外れだな！ガブリゲーター、強制 解放！デスブラストー!!」

デスブラストし、ウルフに噛みつくガブリゲーター、

「ハハハ、そのまま碎けてしまいな！」

「くそ、こいつ離せ！」

ステイレイザーのプラズマウォールを喰らったシーザーを見たグレッゲル准将は、

「そろそろ、あの小娘とライガーを渡したらどうなんだ？ そうすれば、ライガーも苦しむことはないぞ！」

「ふざけんな！ お前らはエマとシーザーを道具のように扱うつもりなんだろ！ そんな奴らに渡してたまるかー!! いくぞ、シーザー、切り拓け、シーザー！ 俺の魂と共に、進化 解放！ エヴォブラストー!! ビーストオブクロブレイク！」

しかし、ステイレイザーはビクともしない。

「そんな！」

「フ、いくら伝説のビーストライガーでも私のステイレイザーには敵わないようだな！ プラズマウォール！」

プラズマウォールを喰らい倒れるシーザー、そしてシーザーに踏みつけるステイレイザー、ステイレイザーはそのまま体重をかけ、シーザーを踏み潰そうとする。

「グオ〜！」

苦しむシーザー、

「シーザー！」

「ハハハ、早く小娘を呼ばないとライガーがペチャンコになってしまうぞ！」

そのとき、グソックらしき黒い影が現れ、ステイレイザーの足に直撃する。態勢を崩し、倒れるステイレイザー、



「なんだ？今の？」

更に黒い影はガブリゲーターにも攻撃し、ガ 更に黒い影はガブリゲーターにも攻撃し、ガブリゲーターはその攻撃で、ウルフを離す。黒い影はそのまま姿を消す。そのとき、草むらからガトリングが撃つて来てステイレイザーとガブリゲーターに直撃する。レックスだった。

「グラッド！」

「少し時間が掛かったが、間に合ったようだな！」

そこにジェニファアのクーデリアとクリスのジャックも駆けつけ、煙幕をかける。

「ウイル、総司令、今の内よ！」

「ここは撤退だ！」

煙幕でシーザーたちの姿を見失ったグレッゲル准将は、

「くそ、逃がすか！デイメパルサー部隊、デスブラストを！」

しかし、デイメパルサーのデスブラストが発動しない。 「どうした！」

通信の兵士は、

「准将、どういう訳か、デスブラストが発動しません！」

「なに、どういうことだ？」

「どうやら、電磁妨害を受けているようです！」

「デスブラストとマシンプラストの発動を妨害するなど、反乱軍には出来ないはず！帝国の者しか出来ないはずだ！まさか、さっきのグソックか！」

そのとき、煙が晴れるが、既にシーザーたちの姿はなかった。

「ち、逃がしたか！」

ブリューゲル大尉は悔しそうに

「くそ、後一步だったのに！」

「まあ、いい！とにかく我々はここに基地を建設し、奴らを迎え撃つ準備をする！」

クルーガーたちが待機している場所にレックスとシーザー、ウルフたちが戻ってきた。エマは嬉しそうに、

「ウィル、シーザー、良かった！」

「ここは危険だ！我々はここから撤退する！」

グラッドの指示で撤退する同盟軍、

「さっきのあのゾイドは一体なんだったんだろう？」 ウィルはさっき助けたゾイ

ドが気になっていた。そして、山岳のてっぺんにさっきウィルを助けたグソックが

立ち、その横にそのライダーがいた。

「あれが伝説のビーストライガーか！どうやら、今後が楽しみだ！」

T o b e c o n t i n u e d

## 第9話 「ラブトールの少女」

帝都にいるデーニッツ中将はグレッツェル准将と通信を開いていた。

「失敗しただと！」

「申し訳ありません！ 思わぬ邪魔が入りました！ ですが、反乱軍と行動を共にしていることは確かです！ 引き続き、小娘の奪還に勤めます！」

「わかった！」

通信を切ったデーニッツ中将は兵士に、

「あの小娘の手配書のレベルを上げ、賞金首にかけろ！ それと我が帝国の賞金稼ぎにも伝えろ！」

「了解しました！ しかし、中将、何故あの小娘が必要なのですか？」

「あれを完成させるための装置の作動にはあの小娘が必要なのだ！ 皇帝陛下はあれの完成を1日も早く待っておられるのだ！ 陛下にはあのジェノスピノがいるが、あれが完成すれば、我が帝国は何者にも勝る究極の力を手に入れ、我が帝国による新たな世界の創造と秩序が生まれるのだ！」

「わかりました！ そのようにします！」

「そういえば、カーター大佐は？」

「現在、ルメイ大将の部隊が駐留する駐屯地にいます！」

「よし、ルメイ大将と通信を開き、カーター大佐にも搜索を命じろ！あの男はあの小娘と顔見知りだからな！」

「了解しました！」

「フ、私も完成が待ち遠しいぞ！」

デーニツツ中将がガラス越しに見た先には、Z—Oバイザーと拘束部を取り付けられたデスレックスがいた。

場所は変わり、西方面総督にしてネオデスメタル四天王の一人、ダグラス・ルメイ大将の部隊が駐留する駐屯地では、演習が行われていた。

演習はバイザーが付けられていない緑のラプツールがそれぞれ数十体いるラプツールとデイロフオスと交戦していた。

緑のラプツールはアーネストのギルラプターエンペラーのような俊敏な動きで大量のラプツールとデイロフオスの砲撃と噛みつき攻撃を避け、次々と一体一体確実に倒していく。ラプツールとデイロフオスはデスブラストを発動し、緑のラプツールに向けて一斉射撃をする。

しかし、緑のラプツールは驚くべき跳躍力でジャンプし、全てのラプツールとデイロ

フオスを蹴散らす。煙が晴れたとき、目の前にカーター大佐の乗るキャノンブルが現れた。

「今度は私が相手だ！ギレル少尉！」

緑のラブトールに向けて突進するカーター大佐のキャノンブル、緑のラブトールはさつと避けるが、カーター大佐はすかさず、

「制御トリガー解除！キャノンブル、兵器 解放！マシンブラストー！！ナインバーストキャノン！！」

キャノンブルのナインバーストキャノンを避ける緑のラブトール、不利と見たラブトールのライダーは、

「ラブトール、強制 解放！デスブラストー！！」

すかさず、デスブラストしたラブトールはキャノンブルの足に一撃を喰らわす。一時は怯むも態勢を建て直すキャノンブル、

「演習終了！演習終了！」

演習終了の命令が出て、カーター大佐はキャノンブルのkokopittoから降りる。緑のラブトールのライダーもkokopittoから降りる。

緑のラブトールに乗っていたのは少女だった。赤毛で髪はショートで、キリツとしていて、その容姿はエマと少し似ていた。カーター大佐はラブトールに乗っていた少女の

元に立ち寄り、

「腕を上げたな！カティア・ギレル少尉！」

それに対し、少女はカーター大佐に頭を下げ、

「ありがとうございます！お父様、いえ、ジエームズ・カーター大佐！」

様子を見ていた兵士は、

「え、お父様？」

もう一人の兵士は、

「ああ、ギレル少尉はカーター大佐の一人娘だ！」

「しかし、少尉の姓はギレルでは？」

「ギレルは母方の姓で、少尉は大佐に近づこうと努力していて、今の自分は大佐ほどの人間じゃないから、大佐の姓を名乗るのは恐れ多いので、敢えて大佐の姓を名乗ってないのだ！」

因みに少尉の母方の先祖は1200年以上前、大佐と同じスナイプテラに乗った優秀な帝国のゾイド乗りだったそうだ！」

「それにしてもいくら大佐の娘とはいえ、16歳で少尉とは！」

「少尉は自身の身体にゾイド因子とゾイド細胞を移植した強化人間でもある。我が帝国ではほとんどの人間は身体強化のために、身体の機械化を勧め、機械兵になるものが

多いが、少尉だけは機械化を望まず、身体を人間そのままにして、強化しているのだ！  
最もその状態でも機械兵と互角に闘えるがな！」

カーター大佐はカティアに

「デスブラストを直ぐに発動せず、必要なときに発動するのはいい選択だ！」

それに対し、カティアは、

「それもありませんが、あまり、デスブラストを使ってしまったら、私のラブトールにかなりの負担と苦しみがかかってしまうので、出来るだけ使わないようにしています！バ  
イザーを付けていけないのもそのためです！」

「その通りだ！ゾイドを大切に思う気持ち、素晴らしいよ！」

「ところで、大佐！殿下は今、どうしてるのですか？」

「ああ、皇帝陛下から今度、帝都で行われる式典が始まるまで帝都に戻るな、という命  
令を受け、現在、この基地で休息しているが、ここに来てからずっと部屋に閉じ籠りな  
のだ！」

恐らく、以前、アッカーマン中將の参謀として戦ったあの戦闘で作戦が失敗してライ  
ガーとフォックスを仕留め損ねたことの苛立ちだろう！」

「私が殿下を諫めます！」

「しかし、少尉！」



「殿下を諫めるのも、お守りするのも私の任務ですから！」

そう言つて、アーネストがいる部屋に向かうカティア、一方、部屋にいるアーネストは首に付けているペンダントを見ていた。ペンダントにはアーネストとエマが仲良く写つていた写真が入つていた。

「エマ……。」

ペンダントの写真を見ているアーネストは悲しい目をしていた。そのとき、ドアをノックする音がした。カティアだった。

「失礼します！殿下！」

カティアが部屋に入るとき、アーネストはさつとペンダントを隠した。カティアを見たアーネストは、

「僕に何の用だ？」

「殿下！やはり、エマのことを……！」

「あいつのことは言うな！あいつは帝国とこの僕を裏切つた奴だ！」

「いいえ、エマは帝国と殿下を裏切るような人じゃない！きつと訳があるのよ！」

アーネストは怒り狂つたように、

「黙れ！父上が言つたんだ！あいつは俺を騙してたんだけだつて！」

カティアは落ち着いたように、

「それは誤解よ！エマは本当に優しい人なの！」

「それ以上言うな！もし、あいつに会ったら、俺の手で殺してやる！」

「殿下……！」

過激になるアーネストにカティアは戸惑っていた。そのとき、ドアをノックする音がし、ある男が部屋に入った。男は四天王の一人、ダグラス・ルメイ大將だった。

「口を慎め、ギレル少尉！殿下は今、ご機嫌斜めなのだ！それと帝都からカーター大佐と共にエマ・コンラッドを搜索し、見つけ次第、捕らえて帝都に連れ戻せとの命令が出た！直ぐに出撃しろ！」

「はー！」

再び、アーネストを見るカティア、アーネストのその表情は怒りの感情を現しているものの、その表情はどこか悲しそうだった。ルメイ大將の命令を受けたカティアは緑のラブトールのコクピットに乗り、同時にカーター大佐も専用のキャノンブルに乗り、自身の部隊と共に出撃する。

場所は変わり、同盟軍の本拠地、グラッドはりセルからグレッツゲル准將のことを聞いていた。

「本当なんだな！奴がエマを渡せと言っていたのは！」

「はい、本当です！」

「それにしても、ライガーよりもあの嬢ちゃんを最優先に奪うということは、それほど重要な鍵を持っているということなのか？あの嬢ちゃんは！とにかく、奴らの狙いは不明だが、彼女を帝国に渡すわけにはいかない！」

司令部に全員集めたグラッドは、

「これより、帝国軍を牽制するために我々も各地にそれぞれ基地を置き、帝国を迎え撃つ準備をする！出撃の準備だ！」

グラッドの出撃命令を受け、準備する同盟軍の兵士たち、そんな中、ウイルがエマのいる部屋に入り、

「エマ、俺は今から帝国軍を迎え撃つ準備をする！お前は帝国軍に狙われているから、ここで待つてくれ！」

「でも、ウイル！」

「大丈夫だよ！俺にはシーザーがいる！それに、何があっても俺が守るから！」

そう言い、部屋を出るウイル、エマはアーネストと同じ写真の入ったペンダントを見た。

「レイル……。出来れば、こんな形であなたと戦いたくない！」

ペンダントを見たエマは泣きそうな顔をしていた。ウィルはシーザーに乗り、グラッドのレックスについていった。グラッドはウィルを見て、

「いいか、ウィル！いつ、どこで帝国軍が襲いかかって来るかわからない！決して油断はするな！」

「わかった！」

そう言い、グラッドのレックスについていくウィルのシーザー、狭い崖の道をゆつくり歩くなか、突然、シーザーの足元が爆発した。崖の下の川に落ちるウィルとシーザー、

「ウィル！」

グラッドが助けに入ろうとしたそのとき、また爆発が起きた。グラッドはすぐさま双眼鏡で下を見たとき、帝国軍のバズートル部隊がいた。マシンプラストした状態で、次々とグラッドたち同盟軍に向けて砲撃するバズートル。

「くそ、まさか、既に帝国軍が来ていたとは！俺が奴らを引き付けていく！他の部隊はバズートルの砲撃に気を付けながら、進撃しろ！」

「了解しました！」

グラッドのレックスは光学迷彩で姿を隠し、崖を降りてバズートル部隊に向かっていった。

「いくぞ、レックス！狙い撃て、レックス！俺の魂と共に、進化 解放！エヴォブラス

トー!!フアントムガトリングガン!

次々とバズートルにフアントムガトリングガンを撃ち、態勢を崩すバズートル、そのとき、カーター大佐のキャノンブルが襲いかかる。それを避けるレックス、

「やはり、君か!あの少年がいなのは残念だが、あのときの借りを返してもらおうよ!」

「今度はスナイプテラじゃないのか?」

「スナイプテラは現在、整備中でね!今度はキャノンブルでいかせてもらうよ!制御トリガー解除!キャノンブル、兵器 解放!マシンプラストー!!ナインバーストキャノン!」

キャノンブルのナインバーストキャノンを避けるレックス、そのとき、後ろからバズートルがレックスに向けて砲撃する。レックスはそれも避けるが、すかさず突進したキャノンブルに吹っ飛ばされてしまう。

「いくら、君でも一人で行くのは判断ミスだったようだな!」

「へ、こんなもの、屁でもねえ!」

場所は変わり、ウィルは川のほとりで倒れて気絶していた。ウィルの近くにはシーザーの姿はなかった。そこに搜索していたカティアのラプツールが来た。ウィルを見

たカティアは、

「人が！助けないと！ラブツール！」

カティアの指示でラブツールはウィルをくわえ、そのまま洞窟の方に向かった。ラブツールから降りたカティアはウィルの様子を見た。

「息はしている！」

そのとき、ウィルが起き、

「シーザー！シーザーはどこだ？」

慌てるウィルにカティアは、

「落ち着いて。しばらく安静にしなきゃ！」

「君、誰？」

「私はカティア！川のほとりで倒れていたあなたを助けたの！」

「そうなのか！ありがとう！でもシーザーを捜さなきゃ！」

「シーザーって？」

「俺の相棒の名前だよ！」

「へえ！あなた、ゾイドが好きなのね！」

「もちろんだよ！ところで、このラブツール、君の相棒なのか？」

「そうよ！」

「このラブツールに名前はないのか？」

「ええ！そもそも私のところではラブツールに名前はつけられないの！」

「勿体ないなあ！せっかくの相棒なのに！じゃあ、俺が代わりにつけてあげるよ！何がいいかな？そうだ！ベティって名はどうか？君に合うかなと思つて！」

「いい名ね！」

それを聞いて喜ぶラブツール、喜んだラブツールを見て笑うウイルとカティア、そのとき、ウイルを捜していたシーザーが洞窟の前に来て吠えた。

「あの声はシーザーだ！」

洞窟を出るウイルとカティア、シーザーを見たカティアは、

「あれがシーザー！あのゾイド、大佐の基地から脱走したつていうビーストライガー！もしかして、あなたがエマを拉致した誘拐犯!?」

それを聞いたウイルは驚いて、

「え、どういうこと？」

カティアは拳銃を取り出し、ウイルに向ける。ウイルは慌てて、

「ちよつと、カティア！何するんだよ！」

それに対し、カティアは、

「それはこつちの台詞よ！さあ、エマを返しなさい！」

「ど、どういふことだよ！」

それを見たシーザーはカティアにウイルを守るためにカティアに襲いかかる。カティアはさつと人間とは思えないほどの跳躍力で避け、そのままラプトールのコクピットに乗る。

「ラプトール、あの子を捕らえるのよ！」

カティアの指示で、ウイルに襲いかかるラプトール、シーザーはすぐさま、ラプトールを吹っ飛ばし、ウイルもシーザーに乗る。

「一体、何のマネだ？俺はエマを誘拐なんかしてねえ！」

「とぼけても無駄よ！」

そのままもうスピードでシーザーに襲いかかるラプトール、

「シーザー！」

シーザーはその攻撃を避ける。

「カティア、お前、一体何者だ？」

「私は帝国軍カティア・ギレル少尉！ビーストライガーを脱走させ、エマを誘拐したあなたからエマを連れ戻すために来たの！」

それを聞いて驚くウイル、

「帝国軍だつて！」



ジャンプして前足で引つ掻けようとするラプツール、なんとかそれを避けるシーザー、

「こうなったら、仕方ない！いくぞ、シーザー！切り拓け、シーザー！俺の魂と共に、進化 解放！エヴオブラストー!!ピーストオブクローブレイク！」

しかし、ラプツールはシーザーの攻撃を避け、シーザーに突進する。ラプツールに吹っ飛ばされるシーザー、

「なんて強さだ！」

「さあ、大人しくエマを返しなさい！」

「駄目だ！帝国軍だとわかった以上、渡すわけにはいかない！」

「ならば、腕付くでいくしかないわね！」

俊敏な動きで攻撃するラプツール、シーザーはラプツールの動きについていけず、戸惑う。

「なんて速さだ！ギャラガーのギルラプターに次ぐ速さだ！」

すかさず、攻撃するラプツール、

「シーザー！そこだ！」

シーザーはギリギリ交わし、

「ピーストオブクローブレイク！」

シーザーのビーストオブクロウブレイクがラプトルに直撃する。しかし、ラプトルはすかさず、態勢を建て直し、

「こうなったら！ラプトル、強制 解放！デスブラストー!!」

デスブラストし、シーザーに攻撃するラプトル、ラプトルの攻撃で足を崩すシーザー、

「シーザー!」

「これで終わりよ!」

しかし、そのとき、カティアは突然、頭痛に襲われた。

「あ、頭が痛い!」

「ハ!」

そのとき、部屋にいたエマは何か感じとった。

コクピットの中で苦しむカティア、と同時にラプトルも苦しみ、倒れてしまう。それを見たウイルは、

「一体、どうしたんだ?」

そのとき、レックスが駆けつけ、

「ウイル、速く逃げるぞ!」

「でも、カティアが!」

「ぐずぐずしていると、帝国軍が来るぞ！」

ウィルは、仕方なくそのままグラッドのレックスについていった。そのとき、レックスを追ってカーター大佐のキャノンブルと帝国軍部隊がカティアの元に到着した。倒れたラプトルを見て、すぐさまキャノンブルから降りたカーター大佐はラプトルのコクピットからカティアを運ぶ。

「すぐに医療班を！」

兵士に指示するカーター大佐、

「やはり、強化人間のカティアに長時間の戦闘は無理だったか！」

そのまま、兵士に運ばれるカティア、部屋にいたエマはペンダントを握り、何かを託すように言った。

「カティア、レイルを守って！」

To be continued

## 第10話 「最凶ゾイドの系譜」

新地球暦1245年、帝都メガロポリス、ネオデスメタル帝国の首都であり、1200年以上前、地球に初めてゾイドが現れたゾイドクライシスが起こる前の21世紀では世界最強の軍事力を持った大国の首都に位置していた。

地球の八割を支配する帝国の領土は広く、21世紀の全ての大国はおろか、ゾイドクライシス後に領土覇権を争った帝国、共和国の領土も全てネオデスメタルの領土に含まれていた。

その帝都は小国に匹敵するほど広大であり、都市の周辺には巨大な城壁に囲まれ、周囲には全身が真っ赤なキャノンブルとバズートルが見張っていてまるで機械の要塞だった。

この日は帝都の式典であった。帝国の各領域を支配する全ての総督や軍人が帝都の中心にある皇帝ギャラガー三世の宮殿の前に集結していた。宮殿の周辺にはギャラガー親衛隊と呼ばれる皇帝直属の護衛の兵士と機械兵、そして親衛隊専用のギルラプター、ジョーカー、ラプトル、デイトロス、キャノンブル、バズートル、ガブリゲーター、ステゴゼーグ、デイメパルサーが行進する盛大な軍事パレードが行われていた。

親衛隊の兵士は一般の兵士と違い、赤い装甲服に身を包み、親衛隊専用のゾイドには全身が真つ赤なカラーリングが施されていた。宮殿の前には赤いローブとマントに身を包んだ礼服を着た帝国の皇子アーネスト・ギャラガーがいて、その後ろに付き添いとしてカーター大佐とコナー少佐がいた。そして、その横には四天王のグレッゲル准将、アッカーマン中将、デーニッツ中将、ルメイ大將もいた。

多くの国民が宮殿の前に集結する中、一人の男が立つて演説を行っていた。男はギャラガー親衛隊の隊長にして帝国の事実上のNo.2のキル・タッカー元帥だった。

「我が帝国の諸君！かつてこの世界は混沌に道溢れていた。1200年以上前、帝国と共和国が領土覇権を争って人類は愚かな戦争を繰り返していた！しかし、その戦争は間もなく終わりに近づこうとしている！

我がネオデスメタル帝国がこの世界を統一したとき、世界に変革をもたらし、新たな世界が創造される！そして、その創造主となられるのが我らが皇帝ギャラガー三世陛下なのだ！皇帝陛下が全世界を支配した暁には、この世に永遠の楽園が築かれる！

しかし、愚かにも反乱軍は皇帝陛下と我が帝国の理想を踏みにじり、反乱を起こしている！そんな輩を許してよいのか！皇帝陛下と我が帝国の理想と秩序を守るために諸君よ、今こそ立ち上がるのだ！」

「ウォーオオオオオ！！」

タツカー元帥の演説を聞いて歓声を上げる帝国国民、

「だが、諸君よ！何も恐れることはない！我らには皇帝陛下がおられる！皇帝陛下は無敵なのだ！これから諸君に皇帝陛下の御力を見せよう！」

タツカー元帥が指差した宮殿の広場にはクローン技術で複製された量産型のナツクルコングとステイレイザーがそれぞれ数百体いた。

そして、そのとき、地面が揺れ、広場の地面が割れ、下から超巨大ゾイドが現れた。それは1200年以上前、ゾイドクライシスで世界の三分の一を壊滅させた伝説の最凶ゾイド、ジェノスピノだった。

ジェノスピノの頭部には一人の人物が立っていた。その人物こそがネオデスメタル帝国の皇帝ギヤラガー三世だった。年齢は30代から40代で、アーネストより派手な赤いローブとマントに身を包んだ礼服を着ていて、威風堂々とし、自信と狂気にも見えるその目はかつて200年前に世界に君臨した帝王ギヤラガーそのものだった。

ジェノスピノは自身の頭部に乗っているギヤラガー三世が落ちないようにゆっくり量産型のナツクルコングとステイレイザーの元に歩いていった。ギヤラガー三世を見た国民たちは一斉に歓声を上げた。

「ウォーオオオー！ギヤラガー！ギヤラガー！ギヤラガー！」

ギヤラガー三世は歓声を上げる国民に対して右手を上げた後、すぐさまジェノスピノ

の頭部からコクピットに乗り移った。合図と共にナツクルコングとステイレイザーはジェノスピノに襲いかかった。ジェノスピノはA―Zロングキャノンを撃ち込み、近づいてきたものにはA―Z高熱火炎放射機を放ち、前足と口でナツクルコングの首と手足をバラバラにしていた。

マシンプラストしたステイレイザーのプラズマウォールや砲撃も一切通用せず、ジェノスピノは次々と確実に倒していった。全てのナツクルコングとステイレイザーはバラバラに破壊され、時間はわずか三分足らずだった。ジェノスピノの力を見た国民は一齐に歓声を上げた。

「ウオーオオオー！ 皇帝陛下万歳！ 皇帝陛下万歳！ ネオデスメタル帝国万歳！！」

国民の歓声で帝都中が沸き上がった。盛大な軍事パレードが終わり、皇帝ギヤラガー三世は宮殿内の玉座に座っていて、その横にタツカー元帥が立っていた。皇帝の玉座の間は壁一面が真っ赤で部屋は広く、玉座は奥の真ん中に位置し、周辺には親衛隊兵士がいつでも銃を撃てる状態で立っていた。

アーネストはその前に膝ま付いていて、その後ろに四天王もいた。アーネストはギヤラガー三世に、

「戻りました！ 父上！」

アーネストを見たギヤラガー三世は、

「よく戻ってきたな！息子よ！実は、近々私はお前に譲位し、その証としてジェノスピノをお前に与えようと考えている！」

それを聞いたアーネストは驚き、

「帝位とジェノスピノを僕に！ですか？」

「そうだ！その代わり、私は新しいゾイドに乗り換えようと考えている！」

「父上がジェノスピノ以外に乗るゾイド？」

「それはいざれ知ることになるだろう！それに、お前は私の跡を継ぐもの！それに相応しいゾイドが必要だからな！ま、そうなったらあのギルラプターはもう必要ないがな！」

「う………！」

そのとき、アーネストの脳裏にギルラプターエンペラーがエマに寄り添い、笑顔でギルラプターを優しく撫でるエマの姿が写った。

「お言葉ですが、父上！僕は帝位を継ぐにはまだ未熟です！譲位はもうしばらく待つてください！」

「フ、まあいいだろう！」

アーネストはその場を離れ、アツカーマン中将も付き添いとしてその場を離れる。アーネストとアツカーマン中将が去った後、タツカー元帥はデーニッツ中将に、



「ところで、デーニッツ中将！あの小娘はまだ捕らえられないのか？」

「は、手配書のレベルを上げ、小娘を賞金首に賭け、我が帝国の賞金稼ぎ共にも伝え、全力で捜索中です！」

グレッゲル准将はデーニッツ中将に、

「中将、一体なんですか？その計画とは！」

タッカー元帥は、

「そうか、諸君らにはまだだったな！では今からご案内しよう！陛下はいかがでしようか？」

「いや、私は風呂にいかせてもらおう！ジェノスピノに乗った後の休息を取りたいのでね！それとあれが完成したら、すぐに伝える！何としても早くだ！」

「は！」

タッカー元帥はデーニッツ中将と共にグレッゲル准将、ルメイ大將を宮殿内の研究室に案内した。研究室研究室に入った先のガラス越しにはZーOバイザーと拘束部を取り付けられたデスレックスがいて、その横には荷電粒子吸入ファンがあった。

グレッゲル准将とルメイ大將は驚いた表情をした。それに対し、デーニッツ中将は、  
「現在、私とタッカー元帥が行う計画はデスレックスをジェノスピノ以上の最凶ゾイドに改造する計画なのです！」

それを聞いたグレッゲル准将とルメイ大將は口を揃えて、

「デスレックスをジェノスピノ以上の最凶ゾイドに改造だ?!」

「そうです! 実はかつて200年前、陛下の先祖たる帝王ギヤラガー様が所有していたこのデスレックスが封印されていたデスロッキーにこの荷電粒子吸入ファンが発見されたのです!」

それを聞いたグレッゲル准将は、

「荷電粒子吸入ファンだ?!」

「実は記録によるとデスレックスは1200年以上前、元々一体ではなく、複数いたことが判明し、その中でも突然変異種にしてこの荷電粒子吸入ファンを持つ唯一絶対の存在であるオメガレックスがいたことが判明したのです!」

グレッゲル准将とルメイ大將は口を揃えて、

「オメガレックス!」

「オメガレックスは最強兵器、荷電粒子砲を持ち、ジェノスピノを遥かに凌駕する史上最強のゾイドとしてかつて古代秘宝Zと呼ばれたデスレックスの伝説を大きくしたのです!」

ルメイ大將はデーニッツ中将に、

「では、200年前、ジェノスピノの伝説が伝わらなかったのはそのためか! しかし、

その計画に何故あの小娘が必要なのだ？」

「（こちらを）ご覧くださいい！」

デーニッツ中将が指差したところに巨大なキューブがあった。グレッゲル准将とルメイ大將はそれを見て驚愕した。

「これは!？」

デーニッツ中将は、

「リジエネレーションキューブです！」

「リジエネレーションキューブだ?!？」

二人に対してデーニッツ中将は、

「そうです!とところで、皆さんはゾイドクライシスをご存じですか？」

デーニッツ中将の質問にルメイ大將は、

「ああ、確か伝説によると1245年前に地球に初めてゾイドが現れた日だったな！」

デーニッツ中将は、

「実はゾイドは元々、この地球の生物ではなく、ゾイドクライシスで地球に移住した第一世代と言われるものたちが住んでいた惑星Ziの生物なのです！」

ルメイ大將は、

「惑星Zi!？」

「そうですね！実は記録によると、第一世代が地球に移住する際、あるトラブルが起きて、ゾイドクライシスが起きて地球が一度滅ぶ事態になってしまったのです！そして、ある科学者がゾイドクライシスで滅んだ地球を再生させるために開発したのがこのリジエネレーションキューブなのです！

記録ではリジエネレーションキューブは地球再生に全て使われたとされていますが、この端末は万が一、地球がまた滅びた場合を想定して用意した、いわば保険のようなもの、そしてこの端末を解析し、我が帝国は惑星Ziのオーバーテクノロジーとゾイド因子の仕組みを得、我が帝国はここまで強大になったのです！

しかも解析の結果、この端末はデスレックスをオメガレックスに進化させる部品にもなることが判明したのです！しかし、既に1200年以上も経っているため、作動方法がわからないのです！」

ルメイ大將は、

「それで、あの小娘が知っているから必要ということか。だが、その根拠は？」

「小娘の名はエマ・コンラッド、そのコンラッドという名に何か引つ掛かりがありませんか？」

「どういうことだ？」

「実はウィルとか言う小僧が脱走させたあのビーストライガーが1200年以上前に

ゾイドの王、地球の救世主と呼ばれたときのライダーの名もコンラッドで、そして、その妻は第一世代の一人で、リジエネレーションキューブを開発した科学者の孫だったそうだ！」

「名前が同じだけじゃないのか？」

「しかし、元はといえば、ピースストライガーの発掘及び復元をしたのもあの小娘で、しかもあれだけ調教しても従わなかったピースストライガーが唯一なついたほどですから！血の繋がりはあってもおかしくはありません！しかも、ピースストライガーの発掘場所すらも知っていたものですから、リジエネレーションキューブの作動方法も知っているはずです！」

デーニッツ中将の説明にタツカー元帥は、

「とにかく、この件は機密事項で、我ら以外の者には口外するな！陛下は1日も早くオメガレックスの完成を待ち望んでおられるのだ！デスレックスは私が管理し、ルメイ大將ら三人は何としてもあの小娘を帝都に連れて来るのだ！」

デーニッツ中将は、

「ピースストライガーはいかが致しましょう？」

「本来なら、捕獲して戦力にするところだが、生かしておくと後々、面倒になる！ピースストライガーは構わず、スクラップにしろ！バラバラにな！」

三人は、口を揃えて、

「はー！」

場所は変わり、帝都の病院でカティアはウィルと戦った後の治療を受けていた。カーター大佐は医師に、

「少尉の容態はどうです？」

「順調に治りつつあります！このまま、安静にしていれば大丈夫です！」

「そうか…、ありがとう！」

起きたカティアはカーター大佐に頭を下げ、

「申し訳ありません、大佐！私が無茶な行動をしたせいで！」

「いいんだ！君は任務を遂行しようとしたまでだ！」

そこにアーネストが病室に入った。

「カティア、大丈夫か？」

アーネストの問いにカティアは、

「大丈夫よ！殿下、ありがとう！」

「大丈夫ならそれで良かった。失礼するよ！」

そう言つて！部屋から出るアーネスト、それを見たカーター大佐は、

「相変わらず、無愛想ですな！殿下は！」

それに対し、カティアは、

「いいえ、あれが殿下のいいところなの！殿下は本当に優しいお方なんです！」

そこにお見舞いに来たカティアの同僚がきた。

「ギレル少尉、大丈夫か！」

「ナツシユ！ありがとう！大丈夫よ。」

「良かった！突然、倒れたって聞いたから心配してたよ！でも今日は皇帝陛下とジェノスピノを拝むことが出来たから、嬉しいだろ？」

「え、ええ……。」

そのとき、カティアの腕が震えていた。

「ギレル少尉も俺みたいに機械化すれば、こんな苦しみを受けずに済んだのに！」

それを聞いたカティアは驚愕した！

「え！ナツシユ、あなた、機械化されたの!？」

「そうだよ！」

そのとき、ナツシユは自分の右腕の皮膚を引きちぎり、引きちぎった右腕は超合金でできた完全な機械の腕になっていた。それを見たカティアは青ざめた表情をしていた。ナツシユは自慢するかのようには機械の作動音がする右腕の手首を動かしながら、

「見てくれよ！凄いだろ！この前の戦闘なんか、反乱軍の銃を数百発喰らっても全く痛くもないし、傷だつてつかないし、しかも反乱軍の兵士共30人も倒したんだよ！これも皇帝陛下のお陰なんだよ！まさに陛下は創造主にして神だよ！陛下には感謝で一杯だよ！」

それを聞いたカティアは、

「そう…、良かったわね……。」

そのときのカティアは暗い表情をしていた。一方、病院から出たアーネストは宮殿の庭にいた。その横にギルラプターエンペラーが心配そうにアーネストを見ていた。アーネストはペンダントを見ていた。彼はエマの言葉を思い出した。

「レイル、私たちはわかり会うことで未来を築くのよ！」

アーネストはペンダントを握りしめ、

「エマ、お前は甘い！世界を統一するには、対話など不要！ましてやわかり会うことも出来ない！力こそ正義！絶対的な力が必要なのだ！人間もゾイドも圧倒的な力の前には平伏すしかないのだ！」

アーネストはギルラプターを睨み付け、

「ギルラプター、お前もエマのことは忘れろ！お前は俺が皇帝になるための僕だ！俺の支持に従え！」



ギルラプターはアーネストの言葉にうなづく。そのとき、帝都中に設置されているスピーカーからタツカー元帥の出撃命令が出た。それを聞いたアーネストは、

「出撃命令が出たか！ライガーを倒すのはこの僕だ！奴を倒して、父上の後を継いで帝国の皇帝になる！」

同時に聞いたカティアも。

「エマ、待ってて必ずあなたを助けるわ！」

それぞれの思いを持って二人はルメイ大將ら四天王の率いる軍にそれぞれ同行していった。

To be continued

## 第11話 「駆け抜ける、ウルフ」

同盟軍本拠地、グラッドとクルーガーは以前の四天王のグレッツゲル准将の進撃を見て、今後の行動の相談をしていた。クルーガーは、

「グレッツゲルの行動を見た限り、敵は我ら同盟軍殲滅のために総力を上げるだろう！そこで、新たな基地建設を提案したいのだが、グラッド、君はどう思う？」

それに対し、グラッドは、

「正規の軍なら、当然そうなるでしょうが、俺たち同盟軍はレジスタンスで、正規軍ではないため、当然、新たな基地建設のための資金及び人員はもちろん、場所がない！

それに新たに基地を建設すると、民間人の不安を煽る可能性もある。俺たちに味方してくれるレジスタンスと連絡を取り、連携を取って帝国軍に対抗するのが得策かと！」

「やはり、そうなるか！では、誰が行くのだ？」

「俺とクリスとジョン、リセルだ！俺のレックスとジャック、キール、ウルフは足が速いし、いざとなったら、逃げられる！」

「だが、問題なのはリセルだ！あいつは普段、冷静だが、ギャラガー親衛隊に強制収容所に送られ、家族と友人を殺された過去があるため、帝国への復讐心が強い。帝国軍と

の戦いで取り乱されなければよいが！」

「俺がなんとかする！」

「ところで、ウイルは？」

「ステイレイザーに対抗するため、今、トリケラと訓練を行っている！」

「そうか！」

場所は変わり、本拠地の訓練場、そこで、ウイルのシーザーが角に高圧電流を装備したトリケラドゴスと訓練を行っていて、クリス、ジョン、ジェニファーがグラッドの代理として様子を見、その横にはエマが心配そうにウイルとシーザーを見ていた。

トリケラは真つ直ぐシーザーに突つ込む。シーザーは、さつと避けるが、トリケラは尻尾で避けたシーザーを風ぎ払い、シーザーに高圧電流を装備した角に当てる。

「ウワアアアー!!」

苦しむウイルとシーザー、

「ウイル、シーザー！」

それを見て不安になるエマ、ウイルとシーザーを見たクリスは、

「ウイル、前方の攻撃だけに気をとるな！トリケラは足が遅い！スピードで翻弄させろ！」

「わかったー！」

再び合間見えるシーザーとトリケラ、再び突進するトリケラ、シーザーはさつと避け、トリケラは尻尾で風ぎ払おうとするが、シーザーはそれも避け、

「切り拓け、シーザー！俺の魂と共に、進化 解放！エヴオブラストー!!ピーストオブ クローブレイク！」

吹っ飛ばされるトリケラ、それを見たジエニファーにジョンは、

「中々、やるじゃない！」

「さすが、ゾイドの王は伊達じゃないね！」

クリスは、

「とはいえ、これは模擬戦だ！実際のステイレイザーはトリケラより強い！よし、そこ  
まで、トリケラもよく頑張った！」

クリスの言葉にうなずき、その場を離れるトリケラ、シーザーから降りたウィルの元  
にエマが立ち寄った。

「どうした、エマ？」

エマはウィルに頭を下げ、

「ごめんなさい！私が一緒にいたせいで、ウィルやシーザーを巻き込んだじゃって！」

「何言ってるんだよ！エマ、お前らしくないな！俺はただみんなを守るために戦ってい

るんだよ！それにお前は帝国に狙われている。守るのは当然じゃないか！」

「でも！」

落ち込むエマにジェニファーは、

「心配しなくていいのよ！男はそんなヤワなもんじゃないから！」

ジョンも、

「その通り！俺たちは最強のレジスタンス、同盟軍！いつだって俺たちが守ってやるぜ！」

エマは励ますジェニファーとジョンに頭を下げ、

「ありがとうございます！」

そこにグラッドとリセルが立ち寄り、

「クリス、ジョン！これから西方のレジスタンスの元に向かう！直ぐに出発の準備だ

！後、ウイル！お前もだ！」

それを聞いたウイルは驚いて、

「え、俺も！」

グラッドは脳裏にクルーガーとの話を思い出した。

「え、ウイルも一緒に連れていくのか!?!」

「そうだ！」

「でもよう！いくらなんでも危険じゃあ。」

「確かに！だが、彼には経験が必要だ！この先、もつと激しい戦闘になるかもしれない！だから、ウィルにはもつと強くなってもらわなくては！恐らく、彼もそう望んでいるだろう！」

「やれやれ、ガキのお守りが増えちまったぜ！」

グラッドの元にエマが立ち寄り、

「グラッドさん！私も一緒に連れて行ってもらえませんか！」

それを聞いたグラッドは、

「はあ？おいおい、そいつは出来ねえ相談だ！第一てめえは帝国の最重要指名手配者だ！行ったら、危険だ！ここにいた方が安全だ！」

それに対し、エマは、

「いいえ、私は少しでもウィルの力になりたい！それに守られっぱなしになるわけにはいかない！」

「駄目だと言ったら……、」

そこにクルーガーが立ち寄り、

「行かせてやれ！彼女は本気だ！ウィル、しっかり守ってやれ！」

クルーガーの言葉にウィルは、

「わかった！」

「しようがねえな！ただし、条件がある！シーザーには乗るな！真つ先に狙われるかな！乗るのは……、」

場面は変わり、基地から出るレックスとシーザー、ジャック、キール、ウルフ。ウイ  
ルは不満そうな顔をしてキールの方に向いた。キールのコクピットにはエマがジヨ  
ンの後ろにしがみついていた。ウイルは出発前のことを思い出していた。

「キールに乗せる？何でだよ！俺のシーザーなら大丈夫だつて！」

「キールはスパイデス、機動性が高いから、いざとなったら、逃げられる！それにシー  
ザーも手配されているから、余計狙われやすい！それにキールの糸は他のスパイデスよ  
り粘着力が高いからな！」

ジヨンはこつちを見るウイルを見てグラッドに言った。

「コマンダー！いいんですか？ウイル、嫉妬してまずぜ！」

「いいさ、あいつは世話が妬けるからな！こうした方が大人しくなるからな！」

「ハハ、違いないですな！嬢ちゃん！俺とキールは激しい動きをすることが多いから  
な！しっかりと捕まっておけよ！」

ジョンの言葉にエマは、

「はいー！」

それを見てムスとするウイル、その時、突然、シーザーたちの前にラプトラリア、ラプトル、スコーパー、クワールガが現れた。攻撃態勢をとるレックス、

「なんだ、こいつら、帝国軍か？」

ラプトラリアのライダーがウイルたちに向かって、

「ビーストライガーにガトリングフォックス、ソニックバード、スパイデス、ハンターウルフ！ということは強者だな！強者あるとき、いつでも現れ、そして、正義を呼ぶ声いつでも現れる！俺の名はグリード、」

「俺の名はボルグ！」

「俺の名はガンマ！」

「俺の名はステイル！」

「我ら、余りに強すぎて無敗のまま強者に勝ち続け、運命に導かれ過ぎた四人、その名もスレイマーズ！」

突然のことにポカーンとするウイル、グラッドはため息をついて、

「いくぞ！お前ら、バカに付き合っている暇はない！」

先を急ごうとするグラッドにグリードは、



「待てーい！人が話しているときに素通りするとは、貴様、それでも強者かー!!」  
「生憎、こつちはてめえらの遊びに付き合う暇はねえよ！」

そのとき、森に爆発が起き、たちまち森が山火事になった。

「なんだ？どうなっている！お前らの仕業か？」

グリードは、

「ノンノン、我らは正義の使者！決してそんなことはせん！」

次々と木が崩れ、避けるレックスたち、そのとき、影からギルラプタージョーカーが現れ、次々とレックスたちに襲いかかる。レックスはジョーカー攻撃を避けるが、グラッドが周りを見たときには既にシーザーたちの姿は見当たらなかった。

「くそー！また分散か！しかし、何故、俺たちの向かう道がわかつたのだ？」

そのとき、クリスから通信が入り、

「コマンダー！西方のレジスタンスがデーニツツ中将率いるディメパルサー、デイロフォス狙撃隊に襲撃され、制圧されたとの報告が出た！」

「ということは、レジスタンスから俺たちがここに来ることを聞き出したということか！やはり、あの男、厄介だな！」

レックスは五体のジョーカーに囲まれた。

「少々、厄介だが！やれるな！レックス！」

グラッドの言葉に咆哮を上げるレックス、一方、シーザーとウルフは六体のジョーカーと戦い、ジョーカーの連携攻撃に苦戦するも善戦するシーザーとウルフ、そのとき、ステイレイザーとガブリゲーターMk-IIが現れた。

「あのときのステイレイザーとガブリゲーター！」

グレッゲル准将とブリューゲル大尉は、

「さあ、リベンジといくか！」

「ヘッヘッへ、小僧！今度こそ、噛み砕いてやるぜ！」

ウイルは二人に、

「何度来たってエマは渡さねえ！エマは俺が守るんだ！」

グレッゲル准将は、

「ほう、美しき姫君のために白馬に乗ったナイトを気取るつもりか！だが、今度は違わず！貴様らを分散して一体一体確実に倒してあの小娘を奪うのだからな！まずは小僧貴様からだ！あの小僧はお前にくれてやる！」

ブリューゲル大尉は、

「了解しました！小僧！今度こそ、借りを返してもらおうぞ！陛下の特別な許可を得て親衛隊同様にパワーアップしたガブリゲーターMk-IIの恐ろしさ、特と味わえ！」

制御トリガー解除、ガブリゲーター！兵器 解放！マシンブラスター！！」

マシンブラストしたガブリゲーターの口頭から炎が現れた。ガブリゲーター Mk II の口には専用の A—Z 高熱火炎放射機が搭載されていたのだ。

「それだけじゃないぞ！ デスマーク！」

ガブリゲーターの身体から煙の音がする。しかし、煙が見えない。ウィルとリセルは警戒してガブリゲーターを見る。ブリューゲル大尉は、

「フフフ、お前らに同じ手は通用しないから、別の恐怖を味わせるぞ！」

ガブリゲーターが火炎放射を吐き、周りが爆発した。爆発で吹っ飛ばされるシーザーとウルフ、

「種明かしを教えてやろうか！ 今のデスマークはメタンガス！ 自然中に発生し、ちよつとでも火をつけたら、爆発するものだ！ パワーアップしたガブリゲーターのデスマークにはメタンガスの他に毒ガス、その他数種類のガスを出すことが出来るように改造されているからな！」

それを聞いたリセルは、

「そうか、さっきの爆発で一瞬で山火事になったのはそのためか！」

「まだまだ、ミサイルと高射砲があるぞ！」

次々とミサイルを撃つガブリゲーター、シーザーとウルフはそれを避けるが、デスマークと火炎放射で周囲が爆発し、吹っ飛ばされるシーザーとウルフ、態勢を崩すシー

ザーは直ぐ様、ガブリゲーターに捕まった。そのまま、シーザーの身体を真つ二つにするかのように噛み砕こうとするガブリゲーター、

「グオオオー!!」

苦しむシーザー、

「ハー！」

そのとき、エマが何か感じ取り、

「パーカーさん、ウィルとシーザーのところに行ってください！シーザーが危ないの  
！」

ジヨンは、

「わかってるーだが、ジヨーカーの連携が厄介で中々この場を離れられねえ！仕方ない、ウィルドブラストしてすぐに叩き潰す！嬢ちゃん、しっかり捕まってな！」

それを聞いたエマは目をつぶってジヨンの後ろに強くしがみつき、

「へへへ、ウィルが見たら余計嫉妬するかな？いくぞ、キール！突き刺せ、キール！俺の魂と共に、本能 解放！ウィルドブラストー!!」

場面は変わり、苦しむシーザーを見たブリューゲル大尉は笑い、

「ハハハ、苦しいか？いいねーもつと苦しませてやるー！」

ガブリゲーターは追い討ちを掛けるかのように、くわえたまま、火炎放射を吐いた。溶解していくシーザーの身体、

「シーザー、くそ！止めろ！」

「止めて欲しかったら、あの小娘を渡しな！」

「いやだ！渡すわけにはいかねえ！エマは俺が守るんだ！」

ウイルの言葉に応えるかのように、シーザーは脱出しようとする。それを見たブリューゲル大尉は、

「ハハハ、あんな小娘のためにそこまで命を張るとは！なら、仕方ない。もっと苦しませてやる！」

噛み砕く力を強くするガブリゲーター、シーザーは苦しみながら、脱出しようとする。ガブリゲーターに向かって突っ込むウルフ、

「止めろー!!」

しかし、横からステイレイザーが現れ、ウルフが吹っ飛ばされる。

「貴様の相手は私だ！制御トリガー解除！ステイレイザー、兵器 解放！マシンブラストー!!プラズマウォール！」

ステイレイザーのプラズマウォールを喰らってしまいうルフ、

「ウワアアー!!」

「ワイルドブラスト出来ない奴に私のステイレイザーが負けるわけないんだよ！」

「くそ！ウイル、シーザー！」

ガブリゲーターに苦しめられているシーザーを見てリセルは脳裏に過去のことを思い出した。それは帝国軍によって強制収容所に送られ、家族と友人がある人物に射殺される姿だった。

「あの悲劇を繰り返したくない！」

ステイレイザーに突っ込むウルフ、しかし、ステイレイザーはウルフを払いのけ、ウルフを前足で押さえつける。

「小賢しいウルフが！貴様もあのライガーと同じようにしてやる！」

そのままウルフを踏み潰そうとするステイレイザー、そのとき、黒いグソツクが現れ、ステイレイザーに突進する。前足を離し、態勢を崩すステイレイザー、同時に土の中から他の数体のグソツクも現れ、ガブリゲーターに突進する。

グソツクを見たリセルは、

「あれはあのとときのグソツク！しかも他のグソツクも！しかし、黒いの以外にはにはコクピットがついていない！野生ゾイドか！」

黒いグソツクを見たグレッゲル准将は、

「なんだ？貴様は！」

黒いグソックのライダーが応える。黒いグソックのライダーは年配の人物だった。

「わしの名はスミス！正義の使者にして悪を打ち砕くスレイマーズのリーダー！」

それを聞いたリセルは、

「スレイマーズだつて？さっきの連中か！」

グレッゲル准将は、

「正義の使者だと笑わせてくれる！我が帝国に齒向かう奴は全て排除してくれる！」

「そう簡単に行くと思うなよ！いくぞ、グソック！突き抜ける、グソック！わしの魂と

共に、本能 解放！ワイルドプラストー!!」

プラズマウォールでグソックに向かって突進するステイレイザー、しかし、グソックはその攻撃を難なくかわし、他の野生グソックと共にステイレイザーを吹っ飛ばす。

それを見たリセルは唾然としていた。スミスはリセルの方を向き、

「若いの！お主は復讐心に囚われすぎじゃ、ウルフと心を拓け、そして、仲間を守りた  
いという気持ちをつづけろ！」

それを聞いてハッとするリセル、

「そうだ！俺はそうやってと戦ってきた！ウルフの気持ちを考えずに！」

ウルフは何かうなずく。それを見たリセルは、

「そうだな！ウルフ、いくぞ！」

そのとき、コクピットの中が発光し、ゾイドキーが現れた。キーを見て驚くりセル、それを見たスミスは、

「その力を奴らに見せてみる！」

リセルは、

「いくぞ、相棒！ 駆け抜けろ、ウルフ！ 俺の魂と共に、本能 解放！ ワイルドブラストー!!」

ワイルドブラストしたウルフを見たウィルは、

「凄い！ あれがウルフのワイルドブラスト！」

ウルフを見たグレッゲル准将は、

「ワイルドブラストしても私には、敵わない！」

砲撃をするステイレイザー、ウルフはソニックブーストでそれを避ける。

「いくぞ、ウルフ！ セカンドギア！ ハウリングシャウト！」

ハウリングシャウトを喰らって態勢を崩すステイレイザー、同時に黒いグソックも突進してステイレイザーを吹っ飛ばす。

リセルはウィルを見て、

「今だ、ウィル！」

「いくぞ、シーザー！ 切り拓け、シーザー！ 俺の魂と共に、進化 解放！ エヴォプラス



トー!!ビーストオブクローブレイク!

ビーストオブクローブレイクを喰らって右の角を破壊されるステイレイザー、その後ろからガブリゲーターが現れ、

「小僧!俺がいることを忘れるな!」

シーザーに襲いかかるガブリゲーター、

「そうはさせない!ハウリンググシャウト!」

「わしのグソックも忘れるなよ!」

ハウリンググシャウトとグソックの攻撃を喰らってぶつ飛ばされるガブリゲーター、

「ビーストオブクローブレイク!」

止めのビーストオブクローブレイクを喰らってミサイル砲と高射砲を破壊されるガブリゲーター、そのとき、キールが現れ、

「スパイダーポイズン!」

毒を植え付けられるガブリゲーター、

キールを見たウィルは、

「エマー!」

「ウィル!良かった!無事だったのね!」

「少し遅くなったが、何とか間に合ったようだな!」

態勢を建て直そうとするステイレイザーとガブリゲーター、そのとき、ステイレイザーのкокピットからデーニッツ中将から通信が入り、

「グレッゲル准将！今は歩が悪い！引くぞ！」

それを聞いて撤退するステイレイザーとガブリゲーター、

キールから降りるジョンとエマ、シーザーから降りたウイルはエマの元に駆け寄り、

「エマ！良かった！無事だったんだね！」

「ウイルも無事で良かった！」

ジョンが間に割り込み、

「ま、俺が守ってやったからな！リセルも無事で何よりだ！」

「俺はただ、ウイルを俺のような思いをさせたくなってやっただけだ！」

そこにレックス、ジャックも戻ってきた。それを見たウイルは、

「グラッド！来てくれたのか！」

「ジョーカーの連携に手を焼いたが、野生のグソックたちが攪乱してくれたお蔭で、蹴

散らすことが出来た！」

「グソックなら、さっきの黒い……、」

ウイルが振り返ったときには、あの黒いグソックはいなかった。黒いグソックとスミ

スは離れた高台のところでウイルたちを見ていた。

「愛しのエマちゃん！一段と美しくなったの〜！だが、正体を明かすのはまだ早い！そのときこそ、わしのカッコいい姿を見せるんじゃないか！」

そこにスレイマーズの四人組が現れ、

「隊長！酷いですよ！これじゃ、俺たちただの囃ませじゃないですか！」

「今回はわしの活躍を見せたかつたんじゃい！文句言うな！だが心配するな！次はお前らにもっと活躍の場を与えてやるわい！そのときこそ、エマちゃんにカッコいいところ見せるんじゃない！」

四人は隠れて、

「隊長のスケベ体質は治らないな！」

「なんか、言った！」

「いいえ、別に！」

To be continued

## 第12話 「レジスタンス召集」

西方のレジスタンスの基地、そこにデーニッツ中将の率いる部隊がおり、撤退したグレッゲル准将とブリュッゲル大尉がデーニッツ中将と話していた。デーニッツ中将は二人に向かって、

「まさか、またもや、失敗するとは！」

グレッゲル准将は、

「申し訳ありません！」

「仕方ない！グレッゲル准将、お前はあのスレイマーズとやらの討伐を！ブリュッゲル大尉は私の部隊に戻り、引き続き、小娘の奪還に務める！」

「いや、しかし！」

「本来、小娘の奪還は私の任務だ！お前は何度も邪魔したあのウジ虫を始末しろ！」

「了解しました！」

場所は変わり、同盟軍本拠地、そこでウィルトリセル彼は話していて、横にシーザー

とウルフがいた。ウィルはリセルと話していた。

「なあ、リセル！お前の相棒に名前はないのか？」

それに対し、リセルは、

「そういえば、名前なんてつけていなかったな！そうだな…、デルって名はどうかかな？」

「いい名前だね！ウルフ、どうだ？」

ウィルの質問にうなずくウルフ。

「これからもよろしくな、デル！」

二人の元にグラッドが現れ、

「ここにいたのか！今から緊急会議だ！直ぐにこい！」

司令室に全員集まり、グラッドは全員に向かつて言った。

「さて、今回、君たちに集まってもらったのは他でもない！帝国の勢力は日々拡大しつつあり、今や、全世界を完全に支配する勢いだ！そこで、俺たちは帝国に対抗するため、味方を増やすために各地のレジスタンスと手を結ぼうとしているのだが、色々と厄介な問題が出ています。

例えば、帝国の力に恐れを成して士気が下がり、帝国に抵抗する派、投降する派に別れて内輪揉めになっているものや、帝国に服従してしまったもの、特に厄介なのが帝国

には抵抗するが、ゾイドを帝国を倒すための道具として酷使するものがいて、中々、味方が集まらない状態だ！

「そこで、彼らの目を覚まさせるための方法が必要なのだが！」

それを聞いたクリスは、

「となると、俺たちが帝国に対抗できる存在として世界中に知らしめねばならないということか！しかし、今の俺たちにはそれが……、」

「そこで、クルーガーからウイルとエマを彼らを説得する役になって欲しいと言っている！」

それを聞いたウイルとエマは驚いた。

「俺とエマが!?!」

それに対し、クルーガーは、

「そうだ！かつて1200年以上前にゾイドの王と呼ばれ、地球を救ったシーザーの相棒である二人にその役を担って欲しい！」

「ちよつと待つてくれよ！いくらなんでも、それは荷が重いよ！」

しかし、エマは、

「私、引き受けます！」

「エマ！」

「皆が帝国に苦しめられている状況を変えるためにも、力になりたいんです！」  
クルーガーは、

「わかった！よし、クリス、ジョン、ジェニファーはウィルとエマを連れて東方のレジスタンスの元に行ってくれ！」

クリス、ジョン、ジェニファーは応え、

「了解！」

クリスはウィルたちを連れ、出発の準備をする。グラッドはクルーガーに、

「ホントにいいのか？いくらなんでも買いかぶり過ぎじゃあ……」

「いや、二人には試練を与えることが必要だ！きつとあいつだつて喜ぶはずだ！」

「デイビッドのことか？確か、あいつは俺が同盟軍に入る前、総司令だつたあんたの副官だつたな！いくら、あいつの息子だからといって、そう上手くいくとは思えないし、それにエマも1200年以上前にシーザーが地球を救い、ゾイドの王と呼ばれたときの相棒と地球を救った少女の子孫だつていう噂があるが、そう簡単にいくとは……。」

「私はあの二人を信じたいんだ！いつか、あの二人が1200年以上前のときみたいに世界を救ってくれると！」

出発するシーザー、ジャック、クーデリア、キール。しかし、エマはグラッドの指示で、引き続き、キールに乗っている。キールのコクピットの中でジョンの後ろにしがみ

つくエマを見てまた不満そうな顔をするウィル。　クリスは通信でジョンに話し掛ける。

「ジョン、ウィルが不機嫌そうだが、何かあったのか？」

「大したことはないですよ！隊長、あれは男の嫉妬です！」

それを聞いたジェニファーは、

「あら、愛しい女の子を奪われたことの嫉妬！」

二人の会話を聞いたクリスは、

「よし、問題無いな！いくぞ！」

場所は変わり、クリスたちが着いたのは東方のレジスタンスの基地。そのレジスタンスは帝国に抵抗はするも、ゾイドを帝国を倒すための道具、兵器として酷使する思想を持つていた。

基地の入口にクリスたちは到着するが、入口の兵士たちがクリスたちに向けて銃口を向けた。クリスは兵士たちに向かって、

「我々は反ネオデスメタル同盟軍である！君たちのリーダーと話がしたい！」

銃を向けた兵士たちは少し様子を見た。そのとき、入口の扉が開き、クリスたちは



入っていった。不安そうな顔をするウィルとエマ。

場所は変わり、クリスたちはレジスタンスのリーダーと会談を行っていた。クリスは、

「…ということだ！強大になる帝国に対抗するために我々は君たちの力が必要なのだ！」

それに対し、レジスタンスのリーダーは、

「確かに我々と君たちは帝国を憎むもの同士だ！だが、我々は君たちの思想が気に入らない！所詮、ゾイドは人間の道具でしかない！何故、その道具に感情移入するのかね？」

それを聞いてムツとするウィル、

「なんだよ！その言い方！ゾイドは道具なんかじゃない！俺たちと同じ生き物なんだよ！一緒に生きていく相棒なんだよ！」

しかし、レジスタンスのリーダーは、

「子供が口出しするもんじゃない！相棒だと？ふざけるな！この世界は弱肉強食！強いものは弱いものに服従するのが掟だ！我々は君たちとは手は組まん！さっさと帰り

たまえー！」

やむ無く部屋から退出したクリスたちは、

「やれやれ、どうやら、思った以上に手こずりそうだな！クルーガー將軍はお前を説得役にしたが、まるで聞く耳すら持たない。」

ジョンはクリスに、

「最悪、この連中はほつといて、他のレジスタンスと手を組んでいった方がいいんじゃないか？そのうち、帝国の力を知って俺たちと手を組んでくれるかもしれないし！」

「だが、あの思想が厄介なんだよな！このままほつとくと、手を組まないどころか、下手したら、帝国と手を組む危険性だってある。なんせ、帝国には人の弱さにつけこんで懐柔する連中もいるし！」

そのとき、エマがクリスに、

「私ともう一度説得してきます！」

ウィルは、

「エマ！」

「私はある人たちに教えて上げたいんです！ゾイドと人は共生していくんだということを！」

ウィルとエマは再び、レジスタンスのリーダーと話をした。レジスタンスのリーダーは、

「小娘の分際で、俺たちに説教のつもりか！」

エマはレジスタンスのリーダーに、

「ゾイドは人間の道具なんかじゃありません！ゾイドは、いえ、全ての命あるものは共に生きていけないといけないのです！」

「くだらん！そんな綺麗事通用せん！」

「悪の面だけ見ては駄目です！ゾイドは善の存在にもなれるんです！」

「何度言っても……！」

そこにウィルが、

「だったら、俺とシーザーを見てくれないか！人とゾイドとの絆を！」

場面は変わり、クリスたちとエマとレジスタンスのリーダーは、シーザーを見ていた。

ウィルはシーザーに、

「いくぞ、シーザー！」

ウィルの言葉にうなずくシーザー、

「切り拓け、シーザー！俺の魂と共に、進化 解放！エヴォブラストー!!」

エヴォブラストしたシーザーを見たレジスタンスたちは驚いた。ジョンはレジスタンスたちに、

「どうだ？これが滅びた地球を救い、ゾイドの王と呼ばれたビーストライガーの力さ！」

それを聞いたレジスタンスのリーダーは、

「ビーストライガー!?!」

エマはレジスタンスたちに、

「わかっていただけましたでしょうか？」

それを聞いたレジスタンスのリーダーは少し考えて、

「なるほど、あの伝説のビーストライガーを味方に行っているとは！どうやら、同盟軍も捨てたもんじやないということだな！いいぜ、お前たちの仲間になる！そして、ゾイドを大切にするぜ！」

それを聞いて少し安心するエマ、

「でも、一足遅かったかな？」

「え？」

そのとき、レジスタンスのリーダーはエマを捕まえ、頭に拳銃を向けた。ウィルは慌

てて、

「エマ！くそ、お前たち、なんのつもりだ！」

レジスタンスのリーダーは、

「俺たちはレジスタンスではなくなった！俺たちは帝国に雇われた賞金稼ぎさー！」

「なんだと!?!」

それを聞いて驚くクリスたち、そして銃を持った機械兵とクモのような四本足と殻のようなボディと腕にレーザーガンを搭載したロボット兵に囲まれた。

「帝国が俺たちの自治を認めて、これまでのことを水に流して資金援助をしてくれたんだ！そして、最重要指名手配者のエマ・コンラッドを捕らえれば、もつと金と強力なゾイドをくれるって！案の定、引っ掛かってくれたようだな！」

そのとき、基地からデイメパルサー Mk-II とガブリゲーター Mk-II、デイメパルサー、デイロフォス狙撃隊が現れた。デイメパルサー Mk-II からデーニッツ中将が降り、

「どうやら、上手くいったようだな！しかも、エマだけじゃなく、ピーストライガーまで手に入るとは、一石二鳥とはこのことだ！」

デーニッツ中将を見たクリスは、

「デーニッツ！やはり、お前か！」

口笛でゾイドを呼ぼうとするクリスたち、しかし、デーニッツ中将は、ボタンを出し、「おっと、お前たちがゾイドを呼んだ瞬間、このスイッチ、ディメパルサーのマシンブラストを発動し、マッドオクトットでお前たちのゾイドは一瞬で動きを封じ込められる！それでもいいのかね？」

デーニッツ中将の言葉を聞いて手を上げるクリスたち、

「それでいい！さあ、ウイルとかいう小僧！ライガーから降りて大人しく投降したまえ！」

ウイルは、

「誰が！俺はお前たちを許さねえ！エマを返せ！」

デーニッツ中将に睨み付けるシーザー。

それを見たデーニッツ中将は、

「やれやれ、相変わらず、世話の焼ける小僧だな！ブリューゲル大尉！殺れ！」

近づくガブリゲーター、シーザーはじつと構える。エマはウイルとシーザーに向かつて、

「ウイル、シーザー、逃げて！」

そのとき、同盟軍のクワガノス部隊が狙撃隊に攻撃してきた。クワガノス部隊を見たデーニッツ中将は、

「なに、馬鹿な！デイメ・パルサーの電波妨害で通信は遮断したはず！」  
そのとき、ジョンが発信器を取り出し、

「へへへ、どうやら、俺の発信器までは通用しなかったようだな！こいつは俺が帝国の基地に侵入して手に入れたデイメ・パルサーの情報を基に開発したものだ！」

「中々、やるな！さすが、クモ男と呼ばれるだけのことはある！だが、それでも万能ではなかったようだな！呼べたのはクワガノスだけだ！」

デーニッツ中将は、スイツチを押し、

「制御トリガー解除、デイメ・パルサー！兵器 解放！マシンブラスター！！マッドオクテット！」

マッドオクテットを喰らい、次々と墜落していくクワガノス、同時にシーザーも喰らい、苦しむシーザー、ガブリゲーターはすかさず、シーザーを喰わえる。ブリューゲル大尉は、

「ハハハ、今度こそ噛み砕いてやるぞ！」

「フフフ、これで身動きは取れまい！」

そのとき、地面から白い塊が現れ、ガブリゲーターに突進してきた。ガブリゲーターはシーザーを離し、ガブリゲーターに絡み付いた白い塊からキールが現れた。それを見たデーニッツ中将は、

「なに？スパイデスだと！どういうことだ？」

ジョンは、

「へへへ、俺のキールの糸は他のスパイデスより粘着性が高いだけじゃねえ！実は電磁波を防ぐことも出来るのさ！」

キールはデイメパルサーのスペクターフィンを掴み、ウィルはシーザーから降り、油断したレジスタンスのリーダーを吹っ飛ばし、エマを救出した。

「エマ、大丈夫か？」

「ありがとう！」

機械兵とロボット兵器がウィルとエマに向けて発泡するが、キールの糸で身動きを封じられ、狙撃隊は駆けつけたジャックとクーデリアが攻撃した。ウィルはエマと共にシーザーに乗る。クリスもジャックに、ジョンはキールに、ジェニファーはクーデリアにそれぞれ乗り、ジョンはウィルたちに向かって、

「こいつらは俺に任せろ！その間に逃げろ！」

シーザー、ジャック、クーデリアは基地から脱出する。狙撃隊が攻撃するが、ジャックとクーデリアの攻撃でそれを防ぐ。基地から3 km離れたところに止まり、ウィルたちはキールが来るのを待っていた。脱出して二時間が経った。

エマは心配そうに、



「パーカーさん、大丈夫かしら……。」

ウィルはエマを励ますように、

「大丈夫だよ！」

シーザーの目の前にキールがぬつと現れた。

「ウワアアアー!!」

それを見て驚くウィル、ジョンはからかうように、

「ハハハ、ビツクリした？」

クリスはジョンに向かって、

「無事だったか！」

「なんとか、逃げることは出来たぜ！さあ、早く戻ってこのことを指令に！」

場所は変わり、レジスタンスの基地、

「フ、まさか、あのスパイデスにあんな性能があつたとは！とはいえ、これで奴らは味方を増やせなくなったな！次の機会を狙うか。」

本拠地に戻るシーザーたち、ジョンは、

「やれやれ、まさか、既に帝国軍の手が回っていたとは！」

クリスは、

「敵に回ったという最悪の状態になり、オマケにウィルとエマに精神的なショックを与えてしまったようだな。」

クリスがシーザーの方を向いたとき、ウィルとエマは悲しそうな顔をしていた。

T o b e c o n t i n u e d

## 第13話 「スナイプテラを攻略せよ」

本拠地に戻ったウイルたち、クリスは、グラッドとクルーガーに事の状況を報告した。報告を聞いたクルーガーは、

「そうか、帝国軍に寝返ってしまったか！」

グラッドは、

「となると、俺たちは早急に他のレジスタンスを味方に付けなと！」

「となると、次は南方のレジスタンスだな！」

「あそこは確か、帝国に抵抗する派、投降する派に別れて内輪揉めになっているところだな！」

それを聞いたクリスは、

「これまた、厄介な相手が来たな！」

「だが、帝国の手が回る前に手を打たないと！ところで、ウイルは？」  
グラッドの質問にクリスは、

「エマがレジスタンスの裏切りの影響で精神的なショックを受け、彼も相当なショックを受けていて、今、個室に引きこもっている！」

「どうやら、かなり応えているようだな！よし、南方のレジスタンスは俺も行くー！」  
「ウィルとエマもですか？」

「本来、連れていけない方がいいが、いつまでもあの状態にする訳にはいかないからな！あの状態を治すきっかけになればいいが…、とにかく今度は俺とケンも同行して行く。出発の準備を！」

場所は変わり、南方の総督府、そこでは基地内で四天王のアッカーマン中将が4、5メートルのロボットのような二足歩行のパワードスーツに乗り、クローン複製されたラプトル、デイロフォスそれぞれ数十体と戦闘訓練を行っていた。

そして、カーター大佐がその様子を見守っていた。次々とラプトルとデイロフォスがアッカーマン中将に襲いかかるが、アッカーマン中将は両手で二体のラプトルを掴み、それを襲いかかるラプトルとデイロフォスに当て、パワードスーツ専用の銃を撃ち込み、さらに数多くのプロレス技の連打で次々とラプトルとデイロフォスの大軍を蹴散らす。

わずか10分でアッカーマン中将はラプトルとデイロフォスの大軍を蹴散らした。

「訓練終了！訓練終了！」

アツカーマン中将はパワードスーツから降り、そこにカーター大佐が駆け寄る。

「流石です。中将！」

「いや、大したことはない！これぐらい、帝国軍人として当たり前さ！ところで、ギレル少尉はどうしてる？」

「現在、オルドー少尉と共に反乱軍の制圧に向かっています！身体の方は特に問題はないと。」

「そうか、私の部隊に所属することが出来れば、君と一緒にいてあげられるのに残念だ！」

「いえ、あの子の要望です！あの子は私に近づきたくて努力していて、私と一緒にいては甘えていることになってしまっているので、敢えて私と別の部隊にいるのです！」

「いい娘を持ったな！大佐！」

「私の妻にも似てきました！」

「君の妻に？」

「妻は私が帝国軍に入隊する前に会い、明朗活発で先祖のようにスナイプテラに乗ることが夢で、私が代わりにその夢を叶えてあげたんです！我が帝国では女性はなかなか出世出来ませんから！いつか妻にも乗せて上げようと思っています。」

「それが理由で帝国軍に？」

「いえ、もちろんそれだけではありませんが！」

「いい妻と娘を持って君は幸せものだな！しかも妻は1200年以上前の先祖の妻でうら若き皇帝陛下に似て美人だそうじゃないか！」

「からかっているのですか？中將！」

「ハハハ、君にはそれで釣るような男じゃないか！ところで、殿下は？」

「ギルラプターに乗って単身、レジスタンスの制圧に向かっています！」

「相変わらずだな！」

「エマがいなくなつてから、最近、人との接触を拒むようになっていきますからね！」

「やはり、彼女の影響が大きいか！そういった意味では早く連れ戻さないと！」

「カティアも彼女と仲良かったですからね！」

そこに帝国軍兵士が駆け寄り、

「中將、レジスタンスの基地に反乱軍が向かつたとの情報が入り、そこにビーストライガーがいるとの目撃情報もありました！」

それを聞いたアツカーマン中將は、

「どうやら、早速、目的の獲物が我々の方に来てくれたようだ！出撃の準備だ！」

「は！」

アッカーマン中将の命令を受け、スナイプテラに向かうカーター大佐、

「まさか、このタイミングで来るとは！殿下には悪いが、ライガーとの決着はつけよう！」

出撃準備をする帝国軍、場所は変わり、南方のレジスタンスの基地、グラッドとクリスがそれぞれの派閥のレジスタンスと部屋で話し合いをしていて、部屋の外にジョンとジェニファアとケンと壁越しに落ち込んだ表情をしたエマとその横にウイルがいた。エマはウイルに、

「ねえ、ウイル。私のやろうとしていることは間違っているの？」

ウイルはエマを励ますように、

「そんなことはない！あのときは俺がすっかり伝えられなかったからだよ！エマのせいじゃない！」

そのとき、部屋からグラッドとクリスが出た。ジョンはグラッドの方に駆け寄り、

「コマンダー、どうでした？」

ジョンの問いかけにグラッドは、

「今回も厄介な相手だ！」

「投降する派は帝国は全てが悪いわけではないから、帝国に抵抗することはないの言い分だ！そもそも、ここはアッカーマン中将の支配領域だから、他の区域と違い、自治を認められているからな！」

「あの男か！確かに俺たちにとつても出来れば味方にしたい男だ！」

「だが、連中は帝国の実態をよく知っていない！そのことを伝えないと！帝国にどんな仕打ちを受けられるかわからんからな！説得にはもうしばらく時間が掛かりそうだ！ところで、ウイルとエマは？」

「相変わらず、落ち込みモードだ！」

「そうか、そのモードを切り替えるきつかけが見つければいいが、そうもいかないか！こんなとき、帝国軍が来たら、厄介だな！」

そのとき、レジスタンスの兵士が、

「帝国軍が、帝国軍が攻めて来ました！ナツクルコング Mk-II にステゴゼーゲ Mk-II、更にスナイプテラもいます！」

それを聞いたグラッドは、

「ち、タイミングが悪い！しかも、ステゴゼーゲやスナイプテラもいやがるとは！ウイルはエマと一緒にここで待て！帝国軍は俺たちに任せろ！」

それを聞いたウイルは、



「いや、俺も行かせてくれ！俺も見ているだけになるわけにはいかない！それにエマとこの皆も守りたいんだ！」

「仕方ねえな！だが、無茶はするなよ！」

「エマ、お前はここで待っていてくれ！」

そう言つてシーザーに乗るウィル、それを心配そうに見るエマ、ウィルたちがレジスタンスの基地の入り口から出た正面にはナツクルコングMk-IIやステゴゼーゲMk-IIを初めとする帝国軍が待ち構えていた。グラッドはウィルたちに、

「いいか！連中も前の奴らみたいにパワーアップしている可能性もある！気を抜かな！」

レックスとキールとゼルの前にナツクルコングMk-IIとステゴゼーゲMk-IIが立ちはだかった。レックスを見たアッカーマン中将は、

「ガトリングフォックス！いきなり、大将と会うとは、」

そのとき、ナツクルコングのkokピットにコナー少佐からの通信が入り、

「中将！ガトリングフォックスは私に任せてもらえないでしょうか？」

それに対し、アッカーマン中将は、

「ふ、面白い！では、コナー少佐はガトリングフォックスを、私はフアングタイガーとスパイデスを相手にする！」

レックスの前に出たステゴゼーゲ Mk-II、コナー少佐は、通信で、

「グラッド・バレル！私が相手だ！」

それを聞いたグラッドは、

「どうやら、かなりやる気のような！ステゴゼーゲは俺が引き受ける！ケンとジョンはナツクルコングを！」

それを聞いた二人は、

「了解！」

コナー少佐はグラッドに、

「グラッド・バレル！元帝国軍でありながら、反乱軍に加担した罪は重い！その罪を償ってもらおうぞ！」

「おいおい、勘違いするなよ！俺は帝国の理不尽なやり方に苦しめられているゾイドと人々を守るために同盟軍に入ったんだぜ！」

「言い訳無用！」

「やれやれ、やるしかないようだな！いくぞ、レックス！狙い撃て、レックス！俺の魂と共に、進化 解放！エヴォブラストー！！ファントムガトリングガン！」

ファントムガトリングガンを撃ち込むレックス、しかし、ステゴゼーゲはびくともしなかつた。

「なに！」

それを見て驚くグラッド、

「私のステゴゼーゲはそんな攻撃では倒れない！」

対空速射砲を撃つステゴゼーゲ、それを避けるレックス、

「あのステゴゼーゲ、装甲の強度を上げたのか！」

「上がったのは装甲だけではない！それを見せてやる！制御トリガー解除、ステゴゼーゲ！兵器 解放！マシンブラストー！！ナイフオブバルカン！」

マシンブラストしたステゴゼーゲの背緒にソーザーバルカンが装備されており、元のナイフオブファイフティーンの状態で背緒に装備されているバルカン砲を撃った。レックスは何とか避けるが、ステゴゼーゲに近づくことができない状態になっていた。それを見たグラッドは、

「まさか、ステゴゼーゲの背緒にソーザーバルカンを装備しているとは驚いたぜ！」

「この日のためにステゴゼーゲを強化したのだ！」

「どうやら、かなり厄介な相手になりそうだ！」

一方、ナックルコングMk-IIと対峙するゼルとキール、

「切り裂け、ゼル！私の魂と共に、本能 解放！ワイルドブラストー！！虎振！」

「突き刺せ、キール！俺の魂と共に、本能 解放！ワイルドブラストー！！」

ワイルドブラストしてナツクルコングに攻撃するゼルとキール、しかし、ナツクルコングには全く通用せず、ナツクルコングは二体をはねのけた。

「く、こいつ前より強い！」

「私のナツクルコングも皇帝陛下の特別な許可により、さらに強化したのだ！その力を見せてやる！制御トリガー解除、ナツクルコング！兵器 解放！マシンプラストー！！」

マシンプラストしたナツクルコングの胸から大砲が現れ、さらに両腕に装備されているガトリングも撃ち込んだ。ゼルとキールはその攻撃を避けるが、さらに背中のみサイルも撃ち込み、ゼルとキールはその攻撃に翻弄される。

一方、空中ではジャックとクーデリアがクワガと量産型スナイプテラを撃墜していく。しかし、そのとき、カーター大佐のスナイプテラが攻撃してきた。カーター大佐のスナイプテラを見たクリスは、

「ジェニファー！あのスナイプテラは俺が引き付ける！お前は残りの連中を！」

クリスの指示で他のクワガ、スナイプテラの方に向かうクーデリア、ジャックを見たカーター大佐は、

「あれはソニックバード！ということとは君はクリス・マコーミックか！」

「まさか、カーター大佐のスナイプテラと対峙するとは！だが、私のジャックはそう簡

単には敗れない！いくぞ、ジャック！飛び立て、ジャック！俺の魂と共に、進化 解放  
！エヴォブラストー！！スカイストラッシュユ！」

スカイストラッシュユでスナイプテラに向けて突進する。しかし、スナイプテラはそれを避け、ガトリングを撃ち込む。それを避けるジャック、

「流石はカーター大佐のスナイプテラ！やはり、一筋縄ではいかないか！」

「いくら、ソニックバードと言えど、私のスナイプテラに勝てるとは大間違いだ！制御トリガー解除、スナイプテラ、兵器 解放！ マシンブラストー！！アブソルトショットー！」

スナイプテラのアブソルトショットを避け、再び、スカイストラッシュユで攻撃するジャック、スナイプテラはその攻撃を避け、ガトリングとアブソルトショットを撃ち込む。ジャックの片翼にスナイプテラの攻撃がかすった。

両者、ほぼ互角に見えたそのとき、シーザーが現れ、

「クリスさん、スナイプテラは俺に任せてくれないか！」

「待て、ウィル！お前の敵う相手じゃない！あいつは俺に任せろ！」

「あのスナイプテラはジャックでも勝てない！それにあいつに勝たないといけないんだ！」

それを聞いたカーター大佐は、

「私は構わないぞ！さあ、二人でかかってこい！そして、少年！君と真の決着を付けるぞ！」

それを聞いたクリスは、

「どうやら、ジャックだけで勝つのは難しいか、よし、わかった！だが、ウイル！俺の指示に従え！」

「わかった！」

「アブソルートショット！」

アブソルートショットをシーザーに向けて撃ち込むスナイプテラ。すかさず、ジャックがスナイプテラに攻撃するが、スナイプテラはそれを避ける。それでも再びスナイプテラに攻撃するジャック、それを避けるスナイプテラ、そして再び攻撃するジャック、それを見たカーター大佐は、

「どうした？同じ攻撃では私を倒せんぞ！」

「へ、攻撃するのは俺じゃないんだぞ！」

ジャックはスナイプテラに近づいたそのとき、

「今だ、ウイル！」

シーザーはジャンプしてジャックの上に乗り、

「切り拓け、シーザー！俺の魂と共に、進化 解放！エヴォブラストー!!」

そして、スナイプテラに向けてジャンプするシーザー。それを見たカーター大佐は、「なるほど、そういうことか！ならば、アブソルトシ…、」

そのとき、スナイプテラの後ろに何かが張り付いた。クーデリアだった。

「なに！」

「残念だったね！あたしもいるんだよ！」

クーデリアに捕まれたスナイプテラは動くことができず、アブソルトショットの狙いが定まらず、

「ビーストオブクローブレイク！」

シーザーのビーストオブクローブがスナイプテラに直撃した。スナイプテラはその攻撃で片翼が斬られた。

「く、まさか、私のスナイプテラが！」

そのとき、コクピットから通信が入り、

「カーター大佐！反乱軍の別動隊が来るようです！ここは一旦徹底を！」

通信を聞いたカーター大佐は、

「ふ、どうやら、今回はここまでのようだな！まさか、あの連携で私のスナイプテラを敗るとは見事だよ！少年！また会おう！」

そしてそのまま退散するスナイプテラ、カーター大佐は通信を開き、アツカーマン中

将に、

「中将！反乱軍の別動隊が来るようです！ここは一旦徹底を！」

レックスとキール、ゼルは苦戦しながらもステゴゼーゲとナツクルコングと善戦していた。通信を聞いたアツカーマン中将は、

「ふ、確かにこれ以上、戦闘を続けたら、こちらが不利だな！コナー少佐！ここは徹底するぞ！」

「了解しました！」

ナツクルコングやステゴゼーゲもスナイプテラについて徹底する。それを見て心安まるグラッド、到着した同盟軍の別動隊にはゴールドがいた。クルーガーはゴールドから降り、

「苦戦していたと聞いてて、駆けつけたが、どうやら難を逃れたようだな！」

「まあ、あんたが来てくれなかったら、こっちもどうなってたかわからなかったぜ！」

そこにシーザーとジャック、クーデリアも駆けつけ、ウィルはシーザーから降り、

「クルーガーさん、俺、ついにスナイプテラに勝ったよ！」

それを聞いたグラッドは驚き、

「なに？スナイプテラを！」

「そうなんだ！見せてやりたかったぜ！」



その横にクリスが、

「まあ、俺のおかげだがな！」

それを聞いたグラッドは、

「なんだ！一人でじゃねえのかよ！」

「うるさいな！」

そこにエマも駆け寄り、

「ウィル！大丈夫！」

「大丈夫だよ！エマ！」

そこにシーザーが何かうなずく。それを見たウィルは、

「ああ、そうだな！シーザー！あのスナイペラとはまた会えそうな気がするぜ！」

場所は変わり、別のレジスタンスの基地、基地は完全に壊滅していた。そこにギルラプターエンペラーがいた。

「ふん、ここの連中は大したことなかったな！」

「うわああん！パパ、ママ！」

そこに崩れた基地の中で泣いている幼い少年少女がいた。それを見たアーネストは、

「生き残りがいたか！だが、気にすることはないだろう！」

そのとき、塀が崩れ、年少少女に向けて倒れていく。それを見たアーネストは、

「まずい！ギルラプター！」

アーネストの指示でギルラプターは塀を壊した。ギルラプターから降りたアーネストは二人に、

「おい、貴様ら、さっさと立ち去れ！」

アーネストを見た二人は、

「お兄ちゃん、もしかしてレイルお兄ちゃん！」

「違うよ！レイル皇子様だよ！」

それを聞いたアーネストは、

「なに！何故、その名を？」

「だって、エマお姉ちゃんが言ってたよ！レイル皇子様は優しい皇子様だって！」

「凄い、ホントに素敵な皇子様だ！」

それを聞いたアーネストはイライラし、

「僕はそんなじゃない！」

そう言い、ギルラプターに乗ってその場を立ち去った。

「くそ、余計なことを言いふらしやがって！」

ギルラプターは何か言いたいようにならずく。

「わかっている！俺たちは強さを求めるだけだ！」

そのとき、コクピットから通信が入り、

「殿下！例のビーストライガーが大佐のスナイプテラを倒したとの報告がありました  
！」

それを聞いたアーネストは、

「そうか！フフフ、どうやら少しは楽しめそうだ！」

そう言い、ギルラプターはそのまま走っていった。

To be continued

## 第14話「皇子と少女」

南方の総督府、そこにギルラプターエンペラーが修理を受けていた。修理しているギルラプターを見ているアーネストに帝国の技術者が現れ、

「いかがでしょう？ 殿下。この修理でギルラプターはさらに強力になります！ なんと、バイザーとチップの取り付けも……」

それを聞いて睨み付けるアーネスト、技術者は慌てて、

「し、失礼します！」

アーネストは修理しているギルラプターを見て、

「ゾイドは武器、力の象徴！ 力が無ければ何もできない！ 邪魔する奴は潰せばいい！ 僕はそうやって生きてきたんだ。」

アーネストは過去のことを思い出していた。アーネストはネオデスメタル帝国皇帝

ギヤラガー三世の第一皇子として生まれ、アーネストという名はギヤラガー三世から与えられた。

アーネストは帝国の王位継承者として皇帝としての教育と剣術、射撃、機械兵との格闘戦等ありとあらゆる過酷な戦闘訓練を受けた。12歳のとき、ラプツールに乗り、百体のラプツールを相手にする訓練を受けた。

ラプツール軍団はアーネストが乗るラプツールに襲いかかるが、アーネストのラプツールはラプツール軍団の攻撃を一体一体確実に避け、他のラプツールではあり得ない跳躍力と俊敏な動きでラプツール軍団を次々と蹴散らしていった。

時間は僅か5分足らずでラプツール軍団は全滅した。ラプツールから降りたアーネストの元にギヤラガー三世が現れた。

「よくやった！さすが我が息子。」

「ありがとうございます！ 父上。」

「もう、お前にはラプツールはいらないだろう！そこで私から新しいゾイドをお前にやろうと思う。」

その時、ギヤラガー三世の後ろからギルラプターエンペラーが現れた。

「お前と私の偉大なる先祖である一世が乗っていたギルラプターだ。」

「あのゾイドを僕に…ですか？」

「そうだ、お前なら従えるだろう？」

アーネストはギルラプターエンペラーに近づくと、それを見て警戒して後退りするギルラプター、アーネストはその場で止まり、そつと手を出した。アーネストはギルラプターをじつと見つめる。それを見た警戒しながらもギルラプターは少しづつ近づき、自分の頭をアーネストの手に当てた。アーネストはそのままギルラプターの頭を撫でた。それを見たギャラガー三世は少し不敵な笑みを浮かべた。

数ヶ月後、アーネストはギルラプターエンペラーで50体のキャノンブル相手にする訓練を受けた。キャノンブルは一斉にマシンブラストし、ナインバーストキャノンやギルラプターに向けて撃ち込む。ギルラプターは俊敏な動きでナインバーストキャノンやギルラプターを避け、キャノンブルのキャノン砲を破壊していった。時間はおよそ3分だった。その様子を見アッカーマン大佐とカーター中尉が見ていた。

「まさか、ラプトル一体で百体のラプトルを全滅させるとは……」

「かつて、一世もラプトルでガブリゲーターを倒したこともあるが、殿下は今や、一世をも凌ぐ可能性を持つかもしれない！」

そんなとき、二人の元にある男が現れた。

「いかがですか？ 大佐。」

「パウルス・メルビル大尉。君のおかげで殿下がご立派になりました。」

「ただ、殿下は人との付き合いを好まず、いつも一人でいることが多く、誰か側にいてあげる人がいればいいのですが！」

「君の妹がいるじゃないか。」

「確かにそうなんです、妹は生徒たちの世話もあつて中々殿下の面倒まで見れないんですよ。」

「それなら、カーター中尉。君の娘はどうか？」

「お言葉ですが、大佐。カティアは士官学校に入ってますので、さすがに殿下の世話までは……、あ、確かカティアの友人に適任者がいます。」

「誰だね、その子は？」

「エマ・コンラッドです。優秀なゾイド学者の娘で、ゾイドの世話や改造、メンテナン스에長けている少女です。」

「なるほど、確かに適任だな。よし、私がデーニッツ准将に頼んでお願いしよう。」

訓練の後、ギルラプターのメンテナンズをしているアーネストにカーター中尉が一人の少女を連れてきた。

「失礼します。殿下。実はこの度、殿下にお仕えする人物を紹介します。」

「初めまして、殿下！エマ・コンラッドです！ よろしくお願いします。」

エマはアーネストに頭を下げる。

「ふん、」

しかし、アーネストはそっぽを向いて行った。エマは少し落ち込んだように、

「あの、私、嫌われたのでしょうか？」

カーター中尉はエマを励ますように、

「いえ、照れてるだけです！ 殿下はあまり、女の子と接触することはなかったですから！ 殿下のことしつかりよろしくお願いする。」

「はい、わかりました。」

数日後、ゾイド狩りと訓練を終えたアーネストは左腕を少し怪我していて、それを見たエマはアーネストの左腕を治療しようとする。アーネストは払いのけるように、

「僕に気安く触るな！ こんな傷どうってことない。」

「駄目よ、血が出てるじゃない。」

「何故、そこまでする？」

「だって、私は殿下の世話役なのよ！ 私が面倒見なきゃ。」

アーネストは不思議そうにエマを見た。またクローンクワガ数体相手にした訓練の後、エマはクワガの元に行き、クワガの修理をしようとした。それを見たアーネ



ストは、

「そいつらは訓練用のクローンだ！修理する必要はないぞ。」

「クローンでもこの子たちはゾイドよ。治してあげなきゃ。あ、それと殿下のギルラプターも治してあげなきゃね。」

ギルラプターに近づくエマ、そこにアーネストが、

「待て、そいつは僕にしか従わないから近づくな！この前もこいつのメンテナンスを行おうとした兵士が襲われて怪我したからな。」

しかし、ギルラプターは警戒しながらも近づくエマになつた。エマは優しくギルラプターの頭を撫でた。

「フフ、いい子ね。それにすつごく殿下のこと信頼してるわ。」

「僕に？」

「そうよ。でも、この子、過去に同じギルラプターを傷つけたこともあつて深い心の傷を負っているわ！かわいそうに。」

ギルラプターのメンテナンスが終わり、

「もう大丈夫。」

それを聞いて喜ぶギルラプター、そこにアーネストが駆け寄り、

「あ。ありがとう。」

「どういたしまして、殿下。」

「いや、殿下は止めろ。」

「え？　じゃあ、ギヤラガー様。」

「それだと余計堅苦しい。呼び捨てでいいぞ。」

「でも呼び捨てだと殿下のお父様も呼び捨てになっってしまうわ。」

「じゃあ、アーネストでいいだろ。」

「でもアーネストだと呼びづらいし…」

「じゃあ、何がいいんだよ？」

「それじゃあ、レイルって呼んでいいかしら？」

「レイル？　まあ、それなら呼びやすいかな。なんだ？　その名は…」

「実は私の弟の名前なの。」

「弟？」

「私の弟はゾイドが好きで、ゾイド学者になるのが夢だったのだけど、病気がちで試験を受ける前に亡くなってしまったの。」

「何故、弟の名を僕に？」

「あなたがレイルに似ていたから。」

「そうか…。あ、そうそう、今からギルラプターで出撃するが、一緒に行く？」

「うん。」

ギルラプターのコクピットに乗るアーネストとエマ、エマはアーネストの後ろに優しくがみついた。ギルラプターで山の頂上につき、休息している中、エマは、

「私、あなたに会えて良かった。これからもよろしくね。」

アーネストは少し照れて、

「僕もだよ。」

二年後、エマがビーストライガーを復元した。ビーストライガーはエマによくなついていた。

「また会ったね、ライガー。」

アーネストは少し離れたところで見ていた。アーネストを見たエマは、

「レイル、あなたもこっちにおいで。」

ビーストライガーのところに行くアーネスト、アーネストを見たビーストライガーは

かなり警戒していた。エマはライガーに、

「大丈夫よ、ライガー。」

アーネストはそつと手をだし、ライガーは恐る恐る近づき、アーネストの手を触った。エマは

しかし数日後、アーネストがゾイド狩りから帰った後、パウルス・メルビル大尉が帝国の反逆者と見なされ、妹とエマと生徒を脱走させた報告があった。事態を知ったアーネストはデーニッツ中将に、

「どうして? どうして、エマは逃げたりしたんだ。なんで僕をおいて行ったんだ?」  
デーニッツ中将は、

「奴は帝国を裏切った、殿下を騙していたのですよ。」  
それを聞いて青ざめるアーネスト、

「そんな……、エマが…嘘だ、嘘だ、嘘だー!!」

過去を思い出したアーネストは10歳のアーネストとギヤラガー三世が一緒に写った写真を見ていた。そして数ヶ月前のことを思い出していた。宮殿の研究施設でラプトルとクワワーガを喰うデスレックスを見てアーネストは驚愕していた。ギヤラガー

三世はアーネストの肩を触り、

「これが世界の頂点に君臨していたデスレックスだよ！これを操る者は世界の支配者になるのだ！いずれお前はこいつに乗ることになる。そしてお前は一世の血を引くもの、こいつを操ることは出来る。皇帝の器を持って。」

あの小娘のことは忘れろ、必要のない者と裏切り者は殺せ！それが我が帝国のやり方だ。」

「はい、父上。」

写真を見ているアーネストは、

「そうだ、僕は一世の血を引き、生まれながれにして皇帝になるべき男！もう甘さは持たない。」

そこに技術者が現れ、

「殿下、ギルラプターの修復完了しました。」

それを聞いたアーネストはギルラプターの元に行き、

「大丈夫か？俺たちは世界の支配者になるべき者。お前も甘さを捨てろ。」

ギルラプターはゆっくりうなずき、アーネストはギルラプターのコクピットに乗ってそのまま総督府を出た。

東方の総督府、東方のレジスタンスの鎮圧からカティアの乗るラプトルが帰還した。ラプトルのkokopittoから降りたカティアはある兵士の会話を聞いた。

「なあ、聞いたか。オルドー少尉がまたやったらしいぜ。」

「ああ、知っているぜ。クワールガで反乱軍のクワガノスを数体倒してその功績で中尉に昇進したらしいぜ。」

それを聞いたカティアはオルドーの元に行った。オルドーの元に行ったカティアは、  
「ナツシュ、昇進おめでとう！」

クワールガのkokopittoから降りたナツシュが振り向いた彼の右半分の顔と肩半分と右腕の皮膚が破れて機械の身体剥き出しになっていた。ナツシュの右半分の顔の目が赤く光り、カティアは震えるような表情をしていた。

「やあ、ギレル少尉か。まさか、君から祝福されるとは思わなかったよ。」

「ナツシュ、その身体は……」

「ああ、ちよつとね。でもボディ自体は全く問題ないよ！全くこの身体は素晴らしいよ。」

「ねえ……、ナツシュ。あの反乱組織にはあなたの家族もいたって話が……」

「ああ、殺してやったよ。」

「え!? どうして?」

「決まっている！帝国と皇帝陛下に逆らった報いだ。帝国と皇帝陛下に従わない者は例え、家族でも容赦しない！それが帝国のやり方だ。それになんの間違ひがある？」

ギロツとカティアを睨み付けるナツシユ、カティアは恐ろしそうな表情でナツシユを見た。

「さて、身体こんな状態だから、修理しとかなきゃな！おい、ドクター、修理を頼む。ナツシユに呼ばれた技術者は、

「これまた皮膚を酷くやられたな。オルドー中尉、どうせなら、ボディの強化をしたらどうだ。特殊合金に変えれば、ランチャーやバズーカといった対人用兵器でも耐えられるようになるぞ。」

「そいつはいい、ドクター頼む。」

ナツシユと技術者のやり取りを見たカティアは、

「エマ…、私はどうしたらいいの？」

To be continued

## 第15話「ロボットの都市」

東方、南方のレジスタンスを味方につけることに失敗した同盟軍は西方のレジスタンスを味方につけるためにウイル、エマ、グラッド、クリス、ジョン、リセルが西方のレジスタンスの本拠地に向かった。

しかし、間もなくグレッツゲル准将率いるキャノンブル部隊に追われていた。キャノンブル隊はシーザーたちにナインバーストキャノンを放った。執拗に追いかけるキャノンブル隊を見たグラッドは、

「ち、このままだと、レックスたちのスタミナが切れてしまう！クリス、ジョン！あいつらを少し足止めしといてくれ！俺たちは隠れる場所を捜し、見つけたら、通信で知らせる！そのときが来たら、直ちに離脱してそこに向かってくれ！」

「了解！ジョン！人働きするか。」

「ああ、ちよいと面倒だが、やるしかない。」

ジャックとキールはキャノンブル隊の前に立ちはだかり、ジャックは翼でキャノンブルの9連キャノン砲を一刀両断し、キールは糸でキャノンブルの動きを止めた。隠れる場所を捜すグラッドたち、そのとき、レックスが何か感じ取ったかのように咆哮を上げ



る。

「レックスが何か見つけたようだ。後に続け！」

レックスが向かったのは岩山の影に隠れた洞穴だった。洞穴を見たグラッドは、

「よし、あそこに隠れるぞ！クリス、ジョン！隠れる場所を見つけた！直ちに離脱しろ！」

通信を聞いたクリスは、

「よし、ジョン。俺たちは離れるぞ！」

「了解！」

引き上げるジャックとキールを見たグレッゲル准将は、

「くそ、直ぐに後を追え！」

グレッゲル准将の命令で後を追うキャノンブル隊、

「あのスレイマーズとか言うウジ虫を搜索していたら、まさか、あの小僧どもに会うとは思わなかったぜ！ここはデーニッツ中将の領域だが、あのエマとか言う小娘の奪還が最重要命令だから、早く奪えば、いいし！それに奪還が成功すれば、俺も出世出来るからな！」

洞穴にジャック、キールも到着し、

「どうだ？クリス、外の様子は？」

「ラプトルとキャノンブル隊が搜索している！暫くはここにいたほうが安全です！」

「そうか、まさか、こんなときに連中に追われるとはな！仕方ない。連中が引き上げるまでここで待機だ！」

全員、コクピットから降りたそのとき、

「手を挙げろ！」

全員が振り向いたその先には数十体のアンドロイドに似た形状をしたロボットたちが銃を突きつけた。それを見て震えるエマ、

「エマ！お前は俺の後ろにいろ！」

リセルも銃を出そうとするが、グラッドは待てと言うかのように手を出す。

「クリス、お前はどう思う？こいつら！」

「一見、機械兵のようですが、形状が明らかに違います！そもそも帝国の機械兵は普通の人間と見間違える程の形状をしているはずですよ！」

そのとき、ロボットたちが口を開き、

「こら、その者！何をブツブツ言っている！きつさと投降しろ！」

「それに機械兵はあんな流暢に喋りません！」

「お前もそう思うか！」

「どうします！コマンダー？」

「敵の正体が分からない状況、ここは逆らわないほうが良さそうだ！ わかった！投降する！お前たちも手を挙げる！」

グラッドの言葉を聞いたロボット兵は、

「よし、大人しくしている！ゾイドたちは我々の手で保護する！」

その言葉を聞いたグラッドは、

「保護だと？ということはいつら、明らかに帝国軍ではなさそうだ！」

グラッドたちは洞穴の奥のほうに連れていかれ、そこに隠されているエレベーターの中に入っていた。エレベーターはどんだん下のほうに行き、開けた場所に入り、突然、エレベーターが前に動き、透明状の通路に出た。通路の外には高度な技術を持った近未来のような都市で、そこには驚くべき光景があった

そこには、人間サイズや4、5 m程の大きさを持つ者、様々な形状をしたロボットたちが住民となってゾイドと一緒に町を歩いたり、子犬サイズのラプトルやガノントス、トリケラドゴスにリールを付けて散歩をするもの、ゾイドでレースをしているもの、ゾイドと公園で遊んでいるものまでいた。それを見たグラッドは、

「驚いたな！まさか、モグラの巣にこんな大都市があるとは！しかし、一体誰がこんな都市を？そして人間が一人もいないとはどういうことだ？」

ウイルとエマはその光景を嬉しそうに見ていた。エレベーターが止まり、ウイルたちはロボットの誘導にしばらく歩いた後、ウイルたちはロボット兵に牢にいれられ、

「お前たちの処分は議会とお前たちから解放したゾイドたちの進言で決定する！それまで待っている！」

それを聞いたウイルは、

「何だよ！それ！シーザーは俺の相棒だ！返せ！」

ロボット兵は無視して牢の扉をロックして立ち去っていった。

「くそ、何なんだよ！あいつら！」

エマはウイルの肩を優しく触り、

「ウイル、ムキにならないの！」

牢を周りを見てグラッドは、

「それにしても、ここは一体なんだ？一体誰がこんな都市を造ったんだ？」

「やあ、君たちもここに来ちゃったか！」

突然、男の声がし、ウイルたちが振り向いた先には、金髪の青年がいた。

「お前は誰だ？」

「僕はマイク、マイケル・ラモン！」

「お前もここに連れてこられた被害者か？」

「そうなんだ！相棒のトリケラと共に世界を回るゾイドハンターで、ゾイドの発掘作業をしていたら、いきなり、あの変なロボットに襲われてここに連れてこられて、しかも相棒のトリケラも奪われ、牢に入れられて、今、ここにいてわけ！」

「なるほど、ということとは連中は人間を嫌っている者ということか！」

地底都市の議会、そこには首相や将軍、その他の議員が集まっていた。

中央には議長にして首相らしきロボットとその横には将軍らしきロボットがいた。議長は将軍に、

「さて、かつて、1200年以上前に地球を救ったあのビーストライガーを連れた人間たちのことだが、話によると、あのライガーたちは人間たちを解放してくれと言っているようだな！」

「これはあり得ないことです！まさか、ゾイドを苦しめている人間にゾイドが寄り添

う等、未だかつてなかったことでした！大抵のゾイドは機械のように人間に従わされて  
いるのに、こんなことは！」

「とにかく、そのものたちを連れていけ！」

ウイルたちが入っている牢獄に銃を持ったロボットが現れ、

「出る！将軍がお呼びだ！」

裁判所に連れていかれ、将軍はウイルたちに、

「どういう理由があるか、知らんが、直ちにあのライガーたちを解放しろ！そして、お  
前たちはここで処刑されるか、都市から出るか、選べ！」

ウイルは将軍に向かって、

「何言ってるんだ！シーザーは俺の相棒だ！シーザーはきつとそんなことは望んでい  
ない！」

「人間の言うことは信用出来ない！いくら、あのライガーと一緒にいたいと言っても、  
ゾイドは本来人間と一緒にいるべきではない！」

「違う！そうじゃない！確かにあんたたちの言う通り、人間は争いを起こしたり、ゾイ  
ドを道具扱いしている奴かもしれない！だからといって、全ての人間が悪くてわけじや  
ない！中には、過ちを正そうとしている人もいる！ゾイドと人間はこの星に生きる仲間  
なんだよ！」

「仲間……！」

將軍はその言葉を聞いて少し迷った。そのとき、突然、爆発が起こり、非常警報が鳴った。

「緊急事態！緊急事態！人間の軍隊が総攻撃を掛けてきた！付近の住民とゾイドは速やかに避難してください！」

ウイルたちが都市を見たとき、都市のあちこちが破壊されていた。そこに帝国軍の大部隊が攻撃していた。

街にはグレッツゲル准将のステイレイザーを筆頭にキャノンブル、ラプツール、デイロフオス、ナツクルコング、そして、機械兵とオートブレイク、DMPスーツを装着した兵士が街を破壊し、住民やゾイドたちを容赦なく破壊していった。將軍はウイルたちに、

「見よ！これがお前たち、人間の本性だ！奴らは自分の欲望のために、違う種族はおろか、同じ種族でも平気で殺す血も涙もない化け物だ！だから、我々は人間の味方はしない！そして、人間は信用出来ない！」

將軍はトリケラドゴスに乗り、グレッツゲル准将のステイレイザーの元に向かった。

「あの小娘を連れた連中がここに来た情報が入ったが、まさか、我が帝国も知らない技術を持った連中がいるとは思わなかった！こいつは制圧する必要があるな！街は片つ

端に破壊しろ！」

そのとき、將軍のトリケラドゴスが現れた。

「なんだ？あのトリケラは！」

「人間！覚悟しろ！トリケラドゴス！本能解放、ワイルドブラストー!!」

「は、どうやら、少しは楽しめそうだ！制御トリガー解除！ステイレイザー、兵器解放！マシンプラストー!!」

「フォースインプクトー！」

「プラズマウォール！」

互いにつつかり合うトリケラドゴスとステイレイザー、トリケラドゴスが押しているが、徐々にステイレイザーの方が押すようになった。

「ハハハ、トリケラごとき、このステイレイザーの敵じゃないわ！」

そのとき、

「止めろー！」

ウィルの叫びと共に、シーザーが現れ、ステイレイザーに突進する。

「何のつもりだ！人間！我々は人間の手は借りん！」

それに対し、ウィルは、

「確かにあんたたちの言うとおり、人間は信用出来ないかもしれない！でも、全ての人



間が悪いわけじゃない！俺たちのようにゾイドを大切に思っている人もいる！

それに俺はゾイドが大好きなんだ！ゾイドも人間も、そしてお前たちもこの星に生きる仲間だ！」

「仲間……！」

「ふぎけおつて、だが、これで終わりだ！」

そのとき、マツクの乗る黒いトリケラドゴスが現れ、ステイレイザーに突進する。

「今だ！ウイル！」

「ようし、行くぞ！シーザー！切り拓け、シーザー！俺の魂と共に、進化 解放！エ  
ヴオブラストー!!」

「ビーストオブクロウブレイク！」

「フォースインパクト！」

シーザーとトリケラの同時攻撃で大ダメージを負うステイレイザー、  
「ぐわあ！くそ、まだだ！」

そのとき、ステイレイザーのコクピットから通信が入り、

「准将！ガトリングフォックスを初め、住民の抵抗で我が軍が抑えられています！」  
そのとき、ドリルを持った謎の巨大母艦が現れ、それを見た將軍は、

「住民とゾイドの避難は完了したな！直ちに離脱する！」

トリケラドゴスは後退していき、シーザーとマックのトリケラも付いていった。

「くそ、まともや、逃がしたか！だが、その代わり、我が帝国が知らなかった存在の技術は手に入った！反乱軍め、いずれ思いしことになるだろう！」

母艦に入ったウイルたちは、

「すげえ、まさか、こんな船があつたとは！」

將軍はウイルたちに、

「当然だ！我々には創造主ともいえるコアがあるからな！」

「コア？」

突然、巨大なドアが開き、巨大なキューブが現れた。それを見たエマは、

「これは、リジエネレーションキューブ！」

エマの言葉にウイルは、

「知っているのか？ エマ！」

「ええ、私のご先祖がゾイドクライシスで滅んだ地球を再生させるために作った装置

よー！」

それを聞いたグラッドは、

「ゾイドクライシス、その名は聞いたことがあるぜ！」

「グラッドも知っているの？」

「ああ、ゾイドが初めて地球に来た日にして地球が一度滅んだ日だ！」

最もそれは伝説に過ぎず、200年前の考古学者たちも、そんなものはただの伝説、旧帝国と旧共和国との戦争の結果によって起こったことだとか、ただの異常気象だとか、または核実験の失敗で起こったことだとか言われていたが、まさか、本当だったとは！」

それに対し、將軍は、

「ゾイドクライシスの後、このリジエネレーションキューブは偶然にかつての地球の遺産であるAIと一体化し、我らの先祖を作りだし、命を与え、1000年以上の月日を経てここまで進化していった！」

そして、我々はキューブを通して、地球、惑星Ziの歴史を知り、人間は同じ種族同士でも争う愚かな生物だと知り、我々は人間に苦しめられているゾイドを助け、地上と隔離して生活していった。

先程、襲撃してきたあの帝国もゾイドクライシスの後、帝国と共和国が領土覇権という下らないことで争いを起こし、挙げ句、真帝国等という国家に分裂し、互いに潰し合いをした結果、その全てをかつさらったあの帝国が生まれ、のしあがったのだ！」

だから、私は人間を信用しなかった！だが、お前のような人間に会うことができ、ゾイドと人間は対立すべきものではないと知った！私は大事なことを君に教えられた！  
ありがとう！」

「いや、俺はただ、ゾイドと人間が共存できる世界を目指したかっただけで！」

「將軍、俺たち同盟軍に入ってくれないか！」

「それは出来ない！お前たちは信用できるが、まだ全ての人間を信用したわけではない！だから、我々は共に行動することはできない！」

そして、これだけは覚えておけ！例え、お前たちがあの帝国を倒したとしても、世界は変わるとは限らない！

「いずれ、人類は再び争いを起こし、同じ過ちを繰り返す！」

「わかってる！」

「それともう一つ、今回の戦いから計算するに、お前たちの帝国に対する反乱の成功する確率は僅か2・3%と出た！勝てる戦争ではないということも肝に銘じておけ！さて、君たちとはここでお別れだ！」

ウィルたちは母艦から出、静かに見送った。グラッドはマックに、

「さて、お前は どうする！僕は このまま、旅を続けるよ！それに俺は戦争に出れる人間じゃないからね。」

と言い、マックと黒いトリケラも去っていった。グラッドはウィルに、

「お前は対した奴だ！あんな連中を説得するとは！俺たちができなかったことをお前は成し遂げた！対した奴だよ！」

「俺は自分の思うことをしただけだよ。」

それを聞いたグラッドは少しクスツと笑った。

「さあ、本来の任務に戻る！ 目指すは西方！ あそこのレジスタンスを味方につけ、帝国に対抗できる戦力をつける！ 後に続け！」

シーザーのкокピットでウイルに抱きつくエマはグラッドたちが向かう方向を見て、  
「あそこって確か、メルビルさんが脱走したときに向かった場所……」

西方レジスタンスの基地、そこに孤児となった子供たちと遊ぶ女性がいた。女性は長い黒髪にふつくらとした顔立ちをし、中々のスタイルをした美しい女性だった。子供たちはメルビルに、

「ねーねー！メルビルお姉さん、もつと遊んで！」

「私も。」

「僕も。」

「待って、順番にね。」

メルビルは地平線の彼方の方を見て、

「レイル、エマ、カティア…あなたたちは今、どうしているの？」  
そのときのメルビルの表情はどこか悲しそうだった。

T o b e c o n t i n u e d

## 第16話 「デイメ・パルサーと少女」

西方レジスタンスの基地に到着したウィルたち、入口では、レジスタンスの兵士たちが歓迎しており、ウィルたちは基地内部に入り、司令部で、レジスタンスの指導者に会った。レジスタンスの指導者は、

「ようこそ！会談に応じてくれて感謝します。私がこのレジスタンスの指導者のクライブ・デルタだ！」

「反ネオデスメタル同盟軍総司令のグラッド・バレルだ！」

「あなた方のご活躍は聞いております！我々は反帝国としてあなた方同盟軍に加わらせていただきます！」

「ありがとう！我々は君たち、レジスタンスの参加を歓迎する。」

「ん？あなたの横にいるのはリセルですか？」

「そうだが、知り合いなのか？」

「ええ、彼は過去に我々レジスタンスで活動していましたから！無事で何よりだよ！」  
それに対し、リセルは、

「グラッドとデルのおかげです！」

「さて、我々は帝国を食い止めるために……」

そのとき、子供たちが入り、

「ねえねえ、何してるの?」

「こら、勝手に入っちゃ駄目じゃないか!」

「だってえ!」

「その子たちは?」

「帝国の侵略により、家と家族を失い、孤児となった子たちです! 帝国は正義と秩序という名の暴力で世界を支配しようとし、その影響がこの形で表れています!」

「まさかとは思いますが、レジスタンスの構成員として育ててはいないだろうな?」

「それは大丈夫です! 我々はあくまで身寄りのない子供たちを保護しているだけです! 最も資金の影響で、全ての子供たちを受け入れることはできないのですが。」

そこにスラリとしたロングの黒髪をした美しい女性が現れた。

「みんな、クライブさんのお仕事を邪魔しないの!」

「だって、メルビルお姉さん!」

その言葉を聞いたエマは、

「え! あなた、もしかして、メルビルさん!?!」

「エマ! 無事だったのね!」



それを聞いたウイルは、

「え、エマ！知り合いなの？」

「ええ、帝国で私を教育してくれた先生なの！」

そのとき、一人の子供がエマに駆け寄り、

「お姉ちゃん！もしかして、エマお姉ちゃん？」

「ええ、そうよ！」

「僕、知っているよ！エマお姉ちゃんは皆やゾイドのために働いている優しいお姉ちゃんだって！」

「私も知っている！」

「僕も！」

「ねえ、エマお姉ちゃん、一緒に遊ぼう！」

「え、でも……」

そこにグラッドが、

「いいじゃねえか！エマ、一緒に遊んでやれ！子供たちも一緒にいたがつてるし！」

「わかりました！」

「行こう、エマお姉ちゃん！」

子供たちと一緒に行ったエマとメルビルを見てグラッドは、

「ずいぶんと有名だな！あの嬢ちゃん！」

その横でメルビルに見とれるリセル、

「どうした？リセル！」

「あ、いえ、何でも！」

「おいおい、まさか、あのレディに惚れたんじゃないだろうな？」

「ち、違います！ただ、コマンダー、少し一人にしてくれませんか？」

そう言い、司令室から出るリセル、

「たく、あいつも年頃だな！」

「実は彼女も帝国の被害者なんです！彼女の兄は元帝国軍大尉でしたが、ある計画を知って反逆罪に問われ、処刑され、彼女が育てた生徒や子供たちと共に脱走したんです！」

「そうか、ところで、ここの戦力はどれぐらいだ？」

「ラプツールにクワールガ、キャンノンプル、バズートル等です！」

「全て帝国のゾイドなのか？」

「はい、ここはかつて旧帝国の領土で、旧ネオゼネバスシティがあった地方で、旧帝国派のものが多く、ネオデスマタルはそうしたものを徹底的に弾圧して中には大量虐

殺事件まであったそうです！」

「ということは彼らは今のネオデスマタル帝国を認めず、かつての旧帝国の復活を望んでいるということか！」

「はい、実は先ほど会ったユリス・メルビルはかつて旧帝国皇帝の血筋を引く家系の人で、彼らは彼女をネオデスマタル帝国に対抗するための帝国皇帝として立てようとしていて、彼女はそれを強く拒否しているんです！」

「何でだ？」

「実は彼女の先祖も血筋を引いていたことで、旧帝国から分離した真帝国の皇帝に立てられたこともあって彼女は先祖と同じ目に遭うのではないかと思っていて、怖がっているんですよ！それに彼女は戦争を望んでいませんし！それにもし、彼女が皇帝になったら、ネオデスマタルは益々弾圧を強化してくることもありますし！」

「なるほど！」

その横に、ジョンが、

「あんな美人が皇帝だったら、大歓迎だぜ！しかもスタイル抜群だったし！絶対付いてくる国民大多数だぜ！」

「ここでは止めろ！下心丸出しだぞ！」

「俺、そういうところはオープンだからいいの！」

その横にクリスが、

「余計悪いだろ！」

「そろそろ、本題に入ります！我々は帝国を迎え撃つために近隣に陣を構え……」

子供たちの遊び部屋、

「エマお姉ちゃん、もつと遊んで！」

「いいわよ。」

メルビルはエマに、

「ねえ、エマ！どうしてあ有的时候き、レイルも連れて行かなかったの？」

それを聞いたエマは悲しそうに、

「できなかったの！レイルは帝国から離れなかったの、もし連れて行こうとしたら、レイルの自由を奪うんじゃないかって思ったの！でも、私はあの帝国が怖くて結局、レイルを連れて行けず、逃げてしまったの！きつと、レイルはこんな私を許してくれない！」

「優しいのね、エマ！あなたのレイルを想う気持ちは分かるわ！でもいくらあの子が帝国から離れたくないからといって、その通りにするわけにもいかないわ！」

私は先祖が皇族だから、旧帝国派のレジスタンスの一人たちから皇帝になれっただ度も要求されたけど、私は何度も断ったの！私の先祖も皇帝の血筋を引いていたために真帝国の皇帝にされ、苦しめられたことがあるの！

もちろん、先祖と同じ目に遭うのかということもあつたけど、それ以上にもし私が皇帝になつたら、ネオデスメタルはもつと弾圧を強めていつて多くの人々を殺してしまうんじゃないかと思つたの！だから、私は皆の命を守るために皇帝になることを断つたの！

もしレイルがああ帝国にいてしまつたら、きつと私の先祖以上に苦しめられるかもしれない！エマ、レイルを救えるのはあなただけよ！」

コンコン、

そのとき、ドアをノックする音がし、リセルが現れた。リセルはユリスに、

「ちよつといいかな？」

「あの人に何か？」

「あのお礼を言いに！」

「お礼って？」

「君は覚えていないかもしれないけど、10年前、俺が旧共和国派のレジスタンスの兵士として帝国と戦い、捕虜になつたところを君と君の兄さんが助けてくれたこと、その

ときのお礼だよ！」

ユリスはそれを聞いて何かを思い出した。

「もしかして、あのときの君？」

「そうだよ！」

そのとき、青いディメパルサーが現れ、ユリスにすり寄ってきた。

「駄目じゃないのレナ！今は大事な人とお話中なの！」

ディメパルサーを見たリセルは、

「そのディメパルサーは？」

「亡くなったお兄さんと一緒にいたゾイドなの！」

「そうか…、お兄さんは亡くなったのか…！」

「今は私の元で引き取っているの！」

そのとき、近くに発信器らしきものを付けた小さいクワガタのようなものが近くを飛び回っていた。場所は変わり、旧ネオゼネバスシティことネオデスマタル総督府、司令室にデーニツツ中將がレジスタンスの基地の映像を見ていた。

「ふ、惑星Ziに生息していた小型の昆虫ゾイドをクローンで複製、改造したスパイゾ

イドは思いの外、成果を上げたようだな！あのとき、ブリューゲル大尉に命じてピーストライガーと戦ったときにこいつを何体かばらまいたかいがあつたな！

しかも、まさか、あの小娘に次ぐ重要指名手配者のユリス・メルビルまで見つかるとは！」

デーニッツ中将は通信を開き、

「タツカー元帥！朗報です！例の小娘に続き、あの女の居場所も掴みました！」

「そうか、やはり、あの女は旧帝国派の連中がかくまっていたか！」

「しかも、連中はあの女を皇帝に仕立て上げようとし、旧帝国を復活する計画を建てているとの報告がありました！」

「なんだと!!この世に皇帝はギヤラガー三世陛下しかない！その陛下を認めず、あの女ごのときを皇帝にするだと!!!!！」

「連中はかつての真帝国のように我らネオデスメタル帝国に対抗するつもりでしょう！」

「直ちに総力を上げて連中を壊滅、誰が真の皇帝か、誰が真の支配者か、思い知らしてやれ！そして、例の小娘を捕らえろ！」

「は、ところで、あの女も生け捕りにして貰えないでしょうか？」

「何故だ！」

「あの女はかつての真帝国皇帝の子孫ですから、利用価値があります。殺すのは勿体ないかと思いまして！」

「ほう、あの女を使って何をしようと言うのだ？」

「それはいずれお話しします！それと、あなたのディメパルサートランスもお借り頂けないでしょうか？」

「構わんが、何をするつもりだ？」

「それはお楽しみです！」

西方レジスタンス基地、ジョンはグラッドに、

「すんなり味方になってくれたのはいいが、こちらも面倒なことを背負っているな！旧帝国派の連中はあのレディを皇帝にして真帝国の復活を宣言するつもりらしいが、そんなことしたら、ネオデスメタルが黙っちゃいけない！」

「皮肉なものだ！過去の旧帝国と真帝国のお家騒動が再び始まるようになるとは！」

「まあ、ネオデスメタルもわからん！何であんな皇帝を神格化するのかね？ 噂では、



あの旧デスメタル帝王の一世の子孫とされているが、あいつはこの前の式典でジェノスピノが披露したときしか姿を見せず、それ以外はめつたに公や人前に顔を出さないそうだ！四天王や親衛隊はおろか、あの御曹司の皇子ですら、たまにしか会ってないそうだし！

「皇帝だからって何でも顔を出すもんじゃない！暗殺の危険だってあるからな！」

「しっかし、そこまでして顔を見せないのはどういうことかね！そーいや、奴は赤い皇帝と呼ばれているが、他のレジスタンスじゃあ、こうも呼ばれているらしい、顔の無い皇帝、とな！」

「顔の無い皇帝……。」

そのとき、基地の警報が鳴り、

「緊急事態！緊急事態！帝国軍が 全軍直ちに攻撃の準備を！」

クライブはエマとユリスのいる部屋に入り、

「子供たちをシエルターへ！それとエマ、ユリス、君たちもそこへ！」

「わかりました！」

「リセル、行くぞ！」

基地から離れたところで双眼鏡で基地を見るデーニッツ中将、基地からバイザー無し  
のラプトル、キャノンブル、バズートルが現れた。

「ほう、どれも旧帝国、真帝国時代の旧型か！」

その横にブリューゲル大尉が、

「全く愚かだ！過去の帝国の栄誉にしがみつikyがって！あんな旧型で我がネオデスマタルの新型に敵うとでも？」

「とにかく、手順通りで行くぞ。全キャノンブル、バズートル隊、マシンブラスト発動！」

「制御トリガー解除、マシンブラストー!!」

一斉にマシンブラストしたキャノンブル、バズートル隊が一斉砲撃した。クライブは、

「全軍、こちらもマシンブラストだ！」

レジスタンスのキャノンブル、バズートル隊もマシンブラストを発動するが、デーニッツ中将率いるキャノンブル、バズートル隊の発動の速さと追い付けず、次々と攻撃を受けてしまう！何とかマシンブラストを発動したものが帝国軍部隊に砲撃するも射程距離が届かない上に、デーニッツ中将のキャノンブル、バズートル隊はどれもレジスタンスより射程距離が長く、破壊力も高いため、苦戦を強いられてしまう。

そこに、ウィルのシーザーとグラッドのレックスたちが現れた。グラッドは、レジスタンスたちに、

「ここは俺たちに任せろ！行くぞ、ウィル！」

「帝国軍め！俺たちが相手だ！」

シーザーを見たデーニッツ中将は待つてましたと言わんばかりに、

「ようやく出てきたな！では、素晴らしいショーを始めるぞ！全デイメパルサー、デイロフォス隊！マシンプラストだ！」

「制御トリガー解除、マシンプラスト！！」

「喰らうがいい！マッドオクテットー！！」

マッドオクテットを喰らって苦しむシーザーたち、

「ウワアアア！何だ、これは？」

「くそ、マッドオクテットを喰らったか！動けるか、レックス？」

グラッドの問いにうなずくレックス、

「よし、皆、今のうちにウィルドプラストだ！」

「そうはさせるか！攪乱せよ！マッドオクテットー！！」

再びデイメパルサー、デイロフォス隊がマッドオクテットを放ち、動くことすらまま無くなってしまふシーザーたち、基地のシエルターでは、

「キャアアアア！何、この変な音は？」

ユリスは子供たちを励ますように、

「ここにいれば大丈夫よ！」

苦しむシーザーたちを見たブリューゲル大尉は、

「相変わらず、えげつない技だぜ！専用耳栓しててもビンビン来るぜ！」

「ブリューゲル大尉、お前はあの小娘と女を連れていけ！」

「了解しました！」

シエルターの方に向かうガブリゲーターMk-II、それを見たウィルは、

「ま、待て！」

「キャノンブル、バズートル隊、一斉砲撃！」

キャノンブル、バズートル隊の砲撃を受けて、身体がボロボロになっていくシーザーたち、シエルター内で、子供たちがエマとユリスに抱きつき、

「お姉ちゃん、私たち大丈夫だよね？」

「ええ、大丈夫よ！」

そのとき、シエルターの扉が破壊され、ガブリゲーターが現れた。

「見つけた！」

それを見て怖がる子供たち、

「コーンなどところに居たのか！探すの結構大変だったぜ！」

ユリスは、

「お願い、子供たちには手を出さないで！」

「別にそんなガキには用はないよ！用があるのはその小娘とお前だよ！もちろん、こつちに来てくれたら、子供たちは助けてやるし、もちろん、あのライガーちゃんも助けてあげるよ！」

手が震えるエマは苦しむシーザーたちを見て、

「わかったわ！大人しく従います！」

「エマ！」

「だって、私が行かないと皆が！」

「ほう、いい子じゃないか！じゃ、大人しくこつちにおいで！」

そのとき、青いデイメパルサーのレナが現れ、ガブリゲーターに突進した。吹っ飛ばされるガブリゲーター、

「何だ？このデイメパルサー！」

ガブリゲーターに向けて咆哮を上げるレナ、

「ガアアア！」

ユリスは、

「レナ！駄目！」

「デイメパルサーの癖に人間様に楯突くとは生意気じゃねえか！制御トリガー解除、

マシンブラストー!!やれ、ガブリゲーター!」

大顎でレナにガブリつくガブリゲーター、

「止めてー!」

「ハツハツへ、人間様に楯突くからこうなるんだ!」

レナの身体を潰す勢いで、噛む力を強めていくガブリゲーター、ガブリゲーターの歯がレナの身体に食い込んでいく。

「ガアアー!!」

苦しむレナ、それを見て泣きそうになるユリス、

「イヤアアー!止めてー!」

「止めて欲しかったら、さっさとこっちに来いよ!出ないと、お前のお兄さんみたいにガブっっちゃうよ!」

「止めろー!」

そのとき、デルが現れ、ガブリゲーターに突進した。

「げ、まだ動ける奴がいたのか!」

「大丈夫か?エマ、ユリス!」

「私たちは大丈夫よ!」

「こいつは俺が引き受ける!貴様か!俺を助けたパウルスを殺したのは!」

「ああん？別に前にとっちゃ、関係のないことだろ！」

「お前らネオデスメタルはそうやって平気で人の命を奪いやがって、何が正義だ！秩序だ！絶対に許さない！」

「は、帝国に逆らった奴の末路だ！」

「許さない！許さないぞ！」

「おいおい、そんなこと言っているのかよ！出ないとアレがきちまうぜ！」

ブリュール大尉を見たデーニッツ中将は、遠隔操作しているディメパルサートランスのリモコンを持ち、

「では、そろそろ、ファイナーレだ！ディメパルサー Mk-II、トランス、最大出力だ！ファイナルマッドオクテットー!!」

ガアアー！

Mk-IIとトランスの咆哮と共にマッドオクテットが放たれる。ウィルとシーザーたちはさらに苦しむ。

「ウワアアアー！なんだ？さっきと違うぞ！頭が凄く痛い！」

エマヤユリスも

「何これ？頭が痛い！」

そのとき、苦しんでいたレジスタンスのキャノンブル、バズートルが動きだし、シー

ザーたちを囲み、クライブたちはウイルスたちに砲搭を向けた。

「皆、どうしたんだ？何で？」

「くそ、洗脳されたのか！」

シエルター内でも突然、子供たちが不自然な動きでエマやユリスの身体を拘束している。  
く。

「待つて、どうしたの？」

「やはり、予想以上だな！Mk-IIとトランスのファイナルマッドオクテットを同時に放てば、ライダーとゾイドを同時に洗脳できるのではと踏んではいましたが、ここま  
でとは！」

しかし、あの小僧共と小娘と女はファイナルマッドオクテットを喰らっても洗脳出来  
ないとは、やはり例の血筋の影響か！だが、ダメージはかなり大きい！」

子供たちは拘束しながら、エマとユリスを帝国軍部隊まで運んでいく。それを見た  
ウイルスとリセルは、

「くそ、止めろ！」

そのとき、レナが現れ、子供たちを払いのけ、エマとユリスを助ける。

ガアアー！



デイメパルサーMk-IIとトランスに向けて咆哮を上げるレナ、

「これは驚きました！まさか、ファイナルマッドオクテットを喰らっていないながら、洗脳出来ないゾイドがいたとは！しかし、そんなボロボロの状態で何ができる！」

「ガアアア！」

レナの咆哮と共に、レナの身体が発光し、ゾイドキーが現れた。

「何！デイメパルサーにゾイドキーだと、バカな！」

ゾイドキーを持つユリス、リセルは、

「ユリス、ゾイドキーを差すんだ！そしてワイルドブラストするんだ！」

しかし、ユリスは首を振り、

「駄目！そんなことしたら、レナまで戦争に巻き込まれてしまう！」

「やるんだ！」

「出来ない！もう、私はゾイドを戦争の道具にしたくない！」

「これは、好都合！」

一斉にレナに照準を向けるキャノンブル、バズートル隊、

「お前の、ゾイドを戦争に巻き込またくない気持ちはわかる！でも、ワイルドブラストしないと全員殺されてしまう！」

「でも！」

躊躇するユリスにレナはそつと身体を寄せ、すり寄る。

「レナが言っている！皆を救いたいと！その力はゾイドを戦争の道具にするための力じゃない！皆を守るための力だ！」

「さあ、フィニッシュですよ！」

レナはユリスを見つめ、

「わかったわ！レナ！」

ユリスはゾイドキーを差し込む。

「ワイルドブラストー!!」

ガアアー！

ワイルドブラストしたレナはマッドオクテットを放つ。突風のような勢いで、後退していく帝国軍部隊。

「うお、バカめ、我が軍の全てのゾイドには電磁波遮蔽コーティングが施されているのだ！さあ、キャノンブル、バズートル隊、一斉砲撃だ！」

しかし、キャノンブル、バズートル隊は動きを見せない。そればかりか、デーニツツ中将のディメパルサーMk-II、トランス初め、全ての帝国軍ゾイドがマシンブラストを解除していった。

「どういふことだ？何が起った！」

通信の兵士は、

「デーニッツ中将！操縦不能です！コンバットシステムがフリーズしています！」

マシンブラストを解除したキャノンブル、バズートル隊、デイメパルサー、デイロフォス隊が勝手に後退していく。

「こ、これは！一体何が起こったと言うのだ？」

同時にレジスタンスのキャノンブル、バズートル隊が正気に戻ったかのような動きをし、コクピットのクライブは、

「あれ、俺たちは一体何をしていたんだ？」

そして、苦しんでいたシーザーたちのダメージが無くなり、まるで元気になったような喜んでいた。

「シーザー！大丈夫なのか！」

グオオー！

ウイルの問いに咆哮を上げるシーザー、

「バカな！まさか、あのマッドオクテットはゾイドにダメージを与えるマッドオクテットを遮断、解除し、同時にファイナルマッドオクテットを喰らったゾイドの洗脳まで解き、回復までしたというのか、こんなことが！」

ん？まさか、あの女のデイメパルサーは突然変異種だというのか！これは私としたこ

とが、予想外でしたよ！」

グラッドはデーニッツ中将やブリューゲル大尉に向かって、

「どうやら、形勢逆転のようだな！」

しかし、デーニッツ中将は突然、笑いだし、

「フフフ、これは計算外でしたが、万が一のことを想定して保険をかけて正解でしたよ！」

「どういうことだ？」

そのとき、上空から大量のクワールガ、スナイプテラ隊が現れ、

「制御トリガー解除、マシンブラストー!!アブソルートショット！」

「しまった！クワールガとスナイプテラを待機していたのか！」

「残念ながら、陸上部隊は使い物にならないですが、空中部隊は万全の状態です！」

「皆、退避だ！」

「駄目です！間に合いません！」

そのとき、リセルのデルが現れ、

「皆、離れてろ！駆け抜ける、デル！俺の魂と共に、本能解放！ワイルドブラストー

!!行くぞー！デル！セカンドギア！ハウリングシャウトー!!」

デルのハウリングシャウトで周囲が破壊され、爆風が飛び散る。

「今だ！」

「よし、全員、徹底だ！」

煙が晴れ、そこにはレジスタンスの姿は見えなかった。ブリューゲル大尉は、

「くそ、あと少しだったのに！」

「まあ、いいでしょう！それでも、ここのレジスタンス基地は壊滅した！我々も一旦退きましよう！」

基地から離れたところで、クライブとウィルたちがいた。クライブはグラッドに、

「基地は壊滅させられましたが、まだ各地には旧帝国派、旧共和国派のレジスタンスはいます！」

私は彼らを交渉し、反ネオデスメタルの合同軍を結成させます！」

「よろしく頼む！」

「それと、ユリスをあなた方の元で保護していただけないでしょうか？」

「そうだな！過去の真帝国みたいに皇帝にされたら、いろいろと面倒だからな！もちろん、俺たちが責任を持って保護する！」

ユリスはリセルに、

「あの、助けてくれてありがとう！」

リセルは少し照れて、

「い、いや、男として当然のことをしたまてだよ！」

それを見てグラッドは、

「いやー！恋しちゃってるねー！ヤングたち！」

「コ、コマンダー！止めてくださいよ！そんなんじやありません！」

「あ、そのレデイが皇帝になったら、お前は何になるんだろうな？」

「だから、止めてくださいって！」

「ようし、帰ったら、祝宴上げるか！リセルに彼女が出来ましたーって、」

「もう、いい加減にしてくださいよ！」

そうして、ウィルたちは本拠地に戻っていった。

To be continued

## 第17話 「脅威！ダブルドライパンサー」

ネオデスメタル帝都メガロポリス、タッカー元帥はデーニッツ中将と通信を開いていた。

「そうか、失敗に終わったか！」

「はい、まさか、あの女のディメパルサーが突然変異種とは、予想外でした！ですが、反乱軍の基地は壊滅させました！」

「ふん、いくら、反乱軍を蹴散らしたとはいえ、肝心の小娘二人を捕らえられなかったことに変わりはない！」

「申し訳ありません！」

「ところで、あの小娘を捕らえてどうするのだ？」

「あの小娘を皇帝陛下の王位継承者にするんですよ！もちろん、表向きですが！」

「なるほど、敢えてあの小娘を皇帝陛下の王位継承者にし、反乱軍には我々が降伏したのだ、と思わせて油断したところを全滅させる、ということか！」

「その通りです！」

「だったら、尚更、早々に捕らえるべきだ！反乱軍があの小娘を真帝国皇帝にしたら、

手遅れだ!それにデスレックスをオメガレックスに強制進化させるリジエネレーションキューブの作動方法を探るにはあの小娘が必要なのだ!

あれが作動しなければ、オメガレックスは完成しないのだ!皇帝陛下は1日も早くオメガレックスの完成を待ち望んでおられるのだ!

何としても捕らえられるのだ!後、トランスはお前に預けてやる!私よりもお前の方が扱いがいいかも知れんからな!もちろん、真帝国復活を企むおこがましい反逆者も1人残らず殲滅するのだ!

「は!」

通信を切るタツカー元帥、

「さて、反乱軍制圧は上手く順調にいつているが、肝心の小娘の奪還が上手くいかないとは!これ以上、先伸ばしすると皇帝陛下のお怒りを買ってしまう!

とすると、ルメイ大将!あの男に小娘二人の奪還を命じた方がいいかも知れん!」  
タツカー元帥は通信を開き、

「ルメイ大将!あの小娘二人を捕らえる任務を与えたいのだが!」

「私が…、ですか!」

「そうだ!お前のドライパンサーとスナイプテラ3Sはステルス性に特化している!適任かと思うが!」



「しかし、小娘二人はあの裏切りのガトリングフォックスと一緒にですからね……。」

「そこで、お前に私の親衛隊からお前の参謀として就けてやろうと思うのだ！」

「誰ですか？」

「お前と同じドライブパンサーを操るあの女だ！とにかく、私からあいつに報告しとくよ！」

と言って通信を切るタツカー元帥、

「あの悪魔を私の参謀に就けるとは……！相当オメガレックスの完成を皇帝陛下が待ち望んでいるのだな！だが、面白くなりそうだ！」

「今こそ、あのガトリングフォックスも頂戴するいい機会だ！」

同盟軍の本拠地、ウイルたちが本拠地に戻り、入口にはクルーガーやアレックス、アツシユ、ジェニファーが待っていた。クルーガーはグラッド元に行き、

「よく戻って来たな！で、どうだった！」

「旧共和国派は全面的に協力してくれるが、旧帝国派だけは中々協力してくれない！」

というのも、彼女を皇帝にした真帝国の復活を画策しているからな！」

「彼女？」

そのとき、デルのコクピットからリセルとユリスが降りた。

「紹介しよう！真帝国ハンナ・メルビル皇帝の子孫、ユリス・メルビルだ！」

ユリスはクルーガーたちに頭を下げ、

「はじめまして、ユリス・メルビルです！よろしくお願いします！」

ユリスを見たアレックスは、

「な、な、なにー!!皇帝！しかも女だとー！おい、リセル！こんなにスタイル抜群な美人の彼女を持つとはどういうことだ！」

「ち、違う！彼女じゃない！」

リセルの照れた表情を見てクスツと笑うユリス、

「なんでまたこんなことに！」

「詳しいことは後で話すが！」

そのとき、数機の青いスナイプテラが現れ、本拠地の方に着陸した。クルーガーとグラッドは、

「はいっはっ？」

「ああ、明らかに帝国のスナイプテラだが、どう見てもネオデスメタル仕様じゃない！」

ウィル！リセル！お前たちはエマとユリスと一緒に基地に行ってくれ！俺らはいつらと話がある！」

「わかった！」

そう言い、基地に入るウィルたち、青いスナイプテラの口とコクピットが開き、二人のライダーが乗っていて、その人物は旧帝国の軍服を着ていた。

「旧帝国派か！どうせ、ユリスのことだろうが！」

二人の青いスナイプテラのライダーはグラッドとクルーガーの元に寄り、

「初めまして、私が旧帝国派レジスタンスの指導者、アームド・シーガルです！そして、私の横にいるのは、副官のジョナサン・アルドリッジです！」

「反ネオデスメタル同盟軍総司令のグラッド・バレル！そして、副官のアーレン・クルーガーだ！」

「あなた方のご活躍は聞いております！」

「一体、何の用ですか？」

「実はユリス・メルビル陛下があなた方の保護下に置かれているとの報告がありました。たがー！」

「彼女を引き渡せ！というのか！残念ながら、お断りだ！彼女はそれを望んでいない！」

「いえ、陛下は我々の希望なのです!あのお方が再びかつてのハンナ・メルビル皇帝陛下のように皇帝になれば、必ず反ネオデスメタルの同士は立ち上がるでしょう!」

「それで、余計ネオデスメタルを刺激させるつもりか!悪いが、その要求には従わない!」

「ですが、あなた方にとっては悪い話ではありません!あなた方の实力を見込んで、ユリス・メルビル皇帝陛下の親衛隊として迎え入れるのです!あなた方にとっては、有利な話です!」

「悪いが、お引き取り願いたい!俺たちはあくまで帝国に苦しめられている人々とゾイドを解放するために戦っているのだ!」

「残念ながら、あなた方には我々と共に行くという選択肢しかありません!」

そのとき、旧帝国派兵士がグラッドたちに銃を突きつける。クルーガーは小声で、

「どうする!」

「面倒なことだが!ここは従うしかないようだな!」

ルメイ大将の総督府、そこに赤いドライパンサーと赤いステイレイザーが到着し、コ

クピットから身長190cm近くある長身の女性と細身でありながら、屈強そうな男が現れた。

長身女性と男が通り掛かるところにカティアがいた。長身女性は彼女を罵るような表情をし、カティアは少し顔を隠し、早歩きで、去っていった。長身女性は、

「ふん、あんな意地汚い小娘までいるとは、正規軍は一体何をやっているのだ！」  
カティアは手が震えて、怯えていた。

「何？あの人！」

二人はルメイ大将のいる部屋に入り、敬礼した。

「タツカー元帥のご命令により、参謀として着任したギャラガー親衛隊所属、クルエラ・ベケット少佐とジョセフ・アーミテージ大尉です！」

「よく来たな！ところで、我々の任務は知っているな？」

「はい、エマ・コンラッドという小娘と反乱軍が皇帝として祭り上げようとしているクリス・メルビルの奪還です！」

「そうだ！皇帝陛下は1日も早く完成を待ち望んでおられるオメガレックスの完成に利用すべき存在だ！何としても、捕らえなければならぬ！」

だが、反乱軍の保護下に置かれ、中々、奪う機会があまり無い！」

「しかし、こちらにはステルス性に優れたスナイプテラ3Sがいます！今夜、奇襲をか

け、奴らを分散させる手はどうでしょう?」

「ほう!」

そのとき、通信が入り、

「ルメイ大将!例の反乱軍が旧帝国派の反乱軍と共に連れて行かれたとの報告がありました!」

「どうやら、好機が来たようだな!直ちに出击準備に掛かる!」

ウイルたちはキャタルガの輸送車両に運ばれ、旧帝国派レジスタンスの基地に入れられた。兵士に基地内部を案内され、そこにスーツを着た兵士もいた。それを見たグラツドとクリスは、

「ほう、あれが例の耐Bスーツか!まさか、今の時代でも使っている奴がいるとは!」

「ゾイドに慣れず、操縦に不慣れな奴が使用しているらしいな!」

「まあ、相棒たちと絆を結んでいる俺たちには不要だな!」

少し豪華な部屋に案内され、兵士はウイルたちに、

「あなた方は我らが真帝国ユリス皇帝陛下の親衛隊として歓迎します！どうぞ、この軍服を！」

ウィルたちはしびしび軍服を着用し、

「もし、何か御用がありましたら、そのこのブザーを鳴らしてください！いつでも駆けつけます！」

そう言つて部屋から出る兵士、グラッドは、

「旧帝国、真帝国時代の軍服か！ネオデスメタルとは違うが、まるで、帝国軍に逆戻りしてしまつたぜ！」

クルーガーはグラッドに、

「どうするつもりだ！相棒たちは別のところに輸送され、武器は取り上げられ、本拠地にも戻ることは出来ないぞ！」

「本拠地には留守番の兵士に光学迷彩機能を作動させるよう、伝えといた！しばらく、帝国軍に見つかることはないだろう！」

ジョンは、

「で、どうするんだ！俺たち、しばらく逃げられないぞ！」

「ここから脱出して余計な揉め事を起こす訳にはいかないし、しばらくここにおいて他

のレジスタンスと連絡を取り、彼らと連携を取るしかない!」

「ということとは、今の俺たちは同盟軍じゃなく、真帝国軍か!」

「そうなるな!」

ウイルは辺りをキョロキョロし、

「エマ、エマは何処だ?」

「エマなら、ユリスと一緒に連れて行かれたな!確か、彼女は侍女にするって言ったな!」

「じゃあ、大丈夫なのか!」

「むしろ、俺たちよりはな!」

クリスは、

「で、俺たちしばらく真帝国軍の一味になるってことは同盟軍はどうなるんだ!リーダー不在ってことは向こうにかなり同様が出るんじゃないか!」

「心配ない!ここに連れてこられる前にあいつと連絡を取って同盟軍の総司令代理に着任させてもらった!」

「あいつ…って、まさか、戻って来たのか!」

「ああ、つい最近、同盟軍に戻って来たんでな!あいつはあの伝説のゾイドチームリーダーの男だ!あいつなら、全員ついて行ける!」



その言葉通り、森の中にシーザーに似たライガーらしきゾイドが同盟軍の本拠地に向かっていった。

一方、別の部屋では、可憐なドレスを着せられたユリスとエマがいた。ユリスは悲しそうな表情で、

「ごめんなさい！エマ！私のせいで皆を巻き込んだじゃって！」

「ううん、メルビルさんは悪くないわ！」

「でも、皆を巻き込んだことに変わりはないし……。」

エマはユリスの手を優しく握り、

「大丈夫です！きつとウイルたちが何とかしてくれます！私はウイルたちを信じてますから！」

夜になり、ウイルたちは部屋にこもっていた。そのとき、突然、基地に爆発が起こり、警報が鳴った。

「緊急事態！緊急事態！」

シーガルとアルドリッジは司令部に向かい、

「何があった?」

「敵の襲撃のようです!」

「敵の規模はどれぐらいだ?」

「分かりません!レーダーに全く反応無し!敵の規模どころか姿すら分かりません!」

「直ちに、キャノンブル、バズートル、スナイプテラ隊を出せ!」

しかし、スナイプテラ隊は出たとき、次々と撃墜され、キャノンブル、バズートル隊も空中に攻撃を仕掛けるが、姿が見えないため、当たっているかどうかかわからず、次々と撃破されてしまう。

「敵はステルス性か!アルドリツジ!フアングタイガー改で出撃して、敵をたたけ、私はメルビル陛下を連れて脱出の準備をする!」

「了解しました!」

一方、ウイルたちのいる部屋では、

「戦闘が始まったようだな!」

痺れを切らしたアレックスは、

「くそ、いつまでこんなことしなきゃいけないんだ!」

ブザーを鳴らし、

「おい、さつきと俺たちを出せ！」

「残念ですが、シーガル閣下の命令がないと出ることは出来ません！」

「ふざけるな！」

グラッドをため息をつき、

「やれやれ、親衛隊と言いながら、俺たちはただのお飾りか！仕方ない。俺たちは勝手に出て行こう！ジョン！」

ジョンは口から針金を出し、ドアの鍵穴に差し、ピッキングした。

「よし、では脱出だ！」

「コマンダー、最初からそうした方がよかつたんじゃ！」

「どさくさに紛れていった方がやり易いだろ！ウイル、リセル！お前たちはエマとユリスを捜して連れていけ！俺たちはレックスたちを捜す！見つかったら、通信で知らせる！」

「わかつた！」

「大事なお姫様を助けるよ！」

「もう、からかうなよ！」

グラッドたちは向こうに行き、ウイルとリセルは部屋中を捜し回った。

基地から離れた場所で、双眼鏡で基地を見るルメイ大将与ベケット少佐、

「やはり、スナイプテラ3Sの性能は抜群だな!そして、あの青いスナイプテラとファングタイガー改は旧帝国、真帝国時代の旧型か!今更、あんな旧型で我がネオデスメタル帝国軍に立ち向かうとは、片腹痛い!」

「そろそろ、我々も出撃しましょう!」

そう言つて、互いのドライパンサーに乗るルメイ大将とベケット少佐、一方、エマとユリスのいる部屋では、

「攻撃が!一体、何が起こっているの?」

そのとき、ウイルとリセルが現れ、

「ユリス!」

「エマ!」

「ウイル!」

「リセル!何が起こっているの!」

「敵の襲撃です!ここは危険です!早く脱出しましょう!」

そのとき、銃を持ったシーガルが現れ、

「そこまでだ!メルビル陛下とエマは私が連れていく!お前たちは敵を食い止める

!

「それは出来ない!ユリスをお前たちの思い通りにさせない!」

「貴様！これは反逆行為だぞ！」

そのとき、基地が揺れ、ウイルトリセルはその隙にエマとユリスを連れて行った。

「くそ、待て！」

そこに兵士が現れ、

「閣下、ここは危険です！早く脱出を！」

「わかっている！それより、皇帝陛下を！」

「はい、」

基地の外では、アルドリツジのファンングタイガー改とキャノンブル、バズートル隊が帝国軍と交戦していた。

「くそ、一体敵は何処から攻撃しているんだ？このファンングタイガーでも太刀打ち出来ないとは！」

そのとき、目の前にアーミテージ大尉の操る全身真っ赤のステイレイザーG3率いるキャノンブル、バズートル隊、が現れた。

「あれが大将か！全軍、直ちに総攻撃開始！」

キャノンブル、バズートル隊はステイレイザーG3に向けて一斉砲撃をするが、何とステイレイザーは無傷で突っ込んでいった。アーミテージ大尉は、

「おらおら、さっさと道を開けろ!雑魚共ー!!」

「くそ、なめるな〜!」

ステイレイザーに向かって行くフアングタイガー改、

「制御トリガー解除、兵器 解放! マシンブラストー!!」

しかし、ステイレイザーはその攻撃すら、無傷だった。

「なんだ?今のは!全く痛くも痒くもないぞ!」

「バカな!」

ステイレイザーは赤子の手をひねるかのようにフアングタイガー改をボールのように、蹴ったり、突進していった。ポロポロになるフアングタイガー改、

「ふん、余りに歯ごたえが無さすぎてマシンブラストするまでもないわ!」

フアングタイガー改を踏み潰そうとするステイレイザー、そのとき、フアングタイガーのゼルが現れ、ステイレイザーに突進した。足を崩し、倒れるステイレイザー、ケンはアルドリツジに向かって、

「愚か者め!性能に頼りすぎだ!私が真のワイルドブラストを見せてやる!」

ゼルを見たアーミテージ大尉は、

「ほう、ちよつとは骨のある奴がいたようだな!」

「切り裂け、ゼル!私の魂と共に、本能 解放!ワイルドブラストー!!」

「では、こちらもいくか！ 制御トリガー解除、ステイレイザー！ 兵器 解放！ マシン  
ブラストー!!」

「虎振！」

ステイレイザーに向かって突進するゼル、しかし、ステイレイザーはびくともせず、そのまま、ゼルを跳ね返した。

「なんて装甲だ！」

そこにレックスタちも現れ、

「よし、お前たち、一斉にワイルドブラストだ！」

「了解!!」

「俺たちの魂と共に、ワイルドブラストー!!」

パキケドスのウィーリーイーは、ラプツールとキャノンブルをパンプキンヘッドで、蹴散らし、アンキロックスのバンブは尻尾で、バズートルを蹴散らし、スパイデスのキールは次々と敵ゾイドに毒を注入していった。

空中では、ソニックバードのジャックとクワガノスのクーデリアがスナイプテラ3Sを撃墜していった。スナイプテラ3Sのライダーは、

「バカな！ 何故、わかるんだ！」

それに対し、クリスは、

「俺たちはお前たちと何度も戦っている。だから、相棒の野生の勘で、居場所がわかるのさー!」

戦闘中、レックスが何か感じ取った仕草を取り、

「どうした?レックス!」

そのとき、何処からかレックスに向けて攻撃してきた。間一髪で避けるレックス、

「一体、なんだ?」

暗闇に紛れて何かがまた攻撃してきた。それも避けるレックス、

「レーダーに反応無し。ということとは!レックス、わかるか?」

レックスは地面の匂いを嗅ぎ、姿の見えない敵に攻撃した。姿の見えない敵はその攻撃を避ける。

「ステルスにはステルスで対抗のつもりだろうが、残念ながら、俺には通用しないぜ!」

そのとき、暗闇からドライパンサーが現れた。

「久しぶりだな!グラッド・バレル元中尉!」

「ダグラス・ルメイ中佐…いや、今は大将だったな!」

「そうだ!私は兵器改造をしたゾイドをありとあらゆる軍需産業に売りさばき、多大な利益を得、終いにはそれらの軍需産業を全て吸収し、帝国を強化化させ、今の地位を



手にいれた！

特に私のドライブパンサーとお前のガトリングフォックスのような隠密性に優れたゾイドは高く売れた！」

「そして、俺をレックスのライダーに任命したのは、全てはレックスの性能を試すためだったな！」

「そうだ！全てはガトリングフォックスの性能を世界中に示し、いずれ、私のゾイドとして出世するためだった！」

だが、貴様が逃がしてしまったため、私の手元に置くことは出来なかったが、その代わり、このドライブパンサーを手に入れたがな！」

「貴様！何処まで、ゾイドを道具扱いにすれば、気が済むんだ！」

「下らん質問だな！我が帝国にとつてはゾイドなぞ所詮、人類を更なる高みへ導くテクノロジーの道具でしかない！ゾイドの性能と技術は人類の文明発達と進化によく貢献した！これほどの上手い材料は他にない！」

「相変わらず、根性の腐った奴だな！」

「しかし、貴様もわからん！今まで、密輸業者として現実に目を背けたお前が何故反乱軍に入ったのだ！そんなことしなければ、こんなことにならなかつたはずなのに！」

「確かに今までの俺はそうやって生きてきた！いつも自分と相棒のことだけを考えて

他人のこと等どうでもいいと思っていた!

しかし、相棒が教えてくれた!こんな生活を続けられれば、いつかは滅びる、そして、貴様らのような奴らを倒し、ゾイドと人間が共存していく世界を築くために!

「ますます、下らん!どうやら、お前をライダーに推薦したのが唯一のミスだったな!」

「それともう一つ、俺は前々から貴様が気に入らなかつた!」

ウィルたちはシーザーとデルを見つけ、それぞれの相棒に乗り、基地を脱出しようとした。そのとき、シーガルの乗るナツクルコングが現れ、

「待て!メルビル陛下は真帝国皇帝だ!勝手に連れていくことは許さん!」

「何度も言ってもユリスは渡さない!」

「ならば、仕方ない!」

そう言つて、シーザーとデルに攻撃しようとするナツクルコング、そのとき、基地の壁を突き破つてギルラプターエンペラーが現れ、シーガルのナツクルコングに突進し、吹っ飛ばした。ギルラプターを見たウィルは、

「あのギルラプターは！ ギャラガーか！」

「また会えて嬉しいよ！今度こそ、決着をつける！」

「望むところだ！リセル、お前は先に行ってくれ！俺はこいつを食い止める！」

「わかった！」

先に向かうデル、

「待つて、ウイル！」

「止めるな、エマ！あいつの狙いは俺だ！いくぞ、シーザー！ エヴオブラストー!!」

「こつちも本気でいくよ！ ギルラプター！ 強制 解放！ デスブラストー!!」

「ビーストオブクロブレイク!!」

「真・瞬撃殺!!」

基地から出たデルの前にベケット少佐の乗る全身真っ赤のドライパンサーG3が現れた。ドライパンサーを見たりセルは拳を握りしめ、

「あの赤いカラーリング、親衛隊か！」

「あのわがまま皇子についていけば、あの小娘二人を乗せた連れに会うと踏んでいたけど、やっぱり、正解だったようね！」

「あら、そういえば、あんた、どつかで見た顔ね！ええと確か……、あ、思い出した！」

確か、元帥閣下に連行されて収容所から逃げたあのときのガキね！まさか、こーんなに

大きくなっちゃって!」

「なんだと!!」

「まさか、生きてるとは思わなかったわ! てつきり、の垂れ死んだかと思つたわ!」

「ふ、ふざけるなー!!」

「待って、リセル! 挑発に乗らないで!」

「止めるな、ユリス! あいつは俺の家族と友人を殺した連中だ! いくぞ、デル! ワイルドブラストー!! ソニックブーストー!!」

ユリスはリセルにしがみつき、

「キヤアアアー!!」

デルはドライパンサーに突つ走つたが、ドライパンサーはその攻撃を難なく避け、尻尾でデルを振り払つた。

「あらあら、いけませんね! 熱くなつては! でも、仕方ないわよね! あんだけ、殺したもんね!」

ん、あれ? あのとき殺したの、坊やの家族だつけ? もう! いちいち殺した奴のことなんか記憶にないわ!」

挑発するベケット少佐にリセルは怒り狂い、

「ふざけるなー!! セカンドギア! ハウリングシャウトー!!」

デルのハウリングシャウトがベケット少佐のドライパンサーに直撃する。しかし、ドライパンサーはハウリングシャウトを喰らっていないながら、全くの無傷だった！

「そんなバカな！」

「ホント、単純な坊やね！こんな挑発に乗るなんて！あんたなんか、いちいち姿を隠さなくてもマシンブラストせずとも、素の状態で十分よ！」

そのとき、ドライパンサーはソニックブーストより速い速度で動き、デルに突進した。吹っ飛ばされるデル、一方、基地内では、シーザーがギルラプターのスピードに翻弄され、瞬撃殺の猛攻を食らい、ボロボロになっていく。

「どうした？ カーターのスナイプテラを倒した実力はそんなものか！もしかしてホントは連中に頼ってて何も出来なかったんじゃないか？」

「なんだと！」

「所詮、お前は宝の持ち腐れってところだな！」

「ギラガー!!」

ギルラプターに向かって突っ走るシーザー、しかし、ギルラプターはそれを避け、シーザーを払いのける。

「全然、歯ごたえなかったね！まあ、いい！これで終わりにするよ！」

止めを刺そうとするギルラプターに、シーザーのコクピットからエマが現れ、

「もう止めて、レイル!!」

エマを見たアーネストは拳を握りしめ、

「エマ!!僕を裏切ったお前は許さない!やれ、ギルラプター!!」

しかし、戸惑うギルラプター、

「どうした?何をしている!早くやれ!!」

レックスと戦うドライパンサーのコクピットから通信が入り、

「ルメイ大将!直ちにスナイプテラ3S隊が基地を爆撃します!速やかに避難してく

ださい!」

「ち、もうそんな時間か!全軍離脱だ!」

そう言って、撤退するドライパンサー、それを見たグラッドは、

「なんだ?何が……、まさか!まずい、俺たちも撤退するぞ!」

ベケット少佐のドライパンサーのパワーとスピードに圧倒され、ボロボロになるデ  
ル、

「さあて、そろそろ小娘を渡してもらおうわよ! ん?」

頭上には、大量のスナイプテラ3Sが、

「ち、仕方ない!」

ドライパンサーは撤退していく。ユリスは気絶しているリセルを、

「リセル！ しっかりして！」

基地内で、旧帝国派のラプツールを蹴散らすカティアのラプツールは頭上に気付かず、戦闘に集中していた。ルメイ大将のкокピットに通信が開き、

「大将！まだ離脱していない兵士がいますが！！」

「構わん！多少の犠牲等、どうでもいい！！ 帝国と皇帝陛下のために命を散らせばいい！」

スナイプテラ3S隊は基地中に爆撃を開始していった。基地はあっという間に壊滅し、爆撃に巻き込まれたウイル、エマ、シーザー、アーネスト、ギルラプター、リセル、ユリス、デル、カティア、ラプツールは基地の裏の崖に落ちていった。

To be continued

## 第18話「再会」

壊滅した旧帝国派レジスタンスの基地の崖にベケット少佐が双眼鏡で下を見ていた。そこにルメイ大将の乗るドライパンサーが現れ、コクピットからルメイ大将が現れた。

「どういうことだ？ あの小娘二人を捕らえてから、爆撃するんじゃないのか!？」

「いえいえ、分散させるには爆撃の後がちょうどいいと思ひまして!」

「もし、万一、死んだらどうするのだ?」

「それは心配ないわ!そのことを計算した上での計画ですから、小娘二人の奪還は私に任せてください!あなたは目障りな反乱軍の始末を!」

「ちー!」

そう言つて、ルメイ大将はドライパンサーに乗つてしぶしぶ去つていった。ベケット少佐は引き続き、双眼鏡で

下を見、

「さて、計画通り、あのわがまま皇子とラブトールの小娘も一緒に落ちていったわね!あの小娘二人はわがまま皇子と親密にいたから、釣餌にちょうどいいわね!

それに、旧帝国派の馬鹿共はあのわがまま皇子を人質に取る計画を立てているという



報告もあつたし、せいぜい、利用させてもらうわ！それに、死ねば、反乱軍が殺したことにして、国民を戦争に駆り出すことも出来るし、いいカモね！ま、皇太子はあのお方と決まっているから、むしろ、死んだ方がちよいどいいし！

さて、アーミテージも呼んで、早速やりましょう♪」

倒壊した基地の中にグラキオサウルスのゴルドが現れ、ゴルドの下には、レックスたちがあった。グラッドはクルーガーに、

「將軍、助かったよ！ゴルドは大丈夫か？」

「マグマに耐えられる装甲を持つんだぞ！ゴルドにとつちや、痛くも痒くもない！」

グラッドは辺りを見渡し、周りには、帝国軍の兵士とゾイドが巡回していた。グラッドは通信を開き、

「クリス、ウイルたちはどうだ？」

「いや、どこもかしこも帝国軍と残骸だらけで、見つけるには、ちと骨が折れそうだ！」  
「そうか…。しばらくは奴らに気付かれず、ウイルたちを探すしかないようだな！」

場所は変わり、崖の下に倒れたエマがいた。

「う、う〜ん……！」

起きたエマは辺りを見渡した。

「ウイル、シーザー、リセルさん、ユリスさん！皆いないの？」

辺りを見渡したが、どこにもウイルたちの姿はなかった。しかし、1人の少年が倒れていた。アーネストだった。

「レイル！無事だったのね！」

アーネストを見つけたエマは彼の元に行くが、目が覚めたアーネストは銃を出し、

「僕に近づくな！帝国の裏切り者め！」

「待つて、レイル！」

「その名で呼ぶな！僕はギャラガーだ！裏切り者は死ね！…… うー！」

引き金を引こうとしたとき、突然、アーネストは口から血を嘔吐し、銃を持った右腕は出血した。アーネストは銃を落とし、そのまま倒れた。

「レイル！待つて、今、手当てするから！」

エマはアーネストの体を運んでどこか安全なまで行った。

一方、爆撃から逃れたシーガルら旧帝国派レジスタンスは、

「まだ、メルビル二世陛下の身元は確認出来ないのか？」

「は、捜索を続けていますが、中々……。」

「何としても見つけ出せ！」

「シーガル閣下、ドライパンサーG3とステイレイザーG3がこちらに向かっていきます！」

「くそ、直ぐに迎え撃て！」

「いえ、敵から交渉したいとの通信が来ました！」

「交渉だと？」

旧帝国派レジスタンスの兵士とゾイドに囲まれる中、ベケット少佐とアーミテージ大尉はドライパンサーとステイレイザーから降りた。ベケット少佐とアーミテージ大尉に銃を向ける兵士、そこにシーガルとアルドリッジが現れ、ベケット少佐とアーミテージ大尉はひざまずいた。

「シーガル閣下、我々はあなた方旧帝国派と平和的解決を望んでいます！」

シーガルは首を傾げ、

「平和的解決だと？我々を殲滅しようとしていたのに！」

「私はネオデスマタルの武力的な解決にどうも納得出来ません！どうか、交渉の場を！」

「あれだけ、我々を潰しにかかったお前がそんなこと言うとは！信用出来んな！」

「それはあくまで、命令に従ったまでのことです！ホントは誰一人殺したくありませんし、皆の不幸な顔を見たくありません！」

「その言葉、信用していいのか？」

ベケット少佐は真剣な表情で、シーガルを見ていた。シーガルは、

「ふん、まあ、いいだろう！だが、もし変な動きがあつたら、直ちに殺すぞ！」

シーガルが後ろを向いたとき、ベケット少佐は不敵な笑みを浮かべた。

「閣下、メルビル二世陛下の搜索に我々も協力していただけませんか？」

「お前が？」

「ええ、実は先ほどの爆撃には我が帝国の皇子のギャラガー殿下とカティア・ギレルも巻き込まれているのです！」

そして、カティアは実は旧帝国フィオナ皇帝の血を引く者なのです！」

「何！あのかつての旧帝国フィオナ皇帝の！」

「ええ、その二人を捕らえれば、交渉の場に持つていきますし、容易にメルビル陛下を皇帝に立て、真帝国の復活も可能です！」

シーガルは考え込んだ上、

「わかった！お前にも搜索を命じる！何としても探しだせ！」

「は！」

場所は変わり、崖の下で倒れたウィルがいた。起き上がったウィルが辺りを見渡すが、周りにはシーザーとエマがいない。

「シーザー！エマ！別れたのか！くそ、早く助けに行かなきゃ！」

また、一方では、カティアが周囲を歩いて行った。彼女もまたラプトルのベティが  
いず、一人だった。

「待つてて、エマ！必ずあなたを助けるわ！」

他の場所では、リセルがユリスと一緒にいた。リセルは左腕を怪我していて、二人にはデルがいなかった。

「リセル、大丈夫？」

「大丈夫だ！ユリス！」

「待つてて、直ぐ手当てするから！」

場所は変わり、崖下の端に古い小屋のようなものがあり、そこにエマがアーネストの手当てをしていた。アーネストは目が覚め、

「レイル、良かった！」

「僕に触れるな！」

「待つて、レイル！動いちゃ駄目よ！」

「その名で呼ぶな！僕は帝国皇子ギヤラガーだ！裏切り者のお前の手は借りない！」  
「それなら、どうしてこのペンダントを持っているの？」

エマが出したのは、エマとアーネストの二人が移った写真の入ったペンダントだった。

「そ、それは……。」

「私がいなくなつて寂しかったのね！」

「ち、違う！」

「ごめんなさい！レイル！私はあのとき、あなたを裏切つた訳じゃないの！」

「じゃあ、なんだよ！」

「あの帝国が怖かつた！私は見たの！帝国がゾイドと人々に酷いことしてるのを！」

「父上がそんなことをするわけがない！」

「あなたはそう信じてるのかもしいけど、でも、事実なの！」

「黙れ！なら、何故僕を見捨てた!？」

「レイル、聞いて！私はゾイドや皆を帝国から助けたいために帝国から出たの！そして、あなたを帝国から解放するために！」

「僕を帝国から解放？」

「あなたは知らないだけかもしれない！でも、帝国はあなたが思つてゐる以上に危険な存在なの！詳しいことは言えないけど、あなたのお父さんも実はもつと恐ろしい人なの！」

「嘘だ！そんなはずがない！」

「そのことを伝えなくて本当にごめんなさい！」

「俺はお前のことなんか……！」

その時、エマはペンダントをアーネストの手に置き、そつと両手で優しく握った。

「でも、嬉しい！あなたがそのペンダントを大事にしているのが！」

「こ、これは……！」

「いいの、口に出さなくても、私もあなたと一緒にいたかった！」

「なあ、エマ！お前にとって、俺はなんだ？」

「私の大切な家族よ！」

「家族？」

「私は両親と弟を亡くし、ずっと一人だった！でも、そんな私に手を差し伸べてくれたのが、あなただったの！レイル、ありがとう！」

「う、うん……でも、帝国に戻ることは出来ないのか？」

「それは出来ないわ！」

「そうか……。」

その時、ウィルが現れ、

「エマ！無事だったのか！」



「大丈夫よ！ウイル！」

ウイルは隣にいるアーネストを見て、

「お前は！ギャラガー！！」

「お前は、ライガーの！」

エマは二人の間に入り、

「止めて！レイルは私の家族よ！」

「レイルって？俺と会ったときはそう言ってたけど。こいつはギャラガーだぞ！」

「確かにそうだけど！レイルは私の大切な人なの！」

「え、そうなの？」

それを聞いて顔を剃らすアーネスト、そこにカティアがウイルに銃を突き付け、

「動かないで！大人しくエマと殿下を返しなさい！」

「待つて！カティア！ウイルは私の友達よ！」

「でも、エマ！こいつはあなたを誘拐者よ！」

「カティア！エマの言うことは本当よ！」

そこにユリスとリセルが現れ、

「ユリスさん！」

「姉さん！」

「ごめんなさい！カティア！あなたにも黙ってて！」

カティアは銃を捨て、

「いえ、私もごめんなさい！思い違いをしまして！」

ウィルはカティアのそばに来て、

「じゃじゃあ、信用してくれるよね！」

「ええ、信じるわ！あ、早々、あのとき、私のラプトルに名前を付けて上げてくれてありがとう！」

「いやあ、それほどでもないよ！」

「でも、エマやユリスさんに変なことしたら、許さないんだからね！」

ユリスはアーネストのそばに来て、

「レイル！良かった！無事だったの！」

「ね、姉さんこそ無事で嬉しいよ！」

ユリスはアーネストを優しく抱き締める。

「まあ、なんて感動の再会かしら！」

ベケット少佐の言葉と共に、旧帝国派のゾイドがウィルたちを取り囲み、シーガルのナックルコングとアルドリッジのファンングタイガー改、ベケット少佐のドライパンサーG3、アーミテージ大尉のステイレイザーG3がいた。ナックルコングから降りたシー

ガルは、

「お迎えに上がりました！メルビル二世陛下！いえ、ユリス陛下！」

ユリスに近づこうとするシーガルにリセルは、

「ユリスに触れるな！ユリスはお前らの都合のいいように使われる道具じゃないんだぞ！彼女の先祖だつて自分たちの帝国を築くために利用されていたんだ！彼女にも同じ思いをさせるなんて許さねえ！」

「生意気な小僧だ！陛下は真なる帝国の希望なんだぞ！それを邪魔する奴は許さんぞ！」

そこにベケット少佐が、

「まあまあ、そのぐらいにしなさい！さて、殿下！小娘と一緒に我々の元に！」

「お前、帝国を裏切ったのか!？」

「まさか！あくまで、帝国の未来のためよ！」

「お前ごときと一緒にには行かない！エマだつて渡さない！」

「あら、いきなりどうしちやったのかしら！その小娘を捕らえることが皇帝陛下の最重要命なのに！」

その時、ベケット少佐は銃を取り出し、アーネストの右肩を撃つ。

「レイル！大丈夫？」

「さあ、メルビル二世陛下と皇子とエマを捕らえなさい」

その時、シーザー、ベティ、ギルラプターエンペラーが現れ、旧帝国派のゾイドを蹴散らし、ウィルたちの前に立った。アーネストはすかさずギルラプターに乗り、ベケツト少佐に襲いかかろうとする。しかし、ベケツト少佐はリモコンを押し、ドライパンサーがギルラプターを振り払った。

ベケツト少佐に撃たれた右肩が痛み、中々、戦闘に集中出来ないアーネスト、その様子を見たギルラプターはそのままその場を去った。

「待て、ギルラプター！まだ終わっていないぞ！」

逃げるギルラプターを見たシーガルは、

「くそ、逃がさんぞ！」

「まあ、待ちなさい！いずれまた来るわ！それよりメルビル二世陛下たちを！」

ウィルたちは旧帝国派レジスタンスの兵士たちに捕らえられ、そのまま連れていかれた。

グラッドたちは崖の上で、その様子を見ていて、アレックスはグラッドに、

「どうする？俺たちで、連中を蹴散らすか!？」

「まあ、あの戦力なら、俺たちで楽勝だろうが！奴らがウィルたちを人質に取ったら、こちらとて手が出せない！」

ここは奴らについていって、ウィルたちを取り戻す機会を待つとしよう！」

ドライパンサーG3のкокピット内で、ベケット少佐はホログラム通信を開き、ホログラムの人物は皇帝ギヤラガー三世だった。

「皇帝陛下！旧帝国派の奴らに潜入、例の小娘二人とライガーとそのガキをその中に組み込みました！」

「よくやった！では、そのまま連中の一員として工作しろ！」

「了解しました！」

ホログラム通信を切ったギヤラガー三世は宮殿の地下に超巨大なカプセルを見、その左右には、バイザーを取り付けたデスレックスとジェノスピノが巨大カプセルとコードで接続していた。

「いずれ、お前の復活も間近になるだろう！我が分身よ！」

巨大カプセルから巨大なゾイドのような姿が現れ、ギヤラガー三世を見て、目が発光した。

To be continued

## 第19話「新帝国誕生」

ネオデスメタル帝国帝都メガロポリス、都市の中央にある皇帝ギャラガー三世の宮殿内で、皇帝は玉座で静かに座っていた。

皇帝は何か気づいたかのように、玉座に隠しているスイッチを押し、そのまま玉座エレベーターのように下に下がっていった。随分下まで行き、着いた先には、巨大な研究施設だった。

周りには、特殊なスーツを着た研究員が死んだゾイドからコアを抜き取り、それらを超巨大なカプセルに供給していた。カプセルの左右には、デスレックスとジェノスピノがコードで接続されていた。そして、カプセルの周りには謎のラインが入った複数のゾイドたちもいた。皇帝は超巨大カプセルを見ていた。そこに一人の科学者が現れ、

「いかがでしょうか？陛下！」

「ドクターマイルスカ！」

「ZGの様子は？」

「は、デスレックスとジェノスピノのエネルギーを供給してようやく半分のエネルギー

ギーが貯まりました！」

「それで、やつと半分だと!？」

「はい、ZGのパワーは我々の予想を越えるものでして！制圧した反乱軍のゾイドから抜き取ったゾイドコアも全て投入していますが、まだまだ足りません！」

「やはり、オメガレックスのエネルギーも必要か！」

「ええ、ジェノスピノとオメガレックスだけでも、この地球を制圧するには十分な戦力ですが、このZGも完成すれば、地球はおろか、この銀河を支配することも可能でしょう！」

「つまり、我がデスメタルはいずれ全銀河を支配する帝国になる、ということか！」

「はい、左様で！」

「オメガレックスもだが、こいつの完成も出来るだけ早くしろ！」

「は！」

「ジェノスピノにオメガレックス、そしてこのZGの完成した後、この地球を制圧した後に、私の更なる野望が達成されるのだ！ フッフ、ハハハ、ウワーツハツハツハツハ！」

宮殿にアーネストが戻り、アーネストはタッカー元帥に事を報告したが、アーネスト

はタツカー元帥に殴られる。

「この愚か者が！貴様の稚拙な判断で、小娘を逃がした上に、我が親衛隊の精鋭ベケツト少佐までが消息不明になるとは！皇帝陛下がこの事を知ったら、どれほど、お怒りになるか！」

「言葉を返すようだが、確かにベケツトは反乱軍にいた！それにエマは帝国に戻りたくないと言った！だから、彼女は…。」

バシッ！

再び殴られるアーネスト、

「言い訳など不要だ！帝国の皇子でありながら、勝手な行動をしおって、皇帝陛下からの処分が下されるまで、大人しくしておけ！」

「その前に父上に会わせてくれ！」

「今、陛下はお忙しいのだ！わかったら、さっさと出る！」

アーネストは口から吐血した血を吹き、しぶしぶ部屋から出た。アーネストが部屋から出たことを確認したタツカー元帥は小型の通信機を使い、

「私だ！ああ、もちろん、あの若僧には冷たい対応をした！ホントにどうしようもない奴だ！あの小娘にかなり心酔してるからな！」

タツカー元帥の通信相手はベケツト少佐だった！



「ありがとうございます！元帥閣下のおかげで、こちらも何かとやりやすくなりました！」

「反乱軍の様子は？」

「今のところ、半信半疑ですが、あの小娘を皇帝にさせるということで、我々と協力してくれました！」

「よし、では抜かりなくやれ！」

「了解しました！」

通信を切ったベケット少佐の元にシーガルが現れ、

「おい、あの皇子を逃がしてしまって、どうするつもりだ！あの皇子がいなければ、我々が有利に立てないのだぞ！」

ベケット少佐は落ち着いたように言い、

「ご心配はありません！皇子はメルビル二世陛下とあの侍女に心酔していますから、必ず来るでしょう！そこで捕らえればいい問題です！」

「その言葉、信じてよいのだな！」

「ええ、それより、ガトリングフォックスを連れた連中はどうしたのです！」

「搜索はしているのだが、中々……」

「あの連中がいると、我々の計画に支障が出てしまう！何としても捕らえなさい！」

「今、兵士たちが搜索している！もうしばらく待て！」

ベケット少佐は小声で、

「(全く、本当に使えない連中ばかりね)！」

基地内の部屋で、エマは、

「レイル！大丈夫かしら！あるとき、私が一緒にいなかったら、あんな目に遇わなかったのに！」

落ち込むエマにユリスは、

「自分を責めないの、あなたは間違っていないわ！」

同様に一緒にいたカティアも、

「そうよ！エマ！」

ウイルは拳を握りしめ、

「くっそ〜！俺たちをこんなところに閉じ込めやがって許さない！必ず、ここから出る！」

旧帝国派レジスタンスの基地の離れた場所にグラッドたちがいた。グラッドは双眼鏡で基地を見て、

「あそこにウイルたちが捕まっているな！さて、どうするか。」

アレックスが横で、

「じゃあ、俺たちが連中をぶっ潰してウイルたちを助けようぜ！」

「お前の思考回路はぶっ潰すことしかないのか？だから、石頭って言われるんだよ！」

「ほっとけ！」

その横にいたクリスが、

「それにしても、まさかあの女まで一緒にいるとは驚いた！まさか、あの女、デスメタルを裏切ったのか？」

「いや、あの女はギャラガー三世に心酔している程の忠誠心を持っている！裏切ることは絶対ない！」

「ということは、奴らを何かに利用しようとしている、ということか！　まさか、デスメタルに吸収するつもりか！」

「いや、それは無理だ！シーガルら旧帝国派はデスメタルの存在を頑なに認めていない！帝国に従うことなんてあり得ない。」

「じゃあ、何を！」

「わからねえが！とにかく、黙って見ている訳にもいかん！ジョン、俺とクリスが敵を引き付ける！その間にお前は基地に潜入してくれ！」

「わかった！俺にまかせな！」

そこにジェニファーが現れ、

「待つて、私も行かせてもらえないかしら？」

「しかし、お前はジョン程の潜入のエキスパートではないが……」

「ウィルとリセルには年頃の彼女がいて、感情的になりそうだから、二人を抑える世話役に私が必要よ。」

「よし、わかった！では、ジョンとジェニファーは基地に潜入してウィルたちを助け、通信機で合図を送ってくれ！」

ジョンとジェニファーは口を揃えて

「了解！」

「よし、では、手はず通りに！」

グラッドのレックスとクリスのジャックがそれぞれの位置に配置し、グラッドは

レックスに、

「よし、いくぞ！レックス！」

グラッドの言葉にレックスは咆哮を上げ、光学迷彩で姿を隠し、基地にいる旧帝国派ゾイドに攻撃した。攻撃を受けたキャノンブルとラプトルのライダーは、

「何処だ？どこから攻撃してきた！」

「ライダーに反応無し！敵の姿が分かりません！」

「とにかく、敵を基地に入れるな！」

基地の入口から離れた旧帝国派のラプトルとキャノンブルを見てグラッドは、

「よし、かかったな！ クリス、攻撃だ！」

「了解！」

クリスのジャックは空中から旧帝国派のゾイドを攻撃した。応戦するラプトルとキャノンブル、その様子を見たジョンとジェニファーは、

「よし、兵士が基地の入口から離れたな！今回は二人だから、入口のあそこにいる兵士の服を奪って侵入するぞ！」

「了解」

ジョンは拳銃を取り出し、上空に向けて撃った。銃声に気付いた二人の兵士はジョンとジェニファーの元に近付き、ジョンとジェニファーは回り込んで背後から二人の兵士

を気絶させ、その兵士の服を着用した。

「よし、これで、見張りは手薄だ！いくぞ！」

二人はそのまま入口の中に入った。二人は基地の中で、ウィルたちが捕らえられている部屋を捜した。

「ここらへんはいないようだな！上の階に行ってみるか！」

上の階に行った後、兵士が護衛している部屋を見つけた。

「どうやら、あそこみたいだな！」

「どうする？ 連中の注意を惹き付けるか？」

「いや、ここは敢えて単純な方法で行こう！とりあえず、先に俺が行く！」

ジョンは兵士の元に行き、

「あく、そろそろ交代の時間だ！」

「ん？もう、交代か！まだ早いんじゃないか？」

「外で敵襲があつてな！直ぐに兵士を出撃しなきゃならない状態になっていて、交代の時間を縮めたようなんだ！」

「そうか！まあ、この状況、ただ見張る訳にもいかなからな！じゃあ、後は任せた！」  
そう言い、二人の兵士は部屋から離れた。

「敵は手強いから気をつけとけよ！」

ジョンはジェニファーにVサインをし、部屋に入った。

「よう、皆さん！元氣しとったか？」

部屋に入ったジョンとジェニファーを見てウイルたちは、

「ジョン！ジェニファー！」

「エマちゃん、ユリスちゃんも大丈夫？」

「大丈夫です！ありがとうございます！」

「ウイル、リセル！エマちゃんたちにへんなことしてないわよね？」

ウイルとリセルを赤面し、

「からかうなよ！」

「ん？」

ジョンは何か気付いたかのように部屋にいた虫を捕った。

「どうしたの？ジョン！」

「いや、何かが、俺たちを見張ってたような気がしたんだが。どうやら、ただの虫だったみたいだ！」

ジェニファーはジョンが捕った虫を見て、

「いや、あなたの予想は外れていないわ！この虫、小型のマイコンチップが入っているわ！」

「何ー！」

「ふ、やっぱり、ここに来たようね！」

その時、ベケット少佐と兵士が部屋に入った。

「やっぱり、これはあなたのものだったのね！」

「そのゾイドはかつて惑星Ziにいた小型の昆虫型ゾイドを複製し、我がデスメタルの最新技術で改造したスパイゾイドなのよ。」

それを聞いたグラッドは、

「ち、どうやら、貴様の方が一枚上手だったようだ！」

「まあ、この状況じゃあ、他の連中を呼ぶことは出来ないわね！さあ、こいつらを捕らえなさい！」

ジョンとジェニファアは兵士に捕らえられ、部屋から出たベケット少佐は指令部に入った。指令部に入ったベケット少佐を見てシーガルは、

「どうした？ 一体何をしていた？」

「基地に二匹のハエが入ったので、さつき捕らえました！それより、声明の用意は出来たの？」

「ああ、全ての通信網を乗っ取った！これで全世界に流すことが出来る！」

「これで、ユリス陛下を皇帝メルビル二世として即位させ、真帝国が復活できるわね



!

「それにしても、まさか、現陛下の先祖であるハンナ皇帝陛下の映像をお前が持っていたとは！驚いたよ！」

「我がデスメタルの技術を持つてすれば、それくらい容易に手に入りますわ！それより、早く声明の発表を！」

帝都メガロポリス、皇帝の宮殿の前に大量のキルサイスと親衛隊専用機の赤いキルサイスが帝国の一般兵と機械兵と共に行進をしていた。それをタツカー元帥が見ていた。

「素晴らしい！これならいつでも出撃出来そうだ！」

タツカー元帥の横にいる技術陣が、

「はい、これらのキルサイスは我がデスメタルの最新技術により、更なる改良が施され、パワーと耐久性も反乱軍の愚かな連中が復活しようとしている真帝国時代のもの遥遥かに上回る性能を持ち、更に量産化も進んでいます！これで、反乱軍も容易に制圧出来るでしょう！」

「後は、オメガレックスが完成すれば、我が帝国軍の戦力は更に磐石なものとなる！真帝陛下もお喜びになられるだろう！」

そこに兵士が現れ、

「タツカー元帥！一大事です！」

「どうした？」

「テレビをご覧ください！」

帝都や各地の領域に旧帝国派レジスタンスの指導者のシーガルがテレビの映像に現れ、言った。

「世界中の諸君！我々旧帝国派は今の愚かなネオデスメタル帝国を倒し、かつての真帝国を復活させる！そして、我々には希望となられるお方がいるのだ！」

映像にユリスの映像が現れ、その横にはかつての真帝国ハンナ・メルビル皇帝の姿だった。

「このお方は、かつての真帝国ハンナ皇帝陛下の御子孫、ユリス陛下なのだ！我々はお方をお方を新たな皇帝メルビル二世とし、ここに真帝国の復活すなわち新帝国の建国をここに宣言する！」

諸君！今こそ、メルビル二世陛下を称え、ネオデスメタル帝国を倒すのだ！」

タッカー元帥はテレビを切り、通信機を使い、

「私だ。随分と派手に宣言させたようだな。」

通信相手のベケット少佐は、

「ええ、かつての真帝国宣言を真似てやらせました！これで、旧帝国派は我がデスメタルに宣戦布告したも同然！帝国民も黙ってはいません！」

「では、そろそろあの皇子に命じるとするか！」

タッカー元帥は通信を切り、アーネストのいる部屋に向かい、

「殿下！皇帝陛下の御慈悲だ！この度のごことはおとがめなしだ！ただし、さっき、反乱軍が設立した新帝国とあのライガーを始末せよ！とのご命令だ！」

もし、これでしくじったら、次は無いとのことで、失敗したら、王位継承権を剥奪なさるそうだ！絶対にしくじるなよ！」

アーネストは拳を握りしめ、

「わかった！」

アーネストはギルラプターに乗り、

「いくぞ、ギルラプター！あいつらをぶつ倒すぞ！そうだ！僕はデスメタル皇子なんだ！甘さは捨てる！父上に認めてもらえように！」

ギルラプターは真つ先に新帝国の基地に向かった。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 第20話 「皇帝出陣」

新帝国の基地から離れた場所で、グラッドはレックスの足元に寝込んで、クリスたちはトランプをしていた。

「あ、俺、上がり！」

「俺も上がり！」

「なに〜！また、俺ビリかよ！」

「アレックス、お前、頭だけじゃなく、運も悪いな！」

「やかましいわ！なあ、コマンダー！ジョンたちが万が一捕まった場合の計画の待ち時間にはまだ時間はあるけど、ホントに大丈夫なんだろうな！」

アレックスの問いにグラッドは、

「なあに、あいつなら、大丈夫！あいつは今まで一度も帝国に捕まったことはない！いくら、あの女がいたからといってヘマをやらかす奴じゃない！」

二人の会話にクリスは、

「それにしても、まさか、連中が真帝国、いや、新帝国を建国するなんてな！まさか、過去の旧帝国と真帝国のお家騒動が再現されることになるとはな！」

「ユリスにとつては、いい迷惑だ！まさか、皮肉にも先祖と揃って皇帝にされるとはな！だが、今回は過去の帝国のお家騒動とは状況が違う。何せ相手にしている帝国がネオデスメタルだということだ！」

「ああ、奴らは正義と秩序という名の暴力で世界を支配する帝国だ！連中を殲滅するまで手を緩めないだろう！」

「おまけにあの女がいるとなると、ますます状況は悪くなるだろう！」

「それにしても、あの女、一体、何を？」

「わからんが、今はジョンを信じて待つしかない！」

新帝国の基地に向かうギルラプター、アーネストはペンダントを見て、握りしめ、  
「エマ！お前のこと、疑ってごめん！でも、僕はネオデスメタルの皇子！お前とは手を取り合えない！」

新帝国軍の基地、ジョンとジェニファアはウィルたちのいる部屋とは別の牢に入れられていた。

「まさか、あんなスパイゾイドがいるなんて予想外だったぜ！」

「どうするの？ 私たち、捕まってウィルたちと離れ離れになったのよ！」

「なあに！ 慌てることはない！ こうなることは想定済み、ここは様子を見よう！」

指令部では、接近するギルラプターエンペラーの映像が流れ、映像を見たシーガルはベケット少佐に、

「お前の言う通り、ホントに来たようだな！」

「言った通りでしょう！」

「よし、直ちに皇子を捕らえる！」

「待ちなさい！ 兵士ではなく、ビーストライガーを出した方がいいわよ！」

「何故だ？ ギルラプターぐらい我ら新帝国軍のゾイドで十分だ！」

「あのギルラプターを甘く見ない方がいいわよ！ 心配ないわ！ 考えがある！」

ウィルたちのいる部屋にある人物が現れ、その人物はウィルに、

「ギルラプターが基地に接近し、シーガル閣下から君にギルラプターの討伐を命じた

「出撃してくれ！」

「お断りだ！俺は帝国の犬じゃねえ！」

「確かにそうだが、今は耐えて命令に従ってくれないか！」

「で、でも……！」

そこにエマが、

「あの、私をギルラプターの元に行かせてくれないでしょうか？」

「それは出来ない！悪いが、命令なんだ！従ってくれ！」

エマを見たウイルは拳を握りしめ、

「わかった！従う！」

「ウイル！」

「エマ！お前はここで待っていてくれないか！あいつは俺が引き受ける！」

そう言い、ウイルはその人物と部屋を出て、シーザーの元に行く。

「ここが君のゾイドの場所だ！大丈夫、君たちのゾイドには何も手を加えていない！」

「あんたは何故、ここにいるんだ！」

「訳ありさ！ここにいなきやならない理由があつてね！私の名はリヒャルト・シユバ

ルツ！君の名は？」

「俺はウイル！」



「ウイル！いい名だ！」

ウイルはシーザーに乗り、

「いくぞ！シーザー！」

ウイルの言葉と共に、シーザーは咆哮を上げ、基地の外に出た。目の前にはギルラプターエンペラーがいた。シーザーを見たアーネストは、

「やつと現れたか！ピーストライガー！今度こそ、貴様を倒して、僕が最強だということを実証する！」

「ギャラガー！いや、レイル！お前は何故そこまでして戦う！エマのことを理解したなら、彼女の言う通りにすればいいじゃないか！」

「黙れ！僕は帝国の皇子ギャラガー！父上に認められ、皇帝になるためには、お前を倒すしかないんだー!!」

アーネストの言葉と共にシーザーに突っ込むギルラプター、それを避けるシーザー、

「止めろ！お前と戦いたくはない！」

「黙れ！貴様だけは何としても倒す!!」

そのまま、シーザーに猛スピードで、突進するギルラプジェノスピノター、ギリギリ避けるシーザー、

「止めろ！そんなことしてエマが喜ぶのか？」

「うるさい！僕は認めて欲しいんだ！父上に！父上に認めなければ、僕は生きていくことが出来ない！ウワアアー!!」

アーネストはデスメタルキーを取り出し、

「ギルラプター！ 強制 解放！ デスブラストー!! 真瞬激殺！」

目にも止まらぬ速さで、シーザーに攻撃し、シーザーはそのスピードについていけず、ダメージを喰らってしまう。

「大丈夫か!?シーザー！くそ、やるしかない！いくぞ、シーザー！ 切り拓け、シーザー！ 俺の魂と共に、進化 解放！ エヴォブラストー!! ビーストオブクロウブレイク！」

しかし、ギルラプターは直ぐ様、その攻撃を避け、ウイングショーテルで、攻撃した。シーザーの身体に傷がつく。

「大丈夫か？シーザー。く、これだけ、言っても分からねえなら、俺がその根性叩き潰してやるぜ！」

映像で、その様子を見るエマたち、エマは戦うギルラプターを見て、

「レイル、どうしてあなたは戦うの？どうしてわかりあおうとしないの？」

泣き崩れるエマにユリスは、

「エマ……。」

それを見たカティアは、

「殿下……。」

シーザーは反撃をしようとするも、ギルラプターの攻撃に耐えることが出来ず、身動きが出来なくなってしまう。それを見たアーネストはイライラしたように、

「どうした？ それだけ、言つてて何も出来ないのか！ 所詮は、お前は群れなければ弱いってことか！」

それを聞いたウイルは怒り、

「何！ シーザー！ もう一度行くぞ！ ビーストオブクロブレイク!!」

「やつとましになったか！ だが、これは避けられるかな!? 真・音速殺!!」

ギルラプターの背中のジェットブースターが放出し、ギルラプターのスピードは一気に加速した。

「取つて置きとして残すつもりだったが、もはや、その必要はない！ これで終わりにする!!」

ギルラプターはシーザーのビーストオブクロブレイクを避け、シーザーに攻撃の一撃をかます。攻撃を受けて苦しむシーザー、

グオオー!!

シーザーはよろめいて倒れてしまった。

「シーザー！しっかりしろ!!」

シーザーを見たアーネストは怒り狂った目をし、

「少しは楽しめると思ったのに！全く期待はずれだったよ！これで止めだ!」

止めを刺そうとしたとき、ギルラプターの背中中のジェットブースターから電撃が走り、同時にギルラプターの身体にも電撃が走り、ギルラプターは苦しみ出した。

「どうした？ギルラプター、何が起こったんだ?」

モニター越しに見たベケット少佐は、クスツと笑い、

「そりゃ、そうよ！音速殺を発動した後、まともに動ける訳がないじゃない!」

これで、あいつは身動きが出来ないわね。アルドリッジ、フアングタイガーで皇子を捕らえなさい!」

それを聞いたアルドリッジは、

「何故俺が？ お前がやらないのか!」

「私はネオデスメタルの人間よ！ネオデスメタルの者が皇子を捕らえることなんてできないじゃない！それとも、自分のゾイドの性能に自信がないの?」

その横にアーミテージ大尉が、

「そういや、お前の先祖はかつてジェノスピノの部隊を率いて暴れまわったらしいが、首都攻略出来ず、ライガー相手に無様な敗北を負ったらしいじゃねえか!」

しかも今のタイガーに乗っても散々な負けっぷりだとも聞いたぞ！ 帝国の面汚しつてのはまさにこのことだな！ハハハハ！！」

「何だと、貴様！」

シーガルはアルドリッジに、

「止せ、ここは奴の言う通りにしろ！」

不本意ながら、フアングタイガー改に乗るアルドリッジ、フアングタイガー改はギルラプターの前に出て、

「制御トリガー解除、兵器 解放！ マシンブラストー！！」

マシンブラストしたフアングタイガー改のツインドフアングがギルラプターに突き刺さり、苦しみギルラプター。

グオオー！！

その時、デスマタルキーが装置から離れ、デスブラストが解除され、ギルラプターは倒れ、アーネストはコクピットから放り出された。すかさず、新帝国軍の兵士が現れ、アーネストを取り押さえた。ベケット少佐とシーガルはその場に現れ、二人を見たアーネストは、

「ベケット！お前、裏切ったのか？！」

「ホホホ、裏切つてはないわよ！これも帝国のためにやっているのよ！お前はそなた

めの駒なのよ!」

「何だと!」

バン!

「グ……、」

ベケット少佐はアーネストの腹を殴り、アーネストを気絶させた。それを見たウイ  
ルはシーザーから降り、

「待て! 勝手なことは許さないぞ!」

しかし、ウイルも兵士に取り押さえられ、

「あんたも大人しくしなさい!」

バン!

ベケット少佐はウイルの腹を殴って、気絶させ、ウイルとアーネストはそのまま基地  
に連行された。基地から離れた場所にグラッドたちがその様子を見て、アレックスはグ  
ラッドに、

「おいおい、これはまずい状況じゃねえか! 俺たちもそろそろ助けに行つた方がいい  
ぜ!」

「いや、ジョンの連絡が来るまで待て!」

「いや、せやかて!」

「ここで、動いたら、奴らの思うつぼだ！ チャンスを待て！」

基地に戻ったベケット少佐はシーガルに、

「これで、皇子はこちらのもの。さて、シーガル！ 早く、帝国と通信を！」

「わ、わかった！」

シーガルは通信を開き、通信の相手はタツカー元帥だった。

「これは、これは、シーガル殿！ 私に何の用ですか？」

「要件は一つ、我々の新帝国の建国と皇帝メルビル二世陛下を現皇帝ギアラガー三世の王位継承者として承認する条件で、我々と講和していただきたい！」

「ええ、もちろんです！ 話はベケット少佐から聞いております。皇帝陛下はちようどユリス陛下を後継ぎになさるつもりでしたので、その条件受け入れます！」

「では、我々がメルビル二世陛下と共にスナイプテラでそちらに向かいます！」

「あ、その必要はありません！ 皇帝陛下が直々にそちらに向かいますので、あなた方はそちらで、お待ち下さい。」

「では、我々の条件を受け入れて降伏することで宜しいのですね！」

「もちろんです！ 我々ネオデスメタル帝国は約束を破りませんので、では、失礼！」  
通信を切ったタツカー元帥は、

「直ぐに帝国国民を宮殿前に集結させろ！ 一仕事だ！」

多くの国民が宮殿の広場に集まり、タツカー元帥は宮殿の演説場に立ち、

「諸君！非常に悲しい知らせが届いた！我が愛するギヤラガー殿下が反乱軍の捕虜になってしまった！」

それを聞いて驚愕の表情をする帝国民、

「反乱軍は殿下を人質に取り、皇帝陛下を差し置いて、あんな小娘を皇帝に立て、身勝手に帝国を名乗る！」

諸君！こんなことが許されてよいのか！！過去の真帝国も所詮は愚かな連中が世界を混乱させるために創った帝国に過ぎん！

奴らは世界の秩序を乱す悪だ！諸君よ、今こそ、立ち上がれ！秩序を乱す悪に裁きを下すときだ！正義は我らネオデスメタル帝国にある！我らは秩序を守る正義の使者であり、この世に戦争を無くす平和の使者である！

そして、我らが皇帝ギヤラガー三世陛下は神である！さあ、諸君！愚かな反乱軍を倒



し、世界に平和をもたらすのデー!!」

それを聞いて、右手を上げて歓声を上げる帝国国民、

「ウオオオー!!」

「反乱軍をぶつ潰せ!!」

「秩序を乱す悪に正義の鉄槌を!!」

「皇帝陛下万歳!!」

「ギャラガー! ギャラガー! ギャラガー!!」

演説を終え、宮殿の中に入るタツカー元帥、そこにデーニッツ中将がいた。

「これで、帝国国民を戦争に駆り出すことができ、新帝国初めの反乱軍に味方するものはいなくなった訳ですな!」

「当然だ! 正義は我がネオデスメタル帝国にあるのだ! それに間違いはない!」

「元帥殿らしいですな! それにしても、あの若僧を反乱軍の捕虜にするとは! 相変わらず、えげつない手を使いますな! あの女は。」

「まあ、既に皇太子はあの方と決まっている! あの方こそ、本物の帝王ギャラガー様! あの若僧は所詮、前座に過ぎん! あの小娘と遊ばせたのも元はといえば、そのためだ!

それに、反乱軍が若僧を殺せば、反乱軍に対する国民の怒りは更に倍増するから、好都合だ。」

そこに、足音がし、ある人物が2人の前に現れた。皇帝ギヤラガー三世だった。

「上手くいったようだな！」

「皇帝陛下!!」

「さて、反乱軍には、私がそちらに行つて交渉に行くと思わせているんだつたな！なら、私自ら指揮を取らなくてはな！」

「皇帝陛下御自らですか？」

「そうだ！私がジエノスピノに乗つて出撃し、愚かな反乱軍に我が帝国に逆らつたことを後悔し、恐怖を植え付ける！この戦いで、反乱軍に終止符を打つ！」

「了解しました！」

「それと、タツカー！留守の間、あいつの世話も頼むぞ。私の大事な息子で、皇太子だからな。もし、私に万が一のことがあつた場合、あいつに帝位を継がせてくれ！」

「はー！」

やがて、宮殿の周りには、全身に赤いカラーリングが施されたキャノンブル、バズートル、ギルラプター、ナックルコング、ステイレイザー、ガブリゲーター、デイメパルサー、ステゴゼーゲ等、親衛隊専用のゾイドが何千、何百と集結し、宮殿の周りには帝

国国民が見守っていた。

その時、地面が揺れ、宮殿の広間が2つに割れ、下からジェノスピノが現れた。ジェノスピノのkokピットには赤い礼服に身を包んだギヤラガー三世が乗っていた。

「ふ、こいつで暴れるのは久々だ！ さて、反乱軍共、私とジェノスピノの前に膝まづくがいい!!」

ギヤオオオオー!!

ギヤラガー三世の言葉と共に、ジェノスピノの目が赤く光り、咆哮を上げ、その咆哮は帝都全域に広がっていった。それを見た国民は一斉に歓声を上げた。

「ウオオオオー!!」

「ギヤラガー! ギヤラガー! ギヤラガー!!」

ジェノスピノはゆっくり歩いて宮殿を離れ、その後ろに親衛隊専用のゾイドたちがそれに付いていき、行進していく。それを宮殿の中で見ていく赤い礼服に身を包んだ少年とタツカー元帥がいた。少年は、

「あれがジェノスピノ。」

「はい、いずれ殿下も乗れるようになります!」

「オメガレックスが完成したら、いずれボクも父上のようなになれるのか! 楽しみだね!」

ジェノスピノ率いる大部隊は帝都を出て、新帝国の基地に向かった。一方、同盟軍の本拠地では、ジェノスピノが動いたという報告が出て、

「総司令、ジェノスピノが動いたという報告がありました！」

「ああ、知っている！俺の相棒が教えてくれた。どうやら、また世界は混沌になっていくようだ！力を貸してくれるか？相棒！」

同盟軍総司令代理の男の目の前には、かつて、旧デスメタルを壊滅した伝説のライオン種、ワイルドライガーだった。ワイルドライガーは男の言葉に応えるように目一杯咆哮を上げた。

グオオー!!

T o b e c o n t i n u e d

## 第21話 「灼熱の破壊竜」

都市クーリガー、ここは旧共和国派に属し、ネオデスメタル帝国の支配を受けていない都市である。街にいる人々は、

「旧共和国派のレジスタンスたちが守ってくれるおかげで、この街は平和だなー」

「でも、大丈夫か!? もし、ここに帝国軍が攻めて来たらー!」

「大丈夫だって! レジスタンスがいるから!」

その時、地面が揺れ、

「なんだ? この音は!」

人々が見た先には、ジェノスピノと親衛隊による帝国軍の大部隊だった。旧共和国派レジスタンスのガノンタス、ラプトール、ラプトリア、トリケラドゴス、スコーピアが一斉攻撃したが、ジェノスピノには、一切通用せず、A—Zロングキャノンで次々と蹴散らし、街の方にも砲撃した。ジェノスピノが街に侵攻し、人々は逃げ惑う。

ジェノスピノは逃げ惑う人々に向けて火炎放射を吐き、ソーザーバルカンとA—Zロングキャノンで、ビルを破壊していった。僅か15分足らずで、都市は跡形もなく壊滅され、ジェノスピノは親衛隊を率いて、そのまま侵攻していった。その様子を映像で見

たシーガルは、

「これは、どういうことだ？ ベケット！話が違うぞ！」

その時、ベケット少佐がシーガルに銃を向け、

「貴様、図つたな！」

「あら、失礼しちゃうわね！ちゃんと陛下が交渉に行くことは本当のことじゃない！  
ま、殲滅という名の交渉だけど…。」

「だが、ネオデスメタルごときに我が新帝国は終わらせんぞ!!」

「それはどうかしら！あんたの頼みの綱の兵士もゼーんぶ、アーミテージがやっ  
ちやつたわ！」

ベケット少佐が指差した方の映像には、屍状態となったキルサイス、キャノンブル、バ  
ズートル、ラプツールが全て倒れこみ、その真ん中にステイレイザーG3がいた。それ  
を見て絶望した顔をするシーガル、

「ホント、当時の旧帝国と真帝国もだけど、その生き残りも役に立たない連中ばかりね  
！ま、あたしに言わせれば、あんたたち、真帝国いや、新帝国は我がネオデスメタルの  
囃ませって、ところね！」

さあ、大人しく全員、ビッグウイングに乗ってあたしの指定した場所まで行ってもら  
うわよ！」

「ビッグウイング？ 何故、貴様が知っている!？」

「あたしには、全部お見通しよ！スパイゾイドで、あんたたちの情報は全て手に入れたからね！」

あんたたち、旧帝国の移民船を元に改造した巨大スナイプテラのビッグウイングで、メガロポリスに行くつもりだってことも知っているからね！望み通り、陛下の元まで行ってもらおうよ！」

「く……！」

シーガルはしぶしぶ要求に従い、ウイルたちやジョンたちも巨大スナイプテラのビッグウイングの元に連れていかれ、乗せられた。入る途中、ジョンは手にベケット少佐と同じスパイゾイドを持ち、それを解き放った。

基地から離れた場所にグラッドは何か気づいたように通信機を見た。

と同時に、基地が割れ、中から、巨大スナイプテラのビッグウイングが現れ、そのまま離陸していった。

それを見てアレックスとアッシュはは啞然とし、

「デケエプテラ！」

「でかすぎだぜ！」

「おい、グラッド！俺たちも……！」

アレックスの問いにグラッドは、

「ああ、さつきジョンから連絡があつた！奴らが向かうのはあそこだ！俺たちもあの後について行くぞ！」

それを聞いたクリスは、

「ついに、動く時が来ましたか！」

「ああ、それと総司令代理のストームにも知らせないと！」

ビッグウイングが向かった先は、新帝国に属する都市ゼツガー、ビッグウイングはその都市に離陸し、中から、ベケット少佐に銃を向けられたシーガルとアルドリッジ、そして、ウイルたちが出た。ベケット少佐はシーガルに、

「さあ、あんたたちはここで、大人しくしなさい！もうすぐ陛下がこちらに来られるわ！貴様ら、愚かな反乱軍への裁きをね！」

ベケット少佐を見たりセルは周りの兵士を蹴散らし、ベケット少佐の元に突っ込んだ。



「親衛隊の奴らめ！俺の家族を殺した挙げ句、ユリスまで巻き込みやがって！許さない！！」

「全く、しようがないガキね！いいわ、直ぐに楽にさせてあげる！」

そう言つてリセルに銃を向けたその時、別の銃声がし、ベケット少佐の銃を落とした。「残念だったな！毘にかかったのは、てめえの方だ！」

現れたのは、グラッドのレックスにクリスやクルーガーたち、精鋭部隊、同盟軍、旧共和国派のゾイドたちが取り囲んだ。ベケット少佐は驚いた表情で、

「馬鹿な！何故、反乱軍が？」

「それは、俺のせいさ！」

と同時に、キールとクーデリアが現れ、ジョンとジェニファアが乗っていた。

「そんな馬鹿な！あるとき、ボディチェックで、通信機は全て没収したはず！」

その問いにジョンは帝国のスパイゾイドを取り出し、

「あるとき、旧帝国派の基地にこいつを見つけてな！何故、お前たちが俺たちの動きを知っていたのか、ようやくわかって、こいつを新たに改造して、コマンダーやキールへの通信用として使い、コマンダーたちに知らせて呼んだって訳さ！」

「なるほど、やるわね！」

その時、ドライパンサーG3とアーミテージ大尉の乗るステイレイザーG3が現れ、

「でも、一つ誤算だったのは、あたしたちを相手にしたことね！あんなたちの弱さは立証済みよ！あたしとアーミテージで、十分倒せるわ！それにもうじき陛下も来られる！あんなたちはもう終わりよ！」

「それはどうかな!？」

「ふん、あの世で後悔するといいわ！アーミテージ、やっちゃって！」

ステイレイザーがレックスたちに襲いかかろうとしたその時、一つの黒い影が現れ、  
「燃えろ、キング！俺の魂と共に、進化 解放！エヴォブラストー!! キングオブクローブレイク!!」

黒い影はシーザーに似た技で、ステイレイザーをぶつ飛ばした。ベケット少佐は驚愕した顔で、

「馬鹿な！親衛隊一個大隊にも匹敵するアーミテージのステイレイザーを!？」

影の正体はかつて、ゾイドの王と呼ばれ、200年前、旧デスマタルを壊滅させた伝説のワイルドライガーだった。

「まさか、かつて、旧デスマタルを壊滅させたフリーダム団リーダーのワイルドライガーだっていうの!？」

周りを見たベケット少佐は、

「く、(まさか、あのワイルドライガーを従う男が反乱軍にいたとは予想外だわ！まし

てや、アーミテージのステイレイザーすら圧倒するとなると、分が悪いわね！)

アーミテージ！ここは一時撤退よ！でも、覚えてらっしゃい！もうじき、陛下がこちらに来られる。いずれ、あなたたちは陛下の恐ろしさに恐怖するわ！ホー、ホッホッホ！

ベケット少佐は煙幕を出し、煙が晴れた後に二人の姿は見えなかった。ジョンとジェニファアは、ウイルトリセルたちの元に行き、

「大丈夫？カップルさん！」

ウイルトリセルは照れて、

「あ、ありがとう！でも、カップルは止せ！」

グラッドたちも立ち寄り、

「少し、時間がかかっちゃったが、無事で何よりだ！」

ウイルはワイルドライガーを見て、

「そのライガー、もしかして、ワイルドライガー!?」

ウイルの質問に男は、

「こいつか？こいつは俺の相棒のワイルドライガーのキング！そして、俺の名はストーム・ブレダだ！よろしくな！」

ストームの服についているバッジを見たエマは、

「あなたのそのバッジはもしかして！」

「ああ、こいつは俺の先祖が結成したゾイドチーム、フリーダム団のバッジだ！今や、こいつはブレダ家の象徴さ！」

「聞いたことがあるわ！200年前、世界を支配しようとしていたテロ組織、旧デスメタル帝国を壊滅させた伝説のゾイドチームがいるって話を父から聞いたわ！」

「俺もずいぶん、有名人になってしまったな！そう、俺はそのフリーダム団リーダーの子孫で、こいつは先祖が初めて相棒にしたライガーだ！今じゃ、すっかりかけがえのない俺の相棒さ！」

ウイルは、目を輝かせ、

「お、俺、実はあなたに憧れてました！ずっとあなたのようなゾイド乗りになりたいと！」

「それって、俺のファンか？まいったな！」

目を輝かせるウイルにグラッドは、

「ストームは、俺たちが不在の間、総司令代理として同盟軍を仕切っていたが、実は俺が同盟軍に入る前の元総司令で、同盟軍の創設者だ！俺に総司令の座を譲って、時々、姿を消してはいたが、再び、来てもらったんだ！それにこう見えて俺よりリーダーの素質があるからな！」

「こう見えてつてなんだよ！俺、軍人じゃねえし、そもそも向いてねえよ！」

「（俺だつて向いてねえよ！）さて、もうじき、ここにジェノスピノ率いる帝国軍が到着する。俺たちはここを奴らとの決戦場とする！とはいえ、相手はかつて、ゾイドクライシスで世界の3分の1を壊滅させたあのジェノスピノだ！しかも、帝国軍のほとんどは親衛隊で、しかもその数は万を越す！」

そこで、この住民全員をあらかじめ避難させて全て空っぽ状態にし、奴らがこの街に来たとき、俺たちが奴らをここに釘付けにし、街中に設置している爆弾を全て爆破して、奴らを叩き潰す作戦だ！

だから、ここには、ジェノスピノを足止め出来る奴だけ残し、後はこの街から避難してくれ！エマ、ユリスはあのビッグウイングに乗って安全な場所に避難しろ！ウイールセル、お前らもだ！」

それを聞いたウイールは、

「そんな！俺だつて戦う！」

「駄目だ！ジェノスピノはお前が想像しているより、遥かに強大なゾイドだ！お前までいたら、真つ先に破壊されてしまうぞ！」

「それでも、俺は戦う！仲間を、皆を守るために俺だけ見ているだけになるのは嫌なんだ！」

「俺も行かせてくれ！親の仇を取りたいんだ！」

ウイルとリセルを見て、グラッドはため息をつき、

「お前たちはホントにしようがないガキだな！わかった！だが、指揮は俺が取っている。俺の命令には必ず従え！」

「わかった！」

それを見て心配そうな表情をするエマとユリス、

「大丈夫だ！エマ、俺は必ず戻ってくる！お前は安全な場所に避難してくれ！」

「ユリス、俺は親の仇を取るために戦う！お前は安全な場所に避難しろ！」

「ウイル、気をつけてね！」

「リセル、必ず戻って来て！」

エマとユリスはビッグウイングに乗り、グラッドはストームに、

「ストーム、ここからは俺が指揮を取る。お前は他のレジスタンスに呼び掛けて味方を増やしてくれないか！」

「了解！」

その時、警報が鳴り、

ビービービービー！

「非常事態、非常事態、ジェノスピノが進行！市民たちは速やかに避難してください

！

「どうやら、もう来たようだ！よし、皆、抜かるなよ！」

都市の出入口の前にジェノスピノが先頭になって親衛隊が進行した。同盟軍と旧共和国派のスコーピア、ガノンタス、カプター、トリケラドゴス、ラプツール、ラプトリアがジェノスピノに向けて一斉砲撃をする。その一撃は2個大隊を殲滅できる程の威力であるが、煙が晴れた後のジェノスピノには一切の傷がついていなかった。

それを見て、驚愕する同盟軍とレジスタンス兵士、ジェノスピノはA―Zロングキヤノンを放ち、一瞬で葬った。ジェノスピノに乗っているギヤラガー三世は、

「つまらん！あまりに齒ごたえが無きすぎて、ジェノスピノの遊び相手にもならん！」  
その時、グラッドのレックスが現れ、

「噂以上に図体のデッケエ奴だぜ！だが、やれるよな？レックス！」

グオオー！

グラッドの問いに対して咆哮を上げるレックス、

「狙い撃て、レックス！俺の魂と共に、進化 解放！エヴォプラスター！！ファントムガトリング！！」

レックスはファントムガトリングをジェノスピノの頭やコクピットに向けて撃ち込んだ。ジェノスピノには一切通用しなかったが、レックスはそのまま背を向け、尻尾を振ったり、まるで挑発するかのようには後ろ足を蹴りながら走っていった。それを見た親衛隊兵士は、

「あの狐野郎！皇帝陛下を侮辱しやがって！絶対に許さん！我ら親衛隊が死の制裁を与えてやる！」

しかし、ギヤラガー三世は、

「余計な真似をするな。お前たちは引っ込んでいろ！！（ふん、さんざん撃ちまくった後、逃げるとは、誘いに乗るつもりか！つまらん手だが、少しは楽しめそうだ！）」

ギユオオオー！！

咆哮を上げるジェノスピノ、それを見たギヤラガー三世は、

「そうか、お前も楽しみたいのか？この素晴らしい殺戮ショーを！ならば、敢えて誘いに乗ろう！」

そして、そのままジェノスピノだけレックスを追って走っていった。それを見たグラッドは、



「ジェノスピノだけ誘いに乗ったか！だが、ちようどいい。一番厄介なのはあいつだからな！」

街中に入り、ジェノスピノはレックスを追いかけた。ジェノスピノはその大きさの割には、かなりのスピードで走っていた。

ジェノスピノは追いかけながら、A-Zロングキャノンと頭部のキャノンをレックスに向けて撃ち込み、A-Z火炎放射機を放った。レックスはそれを避けるが、ジェノスピノの攻撃で建物は次々と倒壊していく。レックスはそれらを避けながら走っていく。

しかし、後ろを見たら、ジェノスピノはそれらをものともせず、倒壊した建物を踏み潰したり、振り払ったりしながら、追いかけた。レックスは超高層ビル街のところまで走っていった。超高層ビルに着き、グラッドは声を上げた。

「今だー！」

グラッドの掛け声と共に、クリスのジャック、ジェニファーのクーデリア、ジョンのキール、アレックスのウィーリィ、アッシュのバンプ、ケンのゼル、クルーガーのゴルドが現れた。

「ワイルドブラストー!!」

全員が一斉にワイルドブラストし、ウィーリーとバンプがジェノスピノの足元にいき、ウィーリーがジェノスピノの足に頭突きした。ジェノスピノにはそれでも通用しなかったが、同時にバンプの尻尾がジェノスピノの片足に巻き付いてジェノスピノの両足を防いだ。それを見たギヤラガー三世は、

「それがどうした？ 口さえ動けば、問題ない！」

ジェノスピノは火炎放射を放つが、ジャックとクーデリアはそれを避け、

「うるせーとかげだぜ！ ジョン、ジェニファー、あれをやるぞー！」

「了解！」

ジャックはスカイスラッシュをジェノスピノに噛まし、クーデリアの背中に乗ったキールがジャンプして糸を吐き、ジェノスピノの口をふさぎ、そのまま身体を巻き付けた。ギヤラガー三世は、

「これは!？」

更にゴルドは頭にゼルを乗せ、そのままグランドハンマーの態勢を取り、ゼルはグラウンドハンマーの威力で飛び、ジェノスピノに一撃を噛ました。少し怯むジェノスピノ、しかし、ギヤラガー三世は、

「中々の威力だが、それで勝ったつもりか？」

糸をほどこうとするジェノスピノ、しかし、足元には、既にウィーリーとバンプの

姿はなく、足元及び全身が建物と一緒に糸に巻き付けられた。それを見たグラッドは、「作戦通り！これでフィニッシュだ！」

グラッドはスイッチを押し、超高層ビルが爆破してジェノスピノ目掛けて倒壊していく。

「ふん、そんなもの、この糸さえほどけば！」

しかし、レックスたちは超高層ビル街の根元をファントムガトリングで攻撃し、超高層ビルが倒れやすいようにした。倒壊していくビルを見て、グラッドは、

「よし、今だ！全員ここから離れろ！」

糸をほどこうとするジェノスピノ、しかし、間に合わず、全ての超高層ビルが倒れ、ジェノスピノは完全に超高層ビルの下敷きになった。

「やった！作戦成功だ！」

「いくら、ジェノスピノがどれだけの化け物だからって、これだけのデツケエビルの下敷きになったら、完全にペツちゃんこだぜ！」

その時、シーザー、デルが現れ、ウィルはグラッドに、

「ひどいよ、グラッド！俺たちを参加させないなんて！」

「そう言うな、こんな作戦、流石にお前では無理だろ！それにこれでジェノスピノは倒した。後は残りの親衛隊を片付けるぞ！」

しかし、その時、地面が揺れ、

「な、なんだ？地震か！」

「いや、倒れたビルのところ揺れている！」

その時、倒壊したビルが爆発し、そのままジェノスピノが這い上がった。ジェノスピノは無傷だった。それを見て驚愕するグラッドたち、

「馬鹿な！あれだけのビルの下敷きになっても無傷だと！」

ギヤラガー三世は首をカクカクし、

「うーん、ちよつと効いたかな？だが、おかげで肩凝りが治ったよ！これでようやく楽しめそうだ！では、ちよつと本気で行くぞ！」

「これで、本気じゃないだと！化け物だ！こうなつた場合なんて想定してねえぞ！」

ウィーリィー、バンプ、ジャック、キール、ゼルがジェノスピノに向けて突っ込むが、ジェノスピノは尻尾で風ぎ払い、一撃でダウンさせた。それを見たギヤラガー三世は、

「ん？もう終わりか！？少しは楽しめると思ったのに、残念だ！それにしても、これでダウンとは、同盟軍も案外大したことなきそうだな！」

ジェノスピノを見たりセルは、拳を握りしめ、

「ギヤラガー！お前だけは許さない！セカンドギア、ハウリングシャウトー!!」

しかし、ハウリングシャウトを食らってもジェノスピノは無傷だった。

「許さない、許さない！お前だけは！！ ウオオー！！」

「止せ、リセル！」

デルはそのままジェノスピノに突っ込んだが、ジェノスピノは前足でデルを掴んだ。

「なんだ？この子犬は!?!この私に歯向かうというのか？」

リセルは怒り狂った目をし、

「俺は覚えている！ジェノスピノに乗って俺の故郷を滅ぼしたお前の姿を!!」

リセルを見たギヤラガー三世は、

「貴様は、ああ、思い出したよ！確か、私が完成したばかりのジェノスピノの性能テストのために旧ネオヘリックを制圧したときにいた小僧だな！

タツカー元帥が殺したはずだが、まだ生きていたとは！しぶといね！いつそのこと、あのとき、死ねば、親と再会出来たのにね！」

「ふざけるなー!!」

しかし、ジェノスピノは掴んだ前足でデルを握り潰す。

グオオー!!

苦しむデル、

「ハンターウルフごときに、この私に歯向かうとは、身の程知らずだ！だが、安心しろ！直ぐに親の元に会わせてやる。」

ジェノスピノはデルを握り潰し、デルのソニックブーストが破壊された。それを見たウイルは、ジェノスピノに突っ込み、

「止めろー!! ビーストオブクロブレイク!!」

しかし、ジェノスピノはシーザーのビーストオブクロブレイクも通用せず、シーザーは吹っ飛ばされた。

「なんだ? 今度は子猫か!」

ウイルはギャラガー三世に、

「これ以上、俺の仲間を傷つけるな!」

「どっかで見た顔だが、お前、名前は?」

「俺の名はウイル、ウイリアム・ロバートソンだ!」

「ロバートソン? ああ、思い出した! 貴様、デイビッド・ロバートソンのせがれだな!」

「何? 父さんを知っている!」

「聞きたいか? 貴様の父親のことを!」

それを聞いてクルーガーは、

「止めろ、ギャラガー! その事を話すな!」

「教えてやろう! 貴様の父、デイビッド・ロバートソンはかつて旧共和国派の幹部だった! そして、奴は死んだ! この私が殺した!」

「な、なんだと!？」

「あのとき、旧ネオヘリック制圧の時に私のジェノスピノに恐れをなして逃げる奴が続出した中、白いハンターウルフだけが私に立ち向かった。そう、貴様の父だ!」

そいつはこのジェノスピノ相手によく戦った!だが、私のジェノスピノに全く歯が立たず、最後はマシンプラストで真つ二つにしてウルフ共々、殺してやった!あのときの無様な敗北は実に滑稽だった!投降すれば、命は助けてやったのに!」

それを聞いたウイルは、

「(そんな、父さんが旧共和国派の幹部、しかも、死んだなんて!?) 父さんはいつも仕事で忙しかったけど、どんな仕事をしているかは俺には教えなかった。あのとき、もし、帰って来なかったら、母さんを頼む! って言ってたのは、俺と母さんを戦争に巻き込みたくないため、話さなかったのか!)」

ゆ、許さない! お前だけは、お前だけは絶対に許さない!」

ビッグウイングの中で、映像でその様子を見ていたエマは、

「ウイル、駄目! ジェノスピノと戦っちゃ駄目!」

「ウオオー!! ビーストオブクローブレイク!!」

しかし、ジェノスピノは前足でその攻撃を防ぎ、更にそのままシーザーを踏みつけた。 「いくら、ライオン種といえど、私のジェノスピノでは、無力に等しい!」

そう言い、ジェノスピノはシーザーのタテガミクローを前足で強引に剥がした。

「さて、次はその粗末なアーマーを剥がすとするか!」

ジェノスピノは前足でシーザーのアーマーをゆっくり剥がす。

グオオー!!

アーマーを剥がされ、苦しむシーザー、

「シーザー! く、止めろ!」

映像を見たエマは、

「止めて、もう止めて!」

ジェノスピノによって、アーマーのほとんどが剥がされるシーザー、

「しかし、どうもそのライオン種には、何かしらの因縁を感じる! このままでは、終わらせん!」

更にジェノスピノは追い討ちをかけるかのように、シーザーを喰わえ、そのまま、シーザーを噛み砕き、更にジェノスピノは前足でシーザーの後ろ足を引きちぎった。ジェノスピノはシーザーを噛み砕きながら、そのまま火炎放射を放った。アーマーを剥がされたため、シーザーの身体がゆっくり溶解していく。シーザーは更に苦しんだ。映像を見たエマは、

「いやー!! お願い、もう止めて! シーザーが死んじゃう!」



シーザーの関節がボロボロになっていく中、ジェノスピノは喰わえたシーザーを吐き出し、

「随分、無様な姿になったな！まるで、毛皮を剥がされた子猫ちゃんみたいだな！だが、もうこれ以上、苦しむことはない！せめてもの情けだ！楽に死なせてやる！お前の父とウルフを葬ったこの技でな！」

それを見たグラッドは、

「一体、何をする気だ！」

ギユオオオー!!

ジェノスピノは咆哮を上げ、

「制御トリガー解除、ジェノスピノ！ 兵器 解放！ マシンブラストー!!」

マシンブラストした時、ジェノスピノの背中のジェノソーザーが前方に出て、ノコギリが回転した。それを見たグラッドは、

「まずい、あれを喰らったら、アウトだぜ！クルーガー、ウィルとシーザーを助けるぞ！」

「わかった！」

「これで、終わりだ！ジェノサイドクラッシュャー!!」震えながらも何とか前足だけで立ち上がろうとするシーザー、しかし、ジェノスピノの刃がシーザーに襲いかかる。その

時、レックスとゴールドが現れ、レックスがシーザーに突進し、シーザーを弾き飛ばした。しかし、レックスとゴールドはジェノサイドクラッシュの餌食になり、レックスのA―Zインフィニティガトリングと後ろ足が真つ二つに破壊され、ゴールドはハンマーボーンが真つ二つに破壊され、アーマーも一部破壊された。ギヤラガー三世は残念そうに、

「ち、はずしたか!」

「皆、撤退だ!」

シーザーとレックスはジャックとクーデリアに運ばれ、そのまま、ゴールドたちもそれに付いていつて撤退して行つた。それを見たギヤラガー三世は、

「なんだ?もう終わりか!?!どうせなら、この私の手でスクラップになつて欲しかったのに!」

街から出た後、グラッドはスイッチを押し、

「だが、今度こそ。これでフィニッシュだ!」

グラッドがスイッチを押したとたん、街中に設置されている爆弾が全て爆破し、ジェノスピノはその爆発に飲み込まれた。街は一瞬で火の海になった。

「ハアハア、これで生きてたら、完全に化け物だぜ!」

しかし、クリスが双眼鏡で見た時、

「コマンダー!あれを!」

グラッドも慌てて、双眼鏡を見、火の海になった街の中にジェノスピノがいた。何とジェノスピノはそれでも無傷だった。コクピットにいるギヤラガー三世は、

「愚かな虫けら共！誰もこの私を止めることはできぬ！フッフ、ハハハ、ウワーハツハツハツハツ!!」

ギユオオオー!!

ギヤラガー三世の笑い声と共に、咆哮を上げるジェノスピノ、それを見たグラッドたちは絶望的な表情をし、ウィルはシーザーを見て、目が死んだかのような暗い表情をした。

To be continued

## 第22話「甦れ、シーザー」

新帝国が首都として置いている旧ネオゼネバスシティ、シーガルは兵士たちに、

「なに！また、制圧されただど!?」

「は、ゼツガーに続き、我が新帝国に属する都市が次々とジェノスピノに破壊されていきます!」

「何としても、連中を食い止めるのだ!全ての兵力をつぎ込んでもやれ!1200年以上経った今になってようやく真帝国を復活させたのだぞ!ネオデスメタルごときに滅ぼされてなるものか!」

「は!」

「ところで、例の皇子とフィオナ皇帝陛下の血を引く強化人間の小娘はどうしてる?」  
「は、何度も、我が新帝国に協力せよと言っているのですが、あくまでネオデスメタルの人間だから、協力は出来ないと断固拒否しています!」

「とにかく、あの二人を我が新帝国の戦力にするのだ!」

「は!」

「全く、何てことだ!」

牢屋に入っているアーネストはゼツガーでの映像を見て、

「父上、ジェノスピノは僕を王位継承者としてジェノスピノを与えると約束したけど、父上は僕を見捨てたの？」

「いや、そんなはずはない！父上が僕を見捨てるなんて絶対にあり得ない！」

グラッドたちはジェノスピノとの戦いで傷ついた相棒ゾイドの修理をしていた。クリスはグラッドの元に行き、

「どうだ？様子は！」

「ああ、何とか致命傷は免れた！だが、ガトリングをやられた。次、戦闘に出れる状態じゃない！ゴールドも一緒だ！」

「それにしても、マグマにも耐える装甲を持つゴールドに傷をつけるとは…、ジェノスピノ、やはりとんでもない奴だ！」

「ああ、やはり、伝説のゾイドは伊達じゃなかった！」

「それにしても、あのシーガルって奴が俺たちに協力してくれるとはな！」

「状況が状況だからな！ 奴もしぶしぶ俺たち同盟軍や旧共和国派と共同戦線を組むしかないだろう！」

それより、心配なのは、ウイルとリセルだ！ 今、どうしてる？」

「シーザーとデルが瀕死の重傷で、命の危険すらあるとのことで、ウイルとリセルはかなりショックを受けている状態だ！」

「奴が父親を殺したっていう事実を言ってしまったからな！ ウイルにはかなり応えたいだ！」

シーザーの修理を行っている場所では、整備士がシーザーの修理を行っているが、予想以上にダメージが大きく、かなり苦戦していて、ウイルはシーザーを心配そうに見つめ、その横にエマもいた。

その時、コクピットに差し込んでいたゾイドキーが粉々に割れ、シーザーの身体が徐々に石化していき、シーザーの目の色が消えた。それを見たウイルはショックを隠せなかった。

「そんな、シーザー、嘘だ！嘘だ！嘘だー!!」  
ウイルの叫び声が基地中に響き渡った。

基地から遠く離れた場所に元々いた地球の野生動物と野生ゾイドが共生した森があった。

その時、ズシンズシンと巨大な足音がし、親衛隊率いるジェノスピノがその森に来た。森を見たギヤラガー三世は何の躊躇もなく、ジェノスピノの火炎放射を森に放った。

ジェノスピノの火炎放射で、一瞬で、焼き尽くされた森、逃げ惑う野生動物たち、野生ゾイドはジェノスピノに立ち向かうが、ジェノスピノは容赦なく野生ゾイドを次々と破壊していった。その姿は正に虐殺竜でもあった。

その後、森は一瞬で焼け野原になり、ジェノスピノは焼け野原になった森の真ん中に立ち、コクピットの中にはギヤラガー三世が森にいた野生動物の肉をバリバリ食べていた。ギヤラガー三世は兵士に、

「旧ネオゼネバスシティには後、どれぐらいで着く？」

「後、3日程です！」

「そうか、各軍に伝えろ！全ての反乱軍を制圧せよ、とな。」

「は！」

帝都メガロポリス、タツカー元帥はこれまでジェノスピノが制圧した都市の映像を見、

「素晴らしい、流石は皇帝陛下。これなら、ジェノスピノだけで、世界を制圧出来そう  
だ。ところで、皇太子陛下は？」

タツカー元帥の質問に親衛隊陛下は、

「ドクターマイルスのところにおられます！」



宮殿の地下、巨大カプセルを見たドクターマイルスは、

「やはり、リジエネレーションキューブを作動し、その力も組み込まないと完成は無理か…。」

そこに皇帝と同じ派手な赤い礼服に身を包んだ少年が現れ、

「やあ、ドクター。ZGの完成にだいぶ苦戦しているみたいだね!」

現れた少年はネオデスメタル帝国の第二皇子で、皇太子のガネスト・ギャラガーだった。ガネストはアーネストと同一年のようで、その容姿はアーネストと瓜二つだった。

「これは、皇太子殿下! はい、ZGは予想を遥かに越えるゾイドで、やはりキューブの力もないと復元は難しいと…。」

「やつぱり、あの小娘がいないと駄目なんだね。まあ、ZGはともかく、オメガレックスは別にキューブの力がなくなつて復元出来るんじゃない?」

「確かに、我がネオデスメタルの技術を使えば、オメガレックスの復元は容易ですが、あのキューブにはオメガレックスの性能を遥かに増す力を持っていますから、その端末の一部を移植すれば、陛下のジエノスピノに勝るとも劣らない力を得ることが出来るでしょう!」

「いずれ、あのゾイドはボクのものになると父上が約束してくれたんだよね?」

「はい、陛下は御自身に何かあったら、殿下に帝位を譲り、オメガレックスを与えると申しております！」

陛下は殿下を大変可愛がっておられ、殿下に帝国の未来を託すことを期待しております！」

「そう、いずれ、このボクがこの帝国の皇帝！」

「そうです！愚かな反乱軍はハンナ皇帝の子孫であるあの小娘を皇帝にしています  
が、あなたこそが、真なる皇帝にしてギヤラガー三世陛下の正当な王位継承者、かつて  
のギヤラガー一世のように真なる帝王の器を持つ方です！」

決して、余計な遺伝子を色濃く受け継いだあの出来損ないの兄とは違います！」

「まあ、とにかくオメガレックスの完成は早めにしてね！でないとボクが皇帝になれ  
ないから。」

そう言つてその場を立ち去るガネスト、

南方の総督府、四天王で南方の総督のアッカーマン中将はカーター大佐と話していた。

「先程、元帥閣下から、反乱軍の制圧のため、出撃命令を下している！」

「皇帝陛下御自ら出撃なさいましたから、我が帝国軍も総力を上げて反乱軍の鎮圧に注ぐべきですからね！」

「私も出撃命令も下されたが、カーター大佐！君に特別任務を与える！」

「なんででしょう？」

「君も知つての通りだが、殿下は新帝国の反乱軍の捕虜にされている！しかも同時に君の娘もいる。そこで君にスナイプテラで出撃して殿下とカティアの救出に向かつて欲しい！」

「私が殿下とカティアの救出ですか？」

「このミツシオンは君にしか出来ないことだ！殿下をあのまま見殺しにするわけにはいかないし、それに君の愛する娘も死なせる訳にもいかない！やっつけてくれるな？」

「はい、私は陛下と殿下のためにこの身を捧げる覚悟で来ています！」

「我々ネオデスマタル帝国軍は反乱軍を鎮圧し、世界を統一し、この世界から戦争をなくさなければならぬ！この戦争に終止符を打つためにも何としても成功させるのだ！」

「はー！」

カーター大佐はスナイプテラに乗り、

「ジェームズ・カーター、スナイプテラ出る！」

カーター大佐の掛け声と共に、スナイプテラが基地から射出され、旧ネオゼネバスシテイに向かった。

新帝国の仮首都である旧ネオゼネバスシテイ、石化したシーザーとダメージの大きいデルを見たユリスは、

「私はなんて不幸なの！私の先祖は皇帝の血を引いていたために真帝国の皇帝にされて戦争の火種を作ってしまった、そして私も新帝国の皇帝にされ、皆を巻き込んでシーザーをこんな目に遇わせてしまった！」

あの時、私も兄と一緒に死んでいれば、こんなことに……」

その時、カティアが現れ、

「お邪魔してしまいましたか？」

「あなたは…、カティア？」

「はい、ネオデスメタル帝国軍カティア・ギレル少尉です！」

「帝国軍少尉…、そう…。」

「申し訳ありません！余計な口を言つて。」

「いいえ、大丈夫よ。ねえ、カティア！あなた帝国軍にいて幸せ？」

「え？ それは…、父がそうしてきたから私もそうしてきたんです！それに私は軍人として生涯、陛下と殿下のために仕えると誓いましたから。」

「でも、それはあなたの自由を奪っていないかしら？ 私は知っている。あなた、強化人間にされたのよね！」

「そ、それは…。」

ユリスの言葉を聞いたカティアは言葉を返せなかった。

修復されているデルを見ているリセルは、

「俺はなんて無力なんだ！ネオデスメタル帝国への復讐のためにここまで強くなったのに、このままじゃ…。」

そこにアルドリッジが現れ、

「どうした？ 随分と元氣無さそうだな！」

「お前には関係ないだろ！」

「まあまあ、そもそも俺とお前は同じネオデスメタルを憎む仲間だろ？」

「黙れ！ 先祖同様にユリスを政治利用するお前らなんかと仲間にはなりたくない！」

「そう言うな。なんなら、俺たちがお前のウルフを改造してやろうか？ 我が新帝国は過去の真帝国の技術を持っている。それなら、ウルフを強化改造出来るぞ！」

それを聞いたりセルは少し睨んだ目でアルドリッジを見た。

石化したシーザーをグラッドたちも見て、作業員に聞いた。

「どうなんだ？ シーザーは死んじまったのか!？」

「いえ、僅かですが、ゾイドコアから反応がありますから、死んではいません！ ただ、このままいけば、死に至ることがあります。」

「そうか。」

グラッドがウィルを見ると、ウィルは完全に脱力した姿になっていた。

「何とか治すことは出来ないのか？」

「といつても、瀕死寸前のゾイドを治すことなんて。」

「どうした？ 随分と苦戦しているらしいな！」

その時、ストームが現れ、その横に年配の男がいた。

「ストーム、遅かったな！味方は増えてくれたか？」

「あいにく、ジェノスピノに恐れを為して投降するものが続出して中々集まらないが、その代わり強力な助っ人を連れた！」

「それって、お前の横にいる爺さんか？」

「爺さんとは、なんじゃ！わしはこう見えてまだまだピチピチのヤングソルジャーじゃ！！」

「何か、お前、どっかで会った気がするが……。」

「なんじゃ、忘れたのかい！あの時、まだ若いライガーとウルフのライダーを助けた者じゃぞー！」

それを聞いたグラッドは何か思い出し、

「お前！まさか、あの時のグソックか!？」

「そうじゃ、やっと思い出したか！わしはアルフォード・スミス。ゾイド研究に携わるゾイドハンターじゃ！ドクター・スミスって呼んでくれ！」

「ドクター・スミス？聞いたことがある！元は帝国にいたが、脱走して指名手配された優秀な科学者だよ！」

驚くグラッドにストームは、

「それと、面白い奴もいてな！」

「それって、そこで大富豪している連中か？」

グラッドが指差したところにトランプしているスレイマーズの4人組がいた。

「パスだ！パス！」

「よっしゃ、また俺が大富豪だ！」

「ズルいつすよ！リーダー。リーダーばかりいいカードばかりで！」

「お前らが運悪いだけだ！」

スレイマーズを見たストームは、

「あいつらは面白いだけじゃない！強い！俺が保証する！」

「まあ、お前がそこまで言うのなら、あいつらを今度の作戦に借りてもらおう。」

「ところで、あの伝説のライガーを連れた若いもんは元気してるか？」

「最悪だ！相棒のシーザーがジエノスピノに散々痛め付けられて、今、瀕死の状態で、

すっかり力を落としている。」

それを聞いたスミスはストームを見て、

「わかった！あいつはわしとストームが引き受けよう。」

そう言って、ウイルの元に行く。ウイルはシーザーを見て、

「ごめん、シーザー！俺が無茶させたせいで！俺はなんて馬鹿なんだ！あの時、俺も避難すればこんなことにならなかったのに！いや、そもそも俺がシーザーと相棒にならな



ければシーザーはこんな目に遇わなかったのに！」

「ウイル……」

落ち込むウイルにエマは励ますことが出来なかった。

「なんだ、なんだ！俺に憧れていると言っていたが、こんなところでしくじるのか？」  
ストームの言葉にウイルは、

「悪いけど、ほつといてくれませんか！」

「たく、昨日の威勢はどうした？やっぱりお前はただのガキか！」

「うるさい、ほつといてください！！」

パン！

その時、ストームがウイルにビンタし、それを見て、エマは、

「ス、ストームさん、止めてください！」

「お前は黙つてろ！ガキが偉そうに口聞いてんじゃねえよ！！これからどうすんだ？」

このまま、しつぽをまいて村に帰るのか！？お前がそんなんじゃ、親父もシーザーも  
まったくムダ死にだったな！」

それを聞いたウイルはストームに殴りかかり、ストームはウイルの拳を止める。ウイ  
ルはストームを睨み付け、

「父さんとシーザーの悪口を言うな！俺はこんなところで終わりたくない！シーザー

をこのまま死なせねえ!!」

それを聞いたストームは少し笑い、

「へっ、ようやくまともになったじゃないか! たく、これだからガキのお守りは大変だぜ!」

「で、でもシーザーはもう……」

「なあに弱気なことを言っている。俺にはわかる! シーザーはまだ死んじやいねえ! 俺の相棒もそう言っている。なあ、相棒!」

グオオ〜!

ストームの言葉を聞いたワイルドライガーが吠える。

「でも、どうやってシーザーを甦らせるんだ?」

「わしに任せろ!」

「あ、あなたは? なんじや、もう忘れたのか? あの時、助けた男じや!」

「あの時のグソツクの!?!」

スミスを見たエマは、

「え、あなた、スミスさん?」

「知っているのか? エマ、」

「ええ、帝国にいた時、一緒にゾイドの研究を手伝ってくれた科学者の人よ!」

エマを見たスミスは、

「おおー！エマちゃん、すっかり美少女になって、わしも嬉しいぞー！」

その時、ストームがさりげなくスミスの腹を殴り、

「さあ、本題に戻るぞー！」

スミスが口笛を吹いた時、黒いグソックが巨大なキャリアカーを引いて現れ、中にはウイルの父の相棒のマイロの残骸だった。

「実はお前さんの親父の相棒のウルフを発見してそのゾイドコアからゾイド因子を抽出してな。それをシーザーに移植しようと思うのじゃー！」

「父さんの相棒のマイロのゾイド因子をシーザーに!?」

「そうじゃ、そうすれば、シーザーのゾイドコアは息を吹き返し、ボロボロになった身体が再生するはずじゃー！ただ、問題はこの作業は危険だから、とても素人が出来ることじゃー…」

その時、エマが、

「私がやります！私の両親はゾイド研究者で、先祖はリジエネレーションキューブを開発した人です。私なら出来ます！それに私もシーザーを死なせたくない！シーザーの力になりたい！」

「よし、わかった！エマちゃんに任せよう！」

エマは道具を持って、シーザーの元に行き、ボデイから出たゾイドコアに触り、「聞こえる。シーザーのゾイドコアから鼓動が、待っててシーザー、必ずあなたを助けるわ！」

エマがシーザーのゾイドコアにマイロのゾイド因子を移植する作業に入る中、基地の指令部にグラッドたち同盟軍とシーガル率いる新帝国、クライブ率いる旧共和国派の幹部たちが集まった。グラッドはそれぞれの幹部たちに向かって、

「現在、ジェノスピノ率いる親衛隊は三ヶ所の都市を制圧し、このままだと後、3日でこの旧ネオゼネバスシテイに着くだろう！」

それに対し、シーガルは、

「では、どうすると言うのだ？ ジェノスピノを倒さなければ我々はおしまいだぞ！ ジェノスピノ討伐はお前たちに一任しているのだぞ！」

旧共和国派のクライブは、

「ジェノスピノはかつて、旧帝国、真帝国の双方で活動し、ゾイドによる世界制覇を企んでいたドクターランドによって復元され、手始めに旧共和国を制圧しようとしたが、ライダーがジェノスピノの力に耐えられる精神力の持ち主ではなかったため、共和国制

「圧は叶わず、失敗に終わったが、今回はそういう状況ではないのか？」

「だが、今回は違う！何故ならライダーもジェノスピノ同様の化け物だということだ！」

「それは一体どういうことだ？」

「俺は一度、ジェノスピノに突っ込んだとき、コクピットにいる奴を見た。奴はマシンブラストをした状態でも何事もなかったかのように平然としていた！」

「しかも、奴がマシンブラストを発動した時、ジェノスピノが喜んでいるようにも見えなかった。」

「ジェノスピノが喜ぶ？」

「にわかには信じがたいが、俺にはジェノスピノが奴に恐怖して従い、奴がジェノスピノのものになって操っているようだった。」

「ジェノスピノそのものになる？確かにあり得ないことだな。いや、そんなこと人間に出来ることじゃない！」

「信じられないようだが、事実だ！実際、数ヶ所の都市を制圧した際も奴には息が乱れる様子がないどころか、余裕な表情をしていたそうだ。」

「つまり、今のジェノスピノには弱点がないと！」

「イライラしたシーガルは、」

「では、どうしろと言うのだ！まさか、ネオデスメタル帝国に降伏しろと言うのか!？」  
「今の俺たちの戦力では、ジェノスピノを倒すことは不可能だ！だが、最悪倒すことは出来なくとも、ジェノスピノを再起不能にすることは出来る！」

「それは、何だ？」

「デスロッキーを占拠する！そこで、奴を迎え撃つ！」

To be continued

## 第23話 「新生！ライジンググライガー」

帝都メガロポリス、宮殿内にある指令部の映像には、次々と都市を破壊していくジエノスピノの姿が映っていた。タツカー元帥はそれを見て、

「ふ、もはや、反乱軍の余命は後僅かになったな！いいいよ、我がネオデスマタル帝国が世界を統一するときに来たようだ。」

指令部にベケット少佐とアーミテージ大尉が入り、二人を見たタツカー元帥は、

「おお、ベケット少佐にアーミテージ大尉、戻ってきたか！ご苦労だったな！」

「思わぬ邪魔が入り、一時撤退を余儀なくされましたが。」

「まあよい。後は皇帝陛下が何とかしてくださるだろう。」

「ところで、元帥閣下はご存知なかったんですか？ワイルドライガーが反乱軍にいた  
（ととと）」

「ワイルドライガー？まさか、我がネオデスマタル帝国の前身旧デスマタル帝国を壊滅させたあの……！」

「ええ、反乱軍に加わっていました！」

「ワイルドライガーが反乱軍にいたとは、私にもその情報は入らなかったが、予想外だな!だが、いくらワイルドライガーといえども、陛下のジエノスピノには敵うものはない!」

「それと、1つ問題が!」

「何だ?」

「カーター大佐がアツカーマン中將からあのわがまま皇子の救出を命ぜられてスナイプテラで出撃したとの情報が入りました!」

「なに!!それは不味いな。あの若僧が救出されたら、皇太子殿下の王位継承権が危うい。皇太子殿下は帝王ギヤラガー様そのものといつてもいい程のお方だ!所詮、あの若僧は出来損ないの失敗作に過ぎん!」

「アツカーマンとカーターはあの若僧の支持者ですから、あの若僧が皇帝になることを期待してますからね。」

「とにかく、あの若僧は皇帝陛下と皇太子殿下、そして我がネオデスメタル帝国のために死んでもらわなければならない!何としても阻止しなければ、だが、新帝国の反乱軍に殺されたことにしなくては!」

「いい方法があります!」

「何だ?」



「現在の新帝国は過去の真帝国同様、キルサイスを主力にしています。それを利用しましよー！」

「とうとう？」

「我がネオデスメタル帝国軍のキルサイスを使うんです！」

「しかし、あれはオメガレックス完成後に使う予定だが！」

「ですが、我がネオデスメタル帝国の最新技術により、オメガレックスの護衛以外にも他の仕様に強化改造しています。ルメイ大将に与えたステルス仕様のキルサイスS Sがいましたよね！それを使いましょう！それで如何にも新帝国がやったかのように見せるんです！」

「よし！では、ルメイ大将に命じよう！」

旧ネオゼネバスシティ、グラッドたち同盟軍は出撃の準備をしていた。クリスはグラッドに、

「コマンダー、デスロツキーを占拠して何をするつもりですか?」

「デスロツキーは現ネオデスメタル帝国の前身の旧デスメタル帝国の本拠地が置かれた場所で、ギヤラガー一世が葬られた場所!そこを占拠して大々的に世界中に知らせて三世をそこに引きずり込む!」

「上手くいけますかね!」

「なあに、俺に任せろ!」

「それにコマンダーはレックスの修理が!」

「ああ、それなら大丈夫!!」

ピューピュー!

グラッドが口笛を吹いた瞬間、モザイクのように茶色とシルバーが合わさったカラーになり、更に背中に巨大なガトリングを取り付けたレックスが現れた。それを見たクリスは驚愕し、

「これは、本当にレックスなのか!?!」

驚くクリスにグラッドは、

「ああ、真正正銘、俺のレックスだ!」

「しかし、いつの間にかこんな改造を?」

「ジョンが帝国の基地からかつさらってきたのと、俺が密輸業者時代で密にかつさ

らった改造兵器を使って、アツシユに改造させてもらったのさ！」

「まさか、こんな武器いつの間！」

「当たり前だ！ いったい何年密輸業者やってると思ってたんだ!!」

「得意気に言ってますけど、コマンダー。それ、立派な犯罪ですよ（まあ、俺もだが）  
！↑元密輸業者」

「帝国のお尋ね者がまともな職に就けるわけねえだろ!! それに俺だって好きでやってんじやねえぞ！」

「まあ、確かにそうですけど（困り顔）…。」

「それに、先の戦いで、今のままじゃ、ジェノスピノに勝てるわけないと思ってるな！ 相棒ももつと強くなりたいて言っているからな！」

「コマンダー、ジェノスピノに勝てますかね？」

「この作戦は、一か八かの大勝負に近い！ だが、相当の危険を犯してまでやる覚悟がないんじや、男とは呼べねえぜ！」

「言ってくれますね！ コマンダー。」

「よし、全員出撃だ！」

「ところで、コマンダー。ウィルとりセルは？」

「あの二人はストームとスミスが引き受けると言った。あいつらに任せようじゃない

か!」

そう言って、出撃するグラッドたち、そして、基地内でエマがシーザーにマイロのゾイド因子を移植する作業が終え、汗をかいたエマは、

「ゾイド因子の移植無事に終わりました!」

それを聞いたスミスは、

「よくやった!流石、エマちゃんじゃ!!後はシーザーの身体が再生するのを待つだけじゃ!」

その時、シーザーの身体が発光し、石化したシーザーの身体がみるみるうちに姿を変えていく。姿を変えたシーザーの身体は後ろ足の部分にアーマーが無く、アーマーの色はかつてのビーストライガーのような白いカラーリングではなく、少し地味な色合いになっていた。それを見たウィルは、

「あれ?シーザー、お前そんな姿だったっけ?」

驚くウィルにエマは、

「これは、シーザーが初めて復元された最初の姿よ!」

「え、そうなの!?!」

それを聞いたスミスは、

「ほほ〜!これがシーザーがビーストライガーに進化する前の姿か!まさか、こんな

形で見れるなんて感激じゃわい!!」

「でも、不思議。この姿のシーザーを見るのは初めてなのに、まるで大昔にもこの姿のシーザーに会った気がする!」

エマはゆつくりとシーザーの身体に手を触れ、じつと目をつむった。

「そうね、シーザー。」

シーザーに手を触れ、何か応えるエマにウイルスは、

「エマ、シーザーの言葉が分かるの?」

「自分でもわからないけど、こうして手を触れるとゾイドの言葉が分かるの!」

「なんて言ってるの?」

「もつと強くなりたい!ウイルスのためにも、死んだウイルスの父のためにも、そして、ネオデスメタルに苦しめられているゾイドや人々のためにももつと強くなりたいって!」

「そうか、シーザーは俺のことを思っ!確かに今の俺とシーザーじゃ、ジェノスピノに太刀打ち出来ない。もつと強くならないと!」

それを聞いたスミスは、

「どうやら、これでシーザーと気持ちは一つとなったようじゃ!」

それに対しウイルスは、

「でも、どうやったら俺とシーザーは強くなれるんだ?いくら復活したからといって、

もう一度戦ったらまたやられてしまう。」

「そういうことなら、安心せい!わしが取って置きを持って来たんじや!」

スミスの自信たつぷりな言葉と共にスミスの相棒の黒いグソックがキャリアカーを引いて現れ、その中から強力な武器が現れた。それを見て驚愕するウィルとエマ、

「これはわしが帝国にいたとき、密かに開発した強力な改造兵器じや!ネオデスメタル帝国に対抗出来る者が現れるまでずっと保管していたが、どうやらついに使う時が来たようじや!さあ、ここからは本格的な改造じや!こいつをシーザーに付けてパワーアップさせるんじや!」

エマはスミスに、

「スミスさん、私にも手伝ってくれませんか?」

「おいおい、いくらゾイド因子の移植が出来たからといって、こいつは危険な作業じや!可愛いエマちゃんに危険な作業をさせるわけにはいかん!」

「でも、やらせてください!」

同時にウィルも、

「俺もやります!シーザーは俺の相棒なんだ!俺もやらないと!」

「しかし…、」

困惑するスミスの肩にストームはそつと触れ、

「いいじゃねえか！ゾイドのために相棒がやるのは当然だろ!!」

「よし、わかった。だが、危険な作業じゃから、心してかれ!!」

ウィルとエマは口を揃えて、

「はい!!」

旧ネオゼネバスシティから3km離れた上空をカーター大佐のスナイプテラが飛行していた。カーター大佐はスナイプテラのコクピット内の映像を見、

「旧ネオゼネバスシティまで後、1時間か…。」

カーター大佐はアーネストと一緒にいた時のことを思い出していた。

「力による平和?」

「僕が力を求めているのは、エマとユリス姉さんの望んでいた人とゾイドの共生、そして争いのない世界を実現するためなんだ!でも、そのためには強い力が必要なんだ。誰も逆らえない圧倒的な力があれば、人々は争いを起こすことはない、最強の力で世界を

一つにすれば、皆、手を取り合うことだつて出来る。僕はそんな世界を築くためにネオデスメタル帝国の皇帝になるんだ!」

アーネストの言葉を思い出したカーター大佐は、

「殿下はゾイドはもちろん、困っている人をほうっておけない優しい性格を持ったお方だ!あの方を皇帝にすれば、世界は変えられる。」

その時、スナイプテラに向かって地上から攻撃してきて、地上から複数のキルサイスが現れた。現れたキルサイスには新帝国のエンブレムが付いていた。それを見たカーター大佐は、

「あのエンブレムは、新帝国のキルサイスカ!」

キルサイスはスナイプテラに襲いかかるが、スナイプテラはガトリングとミサイルラUNCHャーで次々と撃墜していく。しかし、その後、次々と大量のキルサイスが現れ、一斉にスナイプテラに襲いかかってくる。

「新帝国のキルサイスは過去の真帝国同様、遠隔操作が可能で大量生産が出来ると聞いてはいたが、まさか、これほどとは!といっても、ここで立ち止まるわけにもいかない。制御トリガー解除、スナイプテラ! 兵器 解放! マシンブラストー!! アブソルトショット!」

スナイプテラのアブソルトショットで次々と撃墜していくキルサイス、しかし、キ



ルサイスはそれでも湧いていく。

「くそ、いったい何体いるんだ？」

しかし、地上でもスナイプテラに向かって攻撃してきた。地上で攻撃しているのは、ステルス仕様として改造され、光学迷彩で姿を隠したネオデスメタル帝国のキルサイスSSだった。内の一体にはルメイ大将が乗っていた。

「大したものだ！ハナカマキリの周囲の環境に擬態する性質を利用し、ガトリングフォックスと同じ光学迷彩を搭載したキルサイスSSは凄い性能だ！

それに加え、新帝国のエンブレムを付けた囿の無人機のキルサイスは効果抜群だな。あのカーターもすっかり騙されてやがる。それにしても、ドクターマイルスの奴、あのスパイゾイドに他のゾイドの幻影を見せる機能も付けているとは、驚いた！そのおかげで、囿の無人機をあそこまでの大部隊に見せることが出来て、もはや、同じネオデスメタルの者が邪魔しているとは、奴も考えていないだろう！」

新帝国のエンブレムを付けた囿のキルサイスとスパイゾイドの幻影で、無数に出てくるように見え、更に光学迷彩で姿を隠したキルサイスSSの攻撃で、流星のカーター大佐のスナイプテラも苦戦していく。

「これじゃ、キリがない……このままでは、殿下を救出する前に倒されてしまう。」  
スナイプテラの様子を見たルメイ大将は、

「ふ、流石に限界のようだな。では、そろそろフィニッシュといくか。」

ルメイ大将の操るキルサイスSSが光学迷彩で姿を隠しながら、スナイプテラに襲いかかり、スナイプテラの片翼を切断した。

キルサイスSSに片翼を切断され、悲鳴を上げるスナイプテラ、スナイプテラの様子を見たカーター大佐は、

「不味い、このままでは、こちらが先に倒れてしまう!やむを得ん、一旦、態勢を立て直そう!」

と言って、そのまま、撤退していくスナイプテラ、それを見たルメイ大将は、

「ハハハ、これでしばらく奴は新帝国の基地に行けない。これであのわがまま皇子の救出は不可能になった!それにキルサイスSSの性能を試すいい実験台になってくれた。」

さて、私には元帥から瀕死のライガーに止めを刺せ、との命令も受けている。ここからは、ドライパンサーで行こう。あのライガーは厄介だと、ドクターが言っていたからな!我が帝国の支配を邪魔する悪い芽は摘み取っておかなくてはな!

そう言って、ルメイ大将はキルサイスSSからドライパンサーに乗り換え、旧ネオゼネバスシティに向かった。

旧ネオゼネバスシティの基地では、シーザーの改造が終わり、タテガミクローを失ったシーザーの背中には、改造されたレックス同様の巨大なガトリングとりボルバーが装備された。それを見たスマスは、

「完成じゃ！兵器の力と生物の力を併せ持つ新たなライガールの誕生じゃ！」

シーザーを見たウイルは、

「シーザー、重くないかな？」

少し不安そうなウイルにエマは、

「でも、とっても強そう！」

ストームは、

「中々、上出来じゃないか！」

「さあ、改造の後は、戦場じゃ！ウイル、抜かるなよ！」

「わかった！」

その時、基地が爆発する音がし、映像にはドライパンサーが基地を攻撃していた。映像を見たシーガルは、

「ドライパンサー一機だけか？」

シーガルの問いに兵士は、

「いえ、他にも敵の攻撃がありますが、姿が全く見えません！」

「ええい、なら、キルサイス部隊を出せ！」

「それが、既にキルサイス部隊を送っていますが、次々と撃墜されています！」

映像では、新帝国のキルサイス部隊がドライパンサーに攻撃しているが、ドライパンサー以外の何者かに攻撃され、次々と倒されていく。姿の見えない相手は光学迷彩で姿を隠したキルサイスSSだった。映像を見たウイルは、

「放っておけない！いくぞ、シーザー!!」

ウイルはシーザーに乗り、基地から出る。それを見たエマとスミスは、

「あ、ウイル!待って!」

「待たんか、シーザーはまだ改造したばかりじゃ!いきなり実戦は…、」

しかし、ストームが2人に待ったをかけ、

「行かせてやれ!こうしている間にもジェノスピノは刻一刻と近づいていつている。悠長には待っていない。それに、これはあいつの試練だ!あれぐらいの相手に勝て

なければ、到底ジェノスピノに勝つことは出来ない！」

基地から出たシーザーはドライパンサーと対峙する。シーザーを見たルメイ大將は、「おや、陛下のジェノスピノ相手に無様な姿となって、瀕死の状態になつていたと聞いていたが、まさか、復活していたとはね！それにしても何だ？その不格好な装備は！」

「うるさい！いくぞ、シーザー！」

グオオー！！

ウイルの言葉に依えて咆哮を上げるシーザー、シーザーはガトリングを撃ちながらドライパンサーに突進するが、ドライパンサーは軽々とその攻撃を避け、シーザーに攻撃する。ドライパンサーの突進を受けて倒れるシーザー、それを見たスマスは、

「やっぱりじゃ！改造した別のパーツを移植したから、シーザーはまだ身体に馴染んでいない。」

ドライパンサーの強さを見たウイルは、

「こうなつたら、ワイルドブラストだ！いくぞ、シーザー！エヴォオ…、」

その時、ウイルはシーザーが一度石化してゾイドキーが割れたことを思い出した。

「そうだ！ゾイドキーがない。ワイルドブラストは出来ない。」

気を反らしたウイルにドライパンサーが襲いかかってくる。ドライパンサーの攻撃を受けて押されるシーザー、それを見たルメイ大將は、

「どうした?まさか、ワイルドブラストが出来ないのか!そりやそうだよな!あれだけ陛下のジエノスピノに倒されたんじゃ、仕方ないよな!」

続けてシーザーに攻撃するドライパンサー、シーザーの身体に傷が付く。それを見たエマは青ざめ、スマスは痺れを切らし、

「これ以上はまずい!わしのグソックで助けに行く。」

しかし、ストームはそれでも待ったをかけ、

「止せ、助けに行ったら、ウイルのためにならん!」

「何を言つとるんじゃ!ウイルを見殺しにするつもりか!」

「黙って見ていろ!ウイルはまだ気付いていないだけだ!ゾイドの力を引き出すために何が必要なのかを!」

ボロボロになるシーザーに追い討ちをかけるかのようルメイ大將は、

「もう少し楽しもうと思ったが、あんまり時間をかけると陛下の楽しみを無くしてしまうからな!悪いが、これで決めさせてもらうぞ! 制御トリガー解除、ドライパンサー! 兵器 解放! マシンブラスト!! ドライスラッシュュ!」

シーザーに突つ込むドライパンサー、シーザーはスレスレで攻撃を避けるが、ドライパンサーは尻尾で風ぎ払い、向きを変え、シーザーにドライスラッシュュの一撃を喰らわす。壁に激突するシーザー。それを見たストームは、

「何をしている、ウィル！シーザーの強くなりたいたいという気持ちを理解して心を一つにしろ！そうでなければ、シーザーを強くすることは出来ない！」

「ウィル……」

エマは両手を重ね、目をつぶった。身動きのとれないシーザーを見たルメイ大將は、「改造した割には、その程度か！ま、無理もない、そもそもそのライガーで我らネオデスメタルに立ち向かおうとする自体無理だったのさ！」

最もそのライガーにシーザー等と大層な名を付けた時点で運命は決まっていたがな  
！

「何！どういうことだ？」

「なんだ。小僧、そんなことも知らずにシーザーなんて名付けたのか！」

ふん、まあいい。冥土の土産にいいことを教えてやろう！ゾイドクライシス後に移住したゾイド人の知らない地球の歴史をな！シーザーとは、かつてゾイドクライシスが起る2000年以上前の地球に君臨した大国の王の名だ！

別名はカエサルとも言っていたがな。その男は圧倒的なカリスマ性を持ち、数々の戦いに勝利して領土を拡大し、国の版図を広げ、大国の指導者となった。

しかし、王になる寸前、自分の信賴する部下の1人であるブルータスに暗殺され、王になれず、この世を去った。そして暗殺者のブルータスはシーザーの養子だったアウグ

ストゥスに殺され、アウグストゥスは反対者を全て肅清し、大国の全てを牛耳り、自ら皇帝になって大国を世界最強の帝国にした!

この意味がどういう意味か分かるか?フッフ、シーザーは王にはなれない。シーザーにはブルータスが常にいる!そしてそのブルータスがこの私、そして、世界最強の帝国の皇帝アウグストゥスは我らがネオデスメタル帝国皇帝ギャラガー三世陛下なのだ!アウグストゥスが築き上げたローマ帝国はかつて、ゾイドクライシス前の地球に君臨していた大国がその後継者として領土を広げたが、どれも叶わなかった!

だが、我がネオデスメタル帝国こそが現代に甦ったローマ帝国!いや、それすらも超え、惑星Ziに存在した全ての帝国をも超越した史上最強の帝国なのだ!!どの大国も叶わなかった世界の統一、我が帝国はそれを実現するのだ!!

さあ、ブルータスに暗殺される時が来た!これでまたシーザーの王になる野望が再び碎かれる歴史の1ページが開かれる。ドライスラッシュ!!

そのまま猛スピードでシーザーに突っ込むドライパンサー。ウィルは泣きながら、「シーザー、ごめん!またお前を死なせてしまつて!」

「死ねえー!!」

その時、シーザーのゾイドコアが発光し、同時にシーザーの全身も発光する。一旦止めるドライパンサー、



「何だ？あの光は！」

シーザーのkokopitto内で、ウイルにエマの声がし、

「ウイル、諦めないで！まだ立ち上がれる！シーザーがそう言っているわ！」

「エマ？シーザーがまだ戦えるって言っているのか？！」

同時にある男の声も聞こえ、

「すまなかつたな。ウイル！お前と母さんを巻き込ませないつもりが結局巻き込んでしまつてー！」

「父さん!？」

声の主はウイルの父、デイビットだった。

「だがな、ウイル！シーザーとお前は俺とマイロと同じ運命に逢つてはいかん！死ぬのは俺とマイロの特権だ！お前は死んではならない！強くなれ、ウイル！シーザーと共に大切なものを守る男になれ!!」

デイビットの声が聞こえなくなったシーザーがウイルに何か言うようにうなずき、

「ああ、そうだよな！シーザー！俺とお前でゾイドを、人々を、皆を守るんだ!!」

ウイルの言葉と共に、シーザーの身体が眩しいくらいに発光し、失っていたシーザーのアーマーが復活し、シーザーの身体が金色の新しい姿に変わった。それを見た全員は驚愕の表情をし、シーザーの新しい姿を見たエマは、

「ライジング…、ライガー…!!」

シーザーの姿を見たウイルは、

「これが、シーザーの新たな姿なのか!?!」

シーザーの姿を見たルメイ大將は、

「何だ?あの姿は!だが、姿が変わっても同じこと。これで終わりだ!ドライスラツシュ!!」

しかし、シーザーのアーマーがドライパンサーのドライスラツシュを弾く。弾かれドライパンサーにシーザーが突進し、吹っ飛ばされるドライパンサー。

「何が、どうなっている?装甲が上がった上に、動きも速くなっただど!」

それを見たスミスは、

「これは驚いた!まさか、シーザーが進化するなんて!」

ストームは、

「ようやく、シーザーと心を一つにしたようだな!」

「ウイル…、シーザー…!!」

エマは期待するような表情をした。ドライパンサーを圧倒するシーザー、

「スゲエ、スゲエぞ!シーザー!」

シーザーは再びうなずき、

「ようし、わかった！ウイルスドブラストだな！」

その時、コクピット内が発光し、金色のゾイドキーが現れた。シーザーの新たなゾイドキーを持ったウイルスは、

「これが、シーザーの新しいゾイドキー！」

「認めん、認めんぞ！そんなもので私のドライパンサーが負けるなど!! 今度こそ、フィニッシュだ！」

突進するドライパンサー、しかし、ウイルスは、

「いくぞ、シーザー！」

グオオー!!

ウイルスの言葉に伝えて咆哮を上げるシーザー、

「切り拓け、シーザー！ 俺の魂と共に、進化 解放！ エヴォブラスト!!」

「ドライスラッシュ!!」

「ライジングバーストブレイク!!」

それぞれぶつかり合うシーザーとドライパンサー、しかし、シーザーの攻撃がドライパンサーの身体を一刀両断する。

「バ、バカなー!!」

爆発炎上するドライパンサー、それを見て喜ぶエマたち、

「ウイルが勝った!!」

「遂にやったぞー!!」

ドライパンサーの残骸に向かうシーザー、

「ライダーは?」

しかし、ドライパンサーの姿にライダーの姿はなく、

見上げた頭上には既に脱出してキルサイスSSのコクピットに乗り換えたルメイ大將がいた。

「意外だったな!だが、覚えておけ!誰も歴史の運命を変えることは出来ない!我がネオデスメタル帝国が世界を支配することも、そして、そのライガーはゾイドの王にはなれない!ゾイドの王になるのはギャラガー三世陛下なのだからな!フッフ、ハハハ、ハ、ハ、ハハッハッハ!!」

キルサイスSSに乗って撤退するルメイ大將、ウイルはシーザーから降り、エマたちのところに向かう。エマは笑顔で、

「ウイル、良かった!」

「見事なもんじゃ!まさか、シーザーを進化させるとは!ライジングライガー、あれがシーザーの新しい姿じゃな!」

「いや、俺はただシーザーを、死なせたくなかったから、それにしてもエマ、シーザー

の新しい姿の名前知っていたなんて！驚いたな！もしかして、ホントに大昔にシーザーと会っていたのか？」

「そうじゃないけど、ただ…、何となくね…。」

ストームはウイルに、

「ようやく、シーザーと心を一つにしたようだな！」

「ストームさん！」

「ゾイドは俺たちと同じ心を持った生命体、ライダーと心を一つにした時、ゾイドの本来の力、ワイルドプラストが発揮される。それによりようやく気付いたようだな！」

「はい！」

「今のお前とシーザーなら、あのジェノスピノに勝てる。」

「ああ、これからもよろしくな！シーザー!!」

ウイルの言葉にうなづくシーザー、

「ところで、グラッドたちは？」

「ワイルド大陸にある大火山デスロツキーを占拠すると言って既に出発した。何でもそこでジェノスピノを迎え撃つと言ってたが！」

「デスロツキーに!?!」

ワイルド大陸、大火山デスロッキーにあるネオデスメタル総督府（旧デスメタル帝国本拠地）、総督府は20分足らずでグラッドたち同盟軍に制圧された。

「ふう、何とか、制圧出来たようだな! パワーアップしたレックスの準備運動にもなったようだな!」

総督府を見たアレックスは、

「それにしても、まさか、あの帝王ギヤラガー一世の宮殿をそっくりそのまま再建して総督府にしていたとは驚きだぜ!」

「それだけ、旧デスメタル帝国の影響が強かったんだろう!」

クリスはグラッドに、

「しかし、それだけ旧デスメタル帝国を尊敬しているなら、何故ここに帝都を置かなかったのだ?」

「ここは火山のすぐ近くだから、帝都を置こうにも軍事的に不向きだし、そもそも旧デスメタルがここに本拠地を置いたのはここがデスレックスの封印場所、デスレックスの秘密を反対派のレジスタンスに悟られないようにするためだったが、今じゃ、それを

隠す必要がないからな！

それにデスレックスはジェノスピノ同様、既に発掘されているし、ここはギヤラガー一世が葬られた場所だから、帝都を置きづらかったんだらう！」

「で、これからどうするんです？」

「まあ、見ていろ！……この通信機は全てハッキングしたな？」

グラッドの問いにジョンは、

「大丈夫です！いつでもOKです！」

「よし、では全世界中継で流す！」

旧ネオゼネバスシティに進行するジェノスピノ率いる親衛隊、ジェノスピノのコクピットから兵士の通信が入り、

「陛下！世界中に反乱軍の中継が入っています!!」

それを聞いたギヤラガー三世は中継を入れ、

「我々反ネオデスメタル同盟軍はネオデスメタル帝国の前身、旧デスメタル帝国の本拠地を占拠した!我々はここに本拠地を置き、かつての旧デスメタル帝国同様にネオデスメタル帝国の壊滅を宣言する!!」

この中継は旧ネオゼネバシティ、ネオデスメタル帝国帝都メガロポリスにも流れていた。中継を見たタツカー元帥は、

「何だ?この中継は!」

中継を見たギヤラガー三世は、

「ふ、面白い。あの時のリベンジのつもりか。少しは楽しめそうじゃないか! 私はデスロツキーに向かう!一番隊は私に付いていき、残りは旧ネオゼネバシティに行け!」

「しかし、陛下!!」

「命令だ!」

「は!」

ジェノスピノは方向を変え、一部の親衛隊を率いてデスロツキーのあるワイルド大陸の方に行った。



旧ネオゼネバスシティの基地にあるアーネストが入れられている牢屋では、見張りの兵士が話をし、

「なあ、聞いたか！何でもあのジエノスピノにコテンパンにやられたライガーが新しい姿になってドライパンサーを倒したらしいぜ！」

「マジかよ！じゃあ、ジエノスピノも倒せるのか!？」

「いや、それはさすがにないぜ！あのジエノスピノだぜ！」  
それを聞いたアーネストは、

「ライガーが復活した!？」

アーネストは拳を握りしめる。

To be continued

## 第24話「立ちはだかる竜爪」

ワイルド大陸、大火山デスロッキのネオデスメタル総督府（旧デスメタル帝国本拠地）、グラッドたちはジェノスピノを迎え撃つ準備をしていた。火山から離れた上陸地点には、同盟軍と旧共和国派のガノントラス、スコープア、トリケラドゴス隊が待ち構えていて、海中には複数の潜水艇、海上には軍艦も待ち構えていた。準備しているグラッドとクリスは、

「しっかし、あのスレイマーズには驚いたな！最初、会った時はただのおバカ集団かと思っただが、まさか、あいつらだけで、キャノンブル、バズートル隊を殲滅するとは！」

「ところで、コマンダー。作戦は？」

「奴が海上で泳いでいるところを旧共和国との合同部隊と軍艦、潜水艇で攻撃をし、陸に上がったところをお前とジャックが攻撃をしながら火山まで誘き寄せ、そして、火山まで行つたところを俺たちが奴の相手をして俺がマグマの火口にまで誘い込み、火口まで行つたところをゴルドのグラントハンマーで足場を破壊して奴をマグマに突き落とし、そして俺たちが火山から離れて火山を爆破させる作戦だ！」

「つまり、奴を一世と同じ墓場に葬るわけですね！」

「一か八かの策だが、これしか方法がない。」

その時、通信が入り、

「コマンドー！海上にジェノスピノが泳いで、大陸に接近しているとの報告が！」  
グラッドたちは映像を見、そこにはジェノスピノが海を泳いでいた。

「予想通り、海を渡って来たな！ 海上にはジェノスピノのみか？」

「いえ、ジェノスピノの周りには、数体の親衛隊専用機ガブリゲーターG3がついています！」

「思った通り、同じ水陸両用のガブリゲーターだけを連れて来たか。よし、護衛のガブリゲーターを攻撃し、確実に倒せ！」

「ジェノスピノはいかが致しますか？」

「まずは護衛のガブリゲーターを倒すのが先だ！護衛を一体残らず潰し、奴一体だけになったところで一点集中攻撃をしろ!!」

「了解しました！」

上陸地点にいるガノンタス、スコーパー、トリケラドゴスはガブリゲーターだけを狙って攻撃した。ジェノスピノは構わず、海上を泳ぎ、ワイルド大陸に向かった。

一方、旧ネオゼネバスシティにある牢屋では、新帝国軍の兵士がアーネストのいる部屋を見張っていた。アーネストは扉の近くに寄り、咄嗟に兵士の一人の首を締めた。もう一人の兵士はアーネストに銃を向け、

「動くな！それ以上、動くと、貴様を撃つぞ!!」

アーネストはその兵士に向かつて、

「銃を撃つなら、こいつを殺すぞ！こいつを助けたかったら、鍵をよこせ！そうすれば、こいつは離してやる!!」

兵士は尚もアーネストに銃を向けたが、アーネストの睨んだ表情を見て、身をすくみ、「わ、わかった。鍵はやる！だから、そいつは殺すな。」

兵士は鍵を出し、ゆっくり歩きながら、アーネストに近づき、アーネストに鍵を渡した。アーネストは直ぐに兵士を離して鍵を取り、直ぐに扉を開けた。2人の兵士はアーネストが部屋から出る前に銃を向けたが、部屋から出たアーネストは咄嗟に2人の兵士の腹を殴り、兵士を気絶させ、そのまま走り去った。そして、アーネストが部屋から出た時、警報が鳴った。警報が鳴ったことに気付いたシーガルは、

「なんだ？何が起こった!」

「捕虜にしている帝国の皇子が脱獄しました！」

「直ちに全ての兵士を動員して、奴を捕らえろ！ただし、絶対に殺すな。奴は我が新帝国を有利にするために必要な駒だ！何としても、捕らえろ！！」

「はー！」

また、ユリスがいる特別室にも警報が鳴り、ユリスはそれに気付き、

「何？ 一体、何が起こったの？」

その時、カティアが部屋に入り、

「メルビルさん！ 殿下が牢屋から出ました！」

「そんな！ レイルが……」

走っていくアーネストの目の前に兵士が銃を構えて待ち伏せし、

「止まれ！ これは警告だ！」

しかし、アーネストは命令を聞かない。兵士は当てない程度に銃を撃つたが、アーネストはカティアと並ぶ跳躍力で銃弾を避け、手刀や蹴りで兵士を一人一人確実に気絶させ、倒していく。次々と基地内の兵士が現れるが、アーネストは難なく全ての兵士を持ち前の格闘能力で次々と倒していく。

そして、ゾイドが保管されている場所に着き、そこで修理されているギルラプターエンペラーがいた。ギルラプターを見つけたアーネストは直ぐに乗ろうとしたが、

ダアン！

突然、銃声がし、後ろには拳銃を持ったシーガルと兵士がいた。

「大人しく、我が新帝国の元にて貰おうか！お前は我が新帝国を有利にするために必要な存在、メルビル二世陛下の養子または親衛隊として入れれば、命は保障してやる！」

「断る!!僕はネオデスメタル帝国の皇子！お前ら反乱軍には従わない!!」

「手荒なマネはしたくないが、仕方ない。少し痛い目に逢わせてもらう！」

「待って!!」

その時、ユリスの声がし、カティアと共に現れた。

「レイル！辛いかもしれないけど、今は大人しく従って！あの帝国に戻ったら、あなたはもつと酷い目に遭うわ！だから、私とエマと一緒にいて。」

それを聞いたアーネストは拳を握りしめ、

「うるさい!!姉さんまで反逆者になったのか！ネオデスメタル帝国は世界に戦争を無くすために戦っているのだぞ！そんな反乱軍に惑わされるなんて！

カティア！お前まで何でそこにいるんだ!?!お前もネオデスメタル帝国の人間なら、戻るべきじゃないか！」

それを聞いたカティアは全身が機械化された友人のナツシユを思い出して、手が震

え、

「殿下、確かに私もネオデスマタル帝国の人間だけど、帝国の行いが全て正しいとは言えないわ!」

それを聞いたアーネストは怒りを剥き出しにし、

「お前まで何を言っているんだ! 帝国の裏切り者になるつもりか! なら、お前も反逆者だ! 反逆者に用はない!!」

アーネストはギルラプターの方に向かい、それを見たユリスは、

「レイル、駄目!」

兵士はアーネストに銃を撃つが、アーネストはそれを避け、すかさず、ギルラプターのコクピットに乗った。アーネストはギルラプターに、

「行くぞ! ギルラプター!! あいつを倒して俺たちが最強だと証明するぞ!!」  
グオオ!!

アーネストの言葉に応え、咆哮を上げたギルラプターは基地にいる兵士を蹴散らし、壁をぶち破って基地を出た。基地を出たギルラプターはルメイ大将のドライパンサーを倒したシーザーの元に現れた。現れたギルラプターを見て驚くウィルたち、アーネストはシーザーとウィルを見て、

「また、会えて嬉しいよ! 今度こそ、君を倒すよ!」

「ギャラガー！いや、レイル！俺はお前と戦うつもりはない！俺たちは一刻も早くジエノスピノを止めなければいけないんだ！」

「父上のところに行きたかったから、この僕を倒していけよ！」  
アーネストを見たエマは、

「レイル！もうやめて!!あなたはもう戦う必要はないわ！」

「うるさい！これは僕の問題だ！僕が皇帝になるには、強くなつて父上に認めて貰うしかない！そのためには、お前とライガーを倒すんだー!!」

シーザーに襲いかかるギルラプター、それを見たウイルは、  
「どうやら、やるしかない！」

ウイルはエマを見て、

「あいつは俺が引き受ける！だから、心配しないでくれ。お前の大切な人を俺が助ける！行くぞ、シーザー!!」

グオオッ!!

ウイルの言葉に応えて咆哮を上げるシーザーは突進するギルラプターに向かう。しかし、ギルラプターは即座に横に周り、シーザーを攻撃しようとする。しかし、シーザーはヘビーテイルで攻撃し、ギルラプターをぶっ飛ばす。ギルラプターは尚も攻撃をするが、シーザーはA—Z機関砲でギルラプターに砲撃する。



しかし、ギルラプターは怯まず、シーザーを捕らえ、シーザーのライジングアーマーに噛みつく。しかし、シーザーのアーマーが硬く、逆にギルラプターの歯が傷付く。そればかりか、ギルラプターの関節に火花がとばしり、ギルラプターが苦しむ。それを見たストームとスミスは、

「おい、あいつー！」

「ああ、あのギルラプター、修理が完全じゃない！早く直さないと、下手したら死んでしまうぞー！」

尚もシーザーに攻撃しようとするギルラプター。それを避けるシーザー、それを見たウイルは、

「やめろ！それ以上、動くな！」

それに対し、アーネストは、

「黙れ！僕は勝つんだ！勝たなきゃ駄目なんだ！」

そう言つて、アーネストはデスメタルキーを取り出し、

「そのライガー、どうやら、今までとは比べ物ならない程になっているようだね！なら、最初から本気でいかせてもらおうよ！」

それを見たエマは、

「やめて！レイル、その子にデスブラストはしないで！！ でないとその子が！」

アーネストは苦しむギルラプターを見て、キーを差し込むのに少し戸惑ったが、遂にキーを差し込み、

「ギルラプター！ 強制 解放！ デスブラストー!!」

苦しみながらもデスブラストするギルラプター、

「ここで勝たなきや、帝国に戻れず、父上に認めて貰えない！ここで、負けたら、こいつは帝国によって廃棄処分に使われてしまう！そうならないためにも、僕は勝たなきやならないんだー!! 喰らえ、真・瞬撃殺！」

ギルラプターの瞬撃殺に真正面に突っ込むシーザー、互いにぶつかるシーザーとギルラプター、しかし、シーザーがギルラプターの攻撃を押し退けた。怯むギルラプター、

「まさか、瞬撃殺を返すとは！ ならば、これならどうだ！ 真・音速殺!!」

ギルラプターのジェットブースターが加速し、ギルラプターのスピードが格段に上がり、シーザーに向けて攻撃する。それを見たウィルは、

「仕方ない、いくぞ、シーザー！」

グオオッ

咆哮を上げるシーザー、

「切り拓け、シーザー！ 俺の魂と共に、進化 解放！ エヴォブラストー!!」

エヴォブラストしたシーザーはギルラプターの攻撃に対し、真正面に突っ込む。

「真・音速殺!!」

「ライジンググバーストブレイク!!」

互いにぶつかると2体、しかし、シーザーは音速殺すらもライジンググバーストブレイクで跳ね返した。ぶつ飛ばされるギルラプター、ギルラプターは深手とはいえ、ライジンググライガーになったシーザーの力は圧倒的だった!

「馬鹿な!あれだけ、戦って僕のギルラプターに手も足も出なかったライガーが何故ここまでの力を!?!」

「レイル、お前はゾイドを思う気持ちをお忘れてる。今のお前はただ勝つために力を求めているだけだ!」

「駄目だ!僕は勝たなきゃならないんだ!非情にならないと強くなれない。優しさなんてなんの意味がないんだ!」

アーネストは昔のことを思い出した。数ヶ月前、帝都メガロポリスの闘技場で、アーネストのギルラプターエンペラーと白いギルラプターが戦っていた。力の差は歴然で、ギルラプターエンペラーが白いギルラプターに勝った。

それを見て闘技場の国民は拍手喝采した。国民と共に拍手したギヤラガー三世はアーネストに、

「いいぞ、アーネスト、流石我が息子だ！　ハハハハ！　殺せ！」

それを聞いて驚くアーネスト、

「さあ、そいつを殺せ。　止めを刺して勝利をその手に掴め！　そうすれば、お前は私

の王位後継者だ！」

苦しむ白いギルラプターを見るアーネスト、同時に闘技場の国民が全員口を揃えて、

「殺せ！　殺せ！　殺せ！　殺せ！」

ギルラプターは攻撃の態勢を構えるが、ギルラプターはもちろん、アーネストも止めを刺すことが出来ず、他のゾイドを優しく撫でるエマを思い出し、ギルラプターは攻撃の態勢を止め、アーネストはギヤラガー三世に、

「申し訳ありません！　父上、僕には出来ない！　それに勝ったんですから、止めを刺す必要はありません！」

それを聞いたギヤラガー三世は手を上げ、同時に兵士たちが現れ、麻酔銃をギルラプターに撃ち込み、ギルラプターを気絶させる。さらにコクピットが開き、アーネストにも撃ち込み、アーネストも気絶させた。

闘技場は完全に静まり返った。アーネストはタツカー元帥に殴られ、

「今回の件で、皇帝陛下はおろか、国民全員を失望させた！ よって、皇帝陛下のご命令によりお前の王位後継権を剥奪する。」

だが、皇帝陛下は慈悲深いお方だ！ 罰はそれだけでよいとおっしゃった。せいぜい、皇帝陛下に感謝するんだな！ もし、汚名返上したいのなら、我が帝国に齒向かう人間とゾイドを徹底的に排除してこい！」

部屋を出たアーネストは近くにいた将校たちの話を聞いた。

「殿下は何故あんなゾイドに止めを刺さなかったんだ？」

「三世陛下はもちろん、先祖の一世様なら、躊躇せず、止めを刺したのに！ あんなこと、戦場でやったら、命取りだぞー！」

「ホントに陛下のご息なのか？ 養子じゃないのか？」

「いや、案外、遺伝子の突然変異種かもしれないぜ！」

「全く、よりによって、役に立たない突然変異が生まれたもんだ！ ハーハハハ！！」  
それを聞いたアーネストは拳を握りしめた。

全てを思い出したアーネストは、

「僕は強くならなきゃならないといけない。強くないと上に上がれないんだ！」

アーネストはデスメタルキーを取り外し、

「パワーアップしたお前のライガーを倒すには、これしない！」

そうやって、アーネストはデスメタルキーを自分の左腕にぶっ刺し、アーネストの左腕が出血する。それを見たエマは見えていられないような表情をして、両手を隠す。

「いやー！ やめて!!」

自分の左腕を刺して大量の血がついたデスメタルキーを掲げ、キーを差し込む。

「これが最後の手段だ！ ギルラプター！ 強制 極限 解放!!」

それを聞いたウイル、ストーム、スミスは、

「強制極限解放だつて!?!」

ギルラプターは全身に火花を散らしながら、デスブラストした。と同時にコクピットのアーネストにも火花が彼の身体に当たり、苦しむ。それを見たスミスは、

「なんてことをするんじゃない！ あんなことしたら、ギルラプターはもちろん、ライダーだつてただではすまん！ 下手したら、死ぬぞ!!」

「これでいい！ さあ、第二ラウンド開始だ!」

「やめろ！ レイル！ 今すぐ、デスブラストを解け！ でないとお前もギルラプターも!」

「構わない！ 例え、お前を刺し違えても倒す！ それにギルラプターが死ぬくらいなら、僕も死ぬ!! 真・音速殺!」

ギルラプターは今までとは比べ物にならない程のスピードを出し、シーザーに攻撃した。シーザーは避けようとするが、シーザーはその攻撃が読めず、攻撃を受けてしまう。

その攻撃に怯むシーザー、

「そんな！ライジングライガーになったシーザーでも避けられないなんて！」

しかし、ギルラプターを見たら、ギルラプターは既に立っていられない状態になって苦しんでいた。コクピットのアーネストも、左腕の出血が酷くなり、苦しむ。それを見たまミスは、

「やっぱりじゃ！強制的に極限解放するから、ギルラプターとライダーにかなりの負担がかかっている。早く、治療をしないと死んでしまうぞ！」

コクピットのアーネストは、

「まだだ！まだ、僕は戦える！」

エマはウイルに、

「ウイル、お願い！レイルを助けて！でないと、あの子が！」

「わかった！この一撃で終わらせて、あいつの目を覚ます！いくぞ、シーザー！」  
再び突っ込みギルラプター、

「真・音速殺!!」

「ライジングバーストブレイク!!」

シーザーのライジングバーストブレイクがギルラプターのウイングショーテルを両断された。と同時に、コクピットのデスメタルキーが破壊された。倒れるギルラプ

ター、

「動け、動くんだ！ギルラプター！お前はここで倒れるのか!? 動け、動けよ！」  
力を振り絞って立ち上がるとうとするギルラプター、

それを見たストームは、

「あいつ、まだあんな力を！」

「そうだ！立つんだ！ギルラプター!!」

しかし、ギルラプターは力尽き、倒れる。アーネストは、

「そんな！ 僕が…、負けた。嘘だ！嘘だ！嘘だ!!」

ギルラプターに近づくシーザーを見たアーネストは、

「僕の負けだ！止めを刺せ。」

アーネストを見たウィルはゾイドキーを取り外してエヴオブラストを解除する。

「止めは刺さない。お前は帝国から抜け出して自由に生きろ！ゾイドを大切に思っているなら、そのギルラプターを大切にしろ！そして、エマの側にいろ！」

ウィルとシーザーはその場を立ち去ろうとするが、ギルラプターはシーザーの身体に取り付き、

「な、まさか、まだ動けるのか!? 一体何をするつもりだ!?!」

「例え、刺し違えてもお前を……!」



その時、ギルラプターの身体が発光し、

「まさか、お前自爆するつもりか！」

それを見たエマは、

「レイル！ もうやめてー!!」

しかし、ギルラプターは完全に力尽き、デスメタルキーが粉々に破壊され、同時にアーネストもコクピットの中で倒れた。エマはギルラプターの元に行き、コクピットの中のアーネストを起こす。

「レイル、しっかりして！ 出血が酷いわ！ 早く治療しないと!!」

その時、兵士が現れ、ストームとスミスに、

「報告します！ 現在、ジェノスピノがワイルド大陸に向けて海上を航行し、同盟軍と旧共和国軍と交戦中です！」

それを聞いたウイルはエマに、

「エマ、お前はそいつの元にいてくれないか！」

「ウイル、どうするの？」

「今、俺のやるべきこととはあいつを、ジェノスピノを止めることだ！ スミスさん、俺、デスロッキーに行きます！」

「待て、デスロッキーに行くには、海上を渡らなければならん！ わしのクワーガ、ク

ワガノス、カプター隊を使つて行け！」

「わかりました！　ありがとうございます！」

その時、ストームが、

「おっと、ちよつと待てよ！　俺は行かないとは一言も言っていないぜ！」

「ストームさん！」

「お前のライガーは確かに強くなつたが、あのジェノスピノは強い。万が一、敗れる可能性も無くはない！　だから、俺も付き合うぜ！　それに、グラッドの野郎から、お前の世話も頼まれているからな！」

「ありがとうございます！」

ウイルのシーザーとストームのキング（ワイルドライガー）

はクワীগ、クワガノス、カプターに輸送され、そのままデスロツキーのあるワイルド大陸に向かった。

「必ず、ジェノスピノを止めてみせる！」

To be continued

## 第25話 「決戦！デスロッキー」

ワイルド大陸、かつて、この大陸は200年前、デスメタル帝国という軍事テロ組織が猛威を震っていた。デスメタル帝国は正式な国家ではなく、1200年以上前のゾイドクライシス後の時代の技術を持っていないにも関わらず、かつて伝説の最凶ゾイドと呼ばれたデスレックスを従えた帝王ギャラガー一世の絶対的な力と圧倒的なカリスマ性、巧みな戦術と驚異的な腕でゾイドを操った四天王と呼ばれた幹部たちの力で、反対派のレジスタンスを押しえつけ、大陸のほとんどを支配下に治めていた。

しかし、デスレックスと共に、伝説のゾイドと呼ばれたワイルドライガーを相棒とする少年が率いるフリーダム団が本拠地のある大火山デスロッキーで、デスメタル帝国を襲撃し、デスロッキーでの最後の戦いで、ギャラガー一世は少年とワイルドライガーに敗れ、デスレックスと共にデスロッキーに沈み、デスメタル帝国は壊滅した。

そして、新地球暦1245年、壊滅したデスメタル帝国に成り代わり、ネオデスメタル帝国という強大な軍事国家が地球の8割を支配下に治め、ゾイドクライシス後に建国

された両国家の復活を渴望する旧帝国派（現新帝国）と旧共和国派のレジスタンスと交戦し、ネオデスメタル帝国初代皇帝ギャラガー三世は世界の3分の1を壊滅し、デスレックスと共に、最凶のゾイドと呼ばれたジェノスピノに乗って、ワイルド大陸に向かい、反乱軍の制圧に向かっていった。

ワイルド大陸で、旧共和国軍と同盟軍のガノンタス、スコープア、トリケラドゴスが海上を泳ぐジェノスピノと護衛のガブリゲーターG3を砲撃していた。

同盟軍と旧共和国軍のゾイドの集中砲撃で海に沈むガブリゲーターG3、兵士は通信を開いてグラッドに、

「コマンダー!ガブリゲーターG3を撃沈させました!」

「よし、更にカプター、クワガノス隊も出し、海中の潜水艇にも指示を出し、ジェノスピノに集中砲撃しろ!そして、奴が上陸しそうだったら、直ぐに撤退しろ!」

「了解しました!」

クリスはグラッドに、

「上手くいけますかね?」

「ジェノスピノの装甲に風穴を開けることは出来ずとも、この攻撃で少しでも奴の装甲にガタをつけないと倒すことは出来ないからな!」

上陸地点のガノンタス、スコープア、トリケラドゴス、空中のカブター、クワガノス、海上の軍艦、海中の潜水艇が一斉にジェノスピノに向けて集中砲撃をした。砲撃の嵐で見えなくなるジェノスピノ、それでもジェノスピノに決定的なダメージを与えられない。それでも砲撃する同盟軍と旧共和国軍のゾイド。

しかし、意外にもジェノスピノは攻撃する様子がない。その時、突然、ジェノスピノは海中に潜った。兵士は通信でグラッドに、

「コマンダー！ ジェノスピノが海中に潜りました!!」

「海中だど!! まさか、陸には上がらず、地下から進むつもりか!？」

よし、作戦をフェーズⅡに移行する。上陸地点にいるガノンタス、スコープア、トリケラドゴス隊は撤退、海中にいる潜水艇は総力を持ってジェノスピノに攻撃しろ!」

グラッドの指示通り、水中の潜水艇は海中に潜ったジェノスピノに向けて魚雷を射出

して攻撃した。しかし、ジェノスピノはびくともせず、ジェノスピノはA―Z魚雷ランチャーを4発放った。放った4発の魚雷が命中し、一瞬で2機の潜水艇と2機の軍艦が破壊される。映像を見たグラッドは通信で潜水艇の艦長に、

「旋回して横に回れ! 流石に奴は横にいる敵を攻撃することは出来ない! 横に来たところで攻撃しろ! それと海上にいる軍艦は直ちに撤退してその場から離れろ!」

グラッドの指示通り、潜水艇は横に旋回し、ジェノスピノに近づく。ジェノスピノに近付いた潜水艇は数発の魚雷を撃ち込む。しかし、ジェノスピノは無傷だった。潜水艇の艦長はそれを見て、

「なんて、化け物だ!」

しかし、ジェノスピノは攻撃した潜水艇に見向きもせず、そのまま真っ直ぐ海中を進み、岸壁に向かって泳いでいった。

ジェノスピノは岸壁にA―Z魚雷ランチャーを何発も撃ち込む。ジェノスピノの魚雷で岸壁に大きな穴が開く。岸壁に着いたジェノスピノは岸壁に頭をぶつけ、前足で岸壁を削っていった。映像を見たグラッドは、

「やはり、地下から進むつもりか! 艦長! ジェノスピノにありつたけの魚雷を撃ち込め!」

「了解しました! 全ての魚雷をジェノスピノに向けて発射しろ!」

艦長の命令と共に、残った潜水艇はありつただけの魚雷をジェノスピノに向けて砲撃する。魚雷を撃ち込まれ、崩れていく岸壁。崩れる岸壁と爆水でジェノスピノの姿が見えなくなる。

やがて、岸壁の崩れは収まったが、そこにジェノスピノの姿はなかった。それを見た艦長は通信でグラッドに、

「やりました！コマンダー。我々は勝ちました!!」

艦長の言葉と共に、喜ぶ潜水艇の船員たち、それを見た

クリスはグラッドに、

「本当に倒したんでしょか？」

「だといいのだが…。」

その時のグラッドの表情は冷めない顔をしていた。場所は変わり、旧ネオゼネバスシティの新帝国の基地にある医務室で、アーネストことレイルが寝込んでいて、その横にエマが心配そうに見つめていた。そこにユリスとカティアが入り、

「ユリスさん、カティアさん！」

「レイルの容態はどうなの？」

「医者によると、命に別状はないけど、左腕の出血が酷く、貧血を起こしていて傷もかなり酷く、治療が困難で、今は昏睡状態だけど、このまま安静にすれば大丈夫とのこと

です。

それと、ギルラプターも命に別状はないけど、ダメージが酷くて機能停止寸前とのことです。」

「そう…。」

「ごめんなさい!あたしがレイルを連れていかなかったせいで、レイルを傷つけてしまつて!!」

「ううん、エマのせいじゃないわ。あなたはレイルを救おうと何度も努力したじゃない。それに間違いはないわ。」

「でも…、もし、レイルがこのまま目を覚まさなかつたら…。」

そう言つて泣き崩れるエマ、ユリスはエマの肩に優しく触れ、

「今、あなたに出来ることはレイルのそばにいてあげること、それだけでもレイルはきつと喜んでくれるはずよ。そして、私たちは皆がここに帰つてくれることを願うだけ。」

それを聞いて複雑そうな表情をするカティア、再び場所は変わり、新帝国の司令室、シーガルは兵士に、

「ギャラガー親衛隊がこちらに来るまで、後、どれぐらいだ?」

「後、8時間です!」



「同盟軍から報告は？」

「まだです！」

「くそ、ジェノスピノがワイルド大陸に移動したとはいえ、それでも我が新帝国軍の戦力はギャラガー親衛隊には敵わない！連中がこちらに来るまで、同盟軍がジェノスピノを倒してくれないと…、」

「シーガル中将！」

「なんだ？」

「旧共和国のクライブ・デルタ少将から通信が入っています！」

「繋げ！」

「旧共和国のクライブ・デルタ少将だ！」

「一体、何の用だ？」

「実はこちらの援軍をそちらに向かわせた！後、2時間程で着くだろう。ギャラガー親衛隊を倒せるという保障は難しいが、それでも精鋭部隊だ！足止めくらいは十分出来るだろう！」

「どういう風の吹き回しかな？」

「そちらの関係は良くないとはいえ、我々は同じ反ネオデスマタルの同士だ！我々はネオデスマタル帝国を倒すためにあなた方の力を借りたい！」

「ふん、まあ、いいだろう!そちらの精鋭部隊がどれ程のものか見せてやる。」

「では!」

通信を切り、シーガル中将の元にアルドリッジが現れ、

「随分、苦戦しておられるご様子ですね!」

「アルドリッジ大佐か!まあ、仕方ない。我が新帝国のためには連中を利用する必要があるからな!」

「しかし、その精鋭部隊が万が一役立たずでもこちらには最終兵器とも呼ぶべき強力な助っ人がいます!」

「ほう、お前がそこまで言うとは、で、一体誰なんだ?」

「あなたもよく知っている人物です!」

アルドリッジ大佐の横に壁越しで真帝国と同じ軍服を着た青年がいた。

ワイルド大陸にあるデスロッキードでは、上陸地点から戻ったガノンタス、スコープア、トリケラドゴス隊も一緒に同盟軍と旧共和国軍のゾイドが周囲を警戒していた。アレックスとアッシュは、

「なあ、ホントにあのジェノスピノは生きていたのか？」

「あのときの戦いを忘れたのか？あれで、死んでいたら、あのときの戦いでとつくに死んでるわ！」

横にいるケンには、

「しかし、地下からだだと、正確な位置がわからないな！」

警戒する素振りを見せるゼル、ジョンとジェニファアは、

「ねえ、もし、この戦いがあつた最後の最後だったら、あつた、あつたのことが好きって言うけど、あなたはどつするの？」

「バカな冗談はよせ！確かに前との付き合いは長いが、そんなつもりはない！」

「もう！素直じゃないんだから!!」

少し離れたところにグラッドとクリスは、

「しかし、地下を進んだ状態で、我々の居場所がわかるんですかね？」

「帝国の技術もそうはばかにならん！おそらく、レーダーで俺たちのいる場所に向かっているんだろう。」

「そうなるよ、こちらが不利ですね。どこから来るのか分からない。」

「だから、こうやってそれぞれバラバラに広がってどこから出るかわかるようにしているんだ! ようするに、デッカいもぐら叩きをやるようなもんだ!」

「しかし、いくら水陸両用のジェノスピノでも地下を進むなんて…」

「ゾイドクライシスで世界の3分の1を壊滅させた最凶のゾイドだ! ましてや、ライダーがギャラガー三世なら、旧帝国が復元させたものより、一枚、いや二枚上手だと思え!」

その時、突然、地面が揺れ、

「なんだ? 地震か!」

その時、地面から回転するジェノソーザーが現れ、地面を削って移動しながら次々と同盟軍と旧共和国軍のガンタス、スコーパー、トリケラドゴスを粉砕していく。

そして、同盟軍と旧共和国軍の合同軍を蹴散らした後、ジェノソーザーが上上がり、更に前足が地面を掴み、地面からジェノスピノが現れた。

「ジェノスピノ、マシンブラスト解除。」

コクピットにいるギャラガー三世の言葉と共に、マシンブラストを解除するジェノスピノ、それを見て、驚愕するグラッドたち、グラッドは、ジェノスピノに魚雷が当たる寸前の場面を思いだし、

「そうか、魚雷を撃ち込まれる寸前に、マシンブラストし、そのまま回転するジェノソーザーを使って地下を掘り進んで行ったのか!! なんて野郎だ!

だが、いい気になるなよ! この前の借りは倍返しにしてやるぜ! 準備はいいな? レックス!」

アオ〜ン!

グラッドの言葉に伝えて咆哮を上げるレックス、

「狙い撃て、レックス! 俺の魂と共に、進化 解放! エヴオブラストー!! ファイナルガトリング!」

エヴオブラストしたレックスの巨大なガトリングがジェノスピノに向けて砲撃する。改造してパワーアップしたレックスの新たなエヴオブラスト技ファイナルガトリングを喰らって後退するジェノスピノ、同時にジェノスピノのコクピットにもかなりの衝撃が走る。その衝撃を受けたギャラガー三世は少し驚いて、

「これは…!」

更に追い討ちをかけるようにレックスはジェノスピノのすぐ近くに行き、

「今度はもつと凄いで! ファイナルガトリングゼロ!!」

至近距離で、ファイナルガトリングを撃ち込まれたジェノスピノは足を崩す。ジェノスピノの様子を見たギャラガー三世は不敵な笑みを浮かべ、

「まさか、ここまで強化しているとは……!」

「へ、ゼロ距離で数千発ぶちこんでやったぜ!」

それを見たクリスたちは驚愕した。

「ゼツガーでの戦いはジェノスピノに一切通用しなかったのに、まさか、ここまでとは!」

「お前ら、作戦開始だ。しばらくこいつは俺が引き受ける!」

「しかし、コマンダー!」

「もしかしたら、こいつは最後の戦いになるかもしれないねえ。だから、総司令としてお前たちは俺が守る! さあ、ついてこい! ジェノスピノ!!」

そう言って、レックスはデスロッキーの方に行く。

それを見たギャラガー三世は、

「ふん、面白い。」

ジェノスピノはレックスについていく。デスロッキーの火口にまで来るレックスとジェノスピノ、火口にはゴールドが待ち構えていた。

レックスはガトリングをジェノスピノに撃ち込み、ジェノスピノはA―Zロングギャンオンを撃ち込む。それぞれ撃ち合いをして遂にジェノスピノはマグマの火口にまで追い込んだ。

それを見たグラッドはクルーガーに合図をし、

「今だ!!」

「蹴散らせ、ゴルド! 私の魂と共に、本能 解放! ワイルドブラストー!! グラ  
ドハンマー!!」

グランドハンマーでジェノスピノの足場を破壊しようとするゴルド、しかし、その時、ジェノスピノがジャンプしてレックスの上をまたいでそのままゴルドの前に立った。

そして、ジェノスピノは真剣白羽取りをするかのように両前足でゴルドのグラントハンマーを止めた。それを見て驚くグラッドとクルーガー、ジェノスピノはそのままゴルドの首に噛みつき、ゴルドを押し倒す。ギャラガー三世は2人に、

「私をマグマまで誘い出して、その後、グラントハンマーで足場を破壊してマグマに突き落とすつもりだったろうが、残念だったな!」

しかし、ゴルドは立ち上がり、ジェノスピノにグラントハンマーを放とうとする。しかし、ジェノスピノは再びゴルドの首を喰わえ、ゴルドの首を引きちぎろうとする。レックスはジェノスピノに攻撃しようとするが、ジェノスピノの尻尾で風ぎ払われてしまう。それを見たクリスたちは、

「皆、ワイルドブラストだ!」

「ワイルドブラストー!!」

「スカイスラッシュユ！」

「スパイダーポイズン！」

「ストーム・シザース！」

「虎振！」

「弾丸鈍破！」

「金剛旋撃衝！」

クリスたちの相棒ゾイドが一齐にワイルドブラストし、全ての攻撃がジェノスピノに直撃する。しかし、ジェノスピノは怯まず、尻尾でジャックたちを尻ぎ払い、ジャックたちに火炎放射を吐く。

ジェノスピノの火炎放射で一氣に周囲が燃え尽きてしまい、火炎放射を食らったレックスタちはかなりのダメージを受けた。しかし、その隙にゴールドが再びジェノスピノにグランドハンマーを繰り出そうとするが、ジェノスピノは頭突きで体当たりし、更に尻尾で尻ぎ払う。ジェノスピノの連続攻撃で力尽きるゴールド、それを見たギヤラガー三世は、

「確かに以前より強くなったが、それでも私のジェノスピノには敵わない！ゾイドクライシスで世界の3分の1を壊滅したパワーと私の腕でジェノスピノは何物にも勝る力を持ったのだ！」



いくら、改造して更にパワーアップした貴様らでも私を越えることなど出来やしない。

さて、余興はこれで終わりだ。以前は運良く装備だけ破壊されただけで済んだが、今度は2度と再生出来ないよう、破壊してやる。

制御トリガー解除、ジェノスピノ！ 兵器 解放！ マシンブラストー！！」

マシンブラストするジェノスピノを見たグラッドは、

「くそ、どうやらここまでか。」

「今度こそ、終わりだ！ ジェノサイドクラッシュャー！！」

「やめろー！！」

その時、ウィルの言葉と共にシーザーが現れ、ジェノスピノに体当たりし、ジェノスピノはシーザーの突進で足を崩し、倒れる。シーザーの姿を見たグラッドたちは驚愕した。

「あ、あれは、シ……ザー……なのか？ しかし、あの姿は!?」

ウィルはグラッドたちに、

「遅くなつてごめんなさい！ 大丈夫ですか？」

グラッドはウィルに、

「それより、そのライガーはなんだ？ ホントにシーザーなのか？」

「説明は後だ! とにかく、こいつは俺とウイルが引き受ける!」

ストームの言葉と共にワイルドライガーのキングも現れる。

「それにしても、ここに来るのは初めてだが、何だか懐かしいな! 俺の先祖が昔ここで戦ったからかな?」

そして、あれがジェノスピノか! かつて、ゾイドクライシスつちゆう大昔の地殻変動で世界の3分の1を壊滅したゾイドは!

本音を言うと、ゾイドであるお前よりお前に乗っている何だか嫌な感じがするライダーを倒したいところだが!

立ち上がるジェノスピノ、ジェノスピノを見て睨むキング、キングを見たギャラガー三世は、

「なんだ? 貴様は!」

「俺か? 俺はストーム・ブレダ! 世界を回るゾイドハンターにして、同盟軍の指導者だ!」

「なるほど、そのワイルドライガーといい、貴様、一世を葬ったガキの子孫か! 道理で面影があると思った!」

「確かにてめえからあのギャラガー一世に似た感じはするが、でも何かちよつと違う気もするな! 何だか、それよりもつとやべえ匂いが!!」

「御託はその辺にするんだな！貴様もこの墓場で葬られるんだからな！」

「おいおい、俺の相棒はここで一度デスレックスと戦ったんだ！こんなところで死ぬわけがないだろう！そうだよな、相棒!？」

グオオ〜!!

ストームの言葉に応え、咆哮を上げるキング、

「ふん、試してみるか！ ジェノサイドクラッシュャー！」

シーザーとキングに向けて突進していくジェノスピノ、ジェノサイドクラッシュャーを避けるシーザーとキング、ストームはウイルに、

「ウイル、パワーアップしたお前の相棒の力見せてやれ！」

「わかった！ ウオオー!!」

シーザーを見たギヤラガー三世は、

「あれは、噂のライジングライガー！ まさか、あの状態から復活して進化するとは！だが、それでも私には勝てん！」

シーザーに火炎放射を吐くジェノスピノ、しかし、シーザーは放熱フィンで火炎放射を防ぎ、生還する。攻撃の手を緩めずに攻撃を繰り返すジェノスピノ、しかし、シーザーは巧みに攻撃をかわしながら、ジェノスピノにA-Z機関砲を撃ち込む。それを見たグラッドは、

「スゲエ、あのジェノスピノと互角に渡り合っている。」

クリスはグラッドに、

「コマンダー！ ウイルが時間を稼いでいる内に足場を！」

「ああ、そうだな！ よし、皆、足場を破壊するぞ！」

「ファイナルガトリング!!」

「スカイスラッシュ!!」

「スパイダーポイズン!!」

「ストーム・シザース!!」

「虎振!!」

「弾丸鈍破!!」

「金剛旋撃衝!!」

「グラッドハンマー!!」

レックスたちのワイルドブラスト技が一斉に地面を攻撃し、足場が崩れていく。足場が崩れてよろめくジェノスピノ、グラッドはウイルスとストームに、

「今だ！」

ストームはウイルスに、

「ようし、ウイルス！ 俺が先に奴に突っ込み、お前はその後には攻撃するんだ！」

「わかった！」

そう言つて、先に突進するキング、

「キング！ 俺たちの力、あいつに見せてやろうぜ！！」

グオオ〜！！

「燃えろ、キング！ 俺の魂と共に、進化 解放！ エヴォブラストー！！ キングオブ

クローブラスト！！」

ギユオオ〜！！

キングのキングオブクローブラストが直撃し、ジェノスピノの腹部の装甲に傷がつき、ジェノスピノが苦しむ。そして、その後ろからシーザーが現れ、

「いくぞ、シーザー！！」

グオオ〜！！

「切り拓け、シーザー！ 俺の魂と共に、進化 解放！ エヴォブラストー！！」

それを見たギャラガー三世は、

「そうはさせるか！ ジェノサイドクラッシュヤー！！」

「ライジングバーストブレイク！！」

シーザーのライジングバーストブレイクとジェノスピノのジェノサイドクラッシュヤーが交わり合い、火花が散る。だが、その時、ジェノスピノのジェノソーザーに亀

裂が走り、全ての刃が砕け散った。

「何!? バカなー!! ウオオー!!」

ジェノソーザーを破壊され、足がよろめくジェノスピノは遂にマグマの火口に落ちた。グラッドはウイルたちに、

「よし、皆、直ちに火山から離脱だ!」

ウイルたちがデスロッキーから離れた後、グラッドはスイツチを押し、デスロッキーが爆発する。デスロッキーは跡形もなく破壊していった。帝都メガロポリスの皇帝の宮殿の司令部にいるタツカー元帥に親衛隊兵士から通信が入った。

「タツカー元帥! ただいま、ジェノスピノがデスロッキーでライオン種と交戦し、火山の爆発を受けて消息不明との報告がありました!」

「なに!! そ、そんなバカな! く! 直ちに撤退し、帝都に引き返せ!」

「しかし、反乱軍の制圧は?」

「緊急事態だ! 撤退後、宮殿で緊急会議を開く!」

タツカー元帥の命令を受けて、親衛隊のゾイドは次々と撤退していく。その映像を見たシーガル中將は、

「なんだ? 一体、何が起こったのだ!」

「シーガル中將、ただいま、同盟軍がジェノスピノ討伐に成功したとの報告がありました

た。」

「何！そうか、我々は救われたということか！ふ、せっかく旧共和国の精鋭部隊も、前が用意した最終兵器も無駄になったな！ アルドリッジ大佐。」

「ご心配にはごいけません。彼はいずれ、帝都制圧に十分な働きをしてくれるでしょう！」

アルドリッジ大佐の言葉と共に、ゾイド保管室には何やら、強力な改造がされたハンターウルフラしきゾイドがいた。

デスクロッキーから離れた場所に2体のギルラプタージョーカーがその様子を見ていて、2体のジョーカーには皇太子ガネスト・ギヤラガーとドクターマイルスが乗っていた。双眼鏡でその様子を見たガネストは、

「あゝあ、やられちゃった。予定ではライジングになる前にあのライガーを始末するんじゃないかったの？」

「いや、それはあくまで仮の目的だ。それにあの戦いのおかげでいいデータが取れた。」

そう言ったドクターマイルスは手に持っている昆虫型のスパイゾイドを見た。場所  
は変わり、帝都メガロポリスの皇帝の宮殿の地下研究所にZGと呼ばれるゾイドが入っ  
たカプセルに接続しているコードと繋がっている後ろ向きの玉座があり、そこにある人  
物が座っていた。

「……ジエノスピノが敗れたか…。」

To be continued

第一部終了／第二部に続く。



## 第26話 「新皇帝誕生」

新地球暦1245年、デスロッキーにてネオデスメタル帝国皇帝ギヤラガー三世とジェノスピノを倒したという情報は新帝国、旧共和国のみならず、各地の反ネオデスメタルに知れ渡った。

新地球暦1245年、かつて旧帝国の帝都にして、現新帝国の本拠地である旧ネオゼネバスシティ、ウイルたち同盟軍は新帝国軍最高司令のシーガル中將の指導の元に旧共和国初めの他の反ネオデスメタルの派閥が集まり、ウイルたちを歓迎していた。

多くの兵士と市民が拍手喝采する中、ウイルは照れながら、市民たちに手を振った。ストームとグラッドたちは喜ぶ素振りを見せながらも少し冷めた表情をしていた。シーガル中將は市民に向かって、

「諸君、我々はジェノスピノによって我が新帝国は脅威に晒されていた！」

しかし、かつて、世界を救った伝説のライジングライガーになった彼のライガーとその同士がジェノスピノを倒し、我らの皇帝メルビル二世陛下と我が新帝国は救われた！

諸君、我が帝国を救った彼らを英雄として称えようではないか!!」

「ウォー!!」

シーガル中將の演説で、歓声を上げる新帝国の市民たち、それを聞いたストームとグラッドは少し不満そうな表情をしていた。ウィルたちは新帝国皇帝メルビル二世ことクリスから勲章を授けられ、多くの歓声を上げられた後、ウィルたちは別のレジスタンスからある都市に歓迎された。

モザイク都市ボスク、この都市には、和風や西洋物等の様々な文化が入り交じり、まさに文字通りモザイクのようになっていた都市、通りには人々とゾイドが一緒に行き来したり、ゾイドを散歩している人等が多かった街であった。街を見たウィルたちは驚いていた。クリスはグラッドに、

「こんな街があるなんて驚いたな！」

「ここは、運よく帝国の支配を受けなかった街だからな。だから、ここまで平和でいられたんだろう。」

「それにしても、こんなにも複数の文化が入り交じっているとは……。」

「ゾイドクライシス以後、地球の文明はすっかり衰退していったが、長い時を得て、再び地球の文化が復活していき、長いこと戦争に巻き込まれなかつたため、ここには地球と惑星Ziの文化を取り入れて発展していったそうだ！」

全員が街を眺めている時、1人の少年がシーザーを見た。

「わあ、凄い！　これがライジンググライガーか。」

シーザーを見ている少年にウイルは、

「そうだよ！　俺のシーザーさ！」

「シーザー？　それがこのライガーの名前？」

「そうさ、俺が名付けたんだよ！」

「いいな。俺もシーザーのような相棒が欲しい！」

「君、相棒いないの？」

「僕はまだ子供だから、パパやママがまだゾイドを持つなって言うから、まだいないんだ！」

「君でも相棒ゾイドはきつと来てくれるさ！　ところで、君の名前は？」

「俺は獣機レイ!!」

少年を見たケンとグラッドは、

「あの少年、帝国に占領された私の故郷の子か？」

「ここには、帝国の侵略で故郷を失った人々が多く亡命している場所でもあるからな。」

その時、ストームが何か見つけたように、

「お、あそこに温泉があるらしいぜ！ せっかくだから、全員で浸かろうぜ！」

「戦争の傷を癒すにはちょうどいい場所だ！ それにゾイド憩いの場所もあるらしいし。」

クリスはグラッドに、

「コマンダー！ そんなのんびりして大丈夫なんですか？ もし、こんなときに敵襲があつたらー！」

「今の帝国は皇帝不在の頭のない蛇同然の状態だ。むしろ、俺たちの討伐どころじゃないし、早々襲撃してくることはないだろう。」

「おうし、そうと決まれば、早速入ろうぜ！」

「温泉饅頭あつたら買おうぜ！」

「いいね！」

「観光じゃねえぞ！」

ネオデスメタル帝国では、ジェノスピノがシーザーに敗れ、デスロツキーに沈み、皇帝ギヤラガー三世が消息不明となり、事実上、皇帝を失った空白状態になっていた。

国民の動揺を恐れ、事態を重く見た帝国N02にして帝国顧問のタツカー元帥は四天王を初め、帝国の各領域を管轄する総督たちを全て帝都メガロポリスの皇帝の宮殿に集めて、宮殿内の会議室に集結させた。宮殿内の会議室で、タツカー元帥は四天王や全ての総督たちに向かって、

「諸君！ 今回、お集まり頂いたのは、先日、皇帝ギヤラガー三世陛下が操るジェノスピノが倒したはずのライガーが新たな姿となつて、陛下のジェノスピノを敗り、デスロツキーに落としたとの報告があつた！」

それを聞いた他の総督は、

「なんと！ まさか、我らの偉大なる皇帝ギヤラガー三世陛下がたかがライオン種ご

ときに敗れ、御隠れになるとは！」

「元帥閣下！ そのライガーは陛下のジェノスピノによつて瀕死の状態と聞きました！ 何故、復活したのです？」

他の総督の質問に対し、タツカー元帥は、

「その件に関しては、私がライガー破壊工作を命じたルメイ大将によると、そのライガーは突然変異とも言える進化を遂げ、ルメイ大将のドライパンサーを破壊したのとことです！」

「でしたら、尚更、そのライガーは危険分子だ！ 反乱軍共はそのライガーを英雄にし、我らネオデスマタル帝国への抵抗を続けようと企んでいる。

今すぐ、総力を上げてそのライガーを徹底的に破壊せねば！」

「だが、その前に我々には為すべきことがある！ 次期皇帝の即位だ！ 今、我が親衛隊を捜索隊としてデスロッキーに向かわせ、皇帝陛下とジェノスピノの捜索に当たっている。

敗れたとはいえ、陛下のジェノスピノは伝説のゾイドクライシスで世界の3分の1を壊滅させた伝説のゾイドだ！ いくらデスロッキーに沈んだとはいえ、そう簡単に死ぬわけがない。

だが、万が一の可能性もないとは言えず、皇帝不在の今の我が帝国は頭のない蛇同然。

皇帝不在ともなると、帝国国民は動揺し、兵の士気が下がる。そこで、ギャラガー三世陛下の王位継承者を即位させるつもりなのだが！」

それを聞いて騒然とする総督たち、しかし、そんな中、アツカーマン中将が手を挙げ、「元帥閣下、皇帝陛下の正当なる王位継承者はアーネスト殿下しかいないはずです！それに殿下は新帝国の反乱軍の捕虜にされていますが、生きておられます。直ちに私とカーター大佐率いる南方隊が反乱軍に総攻撃をかけ、殿下を救出致します！」

「その必要はない！」

「何故です!!」

「実はルメイ大将の報告によると、ギルラプターエンペラーに乗って脱出を図った殿下が例のライガーと交戦し、破壊されたとの報告があつた！つまり、アーネスト殿下は亡くなられた！」

それを聞いたアツカーマン中将は手が震えるように驚愕した。

「…そんな……、まさか…、殿下が…。」

「しかし、諸君！嘆く心配はない！皇帝陛下は万が一のことを考えて、予め遺言書を遺された。今からそれを読み上げる。」

それを聞いた総督たちは騒然とし、

「私はこの戦いを反乱軍最後の日とし、この戦争に終止符を打ち、世界統一を果たし、

世界に平和をもたらすつもりだ！

だが、戦いには何が起ころかわからない！万が一、私が死ぬ可能性もある。そこで、私  
が万が一死んだ場合、私の最愛の息子を即位させ、全ての軍と国民は我が息子に忠誠を  
誓い、帝国の、いや、世界の正義と秩序のために力を尽くすのだ！

その息子の名は帝国第二皇子にして、現皇太子ガネスト・ギヤラガー!!」  
それを聞いた総督たちは驚愕した。

宮殿の地下研究所、ドクターマイルスはZGと呼ばれる謎のゾイドが入った巨体カプ  
セルに接続しているコードと繋がっている後ろ向きの玉座に座っている人物と話して  
いた。

「私の分身が操るジェノスピノがライジングライガーに敗れてしまった。まさかかつ  
ての歴史を繰り返すことになるとは!!」

「ですが、ご心配は御座いませぬ。私のスパイゾイドが例のライジングライガーのD  
NAと戦闘データを手に入れました！これで、我が帝国の戦力は更に増大します！」



「そうか、ところで今、宮殿では、緊急会議が行われているそうだが、予定通り、ガネストを次期皇帝にするそうだな。」

「はい、タッカー元帥が本日戴冠式を行うつもりだそうで！」

「つまり、予定通り、今度は奴が私の新たな影武者となるのだな。ところで、肝心の私のZGの完成とガネストのオメガレックスの強化に必要なリジエネレーションキューブの作動はどうなっている？」

「やはり、かつてのライジングライガーのライダーとあのサリー・ランドの血を引く小娘がいないと作動させることは出来ないとみられます。」

「だが、手配書を出しておきながら、その小娘を捕らえるのに随分低迷しているそうじゃないか！」

「何せ、あの小僧と一緒に反乱軍の制圧という任務もあつて中々…、ですが、手は打つてありますので、ご安心を！」

「いいだろう！ 小娘はお前に任せて、反乱軍の制圧はタッカーたちに任せよう。」  
「ありがとうございます。では、失礼します！」

地下の研究所から出たドクターマイルスは見張りの親衛隊兵士に、

「皇太子殿下はどちらへ？」

「シミュレーション室で機械兵と訓練しております。」

それを聞いたドクターマイルスはシミュレーション室に向かい、シミュレーション室にはガネストが5体の機械兵と戦っていた。ガネストは上半身裸にジーンズを着た姿で、武器を使用せず、格闘で戦闘していた。

ガネストはアーネストと瓜二つで中性的な風貌をした美少年で、細身ではあるものの、上半身裸の彼の姿は歴戦を勝ち抜いたかのようなかなりの筋肉質であった。機械兵は一斉にガネストに殴りかかるが、ガネストは一体一体の攻撃を避け、キックで一体の機械兵を倒し、更に機械兵の腕を掴んで投げ飛ばし、更には力尽くでその腕をへし折った。

僅か、3分でガネストは機械兵を倒した。それを見たドクターマイルスはシミュレーション室に入り、

「流石は皇帝陛下の正当なる王位継承者、これなら、オメガレックスを十分乗りこなせるでしょう！」

「別にそんな褒め言葉はいらないけど……とところで、宮殿がバタバタしてるけど、何やってんの？」

「タツカー元帥の緊急会議で、あなたを次期皇帝として即位させることが決定したとのことですよ！」

「ふうん、ま、ボクの皇帝即位はわかりきったことだけど、それより、オメガレック

スの強化に必要なリジエネレーションキューブの作動はどうなっているの？ いい加減待ちくたびれたんだけど！」

「それについてはご安心を！ リジエネレーションキューブ作動のために必要な小娘を捕らえる準備は整っています。もうしばらく御時間を！」

「てことは、まだ掛かるの？」

「少し、時間は掛かりますが、それまでには殿下を楽しませる余興を用意しておりますので、ご安心を！」

「ふうくん、まあ、いいや！ とりあえず、ボクは汗かいたから、風呂にいかせてもらうよ！」

そう言って、浴場の方に向かうガネスト、それを見たドクターマイルスは、

「ふふふ、まさに殺戮マシーンに相応しい出来だ！ オメガレックスに乗る殿下の姿が楽しみだ！」

モザイク都市ボスク、ウイルやストームたちは温泉に入ってゆっくりしていた。ストームとグラッドは、

「ふう〜、温泉に入るなんて久しぶりだ！」

「全くだ！」

アレックスはグラッドに、

「なあ、コマンダー！ しばらく、ここでゆっくりしていきましょう！」

横にいるアツシユは、

「あ、なあ、いくら、帝国がしばらく攻めて来ないからといって平和ボケしすぎだろ  
！」

「固いこと言うなよ！」

グラッドはストームに、

「なあ、ストーム！」

「ん？」

「そういや、リセルはどうしたんだ？ デスロッキーでの戦いもいなかったし、一体ど

こに行つたんだ？」

「ああ、実はそのことなんだが、いくら捜してもどこにもいないし、それにドライパンサーとギルラプターとの戦闘もあつて、捜す暇もなくなつて、また捜しに行こうかと思つたら、例の歓迎でそれどころじゃなくて、結局あいつがどこに行つたかわからない状態なんだ。おまけにスミスが持つてきたマイロのパーツまで無くなつたし。」

「全く、どこにほつつき歩いてんだか！ それに英雄だか、歓迎だとか、まるで俺たちが新帝国のために戦つたみたいかのように言いやがつて！ 不愉快だぜ。」

「同感だ！俺たちは人々とゾイドのために戦う正義のゾイドハンターなんだぜ！」

「自分で正義つて言うのもちよつと痛いかな！」

その時、ウィルが口を開き、

「確かに、俺たちはジェノスピノに勝ち、ネオデスメタル帝国にも勝つたかもしれない。父さんの仇だつてとつた。でも、それでも帝国を倒したわけじゃない！」

そんなウィルの言葉に対し、グラッドは、

「ま、確かにそうだな！ 皇帝は倒したが、帝国は未だ健在だ。今は一時休戦みたいなものだ！ まだ俺たちの戦いは終わつていない。」

しかし、ウィルは、

「そうだけど、帝国を倒すことが俺たちの最終目標なんだろうか？ 俺たちはあくま

で、ゾイドと人々を帝国から解放してゾイドと人間が共存できる世界を築くために戦っているんだ！ ただ帝国を倒すことが俺たちの正義なのか？」

「それを言われるとなあ…。」

その時、ストームが口を開き、

「それは、今後の帝国次第だな！」

それを聞いてウイルは、

「帝国…次第…？」

「ああ、かつて、俺の先祖がフリーダム団を結成して旅をした時は確かに旧デスメタル帝国を倒すためのようなものだった。だが、それはデスメタルがゾイドと人々を苦しめていたから、その悪行を無くすために戦っていて、フリーダム団の旅の最終目標ではなかった！」

あくまで、フリーダム団の目的は自由な旅、誰にも縛られず、皆で楽しく過ごし、古代秘宝乙を捜すことが最終目標だった。

ま、最もその古代秘宝乙がデスレックスだって知って、旅の目標が狂っちゃったそうだがな！」

それを聞いたウイルは、

「誰にも縛られない自由な旅…。」

「さて、堅苦しい話は終わりにして、今日は温泉三昧として楽しくいこうぜ!!」

旧ネオゼネバスシティの基地、病室で昏睡状態のレイルを横でエマが心配そうに見つめていた。エマはレイルの手を優しく握り、

「ごめんね、レイル。ごめんね…。」

泣き崩れるエマをユリスはドアの隙間から心配そうに見つめていた。

基地の司令室では、

「よくやった。アルドリツジ大佐！ お前の紹介した男が我が新帝国の戦力を増大しただけでなく、歓迎と見せ掛けて、同盟軍を観光都市に行かせ、我々の邪魔をさせないようにさせるとは、これでネオデスメタル帝国を倒すことが出来そうだ。な、リセルヴァ・ディアス准将！」

アルドリツジ大佐の横にいたのは、なんと、リセルだった。リセルはシーガル中將に、

「これで、同盟軍は我々に手出しすることはないでしょう。そして、メルビル二世陛下には演習と偽って、明朝、帝都メガロポリスに向け、総攻撃をかけましょう！」

「かつて、旧共和国の英雄だったデイビッド・ロバートソンのハンターウルフのパーツを使って、お前のウルフをかつての真帝国のウルフ以上のゾイドに改造することができた。今後も期待しているよ。准将！」

「はい！」

ボスクの旅館で、ストームたちがのみかいをして、グラッドたちがぐっすり眠った後、ウイルはシーザーと共に外にいた。シーザーはウイルをじつと見つめ、

「大丈夫だよ！ シーザー。」

「何やっているんだ？」

そこへ、ストームとキングが現れ、



「べ、別に何でもないよ！」

「嘘言うな！　まだ、悩んでいるようだな！」

「そ、そんなこと……！」

「ま、でも、俺もお前と同じ年頃の時はそうやって悩んだこともあったさ。」

「俺と？」

「ああ、俺がキングと相棒に中々なれなかった時だ。」

「え、でも、キングって先祖代々の相棒じゃあ……」

「というか、キングは先祖との絆が強くて中々俺を受け入れてくれなくてさ。」

「ま、最もあの時の俺は先祖の意思を引き継ぐ（ついで）こうとする思いはなかったからな！」

「先祖の意思？」

「ストームはキングの背中を指差し、

「親父から聞いた話だが、キングのあれはタテガミクローじやなく、先祖の友人でシユ  
プリーム団つていうゾイドチームのリーダーだった相棒のフアングタイガーから譲り  
受けたツインドフアングなんだ！」

それを聞いたウィルは驚いた。

「デスロッキードで、一世とデスレックスを倒して、旅した俺の先祖の元にフアングタイ  
ガーが現れて、そのタイガーが先祖にデスレックスとの戦いで死んだ相棒の意思を引き

継いでくれて言ってみたいで、自分のツインドファンクをキングに与えたんだ！

その後！同じフリーダム団のメンバーで妻であるゾイド整備士によって、タイガーのツインドファンクをキングに移植させたんだが、他のゾイドのパーツを移植させたため、拒絶反応で直ぐにワイルドブラスト出来ず、ワイルドブラストするのに随分手間取ったが、既に先祖はデスレックスとの戦いで、キングと固い絆で結ばれていたもので、そんなに時間はかからなかった。

俺は親父からその話を聞いて、もう一度キングと向き合い、ようやくキングは俺を相棒と認めてくれたよ。

ウイル！お前はシーザーを信じているんだろ？ だったら、シーザーともう一度向き合って、自分が何をすればいいか、考えてみる！！

さて、もう遅いし、そろそろ寝るか！ じゃあな、チャオー！」  
ウイルはシーザーを見つめ、

「シーザー、俺は怖かったんだ！ ライジングライガーに進化して、ジェノスピノを倒したけど、その強大な力を持ってしまって、お前をもっと戦いに巻き込んでしまうんじゃないかって！」

しかし、シーザーはウイルに何か言うようにうなずき、

「そうだよな！ シーザー、俺とお前なら、どんな困難だって乗り越えていけるさ！

さあ、もう寝よか。」

明朝、シーガル中將はアルドリツジ大佐やりセルと共に帝都メガロポリスに侵攻しようとしたその時、兵士がシーガル中將の元に現れ、

「中將！ 大変です!!」

「どうした?」

「メガロポリスで中繼が入り…、」

兵士が言っていたのは、帝都メガロポリスで、全世界中繼でタッカー元帥が宮殿で、国民の前で演説していた。

「諸君！ 非常に悲しい知らせだ！ 先日、皇帝陛下の操るジェノスピノが反乱軍に敗れ、火山に落ちたとのことだ！」

それを聞いた国民は驚愕した。

「捜索隊は出してはいるが、生きておられるという可能性は非常に低いとみていいだろう。」

それを聞いた国民たちは騒然とし、泣き崩れる者もいた。

「諸君！ こんなことが許されていいのか!! 皇帝陛下は争いの絶えないこの世界を統一し、秩序をもたらし、平和にするために自ら御出撃したのだ！ それを愚かな反乱軍は非常にもその皇帝陛下を殺したのだ！ 諸君！ 今こそ、立ち上がれ！ 皇帝陛下の仇を討つのだー!!」

「ウオオー!!」

歓声を上げる帝国国民、

「だが、諸君！ 悲しむことはない。皇帝陛下は事前に遺言を残し、次に皇帝となられるお方を御決めになられたのだ！」

それを聞いた帝国国民は騒然とし、

「さあ、称えよ！ 我が帝国の新たな皇帝、陛下の第二皇子にして皇太子であるガネスト・ギアラガー殿下を!!」

そこに宮殿に現れたのは赤いマントを初め、一世をモチーフにした派手な礼服を着用したガネストがギルラプタージョーカーに乗って現れた。

「ウオオー!! 皇太子殿下万歳！ ガネスト殿下万歳！」

ガネストを見た帝国国民は一斉に歓声を上げた。タツカー元帥は帝国国民に向かって、

「これより、本日は皇太子殿下の戴冠式とし、ガネスト・ギヤラガー殿下をネオデスメタル帝国第二代皇帝ギヤラガー四世として御即位させることをここに宣言する!! さあ、称えよ! 新皇帝ギヤラガー四世陛下を!!」

帝国国民は一斉に歓声を上げ、

「ウオオー!! ギヤラガー! ギヤラガー! ギヤラガー! ギヤラガー!」

中継を見たシーガル中將を初め、エマ、ユリス、カティアはもちろん、ボスクにいたウイルたちもそれを見て驚愕していた。ガネストを見たウイルは驚いた表情で、

「新…皇帝…!」

To be continued

## 第27話「囚われのエマ」

帝都メガロポリス、皇太子ガネストが皇帝ギヤラーガー四世となり、その戴冠式が終わり、帝都には四天王を初めとする各領域の総督が自軍を率いて、それぞれ反乱軍鎮圧のために出撃していた。宮殿内の司令室でタツカー元帥がその様子を見ていた。そこにベケツト少佐、アーミテージ大尉、ルメイ大将、デーニッツ中将、グレッゲル准将が入った。タツカー元帥はベケツト少佐たちに、

「おお、我がネオデスメタルの同士たちよ！ よく来てくれた。」  
それに対し、ベケツト少佐は、

「ガネスト皇太子殿下が御即位なされて、我々の計画は順調に進んでいます！ 後は現陛下の乗るオメガレックスと…。」

「先帝陛下がドクターに命じて復元している例のZGが完成すれば、我が帝国の戦力は更に増大し、世界の統一も直ぐそこになるだろう！」

「ところで、先帝陛下とジエノスピノの安否は？」

「今、捜索隊が捜している。発見にはかなりかかるかもしれない。だが、例え、ジエノスピノを失ってもオメガレックスがいれば、十分その溝は埋まるだろう！」

そこにルメイ大将が口を開き、

「ところで、元帥閣下！ ZGとは一体どういうゾイドですか？ 以前、リジエネレーシオンキューブを拝見した時にその話は聞かなかったんですが！」

「ああ、あれは先帝陛下が帝国建国の時から復元を実行していたもので、オメガレックス以上の機密事項だから、しばらく伏せていたのだ！」

「一体なんでしょうか、それは？」

「詳しくは言えないが、ZGはこの地球はおろか、かつて惑星Ziに存在していたどのゾイドよりも勝り、古文書によると、その力はジエノスピノやオメガレックスすらも遙かに凌駕すると言われている！」

「ジエノスピノやオメガレックスすらも……！」

「そうだ！ つまり、そのゾイドが完成し、その力を得れば、我が帝国はこの地球はおろか、全宇宙すらも支配できる帝国になるのだ!!」

「そんなゾイドが……！」

「実はそのゾイドの完成にもリジエネレーシオンキューブを作動させる必要があつてな。そこで、アツカーマン中将やその他に反乱軍の鎮圧を任せ、お前たちにリジエネレーシオンキューブ作動に必要な小娘の奪還を命じる！ 今度こそ、先帝陛下の望んでいたことを実現させるのだ!!」

その時、ベケット少佐が口を開き、

「お言葉ですが、元帥閣下！ その任務は私とアーミテージ大尉、そしてルメイ大將だけに任せてはいかがでしょうか？」

「ん？ どういうつもりだ！」

「下手に軍が多すぎると、敵もそれ以上に警戒します。そこで、最低必要な軍だけ向かい、我が親衛隊とステルス仕様で形成している東方部隊なら、必ず、小娘の奪還はできるでしょう！」

「だが、この任務は最重要任務で…、」

その時、デーニッツ中将も口を開き、

「私も同感です！ 最重要任務だからといって、あまり軍を出しすぎると反乱軍の鎮圧が疎かになって、隙を与えられてしまいます。」

「しかし、それだったら、貴様が行けばいいのでは？ 貴様の實力を見込んで、私のデイメパルサートランスを与えてやったのだぞ!!」

「ですが、私の西方領域は新帝国の派閥が多く、私が出ると、総督府がもぬけの殻になってしまい、その間に反乱軍に攻撃される危険性があるため、とても領域から出られる状態ではないのです。」

ですが、ご安心を！ 代わりに事前に反乱軍鎮圧のために開発したステルス仕様の



デイメパルサーS4とデイロフォスS4をルメイ大将に与えましょう。

ちょうど、大将には、例のライガーにドライパンサーを破壊され、代わりとなるゾイドがいなかったそうですからね！」

ルメイ大将はデーニッツ中将に、

「その自信、確かなものなんだろうな？」

「ご心配を！ 私のデイメパルサーMk-IIやトランスに比毛を取らない性能です！ 必ず気に入るでしょう。」

それを聞いたタツカー元帥は、

「よし、では、ベケット少佐とアーミテージ大尉、ルメイ大将は直ちに小娘の奪還を、デーニッツ中将とグレットゲル准将は反乱軍の鎮圧を任せる!!」

「はー！」

旧ネオゼネバスシティの基地の司令室、シーガル中将とアルドリッジ大佐、リセルはテレビを見ていた。テレビのアナウンサーは、

「皇太子殿下の戴冠式後、帝国顧問タツカー元帥閣下は全軍に反乱軍鎮圧命令を下しました。」

これにより、我が帝国軍は反乱軍鎮圧のため、全力を注ぎ……」

シーガル中将はテレビを切り、二人に、

「これは予想外だ！ まさか、第二皇子がいたとは！ オマケに皇帝に即位させるとは、作戦を練り直す必要があるか。」

そこにアルドリッジ大佐が口を開き、

「ですが、今、メガロポリスを攻めないと好機は来ません！ ディアス准将、お前はど  
う思う？」

「俺も同感です！ 今、我々の鎮圧のために多数の部隊が帝都を出た。」

メガロポリスを守る兵士はかなり減っているから、攻めるなら、今しかありません。」

二人にシーガル中将は、

「それはいいのだが、メルビル二世陛下はどうするのだ？ 我々の留守中に攻められ  
たら、元も子もないぞ！」

そこにアルドリッジ大佐が、

「基地の警備はシュバルツ中佐に任せて、もし何かあったらビッグウイングで避難さ  
せるよう伝えときます！」

「となると、我が新帝国のキルサイス部隊をメルビル二世陛下下の護衛として多く残す必要があるな。」

「ご心配を！ 我がフアングタイガー改とディアス准将のハンターウルフがいればネオデスマタルなど、一捻りです！」

「よし、では、出撃する。」

モザイク都市ボスク、ウィルやストームたちもテレビを見て、クリスたちはストームとグラッドに、

「どうします？ コマンダー、リーダー！」

ストームはウィルに、

「ウィル、お前なら、どうする？」

ストームの問いにウィルは、

「もちろん、出ます！ もう俺は迷わない！ シーザーと共にゾイドを、人々を守るた

めに戦う!!」

それを聞いたグラッドは、

「よし、全員、旧ネオゼネバスシティに向かう!」

ウイルやストームたちが旧ネオゼネバスシティに向かう中、旧ネオゼネバスシティでは、シーガル中將がアルドリツジ大佐とリセルと共に、新帝国軍を率いてネオデスメタル帝都メガロポリスに向けて進撃した。

新帝国軍の先頭にはシーガル中將の乗るステイレイザーとアルドリツジ大佐のファングタイガー改、そして、リセルのデルだった。

デルはかつての真帝国のハンターウルフ改のような黒みがかかった色合いで、スミスが持つてきたウイルの父、デイビッドの相棒マイロのパーツを使って真帝国のハンターウルフ改を基に改造されていて、新帝国のエンブレムに加え、頭部には鎌のような物が取り付けられ、背中のレゾカウルがショットガンに取り替えられ、かつてマイロが今ま

で制圧したネオデスメタルのエンブレムも貼られていた。

新帝国軍が旧ネオゼネバスステイから数キロ離れたところで、突然、山々から攻撃がしてきた。それを見たシーガル中將は、

「全軍、攻撃しろ！」

新帝国のゾイドが一斉に攻撃するが、敵の姿がわからない。それを見たシーガル中將は、

「キルサイス部隊、近づいて、敵を補足し、破壊しろ！」

新帝国のキルサイス部隊が山々に近づいたその時、突然、武装した黒いデイロフォスが現れ、キルサイスに襲いかかった。キルサイスはマシンブラストして迎え撃とうとするが、光学迷彩で姿を隠したキルサイスSSが現れ、キルサイスを一刀両断して破壊した。それを見たシーガル中將は、

「全軍、マシンブラストだ！ 制御トリガー解除、ステイレイザー、兵器 解放！  
マシンブラストー!!」

「制御トリガー解除、ファンングタイガー、兵器 解放！ マシンブラストー!!」

シーガル中將のステイレイザーとアルドリッジ大佐のファンングタイガー改を初めとする新帝国軍のゾイドがマシンブラストし、キルサイスSSと黒いデイロフォスに攻撃するが、光学迷彩で姿を隠しているため、正確に攻撃出来ず、キルサイスSSと黒いデイ

ロフォスに翻弄されてしまう。

アルドリツジ大佐は、

「くそ、これでは我が軍が圧倒的に不利だ！」

その時、リセルのデルが現れ、

「シーガル中將、ここは俺に任せてください。行くぞ、デル！ 制御トリガー解除、

兵器 解放！ マシンブラストー!! フルハウリングショット!!」

マシンブラストしたデルがセカンドギアの状態になって、レゾカウルの代わりに取り付けられたショットガンと共に、ハウリングシャウトをキルサイスSSと黒いデイロフォスのいる周囲の山々全てを攻撃した。山々が粉々に崩れ、キルサイスSSと黒いデイロフォスはそれに巻き込まれ、次々と倒れていった。それを見た新帝国の兵士は一齐に歓声を上げた。

しかし、その時、突然、目の前から、強力な高周波パルスが襲いかかってきた。デルは驚異的な跳躍力でそれを避けるが、シーガル中將のステイレイザーやアルドリツジ大佐のファングタイガー改を初めとする新帝国のゾイドはそれをもろに受けてしまう。

高周波パルスを発生させた場所にいたのは、高周波パルスのバリアを光学迷彩のように姿を隠していた黒いデイメパルサーと黒いデイロフォス、護衛のキルサイスSSだった。黒いデイメパルサーにはルメイ大將が乗っていた。

「素晴らしい。マッドオクテットで発生した高周波パルスをバリアにするだけでなく、光学迷彩のように周囲に同化でき、更にマッドオクテットを受けたゾイドとライダーには幻影を見せる機能まで付いているとは！」

「デイメパルサーS4、デイロフォスS4、中々の性能だ。あの男が造ったゾイドに乗るのは少々気に食わないが、やはり、ホントに狡猾な奴だ。おかげで、ドライパンサーの代わりにちょうどいい機体だ！」

「しかし、あのハンターウルフはどのデータにも入っていない。新型か!? まあ、いい。どちらにせよ、我がネオデスメタルの新型に勝てるわけがない！」

「デイメパルサーS4のマッドオクテットで身動きが取れない新帝国軍、リセルはシールガル中将に、

「中将、ここは私に任せてください！」

「そう言うと、デルはフルハウリングショットで、光学迷彩で姿を隠したキルサイスSを次々と破壊していく。」

「今度こそ、帝国を倒す！ この力で。」

「デルを見たルメイ大將は、

「何て奴だ。我がキルサイス部隊がこうも苦戦されるとは！ 仕方ない。アーミテージ大尉、あのハンターウルフの相手をしろ！」

「ようやくか！ これで思う存分、暴れまくれるぜ!!」

デルの前にアーミテージ大尉のステイレイザーG3が現れる。ステイレイザーG3を見たりセルは拳を握り、

「あのステイレイザー、親衛隊か。」

「そのハンターウルフ、中々骨がありそうじゃないか！ 俺のステイレイザーの遊び相手になるぜ!!」

「今度こそ、親衛隊を潰してもらおうぞ!!」

「その声、ああ、あの時のガキか！ 陛下のジエノスピノの前に無様に敗北した奴だな  
!」

「なんだと!？」

「パワーアップしたようだが、ちよつくら、貴様のパワー試してもらうぜ。せいぜい一瞬で倒れんようにな!」

「ふざけるな!!」

リセルは怒り狂い、デルはステイレイザーG3に向かって突進した。互いに頭をぶつける2体、ステイレイザーは怯むことなくデルを弾き飛ばす。

「け、やっぱり力勝負では俺には敵わないようだな!」

「なら、これはどうだ!」



デルのソニックブースターが加速し、デルが超スピードで、ステイレイザーを攪乱させる。デルの動きについていけないステイレイザー、そして、デルはセカンドギアの状態に入り、

「喰らえ！ フルハウリングショット!!」

デルの兵器改造でパワーアップしたハウリングショットが全てステイレイザーG3に直撃する。攻撃を喰らったステイレイザーG3の装甲にひびが入り、後退していく。それを見たアーミテージ大尉は不気味に笑い、

「へへへ、まさか、この俺をここまで楽しませてくれるとは！ いい遊び相手になりそうだぜ！」

それを聞いたリセルは険しい表情で、

「ああ、俺がお前にいい遊び場を与えてやる。地獄にな!!」

その時、スナイプテラ3SとキルサイスG4が空中を飛行してデルたちの上を通り過ぎ、旧ネオゼネバスシティに向かっていた。先頭のスナイプテラ3SはドライブパンサーG3を運んでいた。それを見たりセルは、

「しまった！ こいつらは囷だったのか。俺たちがこいつらとやりあっている間に都市を制圧するために！」

デルは旧ネオゼネバスシティに向かおうとするが、ステイレイザーが襲いかかり、

「よそ見してんじやねえよー！」

「ち、」

ドライパンサーG3を運ぶスナイプテラ3S率いるスナイプテラ3S部隊とキルサイSG4が旧ネオゼネバスシティに着き、都市にはシュバルツ中佐の乗るガトリング砲が装備されたナツクルコングとキルサイス、キャノンブル、バズートル隊が攻撃していた。ベケット少佐は通信で部隊の兵士に、

「では、作戦通り、私と腕利きのスナイプテラ3SとキルサイSG4は例のメルビル二世のいる基地に向かう。残りは新帝国のゾイドもろとも都市を爆撃しろ！」

「民間人がいますが、どうしますか？」

「構わん！ 奴らは我がネオデスマタル帝国に歯向かった愚かな反乱者だ！ 皇帝陛下に逆らった罰を与えてやる！ 全て破壊しつくせ!!」

「はー！」

シュバルツ中佐は新帝国の兵士に、

「市民を防空壕とシェルターに避難させろ！ 我々は市民の盾として敵を撃墜するのだ！」

中佐のナツクルコングと新帝国軍のゾイドが一斉砲撃するが、スナイプテラ3SとキルサイSG3はそれを避け、更にスナイプテラ3Sは腹部を開き、無数の爆弾を投下し、

同時にキルサイスG3もタイムボムを投下した。その爆撃は新帝国軍のゾイドはおろか、街や一般市民もお構い無しに攻撃した無差別爆撃であった。

ウー、ウー、ウー、

空襲警報が鳴り、

「非常事態発生！ 非常事態発生！ 市民は直ちにシエルターに避難して下さい！」

次々と逃げ回る市民たち、しかし、ネオデスメタル帝国空軍の無差別爆撃により、新帝国軍の兵士とゾイドもろとも巻き添えになってしまう。やがて、被害は基地にも広がっていた。病室でレイルを見守っていたエマは爆発による揺れで倒れてしまう。

「きやあ!!」

「何、何が起きているの?」

特別室にいるユリスは窓の外を見た時、それは信じられない光景だった。爆撃で破壊された街とゾイド、爆撃で死んでいった人々がゾイドと共に山になって倒れていたり、瓦礫の下になってしまった人までいた。それを見たユリスは見ていられないような表情をした。

その時、キルサイスG3が基地の周りに離陸し、コクピットから赤い装甲服を着用した親衛隊兵士が入っていった。

特別室にカティアが入り、

「メルビルさん、急いでここから離れて下さい！ 私が敵を食い止めます。」

「でも…。」

「いいから、早くしてください。」

その時、5人の親衛隊兵士が現れ、銃を向けようとした時、カティアが蹴りで銃を落とし、親衛隊兵士の攻撃を避け、次々と、武器を使わず格闘戦のみで倒していった。

「早くー！」

ユリスはカティアの指示に従って部屋を出て、エマの元に向かおうとするが、病室にはエマはおろかレイルの姿はなく、病室はかなり荒れていた。しかし、窓からエマの声がし、

「いや、離して！ 離してくださいー！」

窓を見たら、エマとレイルが親衛隊兵士に取り押さえられ、ドライパンサーG3の前で立っているベケット少佐の元に連れていかれていた。

「エマ、レイル！」

ユリスは急いで基地から出た。ベケット少佐は捕らえられたエマとレイルを見て、

「ようやく、捕らえられたわね。これで、皇帝陛下はお喜びになれるだろう。」

「待って！」

そこにユリスが現れ、ユリスを見たベケット少佐は、

「あら、か弱い美人皇帝のお出ましね。」

「どうして、どうしてこんなことをするんですか？」

「決まっている！　我が帝国に逆らった罰と我々の計画にその小娘が必要だからよ！  
後、あんたも捕らえる予定だったから、ちようどよかつたわ。」

ベケット少佐が指を鳴らした時、ユリスも親衛隊兵士に取り押さえられた。

「いや、離して!!」

「さて、任務は達成した。さっさとずらかるわよー」

しかし、その時、緑のラプトルのベティが現れ、

「エマたちを返しなさい！」

それを見たベケット少佐は、

「ち、貴様の相手をしている暇はない！」

ベケット少佐が指を鳴らし、8体のキルサイズG3がベティに襲いかかってきた。しかし、ベティは驚異的な跳躍力でキルサイズの攻撃を避け、足と前足、尻尾で蹴散らしていく。

キルサイズG3はマシンブラストし、ベティに襲いかかっていく。ベティはそれを避けるが、内一体の攻撃を食らい、ふらつく。状況を見たカティアはデスメタルキーを取り出し、

「ホントは使いたくないけど、仕方ないわ！ 強制 解放！ デスブラストー！！  
リッパージェジ！」

デスブラストしたベティは更にスピードが増し、リッパージェジで4体のキルサイスを一瞬で破壊した。それを見たベケット少佐は、

「あの小娘、強化人間と聞いていたが、これほどとは！ でも、残念ね。ドクターが特別に取り付けた機能があるから、あんたも終わりよ！」

ベケット少佐は再び指を鳴らし、キルサイスに乗る親衛隊兵士は装甲服の腕に取り付けられている装置にスイッチを押し、親衛隊兵士のマスクの色が紫色に変わり、同時にキルサイスの目が紫色に変わって、超音波を発生させた。

超音波を受けたベティは苦しみ、ライダーのカティアも頭を抱えて苦しむ。

「な、何これ？ あゝ、頭が痛い！ 痛いよ！！」

同時にエマやユリスも苦しみ、

「きゃあああ！ 頭が痛い！ 止めてー！！」

カティアはコクピット内で気絶し、同時にベティも倒れ、エマ、ユリスも気絶した。それを見たベケット少佐は、

「素晴らしい性能ね！ まだ20%しか出していないのにこの効果とは！ これは期待出来そうね。」

親衛隊兵士はベケット少佐に、

「この小娘はいかが致しましうか？」

「ほうっておくと面倒ね！ ついでにそいつも連れていきなさい！ 何かの実験台に  
使えそうだし。」

徹底していこうとするベケット少佐と親衛隊に突然、煙の中からゾイドの影が現れ  
る。

「シーザー！ 進化 解放！ エヴォブラストー！！ ライジングガンスラッシュュー！」  
現れたのはシーザーだった。しかし、ドライパンサーG3は間一髪で避け、

「少佐！！」

「心配ない！！」

ウイルはベケット少佐に、

「エマたちを返せ！！」

「それが例のライジングライダー！ まさか、こんなところでお目にかかるとは思わ  
なかつたわ！ その力試してもらおうわ！

ドライパンサー！ 兵器 解放！ マシンブラストー！！ ドライスラッシュュー！」

攻撃するドライパンサーG3、しかし、シーザーはそれを避け、破壊されたビルの上  
までジャンプし、そのままビルの壁を走りながら下に降りていった。

「シーザー！　いくぞー！」

それを見たベケット少佐は、

「なるほど、そういうことね！」

ドライパンサーG3はビルの壁を走りながら下に降りるシーザーに向かってビルの横を走って、シーザーの元に向かう。

「ライジングバーストブレイク!!」

「ドライスラッシュ!!」

互いにぶつかり合うシーザーとドライパンサーG3、攻撃をぶつけ、離れた瞬間、ドライパンサーG3のチタンブレードにひびが入り、割れた。それを見たベケット少佐は、

「まさか、通常のドライパンサーと違い、チタン合金で

構成された私のドライパンサーのA-Zドライブレードを破壊するとは！　うあ

…、

その時、横からレックスがドライパンサーに攻撃した。

「街を爆撃した貴様の隊は俺たちがあらかた片付けた。降伏したらどうだ？」

「ふ、それはどうかしらね？」

その時、4機のキルサイスG4が飛び立ち、



「まずい！ ジョン、逃がすな！」

「OK！」

ジョンのキールが現れ、糸でキルサイスの動きを封じ、キルサイスを地上に落とした。キールは足でコクピットを剥がすが、コクピットには誰もいなかった。

「誰もいない！ コマンダー、無人です！」

「何！ 貴様、エマたちをどこにやった!?!」

「ふふ、あたしがあんたたちの相手をしている間に、もう行っちゃったわ！」

「何！ 貴様の隊のスナイプテラとキルサイスの大半は倒したんだぞ！」

「だから、あんたたちの注意を刺らすよう、あたしの隊のゾイドには乗せなかったの！  
こここのゾイドを使つてね！」

「こここの？ まさか！」

グラッドは旧ネオゼネバスシティに着く時に飛び立った4機の新帝国仕様の青いスナイプテラとギルラプターエンペラー、ベティ、ディメパルサーのレナを運んだクワガを見たのを思い出した。

「ふふ、ようやく気づいたようね！ さて、作戦は成功したわ！徹底よ！」

ドライパンサーG3はキルサイスG4に運ばれ、そのまま徹底していった。ウィルは  
驚愕し、

「そんな、エマが……！」

都市から離脱した新帝国仕様の青いスナイプテラには親衛隊兵士がライダーとして乗り、口内のコクピットにはエマたちが鎖で繋がれながら乗せられていた。エマは恐怖し、

「ウイル……、助けて……！」

帝都メガロポリスの宮殿の地下で報告を受けたドクターマイルスは、

「そうか、ようやくか。ふふ、もうすぐだ。もうすぐZGが目覚める。その時こそ、我がネオデスマタル帝国による新世界が誕生する！」

ドクターマイルスの言葉と共に、巨大カプセルにいる巨大ゾイドの目が光った。

To be continued

## 第28話 「漆黒の戦士 闇のライガー」

捕らえたエマたちを乗せた新帝国仕様の青いスナイプテラは帝都メガロポリスに向かった。青いスナイプテラが接近しているのを映像で見た親衛隊の兵士は、

「タツカー元帥、新帝国仕様のスナイプテラがこちらに接近してきます！ 撃墜しますか？」

それに対し、タツカー元帥は、

「必要ない！ あれは我が親衛隊が例の小娘を捕らえて乗ったスナイプテラだ。

一切手を出すな！ ただし、帝国民に知られないように宮殿に入れろ！」

「はー！」

そこにドクターマイルスが司令室に入り、

「無事、作戦は成功したようですね。これで、オメガレックスの強化とZG完成はまもなくだ。」

「やはり、あの女に任せて正解だったようだ。ところで、陛下は？」

「ギルラプタージョーカーで、暇潰しに新帝国派の反乱軍を幾つか潰した後、自室でワインを飲みながら、ゆっくりしておられます。」

「陛下はオメガレックスの完成を1日も早く望んでおられるのだ！ 何としても完成させるのだ。」

「承知しております。」

その時、ドクターマイルスは帝都に入る帝国軍を見て、

「おや、どうやら、我が帝国軍が反乱軍の鎮圧から戻って来たようすな！ さて、私は失礼します。あの小娘を地下の研究室に連行させます。」

「承知だろうが、今回捕らえた小娘共は絶対に公にするな！ もし、そうしたら…、」  
「もちろん、承知の上です！ では、失礼します。」

やがて、親衛隊初めの全ての軍が帝都に集結し、ベケット少佐とルメイ大将が宮殿に入った。2人は同時に宮殿に入ったデーニッツ中将に会った。デーニッツ中将はルメイ大将に、

「これは大将、いかがでした？ 私のダイヤモンドS4は」。

「ああ、満足だ！あれなら十分楽しめる。」

「それなら良かった。ところで、ベケット少佐も例の小娘を捕らえることに成功したようすな！」

「ええ、これで我々の計画を進められます！」

「そうなれば、全ての反乱軍は鎮圧され、我がネオデスメタル帝国が完全に世界を支配する。ん？」

そこにカーター大佐が現れ、ベケット少佐の元にズカズカと歩いて来て彼女の前に立ち、険しい表情をして、

「ベケット少佐!! 旧ネオゼネバスシティを無差別爆撃したそうですが、本当ですか!?」

ベケット少佐は呆れた表情で、

「何かと思えば、そんなことですか! ええ、確かにやりましたよ。1つ残らず!」

「なんてことを! 一般市民まで巻き添えにしたのか!」

「当たり前でしょう! 戦争は常に犠牲が付き物。一般市民が巻き込まれるなんて当然じゃないですか!」

「軍人が一般市民に刃を向けるのか! 貴様、そんなことして何とも思わないのか!」  
「もちろん、思いません! 連中は我が帝国と皇帝陛下に逆らった愚かな反乱軍、情けをかける必要等ありませんし、裁きを与えたままでです!」

「何だと!! それが我ら帝国軍人の為すべきことか!?! あそこには、私の…」

「ええ、知っています。あそこには大佐の愛するカティア・ギレル少尉がいました。少

尉は脱走後、我が帝国のために存分に戦ってくれました！

しかし、残念ながら、反乱軍のキルサイスの手で命を絶たれました！」  
それを聞いたカーター大佐は青ざめた表情をし、

「まさか、カティアが…、」

「ですが、ご安心を！ カティア・ギレル少尉は我が帝国と皇帝陛下のために名誉ある戦死を遂げたとして讃えられるでしょう。」

カーター大佐は怒り狂った表情をし、

「貴様!!」

しかし、ベケット少佐は落ち着いた表情で、

「あら、私に楯突く気ですか？ ですが、あなただつて同じです！ あなたも自身のスナイプテラで、何体のゾイドと兵士を殺めたではありませんか？」

「ふざけるな！ 一般市民まで巻き込んだ貴様と同じにするな！」

「同じよ！ そもそも戦争とは人を殺すものですから、兵士にしろ、市民にしろ殺されるのですから！」

それに、私は偉大なる皇帝ギャラガー陛下直属のギャラガー親衛隊、あなたたち正規軍と階級を一緒にしないで欲しいわ！ つまり、あたしに楯突くことは皇帝陛下に楯突くことよ！

今、あたしに逆らえば、貴様は軍法会議で更迭されるのだからね!!」

「大佐、もう止めないか!」

そこにアツカーマン中将が現れ、

「失礼した。ベケット少佐、この度の大佐のご無礼をお許しください。」

「まあ、四天王のあなたがそこまで言うのなら、許してあげるわ! さあ、あたしは戦場の赤を落としとかなきゃ!」

そう言つて、ベケット少佐はその場を離れ、ルメイ大将、デーニッツ中将もその場を離れる。アツカーマン中将はカーター大佐に、

「気持ちにはわかるが、我々は世界の統一と秩序のために1日も早く反乱軍を全滅させなければならぬ! 非情な手段も時には仕方ない。」

「ですが、こんなことをして、仮に世界を統一したところで、我々ネオデスメタル帝国を憎む者が増えるだけです!」

「カーター君…、」

エマとユリスは親衛隊兵士により、ドクターマイルスのいる研究室に連れていかれ

た。

「離して、離してください!」

親衛隊兵士がその言葉に従うかのように二人をつき倒して離れた。親衛隊兵士はそのまま下がり、二人は周りを見た。

そこには、ゾイドたちがゾイドコアを抜き取られ、そのコアを巨大カプセルに次々と入れられた。それを見て青ざめるエマとユリス、

「エマ、ここは一体何なの?」

そこにドクターマイルスが現れ、

「ようこそ、我が栄光なるネオデスメタル帝国の偉大な研究室へ! 私はドクターマイルス、帝国の技術部総督にして、偉大なる皇帝陛下にお仕えする科学者だ!」

「ドクター…マイルス?」

「知らないのも無理もない! 貴女たちは私と会うのは初めてですからね。後、あなた方のご先祖もよく知っていますよ!」

実に先祖によく似ている。生まれ変わりと云っていい程だ。サリー・ランド、ハンナ・メルビル!」

それを聞いたエマは驚いて、

「どうして、その名を?」



「私はあらゆる過去の技術や歴史に精通しているからね。ゾイドクライシス後の戦争。果てには惑星Ziのことも！そして、君たちに見せたいものがあるんだ。付いてきなさい。」

ドクターマイルスが二人を連れて、巨大な扉を開けた時、そこにはリジエネレーションキューブがあつた。それを見たエマは信じられないような目をし、

「そんな、リジエネレーションキューブはゾイドクライシス後の地球を再生するためにあの時、全て使われたはずよ！なのにどうして!?!」

「これは、かつてリジエネレーションキューブの開発者であるドクターボーマンが万が一の場合を想定して予め作った保険のようなもので、かろうじて過去の遺物として現代に残り、我が帝国の最新技術で復元することに成功したのだ！」

しかし、それでも作動にはかなり苦戦していたな。そこで、サリー・ランドとレオ・コンラッドの血を引く君に手伝って欲しいのだが！」

それに対しエマは、

「嫌です！あなた方はリジエネレーションキューブを使って、ゾイドを世界を支配するための兵器として利用し、ゾイドと人々を苦しめるつもりなんでしょう!?!」

そんな人たちに協力することなんてできません!!」

同時にユリスも、

「お願いです！ もうこんなことはやめてください！」

二人を見たドクターマイルスは、

「やれやれ、先祖に似て、頑固な子たちだ！」

「ドクター、いつになったら、オメガレックスは完成するの？ いい加減早くして  
ないかな!!」

現れたのはガネストだった。

「これはこれは、皇帝陛下！ 実は彼女たちが中々言うことを聞いてくれなくてね。」

ガネストを見たエマは、

「レイル…？ いえ、違う。あの子はあの時の皇帝ギヤラガー四世!？」

ガネストはエマ、ユリスに近づき、

「ふうくん、君たちがキューブを動かしてくれる嬢ちゃんかい。ドクターの言うと

おり、確かに可愛い子だね。」

エマはガネストに近寄り、

「お願い！ あなた、レイルの兄弟で皇帝なんでしょう！ だからもうこんなことは

やめてください！ お願いです！」

パシン!!

ガネストはエマを容赦なく、平手打ちをし、

「気安くボクに触らないでよ。ボクはこの帝国の皇帝、いずれこの世界の頂点に君臨する者なんだよ。薄汚い小娘の分際で、ボクと対等になれると思うな!!」

恐喝するような睨んだ目でエマを見るガネストをエマはガタガタ震えていた。

以前、帝国でいたとき優しく接し、本当の姉弟のように仲良くしてくれたレイルと瓜二つなのに、レイルとはあまりに違う性格のガネストに恐怖した。

「レイル…、私はどうしたらいいの…:…?」

その時、兵士たちが取り抑えようとしているギルラプターエンペラーが暴走し、鎖を引きはずし、兵士たちを蹴散らし、ギルラプターは宮殿の入口を破壊し、脱走した。兵士は通信で、

「ドクター、捕獲していたギルラプターエンペラーが脱走しました! いかが致します?」

「構わん、そのままにしておけ。お前たちは作業に取り掛かれ! ふ、これを利用しない手はないな。」

旧ネオゼネバスシティでは、ベケット少佐率いる親衛隊の空爆で大多数が壊滅し、兵士たちは復旧活動をしていた。ストームとグラッドたちはそれを手伝いながら、

「帝国の非情な作戦で、市民たちはかなり帝国に恐れを抱いている。」

「ああ、それが帝国の狙いだ！ ああやつて市民たちに恐怖心を植え付け、服従させるために。」

ウイルが街の復旧活動をしている中、ウイルはシーザーを見るリセルを目撃した。ウイルはリセルの元に行き、

「リセル、一体どこに行っていたんですか？ 皆心配してたんですよ！」

リセルは険しい表情で、ウイルに、

「ウイル、教える！ 何故、同じマイロのパーツを使ったお前のシーザーがジェノスピノやドライパンサーに勝てたのかを!？」

「い…いきなり、何を言ってるんですか?」

「姿が一向に見えないと思ったら、まさか、こんなところにいたとはな！ リセル！」  
そこにグラッドが現れた。

「俺は、帝国を倒す力が欲しいんだ！ かつて帝国を恐れさせたデイビッドの操るマ

イロのゾイド因子を取り込んだシーザーが進化し、ドライパンサーとジェノスピノを倒した姿を見て思った！ マイロのパーツを使えば、デルも最強の力を手に入れることができる！ だから、俺はアルドリッジ大佐の要求に飲んで、新帝国に入った。」

「家族の仇を討ちたいお前の気持ちはわかる。だが、今のお前は相棒の気持ちは忘れ、ただ復讐心に捕らわれ過ぎて、力を求めているだけだ！

そんなことで帝国に勝とうなんて大間違いだ！」

「うるさい!! 俺はそのために生きてきたんだ。同盟軍に入ったのも元はと言えば、そのため、帝国に復讐するための最強の力を手に入れるために！」

だから、ネオデスメタル帝国を憎むこの新帝国に加わったのだ！ もう俺は容赦しない。俺の家族の命を奪った上にユリスまで拉致しやがって！

だから、帝国は俺が倒す！ お前たちは一切手を出すな!!」

「そうかい、そうかい、じゃ、勝手にしろ！」

グラッドはそう言ってその場を離れる。ウイルはグラッドに、  
「いいの？ リセルをほっといて。」

「今のあいつは何を言っても聞きはしない。これ以上言っても火に油を注ぐだけだ！ いずれ、後の戦いで、後悔することになるだろう。」

「だからって！」

「それより、今、俺たちのやるべきことは帝国に拉致されたエマたちの奪還だ！

帝国がエマたちをどうするつもりか知らんが、あれだけの手配書を出して、俺たち同盟軍の鎮圧など、そっちのけで拉致しようとしていた程だ。

おそらく、帝国の軍事力拡大のために利用するつもりだろう。これ以上、帝国の軍事力が増大したら、間違いなく俺たちや全てのレジスタンスが結集しても歯が立たない！ 早急に手を打たねば。」

そこにクリスたちが現れ、

「しかし、問題なのはどうやって取り返すか。そもそもエマたちが連れていかれた場所とは間違いなく帝都メガロポリス、あそこは小国に匹敵する程の領土で、都市全体が要塞になっている難攻不落の城ですよ！

俺たちが行ったとしても、無事入れても脱出出来る保証はありませんし。」

「何とか、エマたちをメガロポリスから連れ出すいい方法があればいいんだが……」

その時、ギルラプターエンペラーが街に現れ、兵士たちが銃を向けるが、グラッドは待ったをかけ、ギルラプターが何か言いたいような素振りを見たストームは、

「こいつ、俺たちに何か伝えたいようだな！ キング、わかるか？」

キングがギルラプターに近付き、ギルラプターが何か言いたいようにうなずいた後、キングはストームに何か伝えるような素振りを見せる。それを見たウィルはグラッド

に、

「もしかして、ストームさん、ゾイドの言葉がわかるんですか？ エマみたいに。」

「あいつは生まれた時からキングと付き合いが長くて、先祖と同等かそれ以上の絆を結んでいる。相棒やゾイドの気持ちもわかるだろう！」

キングの仕草を見てストームは、

「ふんふん。」

「どうだ！ ギルラプターはなんて言ったんだ？」

「うむ………。全然わからん（真面目顔）!!」

ズコッ!!

それを聞いたウイルたちがずっこける。グラッドはストームに、

「おい！ お前、そこわかる流れだろ!!」

「アホボケ！ 人間の言葉で喋らんとわかるわけないだろう!! 普通。」

「普通って、お前、今まで何もわかってなかったんかい!？」

「そりゃ、今まで、近くの書店で買ったゾイドの気持ちがわかる本とか、ゾイドの言葉がわかる本とかでわかるうとはしましたが！」

「（何、その都合の良い便利本）。」

「それも、腹へったから、飯食わせるとか言って、何度、レストランに行ったか！」

「（それ、お前の願望だろ!!）」

「でも、これじゃ、エマたちの情報が何も掴めないわね。」

「やれやれ、とんだ骨折りだったな。」

「仕方ねえ。何かいい作戦を考えるしかないようだな。」

その時、兵士から、

「コマンダー！ 帝国から通信が入っています！」

「帝国からだ?!」

ウイルたちが急いで通信映像を見た時、映像にはドクターマイルスが映っていた。

「ごきげんよう、同盟軍の諸君！ 私は帝国の技術部総督ドクターマイルスだ！」

それを聞いたスミスは、

「ドクターマイルスじゃと?!」

「君たちの捜しているエマ・コンラッドとユリス・メルビルは帝都とは別の研究所に移送した。無事返したいなら、ライガーだけ来ることだな！」

場所はここだ！ ここから数十キロ離れた辺境の地だ。ライガーだけ来てくれたら、何もしない。二人は返してやる。ただし、ライガー以外も連れて行ったら、二人の命の保証はない！ では。」

そう言って、ドクターマイルスは通信を切った。クリスはグラッドに、



「コマンダー、どうします?」

「敵はライガーだけ連れてこいと言ったが、明らかに罠だ! 当然、俺たちも付いていく。それにしても、あのドクターマイルスって一体何者だ? あんな奴見たことも聞いたこともないぞ。」

「奴は、帝国随一の、謎に包まれた科学者じゃ。」

口を開いたのはドクタースミスだった。

「スミス、お前、奴のことを知っているのか!」

「聞いたことがある。デスレックス、ジェノスピノを復元し、かつて、ゾイドクライシス後の世界の技術を得、ゾイドを更なる強化改造をした男じゃ、あの男一人でネオデスマタル帝国の科学力は1世紀分進歩したと言われている。」

「まさか、そんな男がいるとは! だが、何にせよ、そんな奴を野放しにするわけにはいかない!」

とにかく、俺とストーム、ジョンがウイルに付いていき、奴の根城に殴り込みに行く。お前たちはここの復旧の手伝いをしてくれ!」

「あの……、」

「なんだ?」

「わしも連れて行ってくれんかの?」

「何でだ？」

「わしだって、エマちゃんやユリスちゃんを助けたいんじゃない!!」

「スケベジジイはお呼びでない!!」

その時、ストームが、

「いや、連れて行った方がいいかもしれない。彼はあのドクターマイルスのことを知っていた。奴のことを把握するには必要だ。それにギルラプターも行きたいと行っている。」

「今度は勘じゃねえよな（汗）？」

同時にウイルも口を開き、

「いや、俺も何となくだが、わかる！ ギルラプターはエマを、レイルを助けたいと言っている。」

「まあ、確かにあのギルラプターの方が場所知ってそうだからな。よし、では、早速出撃する！ 全員抜かるな!!」

ウイル、ストーム、グラッド、ジョン、スミスはシーザー、キング、レックス、キール、グソツクに乗り、ドクターマイルスのいる研究所に向かった。

数キロ歩いたところの森に突然霧が入った。

「霧が濃くなってきたな。ここは慎重に行くべきだな！」

その時、シーザーが何か感じたかのような素振りをみせた。

「シーザー、どうしたんだよ？」

その時、シーザーは急いで向こうに走って行った。それを見たキングは後についていこうとするが、突然、横から何か跳んできた。キングは間一髪で避け、跳んできた物体は向こうに落ちて爆発した。グラッドとストームは、

「なんだ？今のは！」

「キルサイスのタイムボムか！」

「いや、キルサイスのタイムボムは上から落として破壊する爆弾、横から跳んでくるわけがない。」

「取り出したタイムボムをあの手で鎌で抱えてぶん投げたんじゃないのかな？」

「もつとあり得ん！ それにしても、今の攻撃、全く気配を感じなかった。一体これは？」

その時、周りから足音がした。

「気を付けろ！ 敵は四方八方から攻撃してくるのかも知れん。」

キングやレックスたちが攻撃の態勢を取った時、周囲の霧の中から錆び付いたボーン形態のラプトルがぞろぞろ不自然な歩き方をして多数現れた。

「ゲエエー!! なんじゃあ、ありゃ〜！」

「あれは、ラプトル！ でもなんで、ボーン形態の状態で動けるんだ!?」

「俺だって、知らねえよ!」

ボーン形態のラプトルを見たスミスは、

「あれはジャミンガ!!」

それを聞いたグラッドは、

「ジャミンガ?」

「なんじゃ知らんのか? ジャミンガはかつてゾイドクライシス後の地球に出没した

不完全のゾイドじゃ!」

「そう言えば、伝説で聞いたことがある。ゾイドクライシスの影響で地球環境と生態系がかなり崩れたことによつて各地に出没した不完全のゾイドだって。」

ジョンも口を開き、

「え、でも、そのジャミンガって確か、リジエネレーションキューブって言う機械の力で地球が完全に再生し、一体も残らず絶滅して、今では代わりに野生ゾイドが多く出没しているのに、何故、今の時代に?」

「俺が知るか! とにかくこいつらぶつたおしてウイルとシーザーを捜しに行くぞ!

全員ワイルドブラストだ!」

シーザーは何か感じとつかのようにそのまま走って行った。

「おい、シーザー、どうしたんだよ？ 何があつたんだよ！」

シーザーは突然、動きを止め、シーザーはウウ〜と唸り声を上げて警戒した。その時、霧の中から足音がし、何かが目を赤く発光させ、近付いてきた。

そこに現れたのはシーザーと同じ姿をし、Z-Oバイザーを取り付けた黒いライジン  
グライガーが現れた。

「なんだ？ あのライガーは！」

研究所の司令室でドクターマイルスが映像でその様子を見、

「フッフ、遂に現れたな、ライジングライガー！ 私はお前を倒すために最強の兵器を開  
発したのだ！ 史上最強のライガー、暗黒の武装獅子王、ダークライガーをな!!」

ドクターマイルスの後ろには黒い仮面とマントを羽織った謎の人物がいた。

To be continued

## 第29話「激突、シーザーVSダークライガー」

ストームとグラッドたちは霧の中から現れたジャミンガと交戦していた。しかし、ジャミンガはいくら攻撃を受けても無数に湧いてきた。何度でも湧いてくるジャミンガをグラッドは、

「くそ、また増えてやがる！ きりがないぜ！」

「これじゃ、ウイルの元に行くどころかこっちの体力が力尽きそうだぜ！」

「なあ、スミス、こいつらのこと知っているんだろ!? だったら、何か弱点あるんじゃないか！」

「そうは言っても、わしも現物見るの初めてじゃし、そもそも地球が再生して野生ゾイドが日常のように出没しているこの時代にいることも第一おかしいし！」

「全く、しょうがねえな。」

「それにしても、これだけわんさか出てくるのは厄介だぜ！ 下手したら、相棒たちのスタミナが無くなる恐れがある。早くウイルのところに行かないと！」

「そうは言ってもきりがないぜ！」

シーザーは黒いライジングライガーと対峙していた。シーザーは黒いライガーに激しい警戒心を持っていた。研究所内でその様子を映像で見ていたドクターマイルスは、「フフフ、あのライガー、自分と同じライオン種のダークライガーにかなりの敵意を保持しているようだな。」

それもそうだ！ 私が作ったこの暗黒の武装獅子王ダークライガーはあの時のドライパンサーとの戦いの際にあらかじめドライパンサーに取り付けたスパイゾイドで、ライガーのDNAを入手し、そのDNAを基に複製し、更にジェノスピノとの戦いでの戦闘データと我がネオデスメタル帝国の最新技術も相まって改造した最強のゾイドだからな！

だが、今はまだプロトタイプで、この戦いで、更にライガーの戦闘データを入手し、そしてお前が乗ればダークライガーは完成する。」

ドクターマイルスが後ろにいる黒いマスクを被った人物は静かにうなづく。

「さあ、ダークライガーよ！ ライジングライガーと戦うのだ！ 戦ってライジング

ライガーの力を得、お前は最強のゾイドとなるのだ!!」

ドクターマイルスの言葉に従うかのようにダークライガーのバイザーの目が赤く発光し、咆哮を上げる。

グオオ〜!!

それに呼応するかのようにシーザーも咆哮を上げ、2体は互いにぶつかつた後、お互いに睨み合う2体、それに対し、ウイルは、

「二体どうなっているのかわからないけど、ただ、これだけはわかる。シーザーが、あいつが危険な存在だつて！」

誰が作ったかわからないけど、シーザーの偽物作るなんて許さない！ 行くぞ！

シーザー!!」

グオオ〜!!

ウイルの言葉に伝えてシーザーが咆哮を上げ、シーザーはA―Z機関砲をダークライガーに向け、浴びせる。それを見たドクターマイルスは、

「まずはA―Z機関砲で威嚇射撃か…。だが、それは既に戦闘データで折り込み済みだ！」

ダークライガーはシーザーのA―Z機関砲を避け、前足で攻撃し、更に尻尾でシーザーを風ぎ払つた。



「う……。なんて動きだ！」

その時、シーザーが何か伝えるかのようにうなずき、

「ようし、シーザー！ ワイルドブラストだ！ 行くぞ!!」

ウィルはゾイドキーを取り出し、ワイルドブラストしようとするが、直ぐ目の前に  
ダークライガーが現れ、頭をぶつけ、シーザーを吹っ飛ばす。更にダークライガーはバ  
イザーの目が赤く発光し、シーザーのエヴォブラストと似たワイルドブラストをし、ラ  
イジングガンストラッシュを放つ。映像を見たドクターマイルスは、

「注入した戦闘データから、エヴォブラストしたライジングライガーの力は一撃でド  
ライパンサーを破壊し、更にはジェノスピノをも怯ませた記録があるため、ダークライ  
ガーは本気でライジングライガーにエヴォブラストさせたら厄介だと感じ取り、エヴォ  
ブラスト発動を防ぐ行動に出たというわけか！」

ライダー不在で、闘争本能剥き出しにした状態の遠隔操作による試運転とはいえ、  
ダークライガーの性能はかなり向上している！

フフ、つまりこれで、ライジングライガーの勝算は薄くなったということだ！」

ストームたちは無数に出てくるジャミングと交戦していた。ストームは何度でも現れるジャミングを見て、

「いくら、不完全とはいええ、こいつらはゾイドであることに間違いない！ 何か弱点は。ん？ 待てよ、そうか!!」

なあ、相棒！ あれやれるか？」

ストームの言葉にキングがうなずき、

「ようし、行くぞ！ キング!!」

グオオオ!!

ストームの掛け声と共に、キングは目一杯咆哮を上げた。キングの咆哮を聞いたジャミングは動きを止め、次々と後退りしていった。それを見たグラッドたちは驚き、

「よく、そんなこと思い付いたな！」

「俺の先祖がこうやってラプトルを怯ませたって親父から聞いてな。あのジャミングにゾイドとしての心が少しでも残っているならいけるんじゃないかと

思ってたな。」

後退りするジャミンガの内の一体を突然キールが糸で動きを封じて引きずり出し、それを足で黙らせた。

「おい、ジョン！ 何するつもりだ？」

「地球環境が整っているこの時代に本来存在しないはずのジャミンガを捕らえて調査する必要があると思つて！」

「確かに調べる必要があるな。さて、これで敵はあらかた片付いた。急いでウイルの元に向かうぞ！」

しかし、ストームは待ったをかけ、

「いや、待て！ キングがかなり警戒している。まだ敵はいるようだ。」

キングは唸り声を上げ、激しく警戒している中、霧の中からズシンズシンと巨大な足音がしていく。

「随分、デカイ足音だ！ なあ、ストーム、お前の予想では一体どれぐらいのゾイドだと思う？」

「この足音とキングの警戒ぶりを見ると、明らかに中型サイズのゾイドじゃない！」

「てことは、グラキオサウルス級か!？」

「いや、そこまでではないが、それに近いサイズなのは間違いない！」

巨大な足音が止んだとき、目の前に霧で姿が見えないが、紫色に発光した謎のゾイド

のようなものが現れた。キングたちが攻撃態勢を取った時、突然、謎のゾイドは身体から紫色の閃光を飛ばし、巨大な鼻のようなもので後ろのものを掴んだ。

そして、謎のゾイドは爆弾のようなものをキングたちに投げつけた。それを避けるキングたち、謎のゾイドが投げた爆弾はキングたちが避けた方向に爆発し、後ろの森は一瞬で吹っ飛んだ。それを見たグラッドは、

「なんて威力だ！ さつきジャミングが現れる前に攻撃したのはあいつか！ 上等だ。ファイナルガトリング!!」

レックスはファイナルガトリングを謎の物体に撃ち込む。しかし、謎のゾイドは霧の中に消える。

「くそ、霧の中にいるから、当たったのかどうかわかんねえし、仮に当たったとしてもダメーじが入ったのかすらわかんねえ。」

その時、レックスの後ろから爆弾が跳んできて、キングがレックスに突進してそれを避ける。グラッドはストームに、

「サンキュー！ストーム。」

「大したことではないさ！」

「しかし、どうします？ コマンダー。これじゃ、手も足も出ないですよ！」

「皆、ここは俺に任せてくれないか！」

「ストーム、どうするつもりだ？」

ストームは静かに目を閉じ、キングも少し落ち着いた。グラッドたちは攻撃の態勢を取りながらストームとキングを見つめた。

その時、キングの後ろから爆弾が跳んできた。ストームは目を開け、待っていたかと言わんばかりにキングに指示を与える。

「今だ！ いけ、キング!!」

キングは咄嗟に後ろに向き、ツインドフアングで爆弾を謎のゾイドに向けて打ち返した。キングに打ち返された爆弾は謎のゾイドに直撃し、爆発した。それを見たグラッドは、

「今度こそ、やったか!?!」

「わからん！ 俺の予想では敵のゾイドの装甲は相当頑丈だ。だが、今の爆発の威力から考えると無傷では済まないだろう。」

爆発音が止み、謎の敵ゾイドの姿はなく、攻撃の気配もなくなった。

「どうやら、片付いたようだな！ よし、急いでウィルのところに!」

その時、ギルラプターエンペラーが何か感じ取ったかのような仕草を取り、突然走って行った。それを見たストームは、

「ギルラプターが何か気付いたみたいだ！ 見失わないように奴についていくぞ!」

ストームの言葉と共にキング、レックス、キール、グソックはギルラプターの後を追って行った。

シーザーはダークライガーの立て続けの攻撃でエヴォブラストを発動出来ず、装甲にひびが付き、苦戦していた。

「シーザー、大丈夫か!？」

ウイルの言葉にうなずくシーザー、映像を見たドクターマイルスは、

「ふ、もう少し楽しめると思ってたが、どうやらここまでのようだな! ま、厄介な芽は早めに摘み取って置かなくてはな。さあ、止めを刺せ、ダークライガー!」

ドクターマイルスの言葉と共にダークライガーのバイザーの目が赤く発光し、シーザーと似たようなタテガミブレードが現れ、シーザーに襲いかかる。

しかし、その時、霧の中からギルラプターが現れ、ダークライガーに突進し、同時に霧の中からエヴォブラストしたキングが現れ、

「キングオブクローブラスト!!」

キングのエヴォブラスト技がダークライガーに直撃し、ダークライガーは倒れてしまふ。それを見たドクターマイルスは、

「何? あいつらZGの眷族と戦っていたはずでは!」

その時、兵士が、

「ドクター、先程、例のプロトタイプがワイルドライガーの攻撃で一時機能停止したとの報告が!」

「ふうむ、やはり、復元したばかりのプロトタイプには稼働が早すぎたか!」

それにワイルドライガーまで加わったともなると、今度はダークライガーが不利だな。よし、ダークライガーを直ちに引き上げさせ、直ぐにダークライガーを修理し、直ちに敵を迎え撃つ準備をしろ!!」

「はー!」

ドクターマイルスは後ろにいた黒い仮面を付けた人物に、

「さて、次が本番だ! 今度はお前がダークライガーに乗り、我らの野望の邪魔をする輩を始末するのだ頼んだぞ、ダークマスター!」

謎の人物はゆっくりうなずき、司令室を出た。

「さて、後は例の小娘に端末を作動させなきやな。ん？　ところで、陛下は？」

「先程、新帝国のハンターウルフがこちらに向かったとの報告があり、暇潰しにそいつの相手をするとおっしゃってギルラプタージョーカーに乗って出撃しました。」

「ふむ、これから楽しい余興が始まるというのに……。まあ、よい。とにかく、あのライガーをここに入れさせ、残りは早急に叩き潰せ！」

「はー！」

ドクターマイルスのいる研究所から数キロ離れた場所にデルがいた。リセルは通信マツプを開き、

「あの研究所に向かうなら、この道が最短だが、霧が濃い。敵が待ち構えている恐れが



あるから、遠回りになるが、あの道を進むしかない！だが、デルのスピードなら大した問題じゃない。待つてろ！ユリス、必ず助けにいく！」

ウイルたちが向かった道避け、デルは霧のない森の中に突き進んで行った。しばらく走った後、突然後ろからゾイドの影が現れ、デルに襲いかかった。デルは間一髪で避け、謎のゾイドの影はデルの前に立ちふさがった。

影の正体はバイザーの無いギルラプターゾーカーだった。それを見たりセルは、

「あれは、ギルラプターゾーカー！親衛隊か？しかし、Z-Oバイザーが取り付けられていない。ということは野生ゾイドか!？」

その時、ギルラプターゾーカーのコクピットが開き、ガネストが両手をギルラプターゾーカーの頭に置いて現れた。

「へえ、キミがアーミテージのステイレイザーと互角に戦ったっていうウルフ君は!？」

「あいつはアーネスト・ギャラガー！いや、違う。あいつは例の皇帝ギャラガー四世か!？」

「キミ、強いのか？」

「どういう意味だ？」

「言葉通りだよ！ドクターが面白い余興を見せてくれるって言うから、来たんだけ

ど、ただ見てるだけじゃ、つまんないから、暇潰しに強そうなキミと戦いたいと思って  
！」

「ガキの相手をするつもりはない！ 俺は一刻も早くユリスをさらった帝国の連中を潰しに行くつもりだ！」

ジョーカーの横を横切ろうとするデルにジョーカーは咄嗟にデルの前に立ちふさがり、

「待つてよ！ 皇帝であるボクの遊びを拒否するつもり、頭固いなく。じゃあ、こういうのはどう？」

ボクと一対一で勝ったら、研究所の場所教えてあげる。でも、キミが負けたら、ウルフ君とキミの命をもらおう！」

それを聞いたリセルは、

「そうか、そんなに俺とやりあうつもりか。なら、俺が貴様の遊び相手にしてやる！ しかも最高の遊び場に送ってやるよ……。地獄にな!!」

「へえ〜！ 楽しみだね。ま、せいぜいボクの期待外れにならないでよ。」

「シーザーがあのように進化したせいで、俺の手でギヤラガー三世を討つことは出来なかったが、ならば、代わりに新皇帝になったあいつを殺してやる！」

行くぞ、デル!!」

互いにぶつかり合うデルとジョーカー、

研究所では、エマとユリスが特別室に入れられ、そこにドクターマイルスが入った。

「さあ、コンラッド嬢。そろそろいい加減、端末の起動を！」

「何度も言わせないで下さい！ 私はあなたたちに協力する気はありません！」

「やれやれ、強情な小娘だな！ これじゃ、オメガレックスはおろか、ZGも完成出来ないな。」

「ジ…、ZG…!?!」

その時、エマに謎の巨大ゾイドが複数のゾイドを連れたビジョンを見た。

「おや？もしかして、ZGのことを思い出して来たのかい。そりゃ、そうだよね！ かつて君の先祖はZGのゾイド因子に触れて、ZGが地球を滅ぼすビジョンを見たんだよ。君にはその血が受け継がれているんだから当然だね！」

「そのために私を狙ったんですか？」

「何故、君がゾイドの言葉が理解出来るのか、疑問を持たなかったのかい？」

かつて、君の先祖は端末を作動させるに必要なペンダントの光を浴びてゾイド因子を持つ金属の腕を持った。君にはその先祖のゾイド因子を受けついたらんだ！ だから、ゾイドの気持ちを理解出来るようになったんだよ！

いわば君は先祖のレオ・コンラッドとサリ！ランドの血を受け継ぐ選ばれた人間、さあ、端末を起動し、我が帝国の糧となってくれ！」

「嫌です!!」

「強情だな！　ところで、君は気づかないのかい？　何故、君が大切にしていた我が帝

国の元皇子がいないのかを！」

「え？　レイル、レイルはどこなんです!？」

その時、警報が鳴り、

「おや、どうやら、獲物が来たようだ。君たちも見たまえ！　廃太子から生まれ変わった姿を！」

シーザーたちは研究所の入口の前に止まり、

「ここが例の研究所か。待ってる、エマ！　直ぐに助けるよ！」

急ぐウイルにストームは、

「慌てるな、ウィル！ さっきのこともあつたようにまた罠が仕掛けてあるかもしれない！ 慎重に行動しろ！」

「わかつてるよ！」

しかし、シーザーが1歩踏み出した瞬間、突然、地面が割れ、シーザーはその地下に落下してしまい、地面は直ぐに閉じた。と同時に研究所の壁の穴が開き、そこからマシンブラストしたバズートルのA-Z680口径バズーカ砲が現れ、キングたちに向けて砲撃してきた。

「しまった！ 罠だったのか！」

かなり下まで落とされたところにはそこはドームの中のような場所だった。

「ここは？」

そこにドクターマイルスのホログラム映像が現れ、

「よく来てくれた！ ライジングライガーを操る少年よ。 私は君を待っていたよ

！」

「お前がドクターマイルスか!?!」

「如何にも、偉大なる皇帝陛下の直属にして、帝国技術部総督ドクターマイルスだ！」

「要求はただ一つだ！ エマたちを返せ!!」

「生憎だが、そういうわけにはいかない。これから君には最強のゾイドへと誕生する

ゾイドと戦わなければならぬのでね。」

その時、シーザーの目の前にある扉が開き、そこからあのダークライガーが現れた。

「俺はエマたちを取り返すために来たんだ！ こいつと戦うために来たんじゃない！」

「では、こうしよう。君がダークライガーに勝ったら、望み通りエマたちは返そう。ただし、君が負けたら、ライガーと君の命をもらう。いいかね？」

ウィルは少し考え込んで、

「わかった！ やってやる!!」

「よし、では戦え。そしてダークライガーにその力を捧げろ！」

ダークライガーのコクピットには黒いマスクのようなものを被り、黒いスーツとマントを着用した人物が乗っていた。それを見たウィルは、

「ダークライガーっていうあの黒いライガーのライダーの正体もわからないけど、シーザーの偽者を作るなんて許さない！ 行くぞ、シーザー!!」

シーザーはダークライガーに向けて突進するが、ダークライガーはそれを避け、シーザーにA—Z機関砲を撃ち込んだ。

「さっきと同じ攻撃か！ ならば！」

シーザーはジャンプして前足でダークライガーに攻撃し、ダークライガーもジャンプ

でそれを避ける。そして、ダークライガーのバイザーの目が発光し、マシンブラストする。ダークマスターは口を開き、

「制御トリガー解除、ダークライガー！兵器 解放！ マシンブラスト！！ ダークガンストラッシュュ！」

ダークガンストラッシュュをシーザーに撃ち込み、それを避けるシーザー、シーザーはウィルに何か伝えるようにうなずき、

「わかってるよ！シーザー！ウィルドブラストだな！」

切り拓け、シーザー！ 俺の魂と共に、進化 解放！ エヴォブラスト！！ ライジングガンストラッシュュ！！

ダークガンストラッシュュとライジングガンストラッシュュが互いにぶつかり合い、その衝撃波に吹っ飛ばされるシーザーとダークライガー、そして、直ぐ様ダークライガーは次の態勢を取る。それを見たウィルは、

「よし、この一撃で決めるぞ！ 行くぞ、シーザー！！ ライジングバーストブレイク！！」

「ダークバーストブレイク！」

互いのウィルドブラストがぶつかり合うその瞬間、ダークライガーはブレードがぶつかる寸前に態勢を変え、シーザーの胴体にブレードで切り裂く。

グオオッ!!

ダークライガーのブレードで胴体を切り裂かれたシーザーは苦しむように声を上げ、倒れてしまう。それを見たドクターマイルスは、

「ぶつかると寸前に向きを変え、一番ダメージを受けやすい箇所を狙うとは！ やはり、私の予想以上に進化している！」

研究所の外で、バズートと戦うストームたち、そんな中、ギルラプターが何か感じ取った素振りを見せ、突然、壁をジャンプしてバズートの砲撃を避けながら、壁を登りきり、研究所の中に入っていった。それを見たストームは、

「ギルラプターがあんな行動に出るとは！ 一体中で何が？」

地下では、シーザーがダークライガーの攻撃で動けなくなっていた。ドクターマイルスは、

「ふ、これでライジングライガーは終わりだな！ さあ、エマ、お前が端末を起動させないでライガーの命はないぞ。さあ、どうする？ ライガーの命を守って端末を起動させ



るか、端末の起動を拒否してライガーの命を捨てるか、どちらかにせよ!!」  
エマは手が震える中、遂に決断し、

「わ…、わかりました…。端末を…」

しかし、その時、ギルラプターエンペラーが扉から現れ、ダークライガーに一発嘯ま  
す。ギルラプターに吹っ飛ばされ、壁に激突するダークライガー、それを見たドクター  
マイルスは、

「ち、邪魔が入ったか!」

ギルラプターを見たウイルは、

「ギルラプター、お前! 助けに来てくれたのか!」

ギルラプターはダークライガーをじっと見つめた。その時、コクピットにいるダーク  
マスターは苦しみ出した。

「グ、グワァー!!」

その様子を見たドクターマイルスは、

「あの衝撃で、機能障害が出たか! ま、あのスーツもプロトタイプだから、しょうが  
ない。」

ダークマスターのマスクが二つに割れ、ダークマスターの素顔が現れた。それを見た  
ウイルとエマは驚愕した。

「そ…、そんなー！」

「お…、お前！ なんで!？」

マスクが割れたダークマスターの正体、それは額に生々しい傷跡をつけたレイルだった。

T o b e c o n t i n u e d

## 第30話 「甦るオメガレックス」

研究所から離れた森で、ガネストの操るギルラプタージョーカーとリセルのデルが交戦していた。デルは前足で連続攻撃をするが、ギルラプタージョーカーは全て前足で受け止め、更にデルの前足を喰わえ、そのままデルをひっくり返した。

「ぐー！」

「どうしたの？ もっと頑張つてよ！」

「ち、ならば、ソニックブースト！」

デルはソニックブーストで加速し、ギルラプタージョーカーの周りを超スピードで走り回つて攪乱しようとした。

しかし、ガネストとジョーカーは全く動じず、じつと静かにした。

「どうした？ 大口叩いてももう勝負を諦めたのか！」

デルがジョーカーの後ろから襲いかかるが、ジョーカーは待つていたかと言わんばかりに咄嗟に右後ろ足でデルの顔にぶつけ、そのまま尻尾で尻ぎ払った。

「弱い、弱い。」

「弱いかどうか、こいつを喰らつてから言いな!! 行くぞ、デル！」

リセルの言葉を聞いて心配するような表情をするもしぶしぶ従うデル、

「兵器 解放！ マシンブラストー！！ フルハウリングショットー！」

それを見たガネストは、デスメタルキーを取り出し、

「強制 解放！ デスブラスト！！ 瞬激殺！」

デスブラストしたジョーカーはウイングシューテルでデルの攻撃を全て迎撃した。

「ワイルドブラストにおいて、その程度？」

それを見たりセルは驚愕した。

「そんなバカな！！ 改造したデルは真帝国のハンターウルフ改を遥かに上回り、ワイルドブラストすれば、キャノンブルやバズートルどころか、ナックルコングやステイレイザーの部隊を簡単に殲滅出来る程なのに、対して奴のギルラプタージョーカーは非武装で、パワーはエンペラーより劣る！ しかもバイザーが無いとは一体どういうことだ？」

驚愕するリセルの顔を見たガネストは、

「あれ？もしかして、何で帝国のゾイドなのにボクのギルラプター君にバイザーが付いていないって思ってるんでしょう？」

「なに!?!」

「バイザーなんてね。ゾイドを扱えない人間に従わせるために付けるもので、実際は

お飾りみたいなものだよ！

それに、ボクのギルラプター君はバイザーなんてつけなくてもボクの言うことをちゃあくと聞いてくれるから必要ないし、そもそもバイザーなんて付けたら、ボクのギルラプター君の本領が発揮出来ないからね。」

それを聞いて疑問を持つリセル、

「ボクのギルラプタージョーカー君はあの出来損ないの兄というか、ボクの分身のエンペラー君よりパワーは劣るけど、ゾイドの中でもずば抜けて知能が高く、一度戦ったゾイドの攻撃パターンなんて直ぐ覚えちゃう程でね！ だから、キミの攻撃が全部避けられたのも、ジョーカー君がキミのウルフ君の攻撃パターンを全部覚えちゃったからね！」

それを聞いたりリセルはハツとし、

「そうか！ あの時、肉弾戦の時、奴はどこから繰り出すのか、わかっていて受け止め、ソニックブーストで攻撃した時もまるでどこから来るのか把握していたかのように攻撃していた。」

あのギルラプターは相手ゾイドと戦うことによつて、その戦術を覚え、相手の弱点を見切ることが出来る程の知能を持っているというのか!？」

「更に言うと、ボクとジョーカー君はあらゆる戦闘を経験している。だから、ゾイドと

の戦闘には十分慣れているし、ジョーカー君はスツゴク頭が良いから、ボクに従うことが懸命だと思って、ボクの言うことは隅々まで聞いているから、正に一心同体!!

対して、キミのウルフ君はさつきワイルドブラストした時、なんか攻撃を躊躇してたように見えたし、完全にウルフ君を従えてないんだよね。

だから、キミ! 全然、ウルフ君の力引き出さないから弱いんだよ!!」

すると、ジョーカーは直ぐ様、ウルフの目の前に現れ、後ろ足でデルを蹴り、デルは向こうに吹っ飛ばされ、木に激突してしまう。

「ぐー!」

「ボクを殺す気で来てよ! じゃなきや、楽しめないじゃん!!」

「くそ、こいつ化け物だ! デルですら、歯が立たないなんて。 ……それにしても…、

あいつ、さつき、アーネストを兄やら分身と言っていたが、一体どういうことだ?」

デルは起き上がり、

「あれ? ようやくやる気になったの? じゃあ、本気で行こうか!」

「その前に一つ聞くことがある!」

「何?」

「お前、さつき、アーネストを兄で分身と言ったが、それはどういうことだ!」

「言葉通りだよ! ボクとあいつは兄弟であり、分身でもある。 そもそも、ボクたち

はギャラガー二世の生まれ変わりとしてこの世に生まれた存在だからね！」

「何!？」

研究所の地下室、ダークライガーのライダーがレイルだということに驚きを隠せない  
ウイル、

「何で? 何で、お前がここにいるんだ!」

しかし、レイルは怒り狂った表情をし、ダークライガーがシーザーに襲いかかった。  
シーザーは間一髪で、それを避けるが、

「待て! お前はエマの大事な人で、帝国にいちやいけない人間なんだ! 俺とお前  
は戦う必要はない!」

しかし、レイルは聞く耳を持たず、次々とダークライガーに攻撃してくる。

「俺は、お前を倒すために生まれたんだ!!」

それを見たドクターマイルスは、

「ほほう、まだ、あのスーツは開発段階とはいええ、ちゃんと機能しているようだな！  
ま、記憶は消去したから、ちゃんと本来の人格にプログラムされているからな。」

横で、ダークライガーを見たエマとユリスは信じられないような表情をした。エマは  
ドクターマイルスに、

「どうして？ 何故、レイルを巻き込んだの!？」

ドクターマイルスはため息をついたように、

「なんだ。君はまだ理解していなかったのか。君がレイルと呼んでいるアーネスト・  
ギヤラガーと現皇帝ギヤラガー四世陛下は先帝ギヤラガー三世陛下が私に命ぜられて  
私が造った旧デスメタル帝国帝王ギヤラガー一世のクローンなんだよ!!」

それを聞いたエマとユリスは青ざめた表情をした。

「そ…、そんな…!」



研究所の外では、ストームのキングたちが防衛のバズートル、キルサイスと交戦していた。レックスが何発も研究所の壁とバズートルに向けて発泡するが、びくともせず、バズートルは中に隠れながらキングたちを砲撃してきた。

「くそ、これじゃ、きりがなげいぜ！どうする？ストーム！俺たちの攻撃でもあの防衛を破るのは厳しいぜ！」

すると、ストームは得意気に、

「なあに、そんなの簡単さ！　ブツ壊せばいいんだ!!」

「だな！　でも、どうやって？」

「俺とキングが壁を攻撃する！　その時、お前たちは一斉に攻撃しろ！」

「了解！」

「キング、やれるな？」

ストームの言葉に応じてうなづくキング、

「ようし、行くぞ！　キング！　進化　解放！　エヴォブラストー!!　キングオブク

ローブラスト!!」

ストームのキングたちが研究所の防衛網を突破しようとしている中、ウィルとシーザーはダークライガーと戦っていた。

「どうしてだよ!?　お前はエマの大事な人じゃなかったのか？」

「黙れ！ 僕は帝王ギヤラガー！ この世界を支配するために生まれたんだ!!」

ダークライガーの追い撃ちで苦戦するシーザー、そこにギルラプターエンペラーがダークライガーに飛び掛かろうとするが、横から2体のギルラプタージョーカーが現れ、直ぐにエンペラーを取り押さえてしまう。ダークライガーのライダーになつていゝるレイルを見て激しく動揺しているエマとユリスにドクターマイルスは、

「我がネオデスメタル帝国の前身であるデスメタル帝国の礎を築いた帝王ギヤラガー様はかつて古代秘宝Zと呼ばれ、地球の半分を壊滅させた伝説の最凶ゾイド、デスレックスを従え、その絶対的な力で、ワイルド大陸のほとんどを制圧し、更にはオリジナルのデスメタルキーでデスレックスのフルパワーを引き出し、世界を支配できる勢いまで行った。

しかし、現反乱軍の指導者の先祖で、フリーダム団の男がデスレックスと並ぶワイルドライガーを極限解放させ、デスレックスとの激しい戦闘の末、帝王ギヤラガー様はデスレックスと共にデスロッキキーに沈み、デスメタル帝国は壊滅した。

しかし、その絶対的な力から、帝王ギヤラガー様を崇拜する者が現れ、今の腐れ切つた世界を正すためにデスメタル帝国の復活を望む者たちが現れ、現在のネオデスメタル帝国を建国させた！

だが、肝心の帝王ギヤラガー様は既に崩御され、それを従える指導者がいない中、先

帝ギヤラガー三世陛下が現れ、ネオデスメタル帝国の初代皇帝となられ、ネオデスメタル帝国を率い、世界を導いた！

そして、先帝陛下はかつて帝王ギヤラガー様の遺伝子を継ぐ者を王位継承者にするべく、私に命じ、私は帝王ギヤラガー様の遺伝子とDNAから遂に帝王ギヤラガー様のクローンを完成した!! それがアーネスト・ギヤラガーなのだ！

だが、いくらクローンといえど、必ずしも同じ人物になるとは限らない。万が一、暗殺されてしまつては困る。

そこで、私は現皇帝ギヤラガー四世陛下であるもう一人のクローンを造りだし、敢えてガネスト・ギヤラガー殿下の存在を隠蔽し、アーネスト・ギヤラガーを公の皇子にし、皇子としての生活を与える一方、その戦闘データをガネスト殿下に提供し、ありとあらゆる戦闘訓練をさせた。

そして、終いにはデスレックスのDNAの移植に成功し、遂にガネスト殿下は完全な帝王ギヤラガー様のコピーとして完成し、第2代皇帝ギヤラガー四世陛下となられた！つまり、アーネストは現皇帝陛下を世界を支配するためのお方にするためのいわば、プロトタイプなんだよ！」

それを聞いたエマとユリスは恐ろしいような表情をした。

「ところで、君はアーネストを自分の弟のように思っていたようだが、それは間違いで

あり、正解でもある。

レイル・コンラッドと言ったかな？ 私はかつて、ライジングライガーのライダーであるレオ・コンラッドとサリー・ランドの血筋を引くお前に目をつけ、病死したお前の弟の遺伝子を手に入れ、更にはプリューゲル大尉が処刑したパウルス・メルビルの遺伝子をアーネストに移植させ、更により強力な戦闘データを手に入れることが出来た！

最もその影響で、帝王ギョラガー様とは程遠い甘い考えを持つてしまつたが、ライジングライガーのDNAを持つダークライガーを操るライダーにすることが出来、今や、皇帝陛下の影たる存在、ダークマスターへと生まれ変わったのだ！

さて、無駄話はここまでにして、エマ・コンラッドよ。端末を起動させてくれんかね？」

震えながらもエマは、

「嫌です!!」

「ま、そう言うだろうと思つたよ！ だが、お前が端末を起動させないなら、お前の先祖が乗っていたライガーと友人の命は保障出来ないがね！」

「ダークバーストブレイク!」

ダークライガーのマシンブラスト技を喰らつてダウンしたシーザーはダークライガーに前足で動きを封じ込められてしまう。

「く、止めろ！」

ギルラプターエンペラーもシーザーを助けに行こうとするが、2体のギルラプタージョーカーに前足と後ろ足を封じ込められて出ることが出来ない。

「ウイル、シーザー！ もう止めてください!!」

「止めて欲しいなら、端末を起動するしか道はないがね。」

エマは拳を握り、決心したかのように、

「わかりました！ 端末を起動させます!!」

それを聞いたユリスは、

「駄目よ！ エマ、そんなことしたら、皆死んじゃう!!」

「ですが、お願いがあります！ もうこれ以上、レイルを戦いに巻き込まず、ゾイドと皆を傷付けないことを約束してください!!」

それを聞いたドクターマイルスは、

「中々、姉弟愛に満ちた願いだな！ ま、いいだろう。端末を起動したまえ！」

エマは後ろにあるリジエネレーションキューブの前に立ち、ゆつくりと左手をキューブに触れた。

その時、突然、キューブの色がオレンジ色に光り、キューブが動き出した。

動き出したキューブの影響で、研究所の機器が異常を起こし、次々と破壊され、周囲

が揺れた。研究所にいた兵士たちはあわてふためき、

「異常事態発生！ 異常事態発生！」

かつて、ゾイドクライシス再生の再現であるかのように起動したりジエネレーションキューブを見たドクターマイルスは不敵な笑みを浮かび、

「ククク、これで、我が帝国の夢は達成される！ 選ばれた優秀な人間だけが強いゾイドを従え、更なる進化のために世界を、宇宙を支配出来る程の力！！ フフフ、ハハハ、ハーハツハツハ！！」

すると、ドクターマイルスはエマとユリスに拳銃を向け、

「さて、これで、目的は達成された！ お前たちはもう用済みだ。レオ・コンラッドとサリー・ランド、そして、ハンナ・メルビルの子孫で、そのゾイド因子を受け継ぐお前たち2人が反乱軍の手に掛かると色々面倒だからな！

悪いが、ここで、死んでもらうぞ！」

それを見たエマとユリスは驚き、

「どうして？ どうして、約束を守ってくれないんですか!？」

それを聞いたドクターマイルスはため息をつき、

「この世界は弱肉強食！ 人間もゾイドも全ての生きとし生きるものは強いものだけが生き残る世界だ！」

だから、我がネオデスメタル帝国は選別された優秀な人間だけが強いゾイドを扱い、人類を新たな進化へと導き、世界を平和へと導く。所詮、貴様らのような弱い人間は我が帝国の理想のための礎になるしかないのだ！

そういや、お前の両親もお前同様に対話が大事だとか言っつて、ZGのことを知り、我が帝国に刃向かって処刑してしまっただがな!!」

それを聞いたエマは凍り付いたような表情をし、

「そ…、そんな…！　パパとママが…。」

「さて、そろそろ、おさくらばさせてもらおうとするか！」

その時、地下室の壁が割れ、キングとレックスが現れた。

「なんだ!？」

「キングオブクロウブラスト!!」

「ファイナルガトリング!!」

キングはダークライガーに突進し、ダークライガーを向こうの壁に吹っ飛ばし、レックスはエヴォブラスト技でギルラプタージョーカーを撃ちまくった。

「大丈夫か!?　ウイル」

「大丈夫です！　ストームさん、それより、エマとユリスさんが！」

ドクターマイルスのいるところを見たグラッドは、

「あそこか！ 行くぞ、レックス！ ファイナルガトリング!!」

しかし、ドクターマイルスのいる部屋の窓は割れない。

「無駄だ！ この窓は超強化ガラスだ！ バズートルのマシンブラストでも割ることは不可能だ！

では、エマ・コンラッド、ユリス・メルビル、今度こそ、お別れと行くぞ！」

しかし、部屋の壁を突き破ってグソックとキールが現れ、コクピットからドクターミスとジョンが現れた。

「いえ〜い!! 正義の天才ゾイドハンター参上！」

ミスたちを見たドクターマイルスは、

「何?! この壁も並みのゾイドでは破壊できないはず！」

ミスは得意気に、

「この万能な若造のスパイデスが一番脆い部分を見つけて、他の野生のグソックたちと協力して掘続けてここまで来たんじゃない！ ストームとグラッドが上手く引き付けてくれたお陰で上手く行ったわい！」

「フン、中々やるな！ だが、出たところが命取りだ！」

ドクターマイルスの言葉と共に、ゾイド拘束とゾイド用の麻醉銃のような銃を持った兵士が取り囲んだ。



その時、ジョンが突然指を刺し、

「うわあ！大変だ！ 全部敵に突破された!!」

それを聞いてら振り替える兵士たち、キールはすかさず、糸で兵士たちの動きを封じる。それを見たスミスは、

「よし、形勢逆転じゃ！ さあ、エマちゃん！ユリスちゃん！ わしの懐へ!!」  
しかし、エマとユリスはジョンのところに行き、

「ちよつと狭いけど、我慢してね！」

「パーカーさん、ありがとう！」

それを見たスミスは号泣した顔で、

「こらく!! このクモ野郎!! 何、女2人に色気使つとるんじゃ!! それでも男  
か!!」

「え、でも、流石にレディに臭いおっさんと一緒に乗るわけには行かんだろ!」

「誰が臭いおっさんじゃ!! この色気クモ野郎!!」

「くそ、逃がすか！」

糸を自力でほどいたドクターマイルスは銃をキールとグソックに発砲するが、スミスはすかさず、グソックに乗り、ジョンもエマとユリスを乗せ、すかさずその場を出た。

「ち、逃がしたか！」

一人の兵士がドクターマイルスの元に行き、

「ドクター！ お怪我は？」

「大したことはない！」

「閨門が完全に突破されました！ ここは撤退した方が……！」

「いや、その前に起動した端末と復元途中のオメガレックスにコードを接続しろ！」

「しかし、今は危険です！」

「構わん、やれ!!」

「り、了解しました！」

兵士たちが起動したりジェネレーションキューブを移動する中、地下室のドームでは、キングとダークライガー、ギルラプターエンペラーとレックスがギルラプタージョーカーと戦っていた。

「ダークバーストブレイク！」

「キングオブクローブラスト！」

互いのワイルドブラスト技がぶつかり合うキングとダークライガー、両者はほぼ互角だった。ストームはレイルに、

「確かに君は強い！ だが、ゾイドとの絆を忘れてしまつては、本当の強さは引き出せない！」

「黙れ！ 俺は刃向かうものを全て叩き潰すだけだ!!」

ギルラプタージョーカーにガトリングを撃ち込む中、グラッドは、

「ウィル！ シーザーはダメーじが大きい！ ここは俺たちに任せてお前は逃げろ！」

「で、でも！」

「エマとユリスを救出出来たとジョンから報告があった！ だから、安心して出ろ！」

「わかった！」

しかし、その時、壁を突き破ってもう一体のギルラプタージョーカーが現れ、シーザーに突進し、シーザーは向こうの壁に吹っ飛ばされた。

「うわあ!!」

「ウィル！」

もう一体のギルラプタージョーカーのkokopittoに乗っていたのはガネストだった。

「へえ〜！ 随分楽しそうだね〜。ボクも混ぜてよ！」

ガネストを見たグラッドは、

「あれは、例の皇帝ギャラガー四世か!？」

攻撃を喰らって立ち上がろうとするシーザー、

「キミがジエノスピノを倒した噂のライガー君だね。どれ程の強さか見たいけど、そ

んなボロボロじゃあ、あんまり楽しめなさそうだね。

ま、ドクターが厄介な奴だっけって言ったから、悪いけど、止めを刺してもらおうよ！」  
そう言っけ、ジョーカーは瞬激殺の構えを取り、シーザーに攻撃しようとする。その時、

「フルハウリングショット!!」

ハウリングシャウトのような攻撃が壁を破壊し、シーザーたちに襲いかかってくる。ボロボロの2体のギルラプタージョーカーは避けられず、その攻撃を喰らって直撃し、シーザーたちはその攻撃をなんとか避けた。現れたのはデルだった。デルを見たグラッドは、

「リセル！ お前、助けに来てくれたのか!？」

「黙れ！ 俺はあのギルラプターに用があつて来ただけだ!」

「またキミか！ しつこいなく。そこまでボクが気に入ったということか!？」  
得意気に言うガネストに対し、グラッドは、

「ガキのくせに、随分デカイ口叩くじゃねえか！

同盟軍の中の最強の1人でもあるこの俺とレックスも敵に回して後で後悔するなよ  
!」

「へえ〜！ それは楽しみなだね〜。いいよ！ どうせなら、全員でかかっておいで!!」

キング、レックス、デルがダークライガーとギルラプタージョーカーに対し、攻撃の態勢を取ったその時、

「その必要は御座いません！ 陛下。」

ドクターマイルスの言葉と共に研究所が揺れ、崩れ始めた。ギルラプタージョーカーとダークライガーはすかさず、その場を立ち去り、ストームは皆に、

「ここは危険だ！ 早く脱出するぞ!!」

キングたちは急いで研究所の外に出た。研究所が崩れる中、何かが這い上がって来た。

ギユオオー!!

巨大な咆哮と共に崩れた研究所からバイザーを取り付けた黒いデスレックスのような巨大ゾイドが現れた。

「ジェノスピノが失った今、我が帝国の新たな戦力として起動せよ！ 暗黒の破壊要塞、オメガレックス!!」

ドクターマイルスの言葉と共に現れたのは、かつて、ゾイドクライシスでジェノスピノと共に猛威を振るった伝説のゾイド、オメガレックスだった。ドクターマイルスはオメガレックスの頭部に立っていた。

それを見たウイルたちは驚愕した。しかし、リセルは、

「ふん、あんなもの！ これで、フルハウリングショット!!」

デルのマシンブラスト技を諸に受けるオメガレックス、しかし、煙が晴れた後に現れたオメガレックスは全くの無傷だった。レックスもエヴオブラスト技で迎え撃つが、全く通用しない。オメガレックスの頭部に立っているドクターマイルスは、

「フッフ、おろか者め！ オメガレックスの力をじっくりと味わうがよい!!」

ドクターマイルスは指をパチンと鳴らし、オメガレックスとコードで接続している後ろのリジエネレーションキューブが発光し、同時にオメガレックスの身体も発光し、オメガレックスは咆哮を上げた。

ギユオオー!!

そして、オメガレックスの横の収束シールドが前に出て、背中の荷電粒子吸入ファンが回転し、オメガレックスの口内が緑色に発光した。それを見たグラッドは、

「なんか、ヤバイ雰囲気だぞ！ 皆、あいつから離れる!!」

シーザーたちが散り散りになってオメガレックスから離れる中、オメガレックスの口内で貯めているエネルギーが貯まり、

「オメガレックス、荷電粒子砲発射!!」

オメガレックスの口内から緑色の粒子ビームが放たれ、その衝撃波で、シーザーたちが吹っ飛ばされ、研究所の残骸と森が一瞬で破壊され、巨大なキノコ雲が現れ、森が一

気に火の海になった。それを見たガネストは、

「凄い、凄い！ 一瞬で燃えちゃったよ!!」

オメガレックスの頭部に立っているドクターマイルスは、

「まだ不完全とはいえ、これほどの威力を出すとは!! やはり、荷電粒子砲の技術は素晴らしい！ ん？」

その時、オメガレックスの身体から火花が散り、口内からも炎が漏れる。それを見たドクターマイルスは、

「オーバーヒートしたのか！ キューブの力を使っているとはいえ、やはり、復元直後の発射は無理があったようだな！」

オメガレックスの頭上に数体のクワীগとスナイプテラ3Sが現れ、

「お迎えが来たか！ 小娘2人を仕留め損なつたが、端末の起動とオメガレックス完成という第一目標は達成した！」

後はオメガレックスの最終調整とZG完成のオーパーツを集めるだけだ。」

クワীগとスナイプテラ3Sの腹部から強力なワイヤーが現れ、オメガレックスに取り付き、オメガレックスを引き上げた。ダークライガー、ギルラプタージョーカーもオメガレックスの背中に乗り、オメガレックスはそのまま帝都メガロポリスに向かって運搬された。

シーザーたちは荷電粒子砲を喰らわなかったとはいえ、その衝撃波で、ダメージを受けてしまう。シーザーのコクピットから運搬されるオメガレックスを見たウィルは、

「あ…、あれが…オメガレックス…!」

To be continued



## 第31話 「それぞれの道」

ドクターマイルスがオメガレックスと共に去った後、ストームとグラッドたちは持ってきた修理道具で、キングたちの傷の修理をしていた。グラッドはジョンから修理道具を受け取り、

「幸い、修理道具を持っていたキールとグソックがノーダメージで、こちらもそこまでダメージじゃなかったのは助かったな！ お陰で、相棒たちの修理も容易に終わりそうだ。」

「でも、コマンダー。見たでしょ！ あの威力。」

「ああ、確かにあれをまともに喰らったら、俺たちじゃあ、全く歯が立たない。」

だが、そう悲観することじゃない！ 俺たちはあのジェノスピノすら倒せたんだ！ あのオメガレックスがどれ程の化け物だろうと倒してみせる！ だろ！ ストーム。」

「ああ、俺も同じことを考えていた！」

「でも、リーダー！ コマンダー！ そんなこと言ってもウィルたちは悲観モードのままですよー！」

「あー！」

振り向いたら、ウィルはシーザーの足元でぐったりしていて、リセルはデルのкокピットの中で考え事をし、エマとユリスはオメガレックスに破壊された森を見て悲しうな表情をしていた。

「やれやれ、また厄介な問題を背負ってしまったか。　そういや、エマが聞いた話によると、あのレイルっていう帝国の御曹司と現皇帝はギヤラガー一世のクローンらしいな！」

「ええー！」

「ま、記録によると、ギヤラガー一世は元々奴隷として生まれ、天涯孤独の身であったため、旧デスメタル帝国の帝王になつても妻をめとらなかつたそうだから、当然、奴に子孫なんているわけないからな。」

「でも、コマンダー！　そうなると以前俺たちが倒したギヤラガー三世は何者なんでしよう？」

「多分、ギヤラガー一世の子孫を名乗る赤の他人だろう！　奴のカリスマ性に惹かれ、崇拜するものも多数いるからな。」

横にいたストームは、

「いや、そうとも言い切れない。あの時、俺は確かにギヤラガー一世と似た雰囲気は感じたが、その一方、何か強大な雰囲気も感じた！」

何かとははつきり言えないが、この世を揺るがすような強大な何かがある！ それにあの時、キングが警戒していたのはジェノスピノではなく、あのギャラガー三世の方に警戒していたようにも見えたり……」

「本来、この時代にいるはずのないジャミンガやあの謎の巨大ゾイドといい、調べる必要がありそうだな！ エマがやたら恐れているZGって奴も。」

「ZG？ コードネームのようですが、そもそもゾイドなんですかね？」

「わからねえ。あのエマがあそこまで恐れるってことはただものじゃないことは確かだ。」

その時、飛行ゾイドの音がした。

「お、どうやら、クルーガーたちのお迎えかな！」

「いえ、コマンダー。この音は……」

来たのは巨大スナイプテラのビッグウイングと青いスナイプテラとキルサイスだった。

「やれやれ、嬉しくないお迎えが来たか。」

ビッグウイングが離陸し、青いスナイプテラ、キルサイスも離陸してビッグウイングから、シーガル中将、アルドリッジ大佐が現れ、シーガル中将はユリスとエマの元に行く、

「メルビル二世陛下！ よくご無事で。さ、もう安心です！ 我々新帝国がお守りしますのでどうぞこちらへ！」

しかし、ユリスは困った表情をし、

「え…、でも、ウイルたちはどうするのですか？」

「彼ら是我々の方針に逆らった！ 奴等は受け入れられません!! さあ、こちらへ！」  
「ち、ちよつと、待つてくださいい！」

嫌がるユリスを見て、ウイルは身を乗り出そうとしたその時、リセルが拳銃を取り出し、ウイルに向けた。

リセルの険しい表情を見て、ウイルはしばらく動けなかった。ユリスとエマをビッグウイングに乗せようとするシーガル中將はリセルに、

「どうした？ ディアス准將。行くぞ！」

リセルは拳銃をしまい、デルに乗ってそのままビッグウイングに乗った。ビッグウイングに乗せられたエマはウイルの方を向き、悲しそうながらも笑顔を見せ、そのままビッグウイングに乗せられた。

それを見たウイルは複雑そうな表情をした。グラッドは呆れ果て、

「たく、ホントに自分勝手な野郎だ！ 散々俺たちに頼ってきた癖に手を切るなんてな!!」

その時、通信が入り、通信を聞いたグラッドは、

「今、クルーガーから連絡が入った！ 旧共和国派に属する派閥が次々とネオデスマタル帝国軍に制圧され、迎え撃つために旧共和国派のクライヴ・デルタが俺たちに全面協力してくれるそうで、至急本拠地に戻って来て欲しいとのことだ！

とにかく、俺たちは俺たちのことをするぞ！ 今すぐ本拠地に戻る。」

「ま、待つてください！ コマンダー！ リセルはどうするんですか？ グレたとはいえ、リセルはコマンダーが育てた弟子なんでしよう？」

「ほっとけ！ 今のあいつは何言っても聞かん！ 元々反抗期だったし、ちよつとでも痛い目に遭わないと直らん。連れ戻すのはその後だ!!」

「そうは言っても…、」

そこにストームが口を開き、

「いや、グラッドの言う通りだ！ 今のあいつには何言っても通用しない。これ以上あいつを引き戻すことをしたら火に油を注ぐだけだ。」

「ここは少し様子を見た方がいいだろう！」

「仕方ないですね！ じゃ、行きましよう！」

ウイルは少し黙り込んで、

「どうした、ウイル？ さっさと行くぞ！」

「あ、はい！」

新たな本拠地に向かうビッグウイングのコクピットではシーガル中将与アルドリツジ大佐が、

「そういえば、シュバルツ中佐の姿が見えないな。どこに行つた？」

「何度も通信を開いてますが、あの野郎、何の連絡もよこしませんし、どこに行つたのかもわからん！」

「まあ、良い！ とにかく我々はあのネオデスメタル帝国を叩き潰し、我が新帝国をかつてゾイドクライシス後に真なる帝国として成立した真帝国の復活のために戦うのだ  
!!」

「はー！」

一室にいるエマは、ドクターマイルスの言葉を思い出していた。

「奴は死んだお前の弟の遺伝子を受け継いだ者！ だから、ライガーを扱うことができる！」

奴は現皇帝陛下であるガネスト・ギヤラガー殿下を先帝ギヤラガー三世陛下の望む継承者にするためのいわばプロトタイプなんだよ！

お前の両親もそう言つて我が帝国に齒向かい、処刑してしまつたがね！」

エマは両手で顔を抱え込み、静かに泣き崩れた。

「私はどうしたらいいの？」

また別の部屋ではリセルが子供の時、両親と一緒に撮つた写真を見つめ、ギヤラガー親衛隊に強制収容所に入れられ、脱走した時のことを思い出していた。

8年前、旧共和国派のレジスタンスに加わつていた12歳のリセルはジェノスピノを操るギヤラガー三世率いる親衛隊と交戦していたが、ジェノスピノの圧倒的な力の前に旧共和国軍が壊滅し、旧ネオヘリックシテイは制圧され、リセルとその両親は親衛隊の捕虜になり、強制収容所に入れられた。

そこでリセルと両親は半年間強制収容所で奴隷として酷使され、ゾイドの発掘とパーツのかき集め、兵器ゾイドとして改造するための野生ゾイドの乱獲、軍事基地と工場の建設等、ありとあらゆることをやらされた。

工場建設で数キロの丸太を運ぶ中、リセルはその重さに耐えられなくなり、倒れてしまう。それを見た帝国軍兵士は、

「おい、そのガキ！ 誰も休めとは許可してないぞ！ さっさと働け!!」

そう言つて、兵士はリモコンのスイッチを押し、リセルの首に取り付けられている枷から電流が走る。

「グワアアー!!」

電流を受けて苦しむリセル、リセルは力を振り絞るが、身体がついていけず、また倒れてしまう。それを見た兵士は、

「まだ直らんのか！ なら、もう一度…、」

その時、リセルの母が現れ、

「止めてください！ この子はもう限界なんです！ だから許してください。」

しかし、兵士は鞭を持って母に投げつける。鞭を受けて倒れる母、

「お前たちは我が帝国に逆らつた反逆者だ！ その罰としてお前たちはここにいる！ 生き残りたかつたら、ここで一生働くんだな!!」

それを聞いたリセルと母を最後の力を振り絞つてしぶしぶ労働に入った。

それから数カ月後、リセルの父は収容所からの脱走を企て、

「もう、これ以上こんなところにいるら皆死んでしまう！ この際、皆で脱出しよう



!!

「でも、そんなことしたら帝国が許さないわ!」

「こんなところで死ぬよりマシだ! 皆準備はいいな!」

やがて、牢屋に近付いた兵士に父が抑え込み、その鍵を手に入れ、牢屋から出た。収容所に警報が鳴り、親衛隊兵士が出勤し、次々と脱走者に向けて銃を発砲した。

次々と人が倒れる中、リセルは両親と共に入口まで逃げていった。

しかし、そこに待ち受けていたのは、親衛隊隊長のキル・タツカーとクルエラ・ベケツト、ジョセフ・アーミテージだった。タツカーは拳銃を向け、

「直ぐに牢屋に戻れ! 戻れば命は保障してやる。」

リセルの両親はリセルの前に立ち、

「私はどうなっても構いません! だから、息子だけは! 逃がしてください! お

願います!!」

それを聞いたタツカーは、

「ほお! 親子愛という奴か! だが、残念だな!!」

ダン、ダン!!

銃声が鳴り、リセルの両親は倒れてしまった。倒れた両親を見て青ざめるリセル、

「父さん! 母さん!!」

「やれやれ、大人しく帝国に従えば、命は助けてやるのに！」

「う、ウワアアー!!」

怒り狂ったリセルはタツカーの元に走る。しかし、タツカーはリセルを軽く押し倒してしまふ。

「全く、しようがないガキだ！　だが、安心しろ！　お前も直ぐに親の元に送つてやる。」

そう言つて拳銃を向けるタツカー、その時、突然爆発が起き、

「何事だ？」

「大変です！　旧共和国の反乱軍が襲撃してきました！」

「直ぐに軍を出撃して鎮圧しろ！」

その隙にリセルは破壊された扉の方へ走り、收容所を脱出した。それを見たベケットは、

「タツカー大将！　ガキが逃げてしまいましたが、どう致しましょう？」

「そうだな。生かしておくと後々面倒になる！　奴も追え！」

森の茂みに隠れながら、逃げるリセル、しかし、リセルが転んだ隙に親衛隊兵士とディロフオスに取り囲まれた。

もはやこれまでかという程に死を覚悟したりセルだったが、その時、森の中から、黒

い影が現れ、親衛隊兵士とデイロフオスを一瞬で蹴散らした。影のゾイドはりセルの前に立った。

影のゾイドの正体は野生のハンターウルフだった。野生のウルフはりセルをじっと見つめていた。一連のことを思い出したりセルは、

「こうして俺はデルと出会い、賞金稼ぎとして世界各地のゾイドハンターと戦い、帝国軍を強襲して、ネオデスメタル帝国への復讐を果たすために力をつけてきた。

だが、帝国の勢力は益々増大していた。今では、俺一人では勝てないレベルまで達していた。

だから、俺は仲間を得てより強力な力を手に入れるために同盟軍に入った。だが、捕虜にした帝国軍に仕打ちを与えず、武装解除させただけにした同盟軍のやり方に納得出来なかった！

そして、進化したシーザーの姿を見て、あの強大な力を得るために俺は敢えてアルドリッジの誘いに乗り、ユリスには手を出さず、守ることを条件に新帝国に入った！

だが、あのオメガレックスが現れた以上、もっと力が必要だ！俺の人生を全て奪った帝国への復讐を果たすために！」

写真をじっと見詰めて復讐を誓うリセルをユリスは少しドアを開けて悲しそうに見ていた。ユリスはゆっくりとドアを閉め、壁に寄り添い、

「私は何もすることができないの？ この戦争を止めることも、リセルを慰めることも、何も……？」

同盟軍本拠地、司令室にはストームたち同盟軍の重鎮とクライヴたち旧共和国派の重鎮たちが集まり、軍事会議を開いていた。グラッドは旧共和国派たちに、

「さて、いきなりだが、我々は帝国を迎え撃つために早急に手を打たねばならない。」  
クライヴはわかったように、

「オメガレックスが復活したことですな！ かつて、ゾイドクライシスでジェノスピノと共に猛威を振るった伝説のゾイド！」

「例の荷電粒子砲を放った後、奴は直ぐに撤退していた。あの様子を見ると、オメガ

レックスは復元直後で万全の状態ではなかったため、一発しか撃てなかったようだが、奴は敢えてその一発でその力を見せつける狙いもあったようだ。」

「とすると、帝国はオメガレックスを万全の状態にするため、最終調整を行っているはず！ 直ぐに手を打たなければ!!」

「だが、あの帝国なら既にオメガレックスの最終調整は行っている！ おそらく、今、俺たちが会議している間に終わっているだろう。」

だから、我々はオメガレックスに対抗するための戦力を整えなければならない!!」

「ところで、新帝国の件は一体どうなっているのだ?」

「残念ながら、新帝国は俺たちと決別した！ だから、ネオデスマタル帝国は俺たち同盟軍と旧共和国派で迎え撃つしかない!!」

「とはいえ、今の我々にあの荷電粒子砲を持つオメガレックスを迎え撃つ手段はあるのか? それに本来この時代に存在しないジャミンガや謎のゾイドも現れたと聞いたし。」

「それについては以前、工作員であるジョンが一体のジャミンガを捕獲して調べてみた。」

調査したところ、あのジャミンガはかつて過去のゾイドクライシス後に発生したジャミンガみたいに自然発生したのではなく、人工的に作られたものだとは判明した。」

それを聞いたクライヴや旧共和国派たちは驚愕した。

「俺たちを襲ったジャミングに付いていた錆びは自然のものではあったものの、所々の箇所にはアーマーを剥がされた跡や乱獲の際につけられた傷、更にゾイドコアが抜き取られていて、その跡も確認された。

つまりあのジャミングは捕獲した野生のラプトルからアーマーとゾイドコアを剥がし、あたかもジャミングが現代に復活したかのように見せ掛けたものだということだ！

更にスミスの調査によると、無数に現れたジャミングの内、何体かは本物だが、残りは幻影か映像で見せたもので、あたかも無数に現れたかのように演出していたことも明らかになった。」

「まさか、そんなことが……。しかし、そんなこととして一体何になるといふのだ？」

「かつて、初めてゾイドが地球に来たのと同時に地球を壊滅させたゾイドクライシスが再来したかのように思わせて俺たちに恐怖心を植え付ける狙いがあったのだろう。ネオデスマタルは旧デスマタル同様、過去の遺物はかなり知り尽くしているからな！」  
それを聞いたケンは拳を握りしめ、

「それにしても、人々はおろか、なんの罪もない野生のゾイドたちまで自分勝手に乱獲し、兵器改造するだけでなく、そんなことまで利用するとは……！」

「それがネオデスメタル帝国のやり方だ！ ゾイドだろうが、人間だろうが、利用出来るものは徹底的に利用する、それが奴らのやり方だ！」

「それに、ジャミンガの他に君たち同盟軍が戦った謎のゾイドも警戒が必要だな！」

「あれの正体は未だ不明だが、ただ一つ言えることはあれもオメガレックス同様、まだ復元直後で本調子ではなかったため、ストームの機転で倒すことが出来たが、次はそうはいかないだろう。」

だが、今はオメガレックスに対抗する処置を取らなくてははいかない！」

「しかし、一体どうやって？」

「オメガレックスの一番危険なのはあの荷電粒子砲だ！ あれを抑えれば俺たちにある程度の勝機は訪れる。」

「つまりどうやって？」

「奴を不利な場所に引きずり込む！」

クライヴたち旧共和国派がその言葉に疑問を持つ中、ネオデスメタル帝国の帝都メガロポリスの宮殿のある一室では新たなスーツを着用するために待たされ、上半身裸の状態で待っていた。

その時の彼の左腕は肩まで機械化されていた。そこにドクターマイルスが現れ、

「よいか、お前は皇帝ギャラガー四世陛下の影の皇子として生まれ、ガネスト殿下を皇

帝にするために今までそうやって育ててきた！」

だが、悲しむことはない。私はお前に千載一遇のチャンスを与え、使い物にならなくなった左腕を切り落として新たに強力な左腕も与え、お前は今や、帝国皇子アーネスト・ギヤラガーではなく、偉大なる皇帝陛下をお守りする影の存在ダークマスターに生まれ変わったのだ！

お前があのライガーを倒せば、お前の存在は帝国で認めてもらえ、お前の父上も喜んでくれるだろう。」

レイルは無表情で、

「わかりました…。」

「それでいい！」

ドクターマイルスは部屋を出て、宮殿の地下室に入った。そこには特殊なスーツを着た研究員と機械兵が使えなくなつて投棄したゾイドや乱獲した野生ゾイドから抜き取ったゾイドコアをZGが入れられている巨大カプセルに供給していた。巨大カプセルとコードで接続している後ろ向きの玉座に座っている人物はドクターマイルスに、

「リジエネレーションキューブを起動させて更にオメガレックスを完成させたようだな！」

「はい、これで我が帝国の計画に一步近づきました！ 後は端末から得た情報でZG



完成のためのオーパーツをかき集めるだけです！」

「フフフ、これで私と一体化しているZGも喜ぶだろう。そして、かつて帝王ギヤラガー一世がオリジナルキーでデスレックスの真の力を引き出したが、憎きフリーダム団の邪魔で叶わなかったデスレックスの真の形態も覚醒する！」

フフフフ、ハハハハハ、ハーハツハツハツハ!!」

謎の人物の高笑いと共に、玉座の前で目を赤く発光させ、ジャミンガと投棄され、ゾイドコアを抜き取られた帝国の兵器ゾイドと野生ゾイドをむさぼり食うデスレックスの姿があった。

バリツバリ、バリボリ、バリボリ!

ギユオオオー!!

デスレックスの咆哮が地下室内に響きわたる。帝都のある牢獄ではカティアが牢屋に入れられ、牢屋、中でカティアは自分のところに来る兵士を待ち構えていた。兵士が近くに来たその瞬間、カティアは兵士を鷲掴みにし、兵士の首を絞めて気絶させ、兵士の持つていた鍵を手に入れ、牢屋から出た。

カティアは兵士から装甲服を剥がして代わりにその兵士を牢屋に入れ、少し装甲服に細工をして着用し、そのまま出た。

「待ってて、エマ、ユリスさん！ 必ず私が助けるわ！」

帝都メガロポリスの宮殿内ではオメガレックスの最終調整が行われ、それをタツカー元帥が見ていた。

「オメガレックスの力を世界中に見せ付けることが出来れば、おろかな反乱軍は我がネオデスメタル帝国にひれ伏す。」

そこにドクターマイルスが現れ、

「オメガレックスの最終調整はまもなく終わります。後は荷電粒子砲の最終テストのみです！」

「実験台となる場所は決まっているのか？」

「はい、南方方面の新帝国派の都市バラツツです。あそこは大都市ではありませんが、辺境の地にあり、あまり目立ちませんから、実験対象にはうってつけです！」

「そうか、ところで、ジェノスピノはまだ見つからんのか？」

「捜索隊も草の芽分けて捜していますが、中々……。」

「オメガレックスが完成したとしても、あのジェノスピノが反乱軍の手に渡ったら、後々面倒になる。引き続き、捜索をするよう、命じろ！」

「はい、ところで、陛下は？」

「陛下は只今御入浴中だ！ 陛下はオメガレックスに乗ることを何よりの楽しみとしてしているのだからな。」

「御入浴後が最高のシヨ一の始まりとられますね。」

南方の都市グスタフ、南方総督にして四天王の一人であるアッカーマン中将の乗るナツクルコングMk-IIとコナー少佐の乗るステゴゼーゲMk-IIの率いる帝国軍が新帝国の派閥と交戦していた。僅か数分で新帝国の派閥は一気に制圧された。

「思ったより圧勝でしたね！中将。マシンブラストを使うまでもありませんでした。」

「新帝国は過去の真帝国時代の旧式を使用しているからな。最新技術で改良された我がネオデスメタル帝国の新型の敵ではない！」

「ここにカーター大佐もいてくれたらよかったですけど……」

「大佐は一人でスナイプテラに乗って偵察に向かったそうだが、おそらく、一人娘のティアを亡くしたシヨックが大きく、戦線に出れなかったんだろう。」

「それにしても、大佐のキャノンブルも出撃させたようですが、一体あれには誰が乗っているんですか？」

「あれは無人だ！そもそもあのキャノンブルは大佐が初めて帝国軍に入隊して将校になった時に私が与えたもので、彼以外にあのキャノンブルを扱えるものはいないからな。」

それに大佐はほとんどスナイプテラで出撃していることが多いから、あのキャノンブルにも仕事を与えないとな！もちろん、万が一暴走した場合のことを考えて遠隔操作機能と制御装置も取り付けているからな。」

その時、煙が晴れた目の前にガトリングを付けたナツクルコングが現れた。

「中将！ まだ生き残りがいるそうです。私が奴を倒します！」

「いや、待て！」

目の前のナツクルコングから通信が出た。それを見たアッカーマン中将は、

「攻撃の意思はないだと……！ 全軍、砲撃止め!! あのナツクルコングとライダーは捕虜にする。」

グスタフの帝国軍基地の一室で、捕虜になったシュバルツ中佐はアッカーマン中将、コナー少佐と対面した。アッカーマン中将はシュバルツ中佐に、

「私はネオデスメタル帝国軍南方部隊所属アッカーマン中将、そして彼は私の部下の

コナー少佐だ。さて、君の名前と目的を聞かせてもらおうか!」  
シユバルツ中佐は口を開き、

「新帝国軍第二部隊所属シユバルツ中佐です。帝国の四天王の異名を持つ貴方にお願  
いがあつて来ました!」

「ほう…、で、その願いは?」

「あなた方ネオデスメタル帝国と我々新帝国との停戦協定を結ぶことは出来ないで  
しょうか?」

「これは驚いた!君は新帝国の一員ではないのか!」

「確かにそうですが…、我々新帝国があなた方ネオデスメタル帝国に勝てる勝算は一  
つも無い!それにこのままでは新帝国は壊滅してしまう。もちろんこれ以上の戦いは  
望まない!」

「つまり、私のコネで帝国を動かして欲しいと?」

「回りくどいかもしれませんが、あなたの力を見込んでのことです。あなたはネオデ  
スメタルの中でも人情に厚いお方と聞いています。」

「それは無理だ!!」

「な、何故です!?!」

「確かに私もこれ以上、血を流す戦いはしたくない。だが、そもそもこの鎮圧命令は本

国の皇帝陛下と元帥閣下のご命令なのだ。

我々ネオデスメタルにとって、皇帝陛下のご命令は絶対なのだ。もし、その意向に背けば、反逆者とみなされ、処刑、よくて更迭されるだろう。いくら帝国の4分の1を支配する総督の私でもどうにもならん。」

「で、ですが…。」

「しかし、わからんのは君だ！ 私にとっては新帝国は過去の真帝国同様、何の政治的影響力を持たん小娘を皇帝にして世界を混乱させた反乱軍なのだぞ！

何故、君程の男がああ反乱軍にいるのだ？ 我がネオデスメタルに入れば優秀な軍人になれるのに！」

「母が違いますが、新帝国のアルドリツジ大佐は私の兄なんです！ 私は兄の意向に従って新帝国に入りましたので、新帝国を裏切ることには出来ません！」

「なるほど、兄弟の関係か！ よし、わかった！私も出来る限りの努力はしよう！」

「ほ、本当ですか！」

「ただし、その代わり君は私の元で働いてくれないかね？」

「そ、それはどういう意味ですか？」

「言葉通りだよ！ 君がどれ程の実力を持っているのかを！ コナー少佐、帝都の元帥閣下に制圧は完了したと言って、彼の存在は隠蔽してくれないか。」

「しかし、大丈夫なのですか？ もしこのことが知られたら、反逆罪になりかねません！」

「君の実力を見込んでのことだ！ やってくれるね？」

「了解しました！」

コナー少佐は部屋を出て、

「ありがたいことですが、何故そこまでのことを？」

「人目で見た時、私は君はただ者じゃないってことはわかったよ。まるで第二のカーター大佐のようだよ！」

それに、この帝国ではコネで人を動かそう等と考えることだ！ それに私は元々ただの農民だった。」

それを聞いたシユバルツ中佐は驚いた。

「私はへんぴな地の村の貧しい農家に生まれた。ボロボロの家で、食べるもの等、雑草ぐらいで、ただひたすら農業に専念するだけだった。」

しかし、ある時、悪い地主に土地を全て奪われ、両親はまだ小さかった私を売る程にまで考えた。そんなとき、ネオデスメタル帝国軍が現れ、へんぴな地の村でも総督が演説した。

その内容は私のような貧しい者でも帝国軍に入隊すればその実力で出世は保障され

るものだった。両親は全く信じなかったが、私はこの生活から抜け出すために両親の反対を押しきって、帝国軍に入隊した。

入隊して見たら、周りの者は皆、私と同じみすばらしい服を着た者ばかりで、上品なものは一人もいかなかった。聞いてみたら、入隊者は皆、農民や奴隷、労働者出身だった。帝国の言っていたことは嘘じゃなかった。ただ、最初の寮生活では、喧嘩が絶えないこともあったが、同身分であったため、嫉妬や妬みなんてなかったし、皆、低身分のため競争心も強く、いつも競い合える仲になった。

そして、私は帝国のために銃撃、剣術、格闘、ゾイドの搭乗、ありとあらゆる訓練を受けてそれに耐えてきた。

最初はコクピットの付いたゾイドに乗らず、コクピットがない小さなサイズの野生のラプトルに騎乗し、そのラプトルを完全にもに出来るようになるまで操り、デスブラストして戦闘を行ったりする等、ワイルドブラストの衝撃に耐えられるようになるための訓練を受け、遂にはキャノンブルやナックルコングの搭乗も可能になり、やがてその実力を元帥閣下や先帝陛下に認められ、今の地位を得た。皇帝陛下は私のようなみすばらしい身分の者でも手を差し伸べてくれた偉大なお方だ！ あの方を裏切ることは出来ない！

今や、ネオデスメタル帝国は私にとって人生全てであり、新たな故郷だった！ この



帝国にはコネで出世した者なんて一人もいないのさ！」

それを聞いたシユバルツ中佐はどこか近い雰囲気を感じた。そして、都市グスタフから数キロ離れた場所にカーター大佐の乗るスナイプテラが航行していた。

「どうやら、ここら辺には反乱軍はいなさそうだな！　ん？」

カーター大佐が見つけたその先にはネオデスメタルのエンプレムの付いた巨大な航空母艦があった。

「あれは、ネオデスメタルの航空母艦、しかし何故こんなところに？」

スナイプテラは航空母艦のところに行き、航空母艦は山の頂上に離陸し、スナイプテラも近くの山に降りた。航空母艦は砲身のようなものを伸ばし、向こうの都市のバラツツに真っ直ぐ向け、先端のハッチが開いた。中にはオメガレックスがいた。

「あれはオメガレックス！　一体何をするといいのだ？　まさか!!」

ハッチが開いた瞬間、オメガレックスは都市バラツツに向けてマシンブラストの態勢を取った。

母艦の司令室でその様子を見ているドクターマイルスとタツカー元帥は、

「いよいよ、オメガレックスの最終テストが始まる。だが、もしオメガレックスの力が予想以上だったら、ドクターが復元しようとしているZGがお蔵入りになるということになるということになるが！」

「いえ、ZGはそれよりもっと衝撃的な力を披露することになります！ いずれ完成した暁には驚かれるでしょう！」

司令室の兵士は通信で、

「皇帝陛下！ 準備は整いました。いつでも大丈夫です。」

オメガレックスのコクピットにいるガネストは、

「いよいよだね！ さあ、行くよ、オメガレックス！」

制御トリガー解除、オメガレックス！ 兵器 解放！ マシンブラストー！！

マシンブラストしたオメガレックスはバラツツの方に狙いを定め、横の収束シールドが前に出て、オメガレックスの口内が緑色に発光した。

「オメガレックス、マシンブラスト発動！ 荷電粒子砲発射までカウントダウン入ります。」

荷電粒子砲発射まで、10、9、8、7、6、5、4、3、2、1、0！ 荷電粒子砲発射！！

オメガレックスの荷電粒子ビームがバラツツに向けて発射された。

バラツツで買い物をしている子供と母親は、

「あ！ねえ、お母さん！ あれ、何？」

「え…、あれって…！」

荷電粒子ビームが都市に直撃し、ビル街は次々と破壊され、人々はその爆風に吹き飛ばされ、大国の首都に相当する広大な都市は一瞬にして爆風に飲み込まれた。司令室の兵士は、

「ドクター、元帥閣下！ 荷電粒子砲の最終テスト成功しました！」

それを聞いて、笑みを浮かべるドクターマイルスとタッカー元帥、そして、周りの研究員は拍手喝采した。近くの山でその様子を見たカーター大佐は青ざめた表情をし、

「…そんな…、我がネオデスメタル帝国が…一般市民関係なく大規模な無差別攻撃を…！」

荷電粒子砲の威力を見たガネストは、

「これが、オメガレックスの荷電粒子砲！ 素晴らしいね…、今でも殺意がぐんぐん伝わって来るよ!!」

これからもボクを楽しませてね…。オメガレックス！ フッフ、ハー、ハッハッハッハ!!」

ガネストの笑い声が荷電粒子砲で一面焼け野原になった都市バラツツにまで響いた。

To be continued

## 第32話「暗黒の破壊要塞」

同盟軍本拠地、会議室の前で、ストームが腕組みしながら、壁に寄り添い、グラッドが出るのを待っていた。そして、部屋からグラッドが現れ、

「どうだった？」

「会議の結果、もう少し情報を集める必要があると出た。そもそもオメガレックスの正確な性能は把握出来てないし、仮に知っていてもあれに対抗する手段は今の俺たちにはない。ところで、ウィルは？」

「部屋に籠ったきり、出てこない。」

「やれやれ、シヨックが大きいとはいえ、今は感情に浸っている場合じゃないのに！」  
そこにジョンが走ってきて、

「リーダー！ コマンダー！ 大変です。」

「どうした？ そんなに息を切らして？」

「世界のテレビ中継にオメガレックスが!!」

「オメガレックスだと!!」

ストームたちが見た映像では、オメガレックスが荷電粒子砲で都市バラツツを破壊す

る姿が映し出されていた。

「ジョン！ 破壊されたのはどの都市だ？」

「新帝国派に属する南方の辺境の地にある都市バラッツです。」

「なるほど、大都市だが、目立たない場所にある街を狙ったのか。」

「どうします？ コマンダー。」

「すぐに会議を開く。大至急だ！」

「わ、わかりました！」

帝都メガロポリスの宮殿の前に多くの国民が集まる中、タッカー元帥が演説を行つた。

「見たか、諸君！ 先帝ギャラガー三世陛下とジェノスピノを失ったとはいえ、我がネオデスメタル帝国は不滅なのだ!!」

新たに皇帝陛下となられたギヤラガー四世陛下はオメガレックスというジェノスピノと並ぶ伝説のゾイドを手にし、今や最強の力を手に入れたのだ!!

最早、何も恐れることはない。天の雷である荷電粒子砲で愚かな反乱軍に天罰を下すときだ!!」

「ウオオー!! ギヤラガー! ギヤラガー! ギヤラガー! ギヤラガー!」

タツカー元帥は演説場を離れ、オメガレックスが入られている倉庫に入った。そこでは、オメガレックスに新たな装備が施されていた。タツカー元帥は監督をしているドクターマイルスの元に立ち寄り、

「ドクター、準備は出来ましたか?」

「これは、これは、元帥閣下! いつでもOKです。」

「これで、我がネオデスメタル帝国に反抗する反乱軍の鎮圧ももう、まもなくということだな!」

そこにサンングラスをかけたガネストが現れ、

「ドクター、オメガレックスはもう出撃出来るの?」

「はい、陛下! これで荷電粒子砲は何発でも撃てます! そして更には陛下がもつと楽しめるよう、空中でも荷電粒子砲を撃てるように飛行ユニットを装備した爆撃機仕様として改造しました! これなら地上でも空中でも戦え、陛下も十分に堪能出来ま

す。」

「ふくん、確かに面白そうだね！　じゃあ、直ぐに出撃するよ。　タツカー！　用意を

して!!」

「了解しました!」

「ねえ、ドクター！　よかったら一緒に行こうよ！　きつと面白いよ!!」

「残念ですが、陛下。　私は先帝陛下からZGを完成させるよう命じられていますので、あの小娘が起動させた端末の情報を元にZG完成のオーパーツを集めなければいけないので。」

「ふくん、そうなんだ…。　ZGね。　そいつ強いのか?」

「もちろんです!　オメガレックスと同等…。いや、それ以上かもしれません!」

「へえ、面白いね。あ、そうだ!　じゃあ、ゲームをしよう。　ボクが反乱軍を潰す

のと、ドクターがZGを完成するのと、どちらが先に達成するのか勝負しよう!」

「もちろん、陛下の仰せのままに!」

「じゃあ、決まりだね!　でも…。ボクが勝ったらZGが完成しても出る幕はないかも

ね!」

そう言つてオメガレックスの元に行くガネスト、

「陛下の遊び心はまさしく帝王ギヤラガー様そのものですな!」

「ところで、元帥殿！ 端末の情報によると、ZG完成の一つのオーパーツは南極にあることが判明したので、グレッゲル准将とその部隊をお借りしてもよろしいでしょうか？」

「しかし、奴にも反乱軍鎮圧の命令を下しているが。」

「ですが、北方の新帝国の派閥は既に鎮圧したと聞きました！ それに寒冷地に関してはグレッゲル准将の方が詳しいし、護衛にダークライガーも付けますので。」

「まあ、いいだろう！ ZG完成は先帝陛下の御悲願なのだから！ なら、何としてもオーパーツを手に入れ、早急に完成させろ！」

「了解しました！」

「ねえ、もう出ていいんだよね?」

「いつでも大丈夫です。陛下！」

「それじゃ、行くよ！ オメガレックス、これから、ボクのおモチャとしてよろしくね!!」

ギユオオー!!

ガネストの言葉に応えてオメガレックスは咆哮を上げ、その咆哮は帝都全域に広がった。宮殿から出たオメガレックスはオメガレックスの護衛として新たな改造を施された親衛隊仕様のスナイプテラG4、キルサイスG4、キャノンブルG4、バズートルG



4、デイメパールサーG4、デイロフオスG4と共に行進して多くの国民が歓声を上げる中、行進し、帝都を出た。

同盟軍本拠地のゾイドが保管されている倉庫でシーザーの足元にウイルがいた。ウイルはダーククマスターの正体がレイルだということと豹変したりセルのことを思いだしていた。シーザーは心配そうにウイルを見つめ、

「大丈夫だよ！ シーザー。ちよつと考え事してただけだよ。」

グルル……

シーザーは向こうにいるグルラプターエンペラーの方を向いた。グルラプターは頭を下げ、落ち込んだ表情をしていた。シーザーはウイルの方を向き、

「ああ、わかってる！ あいつは長年一緒だった相棒を失って落ち込んでるんだ。きつとエマも同じ気持ちだ。

目の前で苦しんでいる人やゾイドがいるのに、ここでじっとしているわけにはいかない。あのオメガレックスだって止めなければならない。行くぞ、シーザー!!」

グオオッ!!

司令室では、オメガレックスに対抗するための処置を取ろうとしていたところ、ジョーンが部屋に入り、

「コマンダー!」

「どうした!?!」

「オメガレックスが動きました!」

「何!!」

グラッドたちが見た映像では、オメガレックス率いる親衛隊が新帝国に属する都市の軍と交戦していた。

新帝国のキャノンブル、バズートル隊が親衛隊に向けて砲撃する中、デイメパルサーG4とデイロフオスG4のマッドオクテットとジャミジャミングで動きを封じられ、マシンプラストしたキルサイスG4が襲いかかり、新帝国軍のゾイドの装甲を破壊される中、一斉にマシンプラストしたキャノンブルG4隊が砲撃し、更に後方にいたバズート

ルG4隊と空中のスナイプテラG4隊が攻撃の姿勢を取り、マシンブラストする。

しかし、バズートルG4のA-Z680口径バズーカ砲とスナイプテラG4のA-Zスナイパーライフルからオメガレックスの荷電粒子砲に似た緑色の荷電粒子ビームが放たれ、新帝国軍のゾイドは一瞬で全滅した。

そして、オメガレックスがマシンブラストを発動し、荷電粒子砲で一瞬で都市を破壊し、焼け野原に変えた。コクピットにいるガネストはつまらなさそうに、

「あくあ、どこもかしこもクズばかりで退屈しちゃうよ！ どれも過去の真帝国の旧式ばかりでつままないよ!! もっと骨のあるゾイドはいないの?」

ガネストは向こうにある森の方を見た。そこには野生動物と野生のゾイドたちがそれぞれ思い思いで過ごし、同じ種の動物とゾイドが家族のように暮らし、共存していた。それを見たガネストはニヤリとし、オメガレックスの荷電粒子砲の向きを森の方に向け、

「オメガレックス、荷電粒子砲ファイヤー!」

オメガレックスは森の方に向けて荷電粒子砲を発射し、森にいた野生動物や野生ゾイド共々吹き飛ばされ、一気に破壊された。ガネストは地上部隊に、

「次の反乱軍の都市に行けるルートを作ったよ! そこを通れば都市はもう目と鼻の先だ。」

ボクはドクターが装備させたユニットで空中から楽しむから、地上はキミたちに任せよう！」

地上部隊の先頭にいるドライパンサーG3に乗っているベケット少佐は、

「了解しました。陛下！ 皆は私の指揮に従え!!」

親衛隊の地上部隊が焼け野原になった森を進む中、オメガレックスに装備されている飛行ユニットが変形し、翼のようなものが現れ、ジェット噴射でオメガレックスが宙に浮かび、そのまま上空に上がって、スナイプテラG4とキルサイスG4がオメガレックスについていった。

「さあ、これからゲームは加速していくよ！ おっと、その前に皆に挨拶しなきゃね。」  
ガネストはスイツチを押し、同盟軍と新帝国の司令室の映像全てにオメガレックスのコクピットに乗るガネストが現れた。その様子を見て驚く同盟軍と新帝国、

「ごぎげんよう。諸君！ ボクはネオデスメタル帝国皇帝ギャラガー四世だ。」

これからキミたちを殲滅していくんだけど、ただ、殲滅するだけじゃ、面白くない。そこでゲームをしよう！ キミたちがボクとボクの部隊を全滅したら、キミたちの勝ち。ボクがキミたちを全滅したら、ボクの勝ち。でもそれだとキミたちが圧倒的に不利だから、ハンデを与えよう。

ボクがキミたちを全滅する前に無条件降伏してくれたら、キミたちの勝ちにしよう。

悪い条件じゃないだろう？ でももし無条件降伏を受け入れなかったら……」

ガネストは指をパチンと鳴らし、オメガレックスはそれに従い、行く先にある都市に向けて荷電粒子砲の照準を合わせ、発射した。荷電粒子砲を直撃した都市は瞬時に壊滅した。

「このように徹底的に破壊するからね。まあ、降伏を受け入らないなら、精々ボクの期待外れにならないようにしといてね！　じゃあそれじゃ、ゲームを楽しんでね！　死のゲームをね！」

映像を切るガネスト、それを見たグラッドは、

「くそつたれが！　しかも通り道にあるものは手当たり次第とは！　それにしても、スナイプテラとバズートルにオメガレックスと似た荷電粒子ビームを撃てるとはどういうことだ？」

「ドクタースマイスが分析したところ、オメガレックスの荷電粒子砲を基にコンパクトに改造した小型荷電粒子砲とのことで、恐らく開発したのは……」

「例のドクターマイルスカ！　それにあのガキ、くだらん宣言をしやがって！　何としても奴を倒すぞ!!」

「しかし、コマンダー！　飛行ユニットまで装備したオメガレックスにどう立ち向かうんですか？　こつちには航空戦力はカプター、クワーガ、クワガノスとクリスの

ジャックしかいませんし！」

「いや、待て！ スミスが万が一、帝国が巨大兵器ゾイドを開発した場合に備えて開発したあの兵器がある！ あれを使うぞ！ ジョン、クリスを呼べ！！」

「ただ、その前に、コマンダー。1つ問題が…」

「何だ？」

「シーザーがいません！」

「な、何〜!!」

「オマケにシーザーの居場所が知らないか聞こうとウイルの部屋に入ったが、ウイルの姿がどこにもいません。」

「無断出撃か！ あのバカ、何考えてんだ!! 仕方ない、俺がウイルを探しに行く！ 後は任せてくれ!!」

「いや、グラッド！ お前はここにいてくれ！」

そこにストームとクルーガーが現れた。

「ストームにクルーガー。」

「ウイルは俺が捜す！ お前は引き続き、オメガレックスを迎え撃つための作戦を立ててくれ！」

「だが、ストーム。お前は同盟軍のリーダーだろ？」

「確かにこの同盟軍を統率するリーダーだが、俺は軍事的リーダーじゃない！ だから、俺はお前みたいに作戦を立てられないし、それにウイルの世話は俺に一任してるわけだし。」

「確かに俺は軍の総司令としてお前の代理として統率しているが、そもそもお前の存在があつたから、同盟軍がここまでこれたわけだし……。」

「いや、彼の言う通りだ。確かにストームは同盟軍のリーダーだが、総司令としての器はグラッドの方が上だ！ それに彼の相棒のキングは伝説のワイルドライガーだ。そう簡単にくたばるたまじやないさー！」

「まあ、あんたがそこまで言うなら仕方ないな。」

「では、俺はキングと共にウイルとシーザーを捜していく。あ、それと実は事前にくリスに言つて、スミスに例の装備をジャックに取り付けるよう伝えといたから、心置きなく作戦を立てられるようにしたからな！」

それを聞いたグラッドとジョンはポカーンとして、  
「仕事が早いな。」

新帝国の仮本拠地の司令室でガネストとオメガレックスの映像を見たシーガル中将与アルドリッジ大佐は、

「何てこつた！ 我が新帝国の前身である過去の真帝国が誇る最強のゾイドだったオメガレックスが今や、ネオデスマタル帝国ごときに利用され、オマケに小型荷電粒子砲まで開発するとは!!」

「中将！ 私が出てオメガレックスを倒します！」

「だが、オメガレックスには飛行ユニットが装備され、空中にいるんだぞ！それに小型荷電粒子砲を持つ親衛隊にはどうするのだ？」

「俺がやります！」

その時、司令室に入ったリセルが口を開いた。

「お前が行くというのか？」

「はい、オメガレックスも親衛隊も全て俺が殲滅します！」

リセルの発言にアルドリッジ大佐が、

「無茶だ！ 1人で行くのは危険過ぎる。下手したら、死ぬぞ!!」



「あの程度の部隊など、俺一人で十分です！ それとも俺の腕が信用できないとでも!?」

「わかった！ ディアス准将、ネオデスマタル帝国の討伐を命じる！」

「了解しました！」

シーガル中將の命令を受けてリセルが出撃しようとする中、ユリスは司令室のドアをちよつと開けて悲しそうな表情でその様子を見ていた。

そして、リジエネレーシオンキューブを基に開発した小型の高性能な発信器を作り、その反応を頼りにZG完成のオーパーツを集めるためにドクターマイルスはグレッツゲル准將と共に専用のステイレイザーに乗って南極を歩いてきた。後ろにはダークライガーとディロフオスG3、キャノンブルG3、キャタルガG3がついていった。グレッツゲル准將は、

「ドクター、ホントにここにあるんですか？ いくら性能が高いとはいえ、リジエネレーシオンキューブなど、所詮過去の遺物でしょう！」

「いや、過去の遺物とはいえ、リジエネレーシオンキューブだけは我々の想像を遥かに越えるものだ！ こいつがあれば、ZGの完成は目と鼻の先だ！」

その時、発信器の反応が強くなり、

「止まれ！」

ドクターマイルスの指示で止まる部隊、

「ここだけ、反応が強い！ キヤタルガG3とデイロフォスG3はマシンブラストして直ぐにこの付近を掘れ!!」

デイロフォスG3は装備している対空速射砲で氷を破壊し、マシンブラストしたキヤタルガG3がドリルジョーで氷を掘り進む。

一方、ガネストは飛行しながら、オメガレックスの荷電粒子砲で通り道にある都市を手当たり次第に破壊しながら進んだ。

その時、目の前にクリスのジャック率いるカプター、クワーガ、クワガノス隊による盟軍の空軍が現れた。

「あれ、あれって噂のソニックバードじゃん！ まさか、あれが来るとはね。いいね！ ちよつくら相手してやって！」

ガネストの命令を受けたキルサイスG4がジャックたちに襲いかかってきた。それ

を見たクリスは、

「カプター、クワールガ、クワガノス隊はキルサイスを、俺はスナイプテラとオメガレックスを相手にする！」

「了解しました！」

カプター、クワールガ、クワガノス隊がキルサイスG4の相手をしている中、ソニックバードはキルサイスの前を通りすぎ、オメガレックスとスナイプテラG4に向かって行つた。

目の前のスナイプテラG4は既にマシンブラストし、ジャックに向けて荷電粒子砲を放つた。ジャックはそれを避け、オメガレックスに向けて突進して行つた。コクピットのクリスはゾイドキーを取り出し、

「行くぞー！ デル！ 俺の魂と共に、進化 解放！ エヴォブラストー！！ スカイスラッシュー！」

しかし、オメガレックスは荷電粒子砲を撃つように見せ掛けてその態勢を止め、直ぐに後ろを向いて尻尾でジャックを尻ぎ払おうとする。思わぬ攻撃に驚いたクリスは何とか尻尾攻撃を避ける。しかし、オメガレックスは既に荷電粒子砲を撃てる状態になつていて、ジャックに照準を合わせた。

「オメガレックス、ファイヤー！！」

ジャックはオメガレックスの荷電粒子砲をギリギリでかわすが、片翼のラダーソードが荷電粒子砲に当たり、融解してしまった。

「ボクのオメガレックスが真っ直ぐしか撃てないと思った？ 残念。オメガレックス君はどの方面でも撃てるようになってるんだよ！」

「くそ、奴に一発いいの当てたかったが、どうやら、ジェノスピノと並ぶ伝説のゾイドは伊達じゃなかったようだが、俺はここで負けるわけにはいかねえ!!」

クリスはスミスの作った兵器をジャックに装備させた時のグラッドとの作戦の順序を教えられたことを思い出した。

「これは？」

「スミスが帝国が巨大飛行ゾイドを開発した時の場合を想定して予め作ったものだ！空中ユニットを装備したオメガレックスに対抗できるのはお前とジャックしかない！頼めるか？」

「それで、俺がやる作戦とは？」

「まずはお前とジャックの力でキルサイスとスナイプテラを倒し、オメガレックスをある場所に誘導させた後に飛行ユニットを破壊して、その場所に落とし、装備したあのミサイルを奴に当てるんだ！ やれるな？」

「なあに、空の戦闘は任せろ!!」

「ウオオー!!」

「玉砕の覚悟で、ボクを倒すつもり？　面白い。相手してあげるよ。オメガレックス!!」

ガネストの言葉に従い、オメガレックスはジャックに照準を合わせ、荷電粒子砲を発射する態勢を取った。

ジャックとオメガレックスが空中で戦っている中、南極でキャタルG3とデイロフオスG3がかなり掘り進んだ中、驚くべきものが現れた。

紫のラインの入ったゾウ型のゾイドが紫色に輝くゾイド因子と共に氷漬けになっていた。それを見て驚くグレッツゲル准将、

「こ、これは!？」

「そうだ！　これがZGの忠実なる眷族ゾイド、ZFだ!!」

「ZF?」

「いわば、我が親衛隊のようにZGを護衛するためのゾイドだ。しかし、これは驚いた！　このZFは石化もしていない。つまり、こいつは生きてまま氷漬けになったのだ！　しかも何千万年も経っているにも関わらず、ここまで保存状態が良いとは！　あの時、初めて復元した試運転のプロトタイプより、完成度が高い。

こいつを帝都に持って帰れば、完全なZ Fが復元し、Z Gのパーツを揃えることができるー！」

「よし、そうと決まれば、早速この氷を…」

「待て!!」

「何だ?」

「こいつは生きたまま氷漬けになっているのだ。もし、このまま氷を砕いたら、そのまま目覚める可能性が高い! それにこいつには通常の人間を即死させる毒を持っている。こいつはこのまま氷漬けのまま運搬しろ!」

「しかし、大丈夫なのか? 移動中に氷が溶けたらとか。」

「心配は要らん! キャタルG3の運搬車には冷凍装置がついていて、大型のものでも入れられるサイズだ。何の心配も要らん!」

「それなら、あんし…、ん?」

「どうした?」

そこにゾイドが走る足音がした。

「援軍のゾイドか?」

「いや、そんなはずは…」

そこに現れたのはシーザーだった。

「ライジングライガー。」

「ドクターマイルス、レイルを返してもらおうぜ！」

「レイル？ ああ、ダークマスターのことか！ いいぞ、返してやる。ただし、ダークライガーに勝つたらな！」

ドクターマイルスの指示で前に出るダークライガー、

「ドクター、まさか、あいつ一人でやらせる気ですか？」

「心配は要らん。ダークライガーにはライジングライガーのあらゆる戦闘データが入っている。奴が負ける確率は低い。ま、仮にあのライガーに負けるようでは、ダークマスターもそれまでだがな！」

対峙するシーザーとダークライガー、シーザーはウィルに何か言いたいかのようにならずき、

「ああ、わかつている！ 大事な人を失ったギルラプターとエマのためにあの黒い偽物を倒す!! 行くぞ、シーザー!!」

グオオー!!

シーザーは声高に咆哮を上げ、ダークライガーに向かって行った。

To be continued

## 第33話「南極の決戦」

荷電粒子砲を発射しようとするオメガレックスに突進するジャック、オメガレックスが荷電粒子砲を発射したその時、ジャックはすれすれで方向を変え、そのままオメガレックスを通過した。それを見たガネストは、

「あれ、もう諦めたの？ 残念だな。もうちよつと楽しみたかったのに！」

しかし、オメガレックスを横切ったジャックは荷電粒子砲を撃とうとしたスナイプテラG4を一刀両断した。それを見たガネストは、

「へえ。まさか、ボクに当てると見せ掛けてキミを狙おうとしたプテラ君を狙うとは！ 面白いね。」

「よし、よくやった。ジャック！ 最初はあのデカぶつに一発お見舞いさせる予定だったが、このまま、残りのスナイプテラを倒すぞ!!」

クリスはグラッドから一連の作戦を聞かされたことを思い出した。

「奴を南極に誘導して氷漬けにする!？」

「そうだ！ 前のジェノスピノ同様に火山に落とす作戦も考えたが、奴にはあの荷電粒子砲がある。それで火山に穴を開けて脱出する可能性も無くない。」



そこで、お前とジャックの力を見込んで、奴を南極にまで誘導してその飛行ユニットを破壊し、落ちたところをジャックに装備しているPGM-11をオメガレックスの荷電粒吸入ファンに撃ち込み、奴を凍らせて海に沈める！ やってくれるか？」

「出来ないことはないが、どうやって奴を誘導させる？ 前みたいに挑発作戦でいくのか？」

「いや、奴は戦争を自分が楽しむためのゲームと思つて楽しむ奴だ！ それに三世と同じなら、生半端な挑発は通用しないし、面白くないと思つて見向きもしないだろう。」

「では、どうする？」

「奴を楽しませるのさー！」

「楽しませる？」

「そうだ！ さっき言ったように奴は戦争をゲームだと思つて楽しんでる。だから、奴にお前が骨のある相手だと見せつけて、奴の獲物をお前に集中させるのさー！」

「なるほど、俺を奴の極上の餌にさせて奴を罠にはめるってことだな！」

「危険な賭けでもあるが。やれるか？」

「もちろん!!」

「奴の気を俺に集中させるには、俺とジャックが強者だということを見せつけなければならぬ。そのために親衛隊のスナイプテラとキルサイスを倒す！ 行くぞ、

ジャック!!」

一体のスナイプテラG4がジャックに向けて荷電粒子砲を撃つ。すかさずジャックはそれを避ける。スナイプテラG4は荷電粒子砲を撃った後、口内から煙が漏れ、両翼のガトリングをジャックに撃ち込む。それを見たクリスは、

「やはり、いくらコンパクトに改造した荷電粒子砲とはいえ、まだプロトタイプ！ 連射は出来ないようだ。」

ジャック！ 奴がもう一度荷電粒子砲を撃つ直前を狙うぞ!!」

キユオオ〜!!

クリスの言葉に応えて咆哮を上げるジャック、スナイプテラG4がチャージが完了したようにもう一度荷電粒子砲の照準を合わせる。

しかし、ジャックは片翼のスカイスラッシュでそれを逃さず、スナイプテラG4に狙い、その頭部を一刀両断し、爆発炎上するスナイプテラG4、

「よし、残るは後一体だ!」

もう一体のスナイプテラG4がジャックに照準を合わせ、ジャックは3体目を倒した時と同じ方法でスナイプテラG4に攻撃しようとしたその時、スナイプテラG4の背後から荷電粒子ビームが来、それを見たクリスは、

「いかん！ 避ける、ジャック!!」

ジャックはクリスの指示に従い、それを避け、スナイプテラG4は荷電粒子ビームで一瞬で跡形もなく粉々になってしまった。荷電粒子ビームを放った先にはオメガレックスがいた。

「何だか、随分楽しんでたから、ボクも混ざろうかと思っただけど、惜しいね！ せつかくスナイプテラの背後から狙ってやったのに外しちゃった。

でも、キミ、結構面白いよ！ 今度はボクと遊んでよ！」

クリスはかかったかのような表情をし、

「ようやく、奴の矛先が俺に向かったか！ 後は作戦通りいっただけだ！」

「ん？ どうしたの？ ボクと遊ばないの？」

「ああ、望み通りお前の遊び相手になってやるぜ！ だが、俺がお前にもつといい遊び場を案内してやる!!」

ジャックはその場を離れ、飛び去る。それを見たガネストは、

「もつといい遊び場か。いいね！ じゃあ、その作戦に乗ってあげるよ！」

オメガレックスの背後の飛行ユニットがジェット噴射し、そのままジャックの後をついた。

そして、ベケット少佐率いる親衛隊の地上部隊は新帝国に属する都市の制圧に向かっていた。小型荷電粒子砲を搭載したバズートルG4の一斉砲撃で都市は一気に壊滅し

た。それを見たベケット少佐とアーミテージ大尉は、

「もうすぐで新帝国の反乱軍の本拠地に着けるわね。」

そして、残りは同盟軍と旧共和国の反乱軍を叩き潰す!」

「だが、余りに歯応えが無さすぎてつまらないな!」

「ま、我が帝国に歯向かえる愚か者なんていないわ! ん?」

その時、目の前にデルが現れた。

「あいつはあの時の小僧!!」

「へえ。意外ね! まさか、ここであの小僧が来るなんて。しかもあたしたち相手に1人でなんてね!」

リセルは2人を睨み付け、

「貴様らはここで殺す!!」

それを聞いたベケット少佐は笑いこけ、

「あたしたちを殺すですつて! ハハハハハ! 面白い! たった1人で我ら偉大なる皇帝陛下に仕えるギャラガー親衛隊に立ち向かおうなんてね!

いいわ、身のほど知らずつてやつを教えてあげる! バズートル隊、撃てえ!!」

4体のバズートルG4が一斉に小型荷電粒子砲をデルに向けて砲撃した。しかし、デルは瞬時に避け、マシンブラストし、

「フルハウリングショット!!」

デルのフルハウリングショットがバズートルG4の小型荷電粒子砲を引き裂き、バズートルG4は爆発炎上した。それを見たベケット少佐は、

「へえ。意外とやるじゃない! 相当腕を上げたようね。でも、この数相手に戦えるかしら?」

今度は後方から無数のキルサイス部隊がマシンブラストして現れ、デルに襲いかかった。

「フルハウリングショット!!」

しかし、デルはフルハウリングショットで全てのキルサイスG4隊を吹き払った。

「あら、これは予想以上ね! 以前、あたしたちと戦った時は対した戦闘力じゃなかったけど。もしかして我が帝国への怒りの力ってやつかしら!」

「なあ、ベケット少佐! こいつは俺に任せてくれねえか? 歯応えの無い奴らばかりで丁度退屈してたところだ!」

「そうね、いいわ! 遊び相手になってちょうだい!」

ベケット少佐の了承を得たアーミテージ大尉のステイレイザーG3はデルに向かって突進した。

そして、南極では、シーザーとダークライガーが激しい戦いを繰り広げていた。

「ライジングバーストブレイク!!」

「ダークバーストブレイク!!」

ガキン!!

互いのタテガミブレードがぶつかり、両者一步も譲らない姿勢を取ったが、徐々にダークライガーが押していった。

「う…、く…、シーザー、頑張れ!」

その様子を高みの見物として見ているドクターマイルスとグレッゲル准将は、

「ドライパンサーとジェノスピノを破ったあのライガーを押しなんて!」

「当然だ! あれは私が作った最強のライガーだ! あれにはライジングライガーの

あらゆる戦闘データが蓄積されている。ライジングライガーに勝ち目はない！」

ドクターマイルスの乗っているステイレイザーのкокピットから通信が入る。

「ドクター、例のZFの引き上げ完了しました！　いかが致しましょう？」

「お前たちはそのままそいつを帝都まで運べ！　私たちはあのライガーの相手をする。」

「了解しました！」

兵士たちは凍り付けのZFをキャタルガのキャリアーカーに乗せ、そのまま立ち去った。ぶつかり合うシーザーとダークライガー、ダークライガーはシーザーを風ぎ払い、シーザーはA—Z機関砲をダークライガーに撃ち込むが、ダークライガーは無傷だった。

「レイル、お前、それでいいのかよ！　あんな奴らの言いなりになって、それでいいのか!!」

しかし、кокピットにいるレイルは無言で、ダークライガーは横に装備しているミサイルをシーザーに撃ち込んだ。ミサイルが直撃し、吹き飛ばされるシーザー、

グオオー!!

「ウワアー!!」

シーザーとダークライガーが戦っている上空では、遂にジャックがオメガレックスを

南極にまで誘導した。

「さあ、ここがお前の遊び場であり、お前の墓場だ!! 喰らえ、スカイスラッシュ!!」  
ジャックが片翼のラダーソードでオメガレックスにぶつけようとする。それに対し、オメガレックスは後ろを向き、尻尾で尻ぎ払おうとする。ジャックはそれを瞬時に避け、オメガレックスの片翼を切り裂こうとしたその時、オメガレックスがジャックのラダーソードを噛み付いた。離そうとしないオメガレックス、

「残念だったね! ボクを南極にまで誘き寄せてオメガレックスの飛行ユニットを破壊して落つことそうとするつもりらしいけど、ボクはそんなに甘い奴じゃないんだよ! ボクの分身であるあの出来損ないの兄貴よりもね。」

「(馬鹿な、最初から作戦を読んでいただと!)」

「見え見えなんだよ! というか、今のボクとオメガレックスを倒すにはそれくらいの策しかないからね!!」

バキン!!

オメガレックスはジャックのラダーソードとA-Zウイングソードをそのまま噛みきった。遂にジャックは両翼のラダーソードとA-Zウイングソードを失い、スカイスラッシュが放てなくなってしまった。ガネストは無邪気な表情をしながら、

「これで、キミの自慢のエヴォブラストは使えなくなつたも同然! 後はゆっくりキ



ミ痛め付けて料理するよ！」

「くそ、これで、使える武器は2連速射機関銃しかない！ オマケにスミスが装備させたPGM-11はまだ使うときではない。」

ジャックは2連速射機関銃をオメガレックスの飛行ユニットに撃ち込むが、オメガレックスはびくともしない。

「フフフ、そんな攻撃、蚊に刺される程にも感じないよ！ オメガレックス！ ファイヤー！！」

オメガレックスはジャックに荷電粒子砲を撃ち込む。ジャックはそれを避けるが、オメガレックスは荷電粒子砲を撃ちながら、なんとそのまま1回転した。

「馬鹿な！ 荷電粒子砲を撃ちながら回転するなんて!？」

ジャックはそれも避けようとするが、オメガレックスの突然の行動を読めず、片足を撃ち抜かれてしまう。

キシャアー!!

足を撃ち抜かれ、悲鳴を上げるジャック、

「フフフ、もうキミは羽をもがれたチキン同然だよ。諦めてボクの軍門に下つたらどうだ？」

「くそ！」

ジャックは尚も2連速射機関銃をオメガレックスに撃つが、

「勝てないと知っても戦おうとする姿勢嫌いじゃないよ！ でもそういうのは世間で  
蛮勇って言うんだよ！ オメガレックス！」

ガネストの言葉に従い、再び荷電粒子砲を放つ姿勢を取るオメガレックス、クリスは  
諦めたかのような表情をし、

「くそ、どうやら俺もここまでのようだな。」

「オメガレックス！ ファイ…！」

「アブソルートショット!!」

突然、雲を切り裂いた謎の一撃がオメガレックスの荷電粒子吸入ファンを撃ち抜い  
た。荷電粒子吸入ファンを撃ち抜かれ、体勢を崩すオメガレックス、

「何!? 一体何が起こった!」

「今だ!!」

ジャックは音速のスピードを出して、オメガレックスに向かって2連速射機関銃を撃  
ち込みながら突進し、ソニックウイングだけで、オメガレックスの飛行ユニットを破壊  
した。

オメガレックスはそのまま地上に落下した。クリスはそれを追う前にオメガレック  
スを攻撃した相手を捜した。上空には赤いスナイプテラらしき姿があり、スナイプテラ

はそのまま飛び去った。

「あのスナイプテラ……まさか！」

南極では、ダークライガーの猛攻を受け、シーザーの身体はボロボロになっていた。高みの見物をしているグレッツゲル准将とドクターマイルスは、

「どうやら、勝負あつたようだな。」

「そのようだな。さあ、ダークライガー！ 奴に止めを差すのだ!! ん?」

その時、上空から飛行ユニットを破壊されたオメガレックスがシーザーとダークライガーに向けて落下してきた。シーザーとダークライガーは間一髪で避けた。グレッツゲル准将とドクターマイルスは驚き、

「陛下!!」

オメガレックスはそのまま起き上がり、

「痛てて、思わぬ邪魔が入ったが、まだ終わらないよ！」

ガネストはシーザーを見つけ、

「あれ、キミ、あのライガー君？　これは丁度いい！　ジェノスピノを倒したキミの実力を見せてもらおうよ!!」

オメガレックスは足でシーザーを踏み潰そうとするが、シーザーはそれを避ける。

「くそ、レイルを正気に戻すために来たのに、まさか、オメガレックスが現れるなんて！　でも、こいつも止めなければいけない！　こいつがいると、また多くのゾイドと人々が苦しめられてしまう。」

行くぞー！　シーザーー！　ライジングバーストブレイク!!」

しかし、オメガレックスはそれを足で止め、

「思った以上に単調な攻撃だね！　そんなんでこのボクを倒せると思ったの？　オメガレックスはそのままシーザーを蹴り倒す。」

「シーザー、もう一度だ！　ライジングバーストブレイ…」

しかし、オメガレックスはシーザーのタテガミブレードを喰わえた。

「うーん、どうせなら、万全の状態で来て欲しかったけど、そんなボロボロじゃあーね。それにそんなワンパターンの攻撃じゃ、つまんないよ！」

そう言って、オメガレックスはシーザーのタテガミブレードを噛みきった。そのまま足で踏みつけ、シーザーを踏み潰そうとするオメガレックス、

「キミ、ホントにそんなんでジェノスピノを倒したの？ あ、もしかしてただの他力本願だったりして！」

「俺のシーザーを馬鹿にするなー!!」

シーザーは力を振り絞り、オメガレックスの足を強引に上げ、そこから脱出した。

「へえ。なんだ。やればできるじゃない！ でも、これはどうかな？ 兵器 解放

！ マシンブラスター!! オメガレックス！ ファイヤー!!」

シーザーに向けて荷電粒子砲を放つオメガレックス、シーザーは残り少ないスタミナで避けようとするが、間に合わず、右半身を直撃し、シーザーの右半身のアーマーが溶解して砕け散ってしまった。

「ウワァー!!」

グオオー!!

荷電粒子砲を喰らって悲鳴を上げるウィルとシーザー、

「やれやれ、意外とあっけなかったね。 じゃあ、次で終わりにするよ！ オメガレッ

クス…」

「キングオブクローブラスト!!」

「グランドハンマー!!」

その時、キングとゴールドが現れ、2体の攻撃を喰らってオメガレックスが怯んだ。

「あれ、これは驚いたね! ボクの前世を倒した伝説のワイルドライガーに最強のグラキオのボルカノまで来るなんて!」

「キングの野生の勘で捜したが、まさか、ここにいるとは思わなかったぜ!」

「ストーム、お前はウィルとシーザーを頼む。オメガレックスは私が引き付ける。」

「だが、クルーガー、あのオメガレックスはゴールドだけでも太刀打ちできる相手じゃないぞ!」

「私のゴールドがそう簡単に倒されるたまでも思うのか?」

「そうだな! わかった! 俺はウィルとシーザーを安全な場所に運ぶ。それまで何とか持ちこたえてくれ!」

「よし、行くぞ! ゴルド! グランドハンマー!!」

ゴールドのグランドハンマーがオメガレックスに直撃するが、オメガレックスはびくともしない。

「さすが、マグマに耐えうる装甲を持つ最強のグラキオの亜種のボルカノだ。でも、ただのグランドハンマーでこのボクを倒せるとでも?」

「これで終わりとも思ってたか!」

ゴルドはそのまま装備しているキャノン砲を撃ち込む、  
「グランドハンマー!!」

そのまま再びグランドハンマーを喰らわせた。近距離でのキャノン砲撃ち込みとグランドハンマーで流石のオメガレックスも足を崩すし、体勢を崩していく。

「もう一度、喰らえ! グランドハンマー!!」

「このボクが二度も同じ技を喰らうと思ったのかい!？」

オメガレックスは攻撃を喰らう寸前、ゴルドの首を喰らいついた。身動きがとれなくなるゴルド、ゴルドはそのままオメガレックスに蹴り倒された。

「キミのグラキオは確か、マグマに耐えうる装甲を持っているんだっただね。じゃあ、荷電粒子砲に何発耐えられるかな? 兵器 解放! マシンブラスター!!」

身動きの取れないゴルドに向け、荷電粒子砲を撃つ体勢を取るオメガレックス、そこに上空からジャックが猛スピードでオメガレックスに向かって落下し、

「チャンスはこの一度しかない! 奴が荷電粒子砲を撃つ寸前にPGM―11を奴の荷電粒子吸入ファンを撃ち込む。行くぞ! ジャック!! この一撃に全てを込める!」

「終わりだ。オメガレックス! ファイ!」

「キングオブクローブラスト!!」

そこにキングがオメガレックスに攻撃し、オメガレックスは体勢を崩す。

「今だ！ PGM発射!!」

キングがオメガレックスに攻撃した瞬間を狙い、クリスはジャックに装備されているPGM―11をオメガレックスの荷電粒子吸入ファンに向けて発射した。PGM―11が荷電粒子吸入ファンに直撃し、オメガレックスが苦しみ出した。

ギユオオー!!

「何だ？ 今度は一体何だ！何!!」

直撃した荷電粒子吸入ファンが凍り付くと同時にオメガレックスの身体が凍り付いていった。凍り付くオメガレックスを見てストームは、

「なるほど、PGM―11には液体窒素が含まれている。極寒の南極に誘き寄せて奴に撃てば、南極のブリザードで一瞬で凍り付くつてわけか！ 流石、グラッドとスミスだな！」

PGM―11を撃ち込んだ後、倒れこむジャック、

「クリス、ジャック、大丈夫か!？」

全身が凍り付く中、ガネストは、

「貴様ら、よくもこのボクとオメガレックスを！ だが

、この一撃だけは……!」

ガネストはコクピット内で、動かないレバーを強引に動かし、オメガレックスは尚も



荷電粒子砲を撃つ体勢を取る。

「まさか、あいつ！ あの状態でも荷電粒子砲を撃つつもりか!? そんなことしたら、オメガレックスもただじゃすまないぞ！」

「貴様らはここで殺す！」

「グランドハンマー!!」

その時、ゴルドのグランドハンマーがオメガレックスの足場を破壊し、オメガレックスは体勢を崩し、海に落ちようとしていく。

「く、くそー！」

しかし、オメガレックスは荷電粒子砲を撃つことが出来ず、そのまま荷電粒子砲の口内まで凍り付き、オメガレックスのバイザーの目の色が消え、そのまま海に沈んでいった。グレッゲル准将はオメガレックスを助けようと動くが、

「陛下ー!!」

「待て、グレッゲル准将！」

「何故だ? ドクターー！」

ドクターマイルスの待ったをかけると同時にグレッゲル准将とドクターマイルスのステイレイザーの身体も徐々に凍り付いていく。

「時間切れだ！ 我々も撤退するぞー！」

「ドクター！陛下を見殺しにするのか！！」

「今の我々では、陛下をお助けするのは無理だ。ましてや、我々では奴らには敵わない！」

キングたちを見たグレッツゲル准将は、

「ち、」

グレッツゲル准将とドクターマイルスはそのままその場を

去った。

「クルーガー、シーザーとジャックの傷が深い。早く治療をするために基地に戻るぞ！」

「ああ、」

ゴルドはシーザーやジャックを運び、キングと共に南極を去った。

四天王の一人、デーニツツ中将が管轄する西方面の辺境の村に、突然地面が揺れた。村人たちは、

「何だ？ 地震か！」

その時、突然、地面から回転する巨大なノコギリが現れ、地面と村中を削り取っていた。村人たちはパニックになって村から逃げ惑い、山のところまで逃げた。

村がすっかりなくなり、巨大な穴が現れた。そこから2本の前足が穴の開いた地面を掴み、穴から巨大なゾイドが現れた。

ギユオオー!!

巨大なゾイドの咆哮が村中に響き渡った。それを見て恐怖した村人たちはそのまま逃げていった。

地面から現れたのは、かつてウイルとシーザーに敗れ、大火山デスロツキーに沈んで爆発によって火口に飲み込まれたジェノスピノだった。ジェノスピノは生きていた。

地面から現れたジェノスピノには身体のうちこちにひびの割れた跡があり、右目にはバイザーが破壊され、目が剥き出しになっていた。

ギユオオー!!

地上に出たジェノスピノはようやく出られたかを言わんばかりに目一杯咆哮を上げた。

T o b e c o n t i n u e d

## 第34話 「超進化、シーザー」

新帝国の派閥の都市で、デルとステイレイザーG3が激しく戦闘を行っていた。

「フルハウリングシヨット!!」

「プラズマウォール!!」

デルとステイレイザーG3のマシンブラストがぶつかり合い、両者とも一步も譲らない姿勢を取った。その様子を見ていたベケット少佐は、

「へえ。以前はアーミテージでも手も足も出なかったのに、よくやるわね、あの子。ん？」

その時、コクピットから通信が入った。

「本国の元帥閣下からの緊急通信? 全軍を直ちに撤退せよ、ですって? 一体どう

いうことなの? とはいえ、元帥閣下の命令に従わないわけにもいかないね。アーミテージ、一時撤退よ!」

「何? どういうことだ! せっかく盛り上がってきたのに!」

「本国の元帥閣下からの緊急命令よ! 従うのよ!」

「ちっ!」

アーミテージ大尉のステイレイザーG3はそのまま後退し、地上部隊の親衛隊もベケット少佐の命令を受けて撤退していった。それを見たりセルはそのまま追っていた。

新帝国の仮本拠地で、一室で閉じ籠っているエマに突然、胸にズキツと痛みが走り、南極でシーザーがオメガレックスの荷電粒子砲を喰らって右半身のアーマーを破壊され、苦しむビジョンを見た。

「シーザー!」

エマは急いで部屋から出て、ユリスのいる部屋まで行った。

「ユリスさん!」

「エマ、どうしたの？」

「シーザーが！ シーザーが!!」

「え？」

新帝国の仮本拠地の司令室でシーガル中将与アルドリッジ大佐が戦況の様子を見ていた。司令室の兵士は、

「東方で我が新帝国派のレジスタンスがネオデスマタル帝国軍に鎮圧されました！」

「ディアス准将は何をやっている？」

「現在、地上部隊のギャラガー親衛隊と交戦中です。 ん？ シーガル中將、親衛隊と各地のネオデスマタル帝国軍が突然撤退を始めました！」

「何！ どういうことだ？」

「わかりません。ですが、全軍が撤退していくようになりました！」

「これは、どういうことだ？ あれだけ、我が新帝国軍を圧倒していたネオデスマタル軍がいきなり退却するだと！ オメガレックスはどうなっているのだ？」

「現在、確認はとれていませんが、南極に落下した後、消息不明となっています。」

「何だと！（これは、いよいよよめぐつてきたチャンスだ！） よし、直ちに全軍を出撃し、帝都メガロポリスに総攻撃をかける！」

その時、司令室にユリスとエマが入り、

「これは、これは、メルビル二世陛下に侍女のコンラッド嬢。いかがなされました？」

「シーガル中將、私たちを同盟軍の本拠地に連れていってください！」

それを聞いたシーガル中將は慌てて、

「何をおっしゃるのです？ 皇帝陛下！ あなたは我が新帝国の象徴として君臨するためにはいけない存在なのです！ そのあなたがあのような組織に向かうなど言語道断！ それに軍のことは我々に任せて陛下は部屋でごゆっくり……」

「シーガル中將、お願いではありません！これは命令です!!」  
「な！」

「私は真帝国のハンナ・メルビルの血を引いていたためにあなたに無理やり皇帝に立てられ、何も出来ず、ただ、あなたのやり方に従ってばかりいましたが、ですが、それでも私はこの新帝国の皇帝として私の出来ることをしたいんです！」

きっと、私の先祖もそうしてきたはずです。シーガル中將！ 新帝国皇帝メルビル二世としてあなたに命じます！ 私たちを同盟軍の本拠地へ連れていきなさい!!」

ユリスのキリツとした表情を見てシーガル中將は言葉を返せなかった。



ベケット少佐率いる親衛隊とデーニッツ中将、ルメイ大将率いる西方、東分部隊が帝都メガロポリスに集結し、再び宮殿で、ドクターマイルスとベケット少佐、アツカーマン中将を除く四天王がタツカー元帥の元に集まった。ベケット少佐はタツカー元帥に、「元帥閣下！ 一体どういふことなのです？ もうすぐ、反乱軍の鎮圧がまもなくという時に！」

「実は諸君、非常に悲しい知らせが届いた！ 皇帝陛下がオメガレックスと共に反乱軍に敗れ、南極の海に沈んでしまわれたのだ!!」

それを聞いた一同は驚愕した。ルメイ大将は口を開き、

「なんと言うことだ！ ギャラガー四世陛下が先帝陛下に続き、反乱軍の手に……ん？ とところで、ドクター！ あなたは現地にいたはずでは？ 何故、陛下を助けなかったのだ!？」

「私はあくまで先帝陛下に命じられたZG完成のためのオーパーツ回収に向かったままで、そもそも皇帝陛下があそこに来るとは予想もしませんでしたし、ましてや、我々の戦力では、反乱軍には太刀打ち出来ませんでした!」

「貴様! よくもおめおめとそんな口を!!」

タツカー元帥は待ったをかけ、

「止さないか。」

同時にデーニッツ中將も、

「そうですね! ドクターの言うことに一律あります。あくまでドクターは先帝陛下の悲願のために動いたままで、任務を達成しました。それに反乱軍があそこに来るとは、さすがに予想外のことですし。」

「ちっ!」

2人の言うことを聞いて、ルメイ大將は少し納得いかない表情をした。

「ところで、デーニッツ中將! 私に報告したいことがあるそうだが、一体なんだ?」「はい、実は私の領域にジェノスピノが発見されたと、部下から報告がありました!」「なんだ?!? では、先帝陛下は生きておられるのか!!」

「それはまだわかりませんが、ただ、ジェノスピノは右目のバイザーが破壊されている

こともあつてか、暴走を続け、私のデイメパルサー、デイロフオス部隊が取り押さえています。未だ苦戦しているとのことだ……」

「ジェノスピノには先帝陛下が乗られているはず、いくら、バイザーが破壊されたとはいえ、先帝陛下の技量で押さえられるはずなのに…… まあ、いい！ デーニッツ中将は直ちにジェノスピノを取り押さえ、回収しろ！」

グレッゲル准将は再び南極に向かい、皇帝陛下とオメガレックスを搜索するのだ！」

「了解しました！」

そこにドクターマイルスが口を開き、

「元帥閣下！ ジェノスピノ回収に私も同行させてよろしいでしょうか？」

「何故だ？」

「ジェノスピノは元々、私が復元したものの、あれに一番詳しいのは私ですから、直ぐに取り押さえて回収します。」

「そうか、なら、ドクターはデーニッツ中将と同行し、ジェノスピノを回収しろ！」

「了解しました！」

アッカーマン中将のいる南方総督府、ステゴゼーゲMk-IIに乗るコナー少佐が総督府に戻り、アッカーマン中将のいる部屋に入った。

「中将！」

「コナー少佐か！ で、状況は？」

「皇帝陛下の映像の効果が効いたのか、我が領域にいる新帝国の派閥は次々と我が帝国に降伏してきました！」

「そうか、これで、我が帝国に齒向かう新帝国派の反乱軍のほとんどは鎮圧したということだな！」

例のシユバルツ中佐もよく働いてくれたようだな！」

「はい、彼が交渉相手になってくれたおかげで、上手く丸く収まりました。」

「これで、残りは反乱軍の本体の同盟軍と新帝国、旧共和国派のみとなったか。」

「ただ……」

「ただ、なんだ？」

「実は先ほど、皇帝陛下が反乱軍に敗れ、オメガレックスと共に南極の海に沈んでしまわれたとの報告もありました！」

「な、何!?! それは本当か?」

「まだ、報告だけで、確かなことは……」

「なんとということだ! ところで、カーター大佐との連絡は?」

「未だ、連絡がつかない状態ですが。」

その時、カーター大佐のスナイプテラが総督府に離陸した。カーター大佐はスナイプテラから降り、アツカーマン中將のいる部屋に向かい、入った。

「カーター大佐、ただいま、戻りました!」

「一体、何をやっていたのだ?」

「スナイプテラで、反乱軍の監視と制圧を行っていました!」

「その割には随分遅かったじゃないか! まあ、いい。とにかく、君には私の許可が出るまで単独行動はするな! それに日頃の疲れもあるだろうから、ゆっくり休みたまえ!」

「はい!」

「まあ、君が不在の間、空きが出た君のキャノンブルの代わりにライダーが見つかったがね!」

「えー」

それを聞いたカーター大佐は驚愕した。

オメガレックスを南極に封じた後、ウィルたちは同盟軍本拠地に戻り、基地内でスミスの指揮の元、シーザー、ジャック、ゴルドの修理を行っていた。ストーム、クリス、クルーガーがスミスの横でその様子を見守る中、グラッドが現れた。

「ドクター、シーザーたちの様子は？」

「ゴルドは軽傷、ジャックはラダーソードが破壊され、羽と足がボロボロだが、命に別状はない。」

ただ、シーザーは直撃とはいかなくても、右半身を荷電粒子砲で丸々、A-Z機関砲

と共に破壊されてしまったため、修理にはかなり骨が折れる状態だったところだ。」

「やはり、オメガレックスの荷電粒子砲の威力によるダメージが大きいか…、だが、何にせよ、オメガレックスは封じた！ これで帝国の戦力はかなり落ちた。シーザーが出れない代わりに俺たちだけで何とか出来るだろう！」

「しかし、シーザーの存在が大きかったから、同盟軍はここまでこれたし、それにエマちゃんがこのにいれば、シーザーの傷も治せるじゃろうし…」

「そう悲観的になるな！ 誰かが欠けるなら、俺たちがその欠けた部分を補えばいいんだから！ とところで、ウィルは？」

「自室で引きこもっているよ！」

「まあ、今回はあいつが勝手に単独行動をしたからな。 ストーム、リーダーで世話役のお前もちゃんとしてくれないと！」

「まあ、そう言うな。 今回は仮に俺が引き留めてもどうせ、出撃しただろうし。」

そこにジョンがドタバタと急いでグラッドたちの元に行き、

「コマンダー！ 大変です!!」

「一体、何があった？」

「西方付近にジェノスピノが現れたとの報告がありました！」

「何!? ジェノスピノが！ まずいな。 オメガレックスを封じて、シーザーが出撃

出来ないこの状態でジェノスピノが再び帝国の手に渡つたら、ヤバいことになる！

仕方ない！ ストームは基地の司令を、クルーガーとジョン、スミスは基地の警備を任せる！ 俺はケンや残りのメンバーと共にジェノスピノ回収に向かう帝国軍を迎え撃つ！」

「ですが、コマンダー！ 私もついていきます！」

「お前はここのところ、出撃しっぱなしだから、少しの休息も必要だ！ それに今回はどちらかというど戦闘に強い者じゃないと無理だ、お前はここで基地を守ってくれ！

後、スミス！ お前の自慢のスレイマーズも貸してもらおうぞ！」

「もちろん、OKじゃぞ！ あいつらはワシが鍛えた最強の男たちじゃからな！」

「よし、安心した！ 最近、お前たちばかり出撃してあいつら基地の警備ばかりでやたら不平不満飛ばしていたからな。助かったぜ！」

「（コマンダー、そういうのはもっとオブラートに包みましょう。）」

「よし、ケン、アレックス、アッシュ、スレイマーズ、ガノンタス、ラプトル、ラプトリア、スコルピア、カプター、クワールガ、トリケラドゴス隊は俺についていき、全軍、ジェノスピノ討伐に向かう！」

用意するケン、アレックス、アッシュ、スレイマーズたちは、

「ようやく、基地の警備から抜け出せたか。これで私の腕が再び試せる。」



「へへへ、久しぶりに俺とウィーリーの頭突きでシャバに暴れまくるぜ！」

「その石頭で余計なものまで壊すなよ！」

「うるせえ！」

「ようやく、我らの出番か！ 腕が鳴りますね。リーダーー！」

「ああ、まるつきり出番のなかつた俺たちスレイマーズの見せ場がとうとうやって来たぜ！ ようし、お前ら！ ぜんぐ…」

「同盟軍、出撃する!!」

グラッドが先に口を開き、そのまま基地から出た。

「て、おおい！ せっかく我らの出番が来たのに、そりやねえだろう!! 待たんか、

コラーー！」

出撃する同盟軍を見たジョンにジェニファーが寄り添い、

「もしかして、悔しいの?」

「んなわけねえだろ！」

「もう、相変わらず、素直じゃないんだから！」

「全く、お前のからかいには付き合いきれねえぜ。」

その時、兵士がストームたちの元に行き、

「リーダー、ストーム！ ビッグウイングと新帝国軍が我が基地に向かっていきます！」

それを聞いたストームは、

「前みたいに俺たちに助けを求めて来たのか？ それとも…とにかく、全員、警戒体制を取れ！」

「は！」

ビッグウイングと過去の真帝国仕様の青いスナイプテラとキルサイスが同盟軍基地に離陸し、シーガル中将与アルドリッジ大佐が兵士たちと共に現れた。同盟軍兵士たちも銃を向ける中、ストームたちも現れ、

「さて、今回はなに用かな？ また、俺たちに助け船にでも求めて来たのかな？」

シーガル中將は歯をくいしばり、

「いえ、今回は我が新帝国皇帝メルビル二世陛下と侍女のコンラッド嬢からの要件でして…」

「ほお、つまり、結局自分たちの組織だけでは戦えないから、結局俺たちと共同戦線を組みたいと言うことだね！」

ストームの皮肉った言葉にシーガル中將は悔しがるように、

「うぐぐ…」

そして、後ろからユリスとエマが現れ、それを見たスミスは、

「おほう！ ユリスちゃん、エマちゃん！ ようやく、わしのところに戻って来てくれたのか！ 会いたかったぞ〜!!」

エマとユリスの元に行こうとするスミスをストックムはすかさず、手刀で気絶させ、

「あぐー！」

「ユリスに、エマ、よく戻ってきたな！ それにしても、一体何故？」

そこに悲しそうな表情をしたエマが、

「ストックムさん、お願いです！ シーザーの元に行かせてください！」

「シーザー…、てことは、もしかしてオメガレックスと戦ったことを知っているのか？

まだ、他の地域では知らされていないはずなんだが…？」

「とにかく、シーザーのところに！ お願いします!!」

「ん？ ああ、わかった。わかった！」

倉庫内に入り、エマはシーザーのとこれに向かった。

「待ってて、シーザー！ 私が治して上げる。」

ユリスは周囲を見渡し、

「あの…：ウィルはどこにいるんですか？」

「ああ、自室にいる。」

それを聞いたユリスはウィルのいる部屋に向かい、

「ウィル!」

「ユリスさん、どうしてここに?」

「あなたのシーザーを助けに来たの。」

「シーザーを?」

「うん、今、エマがシーザーの元にいるの。」

「エマが!」

ウィルは慌てて、部屋を出、倉庫に向かった時にエマがシーザーの身体を優しく撫でていた。

エマの左手がアーマーの剥がされたシーザーの身体に触れたその時、突然、シーザーの身体がオレンジ色に発光し、剥がされたアーマーが復元していき、シーザーの身体が再生していった。

それを見たウィルたちは驚愕し、スマスは興奮して、

「こ、これがゾイド因子の力か!」

「ゾイド因子の力?」

「なんじゃ、ストーム、忘れたのか? エマちゃんの前祖は身体の一部にゾイド因子を持った人なんじゃぞ! つまり、その力を受け継いでいるんじゃない!」

「知っているよ! 確かシーザーのかつての相棒なんだから! でもその人確か100

0年以上前の人だぜ！　なんで1000年以上前の先祖の力を受け継いでいるんだ？」  
「だからじゃ、ゾイド因子は他の生物とは極めて複雑な構造をした遺伝子情報だから、それがそのままその子供には伝わることはできない。」

「つまり隔世遺伝ってやつか。」

「そうじゃ、ましてや、エマちゃんの先祖のレオ・コンラッドはまだそのゾイド因子を浴びて力を得たばかりじゃったから、その力が覚醒するためには長い年月が必要じゃ！」

「てことは、そのゾイド因子の遺伝の集大成がエマってことか！」

「そういうことじゃ！」

「あ、そういや、ユリスの先祖も過去の真帝国皇帝で、同じゾイド因子を持った人だったな！　もしかして同じ能力を持っているのか？」

「あ、そういえば、グラッドの話では、ユリスちゃんのデイメパルサーがワイルドブラストした時、ファイナルマッドオクテットを書き消し、洗脳されたゾイドを正気に戻すマッドオクテットを放ったそうじゃが、もしかしたらそれもユリスちゃんのゾイド因子がデイメパルサーに新たな力を与えかもしれない！」

「そもそもファイナルマッドオクテットもデスレックスのDNAから得たものじゃしん！　ん？　そういや、エマちゃんとユリスちゃんの先祖のサリーちゃんやハンナちゃん

は確か絶世の美女とも聞いたことがあるぞ！

もしかして、エマちゃんとユリスちゃんはその先祖の容姿も受け継いだってことか！  
いやー、わし、なんて都合のいい時代に生まれてラッキーじゃあ！ まあ、どうせなら先祖のサリーちゃんやハンナちゃんにも会いたいが…」

ポカン！

ストームは呆れた表情でスミスを殴り、

「まあ、とにかくシーザーが治ったのは良かった。だが、問題はこのあとだ！ 俺たちはあのオメガレックスを封じたが、帝国にはダークライガーもいる。

あいつも倒さないと帝国の戦力は更に増大してしまう！」

「ストームさん、お願いです！ レイルを救ってください！」

「レイル？ ああ、帝国の皇子のアーネスト・ギヤラガーのことか！」

「リーダーなら、あのダークライガーに勝てるんじゃないですか？」

「確かに、そもそもあいつは洗脳されていたから、動きはだいたい読めるし、それにキングのワイルドブラスト状態でも勝てないレベルではなかったな！ よし、わかった。奴のことは俺に任せろ！」

「ちよつと待ってください！」

声を上げたのはワイルだった。

「ストームさん、ダークライガーは俺に任せてくれませんか？」

「ウイル：確かにシーザーは治ったが、奴にはシーザーの戦闘データが入っている。また、やり合ったら同じ目に逢うだけだぞ！」

「それでも、やらせてください！ あいつは俺じやなきや、駄目なんです！」

「とはいっても……」

「わしに任せろ！」

「ドクター、何か策があるのか？」

「来なさい！ 実はジャックに装備した武器の他にも取って置きとして残した最強の兵器があるんじゃない！」

ウイルたちはスミスについて別々の倉庫に入った。そこには見たこともないものがあつた。

「ドクター、これは？」

「これはあの惑星Ziの最強兵器である荷電粒子砲に唯一対抗できるといふ強力なシールド、Eシールドを発生させる装置じゃ!!」

「Eシールド？ まさか、荷電粒子砲が最強の矛とするなら、最強の盾はEシールドと呼ばれたあのEシールドか！」

「そうじゃ！ これをシーザーに取り付け、新たな改造でシーザーを生まれ変わらせ

る！」

「ていうか、お前、そんな便利なもんあるんだったら、何で、オメガレックス迎え撃つ時に出さなかつたんだよ!？」

「いや、元々シーザーに付ける予定だったから、タイミングが悪くてな！ さて、エマちゃん！ また、手伝ってくれるか？」

「はい！」

「ようし、早速、こいつでシーザーを改造するぞ！」

西方方面の辺境の地、デーニッツ中将の率いるデイメパルサー、デイロフオス隊が何度も暴れまわるジェノスピノにマッドオクテットを放ち、キャノンブル、バズートルキルサイス隊が牽制砲撃をしたが、ジェノスピノはマッドオクテットすらも逆らい、暴



走を続けた。高台でデイメパルサーMk-IIに乗っているデーニッツ中将とデイメパルサートランスに乗っているドクターマイルスはその様子を見、

「兵士によると、ずっとあの調子ようだ。何度もデイメパルサー、デイロフォス隊のマッドオクテットを放っているが、ジェノスピノはそれでも怯まん！」

「デスレックスと並ぶ伝説のゾイドというだけあって、通常のマッドオクテットは通用しない……ということか！」

「しかし、あのジェノスピノには先帝陛下がお乗りになつていたはず、いくらバイザーが破壊されたとはいえ、陛下の力ならジェノスピノを抑えることはできるはずなのに！」

「とにかく、まずはジェノスピノの動きを抑えることが先だ！ お前のデイメパルサーMk-IIと私のデイメパルサートランスはファイナルマッドオクテットが使える。それでジェノスピノの動きを抑える。」

では、行くぞ！ デイメパルサー！ 最大出力！ ファイナルマッドオクテットー！！

デイメパルサーMk-IIとデイメパルサートランスのファイナルマッドオクテットが一斉に放たれ、同時にデイメパルサー、デイロフォス隊のマッドオクテットもジェノスピノに直撃し、ジェノスピノの全身に火花が散り、ジェノスピノの目の色が消え、ジェ

ノスピノはそのまま倒れた。

「ふ、流石、デスレックスのDNAから得たファイナルマッドオクテットだな。あのジェノスピノすら黙らせるとは！」

「ジェノスピノ、沈黙しました！」

「よし、まず、コクピットにいる陛下の安否を！」

兵士たちは倒れたジェノスピノのコクピットを確認するべく、コクピットを開閉したが、そこは信じられないような光景になっていて、兵士たちは恐怖で立ちすくんだ。ジェノスピノのコクピットにいたのはギャラガー三世ではなく、白骨化した遺体が座っていたのだった。

「どうした？」

「白骨です！」

「何!？」

「ジェノスピノのコクピットに白骨化した遺体が！」

「な、なんだと！ まさか、先帝陛下は完全に御隠れになったと！」

「いや、その遺体先帝陛下のものとは限らない！ そのDNA情報を調べる必要がある。とにかく、私は本国の元帥閣下からクワガ、キルサイス、スナイプテラ隊を借りて、ジェノスピノを本国にまで護送する準備をする。デーニッツ中将は敵がない

か、周囲の警戒を！」

その時、突然、周囲から攻撃がし、キャノンブル、バズートル、キルサイス隊が蹴散らされ、黒い影が現れた。黒い影の正体はデルだった。

「ジェノスピノが現れたと聞いて来てみたら、やはり、予想は外れていなかった！ オメガレックス討伐は果たせなかったが、ここで貴様らを全滅し、ジェノスピノを手に入れて帝国軍を完全に滅ぼす！」

「あのカキ！」

「デーニッツ中将、奴の注意を引き付けてくれないか？ 実はジェノスピノの新たなライダーを見つけたんでな！」

それを聞いたデーニッツ中将は、少し疑問を感じたが、ドクターマイルスの不敵な笑みを見て、

「なるほど、そういうことか！ わかった！」

「デイメパルサー、デイルランスは直ぐにその場を離れ、

「デイメパルサー、デイルフォス隊！ マッドオクテット放て〜!!」

デイメパルサー、デイルフォス隊がデルに向けてマッドオクテットを放つが、デルは瞬時にマッドオクテットが放たれる前に高くジャンプし、デイメパルサー Mk-II の前に現れた。

「貴様のファイナルマッドオクテットの厄介さは前の戦闘で立証済みだ！ 貴様さえ、潰せば後は問題ない！」

「ふん、ちよいと改造して力をつけてきたからといって随分なめられたものだな！」  
デルはデイメパルサーに攻撃するが、デイメパルサーは瞬時に後ろを向き、尻尾で攻撃しようとする。しかし、デルはそれを避け、デイメパルサーのスペクターフィンを攻撃しようとする。

だが、デイメパルサーの周りにシールドが現れ、デルは弾かれてしまう。

「フフフ、私のデイメパルサーMk-IIがただ、ファイナルマッドオクテットが使えるというだけの代物だと思ったのか！ 馬鹿め！ デイメパルサーはマッドオクテットを放っている時、高周波パルスがバリアにもなれるという性質を応用してマシンブラスト発動すれば、常時高周波パルスによるシールドを展開させることが出来るのだよ！  
そして、デスレックスDNAを取り込んだことによってその戦闘力及びスピードも通常の数倍!!」

デイメパルサーはシールドを展開しながら、デルにぶつけ、デルは吹っ飛ばされてしまう。

「しかし、残念だったな！ 我が帝国に入れば貴様も優秀な将校として出世出来たのに、あの脳ミソの硬い両親のおかげであんな目に逢うとは、ホントにどうしようもない

親を持ってしまったものだ！」

それを聞いたリセルはブチギレ、

「何だと、貴様ー!!」

デルはディメパルサーに突進するが、デーニッツ中將はニヤリとし、同時にディメパルサートランスがデルの背後に現れた。リセルは焦ったような目をし、

「し、しまったー!」

「感情任せになった貴様は余りに隙だらけだ。だが、私はその怒りを待っていた!

ジェノスピノの真の本能を引き出すために! ディメパルサートランス! ファイナルマッドオクテットー!!」

リセルとデルはディメパルサートランスのファイナルマッドオクテットをもちに受けしめよう。

「グワアアアー!!」

悲鳴を上げるリセル、その時、リセルの悲鳴がデスレックスの鳴き声に変わったかのように聞こえ、リセルとデルはそのまま倒れてしまった。

「ドクター、もしかしてあなたが捜していた新たな駒ともしかして……」

「その通りだ! こいつはそのためにここまで来たということだ! フフフフ、ハハハハ、ハーツハツハツハツハ!!」

リセルがドクターマイルスの手に墜ちる中、同盟軍基地では、遂にシーザーの改造が完了した。

「遂に出来た！ 最強の矛である荷電粒子砲に対抗できる最強の盾のEシールドを装備したシーザーの新たな姿の完成じゃあ〜!!」

新たに改造されたシーザーは金色のアーマーが迷彩色に変わり、A-Z機関砲は更に強力なキャノン砲になり、そして、アンカーも搭載された。シーザーの姿を見たウィルは、

「これが…シーザーの新たな姿。」

T o b e c o n t i n u e d

## 第35話 「決着、ダークライガー」

西方方面の辺境の地に親衛隊のクワールガG3、スナイプテラG3、キルサイスG3が到着し、ファイナルマッドオクテットで機能停止したジェノスピノとデルの回収に向かった。

その様子を見たデーニッツ中将とドクターマイルスは、

「これで、ジェノスピノは再び我が帝国の元に渡ったことになったが、もし、あの遺体が先帝陛下のものだったら……」

「デーニッツ中将、その心配はありません！ 仮にあの遺体が先帝陛下だとしても、陛下は不滅なのですからね！」

「ん？」

それを聞いたデーニッツ中将は少し引つ掛かるような表情をした。

「よし、そのままジェノスピノを護送しろ！」

スナイプテラG3、キルサイスG、クワールガG3隊がジェノスピノを引き上げようとしたその時、突然爆発があり、上空から同盟軍のクワールガ、クワガノス、カプター隊が攻撃してきた。

「くそ、反乱軍がもう来たか！ デイメパルサー、デイロフォス、キルサイス、キャノンブル、バズートル隊、ジェノスピノを援護せよ！」

キャノンブル、バズートル、キルサイス隊が砲撃する中、突然、キルサイスが次々と撃ち抜かれていく。そこに現れたのはレックスだった。

「悪いが、帝国軍よ。ジェノスピノは回収させねえぜ!!」

「ちー！ タイミングがちよつと悪かったようだが、デーニツツ中将！ 我々の目的はあくまでジェノスピノの回収だ。連中は足止めする程度でいい！」

その時、森からアレックスのウィーリー、アッシュのバンプ、そして、スレイマーズのグリードのラプトラリア、ガンマのクワーガ、ステイルのラプツール、ボルグのスコーピアも現れた。

ウィーリーとバンプはワイルドブラスト技でキルサイス、デイロフォスを蹴散らしながら進み、スレイマーズたちのゾイドはキャノンブル、バズートル隊と交戦した。

スレイマーズのゾイドはどれも小型ゾイドだが、グリードのラプトラリアは3体のキャノンブル相手でもその身軽さでキャノンブルの攻撃を避けながら、キャノンブルを翻弄し、ステイルのラプツール、ボルグのスコーピア、ガンマのクワーガも装備した武器とワイルドブラスト技を駆使せながらキャノンブル、バズートル隊と互角に渡り合っていた。



ウィーリーとバンプはデーニッツ中将のデイメパルサーMk-IIにまで来たが、デイメパルサーは咄嗟にマッドオクテットによる電磁波のバリアを張り、ウィーリーとバンプの攻撃を凌いだ。

しかし、その間にもジェノスピノ回収準備は着々と進み、遂に引き揚げる程にまでいった。グラッドは引き揚げようとするスナイプテラG4とキルサイスG4を狙い撃とうとするが、背後から光学迷彩で姿を隠したキルサイスが襲いかかり、ジェノスピノ回収を許してしまう。

「しまったー！」

「任務は完了した。デーニッツ中将！ 撤退するぞー！」

ジェノスピノの引き揚げが完了し、ドクターマイルスとデーニッツ中将の部隊が撤退していった。グラッドは悔しそうに、

「くそ、後少しだったのに！」

ジェノスピノとファイナルマッドオクテットで洗脳されたりセルとデルを回収したドクターマイルスとデーニッツ中将は帝都メガロポリスに帰還していた。宮殿内では、「よくやったぞ。デーニッツ中将！ジェノスピノを回収しただけでなく、新帝国の反乱軍で特に厄介なハンターウルフまで洗脳して手土産に持つて来るとはな！ 流石だ！」

「恐れ入ります。元帥閣下！ ところで、オメガレックス捜索に当たっているグレッツゲル准将からの報告は？」

「未だ、捜索に手こずっているとのことだ！ 何せ、南極のブリザードが更に増しているぞうでな！」

後、ドクターマイルスが回収したジェノスピノの修理と南極で回収した例のZFのゾイド因子分析を基にZG復元に着手していてな。代わりにZG完成のためのオーパーツ捜索に行ってくれないかと頼まれてな！

もちろん、そのオーパーツを捜すための高性能な発信器を渡し、親衛隊仕様のデイメパルサーG3、デイロフオスG3やあのダークライガーも護衛としてつかせると言っているので頼めるかな？」

「ええ、もちろん構いません。」

「では、デーニッツ中将！ お前はZGのオーバーパーツ搜索を命じる！」

「はー！」

宮殿の地下室では、ドクターマイルスがジェノスピノ修理と南極で回収したZFの分析を行っていた。

「素晴らしい！ 既に数千万年前のものにも関わらず、石化せず、ここまで保存状態が良いとは！ これですべてのZFが完成し、ZGの完成も直ぐそこだ！」

ところで、ジェノスピノがデスロッキーに沈んだ後、あの肉体を腐食させたのは良い選択だったのでしょうか？」

ドクターマイルスはZGが入っている巨大カプセルとゾイドを貪り食うデスレックスの横にある後ろ向き玉座に座っている人に聞いた。

「それも計画通りだ。いずれにせよ、あの肉体はガネストを新たなネオデスメタル帝国皇帝に添え、デスレックスを真の姿に覚醒させるために不要になる予定だったからな。」

「公式にはどう報告させましょうか？ 仮に先帝陛下じゃないと言ってもそう簡単に信じる国民もいないでしょうし……。」

「死んだことにしとけ！ 帝国はガネストに任せればいい！ そしてデスレックスが

真の姿に覚醒し、ZGが完全体になったその時にこの私は人間、ゾイド、全宇宙に存在する全ての生命体の頂点に君臨する完全生命体即ち神となる！

かつて惑星Ziで果たせなかった私の野望が遂に叶うのだ！」

ネオデスメタル帝国兵士の装甲服を着用して遂にカティアはベテイ、レナのいる倉庫に来たが、ベテイ、レナはバイザーを取り付けられ、周囲は多数の兵士が警戒していた。

「警備はかなり厳重ね。兵士を蹴散らしてベテイとレナと一緒に抜け出すことは出来はないけど、ここは帝都のど真ん中、あんまり派手なこととはできないわ。」

その時、見回りをしている兵士に一人の将校が現れ、

「デーニッツ中将が出撃する！ 引き続き、警戒体勢を取れ！」

その様子を見たカティアは真つ先にその将校の前に現れ、

「すみません！大尉！ デーニッツ中将からそのラプトルとディメパルサーも出撃するとの命令が出ましたので……」

「何？ それは聞いていなかったが、貴様、コード名は？」

「コード301です！」

「確かにデーニッツ中将の部隊所属のものだ。よし、出撃を許可する！」

「ありがとうございます！（まさか、奪った装甲服のコード名がちょうどデーニッツ

中将のものだとはおもわなかったわ！ これで、帝都から出られるわね）」

カティアはベティのкокピットに乗り、

「ベティ、レナ、暫くの間、バイザーは付けたままになるけど、我慢してね。終わったら、必ず外してあげるから。」

デーニッツ中将が出撃の準備をする中、ドクターマイルスは小型のキューブを手渡し、

「これは？」

「オリジナルのリジエネレーションキューブを元に作った小型リジエネレーションキューブだ！ そいつを使えば、僅かで微弱なゾイド因子にも反応し、瞬時にその場所を特定できる。」

それと、こいつをディメパルサートランスに取り付けておけ！」

「これは？」

「ダークマスターが万が一の場合、反乱軍の軍門に下った時、強制的にマシンブラストさせ、ダークマスターを完全なダークライガーの支配下に置くための装置だ！」

特にディメパルサートランスに取り付けければ、本領を發揮する。今までは必要なかったが、あのライジングライガーがもしパワーアップした場合のことを想定して開発したものだ。デーニッツ中将！ 御隠れになった先帝陛下のご意志を継ぐために頼む!!」

「元よりそのつもりだ！ 先帝陛下とこの帝国のために私はここまで尽くしてきたの

だからな！」

「それを聞いて安心したよ！」

「では、全軍出撃する!!」

デーニッツ中将はデイメパルサートランスに乗り、ダークライガーと自身の西方部隊、親衛隊を連れて宮殿を出た。

グラッドたちは同盟軍本拠地に戻り、事の状態をストームたちに報告した。

「そうか、ジェノスピノは再び帝国の手中に入ったか。オマケにリセルまで…。」

「すまない。もっと早く着いていれば、こんなことにならなかった。」

「グラッドたちは悪くない。とはいえ、オメガレックスを封じたこの状況にジェノス

ピノが復活するのは不味い！ ましてやあのダークライガーまでいたら、手に負えなくなる。」

「だが、ジェノスピノは無傷ではなかったから、早々に出撃することはないだろう。」

「ああ、そうだな。となると、まずはあのダークライガーを倒すことが先だ！」

「そうじゃ！　そこでこの天才科学者ドクタースマスが改造した新世シーザーの出演じゃ!!」

「だが、ダークライガーの所在がわからない以上、動きようがないが…」

そこにジョンが現れ、

「リーダー！　ダークライガーの所在がわかりました！」

「どこだ？」

「西方と東方の境にある密林地帯にデーニッツ中将の率いる西方部隊と親衛隊と共にいることが確認されました！」

「何！　俺たちの制圧じゃないのか？」

「詳しいことはわかりませんが…」

「まあ、とにかく奴の所在がわかればこつちのもんだ！　よし、今度は俺が指揮を取る！　グラッド、基地のことは任せる。　ウイル！　アレックス、アツシユ、スレイマーズは俺に付いてこい！」

「はい！」

「ジョン！ お前はユリスとエマの護衛を！ 大切な皇帝陛下と侍女を守るんだぞ！！」

「了解しました！ リーダー！」

「よし、全軍出撃する！」

ストームのキングと共に出撃するウィルとシーザーを見て、エマは心配そうな表情をしていた。

「ウィル……」

西方、東方の境にある密林地帯に西方部隊と親衛隊が集結し、レイルはダークライ



ガールのコクピットで大人しくし、キャタルガG3に乗っていた研究者が小型リジエネレーションキューブを持っているデーニッツ中将の後ろについていき、その反応を元に歩いて行った。

歩き続ける中、古代の遺跡に辿り着いた。研究者が驚く中、デーニッツ中将は、

「なるほど、ここはゾイドクライシス以前の遺跡に運良く残っていた遺跡か！ おそらく、ZGが地球に来た際に拡散したゾイド因子がここに来て守ったということか。

だが、かつての地球の技術がZGから来たということも満更嘘ではなかったみたいだな！ 直ぐにここを掘り出せ！」

デーニッツ中将の命令を受け、兵士たちは遺跡の中を掘り進んで行った。

密林地帯に着いたストーム率いる同盟軍はデーニッツ中将率いる帝国軍の様子を探るべく、アツシユとスレイマーズのガンマが選ばれ、アツシユは相棒のバンブと共に地上で様子を見、ガンマは親衛隊のキルサイスG4に見えないように相棒のクワীগと共に空中でその様子を偵察し、ダークライガーとそのコクピット内でマスクを取ったレイルの様子も見た。

アツシユとガンマは直ぐ様その場を離れ、ストームたち同盟軍が陣取っている場所に戻った。

「どうだった？」

「あれは間違いなく、反乱組織の制圧じゃなく、何かの調査があるゾイドの発掘ですね！ 周囲にキヤタルガや研究者、作業員も多く見られました。」

ただ、ただのゾイドの調査と発掘にしては軍の規模が大きすぎる気がします！」

「そうか、となると、帝国にとっては何かの機密事項ってことだな。一体何を？ まさか、例のZGか！

とにかく、阻止する必要がある！ 後、ガンマ！ ダークライガーの様子はどうかだった？」

「ええ、ただ、周囲のゾイド同様に大人しくしていましたよ！ 後、ライダーがマスクを取っていたところも見ましたよ！

ピンク色の髪していて、エマちゃんに次ぐぐらい可愛かったですよ!!」

ガンマの言葉にアレックスが反応し、

「何？ 女の子か!? 俺にも紹介してくれよ!!」

アッシュが二人に突っ込みを入れ、

「可愛いって！ お前ら、あいつ男だぞ！ しかも帝国の皇子!!」

「ええ！ マジか!?!」

「元帝国皇子アーネスト・ギャラガー、いや、レイルのことだな。だが、今はダークマスターと名乗っているがな。」

「そういえば、リーダー！ 他にも緑のラプトルと青色のデイメパルサーも見かけました！」

「エマの友人の相棒のラプトルとユリスの相棒のデイメパルサーも？ しかし、何でそいつらまで？ まあ、とにかく奴らを仕留めなければ！ ウイル！ お前は……」

ストームが振り向いた時、ウイルの姿はなく、既にシーザーが森の中を走って行った。「おい、ウイル！ たく、しようがねえ、ガキだ！ 仕方ない。俺たちも行くぞ！」

同盟軍基地では、エマがゾイドのいる倉庫に入り、落ち込んだようにしているギルラプターエンペラーを見た。

「ギルラプター……」

ギルラプターはエマを見つめた。エマはギルラプターにそつと寄り添い、

「そうね、私もレイルを助けたい！ 一緒に行きましょう!!」

その時、基地内に警報が鳴り、ジョンとユリスが来た時にはエマがギルラプターエンペラーに乗って基地から出てしまっていた。

「エマはきつと自分の手でレイルを助けに行こうとしたんだわ！ お願い！ パーカーさん、私も連れて行ってください！」

「え、うん…（こりや、帰ったら、コマンダーにこつぴどく叱られるな〜）」  
ウィルとシーザーは密林地帯を走り、遂にデーニッツ中将率いる帝国軍の前に現れてしまった。

レイルはマスクを着用し、直ぐ様、ダークライガーのコクピットに乗った。

キルサイスG4、デイロフォスG4が一斉にシーザーに襲いかかったが、シーザーは以前よりも速いスピードを出し、一瞬で蹴散らした。

それを見たダークライガーはマシンブラストし、

「ダークバーストブレイク!!」

ダークライガーのマシンブラスト技がシーザーに炸裂したが、しかし、シーザーはものともしないどころか、何とシーザーの正面にシールドが現れ、ダークライガーの攻撃を防いだ。騒ぎを聞き付けて現れたデーニッツ中将はその姿を見て、

「あれは、まさか、Eシールドか?!」

「ぐぐぐ…」

「そ、これがシーザーの新たな力！ レイル、お前を正気に戻すための力だー!!」  
シーザーはEシールドを張りながらダークライガーをぶっ飛ばした。

「あのライジングライガー、Eシールドを搭載してパワーアップしているとは！  
これは予想外だな！ お前たちは引き続き発掘作業に専念しろ！」

私はデイメパルサートランスに乗って奴を迎え撃つ。キャノンブル、バズートル隊、  
撃てえ!!」

デイメパルサートランスに乗ったデーニッツ中将の命令でキャノンブル、バズートル  
隊が一斉に砲撃したが、シーザーはEシールドでその全ての攻撃を防いだ。

「なるほど、流星は荷電粒子砲に耐えられる最強の盾Eシールドだ。なら、尚更直ぐに  
排除しなくてはな！」

密林でその様子を見たストームたちは、

「リーダー！もしかして我々出なくても大丈夫なんじゃないですか？」

「そうだな。下手に出たら、デーニッツの思い壺になるし、それにウイルのためになら  
ないだろうから、とにかく俺たちはしばらく様子を見よう。」

「ウオーー！」

怒り狂ったレイルはそのままダークライガーで突っ込んで行き、シーザーはすかさず

Eシールドで防ぐ。

「レイル、俺だ！ ウイルだ！ お前は帝国にいるべきじゃない！ 目を覚ますんだ！！」

しかし、レイルは聞く耳を持たず、そのままダークバーストブレイクでシーザーのEシールドを無理やりこじあけようとする。

「無駄だ！ そいつはドクターマイルスによって最早我が帝国に忠実な殺戮マシンとなっている。貴様の言葉等、届くわけがない。」

ダークライガーのチタンブレードがEシールドで徐々に溶解しながらもEシールドを破ろうとするダークライガー、

「レイル、お前、ホントに帝国の操り人形になっちゃったのか!？」

「ヒヤハハハハ！ 今度こそ、死ねえ〜!!」

その時、密林から謎の影が現れ、ダークライガーに突進した。現れたのはなんとギルラプターエンペラーだった、そして、そのコクピットにはエマが乗っていた。

「な、何！ ギルラプターだど!？」

「エマ、どうしてここに?」

「ギルラプターがレイルを救いたいからギルラプターの気持ちに応えて来たの。それに私もあなたの力になってレイルを救いたい!」

レイル！ 私よ！ エマよ！！ お願い、目を覚まして！！

ギルラプターエンペラーを見たレイルは頭を抱え、

「うう、うう…ウオー！！」

「危ない！」

ギルラプターに攻撃しようとするダークライガーに突進するシーザー、そして、同時に帝国軍から緑のラプツールが現れ、ダークライガーを押さえつけた。

「殿下、目を覚ましてください！」

「カティアー！」

「あれは、ベティか!？」

と同時にキールが現れ、バイザー付きのレナの背中に張り付き、キールのコクピットから降りたユリスがすかさずレナのコクピットに乗り、

「ありがとう！ パーカーさん。行くよ、レナ！ ワイルドブラストー！ マッドオクテット!!」

ワイルドブラストしたレナのマッドオクテットが帝国軍全てのゾイドに降りかかるが、デーニッツ中将はため息をつき、

「はあゝあ。」

と同時にベティとレナがキルサイスG4に取り押さえられた。そして、ベティを押さ

えているキルサイスG4には、

「久しいな。ギレル少尉！」

「その声はもしかして、ナツシユ!?」

「その通り、私は皇帝ギアラガー四世陛下に認められ、遂にギアラガー親衛隊に入隊し、今や親衛隊大尉になった！」

そして、皇帝陛下からこのキルサイスを与えられ、ここまで来たのだ！ それにしても帝国の反逆者になるとは、随分墮ちたものだな！ だが、せめてもの情けだ。栄光なる親衛隊にしてお前の友人である俺が貴様を排除する！」

デーニツツ中将はウイルやカティアたちに向かつて、

「ギレル少尉！ 貴様が我が軍に紛れ込むことは最初から見抜いていたよ、というか、貴様らをまとめて始末するために敢えてそうしたのだがな！」

ドクターマイルスはメルビルのデイメパルサーを帝国軍のゾイドとして何かに利用できるのではと調査していたが、あの時、我が軍を無力化させたマッドオクテットはメルビルがいないと発動できないため、役に立たない消耗品として処分するつもりだった。

だが、万が一またあのマッドオクテットを喰らわれたら厄介なので、そのデイメパルサーのマッドオクテットが通用しないように電磁波対策をしておいた。もうそのマッ



ドオクテットは通用しない。

さて、これでネズミは捕らえた。後はあの厄介なライジングライガーを始末して貴様らをまとめて掃除してやる！ ダークライガー！ ライジングライガーを始末しろ！！

しかし、ダークライガーは動きを見せない。

「どうした？ 何をしている！」

ダークライガーに乗っているレイルはギルラプターエンペラーとエマを見て、頭を抱えながら苦しんでいた。

「何だ？ 何故、僕の記憶にあの女とギルラプターが出てくるんだ！」

苦しむレイルを見てエマは、

「レイル！ 思い出して、私よ！ エマよ！！」

「何でだ？ 知らないはずなのに、何であの女の声が僕の頭の中に聞こえてくるんだ！? やめろー!!」

「くそ、記憶消去が甘いのか、それともあのマッドオクテットの影響を少なからず出ているとも言うのか!？」

だが、どちらにしてもダークライガーを失うわけにはいかん！」

デーニッツ中将はドクターマイルスから渡された装置をコクピットに取り付け、

「新たなマッドオクテットの力を見せてやる！ デイメパルサートランス！ ハザードマッドオクテットー!!」

デイメパルサートランスのバイザーの目が紫色に発光し、同時に紫色の電磁波が放出された。紫色の電磁波を食らったレイルとダークライガーの目が紫色になり、ダークライガーから紫の衝撃波が放たれた。

「どうしたんだ？ 一体何が起きたんだ？」

「レイル……」

「さあ、ダークライガーよ！ リミッターを解除したその力を見せてみる！」

ダークライガー！ 洗脳 解放！ マインドブラストー!! ダークバーストブレイクー！」

目が紫色になったダークライガーはギルラプターエンペラーに攻撃してきた。

「ウォー!! 死ねえー!!」

ギルラプターエンペラーはその攻撃を両手で受け止めるが、ダークライガーの力に及ばずぶつ飛ばされてしまう。しかし、その時、ガンマのクワールが現れ、ギルラプターエンペラーを掴んだ。

「大丈夫ですか？ お嬢ちゃん！」

更にグリードのラプトリアがベティを抑えているキルサイスG4を、スティルのラプ

トールとボルグのスコープアがレナを抑えているキルサイスG4を蹴散らし、シーザーの前にキングが現れた。それを見たデーニッツ中将は、

「ほう、遂に隠れていた反乱軍も登場したか。いいだろう！ 貴様らはここで始末する！ ダークライガー！」

デーニッツ中将に命令されたダークライガーはキングに攻撃するが、シーザーはダークライガーをEシールドで止め、

「ウイル！」

「ストームさん、こいつは俺に任せてください！ お願いします！」

「わかった！ だが、無茶はするな！ そいつ、さつきより強いぞ！」

「わかっていきます！」

しかし、ダークライガーはEシールドを張ったシーザーすらも後退させる程の馬鹿力を見せた。シーザーは直ぐ様Eシールドを解除してダークライガーの攻撃を避けた。

「レイル、エマのためにも、そして、お前を帝国から解放するためにそのシーザーの偽物を倒す！」

「う、ウォー!!」

レイルの叫び声と共に、ダークライガーの全身から紫色の衝撃波が放たれた。シーザーは攻撃の体勢を取り、

「この一撃に全てを込める。 やれるな？ シーザー！」  
グオオッ!!

キングはデイメパルサートランスの前に現れ、

「お前の相手はこの俺だ！」

「我がネオデスメタル帝国の前身を壊滅した例の伝説のライガーにして反乱軍の首謀者か！ 面白い。 やってやるぞ！」

「キングオブクロブレイク！」

「ふん！」

キングのワイルドブラスト技がデイメパルサートランスに直撃するが、デイメパルサートランスは紫色の電磁波をバリアにしてその攻撃を防いだ。

「この力は……」

ダークライガーの身体のラインが紫色に染まり、攻撃の体勢を取る中、ウィルはゾイドキーを取り出し、神経を集中し、

「行くぞ、シーザー！ 切り拓け！ シーザー！ 俺の魂と共に、進化 解放！ エヴォブラスト!!」

エヴォブラストしたシーザーのタテガミクロウが現れ、同時にEシールドも展開した。シーザーとダークライガーは互いに真正面に向け、そのまま突進していった。

「ウォー!! 今度こそ、くたばれー!! ダークバーストブレイク!!」  
「スピリットバーストブレイク!!」

シーザーとダークライガーの攻撃がぶつかり合い、その衝撃波が周囲の密林を一気に切り裂いた。と同時にシーザーの身体がダークライガーを突き抜け、ダークライガーの身体が一刀両断し、ダークライガーが爆発炎上した。

ドガアアアン!!

それを見たデーニッツ中将は、

「そ、そんな馬鹿な…!」

その時、コクピットから研究者からの通信が開き、

「デーニッツ中将! ゾイド因子の発掘と回収完了しました!」

「ふん、まあ、いい。とにかく目的は達成した。全軍、撤退だ!」

ダークライガーの破壊と遺跡のゾイド因子回収が完了したことを知ったデーニッツ中将とその部隊は戦いを放棄し、そのまま撤退していった。

ダークライガーの攻撃を受け、ギルラプターエンペラーのコクピットで気絶していたエマが目を覚まし、

「う、レイル! レイルは!?!」

エマが見た先には炎の中で立つシーザーがおり、シーザーはダークライガーから抜き

取ったコクピットをくわえていて、レイルはコクピットの中で気絶していた。

「レイル、良かった…」

シーザーはくわえたコクピットをそつと置き、炎の中で目一杯の咆哮を上げた。

グオオッ!!

T o b e c o n t i n u e d

## 第36話 「ワイルドブラスト、ギルラプター」

帝都メガロポリス、デーニッツ中将は回収したゾイド因子をドクターマイルスに渡した。

「よくやった。デーニッツ中将。これでZG完成も順調に進むようになった。ところで、ダークライガーが倒されたそうだな。」

「申し訳ありません。せっかくデイメパルサートランスの新たな力を使ったというのに…」

「まあ、良い。ジェノスピノの修理はもうすぐ終わる。お前は疲れを癒すためにゆっくり休め。」

「では、失礼。」

「フフフ、もうすぐだ。もうすぐ、全てを超越する最強のゾイドが誕生する！」

「ダークライガーを倒したワイルたちは、ダークライガーの呪縛から解放したレイルを連れ、同盟軍基地に戻っていた。グラッドはジョンに、

「全く、お前、何てことしてくれたんだよ！　もし、これでエマとユリスが死んじまったら怒られるの俺なんだぞ！」

「すみません、コマンダー。ユリスがどうしてもつて言うから！」

「ま、結果オーライだったから、良かったが……」

「ところで、グラッド、俺たちが留守の間、新帝国の方はどうなったんだ？」

「ああ、さっき、ユリスとエマがシーガルとアルドリツジらを説得してしぶしぶながら、旧共和国同様に俺たちに協力してくれるとのことだそうだ！」

「ま、とにかく、敵にならずにすんだな！」

「どうだかね。今はネオデスメタル帝国を倒すために一時共同戦線を組んで、自分たちの新帝国を世界に認めさせるために俺たちを利用してはいるに決まっている。」

「ま、それはネオデスメタルを倒した後の問題にすればいいさ！」



「相変わらず、お前には負けるよ!」ところで、例の帝国の元皇子だが、今、エマが看病していて、しばらく安静にしとけば大丈夫とのことだが、あのままにしといていいの?」

「奴はもう帝国の人間じゃない! それにエマの隣に居させた方がいいし。」

「とりあえず、あいつは俺たちで保護するか!」

「そうそう、ウイル! ワシがパワーアップさせたシーザーはどうじゃった?」

「凄い力だったよ! まさか、シーザーがここまで強くなるなんて!」

「やはり、Eシールドに目をつけたわしの勘は間違いないじゃなかったようじゃな! これでもしオメガレックスが復活しても十分対抗できる!」

あ、そうじゃ! 記念にシーザーの名前変えようかの?」

「何でだよ!! シーザーの名は変えられないよ!!」

「そうじゃない。シーザーはもう生まれ変わったから、ライジングライガーのままだと変じゃろ!」

「そういうことか…じゃあ! スピリットライガーはどうかかな?」

「スピリットライガーじゃと!」

「シーザーと俺の魂はいつだって一緒だからさ!」

「なるほど、いい名前じゃ! これで今日からシーザーはスピリットライガーじゃ!!」

「ウイル！」

そこにカティアが現れ、

「君はカティア？」

「お礼言うの忘れてたわね。ありがとう。私のラブツールに名前をつけてくれて。」

「いや、俺はただゾイドが好きなだけで…」

「後、あの時、あなたをエマの誘拐犯にってしまったのごめんなさい。」

「いいよ！　そもそも君はエマのことを守ろうとしたただけだもんね。」

「ありがとう。優しいのね。」

「いや、それほどでも…」

「うふふ、これからもよろしくね。ウイル！」

基地の病室ではエマがダークライガーの洗脳から解放されたレイルを看病していた。レイルの傷はほとんど治っていてエマは安心していた。

「良かった！ ウイルのおかげでそこまでの怪我じゃなかったから安心したわ！」

「何故、僕を助けた？」

「何故って、あなたを助けたかったの。あなたを帝国から解放するために。」

「僕は帝国の人間だぞ！」

「確かにそうだけど、あなたは帝国に利用されていたのよ！もし、このままあの帝国にいたら、あなたは……」

「うるさい！ 助けてくれなんて頼んでいない！ お前は僕を家族だと言ったが、僕はお前の家族じゃない！ 僕は帝王ギヤラガー一世の遺伝子を持つ世界を支配する者だ！」

「確かにそうだけど、もうあなたは誰でもない、あなた自身なのよ！」

「うるさい！ 出ていけ！ 僕はお前なんかと一緒に居たくない!!」

「レイル……」

エマは悲しそうな表情をして部屋を出ていった。レイルネオデスメタルキーを持ち、「もう僕はエマと一緒にはいられない。父上を慕ってネオデスメタル帝国の皇帝になるためにここまで来たのに僕はただの操り人形として利用され、もう後戻り出来ないところまで来た。僕には居場所なんてない。」

ユリスがレナやギルラプターエンペラーのメンテナンスを行う中、エマがその場に來

て、

「エマ、どうしたの?」

エマは涙ぐんだ目をしてユリスに抱きついた。

ウィルやストームたちはユリスから事情を聞き、

「そうか、まだあいつは帝国の皇子としてのプライドを捨てきれないんだな。まあ、そもそも今まで敵だった俺たちを拒否するのも無理はない。」

「ストームさん、俺が説得します!」

「いや、お前が説得しても拒否するだろう。第一無理に説得したら、火に油を注ぐだけだ。」

倉庫でエマが膝を抱え込んで泣いている時、ギルラプターエンペラーがエマにそつと寄り添った。

「ありがとう。私は大丈夫よ。」

エマが励ますギルラプターエンペラーの頭を優しく撫でるところを病室から抜け出したレイルが壁越しに見てそのままその場を離れた。ギルラプターエンペラーが何かに気づいたような素振りを見せ、

「どうしたの？ ギルラプター。」

司令室にバタバタと走った兵士が現れ、

「リーダー！ コマンダー！」

「どうした？」

「捕虜になっているアーネスト・ギャラガーの姿がありません！ オマケに倉庫にいるラプトリアの一体がいなくなっています！」

「何?! 一大事だ！直ぐに向かう。俺とスレイマーズが搜索に入る。」

「ストームさん、俺も行かせてくれませんか？ あいつをダークライガーから解放したのは俺なんですから。」

「よし、いいだろう！ では、ウィルも俺に付いていき…」

その時、司令室にエマも入り、

「ストームさん、私も連れて行ってください。お願いです！ ギルラプターもレイルを助けたいと言っているんです！ お願いします!!」

ストームは少し考え込んだ上、

「わかった。ウィル！ エマをしつかり頼んだぞ！」

「待ってください！ 私も連れて行ってください！ 殿下とエマを守るのは私の任務ですから！」

「カティア、よし、じゃあ、ウィルとカティアはエマを守りながら、俺とスレイマーズに付いていけ！」

後、スミス！ 一応お前も付いていけ！ 万が一親衛隊と交戦する場合のことを考えて戦闘要員は必要でからな！」

「よっしゃ、わしも張り切るぞ！」

レイルは同盟軍のラプトリアに乗り、同盟軍基地から脱走し、ギャラガー親衛隊が駐留する駐屯地に入った。警備のデイロフォス、キルサイス、キャノンブル、バズートルが攻撃の態勢を取るが、レイルはラプトリアのкокピットから現れ、

「僕だ！ ネオデスメタル帝国第一皇子アーネスト・ギャラガーだ！ 入れさせてくれ。」

警備のデイロフォスやキルサイスたちがしばらく沈黙した後、駐屯地の扉が開き、ラプトリアはそのまま入り、ラプトリアは駐屯地のドームのところまで入った。しかし、周りには誰もいない。

「誰もいないのか？」

「私たちがいる！」

その時、上のゲートが開き、そこにはガラス越しでベケット少佐がいた。

「ベケット！」

「私はお前が来るのは計算済みだよ！ いや、むしろ、来るのを待っていたよ！」

まあ、私からの用と言ったら、あんたを処罰することだけよ！ 現皇帝ギャラガー四世陛下が消息不明だからといって、あんたを皇帝に即位させること等さらさないし、第一、あんたはダークライガーを失う失態に加え、ダークマスターの名を捨てたあんたは今や帝国の叛逆者よ！ つまり、もうあんたに用はないわ！」

「皇帝の地位なんてどうでもいい！ 僕は罪滅ぼに來たんだ！ ダークマスターになってエマを、他の人も傷付けてしまった。その償いに來たんだ!!」

それを聞いたベケット少佐は笑いこけて、

「アツハツハツハツハツハ！ あんたホントいいご身分ね！ 我がネオデスメタル帝国の元で反乱軍と戦い、傷付けた罪を償うですって!？」

アツハツハツハツハ！ 罪を償うのはむしろ反乱軍の方よ！ 奴等は世界の統一のために戦う我がネオデスメタル帝国に逆らい、世界を混乱させた大罪組織よ！ その反乱軍に情けをかけるなんて、バツカじゃないの！ アツハツハツハ!!

流石、帝王ギラガー一世様の劣化コピーだけのことはあるわ！

いいわ！ あんたの処罰は死刑に決まった!!」

ベケット少佐が指を鳴らしたと同時に前方の巨大なゲートが開き、ゲートからはアーミテージ大尉の操るステイレイザーG3が現れた。

「なんだ？ てつきりギルラブターエンペラーで來たのかと思つたのに、まさかこんな雑魚のラブトリアで來るとは！

まあ、どちらにせよ、貴様を八つ裂きに出来るから楽しめそうだ。じわじわとゆつくり料理してやるぞ！」

ステイレイザーG3が勢いよくラブトリアに突進するが、ラブトリアはすらりと避け



た。

ラプトリアは身軽に壁を伝っていき、ステイレイザーG3の攻撃を避けた。

「いくらステイレイザーでも、ラプトリアのスピードにはついていけない。それに劣化コピーと言われても僕は帝王ギャラガー一世の遺伝子を持つ者！　そう簡単に負けはしない!!」

「ち、ちよこまかと!」

ステイレイザーG3を翻弄するラプトリアを見たベケット少佐は、

「へえ、パワーではステイレイザーに敵わないから、小回りの利くラプトリアのスピードで勝負するなんてね。中々やるじゃない!　でも、たかが、ラプトリアごときでどうにか出来るかしら?」

ステイレイザーG3の後方に来たラプトリアは背部のコクピットに襲いかかるが、ステイレイザーG3は尻尾でラプトリアを振り払う。

「ふん、いくらスピードが上だからといって、パワーが無ければ、意味がない!」  
「く!」

ラプトリアが態勢を立て直す中、コクピットのリールはデスメタルキーを取り出し、  
「ラプトリア、少しの間、我慢してくれ!　ラプトリア!　強制　解放!　デスブラス  
トー!!」

「ほお、デスメタルキーをちゃんと持っているのか！」

「ヘキサスラツシュ！」

ラブトリアは素早いスピードでステイレイザーG3の足や身体の部分を攻撃している。そして、ステイレイザーG3の真正面に来た時、

「これで、お前は終わりだー!! ヘキサスラツ…」

しかし、ステイレイザーG3はラブトリアの攻撃をエレクトフリルで止めた。

「そんなー！」

「ヒヤハハハハハハ！ いくらデスブラストしても所詮そんな雑魚じゃ、俺のステイレイザーには全くダメージを与えることなど出来んわ！」

本当の力の差を見せてやる。ステイレイザー！ 兵器 解放！ マシンブラス

トー!! プラズマウォール！」

ステイレイザーG3のスタンホーンの電撃を受けてしまうラブトリアとレイル、

「ぐ…ぐあぁ…!!」

ラブトリアも一緒に苦しみ、そのままステイレイザーG3の前に倒れてしまう。苦しむレイルを見たベケット少佐は、

「あら、随分可愛らしい顔になったじゃない！ 男にしておくのが勿体ないくらいね。ここにあの小娘2人もいたら最高だったのに残念ね！ まあ、いいわ、あういう子は

じっくり痛め付けた方が楽しいし！」

ステイレイザーG3は前足でラプトリアを踏みつけ、

「ぐあー！」

「ヒヤハハハハハハ！　ここまでだな！小僧！」

「う…」

レイルがこれまでかと思ったその時、

「やめろー!!」

横からシーザーが現れ、ステイレイザーG3に突進した。ステイレイザーG3は突然の突進を喰らって足を崩し、そのまま倒れる。

「お前…」

「レイル、大丈夫か？」

「くそ、調子に乗るなく!!　プラズマウォール！」

態勢を立て直したステイレイザーG3はそのままシーザーに向かって突進するが、シーザーはEシールドで防ぐ。

「何!？」

それを見たベケット少佐は、

「あれはEシールド！　まさか、あれも装備しているとは！　しかもこのタイミング

で来たとなると、流石にアーミテージ大尉1人ではきついわね。あたしのドライパンサーG3を出せ！急げ!!」

ステイレイザーG3の攻撃を防ぐシーザーを見たレイルは、

「お前、何でここに来たんだ!? これは僕の問題だ! お前には関係ない!! それに第一僕はお前の敵なんだぞ!」

「ところがそうはいかないんだよ!」

「え?」

「敵だったのは前の戦いまでだ。今は違う! それにお前には大事な人がいるじゃねえか!」

「大事な人?」

そこにギルラプターエンペラーが現れ、そのコクピットにはエマが乗っていた。

「エマ! どうしてお前が?」

「あなたを助けに来たの!」

「僕を?」

「あなたを死なせたくない! ギルラプターもそう望んでいるのよ!」

「ギルラプター…お前、」

「くたばりぞこないの小僧が〜!!」

ステイレイザーG3がレイルとギルラプターエンペラーに向かって突進する中、シーザーが咄嗟にEシールドを展開し、その攻撃を防ぐ。

「俺の大事な仲間のレイルには指一本触れさせないぜ！」  
ウイルの言葉を聞いたレイルは、

「仲間？」

「貴様〜!!」

ステイレイザーG3の攻撃をEシールドで防ぐ中、ゲートからドライパンサーG3も現れ、

「そのライガー、少々厄介だから、始末させてもらおうよ！」

ドライパンサー！ 兵器 解放！ マシンブラスター!! ドライスラッシュユー！」

「キングオブクローブラスト！」

その時、横からキングが現れ、ドライパンサーG3を攻撃してきた。

「ちい、また厄介なライガーの登場かい！ しかし、この親衛隊が駐留する駐屯地に侵入するなんて！ 抜け口はないはずなのに!?!」

「抜け口がないからこそ、そのまま正面突破したのさ！ それもあんたらで言う親衛隊みたいにごちらにも強力な精鋭部隊でな！」

映像にはスレイマーズのゾイドとスミススのグソック、ケンのゼルとアレックスの

ウーリーイー、アツシユのバンプ、そして、カティアのベティが親衛隊のゾイドと奮闘していた。

「なるほど、裏ルートで侵入することが無理だから、最強部隊でそのまま力押しで行ったわけね。

まあ、いいわ！あんたもあのライガー同様、始末しなければならぬ対象だから、この場で切り刻んで上げるわ！」

「やれるもんなら、やってみやがれ！」

キングとドライパンサーG3が戦い、ステイレイザーG3が戦う姿を見たレイルは、  
「僕は、僕は……」

その時、複数のデイトフォースG3とキルサイスG4が現れ、レイルやギルラプターエンペラーに撃ちかかってくる。

「危ない！」

レイルは咄嗟にコクピットの中に入り、エマの前方に座り、ギルラプターエンペラーは抱えるように攻撃を防いだ。

「大丈夫？ エマ。」

「ありがとう。大丈夫よ！ レイル、やつぱりあなた優しいのね。 さつきは私に冷たいことを言ってたけど、本当は私とギルラプターを巻き込みたくないと思ってる。」

それを聞いたレイルは赤面し、

「な、何言ってるんだよ！」

「私の本当の弟も私のためを思つてよく嘘をついたこともあつたけど、でもその優しさはあなた自身のもの。あなたは自分で全てを背負うことはないの。」

「エマ……」

「私、あなたに会えて本当に良かった！」

ギルラプターエンペラーもレイルを見つめた。その時、デイロフォスG3とキルサイスG4が襲いかかる中、レイルはギルラプターに指示を与え、デイロフォスG3とキルサイスG4を蹴散らした。

「僕はこれ以上罪を背負いたくない！」

グアア〜!!

ギルラプターエンペラーが突然咆哮を上げ、同時にコクピットの中が発光し、装置が開き、中からゾイドキーが現れた。

「これは、ゾイドキー？」

「ギルラプターも私と同じ気持ちよ！ギルラプターも過去に過ちを犯したから、あなたにも同じ罪を犯させたくないと思つてずっとあなたのことを大事に思つてたのよ！」

だから、お願い、レイル……」

ゾイドキーを手に少し考え込んだレイルは、

「エマ、何処か安全なところに来てくれないか。ここからは僕がやるよ!」

「うん!」

エマはギルラプターエンペラーのкокピットから降り、安全なところに行った。

「行くぞ、ギルラプター!!」

グアア!!

「切り刻め、ギルラプター! 俺の魂と共に、本能 解放! ワイルドブラスト!!」

真・瞬激殺!」

ワイルドブラストしたギルラプターエンペラーは次々と残りのデイロフォスを倒し、更にそのままステイレイザーG3に向かって突進し、ぶつかつた。

「うお、」

壁にまでぶつ飛ばされるステイレイザーG3、

「レイル、お前もしかして!」

「僕も自分の戦いをする!」

「け、意味わかつてやってんだらうな!? このクソガキが! これでてめえは完全な帝国の反逆者だぜ!」

「もう僕は誰にも縛られない! 僕は僕の道を行く! ギルラプターと共に!」



「クソガキがー!!」

怒り狂ったアーミテージ大尉はステイレイザーG3のA-Z2連対空砲とA-Zショートレーザーガンを向けるが、ギルラプターエンペラーは音速のスピードを出し、ウイングショーテルでA-Z2連対空砲とA-Zショートレーザーガンを真つ二つに切り刻んだ。

「何?」

更にギルラプターエンペラーはそのスピードでステイレイザーG3の身体に攻撃し、ステイレイザーG3のアーマーに傷がついていく。

「ち、ちよこまかとー!」

そして、目についた時には既にギルラプターエンペラーが真正面に来、ギルラプターの突進でステイレイザーG3は足を崩す。

「今だ、ウィル!」

「ようし、行くぞ、シーザー! 切り拓け、シーザー! 俺の魂と共に、進化 解放! エヴォブラストー!! スピリットガンスラッシュユ!」

シーザーのA-Z機関砲に代わる強力なグレネードランチャーがステイレイザーG3のエレクトフリルに撃ち込み、エレクトフリルが破壊され、半分ボーン形態が剥き出しになるステイレイザーG3。

「ぐ、グワアア……アア」

「これで最後だ！ スピリットバーストブレイク!!」

シーザーのタテガミブレードがステイレイザーG3の身体を貫いた。シーザーは貫いたステイレイザーG3から離れ、シーザーの攻撃で穴が開き、全身に火花が散るステイレイザーG3、

「うぐぐ、まさか、この俺が……こんなガキ共にやられるなんて何故だー!!」

アーミテージ大尉の苦痛な叫び声と共にステイレイザーG3は遂に爆発炎上した。キングに苦戦を強いられているドライパンサーG3のベケット少佐は、

「そんな……我が親衛隊の中でもトップクラスのステイレイザーを！ ち、全軍！

一時撤退!!」

ステイレイザーG3が敗れ、戦況が悪くなったベケット少佐は他の親衛隊と共に駐屯地を捨てて撤退して行った。

レイルはギルラプターエンペラーから降りた時、エマが彼の元に行き、レイルを抱きしめた。

「お帰り、レイル。」

「ただいま。」

「じゃ、わしもそこに混ぜてくれ！」

スミスが2人の元に行こうとする中、ストームが、  
ポカン！

「お前は行くな！」

アレックスやスレイマーズがそれをゲラゲラ笑ったりして盛り上がる中、ウィルとカティアは

「これで良かったんだ！ もうあいつは敵じゃない。」

「私もあなたとはもう敵じゃない。帝国と戦ってお父さんと友人を救いたい！」

南極では、グレッゲル准将率いる部隊がオメガレックスの搜索に当たっていた。南極のブリザードで前が見えない中、地面に空いた穴に何か黒いものが見えた。

「全軍止まれ！」

その黒いものはオメガレックスの荷電粒子吸入ファンだった。

「遂に見つけた！ キヤタルガ、ディロフォス、キルサイス隊、直ちに回収作業に入れ！」

しかし、その時、突然オメガレックスの荷電粒子吸入ファンが緑色に発光し、その熱で氷が溶け、荷電粒子吸入ファンが作動した。

それを見て下がるグレッゲル准将の部隊、その時、周囲の氷が溶解し、溶けた氷から緑の荷電粒子ビームが放たれた。放たれた荷電粒子ビームは天高く舞い上がり、空が緑色に染まった。

荷電粒子砲で南極大陸の3分の1が一気に溶け、巨大な穴が出来、その中から巨大な前足が氷を掴み、氷からオメガレックスが現れた。

オメガレックスは身体に付いている雪を払い、コクピットのガネストは何事もなかったかのような表情をしていて、

「ふう、やれやれ、やっと出られたよ！ さて、リベンジといこうか！」

そして、帝都メガロポリスの宮殿ではジェノスピノの修理が完了し、

「フッフ、これで灼熱の破壊龍の復活だ！ さあ、アーネストの代わりを受け継ぐ新たなダークマスターよ！ その怒りをジェノスピノにぶつけろ!!」

ドクターマイルスが命じた男はなんとリセルだった。  
T o b e c o n t i n u e d

## 第37話「復活、二大破壊龍」

ネオデスメタル帝国帝都メガロポリス、宮殿内で修復が完了したジェノスピノを見つめるドクターマイルスとタツカー元帥は、

「再びジェノスピノが我が帝国の元に戻ったが、何故ライダーをあの小僧にした？」

「研究の結果、ジェノスピノの本能は怒りによるものだという結果が出ました。」

「怒りだと？」

「以前、復元した時の実験の際に何人かのライダーが発狂して暴走したことがあり、それによるとジェノスピノは乗り手に潜む怒りを爆発し、それによって自身の闘争本能を呼び覚まし、性能を引き出すとのことです。」

「しかし、先帝陛下は……」

「先帝陛下はそもそも冷静で感情の衰えが全くなく、更に帝王ギヤラー一世様と同等かそれ以上の腕でジェノスピノの性能を引き出していたわけで、それ以外の人間が乗るなら、誰かを憎み、怒りの感情を露にしている者が適任とし、実際、例の新帝国の反乱軍が復活させようとしている旧帝国にも似たような前列もあります。」

「なるほど、だから、我が帝国に恨みを持つあの小僧を洗脳したわけか。」

その時、オメガレックスが親衛隊とグレッゲル准将率いる部隊と共に宮殿に入り、ガネストはオメガレックスのкокピットから降りた。タツカー元帥はガネストの元に行き、

「皇帝陛下！ ご無事でしたか!!」

「うん、しばらく動けなかったけど、ようやく出れたよ！ ちょっと寒かったけど…」

「元帥閣下！」

「おお、グレッゲル准将か！ よくやった。」

「南極で氷付けにされたところを発見し、陛下はオメガレックスと共に自力で抜け出してそこを確保しました。」

「流石陛下だ！ やはり我がネオデスメタル帝国のギヤラガー王家はやはり最強にして崇高なる血筋を引くものばかりだ！これで我がネオデスメタル帝国は不滅になったのだ！」

「ところで、ボクがあそこにいる間、随分賑やかになってきたそうだね。ダークライガーとアーミテージまでやられて、ボクの出来損ないのコピーが裏切って反乱軍に寝返ったそうだね。」

「申し訳ありません！ 陛下。何せ例のライガーがEシールドを装備して更にパワーアップしたものですから…」

「へえ、そうなんだ。面白そうだね。正直あのライジングライガーは歯応えがなかったからね。あれの相手には飽きてきたからね。そういえば、ジェノスピノも復活したんだよね？」

「はい、もちろんです！ これで反乱軍に十分対抗できます！」

「ふくん、それじゃあ、面白いゲームが出来そうだね。」

「ゲーム…とは？」

「ボクのおメガレックスとあのジェノスピノのどちらかがあのライガーと反乱軍を潰せるか勝負するんだよ。」

ジェノスピノのライダーとして洗脳したあのウルフに乗ってた奴の実力がどれ程か知りたいしね。」

それを聞いたドクターマイルスは、

「ところで、陛下。そのゲームに何を賭けるんですか？」

「うくん、そうだね。じゃあ、負けた奴は電流でお灸を吸うのはどう？ 面白そうでしょう？」

それを聞いたグレッツゲル准将がちよつと想像してゾツとした。

「そいつが勝ったら、そいつをボクの親衛隊に入れてあげるとしよう。ま、そいつがボクに忠実になっているように洗脳していれば…だがね。」



さて、ボクは風呂に入ってから準備をしよう。あそこに何時間も固まっちゃったから、身体が冷えちゃったからね。」

そう言つてその場を去るガネスト、グレッゲル准将はタツカー元帥に近付き、

「元帥閣下、ちよつとよろしいでしょうか？」

「なんだ？」

「実は先ほど、オメガレックスの荷電粒子吸入ファンを調査したところ、反乱軍のソニックバード以外にも他のゾイドに撃ち抜かれた跡がありまして、それによると……」

「何！本当か!? どうやら、我がネオデスメタル帝国に裏切り者が現れたそうだな。」

「いかが致しましょう？」

「ふ、まあ考えておくか。それにギレル少尉ももはや反逆者となっているのだからな。」

同盟軍本拠地、シーザーたちゾイドが保管されている倉庫では、ギルラプターエンペラーにレイルとエマが、シーザーとベティにウィルとカティアがそれぞれメンテナンスを行っていた。

レイルがギルラプターエンペラーを優しく撫でて、エマが嬉しそうに見ていた。ギルラプターエンペラーはレイルの胸に当て、

「うわ、どうしたんだ？ ギルラプター。」

「ふふ、ギルラプターはあなたと一緒にいて嬉しいのよ。」

「そうか、今までお前を見棄てて御免よ。ギルラプター。でももう大丈夫だ！ お前は僕の相棒だから。」

そこにぬつとドクタースマスが現れ、

「いや、ホントに可愛いお2人じゃあ！ ギャラガー殿下！ わしに何か出来ることあらば、何なりとお命じになってください！ 何なら、可愛いお2人さんの結婚の仲人としての牧師をこのわしが…」

「いや、いいよ！ それに僕の名前はレイルで、もう帝国の皇子じゃないから。」

「え、てことはこれからは殿下と呼べず、名前を変えることになるのか？」

「もう僕は帝国とは決別したからね。でもそれでも僕は帝王ギャラガー一世の血を引

く者だけど。」

「でも、いずれエマちゃんと結婚するから、レイル・コンラッドになるのか？」

「でもそれだと、エマの弟と同じ名前になるからちよつと…」

「じゃあ、代わりに私がつけてあげる。レイル・ポーマンでどうかしら？ 私の先祖の祖父の名前なんだけど…」

「ギャラガーの名は捨てたくなかったけど、エマがせつかくつけたんだし、そうするよ  
！」

「では、ポーマン殿下！ わしに何か出来ることあらば、何なりとお命じください！」  
「だから、殿下はやめてよ！」

その様子を見たグラッドとストームは、

「ウイルもエマもすっかり元気になったそうだな。」

「まあ、愛する人物が側にいるようになったからな。」

「ん？ ああ、もしかして、リーダー！ 嫉妬してるのかな？ 弟子だけいい子が見つかって！」

「そう言うな。第一俺の嫁はもつと気の強い女にすると決まっているかならな！」

「お、言うじゃねえか！」

「俺の先祖の嫁はフリーダム団のメンバーで整備士だが、やたら滅法気の強い女でな

！そのおかげで先祖もフリーダム団のリーダーとして統制を取ることができ、

それ以来、フリーダム団リーダーの名を汚さないためにブレダ家の嫁は気の強い女にしろ！つてちよつとした伝統を作つて、それ以来俺の先祖の嫁はほとんど気の強い女で、

俺のおふくろも若い頃は勝ち気な性格で、俺が小さい頃、イタズラした時、こつぴどく叱られたこともあつたよ！

親父も俺に嫁貰うなら、必ず強い女にしろ！嫁が強ければ、自分も強くなる。ゾイドも同じだ！ 自分が強ければ、相棒も強くなれる！つてな。」

「へえ、そんなことがあつたなんて意外だつたな！」

「だから、俺のキングはここまで強くなつたんだ！」

「まさか、嫁探しと相棒探しを一緒にかけるとはな。で、どうなんだ？ いい女は見つかつたのか？」

「いや、同盟軍の指導者として戦つてそんな暇なかつたからな！ この戦いが終わつたら、世界を旅してゆつくり探してみるよ。」

「お前らしいな。」

その時、ジョンがバタバタと現れ、

「リーダー！ コマンダー！ 大変です!!」

「どうした？」

ウイルとストームたちは司令室に向かい、状況を聞いた。

「オメガレックスとジェノスピノが復活した!？」

それを聞いて驚愕する一同、

「はい、実は南極に閉じ込めたはずのオメガレックスが氷付けになりながらも自力で動き、荷電粒子砲で抜け出したとので、更にジェノスピノの修復が完了し、オメガレックス率いる親衛隊とジェノスピノ率いる帝国の正規軍がメガロポリスから出撃して進化したとの報告がありました。」

「なんてこった。せつかくのPGM―1もクリスとジャックの苦労が無駄になっちゃったぜ！」

「それにしても、南極で氷付けにされても自力で脱出するなんてなんて奴だ！」

「ところで、ジョン！ ジェノスピノも修復したらしいが、一体誰が乗っているんだ？ いくらあのネオデスメタルでもまともに乗れるライダーはそうそういないと思うが」

…

「実は…ジェノスピノのライダーは…リセルです！」

それを聞いたウイルたちは驚愕し、司令室のドアの前にいたユリスもそれを聞いて青ざめた。

「あいつが…ジェノスピノのライダー？ しかし、何故あいつが？」

「それはわかりません。ですが、既にジェノスピノはオメガレックスと共に帝国の正規軍を率いてメガロポリスから出ました！」

「まあ、グズグズ考えても仕方ない。よし、ではそれぞれオメガレックスとジェノスピノを迎え撃つかで別れる。俺はウイルと共にオメガレックスを、グラッドはジェノスピノを、あいつは元々お前の弟子だからな。あいつのことは任せた！」

「ああ、少々骨が折れるが、あいつの目を覚まさなきゃな！」

そこにレイルとユリスが現れ、

「あの、ストームさん。」

「なんだ？」

「ジェノスピノには僕も行かせてくれませんか？ 僕も力になりたいんです！」

「行けるのか？」

「ウイルとエマが僕を助けてくれた借りを返すためにも、ウイルが僕を救ったように

僕もあいつを助けたいんです！」

「君のギルラプターエンペラーは確かに強い。だが、ジェノスピノはあのデスレックスに次ぐ最強クラスのゾイドだ！」

「わかつてます。覚悟の上です！」

「わかった！ では、レイルはグラッドと共にジェノスピノの討伐を命じる！」

「あの…私も連れて行ってください！ 私もりセルを助けたいんです！」

「いや、危険過ぎる。君のデイメパルサーのレナはそもそも戦闘向きじゃないし、それに相手はジェノスピノだ！ レナが殺される可能性もあるし、それにレナのマッドオクテットは既に帝国軍に対策されているため、恐らく帝国軍には通用しないからな。それに君は新帝国の皇帝だから、危険な目に遭わせるわけにはいかない！ 悪いが、ここで大人しくしてくれないか。」

「わ、わかりました。」

「よし、では、全軍出撃する！」

ウイルとストームたちは同盟軍基地から出撃し、それぞれジェノスピノ、オメガレックスの向かった場所に向かった。ユリスは部屋の窓からその様子を見、

「リセル…」

およそ数キロ走つたところ、レイルとグラッドはジェノスピノ率いる帝国の正規軍が攻撃している都市に着いた。ここでは、ジェノスピノがA―Z高熱火炎放射とロングキヤノンで街を破壊していった。

「よし、レイル！ お前のことを見込んでジェノスピノはお前に任せる。俺は残りの雑魚を片付ける。」

「わかった。」

ギルラプターエンペラーは暴れまわるジェノスピノの方に向かったその時、黒い影がギルラプターエンペラーにぶつかり、ギルラプターエンペラーは倒れてしまった。

「これはこれは、アーネスト・ギヤラガー元殿下！」

目の前にいたのはバイザーを取り付けられ、ネオデスメタル帝国のエンブレムを張られたデルだった。そしてそのコクピットに乗っていたのはデーニッツ中将だった。

「お前は…デーニッツ！」



「おやおや、まさか、栄光あるネオデスメタル帝国の第一皇子たる元殿下が反乱軍に寝返る等、これでは崩御なされた先帝陛下もさぞお嘆きでしょう!」

「僕は僕のやり方でいく! もう帝国には縛られない!!」

「愚かな…」

もうスピードで攻撃するデル、ギルラプターエンペラーはそれを避けようとするが、デルのスピードに追い付けず、攻撃を喰らってしまう。

「そのハンターウルフは…」

「ああ、お気付きですか。そうです。あそこでジエノスピノに乗って暴れまわっている小僧のゾイドを私専用で改造したものです。」

ギルラプターエンペラーに襲いかかるデル、それを見たグラッドはレイルを助けに行こうとするが、多数のキルサイスの攻撃で手がつけられなくなる。ギルラプターエンペラーは攻撃を避けながらもデルに攻撃しようとするが、デルに全て避けられ、

「どうしました? 殿下。逃げてばかりでは私には勝てませんよ!」

「く! なんてスピードだ! それに攻撃が当たらない。」

「フフフ、このハンターウルフはパワー重視に改造されていたから、ドクターマイルスが帝国の最新技術で更にスピードを上昇させる改造を施したのです。」

つまり、このハンターウルフはパワー、スピード共に完璧なゾイド!

そして、私は四天王の一人ですから、元皇子であるあなたのことは十分に熟知している。つまりあなたの攻撃パターンは全てわかっている。あなたには勝ち目はない。ジェノスピノに触れることなく、私に敗北する。」

「何!?!」

デルはギルラプターエンペラーに突進し、更にギルラプターの動きを抑え、口でギルラプターエンペラーの首に噛みついた。

グオッ!!

悲鳴を上げるギルラプターエンペラー、

「レイル! くそ、数が多すぎる!!」

一方、ウィルとストームが向かったガネスト率いる親衛隊は別の都市にいて、粗方破壊していった。オメガレックスの横にはドライパンサーG3もいた。

「さて、例のライガーは来るのかな？　ボクのオメガレックスとどつちが強いか早く試したいよ！」

「陛下。お言葉ですが、少し注意を払った方がよろしいかと。あのライガーはEシールドを搭載し、ダークライガーとアーミテージを……」

「わかっているよ！　だったら、尚更楽しそうじゃない！　前なんか全然歯応えなかったからね。それにEシールドを持ってそんだけ強いならオメガレックスの本気も出せるってことになるしね！」

ボクのオメガレックスの荷電粒子砲にどこまで耐えられるかな？」

その時、シーザーとキング率いる同盟軍が到着し、

「オメガレックス！　俺が相手だ!!」

親衛隊のゾイドがシーザーに向けて構える中、

「いいよ。手は出さないで！　あれはボクの獲物だから。　フッフッフ!!」

オメガレックスはシーザーの前に出、

「ようやく、出てきたみたいだね！　ボクもあの寒苦しいところからやっと出れたよ！　しかもその間にダークライガーとアーミテージのステイレイザーまで倒したそう

だね。

つまり、これでようやくオメガレックスの力を試すことが出来るようだね。ま、せいぜいボクの期待を裏切らないようにしてね！ でないと面白くないからさ！」

それを聞いたウィルは、

「力を試す？ 期待を裏切る？ 面白くないだつて!？」

お前、そんなこととして一体何人の人々とゾイドを殺してきたんだ!？」

「何言つてんの？ そんなの決まってるじゃない！ ボクの楽しみを増やすためだよ！」

それにボクはネオデスメタル帝国の皇帝だよ！ だから、ボクが世界一強いってこと

を馬鹿な奴らに証明しなきゃならないからね。ボクと帝国に逆らう馬鹿な奴らにね

！ ハハハハハハ!!」

笑い上げるガネストにウィルは飛行ユニットを装備したオメガレックスが荷電粒子砲で空中から無差別に都市を破壊し、野生動物と野生ゾイドのいる森まで荷電粒子砲で焼き払ったことを思い出し、ゾイドキーとコクピットの操縦桿を強く握り、

「シーザー、行くぞー！」

シーザーはEシールドを張り、そのままオメガレックスに向かって突進し、シーザーはオメガレックスの顔に殴るかのよう前足でパンチした。オメガレックスは足を崩

し、よろめく。

「皇帝陛下下!」

ガネストはまるで実際に顔を殴られたように感じ、頬を撫でる。すると、ガネストはニヤリと笑い、

「この感じだ! 戦うために生まれたゾイドに乗ってゾイド同士の攻撃を自分も受ける。そうだ! これだ! これこそ、ボクの望んでいたことだ! キミなら、ボクとオメガレックスの力を十分に発揮出来る!!」

それを聞いたストームは、

「なんて奴だ。強いゾイドを手に入れ、それをオモチャのようにし、強いゾイド同士の戦いを楽しむ。奴はまるで生まれながらの戦闘マシンか!」

ウイルはコクピットの中でブルブル震え、

「そんなことのために、そんなことのためにあれだけのゾイドと人々を殺したのか!!」  
「だから、なんだ? そんなもん、ゴミに等しい命だろ! ボクはキミのような強そうなゾイドと戦うためにここまで来たんだよ!!」

「お前……最低だ!!」

「最低か……このボクに向かってそんな口を言うとはね。ちよつとイラついてきた。決まりだ! キミはここで殺しちゃお!」

「お前は許さない！ ウォー!!」

シーザーはオメガレックスに向かうが、オメガレックスは前足でシーザーの身体を掴み、

「さつきは油断したけど、今度はそうはいかないよ!」

「俺のシーザーはもう今までとは違う!」

「おい、待て! ウイル! いくらパワーアップしたからといって闇雲は…」

シーザーの元に行こうとするキングの前にドライパンサーG3が現れ、

「おっと、そうはいかないよ! せっかくの陛下のお楽しみを邪魔させるわけにはいかないからね。 あんたあたしが直々に始末させて上げる! 以前はアーミテージが倒されたから、一時撤退したけど、今度はそうはいかないよ!!」

「仕方ないようだな! だが、俺のキングはそう倒されはしないぜ!!」

「でもあんたは帝国にとつては目障りな存在、潰して上げるわ! ドライパンサー! 兵器 解放! マシンブラスト!! ドライスラッシュュ!」

「キング! 進化 解放! エヴォブラスト!! キングオブクローブラスト!」

シーザーを足で踏みつけようとするオメガレックスはシーザーはすかさずEシールドで防ぐ。オメガレックスはそのままEシールドを張ったシーザーをグリグリし、押し潰そうとする。

「へえ、確かに固そうだね。どこまで耐えられるかな？」

オメガレックスはそのまま体重をかけ、シーザーの身体が地面に盛り込んでいく。

「う、ぐ…」

オメガレックスは足をどけた瞬間、シーザーを蹴った。吹っ飛ばされるが、Eシールドで何とかダメージを防ぐ。

「ふうくん、思ったより固いんだね。じゃあ、そろそろ行くよ！」

オメガレックスはシーザーに向けて態勢を取り、

「まさか！」

「ボクのオメガレックスの荷電粒子砲にどれだけ耐えられるか実験しよう。オメガ

レックス！ 兵器 解放！ マシンブラスター!!」

マシンブラスターしたオメガレックスはシーザーに向けて荷電粒子砲を撃つ態勢を取る。それを見たストームは、

「ウイル！」

「どこを見ている！ お前の相手はあたしだ！」

ドライパンサーG3の攻撃を避けるキング、

「オメガレックス！ ファイヤー!!」

シーザーはすかさずEシールドを張り、オメガレックスの荷電粒子砲がシーザーに直

撃する。しかし、シーザーのEシールドは荷電粒子ビームを真つ二つに切り裂いた。

「ふ、どうやら、俺が助けにいくまでもなかったな!」

「凄いぞ、シーザー! やっぱりお前は凄いよ!」

シーザーはウイルの言葉にうなづく中、ガネストは拍手しながら笑った。

「ハハハハハハ! 凄い、凄い! Eシールドって結構固いつて聞いてたけど、ここまでとは思わなかったよ! 前なんか一発でダウンしちゃったけど、まさかその一発を止めることが出来るなんて凄いよ!」

それを見たストームは、

「なんて奴だ。荷電粒子砲を破られたにも関わらずそれを喜ぶなんて!」

「いや、あの寒いところからようやく出られたかいがあったよ! ホント、キミ気に入ったよ! これでボクもようやくよく本気を出せる。さあ、もう一発喰らいなよ! オメガレックス、ファイヤー!!」

ガネストの狂気的な表情をした瞬間、オメガレックスはもう一発荷電粒子砲を撃つた。シーザーは間一髪でEシールドを張り、攻撃を防いだ。ガネストは不気味な笑みを浮かべ、

「フフフフ、これでオメガレックスの力と荷電粒子砲の威力を存分に味わえるね! さて、キミは後何喰らったら死ぬのかな?」



シーザーがオメガレックスの荷電粒子砲を耐える中、別の都市では、ギルラプターエンペラーとデルが戦っていた。

「くそ、これでは不味い！ 行くぞ、ギルラプター！ 切り刻め、ギルラプター！ 俺の魂と共に、本能 解放！ ワイルドブラストー!!」

「ほうく、デスブラストではなく、ワイルドブラストをするとは！」

デーニツ中將はディメパルサートランスに取り付けた装置をデルに取り付け、

「ハンターウルフ、洗脳 解放！ マインドブラストー!!」

「真・瞬撃殺!!」

「フルハウリングショット!!」

ワイルドブラストしたギルラプターエンペラーとデルの攻撃がぶつかり合い、2体はその衝撃で共に吹っ飛ばされる。

「く、強いー！」

「どうやら、アーミテージを倒した実力は伊達じゃなかったようですね！」

レックスはキルサイスやデイロフォス、キャノンブルの猛攻を避けながら、ジェノスピノに攻撃するが、ジェノスピノは街の破壊に気を取られていて、見向きもしない。

「くそ、全く注意を引き付けられねえ。それにしてもあいつ一体どんな洗脳を受けたんだ!？」

レックスの攻撃に気付き、レックスを見たリセルは、

「あれは、破壊する！ 俺の前に立ちはだかる者は全て破壊する！ ウオオー!!」

ギユオオー!!

リセルの叫び声と共にジェノスピノも咆哮を上げる。

「ジェノスピノ！ 兵器 解放！ マシンブラストー!! ジェノサイドクラッシュャー!!」

マシンブラストしたジェノスピノは帝国軍のデイロフォス、キルサイス、キャノンブルを蹴散らし、ジェノソーザーの刃をレックスに向けた。

「やべー！」

レックスは間一髪で避けるが、ジェノスピノはそのままギルラプターエンペラーとデルの元まで行った。

「ヤバ!!」

レックスはその後を追いかけ、ジェノスピノが近付いたことに気付いたデーニツツ中将は、

「おっと、これは不味い!」

デルはその場を離れ、レイルもそれに気付くが、時既に遅く、ジェノスピノのジェノソーザーがギルラプターエンペラーの直ぐそこまで迫っていた。

T o b e c o n t i n u e d

## 第38話 「グラビティキャノン始動」

ある都市でオメガレックスはシーザーに荷電粒子砲を何発か撃った。シーザーは全てEシールドで防ぐが、シーザーのコクピットから警告が出る。

「警告!?!」 そうか、Eシールドを張れる時間が限界に来たのか! このまま荷電粒子砲を受け続けたら、こっちのEシールドが破れるのは時間の問題。何としても反撃しないと。」

その時、オメガレックスが次の荷電粒子砲を撃つためのチャージに入る。

「今だ!」

しかし、オメガレックスはチャージ中にA—Z三連誘導ミサイルと対地空両用速射砲もシーザーに撃ち込む。

「くそ、これでは反撃出来ない!」

「これで、何発撃ったかな? ん〜と、あ! 5発だ! つまりこれでキミは5回死んだことになるね! さて、後何回で死ぬかな〜?」

ピピ!

「ん? オメガレックスが若干オーバーヒート気味か… となると、荷電粒子砲とE

シールドの根比べになりそうだね！　ま、でも、Eシールドが使えなくなれば、あいつは無防備だし、それにエネルギーも無くなるだろうから、後はミサイルや速射砲や格闘でゆつくり料理すればいいしね。　オメガレックス、ファイヤー!!」

「くそ、これじゃ、やられる!」

別の都市では、暴走したジェノスピノの刃がギルラプターエンペラーに向かった。ギルラプターエンペラーは避けきれないが、咄嗟にレックスがギルラプターエンペラーを掴み、ジェノスピノから離れた。

「レイル、大丈夫か!？」

「大丈夫です！」

「どうした？ お前らしくないな。 あん時、俺と戦った時のお前ならこんなことは避けられたはずだぞ！」

「すみません！ ダークライガーの洗脳から解放されて以来、今までの感覚がどうも鈍くなつてしまつて！」

「にしても、お前ホントに可愛くなつたな！ ウイルと初めて会つた基地での戦いでは帝国の御曹司らしい生意気なガキだったが、エマと一緒になつてから、エマみたいに可愛くなつたじゃねえか！ そりゃ、ロリコンのあのじいさんでも惚れるわけだ！」

「う、うるさい！ 俺は男だ！ それも帝王ギヤラガー一世の……」

「そうだ！ その意気だ！ あの時、俺と戦った時のことを思い出してみろ！ 今のお前はあの時より強くなつているはずだ！」

「あの時の……感覚……」

その時、デルが襲いかかり、レックスはギルラプターエンペラーは咄嗟に避けた。

「そうだ！ その感覚だ！ 俺はあのジェノスピノをやる！ そいつはお前に任せる！」

「ふん、いくら、パワーアップしたところでジェノスピノを止めることは不可能だ！（それにしても、ドクターは何をやっているのだ？ 万が一、暴走することを想定してハ

ンターウルフを私に譲った代わりに私のデイメパルサートランスをジェノスピノ制御のための遠隔操作に使うと言っていたのに、今のジェノスピノは我が軍まで襲って完全に暴走しているではないか！　だが、今は裏切り者を始末することが先だ！　フルハウリングショット!!」

デルのマシンブラスト技にレイルは感覚を思いだし、ギルラプターエンペラーはその全ての攻撃をかわした。

「そうだ、これだ！　行くぞ、ギルラプター！　真・音速殺！」

ギルラプターエンペラーはデルの攻撃を避けながらデルに近付き、目の前に来た瞬間、デルはさっと避けようとするが、ギルラプターエンペラーは態勢を変え、足でデルを蹴り、デルは態勢を崩して倒れた。

「う、ぐ…」

「そうだ！　僕は帝王ギャラガー一世の血を引く者だけど、世界を支配するためじゃない！　世界を平和にする、そのために戦ってきたんだ！」

「ふ、どうやら、少しはマシになったようですが、あなたは私には勝てませんよ！」

「僕は帝国から離脱したけど、僕は帝国を倒すんじゃない！　帝国を正すために来たんだ！」

「ふ、まさか、そこまで墜ちましたとはね。必ず殺してやり

ますよー！」

レックスはジェノスピノにガトリングを撃ち込むが、ジェノスピノは見向きもせず、敵味方見境なく暴走していった。

「ウオオー!!」

ギユオオー!!

都市から離れた場所で、デイメパルサートランスが高周波パルスを放ち、無人のコクピットには遠隔操作機能が付いていて、宮殿の司令室にいるドクターマイルスがデイメパルサートランスを操作していた。ジェノスピノの様子を見たタッカー元帥は、

「ドクター、これはどういうことだ? ジェノスピノが暴走しているではないか!」

「ライダーの様子はどうなっている?」



「ジェノスピノのライダーの脳波に異常な数値をきたしています！ このまま戦闘を続けたら、理性を失い、完全に暴走します!!」

「ふむ、どうやら、明確に怒りをぶつける相手がないとただ暴れまわるだけになるのか、となると、もう少し調整が必要だな。」

デイメパルサートランスのファイナルマッドオクテットを発動し、ジェノスピノを停止しろ！ それとデーニッツ中将に撤退命令を！」

「了解しました！ デイメパルサートランス、マシンブラスト発動。ファイナルマッドオクテット、最大出力！」

マシンブラストしたデイメパルサートランスは暴れまわるジェノスピノに向かってファイナルマッドオクテットを放った。

ファイナルマッドオクテットを喰らったジェノスピノは咆哮を止め、目の色が消え、そのまま倒れ、同時にコクピットのリセルも倒れた。ギルラプターエンペラーと交戦しているデルのコクピットにタツカー元帥からの通信が入り、

「デーニッツ中将、ジェノスピノの暴走で我が軍に損害が出た。一時撤退しろ！」

「やつぱり、そうになりましたか。ま、あの裏切り者の始末はいくらでも出来るでしょう。全軍撤退だ！」

デルはその場を離れ、ジェノスピノもスナイプテラとキルサイスに護送された。レッ

クスはギルラプターエンペラーの元に寄り、

「レイル、大丈夫か!？」

「僕は大丈夫! それより、一体どうなったの?」

「わからん! だが、先ほど、ウィルがオメガレックスに苦戦しているとの報告があった。早く助けに行くぞ!」

グラッドとレイルがウィルたちの元に向かう中、シーザーはEシールドで全ての荷電粒子砲を受け止めるが、Eシールドに火花が散り、シーザーも苦しんでいた。

「シーザー、大丈夫か!？」 くそ、Eシールドも限界に来てシーザーも満身創痍になっている。どうすれば…」

シーザーに荷電粒子砲を撃ち込む中、ガネストはオメガレックスのコクピットのゲージを見、

「そろそろ、荷電粒子砲も限界に来たか……。まあ、向こうのEシールドも限界に来てるし、それにEシールドを維持するのにかかなりのエネルギーを浪費している。

それに比べ、こっちは荷電粒子砲が使えなくてもまだ使える武器はある。Eシールドを破った後はゆつくり料理すればいい。

さて、荷電粒子砲も残り一発になった。これで決めてやる。オメガレックス、ファイヤー!!」

オメガレックスの最後の荷電粒子砲がシーザーに直撃し、遂にシーザーのEシールドが破れた。Eシールドが破れたのを見たオメガレックスは猛スピードで突進し、シーザーの身体を掴み、身動きを封じた。

「これで、キミは無防備同然だね! ま、ボクのオメガレックスの荷電粒子砲も今の一発で使えなくなっただけ、パワーならオメガレックスが上だから、後はじっくり料理させてもらうよ!」

オメガレックスはシーザーに対地空両用速射砲を撃ち込み、シーザーの身体を押し潰すように体重をかけた。

「ウィル!」

「人の心配してる暇あるの!? ドライスラッシュユ!!」

キングはドライパンサーG3の攻撃をさっとかわし、ドライパンサーG3はそのまま

同盟軍の複数のラプトリアの頭と手足を一瞬で切り刻んだ。

「帝国で最も残忍な方法でゾイドと人間を殺す女がいるって聞いたが、どうやら、貴様だったようだな。」

「その通り、このドライパンサーG3の赤は我が親衛隊を表していると同時に私が今まで処刑した愚かな反乱者の血とゾイドのオイルの血も表している。

あたしが鎮圧した後の戦場には反乱者とゾイドのオイルの血だけが残ったため、帝国ではあたしのことをこう呼んだ！

ブラッディ（血まみれ）ベケット、とね。あたしが今まで処刑した反乱者のゾイドの血で染まっているこのドライパンサーG3はあたしの誇りにして皇帝陛下への忠誠心を現している！ だから、あたしは全ての反乱者を潰し、皇帝陛下の直属として出世する！」

「なるほど、旧デスメタル帝国の四天王にも異名を持った奴がいたが、お前もそれにならって自分の異名をつけたってわけか…。」

そのドライパンサーにもそれなりの思い入れがあるようだが、罪のない人々とゾイドを殺す道具にするのはちよつといただけじゃないな！」

「ふん、我が帝国と皇帝陛下に逆らった罰よ！次はあんたのライガーの血であたしのドライパンサーに染めるのよ！ ドライスラッシュュ!!」

「真・音速殺!!」

キングに攻撃しようとするドライパンサーG3にギルラプターエンペラーが攻撃した。

「何!?!」

「大丈夫ですか? ストームさん。」

「ああ、ところで、ジェノスピノは!?!」

「説明は後でします。」

同時にレックスが現れ、

「行くぞ、レックス! ファイナルガトリング!!」

エヴォブラストしたレックスのファイナルガトリングがオメガレックスに直撃し、オメガレックスはよろめき、その隙にシーザーは脱出した。

「ありがとう。グラッド! 戻ってきたということはもしかしてジェノスピノを!?!」

「いや、それが…」

態勢を建て直したオメガレックスは、

「これは驚いたね! ガトリングフォックスに加え、まさか、出来損ないの兄のギルラプターエンペラーまで来るとはね。いいよ! 全員でかかって来て、その方が楽しいからさ!」

その時、コクピットからドクターマイルスの通信が入り、

「陛下！ どうか一時撤退を。」

「え、なんで？ せっかく盛り上がって来たのにもう止めちゃうの!？」

「お言葉ですが、多勢に無勢、オマケにオメガレックスもさっきの荷電粒子砲の連射でオーバーヒートしています！ これ以上戦闘を続けるのは危険かと！」

「でも、ボロボロなのは向こうも同じだよ！ ここで始末した方がいいんじゃないの？」

「ですが、その代わり、お戻りになった際には荷電粒子砲の連射を可能にしますの  
で。」

「仕方ないね。じゃあ、楽しみは取っとくよ！ 全軍撤退〜。」

オメガレックスが引き上げ、ドライパンサーG3ら親衛隊ゾイドもそれについていて  
て撤退していった。シーザーは倒れ込み、

「大丈夫か!？」

「大丈夫です…けど…」

「基地に戻ってシーザーの手当てを！」

ウイルたちは基地に戻り、それぞれの疲れを癒し、次の作戦のために司令室で待機していた。司令室にドクタースミスが入り、

「どうなんだ。シーザーの様子は？」

「身体自体は問題ないのじゃが、Eシールドを維持するためにかなりのエネルギーを消費したため、しばらくは安静にした方がよさそうじゃな。」

まあ、それに殿下が怪我をしないで良かったが、もし、殿下に万が一のことがあつたら、このわしが踏み潰してやる！　そして、エマちゃんとの結婚式もこのわしが…  
ポカン！

「ええ加減にせい！」

ウイルは落ち込んで、

「ごめんなさい。俺が軽率な行動をしたばかりに…」

「いや、お前はよく頑張ったよ！俺がドライパンサーとやりあっている間にあの荷電

粒子砲をあれだけ耐えたのは大したものだ。」

「しかし、スピリットライガーになったシーザーですら苦戦させるとは、やはりオメガレックス、早々簡単には倒せないか…。」

「オメガレックスだけじゃない！おそらくあのライダーの力も影響しているだろう。ゾイドは絆を結んだ者と才能を持つ人間によって初めてその本来の性能を引き出せるのだからな！」

それはそうと、グラッド！ さつきジエノスピノが暴走してたつて言つてたが、どういうことだ？リセルにはレイル同様に洗脳されていたんじゃないやなかつたのか？」

「俺も詳しいことはわからないが、おそらく何らかの理由でジエノスピノを制御出来なくなつて帝国軍のゾイドにも攻撃し、その状況を見て撤退したんだろうな！」

「とりあえず、難は逃れたが、また調整して出撃するだろう。早急に対策を打たないと！」

「とはいえ、シーザーですら、あの苦戦でオマケにあの2体がまた攻めて来たら、手に負えない！ それにあの2体を迎え撃つ戦力が今の俺たちには…」

「フフフ、そこでこの天才科学者のわしが先程、クルーガー將軍と話し…」

その時、クルーガーとデルタたち旧共和国派の幹部が現れ、

「その件は私から話す。」



「あり？ わしの説明が……」

「実はデルタたちが旧共和国の首都である旧ネオヘリツクシティがネオデスメタル帝  
国軍に占領される前、かつて旧共和国が残した伝説の兵器、グラビティキャノンを出  
の際に持ち帰り、ジェノスピノに対抗するために保管していたので、それを使用するこ  
とに決定した。」

「グラビティキャノン……というと、あの荷電粒子砲と同等かそれ以上の威力を持つあ  
の最強兵器か！」

「実はかつて惑星Ziの共和国もそれを使ってオメガレックスのような強大なゾイド  
に対抗したことがあるそうさ。だから、我々も同様にそれで対抗しようということです  
！」

「しかし、聞いた話じゃ、それって威力がとてつもなく高い代わりに僅か数発しか撃て  
ないんじゃないかってっけ？」

「その通りだ！ 今回はジェノスピノに加え、オメガレックスもいるため、A—Z連装  
キャノン砲を二門備えてあるが、それぞれ2発しか撃てない。」

「おいおい、それじゃ、テスト撃ちも出来ず、ぶっつけ本番で撃たなきゃならないつて  
ことになるし、

オマケに計4発あってもジェノスピノとオメガレックスがいるから、実質2発しかな

いことになることになるぜ！

それにオメガレックスには荷電粒子砲があるから、迎撃される可能性もあるし、明確な作戦はあるのか？」

「もちろん、グラビティキャノンを装備してジェノスピノとオメガレックスを狙い撃ちにするゾイド、そして、グラビティキャノンを奴らに当てるために注意を引くゾイドに分けるのだ。」

「で、グラビティキャノンを装備するゾイドは？」

「グラビティキャノンはかなり重量があり、ゾイドにもかなり負担がかかり、更に狙っている間は無防備になるため、相当頑丈なゾイドに装備させなければならぬため、最初はEシールドが使えるシーザーにしようかと検討していたが、Eシールドを張りながらグラビティキャノンで狙うとなると、シーザーにかなりの負担がかかるため、私のゴールドに装備させることにした。」

ゴールドはマグマにも耐える装甲を持っているから、そう簡単には倒れぬ。そして、シーザーはキング、レックス、ギルラプターエンペラーと共にジェノスピノとオメガレックスの注意を引く役割をすることに決定した。」

「そして、残りはグラビティキャノンを撃ちやすいよう、ゴールドをサポートし、ジェノスピノ、オメガレックス以外の帝国軍を始末するってとこだな！」

「待て待て〜い！ エマちゃんの花婿たる殿下をそんな危険な目に遭わせるわけにはいかん！」

わしは殿下をお守りするために殿下のお側にいる！」

「じゃ、決まりだ！ スミスは2体を誘き寄せる囚役だ！」

「へ？ 何〜!! それ、どういうこっちゃ!?」

「レイルを守りたいなら、その盾となる奴が必要だからな！」

「何を言うとするんじゃ！ あんな奴に立ち向かったら、わし、確実に死ぬぞ!!」

「大丈夫！ スレイマーズもつけてやるからさ。」

「それでは安心出来んわいん！」

「この作戦成功したら、レイルとエマの結婚式の牧師やらせる上に2人の執事にしてやるからさ〜！」

「え、ちよつと待つてよ！ ストームさん、そんな勝手に…」

スミスは結婚式を挙げるレイルとエマの姿と自分が屋敷でレイルとエマと一緒にいる様子を想像し、

「よっしゃ〜! やつてやる！ わしの力を見せつける時じゃあ〜!!」

「よし、取り敢えず、振り分けは決まったが、ところで、クルーガー、場所はどうかするんだ？」

「場所は、旧ネオヘリックシティだ。今回の戦いはあの2体を倒すと同時にリセルを取り戻すための戦いだ！」

「確か、あそこはあんたとリセルがジェノスピノ率いる帝国軍と戦ってリセルが捕虜にされ、リセルが帝国を憎んだきつかけの場所だな。」

「そうだ！ あいつを正気にさせるなら、そこが適任だと思って。」

「でもさ、そこで迎え撃つても余計あいつの復讐心を煽るだけじゃねえか？」

「そこで、ユリスをレナを私とゴルドのサポートとしてつかせるのだ。」

「おいおい、ちよつと待てよ！ いくらなんでも彼女を戦場に送るのは不味いんじゃないか！」

そうなると、新帝国のシーガル共も黙っていないし、それにレナのマッドオクテットは帝国軍には通用しないんだぜ。」

「もちろん、私がシーガル中将与話をつける。それにレナのマッドオクテットは帝国軍に対策されているとはいえ、先のダークライガーの時にレイルの洗脳が徐々に溶け初めていたこともあったから、少なからず影響は受けているはずだ！」

それに彼女はあいつにとって大切な存在だ。賭けてみる価値はあるだろう。」

「少々危険な賭けだが、やってみるしかないな。」

「それにもし、リセルを正気に戻すことが出来れば、あるいは…」

「なるほど、つまり、リセルが正気に戻った時、ジェノスピノがこちらの味方になり、敵の戦力を落とせる上にオメガレックスだけにグラビティキャノンを撃つことに集中でき、僅かな弾数にも少しは余裕が生まれるってわけだな！」

「そういうことだ。」

「よし、そうと決まれば早速出撃準備をする！全員用意はいいか!？」

「はい！」

「ウィル、お前とシーザーの力、もう一度あのオメガレックスに見せつけるときだ！」

「はい！」

南方総督府、そこにルメイ大将率いるスナイプテラ3SとキルサイスSS部隊が離陸

した。総督府のアッカーマン中将のいる一室にコナー少佐が入り、

「中将！」

「コナー少佐か。何だ？」

「ルメイ大将が面会したいとのことですが……」

「ルメイ大将が？ もしや……」

部屋を移動し、アッカーマン中将はルメイ大将と面会した。

「これは、ルメイ大将。私に一体何の用でしょうか？」

「私は本国にいる元帥閣下の代理として来たんですが、実はあなたの部隊に我が帝国の反逆者、いや、反乱軍と通じている者がいるとの疑いがありました！」

「その根拠は？」

「以前、陛下のオメガレックスが反乱軍のソニックバードと交戦し、荷電粒子吸入ファンを撃ち抜かれ、南極に落ち、そこで凍り付けにされたのは御存知ですね？」

「ええ。」

「しかし、オメガレックスの荷電粒子吸入ファンを調査したところ、実はソニックバード以外にも他のゾイドに撃ち抜かれた跡がありまして、調査の結果、スナイプテラによるものだと判明しました！」

それを聞いたアッカーマン中将は齒をくいしばり、

「やはり……」

「最初は新帝国の反乱軍のスナイプテラのものではないかと思われましたが、そもそも反乱軍の旧式ごときに陛下のオメガレックスの荷電粒子吸入ファンを撃ち抜けるわけがない。」

だとするならば、我が軍のスナイプテラしかないことになる。更にあなたの部下のカーター大佐がスナイプテラで出撃して偵察していた時はちょうど陛下がオメガレックスで反乱軍制圧に向かっていたのと同じ時間なんですよ！」

「つまり、カーター大佐を容疑者として軍事裁判にかけると？」

「私もこんなことは思いたくありませんよ！ 帝国に忠義を尽くすあなたの育てた優秀な軍人が反逆者なんて！」

でも、万が一の場合もあります。何故なら、戦死したと思われた大佐の娘のギレル少尉が反乱軍に寝返ったとの報告もありました！」

それを聞いたアツカーマン中将は少し驚いた。

「では、もし、カーター大佐がやったとしたら、当然私にも処分は下されますね。」

「君の教え子だから、当然そうなるが、しかし、君は我がネオデスマタル帝国に忠誠を誓った男、出来るだけ寛大な処分にするよう、元帥閣下にお願います。」

「いえ、もし、カーター大佐がそのようなものになってしまったのは元はと言えば、私

の責任ですから、大佐が本当に反逆者なのなら、遠慮なく私を処分してください。」

「やったのが大佐じゃないことを祈るよ。ところで、大佐がもう一つ所有しているキャノンブルも見当たらないようだが…」

「処分しました!」

「何故だ?」

「大佐はこの頃、スナイプテラばかり乗っていて、大佐以外にあのキャノンブルに相應しいライダーがいませんし、それに我が帝国にはもつといい最新式もありますので…」

「ふ、そうか、だが、それでいい。使えないゾイドと部下は不良品として捨てるのが我が帝国の流儀なのだからな! では、私はここで失礼する。」

ルメイ大將が退出した後、アツカーマン中將はコナー少佐に

「少佐! シュバルツ中佐を呼んで、この次第をカーター大佐に知らせろ! それと我々と親しくしている例の企業にも連絡を!」

「中將、まさか…!」



帝都メガロポリス、宮殿ではジェノスピノとオメガレックスの調整が行われていた。宮殿の一室で、ドクターマイルスはリセルに、

「リセルよ！ お前が憎むべき者は我々ネオデスメタル帝国ではない。あの小僧とライガーだろ？」

自分より年下のくせに反乱軍の中ではお前より上の扱いになり、オマケにハンターウルフをより強力な姿に改造したにも関わらず、更に強力な姿になったライガーに手柄を奪われ、えこひいきされ、益々お前は遅れを取り、あいつとの差をつけられるようになって。違うか？」

「そうだ！ あいつは俺より年下で、初めて出会った時はただの素人だったのに、いつもいつもあいつだけ俺の先を行ってオマケに更にパワーアップして最強であるはずの俺のデルを上回りやがって、挙げ句にあいつだけ大きい目で見られやがって！ 許さん、絶対に許さん!!」

あいつは俺が潰し、俺が最強だつていうことを証明してやる。そもそも父さんと母さんが死んだのは俺が弱かったからだ。俺が強いことを証明すれば、もうあんな悲しみは

味わうことはない。だから、俺は強くなる！甘さは捨てる！」

「そうだ！では今度はその怒りと憎しみをあのライガーにぶつけ、始末するのだ！」  
そう言ったドクターマイルスは部屋を退出し、

「これでいい。これでジェノスピノの本来の性能は引き出され、ディメパルサートランスのマッドオクテットによる制御はやりやすくなるだろう。」

「ドクター！」

そこにガネストが現れ、

「これはこれは、皇帝陛下下！」

「さっき、せっかく楽しんでたのに途中で撤退させたけど、それなりのことはしてるんだよね？」

「もちろんです。今度はオーバーヒートしないように例のリジエネレーションキューブの端末を元に開発した装置を取り付けました。」

これで、荷電粒子砲のチャージ時間は大幅短縮され、オーバーヒートの心配をせず、連射は可能となるでしょう。」

「ふうん、それなら楽しみだ。じゃあ、あいつの身体が溶けるまでバンバン撃てるってことだね。そう考えると、ゾクゾクしてきたよ！」

そこに兵士が現れ、

「ドクター、陛下！ 元帥閣下がお呼びです！」

宮殿の司令室にはベケット少佐、デーニッツ中将も集結し、

「反乱軍が旧ネオヘリックシティを占領した？」

「我がネオデスマタル総督府が反乱軍に破壊され、その後、旧共和国の旗を掲げたそう  
だ。」

「今さら、あの古くさい旧共和国を復活を宣言して意気揚々としているわけ？ おめで  
たいわね。」

「だが、国の復活を宣言するなら、本来、敵対国を倒してからやるのが普通だ。

我々にはジェノスピノやオメガレックスがいて戦力はむしろ増大している状態だ。  
この状況で国の復活を宣言するなんて自殺行為もいところだ！」

「てことは、国の復活を宣言した陽動作戦ってどこかしら？」

「雪辱戦ゲームをしようとしているんだよね！ だってあのライガー、更にパワー  
アップしてダークライガー倒したけど、それでもボクのオメガレックスに敵わなかった  
から、仕返すするために全力で潰そうとしているんだよ。」

「ま、ボクにとっては面白いゲームが出来るからむしろ好都合だけどね！」

「元帥閣下、反乱軍の軍勢はどれ程で？」

「旧共和国と新帝国を加えておよそ5万とのこと。」

「では私の正規軍とベケット少佐の親衛隊による合同軍で迎え撃ちましょう！　いくら、ジェノスピノ、オメガレックスがいるとはいえ、反乱軍に厄介な策があったら、手がつけれませんから、軍は出来るだけ多い方がいいでしょう。」

「で、どれぐらい欲しい？」

ウイルたちはジェノスピノとオメガレックスを迎え撃つため、かつての共和国の首都、旧ネオヘリックシティ、旧共和国派の兵士は遺物となった移民船の上に旧共和国の旗を掲げ、歓声を挙げていた。グラッド、ストーム、クルーガーはその様子を見て、

「よし、後はジェノスピノとオメガレックスが来るのを待つだけだな。それにしても、まさか、全員で行くことになるとはな。しかもエマまでついてきて…」

「まあ、あの2体を迎え撃つというデカイことするからな。それにエマはゾイドのメ

ンテナンスや整備には詳しいから、グラビティキャノンのことにも詳しいし、それにレイルやギルラプターもエマと一緒にいて仲良くなっているじゃねえか。後、あつちの囃役も！」

ストームが指差した先にはスミスがスレイマーズたちに言い聞かせ、

「いいか、お前たち！ この戦いに勝てば我々は殿下とエマちゃんの結婚式に出られ、その親衛隊になることが出来る！」

そうなれば、わしらはあの可愛い殿下とエマちゃんの姿を一生眺められる。それにこの作戦には新帝国皇帝メルビル二世のユリスちゃんまでいる！

上手くいけば、新帝国の幹部にもなれ、殿下とエマちゃん、そして、ユリスちゃんの元でウハウハ状態じゃ!!

さあ、皆の者、全力で戦うぞ！」

「オオー!!」

その様子を見たグラッドとストームはポカーン状態になり、

「おい、ストーム。お前、仲間にするメンバァミスったんじゃないか？」

「ま、まあ、いいじゃないか。士気は高いわけだし。」

「士気って、ありや、欲望の塊だろ！ 緊張感が全くないぜ！」

「まあ、でも兵士の士気を上げるのは戦いにおいては重要なことだし！」

「リーダー、コマンダー！」

「ジョンか、どうだった？」

「作戦通り、帝国軍は誘いに乗って出撃し、こちらに向かっています。」

「よし、後は作戦通り行けばいいな。」

「ただ……」

「ただ、なんだ？」

「敵の数がこちらの予想を遥かに越えるものでして……」

「こっちは総力戦を想定して旧共和国、新帝国の戦力合わせて5万もいるが、い、一体どれ程の規模だ？」

「正規軍、親衛隊を合わせて60万です！」

それを聞いたストームたちは青ざめた。侵攻するジェノスピノとオメガレックスの周りには正規軍と親衛隊によるキャノンブル、バズートル、ステイレイザー、そして、大量のキルサイス、デイロフオス、デイメパルサー部隊がついていた。

旧ネオヘリックシティに向かって歩くオメガレックスのコクピットにいるガネストは不気味な笑みを浮かべ、

「さあ、ゲームを始めようか！」

To be continued

## 第39話 「迎え撃て、二大破壊龍」

旧ネオヘリックシティで侵攻してくるジェノスピノ率いる正規軍とオメガレックス率いる親衛隊による帝国軍の連合軍の規模を知ったウィルやストームたちは、

「おいおい、それって桁が違いすぎじゃねえか。」

「1人につき、10体を倒さなきゃならないってことか……。どうする？ クルーガー。」  
「敵にはデイメパルサー部隊もかなり導入しているとは、こちらに何か策があると予想してそれだけの部隊を出したってことか……」

仕方ない。ここは一度奪還したとはいえ、ネオデスマタル帝国に占領されてから、かなり荒れている。住民の避難は既に完了しているし、復興は戦いが終わった後でも十分だ。なら、思いきった作戦に切り換える！」

「その作戦とは？」

ジェノスピノ率いる帝国の正規軍とオメガレックス率いるギャラガー親衛隊は旧ネオヘリックシティに向けて進行していった。

「さて、ようやく楽しいゲームが始まる。キミ、さつき暴走したけど、大丈夫かい？

もし、これでしくじったら電流でお灸を吸う罰ゲームを喰らってキミの地位も危なくなるよ！ キミが狙っていたライガーだってボクが殺しちゃうけど、それでもいいのかい？」

ジェノスピノのkokopittにいるリセルは無言でいた。

「ボクとは口を聞きたくない…そんなところか！ まあ、いいや、精々ボクの期待を裏切らないようにしてね！」

ジェノスピノ、オメガレックスが旧ネオヘリックシティに着いた時には街には誰もいず、静まりかえっていた。

「あれ、ボクたちを呼び出しといてまさか、逃げちゃったの？」

その時、シーザーとキングがジェノスピノとオメガレックスの目の前に現れた。リセ



ルはシーザーを見て操縦桿を強く握り、

「シーザー……」

「ようやく出てきたね！ でもまさかたつた2体でボクたちと戦うつもり？ そんなんじゃない、また、前の二の舞だよ！」

「だから、お前たちにはいいステージを与えてやるんだ。ついてこい！」

そう言つてキングとシーザーはそのまま走り去つた。

「何考えているか知らないけど、精々ボクをつまらない気分になせないでね！」

オメガレックスとジェノスピノがキングとシーザーの後をついて走る中、ベケツト少佐のドライパンサーG3やデーニッツ中将のデルもついていこうとするが、ガネストは待つたをかけ、

「いいよ！ ついてこないで。あれはボクの獲物だからさ！ フッフ。」

追つてくるオメガレックスとジェノスピノを見たストームは、

「よし、作戦通り、オメガレックスとジェノスピノだけついていつている。ウイル！ 手はず通りにやるぞ！」

「はい！」

ベケット少佐率いる親衛隊とデーニッツ中将率いる帝国の正規軍が荒廃した旧ネオヘリックシティで様子を伺っている中、スミスのグソックとスレイマーズのラプトリア、スコーピア、クワーガ、ラプトルが現れた。

「帝国軍共！ 来やがれ、最強のゾイドハンター、スレイマーズが相手だ!!」  
それを見たデーニッツ中将とベケット少佐は、

「何かと思えば、こういうことですか…」

「まあ、いいわ！ どうせ全員我が偉大なるネオデスマタル帝国に刃向かった罰として始末すればいいんだし！」

「り、リーダー。 ホントに大丈夫なんですか？」

「だ、大丈夫だ。 多分…(軍勢が予想以上に多かったから、作戦変更してジェノスピノ、オメガレックスを引き付ける囷役から外されたが、まさか、逆に帝国の連合軍の囷役に

なるとは、あの人、鬼だ。

だが、殿下とエマちゃん、ユリスちゃんのためにも男の意地を見せてやる！ 行くぞ、お前ら!!」

「オオオー!!」

旧ネオヘリックシティから少し離れた開けた場所にキングとシーザーはジェノスピノとオメガレックスを誘導した。キングとシーザーはジェノスピノとオメガレックスの真正面に対峙し、

「……なら、誰にも邪魔されないし、思う存分、戦える。悪くはないだろう?」

「ふうん、何を企んでるか知らないけど、とにかく、戦いやすいステージまで送って

くれたのは礼をいうよ！

ところで、キミたち2人だけでボクたちと戦うつもりかい？ どうせなら、他のメンバーまとめてかかってきててもいいけど。」

「いいや！ 俺とウイルの2人だけさ！勝負はフェアじゃないとね。」

「ふうくん、戦争にフェアもくそもないと思うけど、まあ、いいや！ じゃあ、ボクはあのライジングライガーと相手してもらおうよ！」

シーザーの前に行こうとするオメガレックスにキングが立ち塞がり、

「何のつもりだい？」

「お前に前世の記憶があるかどうか知らないが、お前にとって一番潰したい奴はこの俺とキングだろ！」

「どういうことだい？」

「なんだ、知らねえのか。俺の先祖と俺の相棒は200年前、お前の前世を倒してネオデスマタル帝国の前身たる旧デスマタル帝国を壊滅した伝説のゾイドハンターとライガーだぜ！」

「ちよつと待ってよ！ストームさん。オメガレックスは俺がやります！ いくらあなただでも、オメガレックスが相手じゃ……」

「いや、あいつは俺にとっても因縁のあるやつだ！ 俺の先祖が倒した帝王ギヤラ

ガー一世の生まれ変わりが現れ、そして、新たなデスメタル帝国を築いたなら、その落とし前は子孫である俺がきっちりつけなきやな！」

「で、でも！」

「お前はむしろかつての仲間を救うのが最優先だ！以前は俺の助けもあつてジェノスピノを倒したが、今のお前とシーザーなら、俺の助けがなくてもジェノスピノを倒せる。前にダークライガーに支配されたレイルを救ってやったようにリセルを救ってやれ！」

「わかった！」

「よし、腹は決まったな！では行くぞ！キング！！」

グオオー！！

「キング！ 本能 極限解放！！」

コクピットでゾイドキーを差し込んだ時、キングの身体からオレンジ色の閃光が走り、キングの身体が透明状になり、発光した。ウィルと周囲の岩山で隠れて攻撃の出方を見ているグラッドやレイルたちも驚愕した。

「あ、あれが、ストームさんとキングの本能極限解放…。初めて見た！」

「驚いたか？ ウィル。」

極限解放したキングを見たガネストは、

「ああ、思い出した！ キミ、ボクをデスレックスと共にデスロッキーにつき落とす奴だな！」

「ようやく、思い出したか！ これでお前との因縁に決着をつけるときだ。」

「望むところだね！」

オメガレックスが猛スピードでキングに突進し、キングはそれを上回る速度で避けた。

「かわした!?!」

キングはオメガレックスの足元に噛みついた。

「ふん！」

オメガレックスはそれを尻ぎ払おうとするが、キングは直ぐに離し、再び態勢を整え、もう一度突進する。

「キングオブクローブラスト!!」

オメガレックスはギリギリで避けるが、その衝撃波を喰らってよろけてしまう。

「ちい、なら、噛み付いてあげるよ！」

オメガレックスは態勢を整え、猛スピードでキングに突進し、キングを喰わえようとするが、キングはそれを間一髪で避ける。

しかし、オメガレックスは瞬時に避けたキングを尻尾で尻ぎ払った。流石のキングも

避けられず、直撃してしまうが、ストームとの勘が一体化したように瞬時に一回転し、地上に着地し、落下を防いだ。

グオオー!!

ギユオオー!!

互いに咆哮し、向かい合うキングとオメガレックス、それを見たウィルは唾然としていた。

「凄い…。ストームさんとキングはあのフリーダム団リーダーのアラシの子孫だから強いとは聞いていたけど、ここまでとは…。それに父さんの話では極限解放は卓越したライダーとゾイドが完全に気持ちと一緒にした時でないと言わないと発揮することが出来ず、発動した時間はかなり限られるのはキングとストームさんはまるで何ともないような顔をしている。」

そんなウィルとシーザーをジェノスピノのコクピットから見下ろしていたリセルは、

「シーザー…。ウィル…。お前らは、目障りなんだよ！ お前らさえいなければ！  
ウオー!!」

ジェノスピノは闘争本能を剥き出しにし、A-Zロングキャノンと頭部のバルカンをシーザーに撃ち込んだ。気付いたウィルとシーザーはそれを避ける。

「うう、うう。ウオー!! ジェノスピノ！ 兵器 解放！ マシンプラスター!!

ジエノサイドクラツシャー!!」

「しまった!」

ウィルは頭部のバルカンとA―Zロングキャノンを避けた後にマシンブラストしたジエノスピノの動きに付いていけず、ジエノソーザーが目の前に来てしまった。

ウィルはEシールドを展開するスイッチを押せなかったが、その時、ソーザーが自分の意思でEシールドを展開し、ジエノスピノのジエノソーザーを防いだ。

「ありがとう、ソーザー。」

グルル…

ウィルの言葉に應えるソーザー、

「貴様らだけは、貴様らだけは俺が倒す!」

崖の中に隠れたグラッドたちがその様子を見る中、ギルラプターエンペラーがちよつと前に出て、

「そろそろ出ないと、ウィルが…」

「待て! まだ早すぎる。」

「で、でも!」

「今は敵にソーザーとキングだけだということを見せてその後にはゴルドのグラビティ



キャノン当てやすいようサポートするのが俺たちの役割だ！

まだ出るときではない。なあに、大丈夫さ！ 仮にジェノスピノがパワーアップしたとしてもウィルとシーザーはデスロッキードの戦いよりずっと強くなっている。負けるわけがないさ！

しっかし、キングの極限解放を見るのは俺も初めてだが、まさか、あれほどとは！

オメガレックスもあのギャラガー四世の力で本来の性能を上回っているにも関わらず、互角に戦っていて、しかもまるで何事もないうような表情をしながら、戦っているとは！

あいつ、暫く不在の間、修行して強くなりやがったな！

レイルは戦うキングを見て、

「あれがキング、ワイルドライガーの極限解放…、僕の前世を倒した姿…。」

「ところで、ユリス！ ゴルドのグラビティキャノン装備はまだなのか？」

「今、エマが調整しているところです。」

「何とか、頼むぜ。ここで失敗したら、全てがパーになってしまう！」

旧ネオヘリックシティの街ではドクターミスミスやスレイマーズたちがベケット少佐率いる親衛隊とデーニッツ中将率いる帝国の正規軍と交戦していた。スレイマーズのラプトラリア、スコープピア、クワワーガ、ラプトルらが親衛隊と正規軍のキャノンブル、バズートル、キルサイス、デイドロフォスと戦っていた。

「デイメパルサー隊、マッドオクテット放てー!!」

親衛隊と正規軍のデイメパルサー隊がマッドオクテットを放とうとしたその時、地面から無数のグソツクが現れ、デイメパルサー隊のマッドオクテット発動を阻止した。

「何だ！ このグソツクは？」

「このグソツク、まさか、ドクターマイルスが言っていたあの黒いグソツクが使役している野生のグソツクか!?!」

「中将、これでは我がデイメパルサー隊の攻撃が封じられてしまうぞー!」

「心配はない。キルサイスSS隊！グソツクを始末しろ!」

デーニッツ中将の命令を受け、キルサイスSS隊は光学迷彩で姿を隠した。デイメパルサー隊がもう一度マッドオクテットを放とうとした時、野生のグソックが現れるが、光学迷彩で姿を隠したキルサイスSSが地面から現れたグソックたちを捕獲した。

「しまった！ わしの同士のグソックたちが…」

「アツハツハツハ！ これで邪魔者はいなくなつたわね。全デイメパルサー隊、マッドオクテット放てー!!」

「いかん！ 皆、直ぐに退避するんじゃ！」

「はい、リーダー！」

親衛隊と正規軍の全てのデイメパルサーのマッドオクテットが放たれたその時、スミスのグソックとスレイマーズのゾイドたちは直ぐ様野生のグソックたちが現れた穴に逃げ込んだ。

「ち、あの小賢しい雑魚の作つた穴を使つて逃げたか。それにしても、反乱軍はあいつらだけなのかしら？」

「わからん、だが、あの程度の数で我が帝国の連合軍を相手にする等、正気の沙汰ではない。」

全軍、警戒態勢をとれ！周囲に敵がないか、調査しろ！」

「はー！」

各軍のゾイドが調べる中、スミスとスレイマーズたちは穴の中で、

「リーダー、ちよつと不味いんじゃないですか!」

「いくら、俺たちでもあの数は無理っすよ!」

「なにへこたれとるんじゃない! こんなまだまだほんの序の口じゃ! わしらはまだ負けんぞ!」

「でも、流石に多勢に無勢ですよ。やつぱり援軍を呼んだ方が!」

「駄目じゃ、駄目じゃ! わしらは連中を引き込むための足止めとしていかなければならない。

こんなところで、へこたれたら、殿下やエマちゃん、ユリスちゃんのためにならない! 何としても持ちこたえるんじゃない!」

「なあ、グリード。これって俺らには無理じゃねえか?」

「なんだかんだ言っているが、結局リーダーは殿下たちの元にいるために戦っているだけでしょ!」

「んだんだ。」

「なんか言ったか?」

「いえ、別に!」

「さあ、もう一度張りきっていくぞ!!」

「お…おう…。」

シーザーはジェノスピノのジェノソーザーを避けたり、Eシールドで防いだりしたが、ジェノスピノの猛攻に翻弄されていた。

「リセル、お前は洗脳されているだけだ！目を覚ませ！」

「黙れ！ お前を倒す！」

「くそ、」

シーザーはジェノスピノの攻撃を避けながら、A-Zグレネードランチャーを撃ち込んだ。  
んだ。

シーザーとジェノスピノが戦い、キングもオメガレックスと激しい攻防を繰り広げ

た。

「あのワイルドライガー、何も装備していないから、こちらも格闘戦のみでやっているが、まさか、ここまでとは！」

しかも、極限解放してても全くスタミナが減っている様子がないし、このまま長期戦になると、こつちが危ないな。とすると、ちよつと戦術変えてみるか！」

オメガレックスはキングに突進しながら、A-Z6連誘導ミサイルを撃ち込んだ。

「なるほど、格闘戦で挑みつつ、武器を使う戦法か、ならばー！」

キングは撃った6発の内、2発をタテガミクローで一刀両断し、残り4発はキングを追いかけ、キングはそのままオメガレックスに向かって行つた。

「ふん、こつちに来てギリギリになったところをかわしてミサイルをボクに当てるつもりだろうけど、それは読んでいるよ！」

オメガレックスはキングに対地対空両用速射砲を撃ち込んだ。キングはそれを猛スピードで避け、更にオメガレックスの足元に回り、そのまま走って行つた。オメガレックスは4発の誘導ミサイルを避けきれず、直撃してしまふ。

「ふう、まあ、流石にこの程度の攻撃で死ぬわけじゃないが、オメガレックスの動きは完全に見切つた。」

しかし、煙が晴れた先には、マシンブラストしたオメガレックスが荷電粒子砲を撃つ

態勢を取っていた。

「何!？」

「残念だったね! さっきの攻撃は全部荷電粒子砲を撃つための準備だったんだよ! いくらキミでもオメガレックスの荷電粒子砲には耐えられない。オメガレックス、

フアイヤー!!」

オメガレックスの荷電粒子砲をキングは避けるが、オメガレックスは荷電粒子砲を撃ちながらそのまま移動し、岩山を破壊していった。

そして、その先にはグラッドのレックスたちがいて、

「不味い! 一旦退避だ!」

レックスとギルラプターエンペラーは瞬時に避けるが、レナだけは間に合わず、荷電粒子砲で破壊された瓦礫と共に落ちてしまった。

「キャアアー!!」

「しまった!」

「うん?」

ガネストは落下したレナに気付き、

「へえ、まさか、他にも獲物がいたなんてね。

ちようどいいや! あいつをオメガ

レックスの餌にしよ!」

オメガレックスはレナに荷電粒子砲の照準を合わせた。

「オメガレックス、ファイ…」

「真・音速殺!!」

「ファイナルガトリング!!」

ギルラプターエンペラーとレックスの攻撃をオメガレックスが直撃し、オメガレックスの荷電粒子砲が別の方向に向かった。

「姉さん、大丈夫?」

「ありがとう、レイル、大丈夫よ。」

「ち、クルーガーはまだなのか!?!」

「へえ、これはちょうどいいね。まさか、ボクの劣化コピーまで来てくれるなんて! ライガーはボクの獲物だけど、キミもボクの獲物だよ!」

「そもそもボクはキミが許せないんだよ。ボクよりオリジナルに近いキミをね!」

「くそ、仕方ない。ちよつと早いが、俺たちもやるぞ!」

「全員で来るの? いいよ! ライガーばっかじゃ、楽しくないからね。」

その時、ズシンズシンと巨大な足音がし、崩れた岩山からグラビティキャノン2門を装備したゴルドが現れた。

「皆、待たせたな!」



「へ、遅すぎだぜ！」

「へえ、これはまた面白くなりそうだ。」

同盟軍の基地で、シーガル中将与アルドリッジ大佐がその様子を見ていて、

「中将、よろしいんですか？」

「構わん、精々あいづらはネオデスメタル帝国を潰し、我が新帝国のために利用させてもらうだけだ！　ところで、シユバルツ中佐は？」

「は、未だ報告が…」

「全く、一体何をしているのだ！」

時同じく南方総督府にルメイ大将が到着し、アツカーマン中将のいる部屋に入った。

「中将、それではカーター大佐を取り調べのため、帝都に送ります。」

「わかった。」

しかし、その時、兵士が現れ、

「大将、大変です！」

「どうした？」

「総督府の何処にもカーター大佐の姿がありません！そればかりか、スナイプテラも  
！」

「何だ?!？」

「大将、スナイプテラがキャノンブルと共に逃走しました！」

「くそ、やはり、あいつが犯人だったようだな。全軍、スナイプテラとキャノンブルを直ちに追え！ 私もスナイプテラ3Sで出る！」

ルメイ大將が部屋を出た後、アツカーマン中將は、

「シユバルツ中佐、何とかやってくれたようだな。後は私と親しくしているあの軍事企業のところまで無事に着けることを祈る。」

四天王と呼ばれた私でも今の帝国の在り方を変えることは出来ないが、彼らとカーター大佐、シユバルツ中佐なら、やってくれる。私はそう信じているよ。」

To be continued

## 第40話「狙い撃て、ゴールド」

旧ネオヘリックシティから少し離れて開けた場所で、シーザー、キング、レックス、ベティ、ギルラプターエンペラー、レックスがジェノスピノ、オメガレックスと対峙する中、グラビティキャノンを装備したゴールドがジャック、キール、ウィーリー、バンブ、クーデリアと共に現れた。

「へえ、ここに移動させたのはあれのためだったのか。面白い。ちようどあういうのと戦いたかったんだよね。」

オメガレックスはゴールドたちに荷電粒子砲を放とうとするが、そうはさせまいとキングが突っ込み、オメガレックスは荷電粒子砲を撃つのを止め、キングと対峙した。

「おいおい、お前の相手は俺のはずだろ！ 帝王ギヤラガーさんよ。」

「ふん、まあ、いいや！ まずキミから片付けてやる。」

その時、ギルラプターエンペラーもキングの横に来て、

「ストームさん、僕も戦います！」

「いいぜ、だが、油断するなよ！ 相手はメツチャ強いぜ。」

ジェノスピノと対峙しているシーザーにはレックスが現れ、

「グラッド！」

「おう、ウィル！　今回も俺と付き合って貰うぜ。リセルを救うためにな！」

「うん！」

そして、ゴールドと共に現れた他の同盟軍のメンバーもシーザー、レックスにはジャック、クーデリア、バンプ、

キング、ギルラプターエンペラーにはウィーリィー、キール、ベティがそれぞれ降り立った。

「ウィル、俺が、私たちがついてるぜ！」

「皆！」

その様子を見たガネストは、

「ふうくん、全員集合というわけか、一気にけりをつけてやる！」

「来るぞ！」

「オメガレックス、ファイヤー!!」

オメガレックスはキングとギルラプターエンペラーに向けて荷電粒子砲を放とうとする。しかし、ウィーリィーがオメガレックスの足元に周り、頭突きを喰らわせようとする。

「殿下には指一本触れさせないぜ！　喰らえ、弾丸鈍感破!!」

しかし、オメガレックスはすかさず、足でウィーリーーの動きを止める。

「何?!」

「キミから先に始末してあげようか?」

「止めろー!!」

ギルラプターエンペラーがオメガレックスに向かって走り、オメガレックスは尻尾で風ぎ払おうとするが、ギルラプターエンペラーは瞬時に避け、ウィーリーーを押さえつけている足を攻撃した。

「真・音速殺!」

その攻撃でオメガレックスは足をずらし、ウィーリーーもその場に離れる。

「ありがとうございます。殿下!」

「いいよ。」

「いいね、今日は最高の日だ!」

シーザーたちにジェノソーザーを振り回すジェノスピノに向かって、グラッドは、

「リセル、俺たちはお前を救いに来たんだ。いい加減に目を覚ませ！」

リセルは怒り狂った表情をし、

「ふん、俺を救うだど？ ふざけるな！ そもそも父さん、母さんが殺された原因は俺が弱かったからだ！」

だから、俺はお前たちと行動を共にしたが、結局お前たちも弱かった。

だが、それ以上に、ウィル！シーザー！貴様らだけは許さない！この俺より強くなりやがって絶対に許さない。」

それを聞いたグラッドは、

「どうやら、あいつは少し痛めつけてからでないと聞く耳を持たないようだ。行くぞ、ウィル！」

「はい！」

「喰らえ、ジェノサイドクラッシュャー!!」

シーザーとレックスはそれを避け、ジェノスピノは攻撃の手を緩めず、再びジェノソーザーを当てようとするが、ジャックとクーデリアがワイヤーでジェノソーザーを巻き付ける。

「感情的にならないの。そんなやり方で戦ったら隙だらけよ！」

「く、生意気な！」

キングたちがオメガレックスの攻撃を避ける中、オメガレックスは荷電粒子砲を撃つ態勢を取るが、ギルラプターエンペラーが瞬時にオメガレックスの背後に回り、荷電粒子吸入ファンを防ぎ、更にキールがクモの糸でオメガレックスの口と足を防ぐ。

「今だ、クルーガー！」



ゴルドはオメガレックスに向けてグラビティキャノン狙いの照準を合わせる。  
「グラビティキャノン発射!!」

強烈な衝撃波と共にグラビティキャノンがオメガレックスに向けて放たれた。

「なるほど、ボクの動きを封じ込めて狙い撃つ作戦か……だが！　ボクには効かないよ。」

オメガレックスは自力で糸を全てほどき、そのままグラビティキャノンの弾に向かつて荷電粒子砲を放った。

「オメガレックス、ファイヤー!!」

ゴルドが放ったグラビティキャノンの1発が荷電粒子砲で迎撃され、物凄い衝撃波が飛び、シーザーたちが吹っ飛ばされた。

「残念だったね！　ボクのオメガレックスは更に改良され、荷電粒子砲のチャージ時間には大幅に短縮された上に耐久性も更に上がっているんだよ。」

「ま、所詮、最強の兵器でも当たらないや意味ないけどね！」  
「くそ、なんて奴だ！」

「諦めるな、レイル！　まだ、チャンスはある！」

ジャックとクーデリアのワイヤーでジェノスピノはジェノソーザーを封じ込められ、

「今だ、ウイル！ やれ！」

「わかった。行くぞ、シーザー！ スピリットガンストラッシュユ!!」

シーザーはスピリットガンストラッシュユをジェノスピノに放つ。それを喰らってよろめくジェノスピノ、

「今だ！ スピリットバーストブレイク!!」

しかし、ジェノスピノは両前足でシーザーのタテガミクローを掴む。

「2度もジェノスピノに同じ攻撃が通用するか!!」

「確かにそうだけど、それも計算の内だよ！ ユリス、今だ！」

ウイルが叫びと同時にユリスのレナが現れ、

「レナ、マッドオクテット!!」

レナのマッドオクテットが放たれ、リセルは苦しみだし、ジェノスピノはシーザーを放す。

「リセル、目を覚まして!」

「ようし、いいぞ! これでリセルが正気に…」

しかし、他の山脈から別のマッドオクテットが放たれ、リセルとジェノスピノは再び戻ってしまふ。マッドオクテットを放つたのはデイメパルサートランスだった。それを見たガネストは、

「ハハハ、残念だったね! デイメパルサートランスもドクターが更に改良したから、その青いデイメパルサーのマッドオクテットはもう通用しない。

つまり、ジェノスピノはボクのオメガレックス同様、真正銘、帝国のゾイドさ! これでボクたちを止められる者は存在しない!」

オメガレックスは再びゴルドに向けて荷電粒子砲を撃つ態勢を取る。

「させるかー!!」

ギルラプターエンペラーはオメガレックスにしがみつき、荷電粒子砲を撃つのを阻止しようとするが、

「それで防いだつもりかい?」

オメガレックスはA—Z3連誘導ミサイルを放ち、対地对空

両用速射砲を撃ち込み、全てゴールドに直撃した。

「しまった!」

しかし、ゴールドは無傷だった。それを見たストームは、

「流石、ゴールドにグラビティキャノンを装備させるクルーガーの考えに間違いはなかったな!」

「ふうくん、噂通りの頑丈さだね! でも、これならどうかかな?」

再びオメガレックスは荷電粒子砲を撃つ態勢を取り、

「させるかよ!」

キングは再びオメガレックスの動きを封じた。

「俺たちも行くぞ!」

キール、ウィーリイー、ベティも同時にかかるが、

「隙だらけ、だよ?」

オメガレックスは尻尾でキール、ウィーリイー、ベティを蹴散らしてしまう。

「ジョン、アレックス、カティア!」

キールたちは一瞬でダウンしてしまった。

「嘘でしょ…。もうオワリ!! もっと楽しもうよ。じゃないと直ぐにボクが皆殺しちゃうよ!」

ジェノスピノも自力でワイヤーを外し、ジェノソーザーをシーザーに向ける。シーザーはEシールドで防ぐが、ジェノスピノはそのまま、頭部のバルカンを撃ちながらシーザーを押し潰すようにいった。

シーザーはそれに耐えるが、シーザーの身体がだんだん地面に盛り込んでいった。

「ウイル、シーザーー！ 今、行くぞー！」

レックス、ジャック、クーデリア、バンプがシーザーを助けるにジェノスピノに攻撃しようとするが、ジェノスピノはジャックやクーデリアにA―Z高熱火炎放射を放ち、レックス、バンプにはA―Zロングキャノンを放ち、レックスたちは中々攻撃出来ないでいた。

それでもレックスはガトリングを放ち、バンプはジェノスピノの足に金剛旋撃衝を当てるが、ジェノスピノはびくともしない。シーザーはジェノスピノの猛攻に耐えるもジェノスピノは更に力を入れる。

「消えろ、消えろ、消えろー!!」

「り、リセル、お前、本当にネオデスメタルの人間になってしまったのか!？」

オメガレックスは動きを封じ込めるキングを喰らい、そのまま噛み砕こうとし、キングは前足でオメガレックスの口を持つが、オメガレックスはそのまま力を入れる。

「さて、どこまで耐えられるかな〜?」

「ちー!」

キングは口から脱出するが、背を向けたオメガレックスに尻尾で風ぎ払われてしまう。

「止めろー!!」

ギルラプターエンペラーはオメガレックスに突進しようとし、

「よせ、レイル! 闇雲に行くな!」

「真・音速殺!!」

しかし、オメガレックスは前足でギルラプターエンペラーを掴み、叩きつけてしまう。

「キミとギルラプターなんか、ボクの前ではポンコツ同然だよ！」

苦しむレイルとギルラプターエンペラーを見たエマとユリスは叫び、

「レイル！」

「さて、キミとはもうお別れだ。これでフィニッシュだ！」

オメガレックスはギルラプターエンペラーに荷電粒子砲の照準を合わせた。

「レイル！ エマ、そこで待ってて！」

「ユリスさん、一体何を？」

レナはオメガレックスの元に走って行き、

「じゃ、バイバイ。オメガレックス、ファイ……」

「止めてー!!」

レナはオメガレックスにぶつけ、オメガレックスはその衝撃でよろめく。

「お前は目障りなんだよ!!」

オメガレックスは突進したレナを前足で捕らえ、そのまま下に叩きつけた。

「キャアアー!!」

「姉さん！」

「そんなに死にたいなら、キミから消して上げようか？ オメガレックス、ファイ……」

オメガレックスが荷電粒子砲の照準をギルラプターエンペラーやレナに向けたその

時、レナにも攻撃しようとしたオメガレックスを見たりセルは突然、脳内にかつて帝国軍の捕虜にされたとき、ユリスの兄、パウルスに助けしてくれた時とその時に姉のように優しく接してくれた少女時代のユリスを思い出した。

「ユリス、危ない!!」

ジェノスピノはオメガレックスにしがみつき、オメガレックスは身動きが取れない状態になった。

「な、なんの真似だ!?!」

オメガレックスは荷電粒子砲を撃とうとするが、ジェノスピノはジェノソーザーでオメガレックスを攻撃し、オメガレックスの荷電粒子砲発射を阻止する。

オメガレックスは自力で荷電粒子砲を放つが、照準が合わず、シーザーたちの方ではなく、逆にベケット少佐率いる親衛隊とデーニツツ中将率いる帝国連合軍の方に撃ってしまう。



旧ネオヘリックシティでは、スレイマーズたちは途中で加わった同盟軍と新帝国、旧共和国の合同軍と共に帝国連合軍と互角に渡りあっていた。

荷電粒子砲に気付いたスミスたちスレイマーズとデーニッツ中将、ベケット少佐は急いでその場を離れるが、スレイマーズたちに加わった新帝国、旧共和国派、同盟軍の合同軍、帝国連合軍のゾイド共に避けきれず、オメガレックスの荷電粒子砲が直撃し、両軍とも消滅した。

ドクターマイルスが遠隔操作しているディメパルサートランスはマッドオクテットを通じてリセルの洗脳を強化しようとするが、リセルはそれに逆らう。

「駄目だ！ ウイルとシーザーを倒すのは俺の役目だが、ユリスを傷つけることは出来ない。そして、ユリスを傷つける奴はもつと許せない！」

ゴルドはジェノスピノとオメガレックスにグラビティキャノンを撃つ態勢を取るが、クルーガーはジェノスピノに乗っているリセルにも危害が及ぶと思い、撃つのを躊躇している。

「これなら、十分オメガレックスを狙い撃ちに出来るが、作戦ではリセルを正気に戻し、ジェノスピノまで撃たないようにするためだったが、これでは……」

しかし、コクピットのリセルはクルーガーに向かって、

「撃てー!! こいつを倒してくれー!!」

ウイルたちがゴールドを見る中、

「クルーガー!」

暫く戸惑ったクルーガーは遂にグラビティキャノンのスイッチを入れた。

「し、仕方ない。リセル、許せ!」

ゴールドのグラビティキャノンが放たれ、その弾が遂にジェノスピノとオメガレックスに直撃した。

帝都メガロポリスの宮殿でタッカー元帥とドクターマイルスがデイメバルサートラ  
ンスの映像を通してその様子を見ていて、

「バカな! 陛下の操るオメガレックスが負ける…だと!」

「(ち、やはり、あの小娘2人はあの時始末するべきだったか、まあ、いい。

あの2体は十分に時間を稼いだ! 後はZG完成の準備を整えるだけだ。)  
ドクターマイルスは静かに司令室から出た。

グラビティキャノンを喰らった2体は思うように動けず、重力に押し潰されていく。しかし、オメガレックスは尚もジェノスピノの拘束及びグラビティキャノンの重力に逆らい、シーザーたちに向けて荷電粒子砲を放とうとする。

「んぐぐ…まだだ、まだ、ボクは負けていない！」

それを見たグラッドは、

「何て奴だ、あの状態でも荷電粒子砲を撃とうとするなんて！」

ジェノスピノもグラビティキャノンの重力に逆らいながらオメガレックスを取り押さえるが、オメガレックスは荷電粒子砲を放つ態勢を取る。

オメガレックスは微弱ながら、荷電粒子砲を放った。しかし、グラビティキャノンの重力の影響で狙いが定まらず、ゴルドには当たらず、近くの山に直撃し、山脈に大きな穴が開いた。

ジェノスピノ、オメガレックスはそのままグラビティキャノンの重力に押し潰されていった。そして、ジェノスピノ、オメガレックスのそれぞれの片目のバイザーが破壊され、遂に2体は倒れ、沈黙した。コクピットのキャノピーにはひびが入ったが、破壊は免れ、乗っていたリセルとガネストはそのまま気絶した。ストームとグラッドたちは、

喜び、

「勝った！俺たちは勝ったぞ!!」

旧ネオヘリックシティでスレイマーズと同盟軍と戦っているベケット少佐とデーニッツ中将のкокピットから兵士の通信が入り、

「ベケット少佐、デーニッツ中将！ たった今、ジエノスピノとオメガレックスが沈黙しました!!」

「何!? そんな、まさか…陛下が負けた…」

その時、突然、霧が現れた。

「ん？ なんだ！ この霧は？」

「り、リーダー！ なんかヤバい雰囲気じゃないですか！これ、」

「この霧は、あのとときの！」

霧はそのまま旧ネオヘリックシティを包み込み、そのまま広がっていた。

旧ネオヘリックシティから離れた場所では、グラッドたちが回収作業に入り、

「よし、ジェノスピノとオメガレックスを再び帝国軍の手に渡らないよう回収するぞ  
！ 後、リセルも助けなきゃな。」

グラッドたちがジェノスピノ、オメガレックスを回収しようとしたその時、突然、霧が現れた。

「この霧は、あの時と同じだ！ エマを助けに行った時、森に突然現れたあの霧と…」  
グルル…

突然、シーザーが威嚇する。

「どうした？ シーザー。 あー！」

目の前を見た時、グラビティキャノンを喰らって倒れ込んだジェノスピノとオメガレックスがあつという間に霧に飲み込まれた。

と同時に霧からいくつもの赤い目が光った。霧でその全貌は見えなかったが、巨大なゾウのような姿をしていた。シーザーは激しく警戒していた。

「エマを助けに行つた時に霧の中で現れたあのゾイドと同じだ！」

その時、巨大なゾウ型ゾイドの集団の前方にいたゾウ型ゾイドから声がした。声の主はドクターマイルスだった。

「反乱軍の諸君、まさか、グラビティキャノンを手に入れ、ジェノスピノ、オメガレックスを同時に倒すとは、全く予想外だったよ！」

だが、この2体は所詮前座に過ぎん！ まもなくZGが復活し、かつての帝王ギヤラガー一世陛下が所有していたデスレックスも真の姿になる。

最強のゾイド同士を合わせれば、ZGは何者にも勝る究極無比にして真の最強ゾイドとなる。

そうなれば、この地球はおろか全宇宙に存在するどの生命体でも勝つことは出来ない。反乱軍よ！ 忠告しておこう。

今のうちに我がネオデスマタル帝国に降伏せよ！ さもなくば、貴様らは滅びの道を歩むだけだ。」

「誰がお前たちなんか！ 俺たちは絶対に降伏しないぞ！」

その時、取り巻きのゾウ型ゾイドが突然長い鼻で爆弾のようなものを投げつけた。

「不味い、避けるー！」

シーザーたちは何とか避けるが、周囲は一気に火の海になった。ドクターマイルスの声がるゾウ型ゾイドだけは爆弾ではなく、背中からレーザーのようなものを発射した。シーザーは間一髪で避けるが、レーザーはかすただけにも関わらず、シーザーの装甲に穴を開けた。

「シーザー、大丈夫か!？」

「もう一度、警告する、我が帝国に降伏せよ！」

しかし、ウイルたちは応えなかった。

「降伏するつもりはないのか…それとも降伏するのかどちらか決められないってことか？ まあ、いい、時間の猶予は与えてやる。だが、降伏を選ばなかった場合、貴様らに待ち受けているのは死のみだ。フフフフ、ハハハハハハ!!」

ゾウ型ゾイドたちは後ろを向いてそのまま後退した。

「ま、待てー！」

しかし、霧は晴れ、ゾウ型ゾイドはおろか、ジェノスピノ、オメガレックスの姿も消えていた。

「くそ、またあの2体を奪われてしまった！　せっかく苦勞してグラビティキャノンで倒したというのに。」

尚も警戒するシーザーを見たエマは、

「ウイル、早く、ドクターマイルスを止めないと！　ZGを復活させたら駄目！」

「エマ……」

時同じく、カーター大佐のスナイプテラとシユバルツ中佐のカーター専用のキャノンブルが総督府から抜け、ある場所まで逃げていた。

「ホントにこれでいいのか？　オメガガレックスの荷電粒吸入ファンを撃ち抜いたのは



私のせいとはいえ、中将に更に迷惑をかけて……」

「心配することはありません！ 私もあの人を信じてますから。」

その時、ルメイ大将の乗るスナイプテラ3Sによる東方部隊が追跡してきた。

「く、まさか、こんなところまで来たのか！」

「キルサイスSS隊はキャノンブルをスナイプテラ3S隊は私と共にスナイプテラを  
！」

「大将、カーター大佐とキャノンブルのライダーは捕らえますか？」

「最早、反逆の意図は見られた。撃墜しても構わん！」

「了解しました！」

キャノンブルは必死に走るが、キルサイスSS部隊とスナイプテラ3S部隊が大量の爆弾を投下し、そのまま無差別爆撃を開始した。森の一瞬で火の海になり、シュバルツ中佐のキャノンブルはその爆発に巻き込まれた。

「シュバルツ中佐！ く！」

後ろを振り向いた先にはルメイ大将の乗るスナイプテラ3Sがカーター大佐のスナイプテラの後を追っていた。

「こうなったら、仕方ない！」

カーター大佐のスナイプテラは旋回し、

「スナイプテラ、兵器 解放！ マシンブラストー！！」

「面白い、ならこちらも、スナイプテラ、兵器 解放！ マシンブラストー！！」

「アブソルートショット！！」

カーター大佐のスナイプテラがルメイ大将のスナイプテラ3Sを貫くが、スナイプテラ3Sの姿が消えた。

「何!?!」

「どこを見ている?」

後ろを振り向いた先には既にスナイプテラ3Sがカーター大佐のスナイプテラの背後にいた。

「残念だったな！ スナイプテラ3Sには更に改良を加えたんでね。今のはただの映像だ！ アブソルートショット!!」

ルメイ大将のスナイプテラ3Sのアブソルートショットを直撃したカーター大佐のスナイプテラはそのまま地上に落下した。

「グワアー!!」

「ふ、これで奴は終わりだな。よし、残骸を探せ！」

「はー！」

スナイプテラとキャノンブルは傷つき、立とうとするが、立つことが出来ず、コクピツ

トのカーター大佐やシュバルツ中佐共々気絶してしまふ。

そんな時、火の海の森からバイザー無しのラプトルたちが現れた。バイザー無しのラプトルたちにはデスメタルのエンブレムではなく、ケルベロスに似たエンブレムをつけていた。

T o b e c o n t i n u e d

## 第41話「海底神殿」

反ネオデスメタル同盟軍の本拠地、ジェノスピノ、オメガレックスとの戦いを経た  
ウイルたちは基地に戻り、倉庫ではシーザーたちの修復が行われていた。

そして、ウイルやストームたちは司令室で会議を開いていた。

「せっかく、ジェノスピノ、オメガレックスを倒したというのに、まさか、また帝国軍  
に回収されて、オマケにリセルまで取り返せないままになってしまったとは！」

「とはいえ、あのグラビティキャノンをもともに喰らったんだ。暫くあの2体は出  
撃出来ないだろう。」

「幸い、今回の戦いで使用した弾数は2発で、まだ後、2発は残っているから、仮にあ  
の2体が復活してもまた使用することは出来ないことはないが、あれ以上、グラビティ  
キャノンの弾を作る技術は今の俺たちにはないから、かなり過酷になるかもしれん。」

「なら、その前にネオデスメタル帝国の戦力を弱まらなければならぬ！」

「しかし、厄介なのが、あのゾウ型ゾイドだ！ おそらく、あれはエマとユリスを救出  
するために研究所に向かった時に出た霧のゾイドと間違いなく同一個体だ。」

だが、性能は明らかに研究所の時より遥かに上がっていた！ つまり、あれも完成し

たということだろう。」

「でも、リーダー、コマンダー！　そもそもゾウ型のゾイドなんているんですか？」

「スマイス、あんたはどう思う？」

「わしの研究資料じゃ、それらしきものが残っておらん！　じゃが、ゾウはそもそも地球に存在する現世動物であり、惑星Z-iにもゾウ型のゾイドは存在した。

いてもおかしくはないが、これだけの資料でもその情報が見当たらないということ  
は、おそらく隠蔽された危険なゾイドの可能性が高い！」

「となると、今はそのゾウ型ゾイドには警戒すべき…ってことか。」

「それだけじゃない！　あいつはジェノスピノやオメガレックスでさえ、前座と言っ  
た。

ということは、奴らが復活させようとしているZGはあの2体を遥かに上回るゾイド  
ということだ！　何としても復活を阻止しなければ…」

「といつても、そのZGとやらの正確な情報がないから、今の俺たちに止める手段がな  
いのだが…」

その時、エマが司令室に入り、

「どうした？　エマ、」

「ウィル、大変なの！　シーザーが世界を揺るがす脅威が迫っていると行って外に出

たがっているの!」

「シーザーが!」

「世界を揺るがす脅威だと!」

帝都メガロポリスの宮殿、ベケット少佐、デーニツツ中将率いる帝国の連合軍は撤退し、ドクターマイルスの操る謎のゾウ型ゾイドによってジェノスピノ、オメガレックスは宮殿内で修復されていた。2体を見るタツカー元帥は、

「全く、敗北の原因がジェノスピノのライダーの裏切りとは! あのまま順当に行っていたら、陛下が勝っていたはずなのに! ところで、状況は?」

「2体とも内部は全くの無傷ですが、バイザーが破壊され、装甲にもダメージがあり、ジェノソーザーと荷電粒子吸入ファンが重力で押し潰されているため、完全修復には1ヶ月以上はかかるかと！」

「何としても早急に修理せよ！」

「はー！」

「ところで、ドクターマイルスは？」

「ZG完成のための情報収集と反乱軍鎮圧のために例のZFでルメイ大将と共に出撃しました！」

暫く使い物にならないジェノスピノとオメガレックスの代わりに私が反乱軍を始末すると元帥閣下に伝えてくれとおっしゃってました。」

「相変わらず、抜け目ない奴だ。後はあのZFがどこまで働けるか……だが！　後、皇帝陛下は？」

「陛下はジェノスピノのライダーの裏切りの影響でかなりイライラしてまして、そのライダーを処刑しろと何度も命じます。今は落ち着いていますが……」

「早急に処分すべきだな。あの役立たずは！　完全に修復したら、代替りのライダーを探さなくては！」

「しかし、ドクターはまだ処分するなど仰っていますが…」

「何故だ!?!」

「ジェノスピノのライダーには外すが、代わりに別のところで利用価値があるのだとか申しております!」

「(全く、あいつは何を考えているのだ? 使えない奴はさつさと処分すればいいのに

!)」

「ですが、ジェノスピノのライダーの処分はドクター自らが責任を取り、陛下には既に処刑したと伝えたと仰っています!」

「そうか、まあ、いい! とにかく、ジェノスピノ、オメガレックスの修理を急がせろ

!」

「は!」

宮殿の玉座の間にあるシャワー室で、ガネストはシャワーを浴びていた。シャワーを止めた後、ガネストは右拳を力強く壁に叩きつけ、

「せっかく、盛り上がったゲームをよくも邪魔しやがって! こんな屈辱、初めて



だよ!!

でも、今度会った時はあのライガー君と一緒に八つ裂きにして息の根を止めてやるよ！  
フフフフ、ハーハッハッハッハッハ!!」

エマからシーザーが世界を揺るがす脅威を察したことを知ったウイルたちはシーザーの直感を頼りに旧共和国の戦艦に乗って海に出た。ウイル、レイル、エマ、ユリスがシーザーの横にいるのを見たグラッドとストームは、

「それにしても、よくあの新帝国の連中がユリスを連れていくことを許可したな。」

「ユリスがああシーガルとかいう連中に何度も説得して、その気迫に負けたのか、しぶ

しづ許可したそうだ。」

「堂々と新帝国を宣言した指導者の割には随分肝っ玉が小さいんだな！」

「過去にユリスの先祖を皇帝に立てた真帝国の先導者の1人だった先祖もその程度の器だったって聞いている。」

「仮にネオデスメタルを倒してあの帝国が台頭したところで、ホントにまとまるのかね？」

「むしろ、余計混乱しそうな気がするが… それに俺たちにはそこまで協力的ではないし……」

「先が思いやられるな。」

「まあ、こちらもしづしづ参加を許可してしまったこともあるが…」

「殿下！ エマちゃん！ この天才科学者ドクターミスがお二人をお守りしますから、ご安心ください！」

レイルとエマの隣に強引に割って入ったスミスを見たグラッドとストームは、

「もしかして、あいつら起用したのミスだったたりして！」

「まあ、いないよりはマシだろう。」

シーザーが何か感じ取ったかのように頷いた。

「どうした？ シーザー！」

シーザーが見詰めたその先にはすっかり廃れた貨物船のような巨大な船があった。ジャックに乗ったクリスがクワガノス隊を率いて中を調べた。

「どうだった？」

「特に変わりのない船です！ ただ……」

「ただ、何だ？」

「物資や生活必需品、武器庫等があった辺り、ただの貨物船ではないようです。」

グルル……

その時、シーザーが何か感じ取ったかのように船に跳び移った。

「し、シーザー！ どうしたんだよ!?!」

ウィルやストームたちはシーザーの後を追いかけていき、シーザーは船の床を掘り起こし、そこには浸水した巨大な倉庫があった。

「この船にこんな倉庫まであるとは！」

「こりや、ただの倉庫ではなさそうだな！」

「グラッド、何か分かるのか？」

「そうだな、俺の予想が正しければ、この倉庫は潜水艇の倉庫だ！ 見ろ、浸水した床に扉のようなものまである！」

「潜水艇？ この船にはそんなものまであるのか！」

「それに、ただの貨物船にしちや、やたら、武器庫等、軍事的な物やもしもの時の生活必需品ばかりだ。

つまり、この船は貨物船に見せかけた亡命船ってわけだ！」

「亡命……ということはこの船は一体どこの国から、一体どこに亡命しようとしていたんだ？」

「さあな、だが、かつてのゾイドクライシスが起こったことを物語る遺物程古くはないから、旧帝国、旧共和国のものではないのは確かだ。

俺の推測が正しければ、おそらくこの船は数十年……いや、120年以上前のものだな！」

「だが、一体どこの国から？」

「クリス、この船に乗組員の遺体はあったか？」

「いや、骨一つも見当たらなかった。」

「つまり、この船の乗組員は全員、潜水艇に乗って船を捨てたらしいな。ということ、この船の下の海底に何かあるってことだ！」

「てことは、ここからは海中専用のゾイドでいかんというわけか！」

「ま、そういうことも想定して、こちらも潜水艇はあるし、しかも旧共和国が護衛にガブリゲーターたちもつけてくれたから問題はないが……」

「といっても、万が一、ガブリゲーターたちでも敵わない強力なゾイドが現れんとも限らない！ シーザーたちを連れていけない代わりに一体でも多くの強力なゾイドがないと…」

「リーダー、コマンダー！でしたら、私のキールもついていきます。」

「キールを？」

「私のキールは他のスパイデスと違い、唯一ミズグモの特性を持つ亜種です。水中での行動は可能です！」

「キールを連れていけるのは助かるが、キールだけでも安心は出来ないな！」

「待って待ってーい！ わしのグソツクだって水陸両用の上に十分戦力になるわー！」

「そうだな。前みたいに囷としてう使えそうだし！」

「こらー！ もういい加減にその役止めろ！ それのせいであら、散々な目に逢って殿下やエマちゃん、ユリスちゃんにカッコいいと見せられなかったんじゃぞ!!」

「わかった、わかった！ 連れていくよ！ では、ジョンとミスはキールとグソツクで海底に入り、潜水艇に乗るメンバーは俺とストーム、ウィル、エマ、ユリス、それと…」

スレイマーズとアレックスが連れていきたそうに目をキラキラしてグラッドの方を向き、

「ええい、わかった！ スレイマーズ、アレックス、アツシユも連れて行ってやる！  
ただし、余計なことはするな！」

そして、クリスたち、残りのメンバーは引き続きこの船の調査と監視態勢を頼む。」

「了解しました！」

「よし、では、出撃する。」

キールとグソック、ガブリゲーター4体とウイルとストームたちを乗せた潜水艇は海底深くを潜った。深海にまで来たその時、エマが何か感じ取り、

「あそこから、ゾイド因子を感じます。」

キールが岩山の方を調べたら、そこに洞穴があった。

「どうやら、あそこに何かあるな！」

潜水艇とキール、グソック、ガブリゲーターたちは洞穴に入った。しばらく進んだ後、

キールとグソック、ガブリゲーターはは陸に上がり、ウイルヤストームたちも潜水艇から降りた。

「洞穴がこんなところに繋がっていたとはな！」

「どうやら、あの船の乗組員はここに来たようだな。見ろ！ あそこに潜水艇の残

骸がある！」

グラッドが指差したその先には破壊された潜水艇の残骸があつた。ガブリゲーターのライダーの兵士たちが潜水艇の残骸を調査し、グラッドに報告し、

「そうか、ここにも乗組員の遺体はなかつたか…… ということは、乗組員は潜水艇を捨て、この先に行ったということか！」

「この先に何があるか、わからないが、今の俺たちには進むしか選択肢はない。」

ウイルヤストームたちがその場を離れた時、潜水艇のパーツが落ち、そのパーツには旧デスメタル帝国のエンブレムがあつた。

海上では、クリスたちが船の内部を調査していた。

「物資はあらかた乗組員が全員持つて行ったから、この船がどこの国かわからないが、ん？」

クリスが拾ったものはキーの一部のもだった。

「このキー、どこかで…」

その時、バタバタと同盟軍の兵士が現れ、

「隊長！ 部屋のゴミからデスメタル帝国のエンブレムを付けたパーツが発見されました！」

「何!? まさか、この船はネオデスメタルの…」

その時、突然船に爆発が起こり、

「なんだ!？」

「帝国軍です！ 帝国軍のスナイプテラ3SとキルサイスSS隊が攻撃してきました！」

「何!? くそ、まさか、この船はネオデスメタルが俺たちを引き付けるための罠だったのか！」

にしては、偉い年代を経ているが…、まあ、考えたつてしょうがない！ 出るぞ!!」  
クリスはジャックに乗って船から出た。船の上空では、マシンブラストしたキルサイ



スSSがカブター、クワガ、クワガノスを一刀両断していた。

「くそ、やはりステルス仕様は強い！ 行くぞ、ジャック、進化 解放！ エヴオブ  
ラストー!!」

スナイプテラ3Sに乗るルメイ大將はジャックを見て、通信を開き、

「キルサイズSS隊とスナイプテラ3S隊は反乱軍を、私はあのソニックバードの相  
手をする。」

「了解しました！」

「スナイプテラ、兵器 解放！ マシンブラストー!! アブソルトショット!!」  
ジャックはルメイ大將のスナイプテラ3Sの攻撃を間一髪で避ける。

「ふ、間一髪で避けたが、私のスナイプテラ3Sはカーターのスナイプテラより強力だ  
ぞ！」

「その声は、ルメイ大將か！ あの船は貴様らが俺たちを罠に嵌めるための差し金か  
!?!」

「違うね、あれは我がネオデスマタル帝国の前身の遺産。だが、我々が欲しているもの  
はもつと下にある！」

「まさか、ウィルたちに！」

「だが、貴様らがそれを知る必要はない！ 貴様らはここにくたばるのだからな！」

クリスたちがルメイ大将率いる帝国軍と戦っていることを知らないウィルとストームたちは洞穴をずつと突き進んでいた。アレックスは呆れた顔で、

「かあ、一体どこまで続くんだよ！ この洞穴は！ もうかれこれ1時間以上も歩いているんだぞ！」

怠そうなアレックスにアツシユとドクタースミス、スレイマーズは、

「だから、お前はアホなんだよ！」

「な、なんだと！」

「そうじゃ、エマちゃんと殿下にユリスちゃんを見るんじや！ 全然疲れていないぞ！」

「俺たちもだ！」

「お前らはお呼びじゃねえんだよ！」

それを見たストームとウィルは、

「あいつらは元気でいいな。」

「そうですね…」

「ん？ どうした？ 元気がないぞ。」

「いや、あのゾウ型ゾイドとあの船を見てから、何かイヤな予感がするんです。」

「イヤな予感？」

「確かなことは言えませんが、あの船とゾウ型ゾイドと何か関係があつて、この世界を揺るがすんじゃないかと感じるんです。」

「お前の予感は外れてないかもしれないな。」

その時、洞穴から出口が現れ、そこには神殿やコロッセウムのような建築物や様々な人々の像等、古代の遺物に溢れた空間になっていた。

「この洞穴にこんなものまであるとは！」

「こりや、明らかにゾイドクライシスよりもっと古いものじゃな。」

「スマイス、わかるのか？」

「わしの予想が正しければ、この建築物は今から3000年以上前に世界に君臨していた古代ギリシャやローマ帝国のものじゃな！」

「ローマ帝国？」

「うむ、その当時、世界最大の領土を誇った最強の帝国で、全ての道はローマに通ず、

と言われる程の国家じゃった！」

「ねえ、あれって…」

エマが指差した先にはある人物の像が立っていた。それを見たレイルは、

「この像って、僕の先祖の帝王ギヤラガー一世の像だ！」

「周りにはそれを崇拜する民衆や演説を行う人物の像まである。てことは…」

「そうか、あの船は旧デスマタル帝国のものだったのか！ つまり、お前の先祖が率いるフリーダム団に壊滅させられた後、ワイルド大陸から脱出し、ここに亡命して旧デスマタル帝国を復活させようとしたんだろな。このローマ帝国のように！」

「それが今のネオデスマタル帝国ってわけか…」

「まさか、ネオデスマタル帝国の起源の場所に来てしまうなんてな。」

「ちよつと待って！」

「どうした？ レイル、」

「確か、ネオデスマタル帝国が建国されたのは80年前だったはず！ けど、あの船は少なくとも120年以上は経っていた。ここがネオデスマタルの起源なんて聞いたこともないし、こんなところに来るのも初めてだ！」

それを聞いたグラッドは驚愕し、

「おいおいちよつと待て、あの帝国にいた俺でもそれは聞いていないぞ！ それにネ

オデスメタルを建国した初代皇帝はお前の親父だって聞いた。もしそれが本当なら、以前俺たちがデスロッキーで倒したギヤラガー三世はかなりの高齢のはず。だが、ジェノスピノに乗っていた奴は少なくとも40代くらいだった！」

「だとすると、俺たちが戦ったギヤラガー三世は……」

その時、エマが突然足をすくみ、ガタガタ震えた。ユリスはエマのところこそつと寄り添い、

「エマちゃん、どうしたの？」

「どうして、どうして、あれが……」

震えるエマの様子を見たウィルは目に入ったギヤラガー一世像の後ろにある紫色に発光したコアの欠けた一部を見つけた。

「もしかして、エマが怖がっているのはあれか！」

ウィルが像を避けながら、近づこうとしたその時、コアの一部から紫色の霧が現れ、それにちよつと触れたウィルは苦しみ出した。

「どうした？ ウィル！」

「く、苦しい……」

ウィルの元に駆け寄ったストームはギヤラガー一世とその民衆像の周りに大量の白骨化した遺体と石化したゾウ型ゾイドのパーツを見つけた。

「まさか、この連中は皆あれにやられたのか！ とにかく、皆、あれに近付くな！」  
ストームがウイルを抱き抱えて離れた時、コアの一部から出た紫色の霧はそのまま広がっていた。

海上の船でルメイ大將率いる帝国軍のキルサイスSSと戦っているシーザーは苦しんだウイルを感じ取り、そのまま海に飛び込み、続けてキングやギルラプターエンペラー、ベティ、レックスも飛び込んだ。それを見たクリスは、

「おい、シーザー！どこ行くつもりだ!?!」

「どこかを見ている!」

「くそ、こいつだけでも忙しいのに！」

ジャックはスナイプテラ3Sの攻撃を避けながら、戦い、海に飛び込んだシーザーたちは犬かきをしながら、深海に入ってしまった。

コアの一部から放たれた紫色の霧はギヤラガー一世像の周囲に広がり、そこに生えていた花や草木を刈らしていた。

「あのコアは俺たちを絶対にあの像周辺に近付けさせないつもりのようなだ！　しかし、あれはゾイドコアなのか？」

「俺の予想が正しければ、おそらくあれが帝国軍が復活させようとしているZGのゾイドコアの一部だ！」

「その通り！」

その時、周囲から男の声がした。

「それにしても、ZGの欠けた決定的なピースが我がネオデスマタル帝国の前身である旧デスマタル帝国が帝国復活を宣言した記念すべき場所にあったとは、灯台もと暗しとは正にこのこと。」

ストームたちの前に現れたのは特殊なスーツを見に纏ったドクターマイルスだった。そしてその横には銃を持った機械兵たちもいた。

「まさか、都合よく貴様らがここに来るとはな、だが、貴様らはここで排除してやる！」  
「ドクターマイルス、確か、貴様もネオデスマタル帝国の建国者の一人だったな！ そして、初代皇帝ギヤラガー三世が皇帝になる前からの付き合いとも聞いている。

だが、ネオデスマタルが建国されたのは80年前なんだろ！ なのに、何故、俺たちが倒したギヤラガー三世は全く歳を取っていないのだ？ そして、貴様が復活させようとしているZGとはなんだ？」

「貴様らがそれを知る必要はない！ 何故なら、貴様らはここで死ぬのだからな！」  
パチン！

ドクターマイルスが指を鳴らしたその時、ズシンズシンと巨大な足音がし、その後ろから紫のラインが入った見たこともないような巨大な白いゾウ型ゾイドが何体か現れ、



先頭のゾウ型ゾイドには他のゾウ型ゾイドと違い、紫のライン以外は黒色になっていて、鋭利な牙を持ち、背中にはレーザー砲のようなものが搭載され、その横にはオメガレックスと同じA―Z三連誘導ミサイルが装備されていた。

先頭のゾウ型ゾイドを見たウィルは脳内で南極で凍り付けにされたゾウ型ゾイドが浮かび上がった。

「そうだ、あれだ！ あの時のゾウ型ゾイドだ!!」

「遂に謎のゾイドのお出ましってわけか!」

「冥土の土産だ、特別に教えてやろう。これはZGに仕える巻族ゾイド、コードネームZF、またの名をゼロフアントス!」

そして、先頭は南極で凍り付けにされ、6500万年以上前に封印されたゼロフアントスを私専用で改造したものの、後ろの取り巻きはそのデータと発掘したパーツを元に複製、復元した私の護衛だ!

グラビティキャノンを喰らったおかげで、ジェノスピノ、オメガレックスはしばらく使い物にならなくなったが、私のゼロフアントスはその空きを十分に補える程の戦力を持つ!

といっても、貴様らの戦力はそのスパイデスとグソックに旧式のカブリゲーターのみ、更に例のライガーは不在、しかもそのライダーはバイオアシッドの毒に犯され、戦

闘不能、これでは話にならない！」

「バイオアシッド？ 貴様、ウィルが何故苦しんでいるのか、知っているのか!？」

「バイオアシッドはZGとゼロファントスのみ持っている特殊な毒、並みの人間とゾイドが喰らったら、ものの数分で絶命する。」

おそらく、この同士たちはフリーダム団によって壊滅された後、亡命したここにあるZGのゾイドコアのパーツを護衛するゼロファントスを旧デスメタルの戦力にしようとしたが、バイオアシッドの毒にやられて全員絶命してしまったんだろうな！

実際、復元途中で死んだ研究員も何人かいたよ。だが、それが私の代でようやく完成されたわけだ！」

「くそ、早く、クリスやクルーガーに応援を呼ばないと！」

通信機を出すグラッドにドクターマイルスは、

「おっと、貴様らの通信機はここでは使い物にならない！ZGのゾイドコアのパーツの影響で、ここでは外とも連絡はつかない。それに、万が一のことを考えて、遠隔操作しているデイメパルサートランスの電磁波で電波妨害を行っている！ 絶対に助けは来ない。」

「何!？」

「後、貴様らがここに来ることを想定して、外の反乱軍の討伐にはルメイ大将に任せて

いる。今頃、連中は船と共に御陀仏だな！」

それを聞いたウィルは、腕をブルブル震え、

「貴様ー!! う……!」

ウィルはドクターマイルスに殴りかかろうとしたが、再び苦しみだす。エマはウィルのところに駆け寄り、そつとウィルの肩に触る。

「無駄だ! 貴様のゾイド因子ではバイオアシッドの毒を治すことは出来やしない。」

「キール!」

キールがゼロファントスに飛び掛かろうとするが、ドクターマイルスが指を鳴らし、ゼロファントスはA—Z三連誘導ミサイルをキールの横の壁に撃ち込み、キールは崩れた岩で前の視界を遮られ、そして、全ての岩が落ちたその瞬間、ゼロファントスの長い鼻が現れ、それでキールは投げ飛ばされてしまう。

「キール! くそ、」

「ならば、いけ、グソック!」

グソックは回転しながらゼロファントスに突っ込むが、ゼロファントスは易々と鼻で投げ飛ばしてしまう。

「わ、わしのグソックが……」

「愚か者め! そんな虫けらごとくときで、私のゼロファントスと互角に渡り合えると

思ったか!!」

ドクターマイルスと機械兵がウィルたちに銃を向けたその時、壁をぶち破ってシーザーやキングたちが現れた。シーザーはブルブルと身体を揺らした後、ウィルたちの前に立った。

「ライガー!!? まさか、あの海中を自力で泳いで行ったというのか!?!」

「シーザー、来てくれたんだな!」

シーザーはウィルの方を向いてゆつくりとうなずいた。

「よし、やってやる!」

「駄目よ! ウィル、そんな身体じゃ…」

「大丈夫だ! これくらいは傷、どうってことはない。」

ウィルは苦しみながらもそのままシーザーに乗り、攻撃の態勢を取った。

「エマと姉さんは安全なところに避難して!」

ギルラプターエンペラーに乗ったレイルはエマとユリスを安全な場所に誘導し、ストームたちもキングたちに乗った。

「やれやれ、せつかく楽に始末出来ると思ったのに、結局こうなってしまったか!」

パチン!

ドクターマイルスが指を鳴らした後、マイルスの来ている特殊スーツが身体全体を覆

い、顔も帝国軍兵士が装着しているマスクで覆われ、すかさず、機械兵たちと共にゼロフアントスに乗った。

「大事なお宝があるから、ここじゃ、ゼロフアントスのワイルドブラストは存分に使えないが、私のゼロフアントスだけで相手をしてやる！」

「お前がどれだけの相手でも、俺とシーザーが阻止する！ 行くぞ、シーザー!?!」  
グオオー!!

「待て、ウイル！ そんな状態じゃ、戦えない。ここは俺たちに任せろ！」

「で、でも！」

「俺たちを信じろ！ 皆、ワイルドブラストだ!!」

「進化 解放！ エヴォブラスト!!」

一斉にワイルドブラストしたキングたちを見たドクターマイルスは、

「全員でかかるつもりか、まあ、いいだろう。」

「皆、行くぞ！」

「真・音速殺!!」

ギルラプターエンペラーは超スピードでドクターマイルスのゼロフアントスの背後に回り、攻撃しようとする。

「ギルラプターエンペラー、帝王ギャラガー一世陛下が初めて帝王になられて手にし

たギルラプターの亜種、ギルラプターの中でもパワー、スピード共に優れた正に帝王が持つにふさわしいギルラプター、だが…」

ゼロファントスは瞬時に後ろ足でギルラプターエンペラーを蹴り、それを後ろにいたゼロファントスが長い鼻で捕らえた。

「レイル！」

「パワーに偏った戦いかたでは、必ず、隙が生じる。」

「今、助けてやるぞ！ ファイナルガトリング!!」

「ガトリングフォックス、かつて我がネオデスメタル帝国が復元し、所有していたゾイド。

光学迷彩を活かした隠密性に優れ、遠距離戦ではどのゾイドよりも強力、だが、近距離戦はそこまで強くはない！」

そう言ったドクターマイルスはゼロファントスのイヤークシールドを広げ、レックスの攻撃を全て防いだ。

「何!?!」

「スパイダーポイズン！」

「撃転棘!!」

「スパイデスは他の昆虫より汎用性が高いクモ種、クモはその汎用性の高さを活かし

てあらゆる獲物を瞬時に捕らえ、強力な昆虫でも苦戦に追いやることができる。だが、攻撃力は極めて低い！」

ゼロファントスは鼻でキールを捕らえた。そのままグソックも攻撃しようとするが、「そして、グソック、頑丈な装甲による高い防御力を持ち、他のゾイドより小型であるため、小回りがよく利き、活動範囲も広い。だが、攻撃のリーチは短い！」

ゼロファントスは鋭利な牙をでグソックをブツ刺した。貫通まではいかなかったが、ゼロファントスの牙がグソックの装甲にかなり食い込んだ。

「今、行くぞー！ キングオブクローブラスト!!」

「ファングタイガーのパーツを受け継いだワイルドライガー、この面子では最強で、かつて帝王ギャラガー一世陛下のデスレックスさえも倒したライダー共に隙のない完璧なゾイド！ だが…」

ゼロファントスは鼻で捕らえたキールと牙で食い込んだグソックを瞬時にキングの攻撃の盾にし、キングは慌てて、攻撃の手を緩めた。

「仲間の命を手にかける非情さがないのが、貴様の弱点だ！」

「くー」

ゼロファントスはそのままキールとグソックをレックスに向かって投げ飛ばし、更にキングに三連誘導ミサイルを放ち、そのまま突進してキングをぶつ飛ばした。

「フッフ、私がしばらく前線に出ない間、貴様らのゾイドのスペックは全て知り尽くしてあるのだから、弱点も把握している。

だから、貴様らは私には勝てない！」

「やつぱり、俺が出なきや！ 行くぞ、シーザー！」  
グルル…

シーザーは心配そうな表情でウイルを見た。

「シーザー！ 進化かい…、う！」

ウイルはゾイドキーを差し込もうとするが、右手が痺れてキーを落としてしまう。それを見たドクターマイルスは、

「ふ、そんな状態で私と戦うつもりか？ ま、どうせ、貴様の命は後僅かだろうな！」

「それでも、俺は最後まで戦う！」

護衛のゼロファントスはギルラプターエンペラーを鼻で締め付ける。

「ぐ、ぐわく!!」

「レイル!!」

「レイルを放せ！」

「それは出来ん！ こいつはもう必要のない人形、いたら、目障りなだけだからな！」

「許さねえ！」



シーザーはA-Zグレネードランチャーを撃ち込むが、ゼロファントスはそれを全てイヤーシールドで防いだため、びくともしない。

「バイオアシッドの影響で手が使い物にならなくなつて上手くキーを差し込めず、ワイルドブラストが出来ないから、他の武装で対抗しようとしたつもりだろうが、そんなものは私には通用しない！

ま、仮にワイルドブラストしても勝つことは不可能だがな！」

「う……」

ウイルは更に苦しみだし、シーザーもウイルのこと心配になつて戸惑つてしまう。

「さて、遊びは終わりだ！ この私のオリジナルのゼロファントスのワイルドブラストを喰らつて死ぬがいい！

ゼロファントス！ 原始 解放！ ゼロブラストー!!」

コクピットにいるドクターマイルスの特殊スーツが紫色に発光したと同時に、ゼロファントスの背中のレーザー砲も紫色に発光し、照準をシーザーに向けた。

「喰らうがいい デイズルレーザーキャノン!!」

シーザーはすかさず、Eシールドを展開し、ゼロファントスのレーザーキャノンを防ぐが、レーザーキャノンはじわじわとEシールドを溶解し、遂にEシールドに穴をこじ開けてシーザーの装甲を貫いた。

「ウワァー!!」

グオオー!!

ウィルとシーザーは悲鳴を上げ、そのまま倒れてしまう。

「終わりだな。さて、2度と復活しないよう、バラバラに解体してやろう!」  
ゼロファントスがシーザーの元に歩いたその時、

グオオー!!

突然、ギルラプターの咆哮がし、何処からか、ギルラプターが影から現れ、回転しながら、ギルラプターエンペラーを捕らえているゼロファントスに強烈な一撃を加え、ゼロファントスはギルラプターエンペラーを放し、すかさず、ギルラプターエンペラーはその場を離れ、ドクターマイルスのゼロファントスの前に立ちふさがり、同時にもう一体のギルラプターも現れた。

「何だ? 貴様は!」

現れたギルラプターは赤い色をし、ソニックバードのジャックと同じ足になっているギルラプターだった。赤いギルラプターを見たストームは何処かで見たとような目をし、

「あのギルラプター…まさか!」

赤いギルラプターはドクターマイルスのゼロファントスに向けて声高に咆哮を上げた。

T グ  
o オ  
b オ  
e ー!!

c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 第4 2話「ギルラプターの男」

ギルラプターエンペラーをた助けた赤いギルラプターはドクターマイルスのゼロファントスにも攻撃した。

「音速殺!!」

赤いギルラプターの目にも止まらぬスピードによる攻撃でドクターマイルスのゼロファントスに一撃を喰らわす。ゼロファントスはイヤーシールドで防いだが、少し後退した。

「この威力は！　そうか、貴様、例の奴か！」

赤いギルラプターに乗っているライダーは返答せず、増援に来たラプトルたちを呼び、放った煙幕で辺りが全て見えなくなつた。全ての煙が晴れた後には赤いギルラプター及びシーザーたちの姿はなかつた。

「ち、逃がしたか！　それにしても、あのギルラプター、何処かで見たことあるが、そうか、あいつか！」

これで奴も我が帝国から逃げられることは出来なくなつたわけだな。

だが、その前に欠けたZGの最後のゾイドコアのパーツを回収しなくてはな！」

海上では、クリス率いる同盟軍とルメイ大將率いるスナイプテラ3SとキルサイスS隊が交戦していたが、同盟軍が圧倒的に劣勢に陥っていた。

「リーダーやコマンドーからの連絡はまだか!？」

「それが…何度も通信を開いているのですが、全く応答がありません!」

「くそ、こっちは多勢に無勢、明らかに不利だ!海中に入ったシーザーたちの行方もわからないし…」

「隊長! ここは一旦撤退を! もうこれ以上は持ちこたえられません!」

「仕方ない、ジャックもあのスナイプテラの攻撃を数発喰らってボロボロだ。ここは基地に一旦撤退して態勢を立て直すしかない。全軍撤退だ!」

ジャックとカプター、クワーガ、クワガノス隊は旧共和国の戦艦と共にそのまま撤退

していった。

「ルメイ大将、反乱軍が撤退していきます。」

「ふん、流石に我が軍に敵わぬと見たと判断したようだな！」

「追いますか？」

「いや、構わん。それより、あの船を爆発させろ！」

「は！」

キルサイスSS隊は旧デスマタル帝国の爆弾を設置し、船を爆破させた。

「これで、旧デスマタルの遺産は守られた。」

その時、スナイプテラ3Sのコクピットから通信が入った。通信の相手はドクターマイルスだった。

「ドクターか。反乱軍なら、撤退し、予定通り、船は爆破させた！そちらは？」

「こちらも予定通り、ZGの欠けたゾイドコアのピースを回収し、キルサイス部隊で帝都に送った。研究所は元帥殿やデーニッツ中将に任せているから、後は完成を待つだけだ。だが、獲物は逃がしてしまったがな。」

「あのライガーとガキ共か！」

「ああ、それもあの例のギルラプターの男に邪魔されてな！」

「コープス・ブレイン社の御曹司か…確か、隠密基地に改造した別荘に隠れ住んでいた

んだな。

よし、では、私がああ財閥に乗り込んで居場所を炙り出す。」

「いや、無理だ。奴の居場所は財閥の連中すらも知らない。だが、その場合も考えて、ゼロファントスに一度捕らえたギルラプターエンペラーに例の小型スパイゾイドを取り付けておいた。場所はもう特定している。」

「では、早速総攻撃を……」

「いや、襲撃は夜明け前にする。奴等に安息の隙を与えないようにするのだ。それに夜はお前のスナイプテラとキルサイスのステルス性能を存分に発揮できる独壇場だ。」

そして、私のゼロファントス部隊も合わせれば容易に落とせる。」

「なるほど、では、夜に総攻撃を開始する。」

「ウイル、ウイル！」

ウイルの名を叫ぶ声を聞いてウイルは目覚めた。ウイルはホテルの一室のような部屋のベッドで寝ていて、横にはエマとレイル、カティア、ユリスがいた。

「エマ、皆！　ここは？　あれ、身体がなんともない。」

「お前の身体にワクチンを打っておいた。お前が喰らったバイオアシッドの毒は欠けた不完全なパーツから発生したもので、バイオアシッドの毒を応用したレーザーキャノンも装甲を貫いたが、辛うじてお前やライガーのゾイドコアには直撃しなかったから、幸い、そこまで強いものではなく、あのライガーも直ぐに完治した。」

「じゃあ、シーザーは無事なんですか!!」

「ああ、問題ない！」

「ありがとうございます！」

「お礼なら、俺のジャンに言え。あいつがお前らを助けるってしつこく要求してきたからな。」

「ジャン？　俺のギルラプターの名前だ！」

しばらくして、ウイルやストームたちは助けしてくれた人物と共に食事をしていた。

「いや、しつかし、お前に助けられるなんて思わなかったよ！」



「助けたら？ 大体お前があんなところに来なければ、ネオデスマタルの連中とまた面倒なことになるとこだったぞ！」

ストームと話す人物を見たウィルは、

「ストームさん、誰なんですか？」

「ああ、紹介する。俺の旧友のカールトン・ドレイク。コープスブレイン社の社長だよ！」

「コープスブレイン社って、世界的に有名なあの大財閥ですか？」

「何だ？ エマ、知ってたのか！」

「はい！ 野生のゾイドや野良ゾイドを保護しているボランティアに参加しているって聞きました！」

「ドレイクは行き場のない野生ゾイドや帝国から脱走して野生化した野良ゾイドを保護していて、現在、ゾイド保護団体にも入っている。」

俺がクルーガーと会って同盟軍を結成する前の仲間でもあったが、俺が同盟軍の指導者になつてから関係は絶つてしまったがね。」

「ふん、てめえがネオデスマタルと戦争をおつ始めるから、そうなつたんだよ！ 俺まで巻き込まれるのは後免だからな！」

にしても、先祖のアラシはフリーダム団のリーダーとして旧デスマタルを倒した英雄

で、子孫のお前は同盟軍という反ネオデスメタルのレジスタンスのリーダーか…相変わらず、お前の家はヒーローごっこがお好きなようだな！」

「口が悪いぞ！ドレイク。」

「ドレイク？ その名前、どつかで聞いたような…」

「ああ、そうじゃ！ 思い出した!! 確か、お主の先祖はフリーダム団のメンバーで、元旧デスメタル四天王だった男じゃろ！」

「確か、その異名は…えくと、なんじやつたつけ…しゅん…しゅん…春菊のドレイク!!」

「瞬撃のドレイクだ!!」

「あれ？ 確か俺も春菊だって聞いた気がするが…空耳かな？」

「てめえら！ 黙って聞いておけば…」

「そうムキになるな。 春菊！」

「瞬撃だ!! てめえはわざと言ってんだらう!!」

「まあ、おふぎはこの辺にして…、それにしても、お前がなんでこんなところにいるんだ？ しかもこんな軍事基地のようなところか？」

「そうじゃ、中は一見豪華ホテルのようじゃが、外ではあの海底神殿みたいに誰にも発見されないような海岸沿いの下の洞穴のところにあつて、しかも世話しているのはどれも高度なロボットで、全員銃を所持していて、入口で厳重に警備している等、明らかに

「隠密基地のようなところに大企業の御曹司がいるなんておかしいじゃろ！」

「デスレックスのことを色々調べたら、面倒なことになったんだよ！」

「デスレックスを？」

「200年前、帝王ギャラガー一世が操るデスレックスをお前の先祖のアラシが一度説得することに成功したことに少し疑問が出たんだよ。

デスレックスはかつて古代秘宝乙と呼ばれていたが、世界の半分を壊滅した最強の破壊龍として恐れられた最凶のゾイドでもある。

あのオリジナルデスマタルキーの影響で暴走したこともあるかもしれないが、そもそもそのキーは何処の技術を持って開発したのか、何故デスレックスがあそこまで恐れられる凶悪なゾイドなのか、俺の代まで調べてきた。

そして、遂にその詳細を突き止めた後、あのドクターマイルスとかいうネオデスマタルの科学者に付きまとわされてな。面倒なことにならないよう、会社を副社長に任せて、隠密基地に改造したこの別荘で隠れ住むはめになっちまったんだ！」

「で？ 一体何を突き止めたんだ？」

「実はゾイドクライシス以降に現れたデスレックスには世界を壊滅させる程の力はなく、そればかりか、あのジェノスピノやオメガレックスよりも劣るスペックだった！」

「まさか、オメガレックスがデスレックスの突然変異種だというように、あのデスレッ

クスも突然変異種だというのか?」

「だが、それもただの突然変異種じゃない。どうやら、ジェノスピノやオメガレックスすらも凌駕する強大なゾイドのゾイド因子を受け継いだ最強のデスレックスだということが判明した。」

「そのゾイドとは?」

「名は…ゼログラライジス。」

「ゼログラライジス?」

「6500万年前にこの地球に初めて現れた最凶のゾイドだ!」

「ちよつと待て、ゾイドが初めて地球に現れたのは1200年以上前のゾイドクライシス以降からじゃなかったのか?」

「いや、正確にはゼログラライジスが地球に来て、最初に地球に来たゼログラライジスのゾイド因子の影響を受けてゾイドクライシスの後に初めて本格的にゾイドが現れたということだ。」

そして、ゼログラライジスはある連中によって一度復活し、地球を壊滅寸前に追い込んだが、ライオン種とその他のゾイドと死闘を繰り広げ、封印されることになった。」

「それが、帝国が復活させようとしているZGの正体か。」

「そして、そのゼログラライジスを封印し、世界を救ったライオン種とその他のゾイドは

地球と人類を救った英雄、人類の宝庫として語り継がれるようになった。

しかし、ゼログライジスは封印される直前、予め、大陸にいたデスレックスに自らのゾイド因子を植え付け、そのデスレックスを分身として自身の復活を画策した。

そして、数十年後、ワイルド大陸に国家を築いた君主はデスレックスを手に入れ、オリジナルデスメタルキーを開発し、デスレックスをデスブラストさせ、大陸を制圧し、更には世界を支配するべく、大陸外にも侵略の手を伸ばし、旧帝国と旧共和国に宣戦布告した。

そして、両国を制圧し、その君主は世界を支配する寸前までいったが、デスレックスは逆にその君主に牙を向け、君主が支配する国家を壊滅させた。

君主はデスレックスの暴走を止めるべく旧帝国、旧共和国から選りすぐりの生け贄を差し出した。他の生け贄はデスレックスに喰われたが、ある1人だけはデスレックスの暴走を止め、更に絆まで結んだ。

どうやら、そいつは体内にゾイド因子を持った人物で、その力でデスレックスと意志疎通し、デスレックスを説得したらしい。そして、デスレックスは大人しくなり、生け贄の間はデスレックスの力で世界を平穏にし、その時からデスレックスは古代秘法Zと呼ばれた。

だが、デスレックスは自分のものだと主張する君主は納得がいかず、武力でその人物

からデスレックスを奪い返し、再びデスブラストしたが、再び暴走して遂に世界の半分を壊滅させた。

しかし、生け贄の人物の友人がゼログライジスを封印した古代秘法Zの一体のゾイド因子を受け継ぐワイルドライガーと共にデスレックスと死闘を繰り広げ、デスレックスは活動を停止し、デスロッキーに封印され、そして、その数百年後、帝王ギアラガー一世の手で復活したが、再びそのライガーに敗れ、また封印されることになって今に至る。そして、そのワイルドライガーがお前のキングだ！」

「なるほど、古代秘法Zはデスレックスだけではないとは聞いてはいたが、他はゼログライジスを封印した地球を救ったゾイドで、俺のキングはそのゾイド因子を受け継ぐゾイドの王だったのか！」

その時、ウィルが口を開き、

「ちよつと待ってください！ そのライオン種つてもしかして……」

「ああ、確か……名前はビースト、ライジングライガーって言うてたかな。」

「そうか、シーザーは古代秘法Zだったのか！ そして、

俺のキングの親戚で、お前が次の救世主ってことだな！」

「そんなことありませんよ！ ストームさん。」

「ところで、デスレックスの暴走は？」

「どうやら、デスレックスが暴走した原因はオリジナルデスメタルキーと同時に封印されたゼログライジスがデスレックスに内在するゼログライジスのゾイド因子を呼び覚まして暴走させたようで、ゼログライジスはデスレックスの力でゾイドクライシスのように一度世界を破壊し、壊滅した地球を自らが支配する新世界に変えようと復活を虎視眈々と狙っていたようだが、生け贄の人間とキングの力でその力を抑制されて、復活を阻止されたようだがな！」

「ゼログライジスがその時代に知られなかったのはそのためで、そして、そのデスレックスを分析し、ゼログライジスの存在を知ったネオデスメタル帝国がそいつを復活させようとしているってことか。」

「だとしたら、不味いぞ！　ゼログライジスがどれ程の力を持っているのか正確にはわからないが、あのジェノスピノやオメガレックスより強いってことは、今の俺たちでは絶対に手に負えないことになるぞ！　それにデスレックスまで加わったら…」

「ドレイク、俺たちに力を貸してくれないか？」

「悪いが、断る！　これ以上、面倒なことに巻き込まれるのはゴメンだからな！

それにお前たちが欲しがっていた情報は話してやったんだ。後は帰ってくれ。お前たちのせいで帝国にここを突き止められたらかなわんからな。」

「何言ってるんだ！　これは俺たちやゾイド、世界全体の問題なんだぞ!!」

「だからって、それがどうした？ ネオデスマタルの目的は世界の支配、世界を破壊するなんてバカなことではないし、それに仮に倒してもどうせ、帝国と共和国が復活してまたゾイドクライシス以降みたいなバカな戦争やって同じこと繰り返すことになるだけだ！

俺みたいに支配を受けない暮らしをすれば気楽にいけるだろうに、ホントバカな奴らだ！」

「け、何だかんだ言つて所詮はネオデスマタルに恐がつてこそこそ隠れるネズミ野郎じゃねえか！」

「ふん、ネオデスマタルを倒すために戦っているお前たちも皇帝すらなれなかった。この落ちこぼれプリンスを仲間にして何のつもりだ？

帝国に見棄てられたから、引き取ったってことか？ いいボランティアだね。」

それを聞いたレイルは少し驚き、エマやユリスも悲しそうな表情をし、それを見たスミスが怒り、

「この無礼者！殿下を侮辱することはわしが許さんぞ！！」

ストームがスミスに待ったをかけ、

「まあ、待て！ まあ、ドレイク、頼むよ！」

「まあ、ゼロファントスの影響で通信が使い物にならなくなったらしいし、今晚くらい



は泊めてやる。だが、用が済んだらさっさと帰れ！」

そう言つてドレイクは部屋から出た。

「全く、あの春菊野郎め！ 殿下を侮辱しやがつて！」

「そう言うな！ あいつは面倒なことに巻き込まれるのが嫌いで、かつて先祖が旧デスメタルで色々な目に逢わされたこともあつたから、その影響もあるのさ！」

「だが、どうする？ 通信はまだ効かないし……」

「とりあえず、ここにある資材を借りるよう、ドレイクに頼んでみる。」

とにかく、俺とグラッドはクリスやクルーガーたちと連絡を取れるよう頑張つてみる。ウィルや皆はゆつくり休んどいてくれ。ここは温泉もあるから、ゆつくり出来るだろう。」

「でも、ストームさんだけ置いて俺たちだけ休むなんて……」

「ウィルは毒が治つたばかりだから、お前はむしろ休んで養生した方がいいし、それにこれは俺たちの専門で、手伝うまでもないから、安心して休め！」

「ようし、では、殿下はわしと一緒に温泉に入つて背中流しっこしましょう！」

ポカン!!

「てめえはサウナに入つていろ!!」

レイルは少し落ち込んだ表情をし、それを見たエマは、

「どうしたの、レイル？」

「え？ いや、なんでもないよ。」

ウイルたちが温泉に入って、疲れを癒し、専用部屋で寝るようになった深夜、ストームとグラッドは通信機の修理を終えた。

「よし、これで、クリスたちと連絡を取り、基地に帰るだけだ。」

「今すぐにも連絡を取りたいところだが、」

「ところで、レイルは？」

「さつきまでウイルたちと一緒にいたんだが…」

レイルはガラス越しにいる野生ゾイドたちを見詰めていた。

「僕は本当にこれでいいんだろうか……父上に見離され、エマと一緒にいるようになって帝国と戦うようになったけど、本当にこれで……」

そこにギルラプターエンペラーが現れ、考え事をするレイルにそつと寄り添った。

「ギルラプター、ありがとう。僕は大丈夫だよ！」

その時、ドレイクとギルラプターのジャンが現れ、

「こんなところで、何をしているんだ？ 帝国のプリンスさんよ！」

「別に、あなたには関係ないことじゃないですか！」

「それでもないさ、俺のジャンが気になってるからな。お前のギルラプター、帝王

ギアラガー一世のゾイドだろ！」

そいつはジャンの兄弟分で俺の先祖の相棒だったギルラプターを殺した奴だが、デスレックスを手に入れたギアラガー一世に見棄てられ、俺の先祖のゾイドとなってレジスタンス鎮圧に向かった際、デスメタルへの忠誠とジャンの兄弟分を殺した贖罪のためか、自ら自爆して殉教した。そして、今でもその記憶を捨てきれないようだな！」

「何が言いたいんです？」

「最初、お前と会った時は現皇帝の四世同様、一世みたいな奴かと思っていたが、どうやら違ったようだ。」

お前もそのギルラプターと同じ立場のようだな！ ネオデスメタルを正義として信じ、父親である先帝ギアラガー三世を尊敬して認められるために戦ったが、逆に弟を皇帝にして、簡単に見棄てられ、信じる者を失ったが、それでもネオデスメタルの皇子として捨てきれず、一時は自害を覚悟していたんだらう？」

それを聞いたレイレルはしばらく黙っていた。

「ストームたちのおかげで、お前はあの時のギルラプターエンペラーみたいに殉教することはなくなったが、これからお前は どうするつもりだ？」

レジスタンスとしてこのまま生まれすんでいた帝国に牙を向き、戦うのか？」

「そ、それは……」

その時、警報が鳴った。

「非常事態発生！ 非常事態発生！」

「ち、まさか、帝国軍か!? お前との話は後回しにする！」

ドレイクはその場を去り、司令室に入り、司令室のロボットに、

「帝国軍か!? 規模はどれぐらいだ？」

「霧の中に隠れていて、敵の戦力は不明です！」

「霧……ってことはさっきのゼロファントスか！ バーストル隊で応戦しろ！」

司令室にウィルやストームたちも入り、

「どうした？ ドレイク、」

「全く、てめえら助けたせいでここの居場所を奴等に知られてしまったよ！」

基地の前に出たバズートル隊は霧の中に向かって攻撃するが、ドクターマイルス率いるゼロファントス部隊は攻撃の届かないところにいた。

「フッフ、この前は神殿の中だったから、ゼロファントスの力を存分に発揮出来なかったが、今回は存分に味わえる。ゼロファントス部隊、ゼロブラスト発動！」

他のゼロファントスに乗っている機械兵たちは、

「ゼロファントス、原始 解放！ ゼロブラストー！！ デイゾルボム！」

ゼロファントス部隊が紫色に発光した時、ゼロファントスは長い鼻で背中の爆弾を持ち、それをバズートル隊に向けて投げつけた。

ゼロファントスが投げつけた爆弾でバズートル隊はたちまち全滅した。

「バズートル隊、全滅しました！」

「くそ、」

「俺が行ってきます！」

「待て、ウィル！ 敵は霧の中に隠れているんだぞ！ 下手に動いたら奴らの罠にかかるとの恐れもある。」

「でも……」

ゼロファントスのデイゾルボムが基地の強固な扉を破壊し、キルサイスSS隊が入って行った。

「敵、基地に侵入しました！」

「仕方ない、シエルターに逃げる！ ここにいる野生ゾイドを避難させ、お前たちはここで奴らを出来る限り、食い止める！」

「それが、シエルターが作動しません！」

「何?!なんでだ?」

「どうやら、敵の工作を受けたようで…」

シエルターの壁には小型昆虫型ゾイドが装置をジリジリと破壊していった。

基地に侵入するキルサイスSS隊が基地内のラプトル隊を撃破しているのを見た

ドクターマイルスは、

「フツフフ、スパイゾイドを送ったのは場所を特定するだけではない！ シェルターがあることを想定して予め細工をしておいたのさ！

さて、ルメイ大将、後は貴様の出番だ！ ゼロファントス部隊後退しろ！」

スナイプテラ3Sで上空からゼロファントス部隊を見たルメイ大将は、

「なるほど、あれがゼロファントスか！ これは素晴らしい性能だ。ジェノスピノやオメガレックスがいずとも十分反乱軍を制圧出来る戦力だ！

スナイプテラ3S隊、キルサイスSS隊、爆撃開始!!」

基地の上空にいるスナイプテラ3SとキルサイスSS隊は無数の爆弾を基地に向けて落とした。

基地は一気に爆風に飲み込まれ、基地内で交戦していたラプトルとキルサイスSSも爆発に巻き込まれ、基地は一瞬で跡形もなく破壊されていた。周囲には逃げ遅れた野生のゾイドたちの亡骸がゴロゴロ転がっていた。

ゼロファントス部隊は破壊された基地の元に歩き、ドクターマイルスのゼロファントスが野生のラプトルの頭を踏み潰し、

「ふ、流石の反乱軍もこの爆撃でただではすまん！ 例え、生きててももう死にかけだ！ フフフフ、ハーツハツハツハツハツハ!!」

パオオッ!!

ドクターマイルスの高笑いも跡形もなくなった基地に響き渡り、同時にゼロフアクトスも咆哮を上げた。

T o b e c o n t i n u e d



## 第43話 「ダブルギルラプター」

ルメイ大將率いるスナイプテラ3SとキルサイスSS隊の爆撃で破壊されたドレイクの別荘、ドクターマイルスと機械兵はゼロファントスから降り、ウィルやシーザーたちの亡骸を探していた。

しかし、どこを探してもウィルとシーザーらしき姿は見当たらなかった。

「どういうことだ？ あれだけの爆撃を喰らって助かるはずは……」

その時、機械兵が何か見付けたことに気付き、そこにいった先には非常口の扉があった。そして、扉の先に岩山が崩れ、道が塞がっていた。

「なるほど、シエルターが使い物にならなくなった代わりに非常口から脱出したということか！ だが、入口は塞がれている。別の出口を探してそこを封鎖すれば、奴らは袋の鼠だ！」

聞こえるか？ ルメイ大將、別の出口を探して奴らを挟み撃ちにしろ！」

「了解！」

「ふ、ま、どちらにせよ、奴らに逃げ場はない！」

その時、いきなり後ろからギルラプタージョーカーが現れ、前足の爪をドクターマイ

ルスの首に近付け、いつでも首を切れる態勢を取った。そして、複数現れたギルラプタージョーカーの内の一体からガネストが降り、ドクターマイルスの元に駆け寄った。

「これは、皇帝陛下！ 一体何の真似でしょうか？ いけませんね。皇帝たるお方が勝手に帝都から出ていかれては…」

「随分、熱心に反乱軍の鎮圧に力を注いでいるらしいけど、駄目だよ！ ボクを仲間はずれにしちゃ！」

「ですが、陛下のオメガレックスはグラビティキャノンを喰らってしばらく使い物にならない。そのギルラプターでは反乱軍を制圧するのは危険すぎます！」

「だから、ボクはイライラしているんだよ！ あのリセルとか言うやつぱりにせつかくのボクのゲームを邪魔されたんだよ！

おかげで、オメガレックスは使い物にならなくなって、タツカーから宮殿にいるように言われてあの宮殿に留まるはめになっちゃったんだよ！

つまらないんだよ！ ボクはね。じつとしているのが嫌いなんだよ。毎日戦うという感触が欲しいんだよ!!」

「それで、私とどういったゲームを？」

「ちようどあいっつらこん中に隠れているんでしょ？ だったら、ボクとふたてに別れてそこで会った奴らを先に倒した方がゼログライジスを手に入れることが出来る！」

面白そうでしょ！」

「何故、ゼログライジスを？」

「あれ完成したら、誰に与えるつもりなの？ どうせ、ボクにくれるつもりはないんでしょ？」

「何故、そう言い切れるんです？」

「だって、前に父上はボクに皇位を譲る前にジエノスピノで出撃したけど、ジエノスピノってゾイドクライシス後に復元した後でも一度あのライジングライガーに負けているんだよ！」

父上がそんなことも知らず、同じライガーに負けるわけじゃないじゃない！ てことは、もしかして父上はまだ生きてるんでしょ？」

「それは後に分かります！ それよりまずはこのゲームわ楽しみましょう。」

「そうだね！ じゃあ、このゲームでボクが勝ったら詳しく聞かせてもらうよ。でも、皇帝はボクなんだから、ゼログライジスもボクが貰うからね！」

ガネストはギルラプタージョーカーに乗り、他のジョーカーも率いてその場を去った。去っていくジョーカーを見るドクターマイルスは、

「ギャラガー四世陛下、あなたは確かにこのネオデスメタル帝国の現皇帝ではありませんが、それでもあなたは表向きの支配者に過ぎません。いずれ、わかる 때가 来ます

「！」

気を失っていたウイルが目覚め、目を開けたその場所は洞窟の中で、目の前にシーザーがいて、その横にはストームとキングもいた。

「気が付いたか。」

「ストームさん、ここは？」

「ドレイクが用意していた非常口から逃げた時、帝国軍による爆撃の爆発の影響でどうやらここまで落っこちたようだ。」

だが、シーザーがお前を必死で守ったおかげで、大した怪我ではなかった。」

「そうか、俺を守ってくれたんだな。ありがとう、シーザー。」

ウイルのお礼の言葉にうなずくシーザー、

「あ、レイルにエマに皆は!？」

「どうやら、あの爆発の影響で皆離れ離れになっちまって、今、ここにいるのは俺とお前だけってとこだ。」

「皆…」

「そう、へこたれるな！ 修理した通信機には発信機能も付いているから、他の皆の場所は大体把握できる。直ぐに見つかるだろう。」

ただ、ここがどの道に繋がっているか不明だから、ちよいと面倒な航路になるが、今の俺たちには立ち止まる余裕はない！ わかるな。」

「はい！ ゼログライジスの復活を阻止し、皆の笑顔を守るために俺たちは戦うんです。」

「よし、まずはここから脱出することだな。行くぞ！」

「あ、あの…」

「どうした？ ああ、ドレイクのことか！ 心配するな。ああ見えてあいつは結構いい奴だ。ただ、不器用なだけだからな。ちゃんとレイルやエマたちのことも考えている。心配するな。」

ストームの言葉にウィルはうなずき、シーザーと共にストームとキングの後についていった。

ストームとウィルのいるところから少し離れた場所にユリスが気を失っているエマを起こした。

「エマ、エマ！」

「う…ユリスさん。 は！ レイル！ ウイルたちはどこにいるの？」

「わからない…でも、皆を探さなきゃ！」

エマとユリスが皆を探そうとしている近くに小型昆虫型のスパイゾイドがその様子を見ていて、映像を通してドクターマイルスが見ていた。

「ふ、あの小娘2人がライガーのガキ共と離れているのは好都合。

そうだ！ あの小娘を捕らえて少しゲームを面白くしてやろう。 ルメイ大将にキルサイスSSをこちらに寄越すよう伝えろ！」

「はー！」

「後、それと、帝都のタツカー元帥殿に奴をこちら連れていくよう伝えろ！ そろそろ奴にも名誉挽回のチャンスを与えてやらなきやな。」

ウイルやストームたちと別れてしまったジョンはカティアや相棒のキール、ベティと共に洞窟を歩いて行った。カティアは心配そうに、

「ウイルや殿下、エマたちは大丈夫かしら？」

「大丈夫だって、あいつらはもう昔のあいつらじゃない。」

「それはそうだけど…」

「とにかく、今は俺たちはあいつらを信じて探すしかない。それにリーダーやコマンダーのおかげで発信器機能がついた通信機が使えるようになったから、それを便りにすればすぐ見つかる。元氣を出せ！」

「うん。」

ジョンとカティアがウイルスたちを探している中、グラッドはスマイス、スレイマーズと一緒に洞窟を突き進んでいた。グラッドは少し不満そうな顔で、

「たく、よりによってなんで俺がこいつらと一緒になっちゃったんだ？」

「そう言うな、ワシらなんか、殿下やエマちゃんにユリスちゃんともはぐれてしまった



んじやぞー！

おおく、殿下く、エマちゃん、ユリスちゃん！ どこにおるんじや!!」

スレイマーズたちは、

「もしかして、殿下たち、リーダーと一緒にするのが嫌で、わざと離れたんじやないかね?」

「言えてる!」

「だまらっしゃい! ワシの殿下に対する忠誠心は絶対じや! 殿下やエマちゃんがワシを見捨てるわけがなからう!」

「それは、忠誠心ではなく、ロリシヨタコンでは…」

「やかましいわ!!」

「ええ加減にしろ! お前ら! たく、先が思いやられるぜ。」

ストームとウィルのいるところから少し離れたところで、レイルが気を失っていて、目を覚ましたら目の前にギルラブターエンペラーが心配そうに見つめ、その横にはドレイクとジャンがいた。

「気が付いたか!」

「ハ、ハハハは? ! エマ、姉さんは!?!」

「俺の別荘の非常口に続いている洞窟だ。爆撃の衝撃で他の連中と別れたみてえだが、ところでエマと姉さんつてもしかしてあの女2人か?」

「そ、そうだけど…」

「ふくん、お前、惚れてんだな!」

「そ、そんなんじゃない!」

「あの帝王ギヤラガー一世の血を引く皇帝ギヤラガー三世のせがれのお前にもそういう一面もあるなんて意外だな!」

「ば、馬鹿にしているのか!?!」

「んなわけねえだろ。ただ、あれだけ最強ゾイドに固執し、世界を手中にしようとしたギヤラガー一世、三世のせがれが人一倍に恋愛するなんて思わなかったからな。」

「エマと姉さんが帝国にいたから、一緒になったただけだ。」

「ふくん、随分可愛いじゃねえか。」

「う、うるさい！」

「まあ、いいや！ 俺はこの辺で失礼させてもらおうぞ。」

「ちよつと待つてよ！ 僕たちと一緒に行くんじゃないのか？」

「お前がああギヤラガー一世と同じ奴じゃないとしても、所詮、お前はギヤラガー一世の血を引く皇子、しかも、そのギルラプターは俺のジョンの兄弟の仇でもある。」

そんな奴と行動する気もないし、同盟軍に入る気もない。それにお前たちを助けたせいで、俺の別荘の場所を特定された上に、破壊されちまったからな。これ以上、お前らと関わるのは後免だからな。」

レイルは自分を見つめるエンペラーを見て、

「確かに僕のギルラプターはお前のジョンの兄弟を殺した。でも、それは、帝王ギヤラガー一世に仕方なく従つてやっただけのこと。」

それに僕はギルラプターと一緒に従つてから、僕は世界を平和に導くために力を付けてきて、一世のやり方を直すためにここまで来たんだ！」

「でも、貴様もそのギルラプターみたいに父親のギヤラガー三世に従つて、他の反乱軍を潰してきたんじゃないか？ お前に潰された反乱軍は山ほどいるつて聞いたぞ。」

「そ、それは……」

「皇子やエンペラーの名を持つても所詮、エンペラーの地位にいる者の操り人形ってわけか……」

その時、突然、壁の上に張り付いている謎の影がレイルを襲った。ギルラプターエンペラーは咄嗟にレイルの後ろに周り、影を叩き落とした。影の正体はギルラプタージョーカーだった。

「へえ、よく気付いたね。ま、これぐらい当然か！」

目の前に無数のギルラプタージョーカーが現れ、先頭のジョーカーのコクピットにはガネストが乗っていた。

「お前は、ガネスト！」

「ガネスト？　そうか、こいつが現皇帝ギヤラガー四世か！」

「探したら、まさか、ボクの劣化コピーのお前と出会うなんてね！　ちようどよかった。ボクよりオリジナルに近い存在なんて許さないから、正直キミは目障りだからね。ここで死んでもらうよ！」

「僕はお前の劣化コピーなんかじゃない！　僕は世界を平和にするためにネオデスメタル帝国の皇子としてここまで来たんだ！　そう、皆とゾイドが共に手を取り合う世界を！」

「なにそれ？ 正義面した平和主義のつもり。おめでたいね。それもあのエマとかユリスとかいう小娘のせい？」

「彼女と姉さんには関係ないだろ！」

「恋する皇子か……だから、お前は帝王風格がないんだよ！」

「う、うるさい！ 僕は平和のために力を使うんだ！」

「平和、平和なんか言つたつて、結局皆また戦争するやるに決まっている！ だつてそうだろ？ ゾイドクライシスの地球と惑星Ziじゃあ、帝国、共和国がずうつと戦争やつてるし、その前の地球だつて結局戦争してる。」

人間なんて結局戦わなければ済まないもんだよ！ 戦うために生まれたゾイドだつてそうさ。戦いのない世界なんてないんだよ。戦いを無くすなら、絶対的な力を持つ者が世界を支配するしかない。そう、このボクのようにね！」

「違う！ そんなのは平和じゃない。ただの圧政だ！」

「キミもそんな甘い考えを捨てて、ボクのように支配するための力を持つてばいいんだよ！」

もしかして、キミは自分が間違っていると思つてボクと帝国と戦うことに躊躇していませんか？」

「違う！」

レイルはすかさず、ギルラプターエンペラーに乗り、

「行くぞ、ギルラプター!」

ギルラプターエンペラーはギルラプタージョーカーに飛び掛かるが、ジョーカーは難なくその下に回って、後ろに周り、身体を一回転して後ろ足でエンペラーを蹴った。

「無理無理、キミじゃあ、ボクを倒すことは出来ない。」

「くそ、ギルラプター、もう一度行くぞ!!」

ギルラプターエンペラーはジョーカーに猛スピードで突進し、瞬時に後ろに回って攻撃しようとするが、ガネストは不敵な笑みを浮かべ、ジョーカーはその場から動かず、後ろ足でギルラプターエンペラーを再び蹴った。吹っ飛ばされるギルラプターエンペラー、

「何でだ? 何でギルラプターの攻撃が通用しないんだ?」

「確かにパワー、スピード全てにおいてボクのギルラプターよりキミのギルラプターの方が勝っている。でもそれでもボクには勝てない。」

「ならば、斬り刻め、ギルラプター! 僕の魂と共に、本能 解放! ワイルドプラス トー!! 真・音速殺!」

ギルラプターエンペラーは目にも止まらぬスピードでジョーカーの周りを走り、ジョーカーに横から攻撃するが、ジョーカーはクルッと身体を一回転し、尻尾でギルラ

プターエンペラーを風ぎ払う。

「1回目は真正面から、2回目は後方から、そして、今ので横から来ることぐらい、ボクとギルラプターは既に読んでいたんだよ！」

キミがボクに勝てない理由その一、経験の差。キミもそのギルラプターで何度も反乱軍と戦ってきたけど、ボクとこのギルラプターは実戦に加え、ありとあらゆる全てのゾイドと戦い、全てのゾイドの能力と攻撃パターンも全て記憶した。その経験の差があつて、キミとそのギルラプターの攻撃パターンなんて直ぐわかるんだよ！」

「くそー！」

ギルラプターエンペラーは尚もジョーカーに攻撃するが、ジョーカーは難なく避け、  
「勝てない理由その二、非情さが無い。キミのギルラプターはボクの前世の一世に従つて同種のギルラプターを殺してから、それがトラウマになつて他のゾイドを殺すことをかなり躊躇していて、キミもあの小娘に感化されてゾイドはおろか、反乱軍の兵士すらも殺さなかつた。」

けど、ボクにはそんな迷いは無い。一世だつてそうやってきた。だから、ボクも一世や父上のように強い！ いや、それ以上だね。」

「そんなの違うー！」

「勝てない理由その三、キミは力を求める理由が弱すぎる。実現もしない平和主義を

掲げて力を求めたってどうせ人間はそれ以上の力を求めてまた戦争するさ！

力はね、何かを支配するために与えられるものだよ！ 人間なんてのはね、支配されないとも何も出来ないし、上に立たないと自分のやりたいことができない。支配するものがないなくなったら、従うものが無くなって混乱する。それが戦争の火種になる。

だったら、支配するために力を求めればいい！ そうすれば、世界を自分の思いのままに出来て、自分が最強だっていうことが証明でき、逆らう者は皆滅ぼせばいいんだ。」

「そんなの平和じゃない！」

「どうかな？ 父上だってそうキミに言ってたんじゃないかな？」

ガネストの言葉を聞いて、レイルはギヤラガー三世が幼いレイルに言った言葉を思い出した。

「息子よ。正義の名と皇帝の地位は絶対的な力を持った者のみ許される称号。その絶対的な力を持つ者が世界を支配した時、真の正義と平和が生まれる。そ

私は更なる力を手に入れ、混沌に満ちたこの世界に平和をもたらす。だが、それにはもつと力が必要だ。息子よ。私に力を貸してくれ。」

「はい、父上！」

父であるギヤラガー三世の言葉を思い出したレイルは何も言い返せなくなつた。

「そ、それは……」



「キミも自分が間違っていることに気付いてて、だから弱いんだよ！」

ジョーカーは猛スピードで近付き、ギルラプターエンペラーを叩き落とした。

「うわあー！」

「キミごときにデスブラストを使うまでもないね。」

更に追い討ちをかけるようにジョーカーはギルラプターエンペラーを踏みつけ、そのまま蹴飛ばした。

「ん？」

その時、ガネストは壁際にいたジャンとドレイクを見つけた。

「キミ誰？ その赤いギルラプター…ああ、思い出した！ 確かキミ、ボクの前世の部

下だった…確か…春菊の…」

「瞬撃だ!!」

「ああ、そうそう、そうだった！ 瞬撃のドレイクね。まさか、その子孫のキミがこ

こにいるなんて思わなかったよ。

どう、せつかくだから、ボクの帝国に来ない？ 面白いよ。ボクの前世が率いてい

た帝国よりもっと強大になってもっと面白くなったし…

それとも…その出来損ないの兄と一緒にボクに逆らって戦う？」

「ふざけるな！ 俺の先祖は貴様の前世に散々な目に遭わされ、ジャンの兄弟分のギ

ルラプターだって殺された。

貴様らとそしてギヤラガー一世の血を引くそのガキと手を組むつもりはねえ！ もちろん、同盟軍もな！」

「あ、そ、残念。じゃあ、そいつに手を貸すつもりがないなら、ボクの邪魔はしないでね！」

せつかくのゲームを楽しめなくなってしまうからね。でも、そいつを殺したら、次はキミだよ。そのギルラプター、随分強そうだし。」

ジョーカーはギルラプターエンペラーに近付き、左前足でエンペラーの首を掴み、そのまま両前足で首を絞めようとする。

グオオッ!!

悲鳴を上げるエンペラー、

「ギルラプター！ くそ、くそ！」

「どうしたの？ もっと本気出してよ！ じゃないと楽しめないじゃん！」

エンペラーは後ろ足でジョーカーの顔を思いつきり蹴り、ジョーカーは怯んで、前足を外し、エンペラーはそこから脱出した。

「大丈夫か！ ギルラプター？」

グルル…

レイルの言葉に応えるようにうなずくエンペラー、

「うーん、今のはちよつと効いたよ。でも、ボクにはそれほど刺激的じゃなかったな！  
せつかくワイルドブラスト出来て、アーミテージのステイレイザーを倒したっていう  
のにその程度なの？」

「うるさいー！」

「やっぱりキミは甘すぎる。だから弱いんだよ！」

「違う!! ウワアアー!!」

猛スピードでジョーカーに突っ込むエンペラー、しかし、ジョーカーはくるつと身体  
を一回転し、そのままエンペラーの背中に乗って叩き落とした。

「ほら、直ぐそうやって感情的になる。何かを守るために戦うより、ただ、自分の思い  
通りにすることだけを考えれば、ずつと楽になれるよ！」

ジョーカーに苦戦するエンペラーを見たドレイクはため息をつき、  
「行くぞ、ジャン！ これ以上奴らと付き合うのは後免だ。」

しかし、ジャンはドレイクをじつと見つめ、一步も動こうとしない。

「どうした？ 行くぞ。」

グルル…

ジャンは強い眼差しでドレイクを見た。

「お前……まさか、あいつを？　け、仕方なくやったとはいえ、所詮奴はギャラガー一世に従ってお前の兄弟を殺した奴だぞ。助ける必要なんか……」

グルル……

ジャンは尚もドレイクの方を目を刺らさず、訴えかけるように見詰めた。ドレイクはジョーカーの猛攻を受けるエンペラーの方を見て、

「く……」

「ぐわあー！」

倒れるエンペラーを見たガネストは残念そうに見て、

「はあ、そのギルラプターもボクの前世に従っていた時と比べると随分腑抜けになっちゃったね。

ボクのゾイドになれば、ジョーカーみたいにもっと強くなれただろうに、残念だよ。

もうキミとのゲームはもう飽きちゃった。　終わりにするよ。」

ガネストはデスメタルキーを取り出し、

「ギルラプター、強制　解放！　デスブラストー!!」

デスブラストし、赤い稲妻が走るジョーカー、

「これで、終わりにするよ。バイバイ。音速殺!!」

猛スピードでエンペラーに襲いかかるジョーカー、レイルはもはやこれまでかと言わ

んばかりに諦めかけたその時、

「瞬撃殺!!」

突然、ジャンが横から突進し、その衝撃で、ジョーカーは壁に吹っ飛ばされた。

「あなたは…」

「勘違いするな! ジャンに頼まれただけだ。ま、どうせ逃げても追われるだろう

し、もはや戦うしかないだろうよ。」

「何? さつき邪魔するなって言ったじゃん。やつぱりボクに歯向かうつもり?」

「確かにこのギルラプターはジャンの兄弟を殺したが、実質殺したのはお前の前世、即ちお前! 先祖が果たせなかった復讐、俺の代で晴らさせてもらおう。」

「へえ、やるんだ。面白い。試してやるよ。お前の力を!」

「そうほざいていられるのも今の内だ! 行くぞ、ジャン!」

グオオ〜!!

「猛烈、ジャン! 俺の魂と共に、進化 解放! エヴブラストー!! 音速殺!!」

ジャンは超高速でジョーカーに突進し、ジョーカーはそれを両前足で受け止める。攻撃を止められるものの、そのままジョーカーを押し、ジョーカーは徐々に後退していった。

「どうした? プリンスギヤラガー! お前とギルラプターの力はそんなもんじゃな

いだろ！

お前の相棒の力を信じろ！ そいつは強い！ だが、ギャラガー一世に従っていたから強いんじゃない！

そいつも本当は俺のジャンの兄弟と同じく心優しいゾイドだ。お前だって本当はそうだろ？

自分の理想を信じ、誰かを守るために戦っているんじゃないのか？」

レイルは差し込んだゾイドキーを握りしめ、

「そうだ。僕は迷っていた。あいつと父上の言葉で迷っていた。だから力を出せなかった。」

でも、僕は迷わない。誰がなんと言おうと、僕は僕の信じた道を歩み、戦う！」

グオオッ！！

ギルラプターエンペラーが咆哮を上げ、同時に差し込んだゾイドキーが少し浮き、キーが金色に発光した。

「これは…」

「ゾイドとの絆で更に進化を遂げた。もう一度キーを差し込んでみる。」

エンペラーはレイルの方を向き、レイルはキーを差し込んだ。

「ギルラプター、進化 解放！ エヴォブラストー！！ 新・音速殺！！」

エンペラーはさつきより更に増したスピードでジョーカーに攻撃した。ジョーカーはその衝撃で吹っ飛ばされ、壁に激突する。

「いつて、ふくん、確かにさつきより強くなつたみたいだね。でも、それでも結果は一緒だよ！」

「それはどうかな？」

「ようやく、迷いから覚めたようだな。プリンスギヤラガー。」

「いえ、僕はギヤラガー皇子じゃ、ありません。僕はレイル、レイル・ボーマンだ！」

「へ、なら、行くぞ、レイル！ 瞬撃殺!!」

エンペラーとジャンは音速を遥かに越えるスピードでジョーカーの周りを走った。

「ふん、スピードを更に上げてボクを攪乱させるつもりだろうけど、所詮、無駄なことだよ！」

ボクとジョーカーはあらゆる戦闘を経験している。いくら、パワーアップしても動きがわかれば、意味がない。」

ガネストとジョーカーは直感で後ろ足で後ろ方向に蹴るが、ジャンは瞬時に避けた。

「何!？」

エンペラーがジョーカーの横から攻撃しようとし、ジョーカーはそれに対し、迎撃するが、エンペラーはそれを避け、ジョーカーの死角に攻撃した。ジョーカーはジャンと

エンペラーがどこから攻撃するかわかるものの、ジャンとエンペラーは逆にそれを利用してジョーカーの死角に攻撃し、その連続でジョーカーは動きが見破れなくなり、攻撃を受け続けるようになった。

「よし、行くぞ！ ダブル、新・瞬撃殺!!」

ジャンとエンペラーの同時攻撃を受けて吹っ飛ばされるジョーカー、

「何故だ!?! 動きはわかるはずなのに!」

ガネストの問いにドレイクは、

「当たり前だ！ 俺とジャンとこいつらには究極の絆を結んでいて常に一心同体なのさ！

いくら、経験があるからといっても、所詮、ゾイドをただの道具としか考えない貴様に俺たちの動きがわかるものか!」

「随分デカい口を叩くね！ なら、これはどうかかな?」

ガネストはコクピットにある赤いボタンを押し、ジョーカーの身体から赤い衝撃波を放った。

「ギルラプター、強制 極限 解放!!」

「強制極限解放だ?!」

「これで、ボクのジョーカーもパワーが上がったよ。」



それを見たレイルは、

「止めろ！ そんなことしたら、お前のギルラプターが死ぬぞ！」

「関係ないよ。こいつがどうなろうとボクの知ったことじゃない！ 音速殺!!」

超スピードでジャンとエンペラーに向かうジョーカー、

「行けるか？ レイル。」

「僕は大丈夫です。」

「よし、行くぞ！ 音速殺!!」

「新・音速殺!!」

ジョーカーとジャン、エンペラーの攻撃がぶつかり合う時、ジャンとエンペラーは呼吸を合わせ、同時攻撃し、

「ダブル、新・音速殺!!」

ジャンとエンペラーの同時攻撃を喰らい、ジョーカーは両方のウイングショーテルを切り刻まれ、目の色が消え、電撃をほとばしりながら、倒れていった。

倒れたジョーカーのコクピットには既にガネストの姿はなく、側に近付いた他のジョーカーに既にもり換えていた。

「あゝあ、せつかく久しぶりにジョーカーに乗ったのに倒されちゃった！ ま、別にいいんだけどね。」

そう言うと、ジョーカーは倒れたジョーカーをジャンやエンペラーに向けて蹴った。ジャンとエンペラーは避けるが、ジョーカーは壁に激突した瞬間爆発し、その衝撃で頭上の岩も落ち、ジャンとエンペラーに直撃してしまう。

「ちよつとは役に立ったかな。」

笑みを浮かべるガネストを見てレイルは、

「お前、ジョーカーはお前のゾイドだろ！ そんなことして何とも思わないのかよ！」  
「それがどうしたの？ 使えなくなっただけど、最後まで使えるように扱ってやったんだよ。おかげで多少でもキミたちの動きを封じること出来たわけだしさ！」

「お前にはゾイドを大切に思う気持ちはないのか？ 父上も、一世も……」

「ない、ない！ そもそもゾイドなんて、帝国とボクの支配と楽しみを奏でる道具に過ぎないんだよ！ 道具として当然の扱いをただけさ！」

それを聞いたレイルは拳を握りしめ、それを見たドレイクは、

「ふ、どうやらこいつには何言っても無駄なようだな。一気にけりをつけてやる。」

「それはどうかな？ ボクを傷つけたせいで、ボクの取り巻きのジョーカーたちも殺意丸出しだよ！」

ガネストの護衛のジョーカーたちはジャンやエンペラーに敵意を剥き出しにしていた。

「そうだ。これで新しいゲームをしよう。ボクの取り巻きのジョーカーとキミたちが戦つて、その後にボクのジョーカーと戦う。どう、面白そうでしょ？」

こいつらをパワーアップしたキミたちの力を試すいい実験台になれそうだ。そうすれば、キミたちの強さをもつと味わえる。」

「ふざけるなー!!」

エンペラーが前に出たその時、護衛のジョーカーたちが全てエンペラーに襲いかかつてきた。

とその時、突然、護衛のジョーカーが何かに攻撃され、同時に煙幕が張られた。辺りが見えなくなり、エンペラーの前にバイザー無しのラプツールが現れた。

「お前は？」

バイザー無しのラプツールのライダーはレイルに、

「殿下、あなたの大切なエマ様とユリス様に危険が及んでいます。我々と共に。」

「エマと姉さんが？ 一体何が起こったんだ！」

ラプツールは言葉を返さず、そのまま立ち去り、エンペラーはその後を追った。

「あ、待て！」

煙幕の中、周囲を見渡すドレイク、

「くそ、いきなり何なんだ？ これじゃ、敵がどこから攻撃してくるのかわからなくな

いじゃねえか。」

その時、煙幕の中をバイザー無しのラブツールが横切り、同時にその後ろにエンペラーが付いていった。それを見たドレイクは、

「あのラブツールは…あいつらか！ 一体何故ここに？ とにかく、今はここを離れた方が得策だ。 奴らが何を企んでいるのかも突き止めねえと。」

煙幕が晴れた後、ガネストは周囲を見渡すが、周囲にはジャンとエンペラーの姿はなかった。

「あゝあ、せつかくいいところだったのに！ でも、あの煙幕、明らかに反乱軍の物じゃなさそうだし、面白くなって来そうだな。 ボクたちも行くよ。」

ガネストのジョーカーが洞窟を突き進み、護衛のジョーカーたちも後に続いて行った。

ストームとウィルがしばらく歩いた時、前からズシンズシンと巨大な足音がし、目の前からドクターマイルスの乗るゼロファントスと通常種。ゼロファントスが複数現れた。それを見たストームは、

「来やがったな！ 粗方、ドレイクの別荘を襲撃して俺たちを離ればなれにし、順番に潰すという算段だろう。 貴様らしいえげつないやり方だな！」

「これも全ては我がネオデスメタルのため、ひいては世界のためです！」  
それを聞いたウィルは拳を握りしめ、

「何が世界のためだ！ そのために一体何人の人々とゾイドを殺したんだ！」

「犠牲なくして勝利なしと同じ理論ですよ。所詮弱者は強者のために犠牲になるしかないですからね。」

「ふん、そういつていられるのは今の内だ。ゼログライジスを復活させて世界を平伏そうだのという貴様らの野望を阻止してやるぜ！」

「ゼログライジス：：そうか、あの男がZGのことを吹き込んだのか。まあ、いい。例えば知ったとしても、貴様らに更に絶望を与えるだけだ。」

そうになると、ゼログライジスの力を存分に味わい、貴様らは破滅の道を辿ることにな

る。 どうだ、今の内に降伏しないか？」

「へ、それを聞いたなら、尚更降伏する気はしねえぜ！ ゼログライジスを復活させる前に貴様らの野望を阻止してやるぜ！」

「無理だな！ 神殿にあった最後の欠けたゾイドコアのピースは既に帝都に送った。後は元帥殿によって完成するのを待つだけだ。」

「なら、貴様をさっさと倒して帝都に行くしかねえな。覚悟しろ！」

「ふん、蛮勇とは正にこのこと、だが、貴様らでは私には勝てない。」

「へ、この前は状況があれだったが、今度は思いつきり戦えるぞ！ そうだろ？ ウィル。」

「はい！ 皆とゾイドのためにお前を倒す！」

「それはどうかな？ 実は特別ゲストを連れてくるんだがな。」

「特別ゲスト？」

ゼロフアントス部隊の後ろから2体のキルサイスSSが現れ、そのコクピットには縛り付けられたエマとユリスがいた。

「エマ、ユリスさん！」

「おっと、このキルサイスのタイムボムには自爆装置が付いている。 一歩でも近付けば、そいつらの命はもうお仕舞いだ。」

「貴様！」

「ホントは元殿下にも見せてやりたいところだったが、元殿下には皇帝陛下が相手をしている。わざわざこんなことしなくても陛下が勝つのは目に見えているし、陛下はこんな作戦乗り気ではないからな。」

「け、どこまで卑怯な奴だ！」

「だが、貴様らの相手をするのは私ではない。」

「何だと!？」

ドクターマイルスのゼロファントスの後ろからリセルが乗ったデルが現れた。それを見たウイルは青ざめ、

「り、リセル……」

ウイルとシーザーを見たりリセルは闘争心溢れた表情をし、

「ウイル、シーザー。今度こそ貴様らを潰す！」

To be continued

## 第44話「旧デスマタルの遺産」

ドクターマイルス率いるゼロファントス部隊の中から現れたデルを見て、ウィルは青ざめた表情をした。

「リセル…何故お前はまだ帝国にいるんだ？」

デルは突然シーザーに襲いかかる。

「止めろ！ 俺はお前と戦うつもりはないんだ。」

コクピットのリセルは怒り狂った表情をし、

「黙れ！ 俺はお前とシーザーが目障りなんだ！ お前たちがいるから、俺は強くない。」

リセルはウィルの言葉を全く聞く耳を持たず、シーザーに攻撃した。それを見たストームは、

「どうやら、少し黙らせる必要があるな。」

キングはシーザーに攻撃しようとするデルに攻撃しようとするが、ドクターマイルスのゼロファントスの3連誘導ミサイルが襲いかかり、キングは何とかそれを避ける。

「貴様の遊び相手はこの私だ！」



「ち、結局そうなるか！」

デルの猛攻に次々と避けるシーザー、

「どうした？ 避けるだけか！ やはり、貴様は仲間の力が無ければ何も出来ないヒ  
ヨッコだな！」

「う、うるさい！ いくぞ、シーザー！ 進化 解放！ エヴォブラストー!! スピ  
リットガンストラッシュュー！」

デルはシーザーの攻撃をもろに受けるが、デルは無傷だった。

「その程度では、パワーアップしたデルを倒すことは出来ない。パワーアップした  
デルの力を見せてやる。兵器 解放！ マシンブラストー!! フルハウリングバ  
ストー！」

デルの赤い衝撃波とガトリングによる連続攻撃がシーザーを襲うが、シーザーはすか  
さず、Eシールドを張って防ぐ。しかし、前方を見ると、デルの姿がない。

「ど、どこに行った？」

その時、後ろにデルが現れ、

「後ろがから空きだ！」

デルはシーザーを前足で攻撃し、シーザーは吹っ飛ばされるが、シーザーはすかさず  
態勢を立て直し、デルの前に出る。

「やはり、この程度ではくたばらないか…なら、もう一度喰らえ、フルハウリングバースト！」

「行くぞ、シーザー！ スピリットバーストブレイク！」

シーザーがEシールドを張りながら、デルに突っ込み、互いの攻撃がぶつかりあい、シーザーがEシールドを解除し、互いが立ち止まる中、デルだけ装甲に傷が付き、デルはその傷で少し足を崩した。

「やはり、Eシールドを張りながら攻撃できる奴相手に真正面で戦うのは無謀だったか！ だが、お前がEシールドを張れないようにするため、こっちは何度も攻撃するだけだ！ 喰らえ、フルハウリングバー…」

その時、突然デルが苦しみだし、マシンブラストが撃てなくなつた。

「どうした？ まさか、さっきの傷の影響か！」

それを見たウィルは、

「違う…あいつは苦しんでるんじゃない！ あいつはバイザーの支配に抗い、リセルを帝国の洗脳から解こうとしているんだ！」

「お前はその程度でくたばるゾイドのわけがない！ お前の本当の力を見せてやれ！！」

リセルはコクピットにある非常ボタンを押し、それを押した途端、デルが暴走した。

グオオッ!!

赤い衝撃波を走りながらデルはガトリングをシーザーに撃ち込む。シーザーはそれを避け、ウィルはリセルに向かって、

「止めろー!! そんなことしたら、デルが死んでしまう!」

「そんな心配はない! デルは俺の相棒、だから、そう簡単に死ぬゾイドでない!」  
それを見たストームは、

「くそ、あいつ完全に殺戮マシンになってやがる。」

「そうだ! あいつはもはや私に忠実な殺戮マシンになった。だから、あいつは何の躊躇もなく、全てを殺せる。」

「どうだ? 降伏して我が帝国に入れば、お前ももつと強くなれるぞ!」

「へ、お断りだ! 貴様の下になんか死んでも後免だぜ!」

「さあ、食らうがいい! フルハウリング!」

その時、突然、デルが何者かに攻撃され、ドクターマイルス率いるゼロフアントス部隊も攻撃された。

「なんだ?」

そこに現れたのは、バイザーの無いラプトルとキャノンブル、そして、バズートルだった。バイザー無しのゾイドたちはシーザーとキングの前に出て、煙幕を出した。

「何だ？ 敵の増援か！」

その時、シーザーとキングの目の前にバイザー無しのラプツールが現れ、

「アーネスト殿下のお知り合いの方ですね？ どうか、我々と一緒に。」

「アーネスト……レイルのことか！ あなたたちは一体？」

そして、煙が晴れた時にはシーザーたちの姿はなく、エマとユリスを捕らえた2体のキルサイスSSもいつの間にかコクピットを剥き出しにされ、タイムボムが作動しないまま破壊されていた。

「ち、逃がしたか。だが、今のゾイド、バイザーが付いていないってことは、もしや……」

反ネオデスマタル同盟軍の本拠地、クリスは事の状況をクルーガーとデルタに報告す

るが、シーガル中將は納得したいかないことを言い、

「何だ?!」では、メルビル二世陛下は消息不明だと言うのか!」

「だが、俺たちも体勢を整え、全力で搜索に当たっている。しばらく待った方が…」

「だから、私は反対したんだ! 陛下も一緒に連れて行って巻き込まれでもしたら、我が新帝国は終わってしまうと!」

「当然俺たちも最善の策は尽くしている。しかし、シーガル中將殿、そちらは一体何をしているのだ? それほどユリスを大事に思っているなら、そちらも俺たちと協力して搜索に当たるのが普通だろうが、まさか、全て俺たちに任せてネオデスメタルを倒した後に俺たちと手を切ると言うことはないだろうな?」

「そ、そんなこと…あるはずがございませぬ!」

「その意思がないのでしたら、俺たちも貴様らと協力する気はないぞ!」

「わ…わかりました。わ、我々も搜索にご協力します。」

シーガル中將はしぶしぶ退室し、クリスはため息をつき、

「ふう、全く新帝国共と来たら、頭の固い連中ばかりだ! 結局誰かの力を借りなければ何も出来ないということか。それでよく、真帝国再建などと言えたものだ。」

「ところで、ストームたちからの連絡は?」

「まだだが、リーダーとコマンダーたちなら何とかやっているはずだ。」

その時、クリスの通信機から連絡が入り、出ると通信の相手はグラッドだった。

「コマンダー、無事だったんですか!」

「ああ、洞窟に謎の煙幕が出てな、それを頼りに行ったら、洞窟から抜け出して、ジョンたちと合流したが、キングとシーザーがラプトル、キャノンブル、バズートルに連れていかれるところを目撃して、付いて行ったら、デツカイ都市のビルにまで辿り着いた。」

「まさか、ネオデスマタルですか?」

「それはわからないが、その可能性はある。俺たちは奴らの動向を探りつつ…」

その時、崖から都市の様子を見ていたグラッドやジョンたちに謎の兵士たちに銃を突き付けられた。

「こ、コマンダー…」

「わ、悪い、クリス、また後で連絡するわ…」

そこから少し離れた場所でグラッドやジョン、カティア、アレックス、アツシユ、ミス、スレイマーズたちがレッドケルベロス社の兵士に捕らえられているのを見たドレイクは、

「レッドケルベロス、ネオデスメタルの腰巾着め。大方、反乱軍を捕らえて帝国に引き渡すつもりだろうが、そうはいかんぞ！ この俺が貴様らの野望を阻止してやる。」

その時、ドレイクの背中に何か突き詰められ、後ろを振り替えたなら、レッドケルベロス社の兵士だった。

「何でこうなるの？」

ルメイ大將はドクターマイルスと通信を行っていて、

「何?! それは本当か！」

「ああ、間違いはない。先ほど、私のゼロフロントス部隊を妨害したバイザー無しのなら

プートル、キャノンブル、バズートルに一瞬だが、レッドケルベロス社のエンブレムを確認した。」

「くそ、我が帝国に多大な資金援助を行っていないながら、反乱軍に寝返るとは反逆行為だぞ！」

「だが、一度捕らえた小娘とライガーにスパイゾイドを取り付けてある。

既に場所は特定してあるが、奴らが反乱軍に寝返った目的とその企みを調べる必要がある。それが判明した後、一気に総攻撃を仕掛ける。」

「そうか……だが、その間は どうするつもりだ？」

「今、反乱軍は例のライガーに加え、リーダーと総司令が不在のため、焦っている。

その隙に残りの反乱軍を鎮圧する。」

「なるほど、あの連中には新帝国の皇帝にされた小娘もいて、今は消息不明だから、かなり混乱しているはずだ。攻めるなら、今というわけだな。よし、では、私は新帝国を鎮圧する。」

「いや待て！ 実はスパイゾイドで敵の通信機をハッキングして反乱軍の本拠地の場所を特定した。その間に奴らの本拠地を叩くというのはどうだ？」

「なるほど、それはいい考えだ。それなら、反乱軍の戦力を大幅落とすことができる。」

「では、後で合流しましょう。」



ドクターマイルスが通信を切った後、ギルラプタージョーカーが現れ、ガネストが降りた。

「これはこれは、皇帝陛下！　いかがなされました？　元殿下は処刑出来たのですか？」

「それがね、せつかく盛り上がったところで、ドレイピーと変な連中に邪魔されて、仕留め損ねちゃった。」

「ドレイピー？　と申しますと……ああ、あの例の財閥の御曹司ですか。遂に奴も反乱軍に入ったか。」

「でも、まだゲームは終わっていないよ！」

「もちろん、承知のつもりです。ですが、陛下の護衛にジョーカーだけでは戦力不足でしょう。」

私が元帥殿に頼んで親衛隊も付けるよう手配させます。」

「ま、どつちでもいいけど。」

ガネストはそういつてジョーカーに乗り、そのままその場を離れた。ドクターマイルスは横で落ち込むリセルを見て、

「心配するな！　貴様がライガーを倒すチャンスは私が与えてやる。お前はそれまで大人しくしている。」

ネオデスマタル帝国の帝都メガロポリスから数キロ離れた都市の中央に巨大なビルが建ち並び、そのビルの入口にはケルベロスのような姿のエンブレムがあり、レッドケルベロスのロゴがあった。

シーザーとキングはバイザー無しのラプトル、キャノンブル、バスートルらにビルの裏口まで案内され、中に入った。ウイルとストームはシーザーとキングから降り、2人の前にレッドケルベロスにの社員が現れた。

「こちらへ、」

ウイルとストームは社員の案内に付いていった。社員が向かった先はエレベーターで、ウイルとストームは社員と共にそのエレベーターに乗った。ウイルが少し不安そうな表情をしているのを見たストームは、

「心配か？」

「あ、いえ……」

「ま、無理もない。実際、本当に俺たちの味方なのかわからないからな。」

エレベーターはぐんぐん進み、やがて最上階にまで辿り着いた。社員たちはウイルとストームを応接室に入れた。そこにはレイルとエマ、ユリスが座っていた。

「レイル、エマ、ユリスさん。」

「ウイル、あなた無事だったのね。」

「俺は大丈夫さ！ レイルも無事だったんだな。」

「ああ、ガネストに襲撃されたけど、彼らに助けってもらって、何とか助かったよ。」

「彼らって……」

社員はウイルたちに、

「社長がもうすぐお見えになりますので、しばらくお待ちください。」

そう言うと、社員は退出し、数分後、社長らしき人物と女性秘書が入った。レイルとエマ、ユリスを見た社長らしき人物は、

「アーネスト殿下にエマ様にユリス様、よくぞ御無事で！」

「殿下は止せ！ それに僕はもうネオデスマタルの皇子じゃなくなったから。アーネストじゃなく、レイルって名前に変えたんだ。」

「レイル？」

その名に疑問を持つ社長にエマは、

「レイル・ボーマン。私の大事な家族として私がつけたんです。」

「そうですか！ 遂に殿下もエマ様と御結婚なされるんですね。おめでたいです！」

「エマ、余計なことを言うなよ！」

恥ずかしがるレイルを見た女性秘書は、

「あら、すっかり殿下も可愛らしくなって、ご立派になりましたね！」

「ハナ、からかうなよ！」

「ユリス様も新帝国の者たちに利用されたと聞きましたが、随分御元氣そうで何よりです。」

「いえ、それはこちらのストームさんとウィルに助けて頂いたので……」

「そうですか。反ネオデスマタル同盟軍の指導者のストームさんに、伝説のライガーを操るウィルさん、殿下たちをよく御守りしてくれました。お礼を言わせて頂きます。」

「あ、はい……どういたしまして。エマ、この人たち誰なの？」

「私たちがネオデスメタル帝国に入る前に御世話になった人たちよ。」

「紹介が遅れました！ 私はこのレッドケルベロス社の社長 ジェームズ・ブラックです。そして、彼女は私の秘書の大空ハナです。」

「大空ハナです。殿下がいつも御世話になっています。」

「あ、いえ、こちらこそ。」

ストームはブラック社長に、

「なるほど、つまりあんたたちはここにいる元皇子のレイルを支持しているネオデスメタルの派閥ってことか……では一つ質問させてもらう。」

「何でしょう?」

「レイルにエマ、ユリスを助けるのはわかるが、何故わざわざ反乱軍の俺たちまで助けた? こんなことすれば、ネオデスメタルが黙っていないはずがないだろう!」

「そ、それは…」

「おい、こら! 離せ、離せよ!」

その時、部屋の向こう側から声がし、部屋に警備員たちに取り押さえていたドレイク、グラッド、ジョン、カティア、スミスにスレイマーズたちだった。

「お前ら!」

「ストーム! やっぱりここにいたな!」

ストームを見たドレイクは、

「ストーム、てめえ、まさか、レッドケルベロス共と手を組むようになったのか！ それともお前らをネオデスマタルに引き出そうとする罠にでもかかったのか!？」

それを聞いたグラッドは、

「何!?! それはどういうことだ!?!」

「なんだ、知らねえのか。こいつらはネオデスマタルに多大な資金援助を行い、数々の兵器ゾイドを開発してきた軍事企業なんだぜ!」

「何!?! てことはこいつら、ネオデスマタル帝国か!」

グラッドは警備員を気絶させ、拳銃を取り出そうとするが、ストームが待ったをかけ、  
「待て、やり合うのはこいつの話聞いてからだ。」

それを聞いたグラッドは拳銃をしまい、ジョンやカティアたちも大人しくなって椅子に座った。

「さて、さっきの続きだ。質問の答えを聞いて貰おう。」

「はい、確かに私たちレッドケルベロス社はネオデスマタルのために多くの兵器ゾイドを開発し、ネオデスマタルの軍事力拡大に大きく貢献してきました。」

しかし、ネオデスマタルを支持している我々でも、今の過激的な政策と武力介入には賛成出来ません。先帝のギャラガー三世陛下に続いて、現皇帝ギャラガー四世陛下の代

になって、更にその武力弾圧は日に日に激しくなっております。

「アーネスト殿下が皇帝になれば、こんなことになるはずがありませんでした。最早、かつての旧デスメタル以上の恐怖政治になりつつあります。もう今のネオデスメタルに旧デスメタルの栄光はありません。」

「ん？ ちよつと待て！ かつての旧デスメタルの栄光がないとはどういうことだ？ 今のネオデスメタル帝国は旧デスメタル帝国の栄光を持つて世界を支配しようとしているだろうか？ それに旧デスメタルだつてかなりの恐怖政治だつたはずでは？」

「確かにそれはそうなんです、そもそも旧デスメタル帝国はワイルド大陸で人々が野生ゾイドに脅かされないためにゾイドと世界を支配するために建設された帝国なんです。」

「つまり、デスメタルはただ自分たちの欲で世界を支配するためではなく、人間がゾイドに怯えない世界を創るために世界を支配する、ということか。」

「はい、帝王になる前のギヤラガー一世陛下は元々奴隷生活をしておられ、その生活のせいで、他の者から気味悪がれ、上の者に怯えながら盗みをして生きていました。」

そのためか、ゾイドは力で従わせるといふ考えを持つようになり、かつての師のムシ仙人の人とゾイドが絆を結ぶ思想に納得がいもなく、その場から離れた後、かつて自分を奴隷扱ひした者たちに復讐し、強いゾイドとゾイドハンターを倒しながら各地を転々

とし、そして、殿下が飼ひ慣らしているギルラプターエンペラーを手にし、かつて街を脅かしていた狂暴なゾイド集団を倒してから、人々はギヤラガー一世陛下を英雄として称えるようになったんです。

当時の人々は自らゾイドに乗って強大なゾイドを倒す力を持つギヤラガー一世陛下に付いていけば、もう二度とゾイドに怯えながら生活をしていくことから逃れられる！  
そう考え、後に四天王となる三銃士を従え、デスマタル帝国が誕生したのです。

帝王となった一世陛下はその後、人々を脅かしているゾイドを倒して、その街を吸収して支配を広げ、人々はZボーイズと呼ばれる兵士となって志願し、かつて自分たちを襲ったゾイドを従えることができ、デスマタル支配下の街では、ゾイドの恐怖から解放され、人々はギヤラガー一世陛下に感謝し、称えました。

思えば、帝王になったばかりで、殿下のギルラプターエンペラーを従えた陛下の姿こそが我々の望んでいた本当の帝王ギヤラガー様だったんです。ところがあの時がきっかけで、ギヤラガー様は突然恐怖政治を行い、デスマタルが悪の帝国として呼ばれるようになってしまいました…」

「まさか、その時とは…」

「そうです。デスレックスが復元された時からです。あれ以来、ギヤラガー様はまるで邪悪な本性を剥き出しにし、今まで人々を脅かしていたゾイドだけでなく、無差



別にゾイドを襲い、それらのゾイドを殺戮兵器として酷使し、やがては次々と街を破壊、従わない者も容赦なく処刑していき、元いた部下たちもギヤラガー様に怯えながら従い、そして、反対派のレジスタンスが立ち上がり、遂にはストームさん、あなたの先祖が率いるフリーダム団によって滅ぼされるようになりました。

思えば、ギヤラガー様がデスレックスを知らなければ、あれほど恐ろしいお方にならなかったでしょう。」

「なるほど、親父が言ってたが、デスレックスは人間に発掘されなければ幸せだったろう、と言ってたのと同様にギヤラガー一世もデスレックスと会わなければ、レイル、お前のようになれたかもしれないな。」

それを聞いたレイルは複雑そうな表情をした。

「そして、我々はレッドケルベロスを建ち上げ、かつての旧デスマタル帝国の栄光を取り戻そうと努力しました。」

そんな中、ギヤラガー三世陛下が現れ、ネオデスマタル帝国を建国し、世界の統一を掲げ、我々はそれに加わりましたが、陛下の側近のドクターマイルスの主導によって次々と兵器ゾイドを開発し、従わない街を新型ゾイドの性能を試す実験台にし、終いには見るに耐えない奴隷都市まで現れる始末……」

それを聞いたウイルはエマとシーザーと一緒に初めて旅立った時に行った奴隷都市

のコルクを思い出した。

「そうしていく内に次々と軍事企業が四天王のルメイ大将によって吸収され、我々が生き残り、多大な資金援助を行って何とか存続していますが、今のネオデスマタルは我々の望んだ真のデスマタルではありません。」

「それで、お前たちをレイルを支援して次期皇帝として期待していたのか？」

「はい、殿下は少々わがままですが、とても優しいお方で、オマケに第一皇子でしたので、皇帝即位を期待していたんですが…まさか、第二皇子がいて、それを跡継ぎにするとは…」

「一つ聞きたいが、ギャラガー三世は一体何者なんだ？ 確か、ネオデスマタル帝国が

建国されたのは80年以上前だと聞いた。

なのに、俺たちが戦ったギャラガー三世はどう見ても40代だった。それにあいつは本当にギャラガー一世の子孫なのか？ 一世は俺の先祖との戦いで死んだはずだが…」

「それはわかりません。そもそも建国当初の陛下がデスロツキーで亡くなられた陛下と血が繋がっているのかすらも帝国の上層部でも知っているのは極わずかと聞いていますし、一番詳しいのは陛下がネオデスマタル帝国を建国する前から仕えていたドクターマイルスぐらいかと…」

「なるほど、やはりあの男か…そもそもデスレックスとゼログライジスの関係とゼロ

グライジスの存在を知っているのも奴だったしな。となると、あの男の正体を炙り出す必要があるな。」

「だが、どうやって?」

その時、グラッドから通信が入り、

「クリスカ! どうした?」

「コマンダー、大変です! 例の謎のゾウ型ゾイドが霧に隠れてキルサイスやスナイプテラと共に同盟軍の本拠地を襲撃しています!」

同盟軍の本拠地では、ドクターマイルス率いるゼロフロントス部隊が霧に隠れなが

ら、デイゾルボムを基地に撃ち込み、応戦している同盟軍と旧共和国のガノインタス、トリケラドゴスを次々と粉碎していき、その上空では、ルメイ大将率いるキルサイスSSとスナイプテラ3S隊が空中爆撃を行っていた。専用のゼロファントスに乗っているドクターマイルスは、

「反乱軍のリーダーと例のライガールの小僧と元殿下がレッドケルベロス社にかくまっている間に本拠地を一気に叩けばもう奴らに味方はなくなる。そして方が一、レッドケルベロス社が奴らに加わらないよう、ルメイ大将に対応を頼んである。これで、我々の勝利は近くなった。」

レッドケルベロス社にいるブラック社長から電話が入り、ブラック社長が出ると、電話の相手はルメイ大将だった。

「へ、これは……ルメイ大将。何の御用ですか？」

「ジエームズ・ブラック、貴様ら今、反乱軍のリーダーと例のライガーの小僧に元殿下をかくまっているようだな！」

「い、一体何のことですか!？」

「残念だが、誤魔化しても無駄だ！ 我々には全てお見通しだ！ だが、貴様らにチャンスをやろう。」

今、貴様らがかくまっている反乱軍のリーダーと例のライガー共をこちらに引き渡せ！ さもないと、帝都からギャラガー親衛隊が貴様らの本社を叩く。

だが、考えている時間は余りないぞ。もうすぐ反乱軍の本拠地は私の東方部隊とドクター率いるゼロフロント部隊が攻略する。つまり、反乱軍に味方する勢力は事実上いなくなる。

もし、引き渡さなければ、完全に我が帝国を敵に回すことになる。それでもいいのかな？」

ブラック社長はチラツとレイルを見て、

「殿下はどうなさるおつもりですか？」

「聞くまでもないだろう。帝国に刃向かった裏切り者として当然処刑する！ 我が帝国の現皇帝はギャラガー四世陛下なのだからな！」

ブラック社長ガクガクと手を震え、

「それは出来ません。今の帝国は間違っています。殿下を処刑するなんてそんなことに従うことは出来ません！」

「そうか…では、貴様らは反乱軍に寝返ったネオデスマタル帝国の反逆者として粛清する。だが、その前に反乱軍の主力軍を鎮圧する。粛清はその後だ。」

同盟軍本拠地では、ドクターマイルス率いるゼロファントス部隊のデイゾルボムとスナイプテラ3SとキルサイスSSS隊の爆撃による連続攻撃で基地は壊滅寸前に陥っていた。

「隊長、副官、ここは危険です！ 急いで脱出しましょう！」

「しかし、ここを叩かれたら、他に立て籠れる場所がない！」

「だが、今は生き延びることに専念するのだ！ それを考えるのはその後だ！」

「よし、全員ビッグウイングに乗って脱出するぞ！」

「それが…ビッグウイングを動かせる新帝国のシーガル中将与アルドリッジ大佐の姿が見当たりません！」

「何!? あいつら逃げやがったのか!どこまで卑怯な奴らなんだ!!」

「とにかく、非常口を通って脱出しよう。」

クリスは通信を開き、

「コマンダー、この基地はもう持ちこたえられません! 我々は一旦脱出しますので、コマンダーたちはそこで待つてください。」

「敵の最後の攻撃が来ます! 早く脱出してください!」

基地に向かってデイゾルボムを投げつけるゼロファントス部隊の先頭にドクターマイルスのゼロファントスが現れ、

「これでフィニッシュとしよう。ゼロファントス、原始解放！ゼロプラストー！！  
デイゾルレーザーキャノン！」

ドクターマイルス専用のゼロファントスのデイゾルレーザーキャノンが基地に炸裂し、同盟軍本拠地はあっという間に壊滅した。

「フッフ、これで反乱軍の戦力はかなり落ちた。後はレッドケルベロス本社にかくまわれている反乱軍の指導者と例のライガーの小僧、元殿下を始末するだけだ！」



レッドケルベロス本社にいるグラッドの通信機からクリスからの応答が全く無く、

「どうなんだ？ クリスとクルーガーからは何と？」

「俺たちの基地が壊滅した！」

それを聞いたウイルたちは驚愕し、

「で、クリスとクルーガーたちは…？」

「わからない…だが、あの状況での脱出は不可能かと…」

それを聞いたエマは泣き崩れ、

「そんな…一体どうしたらいいの？」

泣き崩れるエマをそつと撫でるユリス、エマとユリスを見たウイルとレイルは不安がり、

「俺たちはこれからどうしたらいいんだ？」

2人の問いにストームは、

「これからは、俺たちだけで帝国と戦うしかない。」

南方総督府の司令室内でコナー少佐は心配そうにアッカーマン中将に、

「大佐は大丈夫なんでしょうか？」

「彼らを信じよう。彼らならきつと大佐たちを上手く保護してくれる。」

その時、司令室に兵士が入り、

「中将、帝都にいるタツカー元帥閣下から通信が入り、直ぐに来て欲しいとのことです。」

「どうやら、私の処罰が決まったようだな。」

「中将……」

「心配ない！ ちょっと行ってくるよ。」

司令室を退出したアッカーマン中将を見たコナー少佐は不安そうな表情をした。

帝都メガロポリスの宮殿の地下研究所で、機械兵と特殊スーツを着用した作業員がドクターマイルスが海底神殿で回収したゼログライジスの欠けたゾイドコアのパーツをゼログライジスが眠っているカプセルに投入した。

カプセルの中が紫色に発光し、カプセルの中のゼログライジスの身体の形状が段々と出来上がり、ゼログライジスの目が光った。

同時にコードで接続しているデスレックスの身体の色が赤から徐々に紫色に変わり、反対方向にコードで接続している後ろ向きの玉座に座っている人物の手が金属から人間の手に変わり、玉座から立ち上がった。

タツカー元帥とデーニッツ中将は玉座から立ち上がった人物に膝まずき、

「ようやく、その身体で表舞台に立つことが出来るようになったね。」

「我々はずっと待ち望んでいました！ ドクターマイルスが造った影武者のクローンではなく、本来の姿で、我がネオデスマタル帝国の皇帝として君臨するときを！」

タツカー元帥とデーニッツ中将の言葉にゼログライジスとコードで接続していた玉座に座っていた人物は、

「ふ、もうこれで今まではドクターが造ったクローンを遠隔操作して表舞台に立ち、ジェノスピノを操っていたが、その必要もはや無くなった。

かつてゾイドクライシスの時、地球に来てゼログライジスと一体化したが、あのシーザーとか言うライガーに一度邪魔されて地球の支配を阻止され、そして、ジェノスピノを操った時に再び私の元に現れたが、もう奴では今の私を止めることは出来ない。

我が分身であるゼログライジスはまもなく完成し、デスレックスも真の姿を取り戻す。再び手に入れたオーガノイドの力でゼログライジスと完全融合を遂げ、私は地球はおろか、全宇宙に君臨する真理の神をも超越した究極たる完全生命体となる。

フフフフ、ハハハハハ ウワーハツハツハツハツハツハ！！」

地下研究所に高笑いを上げたのはデスロッキーでウィルとシーザーたちに敗れ、ジェノスピノと共に火山に沈んだはずのギャラガー三世だった。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 第45話「先帝復活」

帝都メガロポリス、アツカーマン中將はタツカー元帥からの命令でスナイプテラに乗って帝都に入った。辺りを見渡すと、ギャラガー万歳、ギャラガー万歳を三唱する国民の声響き渡った。アツカーマン中將は敢えてそっぽを向け、そのまま宮殿に向かった。

宮殿に離陸したスナイプテラから降りたアツカーマン中將は宮殿の中に入り、謁見室にいるタツカー元帥に会った。

「アツカーマン中將、よく来たな。今回私が君を呼び出したのは他でもない。」

「はい、我が帝国の反逆者となったカーター大佐を逃がしたことによる処罰ですね。」

「そうだ。本来反逆者を逃がした場合は死刑か、禁固5000年にするはずだが、お前の帝国に対する功績はあまりに大きく、皇帝陛下の御慈悲により、南方総督の地位の剥奪、階級を中佐に降格する処分に留まった。」

今後お前は四天王ではなくなるが、陛下のおかげでかなり減刑されたのだ。ありがとうと思うがいい。」

「そうですか……ところで、南方総督の地位は誰に？」

その時、タツカー元帥の横にベケット少佐が現れ、

「今後、カーター大佐のような帝国内の反逆者が現れないよう、南方総督の地位は私の部下のベケット少将に与える。」

それを聞いたアッカーマン中将は驚愕し、

「し、親衛隊のベケットにですか……ち、ちよつと待ってください。ベケットの階級は少佐のはずでは……」

「本日軍の編成が行われ、今までの親衛隊は四世親衛隊となり、隊長を少将に昇任させたベケット少将に譲り、

今後北方、南方、西方、東方総督の地位は全て親衛隊所属のものに与え、私は新たに編成された親衛隊の隊長となり、今まで総督だったグレッゲル、デーニッツ、ルメイには私の三世親衛隊に所属することになり、今後帝国の正規軍は親衛隊の命令に従わなくてはならず、例え、階級が違っててもその指示に従うことになった！」

「な、何故、そのようなことに!?!」

「反乱軍完全鎮圧と世界の統一のために皇帝陛下の権限を更に強化させる必要があるため、皇帝陛下を実質の軍の総司令とするために全ての軍は皇帝陛下直属となる形になった。」

アッカーマン中佐はベケット少将の部隊に所属し、今後彼女の指示に従うことにせ

よ。」

ベケット少将は不敵な笑みを浮かべてアッカーマン中將に、

「でも安心して、反乱軍制圧の部隊にあなたを加えるから、それで戦歴を上げれば、元の地位は戻るかもしれないわ。」

「わ、わかりました…」

それを聞いたアッカーマン中將は渋々その場を離れた。

「では早速私がレッドケルベロス社共を制圧して参ります。」

「いや、お前はここで帝都防衛の指揮をしろ。」

「レッドケルベロス社制圧は私自らが行う。ジェノスピノ、オメガレックスの修復はもうすぐだが、悠長には待ってられない。奴らに帝国に逆らったら、どうなるかということを思い知らせるにはより強力な力で行かないとな。」

それにお前はもう親衛隊長だからな。これからの親衛隊はお前に任せる。

それと、ギヤラガー三世陛下がゼログライジスと共に真の姿にられた。昇任祝いと共に陛下にご挨拶しなさい。」

「はー」

「さて、反乱軍の後始末をしようか。」



レッドケルベロス本社、グラッドは何度も通信を開くが、クリスやクルーガーたちから全く応答が来ない。レイルは心配そうに、

「やっぱり、皆死んだんじゃないでしょうか？」

それを聞いたウイルは、

「何言つてたんだよ！　クリスさんやクルーガーさんたちがそう簡単に死ぬわけない！」

「とはいえ、しばらく連絡は来そうにないから、それまでは俺たちで何とかするしかないな。」

ブラック社長、レッドケルベロス社は軍事企業だろ？　だったら、ここには戦力とな

るゾイドはかなりいるはず。それにバイザー無しとなれば、ゾイドの本来の力を十分に發揮できる。帝国軍にも十分対抗できるはずだ！」

「確かにそれはそうなんですが、そもそも我がレッドケルベロス社はコープス・ブレイン社同様、帝国と反乱軍の戦争には中立的な立場を取っています。

そのため、ここには必要最低限の戦力しかいず、防衛ならある程度はいけますが、帝国とまともに太刀打ちできる戦力はありません。」

「そうか、となると、ますます不利だな。ここを攻略されてしまったら、間違いなく俺たちに勝ち目はない。」

「一っ手はありますよ。」

その時、男の声がし、応接室に現れた。現れたのはカーター大佐とシユバルツ中佐だった。カーター大佐とシユバルツ中佐を見たウイルとレイル、エマ、ユリス、カティアは驚愕し、

「あ、あなたはあのと時のスナイプテラの！」

「覚えていてくれたか！ 君は確か、あのと時のライガールの少年だったね。まさか、こんなところで会うとは思わなかったよ。」

それに殿下にエマ、ユリス、そして、カティア、無事で何よりだよ。」

「お父さん……」

カティアは涙ぐんでカーター大佐に抱き付いた。それを見たウィルは、

「え、その人、カティアのお父さんなの!？」

「そうよ、私のお父さんのジエームズ・カーター大佐よ!」

「え、でも、カティア、確か君の姓は…」

「ギレルは私の妻の姓だ。カティアは私の足元には及ばないからと言って、敢えて私の姓を名乗らずにいているんだ。そのせいで、何度か隠し子じゃないかと、よく言われて参ったよ!」

ストームはカーター大佐に、

「ところで、その策とは?」

「実は殿下にお力を貸していただきたいのです!」

「レイルを? まさかとは思うが、テレビ中継を利用してレイルを大々的に映し、帝国内のレイル派の派閥を増やして俺たちの味方に据えるってところか?」

「まあ、半分正解ですね…」

「大体はわかるが、半分だけ正解ということはその半分はどう違うんだ?」

「確かに私は帝国から離脱はしましたが、それでも私は帝国の人間です。だから、帝国を裏切ることは出来ないのです、私が目指しているのは帝国が間違っていることを国民に伝え、帝国を直すことなのです!」

「ということ、レイルと一緒に帝国中に呼び掛け、国民の目を覚まさせるってことか……」

それを聞いたグラッドは、

「しかし、レイルは今や、帝国の廃太子だ。いくら世間に好評しても聞いてはくれないだろう。」

「ですが、実際は殿下は公では死亡したことになっていただけです。それに帝国国民の大半は殿下を支持しています。国民は殿下の優しさに惹かれ、世界を平和に導いてくれると期待していましたから。」

「といつても、マスコミやテレビは全てネオデスメタルの支配下にある。テレビ中継で流すことは難しいだろうし

、仮に出来ても帝国軍に俺たちの手を更にさらけ出すことになる。何か裏ルートがあれば……」

その時、突然ストームが何か感じ取ったかのように拳銃を取り出し、壁にいる虫を撃った。銃声を聞いて驚くドレイクやウィルたち、

「何やってんだよ！ 虫ごごときで銃を使うな!!」

ストームは撃ち抜いた虫を見て、

「わかったぞ！ ドレイクの別荘と俺たち同盟軍の本拠地が奴らに手に取るように場

所を特定出来たのかを！」

「わかったって……虫を取っただけじゃ……」

ストームは撃ち抜いた虫をドレイクやウィルたちに見せると、その虫の撃ち抜かれた部分が金属になっていて、更に超小型の盗聴機が埋め込まれていた。

「へ、これは……」

「そうだ、ドレイク。お前も知っているだろう。こいつはれっきとしたゾイド、しかも盗聴機を埋め込んで改造を施したスパイゾイドだ！」

それを聞いたグラッドは、

「そうだったのか！　前にユリスと初めて会った時にデーニッツに居場所を特定されたのもそのゾイドを俺たちに付けさせて動向を探っていたのか。」

「ましてや、このサイズなら、ただの虫にしか見えないから、誰も気づくことが出来なかつたんだろう。」

「どうりで俺たちの場所と動きが帝国軍に知られ過ぎたわけだ。それにしてもこんなゾイドまで軍事利用するとはホントになんて奴らだ。　しっかしお前、よく気づいたな。」

「キングと一緒にいてから、他のゾイドの気配を知ることが出来る感覚を手に入れたからな！」

「じゃあ、何で今まで気が付かなかったんだよ？」

「そりゃ、こいつがたまたま俺の側にいなかったから……」

「ん？待てよ。 そうだ！ こいつを逆利用する手があるかもしれない。」

カーター！ お前のその作戦もしかしたらいけるかもしれないぞ！」

グラッドの余裕そうな表情に少し驚くウィルたち、

帝都メガロポリスの宮殿の倉庫、そこには地下研究所で大量生産されたおびただしい数のゼロフロントスとそれに乗る機械兵が勢揃いしていた。 それをギャラガー三世、タッカー元帥、デーニッツ中将、ベケット少将が眺め、

「遂に私の巻族もこれ程の数になったか。」

「先帝陛下とゼログライジス復活を記念して、この大量生産したゼロファントス部隊と機械兵を三世親衛隊とし、元の親衛隊は四世親衛隊として編成することになりました。」

そして、ベケット少将に親衛隊隊長の座を譲った代わりにこの私タツカーが三世親衛隊の隊長として引き続き先帝陛下にお仕えます。」

「そうか、では後はあの目障りなライガー共を片付けるだけだな。」

「ご安心を、必ずこの私が仕留めて御覧に入れます。」

「期待しているぞ。」

その時、部屋にガネストが入り、

「皇帝陛下！ 一体どこに行ってたんですか？」

「ちよつとゲームを楽しんできただけだよ。何か嫌な予感がしたけど、やっぱり生きていたんだよね。父上！」

いや、果たして本当にボクの父上と呼べる存在なのかな？」

「何が言いたい？」

「だってボクはギャラガー一世のクローンでもあり、同時にお前の遺伝子を持つ。でも一世いや、かつてのボクは一度死んだ。」

なのにお前はその遺伝子を色濃く持っている。つまり、お前がオリジナルの身体を持っているってことじゃないかな？」

「ふ、正解かもしれないが、敢えて言うなら私はむしろそれ以上の存在だ！」

「まあ、今はそんなことどうでもいいけど、もうこのネオデスマタルの皇帝はボクなんだよ！

今さら、過去の人間が口出すことじゃないんだよ！ 最強はこのボクだ！ ゼログライジスもこのボクのものなんだよ!!」

その時、ギアラガー三世の目が紫色に光り、同時にガネストがその威圧感に吹っ飛ばされるように壁に叩きつけられた。

「一体誰に口答えしているのかな？ 確かにお前はこのネオデスマタル帝国の皇帝だ。

だが、私はゼログライジスと同じゾイド因子を持つデスレックスを従えた最強のゾイド乗りと惑星Ziを壊滅に追い込んだ遺伝子を持つ私はもはや神に等しい存在だ。

少しは分を弁えることだな。本当の最強が誰なのかをな！ ンフフフフ。」

ギアラガー三世はタツカー元帥、デーニツツ中将と共に部屋を退出した。ガネストは納得がいかないように壁に打ち付けた。



帝都メガロポリスの宮殿の広場で親衛隊ゾイドが集結している中、広場が2つに別れ、その下から、通常のナツクルコングの2倍以上で、ジェノスピノ、オメガレックスに近いサイズをした重武装を施した赤いナツクルコングが現れた。そのナツクルコングはタッカー元帥が操るジェノスピノ、オメガレックスに次ぐ帝国最強のゾイドだった。

同時にそのナツクルコングG3を囲むかのようにゼロフロントス部隊も現れた。多くの国民が歓声を上げる中、ナツクルコングG3はゼロフロントス部隊とギャラガー親衛隊のゾイドを率いれ、帝都を行進し、やがてレッドケルベロス本社に向けて進撃して

いった。

ナツクルコングG3率いる三世、四世親衛隊ゾイドが行進していく中、ナツクルコングG3のコクピットから兵士の通信が入り、

「タツカー元帥、何者かが全世界でテレビを流しています！」

「何?！」

タツカー元帥がテレビを繋げた時、カーター大佐が映っていた。帝都にいる帝国国民たちもそれを見ていた。テレビのカーター大佐は、

「私はジェームズ・カーター大佐、帝国国民の皆さん、私の話を聞いて欲しい。」

今のネオデスメタル帝国は間違っています！ 我々ネオデスメタルは本来、争いの絶えないこの世界を統一し、この世界を平和に導く。

それが我が帝国の正義だったはずです。しかし、今の帝国はそれとはかけ離れた姿になっています。

現皇帝ギヤラガー四世陛下と側近のドクターマイルスは戦争をゲームとして楽しみ、反乱軍を叩き潰すための戦いを引き起こしています。

このようなやり方では、我が帝国は世界に憎しみを与え、ますます世界は混乱に陥ってしまいます。

国民の皆さん、本来、我々が皇帝に立てるべき人物は四世陛下ではなく、アーネスト

殿下だったはずです！」

その時、カーター大佐の横にレイルとウイルが現れた。それを見た帝国国民たちはざわついた。

「殿下……」

「アーネスト殿下だ！」

「本物なのか？」

「馬鹿な、死んだはずだぞ！」

カーター大佐はレイルのウイルの間に入って2人の肩に手を置き、

「私は帝国を正すために反ネオデスメタル同盟軍と手を組みました！」

ですが、これは帝国への反逆ではありません。これは改革なのです。

帝国の上層部は無慈悲にもアーネスト殿下の地位を剥奪し、その命を奪おうともしました。

しかし、同盟軍は殿下を御守りしました！ しかもそれだけではありません！

オメガレックスと新型ゾイドによる無差別虐殺、無差別な奴隷化等も上層部は行って

いました！

こんなことが許されていいはずがありません！ 皆さん、目を覚ましてください！

今の我々の本当の敵は反乱軍ではありません！ 帝国の上層部なのです。彼らは今

や、帝国の支配者ではなく、帝国の敵なのです！」

タッカー元帥はテレビを切り、

「元帥閣下、いかがなさいますか？」

「構わん、我が帝国国民がこんなことに惑わされるはずがない！ このまま前進する。」

「は！」

別の場所でテレビを見たドクターマイルスは、

「ふん、最後の悪あがきというわけか。だが、今さらあの皇子を立てたところでどうにかなるものか！」

それにしても、全世界中継でテレビに流すこと等、反乱軍に出来るはずがないが、そうか、スパイゾイドの存在を知ってそれを利用したのだな。

ま、今さらそれに気付いてももう遅い。さてと、皇帝陛下もゼログライジスももう完全体になったと聞いた。陛下に挨拶しなくてはな。

全軍帝都に帰還だ！」

「はー！」

ドクターマイルスの横でテレビを見たリセルは複雑そうな表情をしていた。

ナツクルコングG3率いる三世親衛隊のゼロフロントス部隊とベケット少将が率い

るようになった四世親衛隊のゾイドがレッドケルベロス本社に辿り着いた時、目の前にシーザーとギルラプターエンペラーがいた。それを見たタツカー元帥は、

「ほう、先帝陛下のジェノスピノを倒し、悉く我がネオデスマタル帝国の邪魔をしてくれた例のライガーと廃太子が来るとは……」

我が帝国に降伏する気になったのか、それとも私に無様な姿になってやられに来たのか？」

レイルはタツカー元帥に向かって、

「タツカー元帥、お前は尚も帝国に刃向かう者は全て肅清するつもりなのか！」

「無論だ！ 我が帝国こそが正義にして世界そのもの、そして皇帝陛下は絶対だ。」

それを理解出来ん貴様はやはり皇帝になるべき器ではない！」

「そうか、やはり、どうしても僕たちの要求に応えてくれないんだね。ならば、行くぞ、ウイル！」

「ああ、」

「ふん、やる気か？ だが、私と戦うことを後悔するがいい。」

本社のビルの最上階でブラック社長、カーター大佐、ストームがその様子を見ていて、「ホントに大丈夫なんでしょうか…？　これを世界中に流しても殿下に万が一のことがあつたら…」

「もちろん、手は打つてある！　それに帝国国民の目を覚まさせるにはこれしかない。」

「しかし、カーターさんよ。　ホントに仮に帝国国民が目覚めたとしても上手くいくのか？」

「いくらネオデスメタルとしても、帝国国民の声を無視することはできない！」

「どうかな？　更に弾圧を加えそうな気もするが…」

レイルはウィルに、

「ウィル、気を付けろ、タッカー元帥の操るあのナツクルコングはネオデスメタルではジェノスピノに次ぐと言われる最強のゾイドだ。」

「ではいくぞ、」

ナツクルコング G3 は肩の対空速射砲を撃った。シーザーとギルラプターエンペラーはそれを避け、ナツクルコング G3 の腹部の装甲に攻撃するが、ナツクルコングは全くびくともしない。

「やっぱり、並みの装甲じゃないみたいだな！ 行くぞ、シーザー！ 進化 解放！  
エヴォブラストー!!」

「ギルラプター、進化 解放！ エヴォブラストー!!」

「スピリットバーストブレイク!!」

「新・音速殺!!」

シーザーとエンペラーの攻撃を諸に受けるナツクルコングG3、しかし、ナツクルコングG3はそれでも通用せず、シーザーとギルラプターエンペラーを驚掴みにしてしま  
う。

「うわ、そんな…シーザーとギルラプターの攻撃が通用しないなんて…」

「馬鹿め！ この私のナツクルコングG3は今までの帝国ゾイドのパーツを結集して  
改造した最強のゾイド、装甲は数十体のバズートルの甲羅を使っているのだ。 そう簡  
単に倒れるゾイドではない！」

「そ、それだけのゾイドを犠牲にして何とも思わないのか!？」

「それがどうした？ 私と我が帝国にとつては全てのゾイドは皆等しく帝国の道具に  
過ぎん！」

むしろ、私の最強のナツクルコングの身体の一部になれて誇りに思っているだろう。」

「ふ、ふぎけるな—!!」



シーザーはEシールドを展開し、その衝撃でナツクルコングG3は手を離し、シーザーは片方の手を攻撃し、エンペラーも脱出する。

「やつぱり、ネオデスマタルとはわかりあえないってことなのか!」

「ふん、貴様らが我が帝国とわかりあうなら、我が帝国に屈服するしかないがな。」

それを聞いたレイルは、拳を握り締め、

「もう、ネオデスマタルを変えることは出来ないのか…やつぱり故郷である帝国を自分の手で倒すことしかないのか…」

「その必要はない。貴様はここでくたばるのだからな!」

ナツクルコングG3が拳でエンペラーを攻撃しようとした時、シーザーは咄嗟にEシールドを展開し、ナツクルコングG3の攻撃を防ぐ。

「考えるのは後だ、レイル。まずあいつを倒すのが先だ!」

「ああ、まさか、僕が君にまた助けられるとはね! じゃあ、行くぞ!!」

ナツクルコングG3は腕に装備しているバルカンを撃ち込み、シーザーのEシールドを破ろうとするが、エンペラーはその隙にナツクルコングG3の後方に回り、後方のコクピットを狙おうとするが、ナツクルコングG3の肩の対空速射砲が突然後ろを向き、エンペラーに対して撃ち込む。エンペラーはその攻撃を避け、直ぐにその場を離れる。

「残念だな。ナツクルコングG3は後ろからの攻撃にも対処出来るのだ!」

「なら、これはどうだ!? スピリットバーストブレイク!!」

シーザーはEシールドを展開しながら、ナツクルコングG3に突進した。ナツクルコングG3は両腕でシーザーを受け止める。しかし、シーザーは尚も攻撃の手を緩めず、そのまま前進し、ナツクルコングG3も少しづつ後退していく。ナツクルコングG3は腕に装備しているバルカンをシーザーに撃ち込む。エンペラーはその隙にナツクルコングG3の後方から攻撃しようとし、後ろに向いている対空速射砲を避けながら、後方のコクピットに近付いた。

しかし、ナツクルコングG3は掴んだシーザーをエンペラーに向けて投げた。

「ふ、四世陛下のオメガレックスと渡り合うだけの實力だけはあるようだな! だが、その力潰してもらうぞ。」

制御トリガー解除、ナツクルコング、兵器 解放! マシンブラスター!! 極熱拳  
!」

ナツクルコングG3は通常のナツクルコングのワイルドブラストと同様に両腕で胸部を思いっきり叩くドラミングを行った。

その時、ナツクルコングG3の胸部の熱が放出され、同時にナツクルコングG3の周囲の温度が熱くなっていった。

「な、なんだこれ、熱い!」

ウィルはナツクルコングG3の周囲が一気に火の海になったのを見て、直ぐ様エンペラーの前に立ち、Eシールドで防いだ。

ナツクルコングG3の胸熱拳を見たブラック社長たちは、

「なんだ、あのマシンブラストは!?!」

ドラミングを行ったナツクルコングG3の両拳が一気に炎に包まれた。

それを見たレイルとウィルは、

「なんだ、あれは? どう見てもただの胸熱拳じゃない。」

「喰らえ、フレームバーストクラッシュャー!!」

ナツクルコングG3は炎に包まれた両腕でシーザーとエンペラーに攻撃しようとし、それを見たブラック社長は、

「不味い、殿下を御守りしろ!」

ブラック社長の合図と共に、隠れていたレッドケルベロス社のラプトル、キャノンブル、バズートルが現れ、シーザーとエンペラーを護衛するように守るが、ナツクルコングG3の攻撃を食らったレッドケルベロス社の部隊は全てナツクルコングG3の攻撃による衝撃でボディが一気に粉々に破壊され、シーザー、エンペラーもその衝撃でぶっ飛ばされ、ナツクルコングG3の攻撃で地面に周囲にまるで巨大隕石が落ちてきたかのようなクレーターが出来た。シーザーとエンペラーは立ち上がり、

「なんだ、あの威力は?！」

「驚くのも無理はないだろう。私は万が一ジェノスピノ以上のゾイドが反乱軍の手に渡った場合を想定してこのナツクルコングで先帝陛下の操るジェノスピノと何度もシミュレーションを行ったのだからな。」

そのおかげで、このナツクルコングは5000度以上になるジェノスピノのA―Z高熱火炎放射機にも耐えられるようになり、更に5000度以上の熱を吸収出来るようになり、それを武器にした胸熱拳である極熱拳を修得したこのナツクルコングG3が遂に完成したのだからな!」

それを聞いたレイルは、

「そんな、じゃあ、あのナツクルコングはジェノスピノとも互角に渡り合えるレベルになつたつていうのか!？」

それを見たカーター大佐は、

「あれが旧デスメタル帝国のギャラガー一世陛下の側近にちなんだネオデスメタル最終秘密兵器という異名を持つタツカー元帥と最強のゾイドと呼ばれたナツクルコングG3の実力、まさか、ここまでとは…」

「さて、これ以上貴様らの遊びに付き合うつもりはない! これで終わりにするぞ!」  
その時、ナツクルコングG3のコクピットから帝都にいる兵士から通信が開き、

「元帥閣下、大変です！ 先ほどの反逆者のカーター大佐からの中継を見た帝国国民が直ぐに攻撃を中止し、アーネスト殿下を帝都に迎え入れると宮殿でデモを行っています！」

「何だと!?!」

帝都メガロポリスの宮殿の前では多くの帝国国民がどっと押し寄せ、機械兵や帝国軍兵士が取り押さえようとするが、帝国国民が抵抗し、

「今すぐ、攻撃を中止しろ！」

「アーネスト殿下をもう一度皇子に復帰させろ！」

「あれは間違ひなく殿下だ！　今すぐ攻撃を中止しろ！」

「アーネスト殿下に帝位を！」

宮殿の窓からその様子を見ていたドクターマイルスとデーニッツ中将は、

「反逆者になったとはいへ、我が帝国で数々の功績を残したカーター大佐の演説はど  
うやら反乱軍にとってかなりの成果を上げたようだな。」

「といつても今さら、元帥殿に攻撃を中止しろと言うわけにも……」

「仕方ない。この際、デモの連中を……」

「確かに世論とマスコミは完全に我々の手中にあるから、虐殺は簡単なことだが、カー  
ターの奴がスパイゾイドを利用してあの中継をしているというなら、我が軍が国民を虐  
殺する光景をスパイゾイドを通して全世界中に流す可能性もある。そうなると、逆に  
我々が不利になってしまう。」

「といつても、今さらあれが反乱軍が作った偽者だと説明しても信用はしないだろ  
う。」

「ならば、私が出ようか？」

2人の前に出た人物を見たドクターマイルスは、

「なるほど、確かにあなたなら、流石にデモの連中も黙るでしょう。」

帝国国民が次々と宮殿に侵入しようとしたその時、宮殿の演説場に1人の男が現れ

た。その男を見た国民たちは直ぐに行進を止め、じつと見つめた。

「我が帝国国民たちよ、落ち着くがいい。あれは我が息子を殺すわけではない。息子をたぶらかす愚かな反乱軍の粛清だ！」

それを見た帝国国民たちは、

「ほ、本物？ まさか、偽者じゃないよな！」

「いや、間違いなくあのお方は！」

「そうだ、間違いない！ あれは先帝ギヤラガー三世陛下だ!!」

「先帝陛下万歳！ ギヤラガー！ ギヤラガー!!」

宮殿の演説場に立った男はギヤラガー三世であり、その映像は世界中に流れ、レッドケルベロス本社にも流れていた。本社でそれを見たブラック社長とカーター大佐、グラッド、ストームたちは驚愕し、

「そ、そんな、何故先帝陛下が!?!」

「先帝陛下……」

「馬鹿な！ あいつは確か、俺たちでジェノスピノと共にデスロッキーに落としたはずだぞー！」

「皇帝ギヤラガー三世……どうやら、あの時、デスロッキーで会った時、ギヤラガー一世と更に別の邪悪な気配がしたのは俺の気のせいじゃなかったようだな。」

その声を聞いたウィルとレイルは青ざめた表情をした。

「そんな…あいつは俺とシーザーが…」

「ど、どうして…どうして父上が!?!」

T o b e c o n t i n u e d



## 第46話「古の皇帝龍」

帝都メガロポリス、宮殿の演説場に立つたギヤラガー三世は、帝国国民の前で演説を行っていた。

「諸君、私は死んではない！ 私こそが本物のギヤラガー三世だ！」

「ウオー!!」

「そして、先程の攻撃は我が息子アーネストを殺すものではない、我が息子をたぶらかす反乱軍の粛清なのだ！」

当然、アーネストを殺すつもりはない。諸君、それを信じてくれ。」  
それを聞いた帝国国民は歓声を上げた。

「そうだ。先帝陛下がアーネスト殿下を殺すわけがない。」

「陛下はやつぱりアーネスト殿下を見棄てていなかった！」

「皇帝陛下万歳！ ギヤラガー！ ギヤラガー！ ギヤラガー!!」

「そして、この映像を見ている反乱軍に伝える！ 直ぐにアーネストをこちらに引き渡せ。さもなくば、貴様らをレッドケルベロス本社ごと破壊する。」

ギヤラガー三世はタッカー元帥と通信を開き、

「タツカー元帥、今すぐ撤退しろ！」

「し、しかし…！」

「これは命令だ！」

「わ、わかりました。」

ナツクルコングG3はそのまま引き下がりが、ゼロフアントス部隊と親衛隊と共に撤退していった。それを見たウイルは、

「一体、どういうことなんだ？」

レイルは激しく拳を握り、

「何で、何で父上が生きているんだ!？」

帝都メガロポリスに帰還したタツカー元帥は宮殿内で玉座に座っているギャラガー三世と対峙し、

「一体何をお考えになつていますか!?! 本来、ゼログライジスが披露されるまでは公に出ない計画のはずじゃないですか!」

「構わん、いづれにしろ公に出るのだ。遅かれ早かれの問題だ。それに、もう隠す必要もないからな。それより、レイルを迎え入れる準備をしろ!」

「は…何故です?」

「今さら、国民に嘘をつくわけにはいかないからな。」

「しかし、皇帝はもう…!」

「心配するな、奴の処分は私が行う。」

「は!」

「待つているぞ。アーネスト。」

レッドケルベロス本社、ウィルたちは宮殿の演説場に立ったギヤラガー三世の映像を見ていた。グラッドとストームは、

「一体どういうことなのだ？ 確かにあいつは俺たちが倒したはずだ！」

「恐らく、レイルと四世がギヤラガー一世のクローンだというように俺たちが倒したギヤラガー三世も影武者のクローンだったかもしれないな。ネオデスメタルはクローン技術がかなり応用されているらしいからな！」

「だが、映像の奴は俺たちが倒した時と全く容姿が同じだ！ 本当に建国当時から生きているなら、奴は相なじいさんのはず……」

「まさか、クローンで魂を移し変えて生きていても言うのか!? どう考えても非科学的だし、魔法でもなけりゃ無理だ！」

「普通の人間ならな！」

「まさか、奴は人間じゃないってことか!？」

「それはまだわからないが、可能性はある。だが、確かめなければつきり言えない

…

ギヤラガー三世の映像を見たレイルは静かに拳を握る。それを見たエマは悲しそうな表情をしていた。

「とはいえ、悠長には待ってられない。あのドクターマイルスとやらも海底神殿にあつたゾイドコアのパーツを既に帝都に持っているから、ゼログライジスの復活ももうまもなくだろう。一刻の猶予はない。」

「しかし、奴は難攻不落の要塞でもある帝都メガロポリスのど真ん中の宮殿にいるんだぞー！ どうやって入るつもりだ？」

「それはまだ考え中だ。」

「そう言えば、さつき奴がレイルを引き渡せという要求をしてきたが、それを利用して要求に応じたふりをすれば、もしかしたらいけるのでは!？」

「いや、恐らく奴はそれが狙いかもしれない。俺たちを帝都に招き入れ、一気に全滅させる罠かもしれない。」

「それにあのナツクルコングG3までいやがるからな。」

「ナツクルコングG3の映像を見たジョンは、

「それにしても、あのナツクルコングのサイズは尋常ではありません。通常のナツクルコングの数倍もあり、ジエノスピノに相当する大きさなんて普通のゾイドではありま

せんー！」

ジョンの質問にドレイクが口を開き、

「恐らくあれは、環境に応じて大きさが変わるゾイドの性質を利用して改造したナツクルコングだろう。」

「それはどういうことですか?」

「なんだ、知らんのか。ゾイドは環境によって大きさが変わるといふ性質があつて、ゾイドクライシス時の地球では、地球環境がほとんど崩壊していた状態だったため、ゾイドたちはその環境に馴染めず、かつて惑星Ziにいた時と同じサイズになつていた。

しかし、ゼログライジスとの戦いの後、地殻変動で別れ、帝国と共和国が戦争をしてきた大陸から隔離されたワイルド大陸は他の大陸と違って環境が整い、その大陸にいたゾイドはデスメタルが現れる前は兵器化されなかつたため、完全に野生化してコクピットが必要ない程のサイズになつた。」

それを聞いたストームは、

「そういえば、俺も親父から似た話を聞いた。俺の先祖と一緒にいたときのキングはもつと小さかつたが、ワイルド大陸から離れた場所に移住してからコクピットを取り付けなければならぬサイズになつたって聞いたことがある。」

「今はかつて、ゾイドクライシス後に帝国と共和国が戦争してた時代の技術が復活し

て再びゾイドの兵器化が進んだため、それに伴い、またゾイドのサイズが変わったんだろう。」

「だが、今はナツクルコングG3より更に驚異の存在であるゼログライジスの復活の阻止とギヤラガー三世の正体を探ることだ。

ジョン！ 帝都メガロポリスに侵入することは出来るか？」

「まあ、侵入なら出来なくもないが、問題はその後だ。これまで、ネオデスメタルの軍基地に侵入した俺でもあそこに侵入することはかなり骨が折れる。例え、侵入出来ても無事に脱出出来る保障はない。」

「となると、帝都の情報に詳しい者で行くしかないな。レイル、お前、帝都にどうやって入れるか知って……」

ストームが振り返ると、レイルの姿はなく、同時にエマとユリスの姿もいなかった。

「て、いねえ！ あいつどこ行きやがった!?!」

ウイルは何か察したような表情をし、

「ギヤラガー三世はレイルが父親として尊敬していた人物、もしかしたらあいつに会いに……」

「と、とにかく探すぞ！」

レイルはシーザーたちがいる倉庫に入り、ギルラプターエンペラーのコクピットに

乗った。

「よし、行くぞ、ギルラプター。」

「待って！」

その時、エマとユリスが現れ、

「エマ、姉さん。」

「レイル、行つちや駄目！ 確かなことは言えないけど、あの人は凄く危険な人なの！ 会つたらどんなことされるかわからないわ！」

「そうよ！ レイル。あなただけがそんな危険なことをする必要はないわ！」

「僕は確かめたいんだ。あの人が僕の本当の父親なのか、そして、本当に僕を捨てたのかを。」

これは僕自身の問題だ。エマと姉さんはそこで待っていてくれ！ 行くぞ、ギルラプター！」

「レイル!!」

ギルラプターエンペラーはそのまま倉庫から出てしまい、その後にはウイルやストームたちも倉庫に入った。

「くそ、遅かったか！ 仕方ない。俺とウイル、ジョンがあいつを連れ戻す。グラッドたちはレッドケルベロス本社の警備を……」



その時、エマとユリスが、

「待つてください！ 私たちも連れて行って下さい！ レイルを助けたいんです。」

「といつても、なあ…」

「私も連れて行って下さい！ エマとユリスさんは私が守りますから！」

「カティア、そういや、お前、帝都には何度もいたんだつたな。よし、帝都まで道案

内頼めるか？」

「そのつもりです！」

「よし、では、エマはウィルと一緒にシーザーに、ユリスはカティアと一緒にベティに乗って俺に付いてこい！」

「ちよつと待て、」

その時、ドレイクが前に出て、

「俺も行かせてくれないか。あの皇子様は結構気に入っているんでな！」

「でも、お前、帝都のことは…」

「この俺をなんだと思つてやがる。帝都メガロポリスのことは既に熟知しているのでな。このメンバーの中ではむしろ俺の方が詳しい。」

それに、その男の相棒のクモは修復しているとはいえ、ゼロファントスに対抗出来る程の戦力はない。俺とジャンなら、その分の戦力を出せるぜ！ 後、皇子様の花嫁と

綺麗な姉さんの護衛だつて十分に務まるぜ！」

それを聞いたグラッドはゆっくりストームに近付き、小声で、

「なあ、ドレイクって、スミスみたいなムツツリスケベなのか…？」

「実を言うと、あいつ、以前にも何度もナンパしたこともあつてな…」

「よし、それなら、このドクタースミスも殿下とエマちゃんとユリスちゃんの護衛に…」

「お前は来んでいい!!」

「取り敢えず、俺とウイル、ドレイク、カティアがレイルを連れ戻す。後の者はネオデスメタル帝国軍を迎え撃つ準備をしてくれ！」

「了解！」

ギルラプターエンペラーは森林の中を走る中、突然、レーザーのようなものがエンペラーを襲い、エンペラーは間一髪で避けた。目の前にドクターマイルスのゼロファントスとその部隊が現れた。

「ドクターマイルス！」

「あゝ、待て。今日はお前と争うつもりはない。実は先帝陛下がお前に会いたいと仰つてな。」

「父上が？」

「そうだ。だが、その前にお前が大人しく我々についてくれたらな。」

「わ、わかった。」

ギルラプターエンペラーはゼロファントスにレイルはゼロファントスに乗っていた機械兵に捕らえられ、そのまま帝都メガロポリスの入口から少し離れた森の下が開き、そこは巨大な地下マンホールになっていた。レイルは機械兵とゼロファントスの誘導で、地下マンホールを通つてゼログライジスが眠る巨大カプセルがある宮殿の地下研究所まで連れていかれた。

地下研究所の周りを見たレイルは想像を絶する光景を見た。機械と特殊なスーツを着用した研究員が捕獲された野生ゾイドや破棄された帝国の兵器ゾイドがゼロファン

トスや新型ゾイド開発のための生体実験を行い、次々とゼロファントスが量産化され、他の機械兵の開発、人間を機械化する手術、そして生体実験でバラバラにされたゾイドたちのパーツが次々とゼログライジスの眠る巨大カプセルに送り込まれ、その一部はカプセルの近くにいたデスレックスがバリバリと貪り食っていた。

レイルはこの世のものとは思えないようなものを見るような表情をした。そして、ゼログライジスの眠る巨大カプセルの前にギャラガー三世が立っていた。

「ち、父上…」

「よく来たな、息子よ。ま、お前がここに来ることはわかっていたがな。

もう隠す必要はないだろう。私の正体を教えてやる。そして、その時、お前は息子ではなく、私の身体の一部になるのだ！」

「どういふことですか!？」

レイルの驚いた表情を見たギャラガー三世は不敵な笑みを浮かべた。

シーザー、キング、ベティ、ジャンがレイルの後を追って森の中を走っていく中、突然、レーザーのようなものが発射された。シーザーたちは間一髪で避けたその時、ドクターマイルスのゼロファントス、ゼロファントス部隊と更にデルまで現れた。

「待っていたよ！　だが、ここから先は通すわけにはいかん！」

「リセル……」

デルを見たユリスはリセルに向かって、

「リセル、目を覚まして、あなたはそこにいちゃいけないの！」

ユリスの声を聞いたリセルはウィルとシーザーを倒す気持ちを抑えられず動揺してしまう。

「く、俺はあいつを倒して強くなる！」

デルがシーザーに前足で攻撃しようとし、シーザーはすかさず、Eシールドでそれを防ぐ。

「リセル、いい加減に目を覚ませ！　お前が戦う相手は俺じゃないだろ！」

シーザーを攻撃しようとするデルの前にジャンが現れ、

「こいつは俺が引き受ける。お前はお坊っちゃんを助けに行け！俺とストームも後でそっちに行く！」

デルを見たユリスは悲しそうな表情をし、

「リセル……」

「ユリスさん、今は殿下を助けることが先です！」

「わ、わかったわ！」

ウイルとエマ、ユリス、カティアは直ぐに帝都に向けて行った。

「逃がすか！」

ドクターマイルスのゼロファントスはシーザーとベティを攻撃しようとするが、直ぐ様キングが阻止し、ドクターマイルスのゼロファントスの前に立った。

「お前の相手は俺だ！あの時の借りを返して貰うぜ！それに、お前がリセルを洗脳したんだから、お前を倒せば、リセルも元に戻るだろう。」

「ふん、いいだろう！ゼロファントス、原始 解放！ゼロブラストー!!」

「キング、進化 解放！エヴォブラストー!!」

帝都に向かうシーザーとドクターマイルスのゼロファントスと戦うリセルは、

「（ウイルとシーザーを倒せ、倒せ、倒して更に強い力を得るんだ！）、（一緒にいるド

クターマイルスは両親を殺したネオデスマタルの人間だ！ 帝国に復讐するべきだ！  
う、ウワア〜!!」

ウィルとシーザーを倒すことと自分の両親を殺したネオデスマタル帝国に対する復讐を誓うそれぞれの自分の声が聞こえたりセルは取り乱し、そのままその場を離れ、逃げてしまった。

「あ、あら、あいつ逃げてしまったぞ！」

それを見たドクターマイルスは、

「ふん、所詮、感情に流されやすい奴はここまでか……まあ、いい、もう奴は既に不要だからな。」

「け、負け惜しみもそれまでにしておけ！ リセルはそこまで弱い人間じゃねえ！」

「愚かな……もうすぐ、陛下とゼログライジスはまもなく完全体となる。その時こそ、貴様らの本当の最後だ！」

「やれるもんなら、やってみやがれ！」

ドクターマイルスのゼロファントスのデイズルレーザーキャノンを避けたキングはゼロファントスの足に一発咬ました。キングの横にジャンが現れ、

「俺も付き合ってもらうぜ！」

「へ、フリーダム団最強のコンビの復活だな！」

「仕切んじやねえぞ！ 俺は俺の好きなようにやらせてもらうぜ！」

「言ってくれるね。じゃ、行きますか。」

キングとジャンはドクターマイルスのゼロファントスとゼロファントス部隊に向かつて突っ込んだ。

帝都メガロポリスの宮殿の地下研究所、レイルはギャラガー三世と対峙していた。

「予め言っておくが、私のこの身体は帝王ギャラガー一世そのものだが、人格は一世そのものではなく、一世と完全に融合した者なのだ！」



「そ、それはどういうことだ!？」

「かつて私は自ら滅ぼした惑星Ziから地球に向かった移民船で部下を率い、反乱を起こし、ゾイドクライシスを引き起こし、一度ゼログライジスの復活に成功した。本来はその地で部下と共にネオデスメタル帝国を築き、リジエネレーションキューブを全て掌握し、その力で地球を私色に染め、その後、全宇宙の支配を実行しようとした。

だが、お前がシーザーと呼んでいるライジングライガーと帝国、共和国の連合軍によつて私は自身の分身であるゼログライジスと共にキューブの力によつて封印された。

しかし、万が一の場合を考えてあの時、私の部下が操ったデスレックスに自らのゾイド因子を与え、そいつをもう一つの私の分身として復活を狙った。

そして、ワイルド大陸で反映した帝国の皇帝がデスレックスを手に入れ、その力を完全にものであるため、デスレックスに内在するゼログライジスと私のゾイド因子から開発した最初のオリジナルデスメタルキーを作り、その力でデスレックスをデスブラストし、その皇帝はまるで狂気的な性格を剥き出しにし、ワイルド大陸だけでなく、他の大陸にも侵略の手を伸ばし、帝国、共和国も制圧した。

だが、お前が姉さんと慕っているユリスという小娘の先祖がデスレックスと絆を結んだために私とゼログライジスのゾイド因子は封印され、デスレックスは狂暴性を無くした。

デスレックスの狂暴性を再び呼び覚ますため、私はオリジナルデスメタルキーに宿る私のゾイド因子で皇帝を操り、再びデスレックスを暴走させ、世界の半分を滅ぼした。

あのまま続けていれば、私の支配はあの時点で完了していただろう。

しかし、エマとかいう小娘の先祖がライジングライガーと共に私とゼログライジスを封印した古代秘宝Zのゾイド因子を受け継ぐワイルドライガーと絆を結び、デスレックスは封印され、私の復活は阻止された。」

「一体どういうことですか？ ゾイドクライシスの時に反乱を起こしたとか、自分のゾイド因子をデスレックスに与えたとか、一体、あなたは何者なんです？」

「ふん、私はただの人間でもゾイドでもない。オーガノイドの力と最強の帝王ギヤラガー一世の身体とその人格を得た最強の生命体、デスザウラーだ!!」

それを聞いたレイルは青ざめたように驚愕した。

「デス…ザウラー…!!」

シーザーとベティは帝都メガロポリスの直前まで来た。

「遂にここまで来た。ここがネオデスメタル帝国の帝都か…」

「ええ、そうよ！ 私はここでお父さんと一緒に帝国軍人として育った場所よ。」

「カティア、帝都にどうやって入るんだ？」

「残念だけど、帝都メガロポリスは四方八方、帝都全域でかなりの警備が敷かれていて難攻不落の首都と呼ばれているところ、蟻一匹でも侵入は許さない。侵入する方法なんてない…」

その時、エマとユリスが何かを見つけ、

「ねえ、あのマンホールのような穴、あんなところにあつたかしら？」

「隠し通路!? もしかしたら、殿下はここから入って行ったかもしれない！」

「よし、行こう！ 早くしないとレイルが危ない！」

その時、エマが何か危険な何かを感じ取って怯え、

「ウィル、気を付けて！ その下に何か邪悪な気を感じる。」

「わかつている。どんな相手でも必ずレイルを助ける。行くぞ、シーザー！」

グオオッ!!

シーザーは咆哮を上げ、ベティと共に下に入った。

宮殿の地下研究所で、デスザウラーと名乗ったギャラガー三世を見たレイルは信じられないような目をした。

「そんな、父上が…デスザウラー…」

「お前に帝王学を教えた時にその存在は教えてやったはずだぞ。」

かつて古代ゾイド人によって生み出され、そいつらとその文明、惑星Ziを壊滅寸前に追い込んだ最強のゾイドの名をな！」

「確かに伝説でも聞いたことはある。でも、そのゾイドは惑星Ziでの戦いで滅んだはず！」

「確かに、私はシーザーとかいうライガーに似たライガーによって一度滅ぼされた。だが、万が一の場合を想定して予め自らのゾイド因子を残し、その後、次々と古代ゾイド人の生き残りに寄生し、遂に地球にまで来た。

ゼログライジスも私のゾイド因子を受け継いだ分身なのだよ！」

「そんな、嘘だ！ もし、それが本当ならあなたが持つギヤラガー一世の身体は何なんだ!? まさか、コピーした姿なのか……」

「いや、真正正銘帝王ギヤラガー一世の身体だ！ 実を言うと、最初に開発されたあのオリジナルデスマタルキーには私のゾイド因子が入っていたのだ。

反乱軍のリーダーの男の先祖のアラシに説得されたデスレックスがデスマタルキーの装置を破壊しようとした時にキーも破壊され、その中から私のゾイド因子が解放され、自らマグマに落ち、自害しようとした帝王ギヤラガー一世の身体に宿り、宿主にすることに成功した。

とはいえ、流石は帝王ギヤラガー一世、デイメパルサートランスのマッドオクテットすら弾く強靱な精神力の持ち主であったため、今まで寄生した宿主と違い、私の支配に抗い、逆に取り込もうとしたため、完全な融合は出来ず、そのままデスレックスと共にマグマに眠った。

それから暫く私は封印されたが、運良くゾイドクライシス後の地球で合流するはず

だったが、ゾイドクライシスの影響でコールドスリープ装置から起きる時間が遅くなり、この時代に目覚めた私の部下が私を復活させ、共にネオデスマタル帝国を築き、帝王ギヤラガー一世の身体の融合を果たすため、私から一世の意思を分離させた2体のクローンを造らせた。」

「まさか、その部下とクローンは…」

「そうだ！ それこそ、私の代理としてネオデスマタル帝国を強大な帝国に成長させたドクターマイルス、そして、その2体のクローンは現皇帝四世のガネストとお前だ！」

「そんな…」

「残念だが、事実だ。そして、今までお前の前にいた私は私がゼログライジスと共に完全体になるまでの影武者のクローンで、そいつを遠隔操作して皇帝を演じた。お前が私を父と呼んでドクターマイルスらの計画に協力してくれたおかげで、遂にゼログライジスと共に完全体となって表舞台に立った！」

「僕は…最初からそのために生まれたということなのか…」

「そうだ！ そしてお前は私に更なる究極な力を与えるパーツでもある。お前の身体にユリスの兄であるパウルの遺伝子を移植させたのは何故だと思う？」

あの2人はかつての真帝国皇帝ハンナ・メルビルの子孫であることは間違いないが、同時にかつて私の部下の1人であった古代ゾイド人の血も入っているのだ！

特にパウルスにはその血が色濃く受け継いでいて、私はその遺伝子を取り込もうとしていた。

だが、奴が帝国の反逆者になったため、奴を処刑して代わりにその遺伝子をお前の身体に移植した。そして更にエマの弟のレイルの遺伝子も加え、ダークライガーを操れる程になった。お前は帝王ギヤラガー一世の身体と古代ゾイド人の血を持った完璧な存在なのだ！ お前の力は私に非常に近い。」

「僕は今まであなたを父上としてあなたに付いていった。でも、これではつきりわかった。お前は僕の父じゃない!! 僕はお前を許さない!!」

「ふん、お前が私に反逆しても無駄なこと！ お前は私の身体の一部になるのだからな！」

その時、ギヤラガー三世の身体が液体金属状になり、身体の形が変化していき、ゼロフアントスのような白色と紫のラインが入り、ドラゴンのような翼を持った刺々したテイラノ型の小型ゾイドに変化していった。

その姿はかつて惑星Ziの大戦に生き残っていた赤いオーガノイド、アンビエントのような姿だった。それを見たレイルは驚愕した。

「これが私のもう一つの姿、オーガノイド！ かつて惑星Ziで強大な力を持ったゾイドだ。」

私はドクターマイルスとキューブの力、ゼログライジスのゾイド因子でこの姿と力を得、遂に完全体となった。

この姿は私が惑星Ziで一度復活した際に取り込んだオーガノイドの姿だ。

後は貴様とガネストを取り込み、ゼログライジスと完全融合を果たすだけだ！」

ゼロファントスのような色を持った刺々したオーガノイドの姿になったギヤラガー

三世の腹の中が開き、そこから無数のコードのようなものが現れ、レイルを拘束した。

「さあ、来るがいい。我が身体の一部になるのだ！」

コードに拘束されたレイルは徐々にギヤラガー三世のところ引き寄せられる。

「嫌だ！ 僕はお前なんかと一緒ににはならない！」

レイルは必死に抵抗するが、コードから紫色の電撃がほとぼしり、レイルは苦しむ。

「ぐ、ぐわあぁ〜!!」

「無駄なことだ！ 大人しく私に取り込まれるがいい。」

「スピリットガンストラッシュュ！」

その時、シーザーが現れ、シーザーのスピリットガンストラッシュュがオーガノイドのコードを破壊した。シーザーから降りたエマはレイルの元に駆け寄り、

「レイル、大丈夫？」

「僕は大丈夫だよ。」



オーガノイドを見たウイルは、

「なんだ？ あのゾイドは。」

オーガノイドは液体金属状になり、再びギヤラガー三世の姿になった。

「お前はギヤラガー三世！」

「久しぶりだな。あの時のライガーの小僧！ あの時、ジェノスピノに乗った私を倒したのは見事だったよ！ 最も以前私を封印してくれたその忌々しいライガーの力によるものだろうだな！」

ギヤラガー三世を見たシーザーは激しく警戒した。

「だが、残念だ。あれは影武者のクローンに過ぎん！ 今の私が本物だ。それも全てを超越した完全な生命体にな！」

レイルはウイルに、

「ウイル、あいつは僕の父じゃない！ 父の皮を被った偽物だ。この世を滅ぼす悪魔だ！」

レイルを抱くエマはギヤラガー三世を見て、邪悪な気配を感じ、怯えていた。

「そんな、じゃあ、あの人は……」

「倒してくれ！ 僕を騙したあいつを！」

憎悪を剥き出しにしたレイルを見て、ギヤラガー三世の方を見たウイルは攻撃を躊躇

した。

「どうした？ 私を撃たないのか。」

「躊躇うな！ ウイル、あいつは人間じゃない！」

「う…」

シーザーはウイルスを見てうなずき、

「わかった、シーザー。スピリットガンスラッシュュー！」

シーザーはギヤラガー三世にガトリングを放ち、周りの物が破壊され、ギヤラガー三世は一気に煙に包まれた。煙が晴れた後、ギヤラガー三世は何と無傷だった。それを見たウイルスたちは信じられないような表情をした。

「歯応えが無さすぎるー！」

その時、ギヤラガー三世が両手を振りかざし、両手の指先から紫色の電撃が放たれ、シーザーを襲った。

「ぐわああく!!」

電撃を喰らって苦しむウイルスとシーザー、ベティがギヤラガー三世に襲いかかるが、ギヤラガー三世はすかさず、片手をベティに向け、ベティにも紫色の電撃を与えた。電撃を喰らって倒れるベティ、

「まず、お前から始末する。」

「ウィル！」

レイルはウィルとシーザーを助けに行こうとするが、コードに巻き付かれた際に食らった電撃の影響で動けなくなってしまう。カティアとユリスも電撃を喰らって動けなくなってしまう。ウィルとシーザーはギヤラガー三世の両手から放たれる紫色の電撃を食らい、苦しみ、その姿を見たエマはギヤラガー三世の元に駆け寄り、両手を掴もうとする。

「止めてー!!」

しかし、ギヤラガー三世は易々とエマの手を掴み、

「無駄な足掻きは止めるんだな！　ゾイドを操れない貴様に私は倒せない。ん？」

その時、エマの手がオレンジ色に光り、ギヤラガー三世の手に宿ってオレンジ色に光り、紫色の電撃が消え、ギヤラガー三世が苦しみだした。

「こ、これは！」

エマは直ぐ様、レイルを抱え、

「皆、今のうちに早く！」

「ああ、そうだな！」

自力で拘束から脱出し、ギルラプターエンペラーはエマとレイルの前に出て、2人を乗せた。カティアも直ぐに回復し、ユリスを抱えてベティに乗ってそのままシーザーに

付いていった。

「逃がしたか……」

その時突然、巨大カプセルの中にいるゼログライジスの目が赤く発光し、カプセルにヒビが割れ、地下研究所全体が揺れた。それを見たギヤラガー三世は、

「そうか、かつて自分を封印した憎きライガーがここに来たことによつて遂に目覚めの時が来たか。」

さあ、目覚めろ、我が分身よ！　そしてもう一度この地球と愚かな人間とゾイドに絶望を!!」

シーザーとギルラプターエンペラーは地下マンホールを通って帝都メガロポリスから脱出した。ストームとドレイクのところまで逃げ延びた。

キングとジャンはドクターマイルスのゼロファントスとゼロファントス部隊と互角の戦いをしていた。

「どうした？ その程度か。」

「あのゼロファントス、キングオブクローブラストを数は発喰らってピンピンしてやる。奴の強さは間違いなく本物だ。」

ドレイク！ 極限解放を使う。一気に肩をつけるぞ！」

「そうだな！ もうこれであいつらとおさらばしようぜ！」

その時、ドクターマイルスが何かを感じたような素振りを見せ、

「ふ、遂に記念すべき日が来たようだな！ 残念だが、貴様との戦いは一旦お預けだ！  
そして我々に逆らったらどうなるかという絶望を味わうがいい！」

「ウイル、レイル、無事だったか！」

「はい！ ドクターマイルスとゼロファントスは？」

「それが記念すべき日が来たとか言って勝手に逃げていったが…とところで、ギャラガー三世は？ 奴の正体は一体何だったんだ？」

「それが…」

その時、帝都全体が揺れ、宮殿の広場の下が2つに割れ、その下からジェノスピノとオメガレックスを遙かに凌駕するサイズを持つ超巨大な怪獣のようなものが現れた。それを見たウィルとストームたちは、

「あ、あれが…ゼログライジス!!」

宮殿のど真ん中に忽然と現れたゼログライジスの肩にはギヤラガー三世が乗っていた。ゼログライジスを見た帝国国民たちは驚愕し、

「なんだ、あのゾイドは？」

「ジェノスピノじゃない！」

「オメガレックスでもない！」

「でもあれには皇帝陛下が乗っている。陛下の新たなゾイドなのか!？」

ゼログライジスの肩に乗っているギヤラガー三世は、

「さて、目覚めの準備運動のいくか…ゼログライジス、奴等に挨拶をしてやれ。」

ギユオオオ!!

ギヤラガー三世の言葉を聞いたゼログライジスは身体全体が紫色に発光し、勢いよく咆哮を上げ、口を大きく開き、同時に地下研究所で生体実験されたゾイドの死体からゾイド因子が魂のように浮遊し、それが次々とゼログライジスの口に向かって吸収されていった。

そして、ゾイド因子がゼログラライジスの口に吸収されていく中、ゼログラライジスの胸部が口のように開き、中から巨大な赤いコアが出現し、そのコアから巨大な輪が現れ、その輪はゼログラライジスを包み込むように巨大化し、同時にブラックホールのようなものが現れた。

ゼログラライジスはその輪に向かって胸部のコアを向けた。

「ゼログラライジス、原始 解放：ゼロプラスト！ ジ・エンド!!」

ゼログラライジスの胸部のコアから数カ所の赤いレーザーのようなものが輪の中に入り、それらが天高く舞い上がり、それぞれ別々の方向に飛んでいった。それを見たストームとウイルたちは、

「どういうことだ？ 俺たちに向けて攻撃するんじゃないのか？」

その時、グラッドから通信が開き、

「ストーム、大変だ！」

「どうした？」

「こちらから映像を送る。それを見てくれないか！」

レッドケルベロス本社にいるグラッドとブラック社長から映像が送られ、その映像には先程、ゼログラライジスが放った数カ所のレーザーが向かった場所が映った。

向かった先は、新帝国、旧共和国、同盟軍に属する残り全ての反ネオデスメタルの都

市だった。

ゼログライジスが放ったレーザーはそれら数カ所の都市をオメガレックスの荷電粒子砲と同等かそれ以上の威力で全ての都市は一瞬で壊滅し、跡形もなく消え去り、焼け野原になってしまった。

それを見たウィルたちは、信じられないような光景を見るかのような絶望的な表情をした。同時にその様子を見た帝国民たちは、

「凄い、あれだけの都市を一瞬で！」

「これが皇帝陛下の新たな力か！」

「陛下我が帝国ははギャラガー一世陛下と旧デスメタル帝国を完全に越えた！ 陛下は完全に神だ!!」

「ウオー!!」

「皇帝陛下万歳！」

「ネオデスメタル帝国万歳！」

「ギャラガー！ ギャラガー！ ギャラガー!!」

ゼログライジスの肩のギャラガー三世は帝国民の歓声を見て、

「ふん、これで私に歯向かう愚か者はいない。それに、これはまだ予兆に過ぎない。新たな終焉の予兆をな！」



フフフフ、ハハハハハ、ハーハツハツハツハツハツハツハツハツ!!  
ギョオオオ!!

ギヤラガー三世の高笑いとしんクロするかのようにゼログライジスも咆哮を上げ、その高笑いとしんクロは帝都全体に響き渡った。ゼログライジスの力を見たウイルたちは、

「く、遅かったか…」

「遂に最強最悪のゾイドがネオデスメタル帝国の手に渡ったか…」

エマとユリスは見ていられないような表情をし、ウイルとレイルは絶望的な表情をした。

T o b e c o n t i n u e d

## 第47話「同盟軍集結」

帝都メガロポリス、ギヤラガー三世が操るゼログライジスの力で同盟軍と旧共和国、新帝国に属する全ての都市が破壊され、帝都中の帝国国民たちは歓喜の声で上がっていた。宮殿の窓からその様子を見たドクターマイルスは、

「十分効果はあったようですね。」

「当然だ。 ジェノスピノ、オメガレックスを遥かに凌駕する力を見れたのだからな。人間というものは必ず力に惹かれる。」

「これで、ゾイドクライシス以後、果たせなかった我々の野望が遂にこの時代で果たされるわけですね。」

「そうだ。 本来お前は帝国、共和国の合同軍とあのシーザーとかいうライガーとそれを従えるレオというガキと対決する際に目覚めるはずだったが、あながちタイミングが悪いことではなかったな。」

かつて私が従えた古代ゾイド人の中で特にゾイド因子の強かった者の遺伝子を持つギヤラガー一世の身体と人格を手に入れ、封印される前の私を遥かに上回る力を手に入れたのだからな！」

「それはそうと、ガネスト陛下はいかがなされます？　ゼログライジス復活で帝国国民の人氣が陛下に集中し、更にゼログライジスを陛下が手にすることで大層ご機嫌斜めです。」

「心配するな。奴には相応しいゾイドを与えてやる。私とゼログライジスのゾイド因子で真の姿になったデスレックスをな。」

それにゼログライジスが完全体になったとはいえ、私にとっては、あれでもまだ不完全だ！

今は真の姿を得たデスレックスに思う存分暴れさせてその闘争本能を呼び覚ませなくてはな。」

「まさか、あの時、敢えてゼログライジスのゼロプラスト発動の時、レッドケルベロス本社を狙わなかったのはそのためですか？」

「そうだ。あのライガー共とは何度も因縁があるからな。デスレックスの闘争本能が完全に解放されたその時、ゼログライジスは更なる究極の力を得、真なる宇宙最強の完全生命体となる。」

そして、レイルを取り込むことは出来なかったが、ギヤラガー一世の半分の意識を分離させた分身でもあるガネスト、奴の力だけでも取り込めば、十分だ！　そしてその力で今度こそあのライガーを必ず仕留める。」

ギヤラガー三世のいる謁見室の隣部屋にいるゼログライジスの横に全身紫色のデスレックスがいた。

レッドケルベロス本社、ウイルたちはレイルからギヤラガー三世の正体を聞いた。

「ギヤラガー三世は…帝王ギヤラガー一世の身体と人格と融合したデスザウラー…

！」

「デスザウラー、その名はワシも聞いたことがある。かつて惑星Ziに繁栄した古代

ゾイド人によって生み出され、文明を破壊し、惑星Z i を壊滅寸前にまで追いこんだ最強最悪のゾイドじゃ！」

「しかし、そのゾイドは確か惑星Z i の移民が地球に移住するずっと前に倒されたはずだぞ！ それにオーガノイドとかいうゾイドも同様に絶滅したはずだ。」

グラッドの言葉にストームは、

「実は俺も以前、デスザウラーのことは調べていた。それによると、あのゾイドは自分はおろか、他のゾイドのゾイド因子や人間の精神を自在に操れる程とのことだったらいい。」

「まさか、そんなことが……」

「信じられないが、あのゾイドはどのゾイドと違い、格が違う！」

レイルは拳を握りしめ、ブルブル震えていた。それを見たエマはレイルの手を優しく握り、

「レイル、落ち着いて！」

「落ち着いてなどいられない！ 今まで僕はあいつを父上と呼んで慕っていたけど、ギヤラガー一世の身体を奪い、僕をただの道具として利用したんだ！ 絶対に許せない！」

「駄目！ そんな気持ちでいったらあなたが危険な目に遭ってしまう。」

「これは僕の問題だ！ エマ、君が止めることじゃない！」

「それは違うよ、レイル。」

「ウイル、」

「確かにお前の経緯を考えたら、お前の問題かも知れないけど、ギャラガー三世の正体を知った以上、これはお前だけの問題じゃない。俺たちと皆、いや、この星に生きる全ての命あるものの問題だ！」

もし、あいつをこのままのさばらしにしたら、世界は滅びるかもしれない。説得出来れば、それでいいかもしれないけど、でも説得出来なかつたら倒すしかない！ 俺と皆の力で！」

「じゃが、どちらにせよ、あのゾイドが復活したということはワシたちにとってかなり脅威の存在となった。」

オマケにあのゼログライジスもオリジナルデスザウラーの分身で、しかもあの威力：もし奴が完全にゼログライジスと一体化してしまつたら、かつての惑星Ziの文明の二の舞になってしまうぞ！」

「あのゼログライジスを倒すにはもつと多くの仲間が必要だ。」

だが、クリスやクルーガーたち、俺たちに味方してくれる反ネオデスメタルの人たちはさっきのゼログライジスの攻撃で全滅してしまつた。

今の俺たちにはゼログライジスどころか、ネオデスメタル帝国軍に対抗出来る戦力はない。

ジェノスピノ、オメガレックスを倒したあのグラビティキャノンもドクターマイルスのゼロファントスに襲撃された基地にいたゴルドのものだったし…… どう転んでも今の俺たちに勝ち目はない！」

その時、カーター大佐が口を開き、

「だが、今回、殿下が見た研究所によると、帝国の一般兵である機械兵はゼロファントス開発とゼロファントスのライダーを造るために生み出され、人体実験までしているというならば、その実態を帝国中に知らしめれば、帝国国民たちも早々ギャラガー三世に賛同することはできないはずだ。」

「どうかな？ あの時、ゼログライジスの力を目の当たりにしたら、いくら帝国の実態を知ったとしても反抗することは出来ないだろう。」

その時、グラッドの通信機から通信が入り、

「ん？ 一体誰からだ？ 俺たち以外生き残っている者はいないはず…… 誰だ？」

「ここ、コマンダーですか!? 良かった。あの後、帝国に襲撃されたと聞いて探したんですが、ようやく見つけましたよ！」

「その声、クリスか!？」

それを聞いたウィルたちは驚愕した。

「むしろ、こっちの台詞だ！ お前たちこそ、ドクターマイルス率いるゼロファントスの襲撃に逢ったんじゃないか!？」

「実はあの時、クルーガーのゴールドが崩れた瓦礫の盾になってくれたおかげで何とか全滅せずに済みました。

ただ、やはり爆撃の影響で新帝国のビッグウイングが致命傷を負ったため、しばらく崩れた基地の中にいましたが、思わぬ援軍が来てくれて我々を助けてくれたんです!」

「援軍?」

「実はユリスに初めて会う前にグレッツゲル准将率いる帝国軍と戦っていたあのロボットたちが閉じ込められていた俺たちを助けてくれて俺のジャックやゴールド、ビッグウイング、他のゾイドも修復してくれたのでな!」

「何故、あいつらが?」

「詳しいことは言わなかったが、ゼログライジスとかいうゾイドが復活したから、我々も動かなければならないとか言って、修復の後、どっか行っちゃった。コマンダー、何か知っているんですか?」

「クリス、今すぐこっちに来てくれないか?」

「一体何があったんです? まさか、ネオデスメタルがZGと呼んでいるものって…」



「それは後で説明する。とにかくこちらの場所を特定してこちらに来ることは出来ないか?」

「発信器を便りにすれば、直ぐに来れますが、一体何処にいるんですか?」

「レッドケルベロス本社だ。」

「レッドケルベロス：ちよつと待つてください。コマンダー、そこつて確か、ネオデスマタルに加担している軍事企業では…」

「それも順を追って説明する。とにかく今はこつちに来い!!」

「わ、わかりました。」

ネオデスメタル帝国帝都メガロポリスの皇帝の宮殿、アツカーマン大佐とコナー少佐はベケット少将の命令によって南方総督府から離脱させられ、帝都メガロポリスに来ていた。

親衛隊兵士によって宮殿の倉庫に案内させられ、そこにはおびただしい数のゼロファントスと機械兵が量産化され、綺麗に整列していた。コナー少佐はそれを不機嫌そうな表情で見て、

「全ての軍が親衛隊に吸収され、オマケにこんなおぞましいゾイドや機械兵まで量産されるなんて、これでは我が帝国は完全に親衛隊の独裁になってしまいます。

しかも中将をこんなところに連れていくなんて侮辱にも程があります！ カーター大佐が離脱した理由がやっとわかりました。」

「よせ、コナー少佐。ここでそんなことを言ったら我々は反逆罪に問われるぞ！」

「しかし、中将！ 悔しくないんですか!？」

「私は帝国に生涯をかけた男だ！ 今はただ、現実を受け止め、従うしか道はない。この帝国がなかったら、今の私は存在しない。

例えば、帝国が間違った方向に向かおうともそれに従い、帝国のために死ぬのが私の生き方なのだ。」

「中将……」

「今の私は中将ではない。大佐だ！」

その時、ベケット少将が紫のラインが入った特殊スーツを着用したグレッツゲル准将とブリューゲル大尉、ナツシュ・オルドー大尉が現れた。

「ベケット少将、一体何のご命令で…」

「実はこの度、ギャラガー三世陛下からのご命令により、レッドケルベロス本社を叩けとの命令が出たので、あなたたちは私の直属の者と共に出撃することにしたのよ。」

「まさか、グレッツゲル准将たちと…」

「元四天王である北方総督グレッツゲル准将と前から親衛隊に所属し、機械化兵となつたオルドー大尉、そして同じく機械化兵にして元コルク総督ブリューゲル大尉。」

「き、機械化手術もされたんですが、新たに開発したゼロファントスに乗るためには機械兵とドクターマイルスがゼロファントスのバイオアシッドの毒の影響を受けないように開発した耐乙スーツが新たに導入されたのでね。彼らもゼロファントスのライダーになったのよ！」

ベケット少将が指指すと、そこにはドクターマイルスのゼロファントスの量産型にして、それぞれ、目の色と全身の色が緑、黄緑、紫の色違いのゼロファントスがいた。

「もちろん彼もね。」

「彼?」

その時、ガシニングシンと機械の足音がし、アツカーマン大佐とコナー少佐の後ろから、ウイルのシーザーとレイルのギルラプターエンペラーの連携攻撃によってステイレイザーG3と共に倒されたはずのアーミテージ大尉だった。

「あら、ようやく戻ってきたのね。どう？ 身体の調子は？」

「悪くはないな。それにこの金属の身体、まるでゾイドと一体化出来たようで、思う存分暴れられるな。」

アーミテージが振り袖と右腕の皮膚を引きちぎり、その腕は完全な機械の腕になっていた。アツカーマン大佐とコナー少佐はそれを見て驚愕する。

「ところで、俺の新しいゾイドはどれだ？」

「あれよ！ 皇帝陛下があなたのために用意したゼロステイレイザーよ！」

ベケット少将が量産型ゼロファントスの後ろにゼロファントスの2倍以上のサイズを持ち、ゼロファントスと同じカラーリングと紫のラインが入った巨大なステイレイザーだった。

「ほう、流石は皇帝陛下が用意してくださったゾイドだ。あれなら目一杯暴れられる。」

「今回の決戦で、あれで出撃しろとのご命令よ！ くれぐれも皇帝陛下の期待を裏切らないようにしてね。」

「へ、元より、あの時、俺をコケにしたあのわがまま皇子へ復讐してやるのだからな！」  
アーミテージ大尉はそのままゼロステイレイザーの元に行った。

「我がネオデスマタル帝国の最新技術を持つてすれば、一度死んだ人間でも脳と心臓  
どちらかだけでも残れば直ぐに機械化で再生出来るわ。 どう、あなたたちも手術受け  
てみたら？」

「ふ、ふざけ…」

前に出ようとするコナー少佐にアッカーマン大佐は待ったをかけ、

「いえ、我々は機械化せずとも帝国のために働きます。」

「いいわ。 いい心掛けね。 陛下は今回の鎮圧を最後の決戦にするのお考えよ。 今度

こそ、失敗は許されないわよ。 わかってるわね!？」

「もちろん、そのつもりです。」

それを聞いたコナー少佐は怒りと悔しさを抑え、拳を握りしめた。

ドクターマイルスの元を離れたリセルとデルはグラビティキャノンでジェノスピノ、オメガレックスを迎え撃つ戦場になった旧共和国首都ネオヘリックシティにいた。リセルは落ち込んだような表情でデルに話しかけた。

「デル、お前と会ってから、俺は今までずっとネオデスメタルへの復讐のために生きてきた。」

ところが、ウィルとシーザーがジェノスピノに勝つてから、俺はあいつに嫉妬してあいつを倒す執着心を持ってドクターマイルスに付いていった。

俺の本当の目的って結局なんなんだ？ それとも、俺がただ、復讐だけのこと考えてきたから、あいつに勝てなかったってことなのか？」

悩むリセルにデルは向こうを向き、リセルに何か見せたいように頷いた。そこにはバイザーを自力で破壊し、またはバイザーを片方無くしてネオデスメタル帝国から脱走し、野良ゾイドになったキャノンブルとラプトルがさまざまに迷っていた。そこに森から来た野生のラプトル、アンキロックス、ギルラプターがその野良ゾイドの近くに寄り、その野良ゾイドを自分たちの家族に迎え入れるような仕草を取り、野良ゾイドのラプトル、キャノンブルはその野生ゾイドを受け入れ、その後についていった。また、野生の

ハンターウルフもボロボロのキャノンブルを運んでいた。それを見たりセルは、

「そうだ！ 俺はただ、復讐とウイルとシーザーを倒すことに執着して自分を見失っていて、俺のやるべきことを忘れていた。」

「デルはリセルを見てうなずき、

「ありがとう、デル！ 俺の道はここしかない！」

リセルはデルに乗ってそのまま走り去った。

レッドケルベロス本社、クリスやクルーガーたち同盟軍と旧共和国、新帝国はビッグウイングで本社に辿り着き、クリスやクルーガーたちはグラッドやストームから全ての

ことを聞いた。

「ゼログライジス、かつてゾイドクライシス以後の地球を壊滅寸前に追い込んだ最強最悪のゾイド、そしてギヤラガー三世は一世の身体を得たデスザウラー。」

「信じられないだろうが、事実だ！」

「なるほど、それならあのネオデスメタル帝国があれだけの強大な帝国になった理由がそれなら説明は付く。それにしてもまさか、ネオデスメタル帝国に資金援助をしているレッドケルベロス社に加え、ネオデスメタル帝国軍の名将カーター大佐まで味方になるとは思わなかったよ！」

「今まであなたたちを苦しめた私を受け入れることは当然無理かもしれませんが、我々は殿下同様に間違った帝国を正すためにあなた方と手を組んだのです！」

その時、クルーガーがカーター大佐の前に立ち、

「私もあなたに賛成だ。我々同盟軍の目的はあくまで人とゾイドの共存、そしてこの世界を正しい方向に導くためだ。」

「クルーガー將軍、ありがとうございます。」

「私はむしろ君のような人と仲間になれて嬉しいよ。」

クルーガーとカーター大佐が握手するのを見たシーガル中將は、

「私は大反対です！ かつての真帝国の栄光を受け継ぐ我が新帝国がネオデスメタル



帝国の人間と手を組む等、あつてはならん！」

その時、シュバルツ中佐が立ち、

「シーガル中將、今はそんなことにこだわっていることではありません。ここでは帝国も共和国も関係ない。

これはこの星に生きる全ての命を守る戦いなのです！　いつまでも真帝国の栄光にしがみつくのは止めて下さい！

仮に新帝国が建国されたとしてもいつまでも真帝国の栄光にしがみつくようでは、またかつての過ちと共和国との戦争を繰り返すだけです!!

いい加減目を覚ましたらどうですか!?　それではいつまで経つてもあなたの家は負け犬として汚名を着せられるままです!!」

「ま、負け犬!?　この私と我がシーガル家が負け犬だとく！　侮辱は止めろ!!　貴様はアルドリツジ大佐の弟、黙って大佐に付いていけばいいのだ！　我が新帝国皇帝メルビル二世陛下もそれを望んでいるのだ！」

「シーガル！」

その時、声を上げたのはユリスだった。

「私もカーター大佐とシュバルツ中佐の考えと同じです！　今は帝国と共和国とで争う時ではありません。それに私はかつての過ちを繰り返したくありません！」

私の願いはこの世界から戦争を無くすことです。きっと私の先祖もそれを望んでいたはずですよ。だから、シーガル、お願いですよ！」

「ですが、メルビル二世陛下、これは……」

「これはお願いではありません。命令ですよ！ 新帝国皇帝メルビル二世である私の命令ですよ！」

エマもシーガル中將の前に立ち、

「お願いですよ！ 私からもお願いしますよ！」

エマとユリスの真剣な眼差しを見たシーガル中將は遂に逆らえなくなり、

「わ、わかりました。従います。」

それを聞いたアルドリツジ大佐は、

「中將！ 何を仰るのです!?」

「いくら我々でも新帝国皇帝陛下のご命令に従わなくてはいかんのだ。」

「アルドリツジも！」

「わ、わかりました。」

それを見たストームは、

「ようし、決まりだな！ じゃ、新帝国はカーター大佐の指揮下に入れよう。あのバカ共に新帝国は任せられんからな！」

「待て！ そんなことは断じて…」

「何か、文句でもある…？」

ストームの鬼のような睨み付けた形相にシーガル中将与アルドリッジ大佐はその氣迫に負け、タジタジとし、そのまま引き下がった。

「よし、これで同盟軍は纏まったな！ 後はネオデスメタルをどう迎え撃つかだ！」

「といつても、あのゼログライジスを迎え撃つのは厳しいかもしれん。ゴルドのグラビティキャノンはまだ後2発は残っているとはいえ、それで対抗出来るかどうか…」

その時、レッドケルベロス社のブラック社長が現れ、

「カーター大佐、大変です！」

「どうした？」

「ギヤラガー四世率いる親衛隊がこちらに向かって進行してきました。」

「規模はどれぐらいだ？」

「ゼロファントス部隊やドクターマイルスのゼロファントスの量産型や全ての親衛隊を含め、およそ数十万です。」

「やはり、こちらに味方が増えたことを想定して大規模な部隊を寄越したか！ ところで、ギヤラガー四世の乗るゾイドはオメガレックスか？」

「いえ、オメガレックスではありません。」

「オメガレックスじゃない？ まさか、ジェノスピノか!？」

「いえ、違います…」

「一体なんだ？」

「それが…全身紫色のデスレックスです!!」

レッドケルベロス本社に向けて進撃するゼロファントス部隊と四世親衛隊の先頭にはガネストが乗る全身紫色のデスレックスが歩いていった。

「凄い、凄い。乗っているだけでゾクゾクしてきたよ！オメガレックスですら可愛いぐらいだよ。」

それにしても、ボクの前世が操っていたデスレックスの真の姿に乗れるなんて夢にも

思わなかった。

これなら、もっと面白いゲームが出来るし、あいつを独壇場から引きずり落とすことも出来る。

あいつはボクの前世を取り込むためにボクを造ってボクを取り込もうとしているけど、そうはさせないよ！

皇帝はボクだ！ この世界と全てのゾイドはボクのものなんだからね。それじゃ、やるよ。デスレックス 紫龍。」

ギョオオオ！！

ガネストの言葉に応え、デスレックス紫龍形態は目一杯咆哮を上げ、レッドケルベロス本社にまで響き渡った。

To be continued

## 第48話「デスレックス紫龍」

レッドケルベロス本社、ウイルとストームたち同盟軍はデスレックス紫龍形態率いるギヤラガー親衛隊を迎え撃つ準備をしていた。

クルーガーとグラッドは、同盟軍や旧共和国、新帝国のメンバーたちの前に立ち、作戦を説明していた。

「敵は紫色のデスレックスを筆頭に元々の親衛隊に加え、ドクターマイルスが率いていたゼロファントス部隊を入れてその数およそ60万、だが、紫色のデスレックスの戦闘力は未だ未知数。

そこで、かつてジェノスピノやオメガレックスを迎え撃つた時と同様にグラビティキャノンでデスレックスを迎え撃つ作戦でいく。仮にあのデスレックスがジェノスピノ、オメガレックス以上だとしても、一発でジェノスピノ、オメガレックスの2体を沈めたグラビティキャノンなら、十分対抗できるはずだ！　そこで、以前同様、デスレックスと親衛隊を分離させ、デスレックスにグラビティキャノンを撃ち込む作戦にする。」

その時、ドレイクが口を開き、

「その作戦だが、少し異を唱える！　あの紫色のデスレックスはゼログライジスのゾ

イド因子を持ったデスレックスの真の姿の紫龍形態だ！」

「紫龍形態？」

「あれはおそらくデスレックスに眠るゼログライジスのゾイド因子が目覚め、デスレックスの本能が解放された最終形態だ。奴の全身の紫色が何よりの証拠だ。」

「俺の見立てが正しければ、あのデスレックス紫龍形態の戦闘力はジェノスピノやオメガレックス以上、いやむしろゼログライジスと同等だろう。」

いくら、ジェノスピノ、オメガレックスを一度倒したグラビティキャノンでもあれを倒すのは不可能だろう。」

「だが、今の俺たちにデスレックスを迎え撃てる最大の武器はあれしかない。」

その時、ストームも立ち上がり、

「いや、ドレイクの言うことに一理ある。俺の先祖はギャラガー一世のデスレックスと戦ったことがあるから、俺もデスレックスの脅威はよく知っている。ましてやあのデスレックスの最終形態だとすれば、デスブラストするとゼログライジスと並ぶ脅威になるかもしれない。」

となると、一番気を付けなければならないのは、やはり、あのデスレックスだ。」

「だが、そうになると、残りの親衛隊はどう対処する？ 中にはドクターマイルスが造ったゼロファントスもいるんだぞ。」

「となると、また陽動作戦を使うしかないな。」

「陽動作戦というと、以前、ジェノスピノ、オメガレックスを迎え撃った時に2体を別の場所に引き込み、残りの軍をそこに釘付けにする作戦か…」

しかし、あのギヤラガー四世が2度も同じ手に引つ掛かるとは到底思えん。しかも今度は真の姿になったデスレックス紫龍形態が相手だ。」

「いや、待てよ！ 四世の奴が一世の生まれ変わりで性格も同じだとすれば…」

なあ、ストーム、同盟軍やその面々の皆さんよ。この作戦、俺に任せてくれないかな？」

「自信はあるのか？」

「なあに、奴のことは俺が一番よく知っている。」



デスレックス紫龍形態とベケット少将のドライパンサーG3、機械化で復活したアーミテージ大尉のゼロステイレイザー率いる四世親衛隊と三世親衛隊によるゼロファントス部隊はレッドケルベロス本社に向けてゆつくりと進軍していった。デスレックス紫龍形態を見たベケット少将は、

「陛下、遂に真の姿になったギャラガー一世陛下のデスレックスに乗ることが出来ておめでとうございます！ これで反乱軍を用意に鎮圧することが出来ますね。」

「ああ、そうだね。ゼログライジスを手に入れることは出来なかったけど、このデスレックス紫龍形態があれば、ボクが世界最強だと証明することができる。」

そして、洗脳が甘かったウルフのライダーのおかげで、楽しめなかったゲームを再び再開することができる。オリジナルデスメタルキーも手に入れたし、早くデスブラストしてこいつの力を存分に味わいたいよ！」

デスレックス紫龍形態率いるギャラガー親衛隊がレッドケルベロス本社のある都市の前まで来たその時、ドレイクのジャン率いるレッドケルベロス社のバイザー無しのラプトルやキャノンブル初めの兵器ゾイドに新帝国、旧共和国のゾイドたちが現れた。それを見たベケット少将、アーミテージ、ガネストは、

「なんですの、あのギルラプターは？ あんなの反乱軍にいましたか？」

「確か、どつかで見たことあるような…」

「ボクは知っているよ！ 確か春菊の…」

「瞬撃のドレイクだ!! わざと言ってるんだろ、てめえ！」

「皇帝陛下に侮辱は許しませんよ！」

前に出ようとするドライパンサーG3に対し、ガネストは待ったをかけ、

「いいよ！ 手を出さなくて、ところで、何しに来たの？ ドレイP。あのライ

ガーはどうしたの？ ボク、あいつに用があつて来たんだけど。」

「それが、残念なことに全員、俺にやられちまってね。」

「やられた!? いくら、元旧デスメタル四天王のそのギルラプターといえども、先帝陛下のジェノスピノを倒したあのライガーを倒したですって！ 冗談は止めなさい。」

「冗談ではないさ！ 俺は元から、あいつらの考えには賛同しなかったから、それで反抗したあいつらを俺が倒したのさ。」

「証拠はあるのかしら？」  
パチン！

ドレイクが指を鳴らした時、ラプトールが巨大なカーゴを持ち、開いたら、中にはポロポロになったライガーの足があった。

「この通り、ライガーは俺にやられ、そして、旧共和国と新帝国は今や、俺の配下になったというわけだ。

といつても、俺は貴様らネオデスメタル帝国に従うためにやったわけじゃねえ。あいつらのやり方は気に入くないが、かつて俺の相棒の兄弟を殺し、先祖も旧デスメタには何度も酷い目に逢わされた。当然、貴様らと手を組む気はさらさらしない！」

「じゃあ、何がしたいの、ドレイク？」

「それは貴様もわかってるだろう？ 貴様は俺の先祖との戦いで死んだはずのギャラガー一世のクローンにして、しかもその生まれ変わり、だとするなら、一世はお前という存在として生きている。

つまり、先祖の復讐はまだ果たしていない。だから、先祖の復讐を俺の手で果たす!!」

「愚かね。いくら、あんたでも陛下どころか、あたしたちの足元すらも及ばないわ！ あたしたちは皇帝陛下を護衛する精鋭なるギャラガー親衛隊、旧デスメタル四天王とは格が違うのよ！」

「そうだ！ あいつは俺に任せてくれないか？ セツかく復活した身体とこのゼロス  
テイレイザーの力を試すいい機会になりそうだ！」

しかし、再びガネストはベケット少将とアーミテージ大尉に待ったをかけ、

「いいよ！ キミたちは手は出さないで。」

「しかし、陛下！」

「ライガーを倒したって言うなら、相当、腕を上げたんだよね？ ドレイP。」

「当然だ！ 俺はかつての先祖を遥かに上回るレベルに到達したんだからな！」

「へえ、それは楽しみだ！ かつてのボクの前世の部下で、瞬撃の異名を持つキミと  
戦えるなんてね。しかも真の力を得たこのデスレックス紫龍の力を試すことも十分出  
来る。そうでしょ？ デスレックス。」

グルル…

ガネストの問いに応えるようにデスレックス紫龍は静かにうなずいた。それを見た  
ジャンは少し怯え、

「心配するな。お前は強い。かつての俺の先祖と一緒にいた時よりずっと強くなつて  
いる！ この戦いで、パワーアップしたのがストームとキングだけじゃないってことを  
教えてやろうぜ！」

ジャンはドレイクの言葉を聞いてうなずく。

「それじゃ、始めようか。」

「おっと待った！」

「どうしたの？」

「俺の相手はあくまでお前だ。その後ろにいる腰巾着に用はないし、まとめて掛かって来たら、フェアじゃないからな。」

それを聞いたベケット少将とアーミテージ大尉は、

「腰巾着だと！ 舐めたこと言ってくれるわね。偉大なるギャラガー皇帝陛下に仕える我ら親衛隊を侮辱することは即ち、陛下を侮辱するに等しい。あなたのその態度、万死に値するわ！」

「そうだね。確かにそれは言えてるね。いいよ！ キミとの一騎討ち、受けてたつよ。」

「陛下！」

「だってこの方が面白いんじゃない！ それなら、せつかく復活したデスレックスの力を存分に味わえるし、全員で掛かったら、デスレックスの力を発揮出来ずにドレイプ直ぐやられちゃうから、面白くなくなっちゃうしね。」

それを聞いたドレイクはニヤリとし、

「よし、いいぞ。いくら、奴でもやはり、この手に乗らん訳にはいかないからな。」

よし、では、早速、復讐ゲームの始まりといこうか。

と、その前に、後ろの取り巻きのお前らはもう少し下がっててくれないかな？　いくら、お前らでも、デスレックス紫龍がともに戦ったら無事じゃすまないだろうし。」

「ホントに無礼な奴ね。あんな奴の先祖が元旧デスメタル四天王だと思おうと虫酸が走るわ！」

「出来れば、俺の手で葬りたかったが……」

「まあ、いいでしょ。どうせ、ボクが葬るわけだし。さて、ドレイP、かつて旧デスメタル四天王にして、瞬撃の異名を持ったキミの実力見せてもらおうよ。」

ドレイクはスツとゾイドキーを取り出し、

「俺の先祖はかつて元旧デスメタル四天王としてワイルド大陸にその名を轟かせた男、だが、その血を受け継いでも俺は誰でもない、俺自身だ。」

だからといって、先祖と同じ異名を名乗る訳にはいかねえし、先祖に申し訳ねえからな。敢えてつけるとしたら、今の俺は……音速のドレイクだ!!

猛れ、ジャン！　俺の魂と共に、進化 解放！　エヴォブラストー!!　新・瞬極殺!!」

「ん？　地面に潜っただと。あんなわざわざ、あの甘ちゃんの兄貴のギルラプターエペラーにもない技だ。へえ、これは面白そうだ。」

その時、デスレックスの背後から地面に穴が空き、

「そこか！」

デスレックスは尻尾でジャンを振り払おうとするが、ジャンは瞬時に避け、デスレックスの顔に一撃を噛まし、また地面に潜って地面から出ては、デスレックスの攻撃を避けながら、デスレックスを攻撃した。デスレックスはジャンを捕らえることが出来ず、そのままジャンの攻撃を受ける。

「瞬極殺、これは瞬極殺、音速殺とは違う、ギルラプターのもう1つの技、それは自身の鍵爪とスピードを生かし、地面に潜りながら、相手を攪乱させる技だ。

しかも、俺のジャンは200年の歳月を経て、元々同種だったソニックバードと同様の足に発達して進化を遂げた。そして、先祖の相棒になっていた時の力も加え、更にスピードが格段に上がった。そのスピードはソニックバード以上、いくら、貴様でもこの攻撃を読むことは出来ない！」

攻撃を止め、その場に立ったジャン、

「どうだ？」

しかし、デスレックス紫龍はあれだけの攻撃を受けても身体の何処にも傷1つ無かった。コクピットにいるガネストは首をカクカクし、

「ん〜、いい攻撃だったけど、その程度なの？」

「今の攻撃、並みのゾイドなら、喰らった瞬間、即死のレベルで、実際、キャノンブルとバーストルの二個中隊をあの技で全滅させたことがあるのに、やはり、流石は真の力を得たデスレックス、この程度の攻撃じゃ、準備運動にもならんか。」

「どうしたの？ もつと来てよ！ それとも、怖じ気ついたの？」

デスレックス紫龍はその巨体にはそぐわない大ジャンプをし、ジャンを踏み潰そうとした。ジャンは間一髪で避け、

「やはり、最初から跳ばした方が良さそうだな。行けるか？ ジャン。」

グオオ〜!!

「よし、行くぞ、進化 極限 解放!! 新・音速殺!」

極限解放でリミッターを解除したジャンは目にも止まらぬスピードで、デスレックス紫龍に襲い掛かった。

デスレックス紫龍はその攻撃をもろに受け、少し怯んだ。

「流石にあの一撃は効いたようだな。もう一発喰らえ!!」

しかし、ジャンがもう一度攻撃を当てようとしたその瞬間、デスレックス紫龍は前足でジャンを掴んだ。

「何!?!」

「確かにさつきより、いい攻撃だったよ。でも、それでもボクとデスレックスを満足さ



せる程ではないね！」

デスレックス紫龍はそのまま掴んだジャンを放り投げた。

「がはあー！」

デスレックス紫龍はその巨体にそぐわないスピードで、ジャンの方に向かって走っていった。ジャンは持ち前のスピードで、その攻撃を避けるが、デスレックス紫龍の尻尾に風ぎ払われてしまう。それを見た親衛隊兵士は歓喜を上げた。

「ウオー!! 皇帝陛下万歳! ギャラガー四世陛下万歳!!」

「流星は皇帝陛下、所詮元旧デスメタル四天王すらも対した問題ではなかったよね。」

「ふ、俺の力を見せることが出来ないのは残念だが、陛下がゆつくりとあのクズを料理するのを見るのもまたいいかもな。」

デスレックス紫龍はゆつくりとジャンに近付いていった。

「パワーアップした力は伊達じゃないけど、どうやら、ボクとデスレックスの闘争本能を呼び覚ます程ではなかったようだね。」

あのライガーを倒すって言ってたから、期待してたのに、とんだ期待外れだね!

じゃあ、バイバイ。デスレックス、殺っちやって!」

ギユオオ〜!!

デスレックス紫龍は目一杯咆哮を上げ、ジャンを食べようとしたその時、ズドン!!

突然、大砲の音がし、謎の影がジャンを拾い、その場を離れ、デスレックス紫龍はその大砲の弾を喰らった。デスレックス紫龍の回りには巨大な重力が発生した。

ベケット少将とアーミテージ大尉が向こうを見たその時、レッドケルベロス本社のビルにグラビティキャノンを装備したゴルドの姿があり、放たれたのはグラビティキャノンだった。そして、ジャンを助けたのはギルラプターエンペラーで同時にシーザーやキング、レックスにジャックら同盟軍の精鋭ゾイド、ユリスのレナ、スミスのグソックラスレイマーズのゾイドたちが現れた。

「まさか、奴は囷だったのか!?!」

ジャンのcockピットの中で目を覚ましたドレイクはギルラプターエンペラーを見て、  
「済まなかったな。本来、俺が守るべきはずだったお前に助けられるなんてな。」

「何言ってるんだよ! 僕は男だ。それに帝国の皇子だから、俺が助けなきゃ!」

「その通りだ! 早いところ、この戦いを終わらせてもう一度フリーダム団のような自由な旅を始めるんだ。そうだろ? ウイル。」

「はい、ストームさん。俺は人々とゾイドを守るために戦う。そのためにお前たちを倒す。」

グオオ〜!!

ウィルの言葉にシーザーは思いっきり咆哮を上げる。

「だが、どういうことだ？ あのライガーの足は間違いなくライガーの足だったはずだぞー！」

ベケット少将の疑問にドレイクは、

「そうだ！ あれは間違いなくライガーの足だ。だが、ここにいるキングとシーザーではない。そもそもキングとあのデスレックスは通常種の突然変異種、ゾイドクライシス時の地球では複数体いたが、それが絶滅し、辛うじて残った化石をダミーにしたのさ！」

「く、あたしとしたことが不覚！ 反乱軍の罠に掛かるなんて！ それより、陛下、陛下を！」

ベケット少将はグラビティキャノンを喰らったデスレックス紫龍の元に向かうが、親衛隊兵士が待ったをかけ、

「危険です！ ベケット少将、あのグラビティキャノンの重力を喰らったら、少将でもただではおきません。」

「ぐ、ウオ〜!!」

しかし、デスレックス紫龍はグラビティキャノンを食らいながらも尚も自力でその重

力に耐え、足元が地面に食いついた。それを見たクルーガーは、

「まさか、グラビティキャノンの重力を食らいながらも自力でそれに耐えるなんて初めてだ！」

デスレックス紫龍は自力でグラビティキャノンの重力を押し戻そうとするが、押し戻すことが出来ず、そのまま地面にのめり込んでしまう。

「う… く… ヌウオ〜!!」

ガネストは最後の力を振り絞ってかつてギアラガー一世がデスレックスをデスブラストさせたオリジナルデスメタルキーを取り出す。しかし、そのままデスレックス紫龍は地面に埋もってしまった。

「陛下!!」

デスレックス紫龍が埋もれたのを見たグラッドは、

「流石はグラビティキャノン！ あのデスレックスすらも倒した。となると、残りは親衛隊だな。今の俺たちは万全の状態だ。覚悟しろ！」

「皇帝陛下を倒した罰受けてもらおうわよ！」

「今度こそ、ネオデスメタル帝国の最後だ！」

「デスレックス、強制 解放！ デスブラストー!!」

その時、ガネストの声と共に地面から赤い衝撃波が放たれ、地面にひびが割れ、地面

が割けていった。同盟軍や親衛隊のゾイドが後退りする中、なんと、中からデスブラストしたデスレックス紫龍が現れた。デスレックス紫龍の装甲には少しの傷しかなかった。それを見たクルーガーは驚愕し、

「そんな、まさか、グラビティキャノンをもともに受けてそれを自力で耐えるゾイドがいるなんて!!」

コクピットの中のガネストは首をカクカクと鳴らし、

「いや、今のは危なかったよ! でもね、地面に潜り込む瞬間、デスブラストしたおかげで、ボクもデスレックスも無事だったよ。

まさか、デスレックス紫龍の力がこれ程だったとはねえ…ジエノスピノやオメガレックス以上の最高のオモチャだ。後それと今の攻撃で、デスレックス…相当ブチギレてるよ!」

グロロオオ〜!!

咆哮を目一杯上げ、怒りを顕にするデスレックス紫龍、

「流石は皇帝陛下! もはや、我々に敵う者はいません。」

「おっと、まだ手は出さないで… もう少し一人でやりたいんだよ。前の戦いで思う存分楽しめなかった分楽しみたいからさ!」

「相変わらずですね、陛下は。」

「陛下が楽しめるなら、俺もそれで十分だ。そして、後でじっくり残りの連中を俺が料理してやる。」

「行くよ、デスレックス紫龍！」

シーザーたちの前に走りよるデスレックス紫龍、

「来るぞ、皆、ワイルドブラストだ！」

全員がワイルドブラストしたその時、デスレックスはシーザーに口内のウブラドリルを当てようとする。シーザーはすかさず、Eシールドを展開し、攻撃を防ぐが、デスレックスはデスジョーズでそのままシーザーを捕らえる。ウブラドリルでシーザーのEシールドを貫通させようとするデスレックス、

「大丈夫か!? シーザー、」

「今行くぞ、ウィル! ドレイク、最初から跳ばすぞ!!」

「言われなくても分かっているよ!」

「キング、進化 極限 解放!」

「ジャン、進化 極限 解放!」

「キングオブクローブラスト!!」

「新・音速殺!!」

キングとジャンの同時攻撃がデスレックスに直撃するその瞬間、デスレックスは両前足でキングとジャンを掴んだ。

「何!?!」

「バカな!?!」

「うゝん、どっちもいい攻撃だね! でも、勘違いしないでよね。今のボクとこのデスレックスはボクの前世よりずっと強くなっているからね。」

デスレックスはそのまま掴んだキングとジャンを向こうに投げた。直ぐ様態勢を変え、ダメージを軽減するキングとジャン、

「く、どうやら、俺たちが思っている以上に手強いようだな。」

「何、ちよつと落ち込みモードになってやがる! 俺とお前の先祖はあのデスレックスに一度勝つたんだぞ! いくら、奴がどれだけパワーアップしようが関係ねえ。それに俺たちだつて先祖より更にパワーアップしている。先祖が出来て俺たちに来ないわけがない!」

キングもジャンもドレイクの言うことに賛同するようにうなずいた。

「そうだな。ちよいと、デスレックスの力に圧倒されちまったようだぜ! フリーダム団の力をもう一度あいつに見せてやろうぜ!!」

「悪いけど、キミたちはそこで見ててくれないから、ボクはこのライガーに用があるん

だ。キミたちとの相手はその後だよ。」

デスレックスはウブラドリルでシーザーのEシールドを無理やりこじ開けようとするが、シーザーは必死に抵抗する。

「ウイル、ギルラプター！」

レイルのギルラプターエンペラーがシーザーを助けに行こうと、後方から回って後ろからコクピットを狙おうとする。

「新・音速殺!!」

しかし、デスレックスはギルラプターエンペラーを尻尾で風ぎ払う。

「シーザーを離しなさい！」

狙撃仕様として改造させたユリスのレナがデスレックスに向けて、兄のパウルスから習った持ち前の腕で、デスレックスのデスジョーズを撃ち込んだ。しかし、デスジョーズは傷一つ付かない。同時にカティアのベティがデスレックスのデスジョーズを攻撃しようとする。

「このお〜!!」

デスレックスは前足でベティを掴み、そのままレナの方に向けて投げつけた。

「きゃあ!!」

「ドレイク、尻尾と前足の届かない太ももに攻撃するぞ！」



「OK！」

「キングオブクローブラスト!!」

「新・音速殺!!」

しかし、デスレックスは身体から赤い衝撃波を放ち、キングとジャンを振り払った。

「くそ、隙がねえ。」

「ふん、さて、後、何分耐えられるかな〜?」

デスレックスのウブラドリルがシーザーのEシールドを貫通しようとしたその時、

「シーザー、あれやれるか?!」

グオオ〜!!

「よし、行くぞ、シーザー! スピリットガンズラッシュ!!」

シーザーはA-Zグレネードランチャーをデスレックスの目に向けて発泡した。目

を撃ち抜かれ、苦しむデスレックスはデスジョーズを解き、シーザーを離れた。

グロロオ〜、グロロロロ〜!!

「目潰しとは、随分アジな手を使うね〜。でも、余計にデスレックスを怒らせただけみ

たいだよ!」

グロロオ〜!!

怒りを顔にしたデスレックスはシーザーに襲いかかった。近くにいた同盟軍、旧共和

国、新帝国の一般兵士のゾイドがデスレックスに向かってかかっているが、デスレックスは身体からの赤い衝撃波とジェノサイドドリルで、一瞬で殲滅した。デスレックスは巨大な足でシーザーを踏みつけようとし、シーザーは再びEシールドでそれを防ぐ。

「前はオメガレックスだったけど、今度はどれだけ耐えられるかな？」  
キングたちが助太刀に行こうとするが、

「おっと、それ以上近付いたら、このライガーは一瞬でペチャンコになるよ！ それでもいいの？」

それを聞いて身動きが取れないストームたち、それを見たグラッドは、

「くそ、俺も行くしかなさそうだな！ 行くぞ、レックス！」

しかし、レックスの前にドライパンサーG3が立ち塞がった。

「あなたの相手は私よ！」

「お前は親衛隊のベケット少佐か！」

「今はベケット少将よ！ 三世陛下の復活のおかげで、あたしは親衛隊の隊長となったのよ。」

「は、お前ごときが少将だと？ 笑わせてくれるぜ！」

「試してみる？」

「やってやる！ ファイルガトリング!!」

レックスはドライパンサーG3にガトリングを撃ち込むが、ドライパンサーG3は瞬時に避ける。

「何!?! どこ行つた?」

「ドライスラッシュ!!」

それに気付いたグラッドはすれすれでドライパンサーG3の攻撃を避ける。

「よく避けたわね。」

「へ、こちとら、貴様らの帝国の元軍人として、レックスと共に戦場を潜り抜けた男だ! 親衛隊のアマなんかには負けはしねえよ!」

「そうかしら?」

ドライパンサーG3は音速に近い速度を出してレックスを攻撃する。レックスは避けようとするが、避けきれず、装甲に傷が付いてしまう。

「どう? 親衛隊とただの軍人のあんたじゃ、ここまで差があるのよ!」

アーミテージ大尉の操るゼロステイレイザーが次々と旧共和国、新帝国のゾイドを蹴

散らす中、ケンのゼル、アレックスのウィーリィー、アツシユのバンプ、そしてスレイマーズのゾイドたちが現れた。

「貴様の相手は我々だ！」

「ほう、この数が相手なら、十分にこのゼロステイレイザーの力を試せるな。」

「えらいデカいステイレイザーだな。」

「感心してる場合じゃないぞ、アレックス！」

「しつかし、何でこいつが生きてるんだ？ 確か、ウィルとレイル坊っちゃん倒したはずなんだが……」

「理由は関係ない。とにかくこいつを倒すぞ！」

「よっしゃ、もう一度、スレイマーズの底力を見せてやるぜ！」

「虎振!!」

「弾丸鈍波!!」

「金剛旋撃衝!!」

「ヘキサストラッシュ!!」

「四連蟹鋏!!」

「リッパージェツ!!」

「ヒット&デス!!」

ゼル、ウィーリイ、バンプ、スレイマーズのラプトリア、クワーガ、ラプツール、スコーピアが一齐にゼロステイレイザーを攻撃する。しかし、ゼロステイレイザーはバリアを張り、ゼルたちの攻撃を全て弾き返した。

「ぐわ、なんだ、あれは？」

ゼロステイレイザーが張ったバリアはなんとEシールドだった。

「あいつ、シーザーみたいにEシールドを張れるのか!？」

「どうした、その程度か？　なら、こちらの番だ！　ゼロステイレイザー、原始 解放  
！　ゼロプラストー!!　ゼロプラズマウォール！」

コクピットのアーミテージ大尉とゼロステイレイザーの身体が紫色に発光し、そのままゼルたちに向けて突進した。ゼロステイレイザーのレクトフリルをもろに受け、ゼルたちは勢いよく吹っ飛ばされてしまう。

「今のはかなりヤバイダメージだぜ！」

「い、今ので結構いいもん貰っちゃった！」

「う、うーん。ん？」

その時、攻撃を受けたゼルたちの身体が段々、紫色に侵食していった。

「こ、これは!?!　まさか、コマンダーが言ってたバイオアシッドの毒か！」

「その通り、俺のゼロステイレイザーは元のステイレイザーG3をベースにゼロファ

ントスと同様、ゼロゾイド西田のさ！ これを食らったら、最後、バイオアシッドの毒に侵され、段々とそのゾイドを死に至らしめる。さて、後何分で死ぬかな？」

ゼルたちの身体の半分まで侵食していくバイオアシッドの毒、

「おいおい、嘘だろ！」

「だが、俺はゆっくり待てない性分なんでね。もう一度食らわせて終わりにするぞ！  
ん？」

その時、ゼロステイレイザーが突然動かなくなり、下を見ると、足元がクモの糸で封じられた。そして同時にキールが現れ、

「残念だったな。俺もいるんだよ！」

キールの登場と共に、空中からジャックもゼロステイレイザーに向けて撃ち込んだ。

「ケン、アレックス、アッシュ、スレイマーズ！ 助太刀に来たぞ。」

「隊長!!」

また、地面から、ドクタースマイスの黒いグソックが野生のグソックと共にゼロステイレイザーを攻撃した。

「お前たちはリーダーのワシが助ける！」

「リーダー!!」

「そして、この活躍で、殿下やエマちゃん、ユリスちゃんの元に行くのだ!!」  
それを聞いてずっこけるスレイマーズ、

「ち、雑魚があゝ!!」

デスレックスに踏み潰されようともEシールドで必死に抵抗するシーザー、キングやジヤンもデスレックスに攻撃しようとするが、デスレックスが放つ赤い衝撃波で中々近付くことが出来なかった。デスレックスはオメガレックス以上の力で、シーザーを踏み潰そうとする。

「どうやら、流星のキミも終わりみたいだね。」

シーザーのEシールドが破れそうなその時、

ドドン!!

突然、何処からともなく大砲の音がし、その弾がデスレックスの足やドライパンサーG3、ゼロステイレイザーに直撃した。攻撃で足を崩すデスレックス、シーザーは直ぐ様、そこから脱出した時、目の前に黒い影が現れ、デスレックスの前に立ち塞がった。黒い影の正体はなんとデルだった。

「リセル、デル!」

「すまない、ウィル、リーダー、コマンダー、ユリス、皆遅れてしまったな…」

ユリスもデルを見て、歓喜の表情を上げた。

「リセル……良かった。」

デルを見たガネストは、

「ああ？ キミは確か、ドクターマイルスに洗脳されてジェノスピノに乗ったが、ボクの楽しいゲームを邪魔してくれた役立たずだね！

処罰を恐れて逃げていったと思ったら、まさか、反乱軍に再び寝返るとはね。

でも、残念だったね！ 今のボクのオモチャはオメガレックスより強いデスレックス紫龍だからね。キミなんか、ボクの敵じゃないんだよ！」

デスレックスがデルにも襲いかかろうとしたその時、複数の大砲の音がし、全ての弾がデスレックス初めの全ての親衛隊に直撃した。ガネストやベケット少将らが辺りを見渡すと、周りの山の上には、かつてウイルたちと共闘したロボットの将軍が操る赤いトリケラドゴスとそして、牢屋で知り合ったマツクの黒いトリケラドゴスとその他のロボットたちの乗るゾイドの陸上部隊。

そして、空中にはミクロラプトル種のゾイドを筆頭にバイザー無しのスナイプテラ、カプター、クワガ、ソニックバードの大群もいた。大将であるロボットの将軍は、ガネストら親衛隊たちに向かって、

「ネオデスメタル帝国の者共よ！ これ以上、地球に災いをもたらすゾイドを復活させ、戦闘を続けるようであれば、地球の番人たる我々が鉄槌を下す。直ちに立ち去れ!!」



「ボクに逆らう気？ いいよ。全員まとめてかかってきてよ！」

「いいだろう！ 我々の力思い知らせてやる！ 全軍撃てー!!」

ロボットの將軍のトリケラドゴス率いる陸上部隊とミクロラプトル種のゾイド率いる空中部隊が一齐に砲火を浴びせ、デスレックス率いる親衛隊ゾイドは雨のように降り注ぐ砲火を食らって反撃しにくい状態となっていた。

「く、たかが機械人形ごときに我がネオデスマタルが……」

「少将、これは我らに分が悪いです。一旦撤退して態勢を整えた方が！」

「し、仕方ない。陛下！ ここは一旦徹底を！」

「ふくん、」

しばらく考えたガネストはデスレックスを見て、

「デスレックス、今の攻防でさつきよりやる気が無くなってるから、これ以上、戦闘を続けてもデスレックスの闘争本能は上がらないかもね。まあ、いいや！ 次のゲームに移行しよう。」

そう言うと、デスレックスは後ろを向いて走り去り、ドライパンサーG3やゼロステイレイザーら親衛隊もその後について撤退していった。

宮殿の玉座の間でその様子を見ていたドクターマイルスとギヤラガー三世は、

「どうやら、紫龍形態になってもまだ完全にデスレックスの闘争本能を解放させることは出来ないようですね。」

「まあ、いい。デスレックスは戦いを続ければ、戦い続ける程、闘争本能は更に増していく。」

「しかし、わざわざデスレックスが出ずともあなたが出れば、容易に制圧出来るのでは？」

「いや、私が出るのは、デスレックスが闘争本能を完全に解放した時だ。今はデスレックスの闘争本能を完全に解放するまで、このままデスレックスを奴等と戦わせる。」

そして、その時こそ、私とゼログライジスはかつて惑星Ziで復活した時以上の力を得て更に進化するのだ。」

ギヤラガー三世の不敵な笑みと共に玉座の間の後ろにいるゼログライジスの目が赤

く不気味に発光した。  
T o b e c o n t i n u e d

## 第49話「二大破壊龍を奪還せよ」

レッドケルベロス本社、デスレックス率いる親衛隊をリセルのデルとかつてのロボットの救済で何とか退けたウイルたち同盟軍、リセルはデルから降り、ウイルたちの前に立った。

「皆、後免… 俺、皆に凄く迷惑をかけて…。」

ウイルたちに頭を下げ、謝罪するリセルの前にユリスリセルの前に立ち、

「もういいの… あなたが無事に戻って来てくれただけでも私は嬉しいの。」

「ユリス…」

ユリスはそつとりセルを優しく抱きしめ、それを見てニヤニヤしたグラッドは、

「そうだ！ 一度、敵に寝返つてもお前は俺たち同盟軍の仲間だ！ それに、お前がなくなつたら、ユリスが悲しくなるからな！」

リセルは赤面し、

「コマンダー、からかわないでください!!」

「それと、俺からも謝つとく。お前の世話役でありながら、お前のことを見てやれなくて… すまなかつたな。」

「いえ、元はといえば、俺のせいですから。」

その時、かつて、ウィルたちと戦い、救ってくれたロボットの将軍とミクロラプトル種のゾイドに乗っていた元老院議員や兵士たちがウィルたちの元に向かった。将軍たちを見たストームはグラッドに、

「ところで、グラッド。このロボットたちは誰だ？」

「あ、ストームは会っていないかったのか！ 実は彼らはユリスと会う前にネオデスマタルの襲撃の時に会って共闘してくれたロボットたちだ。俺たちと同じ人とゾイドの共存を目指す者たちだ。」

「そうだったのか！」

「君が噂の同盟軍の指導者か。私はロボトピア共和国軍の最高指令ガルド將軍だ。」

「ん？ 俺のことを知っているのか？」

「ドレイクが世話になってっていると聞いていて…。」

それを聞いたストームはドレイクの方を向いて、

「ドレイク、彼らを知っているのか？」

「ああ、実は俺がドクターマイルスに追われているところを助けてもらって、あの別荘を設計してくれたんでね。実はあいつらに報告したのも俺なんだ。」

「それならそうと、何故、そのことを俺たちに教えなかったんだ？」

「ネタバレしたら、面白くないだろ。」

「たく、ホント、そういうところは相変わらずだな。」

ガルド將軍はウイルの元に行き、

「ウイル、随分とたくましくなりましたね。」

「いや、そんなことないよ。俺はただ、皆やゾイドのために戦っているだけだから。」

「あの時、君と出会えたおかげで、我々の進むべき道を見つけることが出来た。改めてお礼を言う。」

「いや、そんな…」

「さて、我々はこの星とゾイドたちを守るためにゼログライジスを復活させた帝国を倒すために君たち、同盟軍と全面的に協力することになった。グラビティキャノンはい々の技術力で補給する。他の装備も我々に任せてくれ！」

「とはいえ、帝国にはゼログライジスの他にあのデスレックスまでいる！ゼログライジスを倒す前にあのデスレックスを倒さなければ俺たちに勝ち目はない。」

「なら、方法がある。」

「一体なんだ？」

「ジェノスピノとオメガレックスをこちらの戦力に加えるのだ。」

「しかし、あの2体は…」

「ギヤラガー三世と四世がゼログライジスとデスレックスに乗り換えてから、あの2体は乗るライダーが未だ不在でお蔵入り状態だ。その隙に2体を我々の手奪還する。」

「しかし、ジェノスピノとオメガレックスは帝都のど真ん中にある宮殿にいる。奪還するには帝都を襲撃する必要がある。」

「またもに帝都メガロポリスを襲撃することは不可能でしょう。なら、その2体を帝都から離れさせなければ、」

「とはいえ、一体どうやって帝都から離れさす?」

帝都メガロポリスの宮殿の倉庫に保管されているジェノスピノ、オメガレックスの修

理は完全に終了していた。調整を行っている2人の兵士は、

「なあ、聞いたか？ 皇帝陛下のデスレックスが反乱軍を滅多うちにしたらしい。その後、機械人形の加勢で一時撤退したが、反乱軍にはかなりの大打撃だったそうだ。」

「そうか… となると、この2体ももう使い物にならなくなったな。」

「ところで、この2体は誰が乗るんだろうな？」

「さあな、ゼロフロントスに乗るための耐Zスーツがあるから、それを着用すれば、誰でも乗れんこともないが、元々陛下たちのゾイドに乗るのは畏れ多いしな。」

「となると、破棄されるのか？」

「ま、そうなるな。」

「もったいないな。帝国であれだけ名声を表したのに…」

「ま、使い物にならなくなったら、仕方ない。」

「てことは、デスレックスの餌にされるのか？」

「そうなるな。反乱軍の手に渡ったら、厄介だからな。」

時同じくして宮殿の玉座の間では、捕獲した野生ゾイドと破棄された帝国の兵器ゾイドから次々とゾイド因子を吸収し、石化されたゾイドを踏み潰したり、押し潰したり等の破壊をしているゼログライジスを窓越しで見ているギヤラガー三世の話を聞いたドクターマイルスは、



「何ですと！ ジェノスピノ、オメガレックスを帝都から南方総督府に移送させて、そこで、反乱軍を迎え撃つということですか…」

「そうだ。」

「何ゆえ、そのようなことを…」

「デスレックス、ゼログライジスが復活した今となつては、もうあの2体に用はない。それにデスレックスの闘争本能を完全に解放するためにはあの2体と戦わせるしかない。」

「まさか、わざと反乱軍に渡すのですか？」

「生半可なゾイドでは、デスレックスはそう簡単には目覚めん。」

「わざわざ、そんなことをせずとも、あの2体をデスレックスの餌にすればよろしいのでは？」

「反乱軍に敢えて希望を与え、それが真の絶望だということを奴等に知らしめるのだ。」

そして、デスレックスの本能が解放された時、ゼログライジスは更なる進化を遂げ、反乱軍は確実に勝てない絶望を味わうのだ。」

「なるほど、そういうことですか。」

「早速準備をしろ。指揮はお前に任せる。」

「了解しました。」

レッドケルベロス本社、ウィルたち同盟軍とガルド將軍率いるロボット国家メカトピア共和国軍の幹部たちはジェノスピノとオメガレックスを帝都メガロポリスから離れさせ、作戦会議を行う中、兵士が現れ、

「リーダー、コマンダー、たった今、情報が出ました。ジェノスピノとオメガレックスが帝都メガロポリスから南方総督府に移送されるとの情報です。」

「ジェノスピノとオメガレックスを南方総督府に？ 何で、わざわざあの2体を帝都から移送させる意味がある？」

「それはわかりません。」

「罠の可能性もありそうだが、これを利用しない手はなさそうだな。ストーム。」

「そうだな。どちらにせよ、あの難攻不落の帝都から離れてくれたのは好都合だ！  
よし、全員、南方総督府に奇襲をかけるぞ！」

出撃しようとするストームたちにカーター大佐が現れ、

「ストーム、今回の作戦、私に任せてくれないか？」

カーター大佐の言葉に疑問を持つストーム、

ネオデスメタル帝国の南方総督府、通常種の三倍以上のサイズを持つキャタルG4  
がジェノスピノ、オメガレックスの入った巨大コンテナを総督府の倉庫に輸送した。そ  
の様子を見ていたアッカーマン大佐とドクターマイルスは、

「ドクター、何ゆえ、ジェノスピノ、オメガレックスをここに移送させたのです？」

「ゼログライジスとデスレックス紫龍が完成してから、ギャラガー三世陛下と四世陛

下がすっかりあの2体を気に入り、ジェノスピノ、オメガレックスが完全に御蔵入りになったが、それでもジェノスピノ、オメガレックスは我が帝国のために働いた最凶ゾイド。

その2体を処分するのは勿体ないので、新たな部隊の編成に合わせてここに移送させたのです。」

「なら、何故、ここに？」

「アッカーマン殿、帝国に忠誠を誓った君でも、反乱軍に寝返ったカーター大佐を育てた責任として四天王の地位たる総督の位を失い、左遷されたそうですね？」

でしたら、そのリベンジとして、あの2体に乗って汚名返上したら、いかがですか？  
新たに開発され、危険性の高いゼロフアントスに乗るために過去の耐Bスーツを元に開発した耐乙スーツがあります！ あれを着用すれば、陛下以外の人間でも搭乗は可能ですよ。」

「ドクター、勘違いしてもらっては困る。私はあくまでネオデスメタル帝国に忠誠を誓い、帝国のために働くと決めた者、カーター大佐の罪は私の罪でもある。

だから、その罪は私自身の手で償う。例え、その命を奪ってでも！」

「いい心掛けだ。」

「だが、失敗は許されないぞ！」

そこに現れたのはタツカー元帥だった。

「お前が帝国に忠誠を誓う者だったから、左遷ということにしたが、本来なら、死刑確定のものだった。今度、失敗したら、地位どころか、命は無いと思え！」

「心得ております。」

その時、総督府に警報が鳴り、1人の親衛隊兵士が3人の前に現れた。

「申し上げます！ 総督府の周辺に多数のゾイド反応、おそらく反乱軍の襲撃かと！」

「遂に来たようだな！ よし、元帥殿、我々も出撃の準備だ。」

「あの……」

「何だね？ 大佐。」

「ジェノスピノ、オメガレックスを移送させたのはあなたの作戦なのですか？」

「さあな……」

南方総督府に真っ先に現れたのは、カーター大佐の操るスナイプテラで、次々と総督府を爆撃し、基地が炎に包まれる。親衛隊のスナイプテラG4が出撃するが、カーター大佐のスナイプテラはまだマシンプラストを発動していないにも関わらず、次々とフォースバレルガトリングとキャノン砲で正確に撃墜していった。

それと同時に、シユバルツ中佐が乗るカーター仕様キャノンブル率いる新帝国のキャノンブル部隊が総督府に突っ込んで行った。総督府から出撃した親衛隊のキャノンブルG4が出撃し、性能の違いを見せつけるかのように、次々とマシンプラストで新帝国のキャノンブルを撃破していった。

しかし、シユバルツ中佐のカーター仕様のキャノンブルだけは帝国によって強化された装甲とマシンプラスト、そして、A-Z3連チャージミサイルを駆使して、複数のキャノンブルG4と互角に戦い、次々と撃破していった。

その様子を映像で見ていたタツカー元帥とドクターマイルスは、

「ふん、流石は元ネオデスメタル帝国の優秀な軍人、我がギャラガー親衛隊相手でも、引けを取らんとは！」

しかし、いくら、カーター元大佐がいるとはいえ、あのバカな新帝国の反乱軍だけか？

今さら、真帝国時代の旧式で我が最新型の親衛隊ゾイドに勝てると思っ  
ているのか？」

「元帥殿、カーターと新帝国は今や、我がネオデスマタル帝国最大の敵である反乱同盟軍と結託しています。」

「おそらく、奴らだけではないかと…」

「だが、どちらにせよ、潰す必要がある。アツカーマン大佐、コナー少佐と共に、カーターのスナイプテラとあのキャノンブルを片付けろ！ 我が帝国への忠誠心を示すために必ず始末しろ、いいな！」

「承知しました。」

カーター大佐のスナイプテラとシユバルツ中佐のキャノンブルが親衛隊相手に善戦する中、スナイプテラとキャノンブルの目の前にアツカーマン大佐のナツクルコング Mk-II とコナー少佐のステゴゼーゲ Mk-II が現れた。

「カーター元大佐、直ちに我がネオデスマタル帝国ぐんに投降せよ！ 投降しなければ、今すぐ君をスナイプテラもろとも破壊する！」

「アツカーマン中将…、」

「私は帝国のために生涯を捧げた男だ！ だから、私は帝国のために戦う。例え、君の命を奪うことになっても…」

ナツクルコング、兵器 解放！ マシンブラストー!!」

マシンブラストしたナツクルコングは胸熱拳でスナイプテラを当てようとし、スナイプテラはそれを避けるが、装備しているガトリングを喰らってスナイプテラはよろめいてしまう。

「カーター大佐!」

シユバルツ中佐がキャノンブルで助けに行こうとするが、コナー少佐のステゴゼーゲ Mk-II が立ち塞がる。

「あなたは確か、帝国軍のコナー少佐!」

「私の名前を知っているとは、カーター大佐から聞いたのかな?」

「そうだ! なら、だからこそ、あなたはそつちにはいてはならない。今のネオデスメタル帝国は邪悪な存在に支配されている。これ以上、帝国についていったら、あなたも無事にはすまない。」

「例え、そうだとしても、私はアッカーマン大佐と共に帝国のために働く。それが私の決めた道だ!」

ステゴゼーゲ、兵器 解放! マシンブラストー!! ナイフオブバルカン!!」

「ち、仕方ない。キャノンブル、兵器 解放! マシンブラストー!! ナインバーストキャノン!!」



シュバルツ中佐のキャノンブルとコナー少佐のステゴゼーゲMk—IIの攻撃がぶつかり合う。映像でその様子を見たドクターマイルスとタツカー元帥は、

「上手く行つたようだな。」

「ドクター、元帥閣下！ 双方から反乱軍がこちらに向かっています。おそらく例のライガーかと……」

「よし、では、我々も出よう。アーミテージにも出撃の要請をしろ！」

南方総督府でカーター大佐のスナイプテラとアッカーマン大佐のナツクルコングMk—IIが戦っているのを見たウイルとレイルはカーター大佐を助けに行こうとしたところ、突然目の前にアーミテージの操るゼロステイレイザーが現れた。

「久しぶりだな！ ライガーの小僧に、帝国の元皇子。」

「お前はアーミテージ！ 死んだはずじゃ…」

「バカめ！ この俺が死ぬわけがないだろ!! 皇帝陛下のお力により、あたらしい身体とこのおニューのステイレイザーのゼロステイレイザーを手に入れ、俺は再びこの世に甦ったのさ！ 陛下に再び仕え、貴様らに復讐するためにな！」

「そんな… てことはあいつも機械化されたってことなのか?」

「氣を付けろ、ウィル！ あいつはゼルとウィーリィをバイオアシッドの毒に汚染させた奴だ。僕の勘が正しければ、あれはゼロファントスのゾイド因子を組み込んで改造したステイレイザーだ！」

「この前は貴様らに敗北したが、今度はそうはいかないぞ。このゼロステイレイザーで貴様らをあの世に送ってやる！」

ゼロステイレイザー、原始 解放！ ゼロブラストー!! ゼロプラズマウォール！  
E シールドを張ったゼロステイレイザーがギルラプターエンペラーに襲いかかろうとしたその時、

「レイル、ギルラプター、危ない!!」

シーザーがギルラプターエンペラーを庇い、ゼロステイレイザーに突っ込んだ。

「行くぞ、シーザー！ 進化 解放！ エヴォブラストー!! スピリットガンストラッシュュー！」

シーザーはEシールドを張りながら、ゼロステイレイザーとぶつかり合った。Eシールド同士のぶつかり合いで、衝撃波がほとばしる。

「なるほど、シールド同士をぶつけてショートさせるつもりか……。だが、このゼロステイレイザーを営めるなー!!」

ゼロステイレイザーはその巨体とゼロフアントス、元のステイレイザーを遥かに凌ぐ力でシーザーを押し返した。その力に圧倒され、Eシールドが解除され、飛ばされるシーザー、

「ウイル、シーザー! くそ、ギルラプター! 進化 解放! エヴォブラストー!!  
新・音速殺!!」

ギルラプターエンペラーは渾身の一撃をゼロステイレイザーに当てるが、ゼロステイレイザーはびくともしなかった。

「効かないね。」

エンペラーを吹っ飛ばすゼロステイレイザー、そしてゼロステイレイザーはそのままエンペラーに足を入れる。

後に続いてきたストーム、ドレイク、グラッド、リセルはシーザーとエンペラーの救援に向かおうとする。

「ウイル、レイル! 今、行くぞ!」

「大丈夫です。ストームさん、ここは俺たちに任せて、ストームさんたちはジェノスピノとオメガレックスを！」

「し、しかし……」

その時、レーザーキャノンが放たれ、目の前にゼロフアントス部隊を率いるドクターマイルスのゼロフアントスとタツカー元帥の操るナツクルコングG3が現れた。

「また、会ったな。旧デスメタル帝国の破壊者の子孫にして、ゾイドの王を従える反乱軍のリーダー。」

「貴様はドクターマイルス！」

「貴様がかつてのフリーダム団リーダーのように我がネオデスメタル帝国を滅ぼされるわけにはいかんのでな。悪いが、ここで、くたばつてもらうぞ。」

「だが、悲しむことはない。皇帝陛下の代理人たる帝国NO2のこのキル・タツカーの手に落ちるのだからな。光栄に思うがいい！」

「あれは……！」

タツカー元帥のナツクルコングG3を見たりセルは10年前、ギャラガー三世が操るジェノスピノ率いる帝国軍が旧ネオヘリックシティを襲撃した時、ジェノスピノと共にネオヘリックシティの街を破壊し、父親の操る相棒ゾイドがナツクルコングG3に破壊され、收容所からの脱出した時に自身の両親を殺したタツカー元帥の姿を思い出した。

「そうだ。あいつだ！ 俺の故郷の街を破壊し、父さんや母さんを殺したあいつだ！！  
ウオー！！」

両親の仇であるタッカー元帥のことを思い出したりセルは我を忘れてそのままナツクルコングG3に突っ込んだ。

「止せ、リセル！ 相手が悪すぎるぞ！！」

グラッドの忠告を無視し、リセルはナツクルコングG3に攻撃した。

「行くぞ、デル！ 進化 解放！ エヴォブラストー！！ フルハウリングショット！！」

しかし、ナツクルコングG3は攻撃を一切通さず、デルを片手で鷲掴みにしてしまう。

「おやおや、我が帝国に恨みを持ち、反乱軍に入り、陛下の代理としてドクターに洗脳され、ジェノスピノに乗ったが、全く役に立たず、裏切った小僧ではないか。

それで再び我が帝国軍に齒向かう等、愚かにも程があるわ！！」

ナツクルコングG3はそのままデルを叩きつけ、デルの装甲に傷の付いた。デルは傷つきながらも起き、

「俺はお前への復讐のために生きてきた。お前さえ倒せば、父さんと母さんを供養できてる。」

しかし、ナツクルコングG3はその言葉を踏みにじるように足でデルを踏みつけた。

「貴様、誰に手出ししているのかわかっているのか？ 私はネオデスメタル帝国の最

終秘密兵器と呼ばれ、帝国で出世を遂げ、遂に親衛隊の隊長として皇帝陛下の代理人にのしあがった者だぞ！

私の命令は即ち、皇帝陛下のご命令に等しい。その私に楯突く等、無礼千万にも程がある！」

ナツクルコングG3はグリグリとデルの身体を踏み潰そうとする。

「リセル、デル！」

ストームとドレイク、グラッドはリセルを助けに行こうとするが、ゼロフロント部隊がデイズルボムを放ってくるため、中々近付くことができない。

「何をしている？ 貴様の相手は私だと言ったはずだぞ！」

「仕方ない。グラッド！ お前はリセルを、俺とドレイクはドクターマイルスとゼロフロントスを引き付ける。」

「わかった。後は頼む！」

レックスはナツクルコングG3に突っ込み、

「レックス、進化 解放！ エヴォブラストー！！ ファイナルガトリング！！」

レックスは全ての装備を解放してナツクルコングG3に撃ち込むが、ナツクルコングG3の装甲はそれすらも寄せ付けなかった。

「慌てるな。貴様の相手は後でゆっくりしてやる。」

その時、突然、ナツクルコングG3の目が狙撃され、バイザーを貫通して片目が破壊された。

グオッ!!

片目を破壊され、苦しむナツクルコングG3、狙撃したのはユリスのデイメパルサーのレナだった。

「グラッドさん、今のうちにリセルを！」

「ありがとう。ユリス！ どうやら、バイザーの強度は胴体の装甲程ではないみたいだ。つまり、あの目を狙えば……」

足を外し、すかさずデルを助けたレックスは攻撃の体勢を取るが、ナツクルコングG3は両手でレックスとデルを尻ぎ払う。レナによって潰された片目はいつの間にかスコープが取り付けられていた。

「片目を破壊しただけで、調子に乗るな！ 既にそのために対策は練つてある。それに我が帝国のゾイドは例え、バイザーが破壊されてもその支配を解くことは出来ぬわ！」

到着したカティアはリセルやウイルたちを助けに行こうとするが、カーター大佐のスパイテラがアッカーマン大佐のナツクルコングMk-IIに苦戦しているのを見て、カーター大佐の元に向かった。しかし、目の前に、全身に青みのかかったドクターマイルスのゼロフアントスの量産型が現れ、そのコクピットには、かつてのカティアの友人のナツシュがいた。

「やあ、ごきげんよう！ ギレル元少尉。」

「ナツシュ!! どうしてあなたが!?!」

「俺は生まれ変わったんだよ！ 機械化して新たなボディを得て、皇帝陛下に仕える親衛隊に所属し、そして、このゼロフアントスという最高のゾイドを、皇帝陛下ほ私に与えてくれた。もはや、俺の人生は陛下の物なのだ！」

「何を言っているの!?! ギアラガー三世は、かつての帝王ギアラガー一世ではない！ ギアラガー一世を乗っ取り、この世界を滅ぼす存在、デスザウラーなのよ!!」

「ふん、どちらにせよ、皇帝陛下であることに変わりはない！ 貧弱な人間の身体を捨て、不死身に近い身体を手に入れたのも全て皇帝陛下のおかげなのだ！」



もはや、俺の命は陛下のためにある、そして、俺はこのために生まれてきたのだ！」

「もう、あなたには何言っても無駄なの……？」

「お前だって、望んでたんじやないか？ 強化人間なんかより、機械化して親衛隊に入ることが!!」

「ナツシユ！ お願い、目を覚まして!!」

レックスとデルの全ての攻撃もナツクルコングG3に通用せず、デルはナツクルコングG3に叩き潰されてしまう。

「グハア!!」

「つまらん！ 我が帝国に復讐するのために付けた力がこの程度とは！ 余りにも愚かだ。ならば、我が帝国に逆らった罰を受けるがいい！」

ナツクルコング、兵器 解放！ マシンブラスター!! 極熱拳！」

ナツクルコングの拳がデルに放たれようとした時、アツカーマン大佐は、カーター大佐のスナイプテラとの交戦中にそれを見て、かつて自身もギャラガー三世の操るジェノスピノ率いる帝国軍の一将校として加わり、旧ネオヘリックシティを攻撃した時、三世のジェノスピノとタツカー元帥のナツクルコングG3や親衛隊の兵士が旧共和国軍の兵士や民間人を虐殺した惨劇を思いだし、その惨劇を繰り返しまいと、そのままナツクルコングG3の元に向かって走っていった。

ズドン!!

アツカーマン大佐のナツクルコングMk-IIはデルを庇い、ナツクルコングG3はそのままコクピットごとナツクルコングMk-IIの装甲を貫いた。それを見たりセルやカーター大佐、コナー少佐、ウイルたちは青ざめた表情をした。ナツクルコングMk-IIを見てりセルは、

「何故… 帝国のあんたが… 俺を…?」

「私は帝国のために生涯を捧げた男、だから、私は帝国を裏切ることは出来ない。だが、君のような未来ある若者を死なすわけにはいかない。

君の同士と両親を殺したあのネオヘリックシティの惨劇に私も加わった。そしてその惨劇を目撃し、絶望した。

それまで正義と信じていた帝国があれだけの残虐な行為をしたことに…

そして、私は出世し、遂に四天王と呼ばれる程の地位を得た。だが、それでも帝国そのものを動かす程の権力は無く、ただ、ひたすら、三世陛下に従うだけだった。

だが、カーター大佐とアーネスト殿下が帝国から離脱してくれて、ホントに良かった。これで、私の役目も終わった。君たちなら、帝国を、

世界を変えてくれるかもしれない。

殿下、カーター大佐、そして、ウルフに乗る青年よ。私の分まで生きてくれ。」

ナツクルコング Mk-II はそのまま爆発炎上し、ザンガイだけが残った。それを見たカーター大佐は目一杯の涙を流し、大声で叫んだ。

「アツカーマン中將ー!!」

「ち、裏切り者が! だが、いくら処刑を免れても所詮そんなボロボロじゃ、逃げられない。今度こそ、終わりにしてやる!」

バリン!!

その時、ナツクルコング G3 のスコープが破壊され、再びナツクルコング G3 の片目が剥き出しになり、レックスがその背後に掴んだ。

「なんだ! なんの真似だ!?!」

「リセルを簡単に死なせるわけにはいかないぜ!」

「何をするつもりだ!?!」

「ファイナルガトリング!!」

レックスはガトリングをナツクルコングG3の足にうちこみ、ナツクルコングG3は足を崩し、ゆっくりと後退していき、直ぐ後ろは崖だった。

「こいつ、放せ!」

「コマンダー! 何故、あなたがそんなことを?!」

「さっきの帝国軍人が教えてくれた。男つてのはな! 責任は自分で果たす! 今がその時だ。」

それに、お前の時が止まった原因であるこいつを何としても倒さなくてはな! こいつを倒せば、止まったお前の時を動かせる。」

「そんな、これは俺の問題です! あなたが手を出すことではありません!!」

「これは、俺のケジメでもあるんだ! 俺は元々、ネオデスメタルの人間だったからな。その償いをしなくてはな。」

それと、ストーム、お前との付き合い楽しかったぜ! 元帝国軍の俺を受け入れてくれたのはお前だったからな。こんな俺を司令官にしてくれてありがとうな。」

それを聞いたストームは、

「待て、グラッド! お前はこんなところで死ぬな!」

「いや、俺の役目もどうやら終わったようだ。それにいくら総司令をやってもやはり、

リーダーはお前だ！

流石にフリーダム団リーダーの子孫には敵わないぜ。お前なら、俺がいなくても十分に行ける。そして、お前にはこの戦いが終わったら果たさなければならぬ旅の目的がある。必ずこの戦いを終わらせてその旅果たせよ！」

「グラッドさん！」

「ウイルか……帝国軍基地で初めてお前と会った時はただのクソガキかと思っていたが、もうお前は真正正銘のゾイド乗りだ！ シーザーを大切にしろよ！」

「くそ、離せ！」

「わりいな、相棒。最後まで付き合わしちまってよ。でも、帝国軍に入隊して初めてお前と会って俺は救われた。帝国軍から逃げた時、死ぬときは絶対に一緒だぜ！ って交わした約束は果たせそうだな。色々あったけど、悔いはない。ありがとうな。」

グオッ！！

グラッドの言葉にレックスは思いっきり咆哮を上げ、ナツクルコングG3の装甲の薄い部分にファイナルガトリングを撃ち込み、ナツクルコングG3は遂にその攻撃で倒れ、レックスと共に崖の下に真っ先になって落下していった。そして、崖の下から爆発が起きた。それを見たウイルたちは信じられない光景を見るかのような表情をした。

「ウ、ウワァー！！」

リセルは発狂し、アツカーマン大佐とグラッドの死でレイルは悔やんだ。

「どうして、どうして、アツカーマンやグラッドが死ななきゃならないんだよ!!」

その時、リセルの叫び声とレイルの悔しさに反応するかのように、倉庫にいるジェノスピノとオメガレックスの目が赤く発光し、自力でバイザーを破壊し、そのまま、倉庫を突き破って現れた。

「全部、お前のせいなんだよ! さっさとくたばりやがれ!!」

ゼロステイレイザーはギルラプターエンペラーを踏み潰そうとするが、ジェノスピノと共に自力でバイザーを破壊し、倉庫をぶち破って現れたオメガレックスの突進攻撃を食らい、ゼロステイレイザーは倒れてしまった。

同時にジェノスピノもドクターマイルス率いるゼロフアントス部隊を蹴散らし、デルの前に現れた。

デルとエンペラーの前に現れたジェノスピノとオメガレックスを見たウィルとストームは驚いた。

「ジェノスピノ、オメガレックス!!」

「どうして、あの2体が!?!」

「そうか、あいつらは三世の操るゼログライジスの脅威を感じとり、自ら支配を解いたのか!」

オメガレックスはギルラプターエンペラーの前に立ち、何かを訴えかけるかのようにレイルを見た。ギルラプターエンペラーもレイルを向いた。

「オメガレックスはこの僕を必要としているのか？」

エンペラーはそうだと言うようにうなずき、それを見たレイルはギルラプターエンペラーから降り、ジャンプしてそのままオメガレックスに乗り換えた。オメガレックスはゼロステイレイザーに向けて荷電粒子砲の照準を合わせ、

「行くぞ、オメガレックス！」

グオオッ!!

「オメガレックス、兵器 解放！ マシンブラストー!!」

オメガレックスの荷電粒子砲がゼロステイレイザーに向けて放たれた。ゼロステイレイザーはすかさず、Eシールドで防ぐ。しかし、オメガレックスはそのまま荷電粒子砲を他の親衛隊ゾイドにも向け、一気に蹴散らした。

「皆、今のうちに早く逃げてください!!」

それを聞いたストームは、

「よし、わかった！ 全員撤退するぞ！」

ストームの命令で、ウィルたち同盟軍、旧共和国、新帝国のゾイドは撤退していった。アーミテージ大尉はその後を追うとするが、ドクターマイルスが待ったをかけ、

「止せ、あのままにしておけ。我々は今すぐタツカー元帥殿のナツクルコングGま3を回収して帝都メガロポリスに帰還する。」

「は？ 何言つてんだ！ ジエノスピノ、オメガレックスを奴等に奪われた上に逃げられたんだぞ!!」

「それが今回の作戦だ。あの2体を反乱軍の手に渡すことが目的だったのだから。奴等に真の絶望を与えるために！」

「ああん？」

それを聞いて首を傾げるアーミテージ大尉、

「それにしても、あの2体、皇帝陛下によって捨て駒扱いにされ、処分を免れるために自ら、ライダーを選ぶとはな。どうやら、次の戦いは楽しめそうだな。フッフッフ、ハハハハハハハハ!!」

ジエノスピノ、オメガレックスを奪われたにも関わらず、まるで如何にも罠に掛かったかのように不敵な笑みを浮かべるドクターマイルスの高笑い響き渡った。

撤退していくウイルたちはジエノスピノ、オメガレックスを奪還出来た反面、胸に穴が空いたような悲しい表情をしていた。

T o b e c o n t i n u e d



## 第50話 「帝都奇襲」

南方総督府、親衛隊ゾイドはナツクルコングG3とレックス落ちた崖で、ナツクルコングG3を搜索していた。

「どうだ？ 見付かったか！」

「ドクターマイルス！」

「何だ？」

「あそこに！」

兵士が指指した方向には倒れていたナツクルコングG3がいた。ドクターマイルスと親衛隊兵士はナツクルコングG3に近づいて見たら、何と本体は無傷だった。

「ふ、流石はネオデスメタル帝国最終秘密兵器のタツカー元帥殿のゾイドよ。あれでも大したダメージにはならなかったか。ところで、ガトリングフォックスは？」

「今のところ、残骸一つも見つかりません。」

「ふん、粉々に破壊されたか、それとも… まあ、よい、仮に生き残ったとしても無事ではすまないだろう。」

直ぐにナツクルコングG3を回収しろ！ 我々は直ちに帝都メガロポリスに帰還す

る。」

「はー！」

ドクターマイルスはナツクルコングG3のкокピットの直ぐ側に寄り、ハッチを開いた。中には落下の衝撃で頭がクラクラしたタツカー元帥がいた。

「随分、派手にやられたようだな！」

「貴様ごときに言われたくはない！　ところで、あの元帝国の脱走兵と狐はどこだ？」  
「今のところ、残骸は見つかからないが、なあに、奴は無事では済まんぞ。それより、連中が計画通りジェノスピノとオメガレックスを奪ったようだ。　皇帝陛下のご命令通り、我々も帝都に引き上げよう。」

「ち、まさか、この私がかんな目に逢うとはなー！」

タツカー元帥はナツクルコングG3から降り、兵士はデイロフォスG3とキャノンブルG3でナツクルコングG3をキャタルガG3のスタンドに乗せ、直ぐにその場から離れた。

レッドケルベロス本社、ウイルヤストームたちはジェノスピノ、オメガレックスを引き連れて本社に戻り、ストームは事の状態をクリスやクルーガー、ガルド将軍に説明した。それを聞いたクルーガーは、

「そうか… グラッドが… 惜しい男を亡くしてしまった。」

「すまない、クルーガー。俺が手を離れたばかりに…」

「いや、ストームは悪くない。あいつは元ネオデスメタル帝国軍人だったから、あいつなりにけじめをつけたかったんだろ。俺がもし、あいつの立場だったら、きっとそうする。」

ガルド将軍は口を開き、

「だが、悲しみに浸っている時ではない！ グラッドとカーター大佐の恩人であるアツカーマンの死を無駄にしないためにも1日も早く帝国軍を倒さなくてはならない。」

「それで、クルーガーやガルド将軍たちは何か策を練っているのか？」

「ああ、ジエノスピノ、オメガレックスがこちらの味方になった時までにはその作戦は決まっている。」

「その策とは?」

ストームやクルーガー、ガルド將軍、旧共和国、新帝国の幹部たちが作戦会議をしている会議室から離れた部屋でウイル、レイル、リセル、カティア、ユリスはアツカーマン大佐とグラッドの死をエマに伝えた。全てを聞いたエマは悲しい表情で、

「そんな… グラッドさんに、アツカーマンさんまで…」

「ごめん、エマ。目を離れた僕のせいなんだ。」

「ううん、レイルは悪くないわ。」

「そうだよ。俺だつてあんなことは予想出来なかった。」

「それで、ウイルたちはこれからどうするの?」

「今、ストームさんがクルーガーさんやガルド將軍と作戦を開いてこれからネオデスメタルと戦うための作戦を開いている。」

「そう…、そうになると、また、誰かが亡くなってしまおうのかしら…?」  
落ち込むエマにレイルは優しく両手を肩に乗せ、

「大丈夫だよ！ 僕とリセルにはオメガレックスとジエノスピノがいる。きつと今回のようなことにはならない。だから、エマは姉さんと一緒に大人しくして。」

それを聞いたユリスは不安そうな表情で、レイルとリセルを見て、

「レイル、リセル、もしかして、今度の戦いは…」

「ああ、恐らくこれが最後の戦いになるかもしれない。帝国の圧政を阻止し、皆を守るためにこの戦いに終止符を打つ！」

それを聞いても不安そうなエマとユリスにウィルは、

「大丈夫！ 例え、どんなことがあっても、俺たちなら、必ず運命を切り開いてみせる！」

「ウィル！ 私も一緒に行くわ！ 私も元帝国軍兵士としてお父さんと一緒に帝国軍と戦うわ！」

「カティア、残念だけど、君はここでエマとユリスを守ってくれないか。」

「どうして!?! 私はこれでも帝国軍の強化人間よ！ 十分、戦え…」

「今度の戦いは今まで一番熾烈な戦いになる。いくら強化人間の君でもこの戦いはかなり過酷になる。」

それに、俺たちがいなくなったら、エマとユリスを守る者がいなくなるからね。」  
それを聞いたカティアは反論出来なかった。

「わかったわ。」

帝都メガロポリスの宮殿、ゼログライジスが直ぐ近くにいる玉座の間で、帰還したドクターマイルスからジェノスピノ、オメガレックスが同盟軍の手に渡ったことを聞いたギヤラガー三世は、

「そうか、計画通り、ジェノスピノ、オメガレックスが反乱軍の手に渡ったか。」

「はい、これで、あの2体と四世陛下のデスレックスを戦わせることが出来るようになります。」

「そうすれば、デスレックスの闘争本能は完全に解放され、私とゼログライジスは更な

る進化へと近づくようになる。」

「ついでに裏切り者の恩師と反乱軍の幹部の1人も始末しました。後は敵がどう動くかです。」

「この流れなら、この帝都メガロポリスを奇襲するだろう。」

「では、タツカー元帥殿やベケット少将にその準備をするよう伝えます。ところで、

市民はいかがでしたでしょうか？ 避難勧告は出さなくてもよろしいので？」

「市民には、反乱軍が市民の命などお構いなしに奇襲してきたと思わせるのだ。」

そうすれば、国民は反乱軍を世界の平和と正義を脅かすテロ組織として認識し、反乱軍への憎しみを燃やすだろう。」

「それで、更に国民を戦争に駆り出すのですね。」

「そうだ！ 惑星Ziで帝国摂政や古代ゾイド人に乗っ取った時もそうだったが、本当に人間は非常に操りやすい生き物だ。」

だが、このギヤラガー一世という者は違った。私が今まで乗っ取った中で、唯一私の支配に抗い、この私ですらもこの男の人格そのものと融合しなければならぬという選択肢まで選ばされた。

そのおかげで、私の闘争本能は更に増した。もはや、かつて、惑星Ziにいた時とは比べ物にならない程になり、究極に相応しい存在となった。」

「そもそもギヤラガー一世はゾイドクライシスの時に地球に移住した我々古代ゾイド人のメンバーの中で最高の逸材であった者の遺伝子を受け継いだ男ですから、当然です！」

「まさか、あの時の私の分身の子孫がこのギヤラガー一世だったとは、思いもよらなかった。これで、ゼログライジスを究極進化させる準備を整えることができる。」

「遂にゾイドクライシスとかつて、帝国、共和国と我々に逆らう愚かな人間全てを滅ぼし、この地球と全宇宙を支配するという我々の悲願が達成されるんですね！」

「そうだ！ 待ちに待ったこの時が遂に来たのだ。後は反乱軍を潰し、禁断の儀式を行うだけだ。ドクターマイルス、直ちに帝都の防衛と反乱軍を迎え撃つ準備をしろ！」

「了解しました。では、市民には悟られないよう、私と元帥殿、ベケット少将は反乱軍を迎え撃つ準備をします。当然、四世陛下にも……」

「指揮は任せる。私はゼログライジスに乗って機会を伺う。」



レッドケルベロス本社、クルーガー、ガルド將軍は一連の作戦をウィルやレイル、リセル、旧共和国、新帝国の幹部たちに教えた。

「では、作戦を説明する。我々が帝都メガロポリスの前に来た時、レイルがオメガレックスで荷電粒子砲を放ち、帝都の門を破壊する。

そして、帝国軍が混乱し、現れたところをリセルのジェノスピノが先頭になって侵入する。帝都に入った後、デスレックスとゼログライジスのどちらかを先に出すかは不明だが、おそらく予想では、デスレックスを先に出すだろう。

デスレックス率いる親衛隊が現れたら、シーザー、ジェノスピノ、オメガレックスがデスレックスを総攻撃し、弱ったところを待機しているゴールドがデスレックスに向けてグラビティキャノン<sup>①</sup>を2発同時に放つ。

以前の戦いでは、デスレックスは一発のグラビティキャノンでは通用しないことがわかったため、グラビティキャノンの砲塔を2門備えているゴールドなら、2発同時に放つことができるから、一体に2発を撃ち込む。そして、我々は残りの親衛隊と戦い、ゼロ

グライジスが現れたら、シーザー、ジェノスピノ、オメガレックスは引き続きゼログラフィジスの注意を引き付け、隙を見せたところをゴールドが残り2発を撃ち込む。これなら、いくら、ゼログラフィジスでも無事では済まない。」

「だが、2発同時にということは、実質一体に1発しか撃てないということか…。」  
1  
発撃つて続けて撃つ案はなかったのか？」

「一応あるが、そもそもグラフィティキヤノンには連射不可能のため、96%の確率で失敗すると出て、その案は却下された。」

「なるほど、つまり、失敗は絶対に許されない一か八かの作戦つてわけか…。」

「だが、その一か八かの作戦故、成功率は25%しかない。失敗する可能性は大いにあるだろう。」

それに他の作戦では、成功率は僅か3か5%しかないため、有効な作戦はこれしかなかった！」

「0%じゃないだけでもましだ！ とにかく俺たちは1日も早く帝国とギヤラガー三世を倒さなくてはならない！ とところで、いつ出撃するのだ？」

「ジェノスピノとオメガレックスの調整が終わり次第、直ぐに出撃する予定だが、レイル、リセル。もう待つ必要はないだろ？」

「はい、ジェノスピノ、オメガレックスは既に帝国が粗方修復し、調整済みですから、

いつでも大丈夫です。」

「よし、これ以時間を空くわけにはいかない。直ぐにでも出撃しよう！」

「そうなくつちやつな。では、全軍！ 帝都メガロポリスに向けて進軍する！ 準備をするぞ!!」

「は!!」

クリスやクルーガー、アレックス、アツシユ、ケン、ジョンはそれぞれの相棒ゾイドに乗り、出撃の準備をしてみた。

レイルとリセルはギルラプターエンペラーとデルの前に立ち、エンペラーとデルは2人に寄り添い、2人はエンペラーとデルの頭を優しく撫で、

「ごめん、ギルラプター。僕はオメガレックスと共に帝国軍と戦わなくてはならないから、一緒には連れていけないんだ。

でも、必ず帰ってくる。お前はここでエマを守ってくれ。」

「デル、お前は帝国への復讐に生きるこんな俺を受け入れ、親がない俺の親代わりになつてくれてありがとう。」

でも、お前を復讐の戦いのための道具にしなくないし、そんな血塗られた戦いに巻き込んで、お前を失いたくない。

グラッドを失ったあんな悲しい思いをするのはもう嫌なんだ！ だから、お前はここで、ユリスを守っていてくれ。お前は優しいゾイドだ。その優しきで俺を見守ってくれ。」

レイルとリセルはエンペラーとデルから離れ、待っているウィルとシーザーの元に向かった。

「レイル、リセル。」

エマとユリスの声が聞こえ、振り向くとエンペラーとデルの横で3人を見守るエマとユリス、カティアがいた。

「レイル、必ず帰ってきて。弟と両親を失った私にはもうあなたしかいないの。だから……」

ユリスはエマの肩を優しく触り、

「エマ、皆を信じてあげて。もう、レイルたちは前のレイルたちじゃないから。」

ユリスの表情を見たレイルとリセルは、

「大丈夫。僕は必ず帰ってくる。」

「ユリス、お前には辛い目を逢わせてしまったが、もうそんな目には逢わせない。俺も

必ず帰ってくる。」

レイルとリセルはウイルの前に立ち、

「ウイル、僕はお前に会えてホントに良かった。あの時、お前と戦わなかったら、今頃、僕はあのままドクターマイルスの操り人形になってたかもしれない。」

「俺もだ。ジェノスピノを先に倒したお前に嫉妬してお前に牙を向いて、一度帝国軍に入ってしまったが、俺はお前に救われた。ホントにありがとう。」

「別れの挨拶みたいに言わないでくれよ。俺はただ、俺のすることをしただけだ。それに俺たちは帝国に苦しめられている人々とゾイドを救い、人とゾイドが共存できる世界を築くために戦うんだから。」

シーザーはウイルを静かに見つめ、ゆっくりうなずいた。ウイルはかつて、帝国軍基地で捕らわれていたシーザーと初めて会った時のことを思いだし、

「そうだ。あの時、俺はシーザーと会ったから、ここまで来たんだ。シーザー！ これからも俺と一緒に戦ってくれるよな!？」

それを聞いたシーザーは思いっきり咆哮を上げた。

グオオー!!

「よし、じゃあ、エマ、ユリス、カティア、行ってくるよー!」

ウイル、レイル、リセルはシーザーと共にその場を去った。

ゾイドたちがいる倉庫に、ウイルはシーザーに、レイルはオメガレックスに、リセルはジェノスピノに、ストームはキングに、ドレイクはジャンにそれぞれ乗り、ハッチがゆっくり開き、シーザー、ジェノスピノ、オメガレックスが先頭になって、キングやジャック、ゴルドら同盟軍のゾイドと新帝国、旧共和国のゾイドはその後についていった。

エマとユリス、カティアは窓越しで出撃するシーザーたちの姿を見守り、エマはゆっくりで握った手を胸に当て、

「ウイル、レイル、リセル、皆必ず帰って来てね、」

その後ろにはドクタースミスとスレイマーズのメンバーがいて、

「うーん、エマちゃんたちの側にいられるのは嬉しいけど、これって、ワシら戦力外ちゆうつことになるのか？」

「リーダー、それは言ってはいけません。」

「くううー！」

帝都メガロポリスの軍倉庫に戻ったコナー少佐はステゴハゼーゲMk-IIから降り、思いつき壁に拳をぶつけた。

「何故だ？ 何故、アツカーマン中將が死ななくてはならないのだ！ そして、何故、タツカー元帥は中將の死に顔色一つ変えなかつたのだ！」

コナー少佐の脳内に、シュバルツ中佐の言葉が過つた。

「今のネオデスメタル帝国は邪悪な存在に支配されている。これ以上、帝国についていったら、あなたも無事にはすまない。」

カーター大佐やあのシュバルツとか言う男が言ったように、帝国軍に正義はないというのか！ だとするなら、私とアツカーマン中將は何のために今まで皇帝陛下と帝国軍のために尽くしてきたんだ!? 我々の正義は一体何だったのだ!?」

その時、親衛隊兵士が現れ、

「コナー少佐、ベケット少將から帝都の防衛に努めるようにと命令が出ました！ 直ちにステゴハゼーゲMk-IIに乗って出撃してください！」

「悪いが、今の私はとても具合が悪い！ 出撃は遅れると少將に言ってくれないか。」

「わかりました。ですが、これでもし来なかったら、あなたは左遷ですよ。よろしいですね？」

去る親衛隊兵士にコナー少佐は割りきった表情をした。

シーザー、ジェノスピノ、オメガレックスを先頭とする同盟軍はネオデスメタル帝国の帝都メガロポリスのが見える位置間で来た。ガルド將軍とクルーガーははウイルたち、

「それでは、手はず通りにする。レイル、任せた。」

「わかりました。」

オメガレックスは前に出て、帝都メガロポリスの巨大な門に向けて照準を合わせた。

グルル…



オメガレックスはレイルに何か伝えたいかのように鳴いた。

「オメガレックス、進化 解放！ エヴォブラストー！！ 荷電粒子砲発射！」

オメガレックスの荷電粒子砲が門に直撃し、辺りの城壁の半分も一瞬で破壊された。

「よし、この機を逃すな！」

リセルのジェノスピノは真つ先に同盟軍の先頭に立ち、破壊された門に向かって勢いよく走っていった。破壊された門の中から親衛隊専用のキャノンブルG3、ギルラプターG3、量産型のナツクルコングG3、デイロフオスG3が現れた。

しかし、ジェノスピノはそれらをA-ZロングキャノンとA-Z高熱炎放射機を放つて次々と撃破していき、帝都メガロポリスの中に入り、シーザー、オメガレックスもストームのキングとガルド將軍のトリケラドゴス率いる同盟軍の後に続いて帝都に入った。

シーザーたちが帝都に入ったら、街は逃げ惑う人々に溢れ、さっきの攻撃で兵士と共に犠牲になった一般市民もいた。

ジェノスピノ、オメガレックスはデイロフオスG3、量産型のナツクルコングG3、ステイレイザーG3、ギルラプターG3、キャノンブルG3と交戦した。

帝都の市民はギャラガー親衛隊のゾイドと戦うジェノスピノとオメガレックスを見て、

「見ろ！ あれは皇帝陛下のジェノスピノとオメガレックスじゃねえか!! しかもあのライガーと一緒にいやがるぜ！」

「まさか、反乱軍の手に渡っちまったのか！」

「皇帝陛下のゾイドにして、我が帝国の誇りであるあの二大破壊龍を奪った上に、何の宣戦布告も無しに、しかも市民の命も考えないなんて、やっぱり反乱軍は世界の秩序を乱す悪魔だ！」

それを見たウィルは複雑な表情をした。オリジナルデスザウラーであるギヤラガー三世が支配する帝国から世界を救おうとしているのに逆に市民に憎まれるということに、ジェノスピノ、オメガレックスが親衛隊ゾイドを蹴散らす中、宮殿からデスレックス、タツカー元帥のナツクルコングG3、そして、アーミテージ大尉のゼロステイレイザー、ドクターマイルスのゼロフアントス率いるゼロフアントス部隊が現れた。それを見たりセルは操縦桿を強く握り、

「俺の両親とグラッドの仇……」

「あのナツクルコング、まさか、あれでもまだ生きていたとは！」

レイルは現れたデスレックスを見るが、その姿は紫ではなく、かつてギヤラガー一世と共にワイルド大陸を靈感させた通常姿のデスレックスだった。そして、そのコクピットにはかつてのギヤラガー一世のスタイルと服装を思わせるように、上半身裸で、皇帝

即位の時に羽織った礼服の赤いマントを着用したガネストが乗っていた。

「ちよつと待つて！ 何でデスレックスは紫龍形態じゃないんだ?！」

レイルの問いにガネストは、

「何言つてんの？ いきなりフルパワーで行つたら、ゲームが楽しめないじゃん！

それに、ジェノスピノ、オメガレックスのパワーを試すにはこの形態がちょうどいいかと思つてね。」

「シーザー、ジェノスピノ、オメガレックスの3体でデスレックスに挑み、その後にはゼログライジスと残りの帝国軍を倒す予定だったが、流石にそう簡単には行かせてくれな  
いか…。」

「大丈夫ですよ。ストームさん！ 何があつても俺たちは負けない!！」

「そうだな。俺たちは人間とゾイドの共存のためにネオデスマタル帝国と戦うのだ  
!!」

それを聞いたガネストはため息をつき、

「相変わらず、フリーダム団と対して変わらないベタな動機だね！ そんな世界なんて  
実現なんかしないんだよ。 何故なら、全ての人間とゾイドは皆、ボクの元にひれ伏  
すんだから!！」

それを聞いたレイルは、

「そんなものはただのエゴだ！ ゾイドを大切に思う気持ちと民のために尽くす力が無くては本当の皇帝とは呼べない！」

「ボクと同じ帝王ギヤラガー一世のクローンにして生まれ変わりの分際で、随分綺麗事言ってくれるじゃないか！ いいよ。キミはボクの手で始末してやる。」

「レイル…」

「ウイル、心配するな。あいつは俺の弟にして僕の分身。だから、あいつの相手は僕がやる！」

「そうだな。なら、シーザー！ 俺たちはあのゼロステイレイザーをやるぞ！」

「なら、俺は、父さんと母さん、そして、グラッドの仇であるあのナツクルコングG3を相手にする！ ジエノスピノの力で今度こそ恨みを晴らしてやる！」

「そして、俺はドクターマイルスとその取り巻きのゼロファントスだな！ 行けるか

？ キング。」

グオオ〜！

ストームの問いにキングは咆哮を上げた。

「おいおい、ちよつと待てよ。俺もやらんとは一言も言っていないぜ！」

声を上げると同時にドレイクとジャンがキングの横に来た。

「ドレイク。」

「そいつには俺にとつても借りがあつた。それにもう一度、フリーダム団のコンビとして今度こそ、デスメタルとの因縁に決着をつけるとしようぜ！」

「ふ、皮肉だな！ まさか、それぞれの子孫が再びデスメタル帝国を倒すタッグになるなんてな。いいぜ！ いつちよ、付き合つてやるか！」

シーザーたちはデスレックスたちとそれぞれ対峙した。

「じゃあ、ゲームをするよ！」

そう言つたガネストはデスレックスで、レイルのオメガレックスに勢いよく突つ込んで行つた。そうはさせじとオメガレックスも突つ込んで行き、デスレックスとオメガレックスの互いの頭部がぶつかり合つた。2体の強烈なぶつかり合いで、衝撃波がほとばしり、周りの帝都の誇る建物が破壊されていった。

ジェノスピノはA-ZロングキャノンをナツクルコングG3に撃ち込むが、ナツクルコングG3はびくともしない。

「バカな！」

「残念だつたな！ あの後、ドクターマイルスの改造で更に装甲が強化されたのでな。

今となっては、ジェノスピノ相手でも負ける気はせん。

あの男もとんだ無駄死にだったな！ 我が帝国軍から脱走しなければ、こんなことにはならなかったといのに！」

「なんだと！ ウオー!! ジェノスピノ、進化 解放！ エヴォブラストー!! ジェノサイドクラッシュャー！」

エヴォブラストしたジェノスピノはジェノソーザーでナツクルコング3に斬りかかろうとするが、ナツクルコングG3なんと、ジェノソーザーを両手で真剣白羽取りをするかのように止めた。

「何?!」

「いくら、ジェノスピノと言えども、ライダーが陛下じゃなければ、所詮、この程度か！」

「くー！」

ソーザーはEシールドを張りながら、ゼロステイレイザーに突っ込んで行った。ゼロ

ステイレイザーもすかさず、Eシールドを張り、その攻撃を防いだ。

「Eシールドだけでも破れば、勝機はきつと出る！」

しかし、その時、背後からドクターマイルスのゼロファントスのデイゾルレーザーキャノンのようなレーザーが3発放たれ、レーザーに直撃した。背後にはEシールドが張れないため、その攻撃を諸に受け、倒れるレーザー、後ろを振り向いたら、ドクターマイルスのゼロファントスの量産型が3体いた。中央のゼロファントスにはグレッゲル准将が乗っていて、残りの2体にはブリューゲル大尉とアッシュが乗っていた。

「残念だったな！ 貴様の相手には我々がいるんだよ！」

「コルクの総督の地位を奪われた恨み、今度こそ晴らしてやる！」

「貴様を倒せば、俺はいずれ皇帝陛下の側近として出世できる！」

「帝国軍の准将とあの時の奴隷都市の総督にカティアを裏切った奴か！」

「デイゾルレーザーキャノン！」

ドクターマイルスのゼロファントスはゼロブラスト技のレーザーキャノンをキングとジャンに向けて放つが、キングとジャンは瞬時に避け、すかさずワイルドブラストした。

「燃えろ、キング！ 俺の魂と共に、進化 解放！ エヴォブラストー!! キングオブクローブラスト！」

「猛烈、ジャンン！ 俺の魂と共に、進化 解放！ エヴォブラストー！！ 新・音速殺！」  
ワイルドブラストしたキングとジャンンはドクターマイルスのゼロファントスを避け、  
後方にいるゼロファントス部隊の内、4体を一瞬で葬った。

「何のつもりだ？ この私を狙わないとは、」

「へ、貴様とやりあう前に貴様の取り巻きを始末しようと思っただけ！ そうしないと  
フェアじゃないからな。」

「ふん、愚かな。仮に私の部隊を全滅したところでも、私には勝てん。」

帝都で、ワイルドたち同盟軍とガネスト率いるギャラガー親衛隊と帝国軍が激しい戦闘  
を繰り広げている中、究極の玉座の後ろにある倉庫で、ゼログライジスが眠り、そ  
のkokopittoにギャラガー三世が乗っていた。

「遂に始まったか。反乱軍との最後の決戦、そして、私とゼログライジスが究極進化へ





## 第51話「最強龍の目覚め」

帝都メガロポリスの宮殿の司令室、そこにはベケット少将が指揮を取っていて、その横にはデーニツツ中将、ルメイ大将もいた。兵士はベケット少将に、

「少将の指示通り、反乱軍は我々の罠にかかりました。」

「どうやら、我々の計画通りになったようですね。これで、ギヤラガー三世陛下もお喜びになるでしょう。」

「だが、奴らを侮るな！ それにしても皇帝陛下の操るデスレックスと元皇子の操るオメガレックス、同じギヤラガー皇帝一族の血を引く者同士が操るテイラノサウルス種同士の対決とは、これは中々見物ね。」

そう言ったベケット少将は映像で映っているデスレックスとオメガレックスを見た。

ギユオオー!!

グオオー!!

デスレックスとオメガレックスは互いに闘争本能を剥き出しにし、再びぶつかり合った。オメガレックスはデスレックスの首に噛み付こうとするが、デスレックスは瞬時に態勢を変えてそれを避け、逆にオメガレックスの首に噛み付いた。

グルルル…

オメガレックスは必死に脱出しようとするが、デスレックスは前足でオメガレックスの身体を掴み、強靱な大顎でスツポンの如く離さなかった。

レイルは何とか脱出する手段を探す中、A―Z3連誘導ミサイルのスイッチを押し、3発の誘導ミサイルがデスレックスの首に直撃した。

ギユオオー!!

苦しむデスレックスは顎を外し、すかさず脱出したオメガレックスは対地対空両用速射砲とA―Z3連誘導ミサイルをデスレックスに向けて同時に撃ち込んだ。誘導ミサイルと両用速射砲の同時発射で煙に包まれるデスレックス、

「はあ、はあ、はあ、これで少しは効いたかな?」

しかし、煙が晴れるとデスレックスは何事もなかったかのように身体を払い、コク

ピットにいたるガネストも首をカクカクと回した。

「うーん、今のはちよつと効いたよ。オメガレックスに乗っても大したことなかったかと思っただけ、随分やるみたいだね。じゃ、そろそろこっちも本気出すか。」

ガネストはオリジナルデスメタルキーを取り出し、

「デスレックス、強制 解放！ デスブラストー!! ジェノサイドドリル！」

デスブラストしたデスレックスはウブラドリルを剥き出しにして猛スピードでオメガレックスに向かって走って行った。

オメガレックスはA—Z三連誘導ミサイルと両用速射砲を放つが、デスレックスはそれをものともせず、走って行き、そのままオメガレックスにのし掛かった。デスレックスはウブラドリルでオメガレックスの顔を潰そうとするが、オメガレックスは前足でデスレックスの顎を掴み、それを阻止しようとする。

ゼロステイレイザーのEシールドに耐えるシーザーに乗るウィルは苦戦するオメガレックスを見た。

「レイル!!」

「何処を見ている?」

ウィルが目を離れたその時、ゼロステイレイザーとグレッゲル准将、ナツシュ、ブリューゲル大尉の操るドクターマイルスの量産型ゼロファントスがそれぞれの方向か

ら襲いかかってきた。

絶体絶命のウィルとシーザーに、突然、2体のトリケラドゴスとアレックスのウィーリー、アツシユのバンブ、ケンのゼルが現れた。2体の黒いトリケラドゴスにはガルド將軍とマツクが乗っていた。

「ガルド將軍に皆！」

「ウィル、こいつらは我々に任せろ。どうやらあのデスレックスは思いの外、厄介な相手のようだ。

オメガレックス一体でも太刀打ち出来ないようだ。直ぐにレイルの援護に回れ！」

「はい！ 行くぞ、シーザー！」

シーザーは直ぐにオメガレックスの元に向かった。

「くそ、逃がすか！」

ゼロステイレイザーは直ぐに後を追うとするが、ガルド將軍のトリケラドゴスたちが立ちほだかり、

「貴様らの相手は我々だ！」

「く、こしやくな！」

リセルのジェノスピノはジェノソーザーで何度もナツクルコングG3に当てようとするが、ナツクルコングG3は全て両手で防いだ。

「どうした？ その程度か！」

「く！」

その時、突然背後から攻撃し、直撃したナツクルコングG3は苦しみだし、動きが鈍くなった。

「なんだ!? 一体何が起こった！」

狙撃したのはクリスのジャックだった。

「ゾイドの神経を麻痺するように改良が施された対オメガレックス用のPGM-11は思ったより効果があったようだな！」

「クリス！」

「ここは俺たちに任せろ！」

「しかし、」

「あのですはどうかやら、オメガレックス一体で戦えるような相手ではないようだ。ウイルと一緒にレイルを援護しろ！」

「いや、しかし。」

「なあに、コマンドーの仇討ちをしたいのは俺たちも同じだ！俺もリーダー同様、コマンドーとの付き合いは長いからな。行け！」

「わ、わかった！」

そう言うと、ジェノスピノは直ぐにオメガレックスの元に向かった。

「おのれ、このまま逃がしはせんぞ！」

追うとするが、ナツクルコングG3が身動き出来ない状態になっていた。下を見ると、足がジョンのキールの糸で縛られていた。

「コマンドーの仇討ち、俺も協力しますよ。隊長！」

「アブソリユートショット！」

「ナインバーストキャノン！」

同時にカーター大佐のスナイプテラとシバルツ中佐のキャノンブルもナツクルコングG3に攻撃して現れた。

「アッカーマン中将の仇討ちとして我々も協力させて欲しい。」

「この星と民とゾイドを守るために我々は戦う。」

「ふ、好きにしろ。」

「貴様ら!!」

「キングオブクローブラスト!!」

「新・音速殺!!」

ストームのキングとドレイクのジャンの連携によってドクターマイルス率いるゼロファントス部隊は全滅した。

「これで、取り巻きは始末した。残りはてめえだけだぜ!」

「バカめ! ゼロファントス部隊を全滅したからといって、私のゼロファントスに敵うわけがない。」

「強がりも今のうちだぜ! なんとたつて、俺とこいつは旧デスメタル帝国を壊滅したフリーダム団の最強コンビの子孫。貴様ごときにやられる俺たちじゃないぞ!」



「ふん、なら、やってみろ！」

「やってやろうじやねえか！ おい、行くぞ、ストーム！」

「ふ、お前も随分変わったな！」

「今はそんなことどうでもいい！ とにかく、目の前のムカつくジジイを倒すぞ！」

「じゃ、やりますか。 キングオブクローブラスト!!」

「新・音速殺!!」

キングとジャンの同時攻撃がドクターマイルスのゼロファントスに直撃したが、ゼロファントスは巨大な牙でその攻撃を防いだ。そして、ゼロファントスはそのまゝ2体を突き放した。

「私のゼロファントスの牙はダイヤモンドで構成されている。いくら、貴様らの攻撃といえども、通じはせん！ デイゾルレーザーキャノン！」

ドクターマイルスのゼロファントスのレーザーキャノンが放たれ、キングとジャンはそれを避けるが、レーザーはキングとジャンに倒されたゼロファントスの身体を一気に貫通し、そのゼロファントスは瞬時に石化した。

「そして、私のゼロファントスのデイゾルレーザーキャノンを食べらえば、そのゾイドは死ぬ！」

「やっぱ、そう簡単には行かないか。」

オメガレックスは必死にデスレックスのジエノサイドドリルを喰らわなかったために抵抗するが、デスレックスはそれ以上の力でオメガレックスの口内の荷電粒子砲にウブラドリルを入れようとしている。

「せっかく楽しめるかと思っただけど、とんだ拍子抜けだったね。じゃ、さよなら。」  
その時、突然、デスレックスの動きが止まった。

「ん？ どうしたのかな。」  
後ろを見ると、シーザーがチェーンアンカーでデスレックスの身体を引っ張っていった。

「ウイル！」

「待たせたな、レイル！」

「へえ、まさか、キミも参戦するなんてね。ようやく面白くなってきたね。」

「参戦したのは俺だけじゃないぞ！」

「ん？」

その時、ジェノスピノがジェノソーザーを振り回して勢いよくデスレックスに向かった。

「ジェノサイドクラッシュャー!!」

ジェノスピノはジェノソーザーでデスレックスのコクピットに攻撃した。

「ぐー」

ギョオオッ!!

その攻撃で苦しむガネストとデスレックス、デスレックスは避けようとするが、オメガレックスもデスレックスの身体を掴んだため、デスレックスは逃げられない状態になった。

ジェノスピノは攻撃の手を緩めず、そのまま攻撃を続けた。デスレックスはソーザーのチェーンアンカーで身動きが出来ず、そのままジェノスピノの攻撃を受け続けたが、ジェノスピノが10発目をお見舞いしようとしたその時、突然、デスレックスの身体が紫色に発光した。

「目覚めよ、紫龍…。」

デスレックスは紫龍形態になり、全身から衝撃波を放ち、ソーザーとオメガレックス、

ジェノスピノを退けた。

「改めて礼を言うよ。キミたちの攻撃と闘争心のおかげで、ボクとデスレックスの闘争本能も呼び覚ましたよ。じゃ、こっから、本番と行こうか。」

紫龍形態になったデスレックスを見たウィルはレイルとリセルに、

「レイル、荷電粒子砲を撃てるか？」

「撃てるけど、こんな市街地に撃つたら…」

「いや、市街地に放つんじゃない！ デスレックスを宮殿の近くまで誘導したところに荷電粒子砲を撃つんだ。祖そうすれば、市民への被害は低減される。」

「でも、どうやって？」

「リセル、一緒にデスレックスを誘導すること出来るか？」

「お前に言われなくてもわかっている！ ジェノサイドクラツシャーでも奴に致命傷は与えられなかった。だとするなら、奴を倒すなら、荷電粒子砲だ！」

「よし、シーザー、お前もやれるか？」

シーザーはその言葉を聞いてゆっくりとうなずき、

グルルル…。

「よし、行くぞ、シーザー！ リセル！」

シーザーとジェノスピノはデスレックスに向かって勢いよく走って行った。

「切り拓け、シーザー！ 俺の魂と共に、進化 解放！ エヴォブラストー！！ スピリットガンストラッシュュ！！」

シーザーはデスレックスにスピリットガンストラッシュュを放ち、デスレックスは煙に包まれた。煙が晴れると、目の前にはシーザーはいなく、ジェノスピノが現れた。

「ジェノサイドクラッシュャー！！」

それを見たガネストはニヤリとし、

「面白い。ジェノサイドドリル！！」

デスレックスのウブラドリルとジェノスピノのジェノソーザーがぶつかり合い、両者一歩も譲らない姿勢を見せた。

その時、ジェノスピノの背後からシーザーが現れ、デスレックスに向かって飛び込んできた。

「行くぞ、シーザー！ Eシールド展開！」

グオオ〜！！

「スピリットバーストブレイク！！」

「ふん！」

デスレックスはデスジョーズでシーザーを掴み、その攻撃を防いでしまった。デスレックスはウブラドリルでシーザーのEシールドを貫こうとした。

「う、く……」

「いい連携だったけど、それでもボクには勝てないよ。」

シーザーは身動きが取れない状況だったが、その時、ウィルはニヤリとし、それを見  
たガネストは、

「ん？ 何がおかしいの？」

「おかしいんじゃない。計画通りだよ！」

その時、ジェノスピノがジェノソーザーに火炎放射を放ち、ジェノソーザーの鋸が一  
瞬で炎に包まれた。

「これが、ジェノスピノ最大の必殺技、煉獄ジェノサイドクラツシャー!!」

ジェノスピノは炎に包まれたジェノソーザーに切りつけた。その凄まじいパワーは  
通常のジェノサイドクラツシャーを遥かに上回り、デスレックスのデスジョーズにやっ  
と傷をつけた。

「少しはやるようだね。でも、それでもデスレックスにとつてはかすり傷に過ぎない  
よー！」

「一人ならな。行くぞ、シーザー！」

グオオッ!!

その時、なんとシーザーは全身にEシールドを張り、デスジョーズの拘束が少し外れ、

シーザーはそのまま回転しながら、スピリットガンストラッシュを放ち、デスレックスのデスジョーズから脱出した。それを見たガネストは驚き、

「さっきのジェノサイドクラッシュャーといい、全身にEシールドを放つなんて普通に考えても出来るはずがない！

まさか、奴らの思いがゾイドに届いて不可能を可能にしたというのか!？」

「ウイル、あの両脇の邪魔な牙、ぶった斬れるよな!？」

「ああ、俺とシーザー、そしてリセルとジェノスピノの力があれば、出来るさ!！」

その時、シーザーとジェノスピノの身体にオーラが放たれた。

「行くぞ! スピリットバーストブレイク!！」

「煉獄ジェノサイドクラッシュャー!！」

シーザーとジェノスピノの攻撃がデスレックスの左右のデスジョーズに直撃し、その凄まじい攻撃で、デスレックスは苦しみだした。

ギユオオ〜!!

「デスレックスが苦しんでる!?! まさか、こんなことが…!?!」

シーザーとジェノスピノはそのままデスレックスを後退させ、宮殿の門まで行った。そして、門を突き破ったその時、

「いっけ〜!!」

デスレックスの左右のデスジョーズが斬り落とされ、デスレックスはその衝撃で苦しんだ。

ギユオオ〜!!

「バカな、デスレックスの顎が斬られるだど!?」

「やった、デスレックスの顎を破壊した!」

「いい気になっているのも今のうちだよ! いくら、顎を破壊しても、主力武器のウブラドリルがまだ残っているよ!」

デスレックスは口内のウブラドリルをむき出しにするが、

「いや、まだ、取って置きがあるよ!」

「何?!」

その時、デスレックスがシーザー、ジェノスピノと戦っている間に向こう側にいるレイルのオメガレックスが荷電粒子砲を放つ体勢を取り、デスレックスに向けて照準を向けた。

「ターゲット、ロックオン。行くぞ、オメガレックス!」

ギユオオ〜!!

「オメガレックス、進化 解放! エヴォブラストー!! 荷電粒子砲発射!」

シーザーとジェノスピノは直ぐにその場を離れ、宮殿にいるベケット少将は兵士に、



「直ぐに宮殿内にEシールドを張れ！ 陛下を御守りしろ！」

「駄目です！ デスレックスはEシールドの範囲外です。」

「何!？」

オメガレックスの荷電粒子砲がデスレックスに直撃し、司令室の兵士も宮殿が破壊されないようにEシールドを展開した。宮殿の周囲は爆発し、巨大なキノコ雲が現れ、デスレックスはその中に飲み込まれた。

数分後に煙が晴れると、デスレックスの姿はなく、巨大なクレーターが存在していた。それを見たタツカー元帥、宮殿の司令室にいるベケット少将、ルメイ大將、デーニッツ中將、量産型ゼロファントスに乗るグレッツェル准將、ナツシユ、ブリューゲル大尉、アーミテージ大尉らは驚愕な表情をした。

「そんな…、皇帝ギヤラガー四世陛下のデスレックスが負けるだなんて…」

「こんなことあり得ないわ！」

「まさか、我々ネオデスメタル帝国の誇りたるデスレックスが反乱軍ごときに！」

レイルはタツカー元帥たちに、

「これ以上の戦いは無意味だ！ 大人しく降伏しろ。」

帝都メガロポリスから離れた場所にグラビティキャノンで照準を合わせたクルーガーは、

「どうやら、デスレックスに対しては、私が手を出すまでもなかったようだ。それにしても、ウィル、立派になったな。天国のデイビットも喜んでいるだろう。」

宮殿の方を見たドレイクはドクターマイルスに、

「へ、どうやら、1人目の皇帝はやられちまったようだ。もう1人、先帝はいるが、もはや、今の貴様らに勝ち目は無い。かつての旧デスメタル以上に無様な醜態を晒す前に降伏したら、どうなんだ？」

その時、ドクターマイルスは笑い声を上げた。

「フフフフ、ハハハハハハハ!!」

「何がおかしい？」

「それで、貴様らは勝ったと思っているのか？ 本当に人間とは愚かな生き物だ！」

「何?!」

その時、キングが激しく警戒し、

グルルル、

それを見たストームは、

「キングのこの警戒、まさか!」

同時にシーザーも激しく警戒した。

グルルル、

「どうした? シーザー!」

その時、突然倒れたデスレックスが起き上がり、天に向かって思いっきり咆哮を上げた。

グロロロロオ〜!!

同時にデスレックスの頭部や顎の横に火炎放射機に似た突起がデスレックスの装甲をぶち破って現れ、その突起から炎が放たれ、デスレックスの身体がマグマのような赤い色になり、全身が炎に包まれた。

宮殿の玉座の間の倉庫にいるゼログライジスが何か感じ取ったかのように咆哮を上げた。コクピットにいるギャラガー三世は、

「我が分身在喜びの咆哮を上げている。ほう…、遂にデスレックスが獄炎龍形態になったのか。全ては計画通りだな!」

デスレックスは真の姿になれたことに喜ぶかのように目一杯咆哮を上げ、その咆哮が

帝都メガロポリス中に響いた。  
T o b e c o n t i n u e d

## 第52話 「デスレックス獄炎龍」

デスレックス獄炎龍は目一杯に咆哮を上げた。それを見たウィルたちは驚愕した。

「そんな…、まさか、デスレックスにもう一つの形態があつたなんて。」

「あの形態があることに気付かず、倒せないなんて、やつぱり、僕は甘いのか。」

グロロロ。

「うくん、今のはいい攻撃だったよ。そのおかげで、ボクのデスレックスは更なる力を手に入れたよ！」

ん？ 手が動かない、頭も、足も、どうなって… ん？」

ガネストがコクピットの周囲を見ると、オリジナルデスメタルキーの刺しこんでいるところから金属の神経組織のようなものが伸びて周囲が全て金属で侵食していて、ガネストの腕や頭の後ろ、背中、足が金属で侵食されたコクピットにへばりついていて、腕や足も徐々に金属に侵食されていた。

「これは？」

デスレックス獄炎龍形態を見たドクターマイルスは、

「これが私が望んでいたデスレックスの真の最終形態、デスレックスの闘争本能が解

放され、ゼログライジスのゾイド因子の力を完全に物にしたものだ。

だが、余りに強大なため、並みの人間が乗れば、一瞬で廃人になるので、この形態になるにはライダーは必要ないとの記録が出たが、皇帝ギヤラガー四世陛下にはデスレックスのDNAを植え付けているため、乗りながら獄炎龍形態への変化を可能にした！

そして、その姿はデスレックスと融合した証拠、皇帝陛下、あなたは遂にデスレックスそのものとなったのです。」

「ボクがデスレックスそのものに。フッフッフ、面白い、面白いよ。ボクがデスレックスになるなんて、これほど面白いものはないよ。」

金属に身体が侵食されてデスレックスと一体化したことに全くの動揺がないどころか、それに喜ぶガネスストにウイルとレイルは信じられないような表情をした。

「いくら、姿が変わっても同じことだ。それに貴様はさっきの荷電粒子砲を喰らってもう瀕死の状態だ。これで、終わりにしてやる。ジェノサイドクラッシュャー!!」

デスレックス獄炎龍形態に突っ込むジェノスピノ、

「待て、リセル!」

「死ねえく!!」

突っ込むジェノスピノにデスレックスはジェノスピノ以上の火炎放射を吐いた。ジェノスピノは一瞬で炎に包まれたが、ジェノスピノはそれを利用して再びジェノソー

ザーを炎に包み、そのままデスレックスに突っ込んだ。

「煉獄ジエノサイドクラッシュャー!!」

しかし、デスレックスはその攻撃を顎で止めた。

「何?!」

ジエノスピノはジエノソーザーを回そうとするが、デスレックスは顎で完全にジエノソーザーを喰わえ、そのまま噛み砕こうとしていた。

デスレックスの強靱な顎でジエノソーザーにひびが入っていく。ジエノスピノはそこから脱出しようとするが、デスレックスはそのままジエノスピノを振り回し、シーザーとオメガレックスのいるところまで吹っ飛ばした。

「いや、まさか、ここまでとは思わなかったよ。じゃ、ここから本番。倍返しと行くか。」

レッドケルベロス本社のビル、エマは窓越しで心配そうに外を見ていた。ユリスはそんなエマの元に行き、

「エマ、どうしたの?」

「ねえ、ユリスさん、私、ここで待っているだけでいいの? やっぱり私もゾイドに乗ってレイルやウイルと一緒に戦った方がいいのかしら?」

「どうして?」

「だって、私、いつもレイルやウイルに助けってもらってばかりで2人に何も助けるところが出来なかったの。だから、いつも守ってもらえばかりじゃ、嫌なの! 私も2人のために何かしないと!」

「そうね、確かにそうよ。でもそれは今じゃない!」

その時、声を上げたのはジェニファーだった。

「どうして、あなたがここに?」

「行こうかと思っただけど、ジョンが今回の戦いは凄く危険で君を死なせたくないからと言って出撃を断念したの。」

ま、確かにあたしにとってもきつい戦いかもね。

でもね、エマちゃん、こういう時だからこそ、自分に何が出来るかを考えるの。そうすれば、その時期はきつと来るわ。」



「はい！」

ジェニファアの言葉を聞いたエマは笑顔で返事した。その様子を壁越しで見ているドクタースマイスとスレイマーズたちは、

「ああ、やっぱりエマちゃんもホントに健気でいい子だ。」

「リーダー、なら、我々も何かしないといつまで経つても戦力外のままですよ！」

「いや！わたしはこのままエマちゃんたちの笑顔を見続けたい。」

「なあ、俺らって、結局この扱いなのかな？」

「今までの俺たちの苦労が……」

ストームのキングのツインドファンクとドクターマイルスのゼロファントスの牙がぶつかり合った。

しかし、キングのツインドファンクが一部裂け、ゼロファントスの牙に無傷だった。ゼロファントスはその強靱な牙でキングに襲いかかろうとするが、ジャンは咄嗟にキングを助け、難を逃れた。

「すまない、ドレイク。またお前に助けられるとはな。」

「気にするな。どうやら、あいつは俺たちが思っている以上に厄介な奴みたいだ。」

「ああ、奴は俺が今まで戦った中で間違いなく強い。」

「当然だ！ 私はオリジナルデスザウラーであるギャラガー三世陛下に仕える古代ゾイド人の末裔だ。」

いわば、我ら古代ゾイド人はこの宇宙で最も進化した人類！ たかが下等の人間が乗るゾイドと一緒にしては困る。」

「へ、自分たちの種族を絶対的な存在として他の者を虐げるその傲慢さ、いずれ、命取りになるぜ！」

「ふん、なら、やってみろ。」

「どうやら、極限解放を使うしかなさそうだな。やれるか？ ドレイク。」

「貴様に言われなくてなくともな。」

「へ、じゃ、いっちゃよ、やりますか。キング、進化極限解放!!」

「ジャン、進化極限解放!!」

「ふん。」

クリスのジャックとカーター大佐のスナイプテラがタツカー元帥のナツクルコングG3に次々と撃ち込むが、ナツクルコングG3はものともしなかった。

「くそ、さつきまで効いたっていうのにあの野郎、ピンピンしてやがる。」

「私のナツクルコングG3を舐めるな!!」

ナツクルコングG3の対空速射砲がジャックとカーター大佐のスナイプテラに直撃し、ジャックとスナイプテラは少し傾いた。

シュバルツ中佐のキャノンブルがナツクルコングG3の足に向けて砲撃するが、ナツクルコングG3は全く通用しなかった。

ナツクルコングG3は強靱な腕でシユバルツ中佐のキャノンブルを軽く吹っ飛ばす。

「貴様らもあの愚かなアツカーマンのように始末してやるか?」

「く、アツカーマン中將をバカにするな!」

ガルド將軍のトリケラドゴスやキール、ゼルたちはゼロステイレイザーの攻撃を避けながら、グレッツゲル准將、ナツシユ、ブリューゲル大尉の乗るドクターマイルスの量産型のゼロファントスに攻撃した。

トリケラたちの連続攻撃でダメージを追い、コクピットにいるナツシユの機械化された身体も徐々にガタがついていった。

「何故だ! 皇帝陛下から与えられた最強のボディとこのゼロファントスに乗るこの俺が苦戦するだ?!」

その様子を見たケンは、

「貴様は機械化されたボディとその量産型ゼロファントスの性能に頼っているだけに過ぎない！　ただ、力に頼っているだけの者に勝ち目はない。」

「黙れ！　俺は病弱で比較的身体が弱く、故郷の村では何度も村の子供たちに苛められ、虐げる毎日を送り、オマケに自分の土地が悪質な借金取りに奪われるはめにもなった。親も他人に反論出来ない弱い人間だったため、俺はあんな弱い人間になった。」

そんな生活から抜け出すためにネオデスメタル帝国に入隊し、死に物狂いであらゆる戦闘訓練に耐え、そして、機械化手術を許され、どんな人間も一撃で殺せる程の力を持ち、陛下に認められ、親衛隊に入隊し、遂に陛下に仕える身分にまでのしあがった。

この世は全て力によって統一される。だから、俺は勝って勝って勝ち残って誰も言い訳出来ない強大な力を手にする。そして、こんな俺を認めてくれた陛下のために働くのだ！」

「哀れな。自分のコンプレックスを埋めるためにそこまで力に溺れるとは…」

その時、ゼロステイレイザーがゼルに襲いかかり、

「何処を見ている!?!」

しかし、横からガルド將軍のトリケラドゴスがそれを阻止した。

「あのデカぶつは私に任せろ！　お前たちはあの取り巻きの量産型を。」

「了解した！」

ゼル、ウイリーイ、バンプがナツシユのゼロフロントスの前に立ちはだかると同時にグレッゲル准将、ブリューゲル大尉のゼロフロントスもゼルたちの前に立ちはだかつた。

「貴様ら、調子に乗るのもいい加減にしろ！」

「そうだ！ 今となつては、俺もあのライガーと小僧によって、コルク総督の地位を剥奪されたが、この戦いでコルク総督の地位を奪い返す！」

「ウオー！ スピリットバーストブレイク!!」

「煉獄ジェノサイドクラッシュャー!!」

シーザーとジェノスピノは再びデスレックスにお見舞いした同時攻撃をデスレックスに当てようとするが、デスレックスは炎に包まれたデスジョーズでそれを同時に受け止めた。

「そんな!」

「何!?!」

「二度も同じ攻撃が通用するわけじゃないじゃないか!」

デスレックスはそのままシーザーとジェノスピノを振り回し、そのままオメガレックスに向かって走っていった。

オメガレックスはそれを止めるが、デスレックスはその強靱なパワーでオメガレックスを押し去っていった。

「く、なんてパワーだ!」

「今度こそ、死んでもらうよ。」

「なら、これはどうだ。」

その時、オメガレックスの収束シールドがデスレックスの身体を挟んだ。

「何の真似かな?」

「お前のデスレックスと同じことをするのさ! お前のデスレックスは顎のデスジョーズで相手を挟んでそれをウブラドリルで破壊する。」

なら、それと同様にデスジョーズの代わりに収束シールドで挟んで超至近距離で荷電粒子砲を放つ。

これなら、いくらデスレックスといえどもこの至近距離で放たれたら、無事ではすまない。」

それを聞いたウィルは、

「止めろ！レイル。そんなことしたら、お前も死ぬぞ！」

「それでも構わない。例え、僕の命が尽きてもこいつを何としても止める！」

「いいのかな？ そんなことしたら、キミが大事にしているあの小娘とお姉さんがスツゴク悲しむと思うよ。」

「うー！」

それを聞いたレイルはレバーを離し、ガネストはその隙を狙い、

「だから、お前は甘いんだよ！」

デスレックスはオメガレックスの荷電粒子砲の口内に強烈な火炎放射を放った。荷電粒子砲に一万度以上の火炎が入り、オメガレックスはオーバーヒートしてしまう。

そして、オメガレックスが怯んだ隙にデスレックスはオメガレックスの首に噛みついた。オメガレックスは脱出出来ない状態になったが、シーザーがさかさずチェーンアンカーでデスレックスを掴んだ。しかし、デスレックスは動きを止めない。



「今さら、そんなのでボクを止められるとでも？」

しかし、ジェノスピノはジェノソーザーでデスレックスの首に攻撃した。

ジェノスピノはデスレックスの首を両断しようとするが、逆にジェノソーザーの刃が欠け、デスレックスの首には一切傷がつかない。

デスレックスは尻尾でジェノスピノを尻ぎ払った。

「リセル！ く、こうなったら、行くぞ、ソーザー！」

ソーザーは再びデスレックスに攻撃する態勢を取るが、

「無駄な足掻きは止めた方がいいよ。もし、攻撃したら、こいつの首をコクピットごとぐしゃっといっちゃうからね。」

「ウイル、僕に構わずやれ！」

「くー！」

帝都メガロポリスの向こう側にいるゴルドのкокピットに乗っているクルーガーはデスレックスに照準を合わせるが、

「オメガレックスがあんなに近くににいるんじや、グラビティキャノンを放つことが出来ない。どうすれば……」

ウイルもどうすればいいかわからず、動けない状態になったが、その時、シーザーが何かウイルに伝えるかのように頷く仕草をした。

「シーザー、お前、何か考えがあるのか?」

それを聞いたシーザーはゆっくり頷いた。

「ようし、行くぞ、シーザー!」

シーザーはEシールドを張り、攻撃の態勢を取った。

「あれ、いいのかな?」

シーザーはそのままデスレックスに向かってジャンプし、デスレックスの頭に向かって攻撃しようとした。

しかし、シーザーはそのままデスレックスを避け、攻撃を止めたかと思いきや、シーザーはデスレックスの下に潜り込み、死角に当たる首に向かって攻撃した。

「スピリットバーストブレイク!!」

シーザーの攻撃がデスレックスの首に直撃した。デスレックスは全くの無傷では

あつたが、デスレックスはその衝撃で一瞬口を離し、オメガレックスはその隙を逃さず、そこから脱出した。

デスレックスはシーザーを掴もうとするが、シーザーはそれを避け、オメガレックスの元に向かった。

「それがなんだっていうの？ デスレックスには大したダメージは受けていないよ。」

「シーザーの攻撃はお前を倒すことじゃない！ お前に捕らえられたレイルとオメガレックスを助けることなんだ！」

「だから、それがどうしたの？」

オメガレックスがデスレックスの元を離れたところを狙い、クルーガーはデスレックスにグラビティキャノンの照準を合わせた。

「よし、ターゲット補足！ ウィル、レイル、リセル、避けるー！」

その時、クルーガーの通信が入り、シーザー、ジェノスピノ、オメガレックスは直ぐにデスレックスから離れた。

「逃がさないよー！」

デスレックスはそれを追うとするが、帝都メガロポリスの向こう側に待機したゴルドは二門のグラビティキャノンをデスレックスに向けて2発同時に放った。

ゴルドの放った2発のグラビティキャノンの弾がデスレックスに直撃した。周囲は

一気に超重力に包まれた。デスレックスはその超重力に押し潰されたかと思いきや、超重力が移動し、なんとデスレックスは自力で超重力を押し戻していた。それを見たクルーガーは驚愕した。

「グラビティキャノンの超重力を自力で押し戻すなんて、そんなあり得ない!!」

「紫龍形態でも通用しなかったグラビティキャノンがまさか、獄炎龍形態になったデスレックスに通用するでも?」

デスレックスはグラビティキャノンの超重力をそのまま押し返し、超重力がシーザーたちの方に向かっていった。シーザーたちは何とかそれを避けるが、帝都メガロポリスの街と同盟軍のゾイド、帝都の市民たちも巻きこまれて一瞬で崩壊した。それを見たレイルは、

「お前、なんの罪もない一般市民まで巻き込んで何とも思わないのか!」

「思わんねえ。所詮そいつらはボクとボクの帝国のものに働く道具に過ぎないんだよ! 巻き込まれたのは運が悪かったと思うんだな。」

「ゆ、許さない、お前だけは絶対に許さない!」

「そんなに意気がつても勝てるのかな? キミのオメガレックス、さっきのデスレックスの攻撃で随分ダメージ喰らってるみたいだし。」

その言葉通り、オメガレックスの身体と荷電粒子砲の口内に火花が散っていた。

「く！」

宮殿の倉庫にいるゼログライジスのコクピットにいるギヤラガー三世は、映像でその様子を見て、

「随分面白くなってきたようだな。では、そろそろあの実験体を使うとするか。」

ギヤラガー三世の手が紫色に発光し、同時にゼログライジスの角のマインドホーンも紫色に発光し、同時に背後にいるゾイドたちが動いた。

やがて、地面が揺れ、宮殿の周辺の地面から何やらゾイドが自力で地面を割けて這い上がってきた。

現れたのは白いカラーリングと紫色のラインが入ったデスレックスを筆頭にライガー以外の全てのゾイドがアーミテージ大尉のゼロステイレイザーのようにゼロファントス同様に白いカラーリングと紫色のラインが入ったゼロゾイドが現れた。それを

見たウィルたちは驚愕した。

「何だ？ あのゾイドは!？」

ゼロゾイドが現れたのを見たドクターマイルスは、

「おお、遂に皇帝陛下があの実験体と呼び寄せましたか！」

それを聞いたレイルは首を傾げ、

「実験体？」

「全てのゾイドを我々ネオデスメタル帝国の支配下に置くため、全てのゾイドやクローン体にゼロファントスと同じゾイド因子を植え付けた研究をした実験体。

アーミテージ大尉のゼロステイレイザーはその試作品。そして、我々はそれを遂に完成したのだ！」

「研究所に新たなゾイド改造のために捕獲された野生ゾイドや帝国、共和国のゾイドを集めていたのはそのためだったのか！」

「私たちも忘れないで欲しいかしら。」

その時、ベケット少将の乗るドライパンサーG3が現れ、同時にルメイ大将、デーニツツ中将の乗るディメパルサートランスもゼロゾイドとなって現れた。

「あなたが楽しくやっているのに、私たちだけ仲間外れなんて不公平でしょう？」

「そうだ。パワーアップしたドライパンサーの力見せてやる。」

「ゼロファントスのマインドホーンの力を受け継いだダイヤモンドパルサーランスの新たな力も見せてやる。」

「ふ、好きにするがよい。ゼロゾイド軍団よ！ 我が帝国と皇帝陛下のために反乱軍を蹴散らせ!!」

ベケット少将のドライパンサーG3を筆頭とするゼロゾイド軍団は同盟軍のゾイドたちに向かって突っ込んでいった。

ストームのキングやガルド將軍のトリケラドゴスたちは応戦するが、多勢に無勢な上にゼロゾイドは通常の姿を遥かに上回る力で同盟軍を圧倒していた。

シーザーも援護に回ろうとするが、デスレックスが前に立ちはだかり、火炎放射を浴びてしまう。

シーザーはEシールドで防ぐが、デスレックスはすかさずシーザーを蹴り飛ばしてしまう。

キングたち同盟軍のゾイドがゼロゾイド軍団に苦戦する中、突然、帝都メガロポリスの向こうから謎の砲撃がゼロゾイドの前を防いだ。

現れたのはマックの乗るトリケラドゴスとメカトピア共和国の評議会議員の乗るミクロラプトル種のゾイドとその副官が乗るグラキオサウルス率いるメカトピア共和国軍のゾイドだった。

そして、その周りには無数のゾイドたちの影が現れた。

その無数の影のゾイドたちを見たウィルたちは信じられないような光景を見るかのような表情をした。

T o b e c o n t i n u e d



## 第53話「究極完全龍 アルティメットゼログライジス」

現れたメカトピア共和国軍のゾイドの周りにいたのは何と野生のゾイドたちだった。それを見たウイルは、

「凄い！ 野生のゾイドたちが俺たちを助けに来てくれたのか!!」

野生のゾイドたちは一斉になってギヤラガー親衛隊ゾイドに向かった。

ギヤラガー親衛隊のキャノンブルG3、バズートルG3、デイトフォスG3は迎撃しようとするが、野生ゾイドたちはメカトピア共和国のゾイド同様に、この地球とゾイドをネオデスマタル帝国の手から救うと言わんばかりにその攻撃を全てはね除け、親衛隊ゾイドを次々と蹴散らしていった。

「たかが、野生ゾイドごときが我がネオデスマタル帝国軍に勝てるだけでも!」

ベケット少将のドライパンサーG3率いる四天王三人のゾイドが迎え撃とうとするが、野生ゾイドたちはギヤラガー親衛隊ゾイドを遥かに上回る数に有無を言わし、ゼロファントスと同じゼロゾイド化した四天王ゾイドすらも苦戦させた。

タツカー元帥のナツクルコングG3も圧倒的な火力で数体蹴散らすも圧倒的な数に對抗出来ず、苦戦し、それを見たクリスとカーター大佐は、

「よし、今だ！ カーター大佐。」

「了解！ アブソルフトショット!!」

カーター大佐のスナイプテラの攻撃とクリスのジャックのPGM-11のミサイルがナツクルコングG3の両目に直撃し、目が破壊され、ナツクルコングG3は苦しんだ。「くそ、帝国の反逆者の分際で生意気な！」

ゼロゾイド軍団はバイオアシッドの毒の入ったゼロブラスト技で、野生ゾイドを攻撃するが、野生ゾイドたちはそれにも怯まず、善戦していった。

グレッゲル准将とブリューゲル大尉の量産型ゼロフアントスは野生ゾイドたちに押されているが、ナツシユのゼロフアントスだけは全て蹴散らしてやると言わんばかりに激しい死闘を繰り広げていた。

「どけどけ！ 何人たりとも皇帝陛下に指一本触れさせはしない。 うー！」

その時、背中と繋がっているケーブルから火花が飛び散り、同時にナツシユの身体にも火花が飛び散って、人工皮膚が剥がれ落ち、顔の右半分や半身が機械剥き出しになり、ナツシユの目のセンサーもイカれ、故障状態に陥っていた。

「う、ウォー!! こんな傷、どうってことはない！ 俺は機械の身体なんだ。こんなもの直ぐに修理出来るわ!!」

しかし、ナツシユは自分の身体など顧みず、戦闘を続け、野生ゾイドたちを蹴散らしていった。それを見たケンは、

「なんと、哀れな。自分の身体を改造しまくった挙げ句にもはや、自分の身体さえもどうでもよくなってしまったのか。」

「皇帝陛下に逆らうものは全員死だ!! 消えろく!!」

ゼルに襲いかかる量産型ゼロファントスにゼルは瞬時に避け、量産型ゼロファントスの顎に攻撃した。顎を破壊された量産型ゼロファントスの動きが徐々に止まりつつあり、同時にナツシユの身体も動きが止まりつつあった。

「なんだ? どうなってやがる! まさか、制御システムを破壊されたのか。そんな、俺はまだ死ぬわけにはいかない! ネオデスメタル帝国の未来と世界の秩序を守る… ために…」

ナツシユの目の色が消え、活動を停止したナツシユはそのままコクピットの中で倒れた。

「こうするしか他はなかった。人間の身体に戻れなくなったお前を止めるためには…」

倒れた量産型ゼロファントスを見たケンは何とも言えない表情をした。

「キングオブクロウブラスト!!」

極限解放したキングの攻撃とドクターマイルスのゼロファントスの牙がぶつかり合った。しかし、ゼロファントスはそれすらも跳ね返した。

「新・瞬撃殺!!」

極限解放したジャンも続けて攻撃するが、

「ふん、ディゾルレーザーキャノン!!」

ゼロファントスのレーザーキャノンがジャンの装甲を撃ち抜いた。撃ち抜かれジャンは苦しむ。

「ジャン、大丈夫か!? しっかりしろ!」

「力の差をまだ理解出来ていないようだな。」

「ち、あの野郎、冗談抜きで強いぜ。どうする? ストーム。」

「ドレイク、俺とお前の全身全霊のワイルドブラストであいつの目障りなレーザーキャノンと牙をやれるか?」

「なるほど、1人ずつ、奴のムカつく武器をぶったぎるつうわけだな！」  
「やれるか？」

「は、誰に口聞いている？ 俺は音速のドレイク様だぜ!!」

「へ、言うと思つたぜ！ じゃ、俺はあのムカつく牙をやるぜ。」

「なら、俺はあの鬱陶しいレーザーキャノンだな！」

「やれるか？ キング。お前の力で！」

グオオッ!!

「何をするつもりか知らんが、所詮は耐Bスーツが無ければ、ゾイドに乗れん下等な人間の子孫の劣等種が宇宙で最も進化した我が古代ゾイド人に勝てるわけがない。

それに、貴様らごときでは、陛下どころか、この私に傷をつけることすら出来ん！」

「ただの人間だろうが、古代ゾイド人だろうが関係ない。本当に強いのは人の思いと、ゾイドとの絆だ!!」

行くぞ、キング！ ドレイク！」

「おう、新・音速殺!!」

「ディゾルレーザーキャノン!!」

ジャンはドクターマイルスのゼロファントスのレーザーキャノンをギリギリでかわし、ジャンは全ての力を出しきるかのように超スピードでゼロファントスに突っ走っ

た。

「バカな、奴等にまだこんな力があるか?」

「喰らえ、極限・新・音速殺!!」

ジャンの攻撃がゼロファントスの背中中のレーザーキャノンに直撃し、同時にレーザーキャノンが真つ二つに割れ、ゼロファントスの背中が爆発炎上した。

「何!?!」

「今だ、ストーム!」

「よし、この一撃に全てを込める。極限キングオブクロウブラスト!!」

キングのツインドリファングとゼロファントスのダイヤモンドの牙がぶつかり合い、激しい衝撃波が放たれた。

「この程度で、私の最高傑作のゼロファントスがやられるか!!」

「ウォー!!」

その時、ゼロファントスの牙にひびが現れ、ゼロファントスの牙が一刀両断され、ゼロファントスはビルの方に吹っ飛ばされた。倒れたビルの下敷きになり、身動きが取れなくなったゼロファントス、ジャンはキングの元に向かい、

「やったな! さあ、次はウィルと皇子様のところへ…」

「いや…」

その時、なんとキングのツインドフアングまでもゼロファントスの牙同様に割れてしまった。

「ストーム、お前……」

「どうやら、かなり危険な賭けだったようだな。すまない、アラシさん、あなたの大事な友人の相棒の片割れを俺の代で破壊してしまうなんて…… やっぱり、俺はあなたのようになれなかったみたいだな。」

その時、キングは力尽きたかのようにそのまま倒れてしまう。

「おい、ストーム、おい！」

「すまないな。俺はここまでだ。少し休ませてくれ。」

「バカ野郎！ 無茶しやがって。」

野生ゾイドたちとメカトピア共和国軍のゾイドの登場によって同盟軍が一気に優勢になったが、ガネストは獄炎龍形態になったデスレックスの力を試せると言わんばかり

に、次々と野生ゾイドたちの大群を蹴散らし、火炎放射でゾイドを溶かし、強靱な顎で噛みつき、そのまま補食し、前足でゾイドの身体を引きちぎり、両足でゾイドを踏み潰したりと残虐な方法でゾイドたちを虐殺していった。

「どうしたの？ もっとかかかってきてよ！ 最高だ!!」

デスレックスとコクピットのガネストを見たウィルはまるで人間とは思えないような信じられないような表情をしていた。

「あいつ、こんな状況でも戦いを楽しんでいる。」

自分の兄弟でありながら、今までエマと一緒にいて周りの人から大切に育てられてきた自分と全く違う環境で育ち、狂気的な性格になったガネストにレイルは複雑な表情をした。

「くー」

クルーガーはグラビティキャノンの照準をデスレックスに向けるが、デスレックスはその圧倒的な力で野生ゾイドたちを蹴散らしていつているため、中々照準が合わせないでいた。

「くそ、こんなに激しく動いては狙いが定まらない。仮に当たっても、周りの野生ゾイドまで巻き添えを喰らうことになるし、どうする。」

それにしても、この状況にも関わらず、ギアラガー三世は何故一向に現れないのだ？



ゼログライジスの力を使えば、我々を制圧することは可能だというのに。

だが、そんなこと今考えても仕方がない。先にゼログライジスから倒す。行けるか？

「ゴルド。」

「グオオ〜!!」

クルーガーは帝都メガロポリスの中央にある宮殿にグラビティキャノンの照準を合わせた。

「ターゲットロックオン、グラビティキャノン発射!!」

ゴルドのグラビティキャノンの2門の砲塔が放たれ、その衝撃にゴルドが少し半歩下がりがり、2発のグラビティキャノンの弾が宮殿に向かっていった。

グラビティキャノンの2発の弾丸が宮殿に命中し、宮殿は超重力に包まれ、徐々に押し潰されていった。それを見たタツカー元帥やベケット少将らは驚愕した。

「そんな、まさか、ギヤラガー三世陛下が!?!」

「よし、これでゼログライジスは始末した。後は一番厄介なデスレックスだ。」

しかし、その時、グラビティキャノンの超重力で崩れる宮殿の中からなんと、ゼログライジスが現れた。それを見たクルーガーやウィルたちは驚愕した。

ゼログライジスは超重力を食らっても全く通用しないように見えたが、実際はなんと超重力がゼログライジスを避けて発生していたのだ。ゼログライジスは両手を広げた

その時！超重力は一瞬で消え去った。

「バカな、ゼログライジスは重力操作が可能なゾイドだと言うのか、そんなことがあり得ない！」

「いや、あり得る。それが出来るのはオリジナルデスザウラーであるこの私、ギヤラガー三世と我が分身のゼログライジスだけだ！」

それに、かつての私に通用しなかったグラビティキャノンが今さら、この私に通用するとても？」

ゼログライジスが現れたのを見たガネストは、デスレックスをゼログライジスの方に向かせ、

「やっとなれたようだね。父上……いや、デスザウラー。」

でも、残念だったね。ボクのデスレックスはもう最終形態になったよ！今さら、ゼログライジスが出て、ボクのデスレックスに勝てはしない。

ボクはこの時を待っていたんだよ！お前を倒し、ゼログライジスの力を手にいれ、このボクが真の帝王になる。

デスザウラーの力を得たこのボクこそが真の帝王ギヤラガーとなって君臨するんだ！！

「違うな。待っていたのは私の方だ。お前のデスレックスが最終形態になるときを、

そしてお前は私になるのだ！」

その時、ゼログライジスの背中のコクピットから無数のケーブルのようなものが現れ、デスレックスの身体を包み込んだ。それと同時にガネストの身体も徐々に金属に侵食されていった。

「何?！」

デスレックスは次々とゼログライジスの無数のケーブルに巻き付かれ、どんどん飲みこまれていき、ガネストの身体も足から首までが金属に侵食され、やがて、顔の近くまでいった。

「バカな、こんなことがあり得ない！　ボクがやられるはずがないんだ。ボクは帝王なんだから！　ウオオ〜!!」

ガネストの言葉も虚しく、完全に金属に取り込まれ、コクピットには金属の塊が出来た。デスレックスもケーブルに全身を包まれた。

包まれたデスレックスは小さく凝縮され、そのままゼログライジスの口まで運ばれた。ゼログライジスは口を開き、無数のケーブルに包まれ、凝縮されたデスレックスをそのまま、まるで喰うかのように口の中に入れた。

ゼログライジスがデスレックスを喰ったその時、ゼログライジスに紫色の閃光と衝撃波が放たれ、周囲の親衛隊ゾイドと同盟軍ゾイド野生ゾイド、周りの都市は全て破壊さ

れた。

爆発が止んだ後、帝都メガロポリスの3分の1がクレーター状になり、その中央に立っているゼログライジスは通常形態の数倍以上のサイズになり、全身に青みがかかったカラーリングになり、更に頭部のマインドホーンも通常形態の時より伸び、デスレックス獄炎龍形態の角のような形状になり、更にデスレックス獄炎龍形態みたいに炎を吐いた。

「遂に完成した！ これこそ、私が望んでいたゼログライジスの究極体、究極完全龍アルティメットゼログライジス!!」

ゼログライジスのコクピットから出たギヤラガー三世は身体が液体金属状になり、かつて地下研究所でレイルと対峙した時に見せた白と紫色のラインが入った刺々しいオーガノイドの姿になり、同時にゼログライジスの胸部が開き、オーガノイド体になったギヤラガー三世は翼を広げ、紫色の光になってゼログライジスの胸部のコアに取り込まれ、そのコアと一体化した。

「フフフフ、これで私はかつて惑星Ziでデスステインガーと融合したあの力を遥かに凌駕する究極の力を手に入れた！

これで、私は全宇宙に君臨する唯一絶対の完全生命体となったのだ!!」

ギユオオオ!!

目一杯咆哮を上げるアルティメットゼログライジス、それを見たりセルは、

「何が究極完全龍だ！ 今さら貴様がパワーアップしようが変わりはない！」

そう言つて、アルティメットゼログライジスに突つ込むジェノスピノ、

「待て、リセル！」

「鍊獄ジェノサイドクラッシュャー!!」

突つ込むジェノスピノにアルティメットゼログライジスは手を振りかざし、同時にジェノスピノの身体が浮いた。

「まずは貴様からだ。」

アルティメットゼログライジスは手を握りしめ、同時にジェノスピノの身体とジェノソーザーも握りしめられるかのように押し潰されていった。

「止めるー!!」

シーザーとオメガレックスがアルティメットゼログライジスに向かつて走つて行くが、アルティメットゼログライジスは再び手を振りかざし、シーザーとオメガレックスの身体の動きが止まった。

「どうした？ シーザー！」

「この力は！」

「そこで大人しくしている！ 貴様らの相手はこいつの処からだ。」

「くそ、これでも喰らえ!!」

ジェノスピノはアルティメットゼログライジスに火炎放射を放つが、火炎はアルティメットゼログライジスを避けるかのようにならぬように2つに割けた。

「な、何!?!」

「ふん、こんなものか。火炎とはこうやるのだ!」

その時、アルティメットゼログライジスはデスレックス獄炎龍形態のような凄まじい火炎放射をジェノスピノに放った。それを見たレイルは、

「あれは、デスレックスの火炎放射! まさか、あのゼログライジスにはデスレックスの能力を受け継いでいるのか!?!」

アルティメットゼログライジスの火炎放射を喰らったジェノスピノの装甲は一気に大半が溶けてしまった。

「究極体となった記念すべきアルティメットゼログライジスの最初のご馳走はお前だ。私の身体の一部になれることを光栄に思え。」

アルティメットゼログライジスは手を振りかざした時、ジェノスピノの装甲にひびが割れ、その中からゾイドコアが現れ、同時にリセルもコクピットから強制的に出された。

「これは、どうなっている!?!」

アルティメットゼログライジスは口を開き、リセルとジェノスピノのゾイドコアはそ

の口に吸い込まれていった。それを見たウィルとレイルは抵抗しながらも、

「リセル!!」

リセルとジェノスピノのゾイドコアはアルティメットゼログライジスに取り込まれ、吸収したアルティメットゼログライジスの身体からはデスレックスを取り込んだ時のように紫色の閃光と衝撃波が放たれた。

「ああ、これがジェノスピノの力か！ 最高だ。」

ゾイドコアを失ったジェノスピノはそのまま石化した。それを見たレイルは怒り狂い、

「貴様、許さない!」

オメガレックスは自力でアルティメットゼログライジスの重力から脱出し、シーザーも重力から出ようとするが、中々出ることが出来ない。オメガレックスはアルティメットゼログライジスに荷電粒子砲の照準を合わせ、

「僕は今までお前を父と思って尊敬し、ネオデスマタル帝国を正義と信じ、皇帝になるためにずっと必死になって頑張ってきた。

けど、今となってはお前は僕の父親じゃない！ ただの悪魔だ!! 行くぞ、オメガレックス!

オメガレックス、進化 解放！ エヴオブラストー!! 荷電粒子砲発射!!」

オメガレックスはアルティメットゼログライジスに向けて荷電粒子砲を放ち、アルティメットゼログライジスに直撃するが、アルティメットゼログライジスには傷一つ付かず、そればかりか、まるで何事もなかったかのように首を傾げた。

「そんな……！」

「もはや、荷電粒子砲等、過去の異物だ。」

アルティメットゼログライジスは手を振りかざし、オメガレックスの身体が宙に浮いた。

「我が宿主の分身であるアーネストよ！ 今度こそ、私と一つになるのだ！」

「嫌だ！ 僕はお前なんかと一つにはならない。僕はエマと一緒にいなければいけないんだ！ 僕を失って彼女を悲しませたくない！」

「ふん、貴様は所詮、私の一部になるために生まれてきたに過ぎん！！」

かつて、地球に移住したときに造った我が分身も貴様のように私に逆らったが、貴様も同じようにはさせませんぞ。どのみち貴様に逃げ場はない！」

「嫌だ、嫌だ！ 僕は帰らなくちゃならないんだ。エマのところへ！」

「もうぞ、オメガレックスの力を！」

ジェノスピノ同様にオメガレックスの装甲にひびが割れ、そこからゾイドコアが現れ、同時にレイルもアルティメットゼログライジスの重力操作によってコクピットから



引きずり出された。そして、レイルはオメガレックスのゾイドコアと共にアルティメットゼログライジスの口に吸い込まれた。

「ウワアー!!」

それを見たウイルとシーザーは、

「レ、レイルー!!」

グオオッ!!

レイルとオメガレックスのゾイドコアも吸収したアルティメットゼログライジスの身体に更に強力な衝撃波が放たれ、周囲にいた親衛隊ゾイドと野生ゾイド、同盟軍のゾイドや都市も一瞬で破壊された。

「レイルとリセルを返せー!! スピリットバーストブレイク!!」

シーザーはアルティメットゼログライジスに向かって攻撃するが、アルティメットゼログライジスは口からオメガレックスと同じ荷電粒子ビームを放った。シーザーはギリギリでかわすが、荷電粒子砲を喰らった野生ゾイド、同盟軍のゾイドは一気に消滅した。

「そんな、荷電粒子砲まで……」

「フフフフ、ハーハッハッハッハッハッハ!!」

ギユオオッ!!

ギヤラガー三世の高笑いとアルティメットゼログライジスの咆哮が響いた。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 第54話 「最終決戦 シーザーVSアルティメットゼロ グライジス」

吸収したオメガレックスと同じ荷電粒子ビームを放ち、オメガレックス以上の威力を持つアルティメットゼログライジスにウィルや皆は驚愕した。

「そんな、さっきの火炎放射といい、何で荷電粒子砲まで!?!」

驚くウィルにドレイクは、

「あのゼログライジスは融合したデスレックスの能力を受け継いでいて、デスレックスがゾイドを喰らうことに進化するように奴も人間とゾイド因子、ゾイドコアを吸収し、しかもその能力まで得る能力を持っているのだろう。」

「そんなことが…!」

「なら、これでも喰らえ!!」

クルーガーはゴルドのグラビティキャノンアルティメットゼログライジスに向けて放つが、アルティメットゼログライジスは両手のGグリップクローを振りかざし、重力操作でグラビティキャノンの2発の弾を直前で停止させた。

「そんな!」

「今さら、これが私に通用するとも思ったのか？ ホラよ、返してやる。」

アルティメットゼログライジスは重力操作で止めたグラビティキャノンの2発の弾をそのまま返し、周囲にいたメカトピア共和国軍ゾイドと野生ゾイドが全て全滅してしまつた。

その時、ビルの瓦礫からボロボロになつたドクターマイルスのゼロフアントスが現れた。アルティメットゼログライジスを見たドクターマイルスは、

「オオ、遂に究極の存在になられたんですね。これで我がネオデスマタル帝国の栄光と古代ゾイド人による天下が約束された！」

野生ゾイドたちとの戦いでボロボロになりながらも立ち上がるナックルコングG3、ドライパンサーG3、ゼロステイレイザー、ゼロデイメパルサー、ゼロドライパンサーに乗るタツカー元帥、ベケット少将、デーニツツ中将、ルメイ大將は歓喜した。

「オオ。我が帝国国民よ！ 喜ぶがよい。今まさに皇帝ギヤラガー三世陛下は究極の力を手に入れた！」

これで、我がネオデスマタル帝国は永久不滅の完全な帝国になつたのだ!!」  
ウオオー!!

それを聞いた帝国市民は一斉に歓喜した。

「さあ、皇帝陛下！ そのお力で、反乱軍を根絶やしにし、世界に示すのです！」

それを聞いたギヤラガー三世は不敵な笑みを浮かべ、

「そうだな。だが、帝都と貴様らがこんな様では、もはや帝国も終わったな。」

まあ、この力が手に入った時点でそれも必要なくなったがな。」

「え、何を?」

そう言うと、アルティメットゼログライジスはGグラッドクローでドクターマイルスとゼロファントス、タツカー元帥とナツクルコングG3、ベケット少将ら四天王と全ての親衛隊と親衛隊ゾイドだけでなく、帝都メガロポリスにいる市民を全て重力操作で浮かした。

「こ、皇帝陛下! 一体何をなさるのです!?!」

「決まっている! 今の私は更なる強大な力を得るために餌を求めているのだ。だから、使い物にならなくなった貴様らを私の糧にさせてもらう。」

「そんな、バカな!?!」

ドクターマイルスは慌ててギヤラガー三世に、

「皇帝陛下! これはいくらなんでもあんなまりでは! こんなこととして、我ら古代ゾイド人とネオデスメタル帝国の未来はどうなるのです!?!」

「心配はいらん。この力があれば、帝国等いくらでも作り替えられる。人間やゾイドの駒等いくらでもあるのだからな。」

「そんな……」

「だが、心配することはない。貴様らは私の身体の一部となり、私の力になるのだ。光栄に思うがよい。」

「バカな、我々の正義は、信念は何処にいつてしまったのです!」

「もらうぞ、貴様らの力を!」

「お許しください! 皇帝陛下下ー!!」

そう言うと、アルティメットゼログライジスはGグラッドクロードクターマイルスとゼロフアントス、タツカー元帥とナツクルコングG3、ベケット少将ら四天王と全ての親衛隊と親衛隊ゾイドだけでなく、帝都メガロポリスにいる市民やさっきの荷電粒子砲と返されたグラビティキャノンで全滅したメカトピア共和国軍ゾイドと野生ゾイドを全て吸収してしまった。それを見たウィルたちは驚愕した。

「あいつ、自分の国の国民や部下にゾイドまで喰いやがった!」

「奴にとつては国家も組織も国民もゾイドも全てはあのアルティメットゼログライジスを完成させるための餌に過ぎなかったのだ!」

その時、アルティメットゼログライジスの身体が段々熱くなり、歩くと、その足跡がマグマのように溶け、周りの建物がアルティメットゼログライジスが近付くだけで、全て溶解していった。

「ど、どうなってるんだ？ 奴の身体は！」

ジョンが分析すると、

「アルティメットゼログライジスの装甲が高熱を発生し、一万度以上、いや更に急上昇していつていきます！」

「一万度以上だと！ 太陽の表面温度以上の熱を発生しているっていうのか!？」

アルティメットゼログライジスが近付いていく中、ゾイドたちの身体も徐々に溶解していった。

「これは不味い！ 一旦逃げるぞ!!」

「そうはさせるか!」

アルティメットゼログライジスの背中のドーサルキャノンが帝都中に縦横無尽に発射していつて、シーザーたちはその攻撃を食らって、全滅してしまう。

「さて、貴様らの力を貰うとしよう。」

その時、何者かがアルティメットゼログライジスを攻撃した。攻撃してきたのは、コナー少佐のステゴゼーゲ Mk-II と ナックルコング G3 との戦いで死んだはずのグラッドのレックスだった。それを見たストームたちは驚愕した。

「待たせたな!」

「グラッド、どうしてお前が？」

「説明している暇はない！今のうちに早く逃げる!!」

「わ、わかった!」

コナー少佐のステゴゼーゲMk-IIとレックスがアルティメットゼログライジスの注意を引き付けている間にシーザーはジャックに、キングはミクロラプトル種のゾイドにそれぞれの飛行ゾイドに運ばれ、同盟軍とメカトピア共和国軍は撤退した。それを見たギヤラガー三世は、

「敵わぬと見て、一時撤退したか…。いい判断だが、所詮何処に逃げても無駄なことだ。貴様らに更なる絶望を与えてやろう。フフフフ、ハーハツハツハツハツハツハツ!!」

ヴオオッ!!

ギヤラガー三世の高笑いと共にアルティメットゼログライジスも咆哮を上げた。



レッドケルベロス本社に戻ったストームたちは、傷付いたシーザーやキングたちの修復を行っていた。修理されているキングを見ているストームの元にグラッドが立ち寄り、

「随分派手にやられちゃったな！」

「それにしても、お前、どうやって助かったんだ？ あのまま行けば、お前もレックスもペチャンコだったんだぞ！」

「レックスがまだ死ぬ訳にはいかなと言わんばかりにあいつの機転で助かったんだ。」

落下する途中、レックスが自らナツクルコングG3に撃ち込み、その衝撃でジャンプし、瞬時にナツクルコングG3が地面に直撃しない腹の上にたち、ナツクルコングG3がクツションになったおかげで、大したダメージにはならなかった。

その時、気絶した奴に止めを差そうとしたが、ドクターマイルス率いる帝国軍が来ちまって一旦逃げて追いかけてお前たちと合流したってわけだ。」

「全く、あれだけカッコいい捨て台詞を言っておきながら、結局コロツと生きているなんて、逆にカッコ悪いぞ！」

「しょうがねえだろ。相棒がまだ死ぬなって言って助けたんだから。文句があるなら、俺の相棒に言いな！」

それにしても、俺がいない間に随分賑やかになったもんだな。」

「アルティメットゼログライジスのせいだ。」

「アルティメットゼログライジス？」

「ゼログライジスの奴が最終形態になったデスレックスと融合し、とんでもない強さを手に入れたんだ！」

「おいおい、マジかよ！ ただできえ、化け物の2体が一緒になっちゃったのかよ!!」  
「そのおかげで、この様だ！」

「更に状況が悪くなっちゃったってわけか。でも、ナツクルコングG3の姿がいなくてことは仇討ちに成功したってことだよな？」

「ああ、リセルの手ではなく、皮肉にもあのアルティメットゼログライジスの餌になって消滅しちゃった。」

「だが、これでリセルは前に進むことができる。ところで、リセルは？」

「リセルは……」

部屋に戻ったウィルはエマやユリス、カティアに状況を話し、それを聞いたエマは膝を落とし、泣き崩れた。

「そんな、どうして… どうして、レイルが!？」

「ごめん、エマ…」

泣き崩れるエマにユリスは優しく肩を撫で、

「泣かないで、エマ。ウイルのせいじゃないのよ。」

「わかっているけど、レイルがいなくなったら、私どうしたらいいの?」

そのまま泣き崩れるエマ、ユリスは悲しみを堪えながら、目に少し涙を浮かべた。

それを見ていられないようにウイルは部屋を退出し、シーザーの元に向かった。

「なあ、シーザー。俺はどうしたらいいんだ? エマの大事な人を守れずにデスレックスとゼログライジスを倒せなかった。」

こんな俺を相棒にして良かったのか? やっぱり俺じゃなく別の人に助けてもらってその人がシーザーの相棒になった方が良かったのかな?」

それを聞いたシーザーは首を横に降り、何か言いたいようにウイルの顔をじつと見つめた。その顔を見たウイルは、

「そうだ。レイルとリセルは死んでなんかない! きつと何か救う方法はあるはずだ。ありがとう。シーザー。」

それを聞いたシーザーはゆっくり頷いた。

レッドケルベロス本社のビルの司令室ではカーター大佐とコナー少佐が再会した。

「コナー少佐、来てくれたのか。」

「私も戦います。帝国のために皇帝とゼログライジスを倒します!」

「今となつては、帝国だけの問題だけではなくなつた。これは世界全体の問題だ!」

「カーター大佐!」

兵士が呼んだ時、映像が送られ、その映像には侵攻していくアルティメットゼログライジスの姿が映り、アルティメットゼログライジスの歩いた帝国、共和国、ネオデスマタル帝国の都市と街は一瞬でマグマの溶岩で溶かされたように火の海になり、アルティメットゼログライジスが近付くと巨大な橋は一瞬でアルティメットゼログライジスの道を開けるかのように溶けた。

「まさか、ゼログライジスの力がこれほどとは!!」

その時、突然司令室の映像が乱れ、その映像からアルティメットゼログライジスのゾイドコアと一体化したオーガノイド体のギャラガー三世が映っていた。

ギヤラガー三世が映った映像を、ウィルヤストームたち、エマやユリス、レッドケルベロス社のブラック社長たちもそれを見ていた。

「やあ、愚かな下等生物の諸君、私の声が聞こえているかな？」

それを見たグラッドがマイクを取り、

「聞こえてるぞ！ 随分派手にやってくれたもんだな。どうせ、要求は我々の降伏だろう。悪いが、その要求には無条件で断つてもらおうぞ。」

「フフフ、ただの降伏ではない。貴様ら下等な人間とゾイド共に絶望を与えるために通信を開いたままだ。」

「絶望だど!？」

「いいものを見せてやろう。」

その時、映像が進攻するアルティメットゼログライジスに変わり、アルティメットゼログライジスが突然進攻を止めた。その時、アルティメットゼログライジスの胸部からブラックホールのようなものが現れた。

「これから、貴様らに見せてやろう。究極体となったこの私、アルティメットゼログライジスの真の力を！」

アルティメットゼログライジスの前に現れたブラックホールのようなゲートは更に大きくなり、そのゲートの中に太陽が映し出された。それを見て驚くグラッドたち、

アルティメットゼログライジスはゲートに向けて胸部を開いた。

「これから、貴様ら愚かな人間とゾイド共に見せてやろう。真の宇宙最強となったこの私、アルティメットゼログライジスの本当の力を！」

アルティメットゼログライジス、原始 解放！ ゼロブラストー!! デッドエンド !!

アルティメットゼログライジスの胸部のコアがゲートの中に放たれ、その強靱なビームは太陽に直撃し、その太陽は一瞬の内に消滅し、超新星爆発を起こした。それを見て信じられないような光景を見るウィルたち、

「安心しろ。今のは別の銀河の太陽だ。だが、その気になれば、この地球どころか太陽系を破壊することなど、造作もない。

今のうちに降伏し、私のペット（奴隷）になるなら、全ての命は助けてやる。しかし、降伏に応じないなら、さっきの太陽のように全滅してやる。猶予は後7時間、私がレッドケルベロス本社に着くまでだ。それまでにゆっくりと考えておくがいい！」

そう言って中継を切るギヤラガー三世、それを見たストームやグラッド、クルーガーたち同盟軍は、

「どうやら、あのアルティメットゼログライジスは俺たちの想像を遥かに凌駕する化け物のようだ。」

「なあ、ストーム、他に戦えるゾイドたちと武器はまだあるのか？」

「ああ、それが、お前が戻るまでにデスレックスとの戦いの時にほぼ全滅に近い状態で、援軍に来てくれたメカトピア共和国と野生ゾイドたちもあのアルティメットゼログライジスに吸収されちゃった。」

「グラビティキャノンの弾も全て使いきってしまったし、仮にあつてもさっきの戦いで奴には一切通用しなかったからな。」

「あ、そうだ！ クルーガー。 面白いえば共和国にはグラビティキャノンの他にロングレンジバスターキャノンつてのがあつたな。 それを使うのはどうだ？」

それを聞いたクルーガーは少し残念そうに、

「残念だが、あれは以前ギヤラガー三世のジェノスピノ率いるネオデスメタル帝国軍が旧ネオヘリックシティを壊滅させた時に破壊されちゃったんだ。」

「おいおい、それじゃ、今万全の状態なのは俺とレックスだけつてことになるのかよ!? そんなのムチャクチャだぜ！」

「いや、一つ方法がある！」

その時、メカトピア共和国軍のガルド将軍が口を開いた。

「かつて、ゾイドクライシス以後の地球を壊滅寸前に追い込んだ完全体ゼログライジスを封印させ、古代秘宝乙の一員であつたライオン種とティラノサウルス種のゾイドを

復活させるしかない！」

「てことは、そいつはウィルのシーザーや俺のキング、そして、デスレックスやオメガレックスとはまた違う同じ種の別のゾイドってことか…。」

「その通りだ。我々メカトピア共和国の伝説に残り、地球をゾイドと他の生物が共存できる世界を実現するために動いた勢力のゾイドで、我々の思想にも影響を与えた者たちだ。」

伝説によると、彼らはゼログライジスが誕生した別次元の惑星に生まれ、ゼログライジスと共に地球に来て、そのときにもゼログライジスを封印したことがあり、進化ゾイド、兵器ゾイドとはまた違い、それらを遥かに上回る力を持っていたと伝えられている。」

「てことは、彼らを呼び起こして味方にすれば、あのアルティメットゼログライジスでも同様に封印することが可能になるってことか!？」

「ただ、1つ問題が…」

「問題？」

「そもそも彼らが何処に眠っているのか文献にもそれが示されていない。ゼログライジスを封印したっていうなら、ゼログライジスが封印されたのと同じ場所の可能性が



かなり高いが、そもそもその場所がわからない。

知っているとするなら、ゼログライジスを復活させたネオデスメタル帝国の科学者のドクターマイルスだけだろう。」

「ドクターマイルスはあのアルティメットゼログライジスにゼロファントスと共に吸収されちまつたし、奴の研究所だつて破壊されている。

手掛かり無しで彼らを探すのは至難の技だな。しかもタイムリミットは後7時間しかない。彼らを探す時間なんてない。」

「仮に見つけて味方にしたとしても、彼らの力で、あのアルティメットゼログライジスに勝てるとは限らない。」

「私の予想でもゾイドコアを吸収することに無限に進化できるあのアルティメットゼログライジスはおそらく、完全体ゼログライジスと同等か、それ以上かもしれない。」

その時、ウィルがストームたちの前に現れ、

「俺が行きます！俺とシーザーがアルティメットゼログライジスと戦って時間を稼いでいる間にストームさんたちは伝説のゾイドたちを！」

「何を言っている！シーザーはさっきの戦いでボロボロなんだぞ！そんな状態で戦ったら、お前はもちろん、シーザーも当然死ぬぞ!!」

「それでも、行かなきゃならないんです！これ以上ギヤラガー三世をほうっておい

たら、もつと多くのゾイドや人々も死んでしまうんです！ それを止めるために黙って  
見ているわけにはいかないんです!!」

「気持ちわかるが、お前をそんな危険な目に遭わせるわけにはいかない。そこまで  
行きたいんって言うんなら、この俺を殴ってから行け！」

「え…」

「それが出来ないなら、俺とキングが行ってやる！」

「おいおいおい、ストーム！ 言っとくが、キングだって出撃できる状態ではないだろ  
！ それにツインドファンクが修復されるのも後2日だって聞いたぞ。」

それを聞いたストームは汗ダラダラな状態で、

「あー！（しまった〜!!）」

クリスはグラッドに小声で、

「あういうところが、リーダーの欠点ですよね。」

「ま、ある意味先祖譲りでもあるがな。」

「（ちくしよく！ せっかくウィルにカツコいいところ見せてやったのに、これじゃ、  
俺のイメージがた落ちじゃねえか。」

どうする？ ここは上手く誤魔化してやり過ぎすか。いや、今さら誤魔化しても無駄  
だし…）」

その時、カーター大佐とシユバルツ中佐が現れ、

「でしたら、私のスナイプテラの装備とシユバルツ中佐のキャノンブルの9連キャノン砲をあなたのワイルドライガーに装備させるのはどうでしょうか？」

「しかし、そんなことしたら、あなたたちのスナイプテラとキャノンブルも出撃出来ないんじゃないか？」

「ですが、私のスナイプテラとシユバルツ中佐のキャノンブルもかなりのダメージでとても出撃できる程ではありません。」

「カーター大佐の言う通りかもしれない。確かにキングはツインドファンクを破壊されたとはいえ、ボディ自体は他のゾイドと比べると軽傷だ。その判断は正しい。」

「といつても、兵器ゾイドの戦いかたはあまり俺の好みではないのだがな。」

その時、突然地面が揺れ、

「なんだ!? 地震か？」

映像を流すと、進攻するアルティメットゼログライジスが手のGグリップクローで雲を移動し、台風や落雷を発生させ、海には津波が起き、地面に亀裂が裂け、それはまるでかつてのゾイドクライシスの再来のようだった。

「あのアルティメットゼログライジスは天候操作も可能なのか!？」

「復活した完全体ゼログライジスにもあれと同様の能力を持っていると聞いたことが

あるが、奴はゾイドクライシス規模の地殻変動を引き起こすことも出来るんだ。」

「そんなことまでできるゾイドがこの世にいるなんて……」

「ゼロプラストだけでも厄介なのに、そりやねえぜ。」

「奴はもはや、ゾイドじゃない！ 完全な化け物だぜ!!」

「もはや、グズグズしている暇はない！ キングの改造が終わったら、直ぐにでも出撃する！」

「しかし、リーダー！ 出撃できるゾイドが僅かしかいませんん！」

「この際、一か八か行くしかない。どうせ俺たちに逃げ場はないんだ！ 黙って見ていてこのまま滅ぼされるよりはましだ！」

ウイルはストームの元に行き、

「ストームさん……」

「ウイル、お前はここで待っている！ 今のお前が行ったら足手まといになるだけだ。」

「リーダー、ワイルドライガーの改造終わりました！」

「よし、グラッド、ドレイク、行くぞ！」

「おう！」

キングとジャン、レックスと出撃できる残りの同盟軍ゾイドが次々と出撃していっ

た。それを見てウィルは複雑そうな表情をしていた。

レッドケルベロス本社から3キロ離れた場所に侵攻していくアルティメットゼログラ  
ライジス、アルティメットゼログラライジスの歩いている周囲がアルティメットゼログラ  
ライジスの装甲によって発生する一万度、十萬度以上の高熱でマグマのように溶解し、全  
てが火の海になっていた。

「後4時間か… だが、時間があるうとなかろうともはや、下等な人間やゾイド共にこ  
の私を倒す手段はないがな。ん？」

その時、目の前に9連キャノン砲を装備したキングとジャン、レックス率いる同盟軍  
ゾイドが現れた。

「ほう、改造されたワイルドライガーか… ちょうどいい。この私の宿主であるギャ

ラガー一世が倒したがっていた奴をこの私で潰してやる。」

アルティメットゼログライジスは背中の中のドーサルキャノンを中心に縦横無尽に発射していった。同盟軍ゾイドは次々と消滅していくが、キングたちはそれらを避けながら、アルティメットゼログライジスに向かっていく。

「ようし、お前らワイルドブラストだ!!」

「おう!」

「狙い撃て、レックス! 俺の魂と共に、進化 解放! エヴォブラスト!! ファイナルガトリング!」

「斬り刻め、ジャン! 俺の魂と共に、進化 解放! エヴォブラスト!! 新・音速 殺!」

「燃えろ、キング! 俺の魂と共に、進化 解放! エヴォブラスト!! キング: あれ? そういや、装備変えたから、キングオブクローブラストじゃなかった。

えくと、確かキャノンブルのマシンブラスト名はニンバーストキャノンだったから  
:  
:

「考えている暇はないぞ!」

「よし、これだな! 新生キングのエヴォブラスト、キングオブクローブラスト改めキングオブバーストキャノン!!」

キング、ジャン、レックスのエヴォブラスト技がアルティメットゼログライジスに直撃した。しかし、アルティメットゼログライジスは無傷だった。

「歯応えはあったはずだが、やはりこれでも効かないか。」

アルティメットゼログライジスは再びドーサルキャノンを撃ち込む。

「くそ、これじゃ、奴に致命傷を与えることが出来ないぜ！」

「なら、方法がある。俺のレックスとドレイクのジャンが奴を引き付ける。その隙にお前が奴の胸部にあるゾイドコアを狙い撃ちにするんだ！」

「といっても、あの装甲だせ。おまけに一万度や十万度以上の高熱も発生させている奴のボディをキングの新しい技でぶち破れるか否か……」

「お前にしては、珍しく弱気だな。そんなんじゃ、余計先祖に顔向け出来ないんじゃないか?」

「そうだ。俺のジャンにはかつて完全体ゼログライジと戦った時に活躍した共和国最強のギルラプターLCのA-Zレーザーガンとインパクトレーザーガン改を旧共和国のデルタから貰ったんだ。負ける気がしねえぜ。」

「そうだな。例え、この身が砕けようともこの世界を、ゾイドを救ってやる！」

「よし、行くぞ。ドレイク！」

「やってやるぜ！」

「ファイナルガトリング!!」

「喰らえ、レーザーガン!!」

アルティメットゼログライジスは再びドーサルキャノンを放つ態勢を取るが、レックスとジヤンはアルティメットゼログライジスの両目だけ狙って攻撃した。

アルティメットゼログライジスはドーサルキャノンを放つが、両目を攻撃され、視覚がふさがれ、狙いが若干外れた。

「よし、いいぞ！ さつきと比べると狙いが不正確になっている。このまま行くぞ！」  
「何!?!」 そうか、目を狙って、貴様らへの狙いを不正確にし、その隙に攻撃する算段か  
： だが、それもいつまで持つかな？」

キングはアルティメットゼログライジスに向かって走って行った。アルティメットゼログライジスの近くに行った時、アルティメットゼログライジスの装甲から放たれる高熱で近付けそうになるが、ストームは怯むことなく、

「行くぞ、キング！」

グオオッ!!

キングはアルティメットゼログライジスのボディに9連キャノン砲を撃ち込み、その衝撃で飛び、そのままアルティメットゼログライジスの格ボディに撃ち込んでその衝撃



でボディに触れることなく上昇し、遂に胸部まで行った。

「さあ、こいつで終わりにしてやる！ キング！ 進化極限解放！ キングオーバー  
ストキャノン!!」

極限解放したキングの強烈な9連キャノン砲がアルティメットゼログライジスのゾイドコアがある胸部に超至近距離で直撃した。

「終わったか… う…」

しかし、アルティメットゼログライジスの胸部は全くの無傷だった。

それを見たストームたちは驚愕した。

「そんなバカな…」

「今の攻撃、オメガレックスだったら、ゾイドコアも丸ごと破壊され、一発KOクラスだろうが、既に究極体となったこのアルティメットゼログライジスにとっては蚊に刺される程のレベルでもなかったわ!」

アルティメットゼログライジスはGグリップクローを出し、キングやレックス、ジャンはその重力操作で身動きが取れなくなった。

「さて、早速ギャラガー一世とデスレックスを葬ったワイルドライガーのゾイドコアを頂くぞ。デスレックスと共にゾイドの王と呼ばれたライガーなら、相当なご馳走になるんだろうな?」

「ち、もう終わりか…」

その時、強力なキャノン砲とアサルトキャノンがアルティメットゼログライジスのGグラップクローに直撃し、重力操作が一時解除された。重力操作が解除され、脱出するキングたち、そこに現れたのは改良したグラビティキャノンを装備したゴルド、クリスのジャック、ジョンのキール、ジェニファアのクーデリア、アレックスのウィーリィ、アッシュのバンプら同盟軍の精鋭部隊が勢揃いした。

「お前らー！」

「我々も戦います！」

「俺たちだって、黙って見ていられないからよ！」

「雑魚いくら集まっても同じことよ！ 貴様らではこの私に指一本触れることすら出来ん。」

「そんなけと試してみないとわからないぜ！」

「なら、試してやるか？」

キングたち同盟軍の精鋭部隊がアルティメットゼログライジスに一齐に立ち向かうが、アルティメットゼログライジスは格ボディから、十万度以上の熱風をまるで衝撃波のように放った。熱風を食らったキングたちはボディの大半が溶解し、一瞬で全滅してしまった。

「なんて、パワーだ…」

「アツプしているのは防御力だけじゃない。」

「攻撃力も桁違いだ。」

「ゼロブラストや大した武器を使っていないのに、あんな化け物、どうやって倒すんだよ!!」

「脆い！ これでは、遊び相手にもならんな。まあ、いい。腹が減ってきたから、デイナーにさせて貰おう。」

「スピリットガンストラッシュ!!」

その時、シーザーの攻撃がアルティメットゼログライジスに直撃し、シーザーがアルティメットゼログライジスの前に立った。

「ほう、」

それを見たストームは、

「バカ野郎、何故来やがった!?!」

「俺だつて戦いたいんです！ 例え、負けると知つても、犠牲になつたレイルやリセルや今まで戦つてくれたゾイドや皆、そして、この星に住む皆やゾイドのために俺はシーザーと共に最後まで戦わなきゃならないんです！ シーザーがそう教えてくれたんです!!」

「ウィル…」

「ふん、今さら貴様が来たところで、何になるといふのだ!？」

「俺とシーザーの全身全霊の力でお前を倒す!! 行くぞ、シーザー!!」

グオオッ!!

「面白い!」

アルティメットゼログライジスは荷電粒子砲を放つ態勢に入り、シーザーはEシールドを展開し、スピリットバーストブレイクを使う態勢に入った。

「食らうがいい。これがアルティメットゼログライジスの真の荷電粒子砲だー!!」

「スピリットバーストブレイク!!」

アルティメットゼログライジスの放った荷電粒子砲に向かって突っ込んでいくシーザー、シーザーは荷電粒子砲に推されていくが、

「持つてくれシーザー! 俺たちはこんなところで負けるわけにはいかないんだ!

俺たちの皆の、ゾイドの未来のために負けるわけにはいかないんだー!! シーザーく

!!」

グオオッ!!

シーザーの力一杯放った咆哮と共にシーザーの身体がオレンジ色に輝き、同時にシーザーは徐々に荷電粒子砲を推していった。

「何!？」

それを見たストームやグラッドは、

「いいぞ、あのまま行けば、アルティメットゼログライジスのゾイドコアに攻撃出来る  
！」

「ウイル… 成長したな。」

「ウォー!!」

シーザーの身体がアルティメットゼログライジスに近付いたその時、ブレードがアルティメットゼログライジスの荷電粒子砲に耐えられず、溶解し、一瞬で破壊されてしまった。

「そんな!!」

「ふん。」

今まで推していったシーザーは逆に荷電粒子砲に推され、そのまま山頂に向かって飛ばされ、爆発してしまった。それを見て絶望したような表情をするストームたち、

「もはや、かつて惑星Ziで私を倒したようにはいかないのだ！ フフフフ、ウワーハッハッハッハッハッハ!!」

ヴオオ〜!

ギヤラガー三世の高笑いとアルティメットゼログライジスの咆哮が世界中に響き、世

To be continued  
界は滅亡を約束されたかのように黒い雨が降り注いだ。

## 第55話（最終話）「未来を切り拓け、ライガー」

アルティメットゼログライジスの荷電粒子砲に敗れ、山頂で爆発炎上してしまうシーザー。それを見たギヤラガー三世は、

「ふん、実に無様だな。かつて惑星Ziで復活した私はあのライガーと似たライガーの特攻で宿主であった古代ゾイド人と共にゾイドコアを破壊され、本体を失うという屈辱を受けたが、今となっては、もはや過去の過ちを犯すという失態は無くなったようだな。」

さて本来なら、このまま貴様らを喰いたいところだが、先に喰いたい奴がレッドケルベロスにいたのでな。かつて私を封印させたそのライガーに乗る小僧の血を引く者だな。」

そいつを喰ったらゆつくり貴様らを喰ってやろう。それまで楽しみにしておけ！」

その時、アルティメットゼログライジスの胸部から映像で見た巨大なゲートが現れ、そのゲートがアルティメットゼログライジスを包み込み、アルティメットゼログライジスは姿を消した。それを見たストームたちは、

「消えた!? 一体どこに行ったんだ?」

「確か、奴は自分を封印させたシーザーの相棒の血を引く者を吸収するとか言っていたが、」

「シーザーのかつての相棒の子孫って… エマのことか!! だとしたら、まずいぞ!

奴が向かったのは間違いなくレッドケルベロス本社に向かつてやがるんだ!」

「しかし、奴はエマを吸収してどうするっていうのだ?」

「エマの先祖のレオはかつて完全体になったゼログライジスを倒し、封印した英雄だからな。」

おそらく、かつての因縁に決着をつけると同時に自分が封印される術を完全に根絶やしにするんだろう。」

「そうだったら、完全にあのアルティメットゼログライジスを封印することは二度と出来ないということになります!」

「何としても阻止しなくては! 今すぐレッドケルベロス本社に向かうぞ!!」

「けど、今からじゃ間に合わないのでは?」

「リーダー! コマンダー!」

その時、ジョンの声がした。

「どうした?」

「シーザーがいます!」



「ウィルとシーザーは無事なのか!？」

ストームたちがジョンのいるところに向かった先にはアーマーのほとんどが剥がされて全身がボロボロのシーザーがいて、コクピットには頭が出血し、気絶しているウィルいた。

「ジョン! ウィルとシーザーは大丈夫なのか?」

「重傷ではありますが、命に別状はありません。」

「そうか…」

破壊されたシーザーのEシールド展開装置を見たストームは、

「シーザーが荷電粒子砲に推される前にEシールドの出力を最大に上げてウィルを守ったんだな。ウィル、お前は本当にいい相棒を持ったな。」

「う…」

その時、ウィルが苦しみながらも目を覚ました。

「ウィル、大丈夫か!？」

「ストームさんに、グラッドや皆さん。俺は一体?」

「シーザーがEシールドでお前を守ったから、助かったんだ。」

「え、じゃあ! シーザーは!?! う…」

「大丈夫だ。シーザーもEシールドのおかげで、何とか致命傷は逃れた。最もシール

ドはもう使い物にならなくなって、身体もボロボロだがな！」

「良かった。シーザー…俺を守ってくれたんだな！」

ウィルを見たシーザーはゆっくり頷いた。

「そういえば、アルティメットゼログライジスは?」

「奴はゲートを抜けて別のところに行つた。おそらく奴はかつて世界を破滅に導き、完全体になった自分を封印したシーザーの相棒との因縁に決着をつけるつもりだ。」

「シーザーのかつての相棒つて…」

「まさか、エマを!! エマが危ない! 今すぐ助けないと!」

「落ち着け! 今のお前は戦える状態じゃないんだぞ!! もし、今いけば、間違いなくお前もシーザーも死ぬ。」

「といつても、今の俺たちもウィルやシーザーと同じ状況だ。今、レッドケルベロス本社に向かつてでも返り討ちになるだけだ。いや、それどころか、奴の手で完全に消滅させられるかもしれない。」

「頼みの綱が切れてしまったか…」

その時、ウィルはふらつきながらもシーザーの元に行き、

「おい、ウィル、どこに行くんだ!?!」

「それでも、俺は行きます。エマを、これ以上皆を悲しませないためにも、例え、負け

ると知っても、この身がどうなるうとも行かなければ鳴らないんです！

この世界とゾイドを、人々を守るために！」

グオオッ!!

ウイルの言葉に賛同するかのように目一杯咆哮を上げるシーザー、それを聞いたストームは、

「そうだな。確かにこのままいてもどうせ奴に滅ぼされてしまう。このまま黙って滅ぼされるより、一億玉砕の覚悟で奴に立ち向かうしかない。皆、やれるか？」

「行くしかないに決まっているだろ！ さっきの仮を倍にして返すまでだ。」

「そうだな。よし、行くぞ!!」

世界中に暗雲が立ち込め、雷や災害が世界規模に起こっている中、レッドケルベロス

本社のある都市では、市民たちが避難の準備をし、新帝国とレッドケルベロスによる兵器ゾイドがアルティメットゼログライジスを迎え撃つ準備をしていた。レッドケルベロス本社のビルの最上階でその様子を見ているブラック社長とカーター大佐は、

「市民の避難はこれで完了ですね。」

「こちらでもアルティメットゼログライジスを迎え撃つ準備は整いました。ところでビッグウイングの改造は？」

「後もう少しで終わる。だが、あれが完成しても果たしてあのアルティメットゼログライジスに通用するか……」

「今の我々にはそれしか手はありません。それにアルティメットゼログライジスを倒さねば、帝国はおろかこの世界に未来はありませんから。」

「我々は信じて突き進むしかないのか……」

その時、避難している市民たちが突然ざわめき出し、ブラック社長とカーター大佐が見上げると、レッドケルベロス本社の都市の向こうの山に巨大なゲートが現れ、そのゲートの中からアルティメットゼログライジスが現れた。それを見て大パニックになつて逃げ惑う市民たち、

「アルティメットゼログライジス！ まさか、あのゲートにそんな能力があつたなんて。」

カーター大佐はコナー少佐とシュバルツ中佐に、

「コナー少佐、シュバルツ中佐！ 合同軍を率いて出来るだけアルティメットゼログライジスを引き付けろ。私はビッグウイングに乗ってアルティメットゼログライジスを迎え撃つ準備をする。」

「はい！」

「ブラック社長、あなたはエマやユリスさんと共にここから避難してください。」

「え、ですが、あなたは？」

「これも軍人である私の仕事ですから。」

そう言うと、カーター大佐はそのまま立ち去った。

アルティメットゼログライジスが周囲を自身の高熱で溶解して火の海に変えながら都市に近付く中、都市の前にいる新帝国とレッドケルベロス社による合同軍がアルティメットゼログライジスに向けて一斉砲撃を開始した。

「ここから先は一步も近付けさせるな！」

しかし、アルティメットゼログライジスには一切通用せず、アルティメットゼログライジスは火炎放射でレッドケルベロス本社のある都市の前を防衛する合同軍のゾイドを全て溶解させて蹴散らし、そのゾイドコアまでも吸収してしまった。レッドケルベロ

ス本社のビルを見たギヤラガー三世は、

「遂に長年の因縁に決着をつけるときが来たぞ。かつて私を封印し、私の野望を阻んだレオ・コンラッドの血を引く小娘よ。

必ず、貴様をその身に取り込み、更にその力を得、完全にこの宇宙に君臨するのだ！」  
ヴオオ〜!!

アルティメットゼログライジスは咆哮を上げ、周囲の町を溶解しながら都市に入っていた。まだ残っている新帝国とレッドケルベロスによる合同軍はそうはさせじとアルティメットゼログライジスに一斉砲撃を開始した。

レッドケルベロス本社のビルの最上階で都市を破壊しながら近付いていくアルティメットゼログライジスを見たエマはストームが出撃した後にウィルが続いて出撃しようとした時のことを思い出していた。

「大丈夫だよ！ 俺は必ず戻ってくる。レイルもリセルも絶対に取り戻して見せる。だから、それまで待ってて！」

「ウィル……」

エマはレイルと一緒に撮った写真の入ったペンダントを握った。

アルティメットゼログライジスは新帝国軍のゾイドを装甲から発生させる熱と火炎

放射で街もろとも焼き付くしていき、そのゾイドも次々と吸収していった。

それを見たシーガル中将与アルドリッジ大佐はエマとユリスの元に行き、

「ユリス皇帝陛下、エマ嬢。ここは危険です！ 急いで我々と共に逃げましょう！」  
しかし、ユリスは、

「嫌です！」

「な、何故です!？」

「皆が戦っているのに私たちだけ逃げるなんてそんなの嫌です。」

「いえ、しかし、陛下は我々新帝国の皇帝というわけでは……」

「シーガル中將、私のファングタイガー改がないです！ ビッグウイングも。」

「何!？ ならば、複座仕様スナイプテラで脱出するぞ!」

エマとユリスは直ぐにその場を離れ、倉庫に向かった。

「あ、あれ？ ユリス陛下とエマ嬢は何処に?」

エマとユリスは倉庫でレイルとリセルがいなくなつて落ち込むギルラプターエンペラーとデルに、

「お願い、ギルラプター。私に力を貸して!」

「デルもお願い!」

ビルの中で清掃やら、荷物や戦闘の準備をしているドクタースミスとスレイマーズた

ちは、

「いいか！ お前ら、これが最後の戦いになるだろ。ここでワシらの力を見せ付けて今度こそ、殿下やエマちゃん、ユリスちゃんにお仕えするようになるのじゃあ!!」

「この状況でもリーダー、大分余裕ですね…」

「この世の終わりだから、最後にカッコいいところ見せたいだけかも…」

「こら、そこ！ 無駄口叩くな！ とところで、エマちゃんたちは？」

破壊神の如く街を次々と崩壊し、立ち向かうゾイドも蹴散らし、そのゾイドコアも吸収し、更に巨大になっていくアルティメットゼログライジス、

「もはや、誰もこの私を止めることは出来ない。」

その時、アルティメットゼログライジスの目に強烈な一撃を与えた。

「んっ？」

現れたのはコナー少佐の乗るステゴゼーゲMk-IIとメカトピア共和国軍から受け継いだ遺産であるインパクトガトリングを背中に乾装させ、シユバルツ中佐の乗るファンクタイガー改がアルティメットゼログライジスに攻撃した。

「何としても奴をここで食い止める！」

「ここで奴を倒さねば、地球に未来はない！」



「ふん、所詮ムシケラの分際で、」

ステゴゼーゲMk-IIとファングタイガー改はアルティメットゼログライジスに向けて砲撃するが、アルティメットゼログライジスには一切通用せず、アルティメットゼログライジスは2体に向けて火炎放射を放った。

ステゴゼーゲMk-IIとファングタイガー改はそれを避けるが、Gグランプクローによる重力操作で浮遊させられ、地面に叩きつけられてしまう。

「ぐわ！　なんて奴だ。」

「フフフフ、では貴様らのゾイド因子も貰うとするか。　ん？」

その時、レッドケルベロス本社のビルの地面が割れ、そこからビッグウイングが現れた。

「カーター大佐！」

「ギヤラガー三世！　我がネオデスメタル帝国の正義を踏みじつた罪を償って貰うぞ！」

制御トリガー解除！　ビッグウイング、兵器　解放！　マシンブラストー!!」

マシンブラストしたビッグウイングはシートを取り付けた口内からスナイプテラ同様のA-Zスナイパーライフルが出現した。

「喰らえ、アサルトショット!!」

ビッグウイングのA―Zスナイパーライフルがアルティメットゼログライジスに直撃し、大爆発を起こした。それを見たコナー少佐とシユバルツ中佐は、

「やった…のか?」

しかし、煙が晴れるとアルティメットゼログライジスは全くの無傷だった。

「そんな…」

「ふん、中々の威力だ。だが、この私にとつても蚊に刺される程でもない。」

アルティメットゼログライジスは口内を開き、ビッグウイングに向けて荷電粒子砲を放った。ビッグウイングはそれを避けるが、左翼を破壊され、そのまま荷電粒子砲は向こうの山脈に直撃し、全て破壊してしまった。片翼を破壊されたビッグウイングはそのままレッドケルベロス本社のビルの前に倒れてしまう。

「さて、邪魔者はいなくなつたな。」

「ウォー!!」

「ん?」

その時、アルティメットゼログライジスの背後からシーザーが現れ、アルティメットゼログライジスに向けて渾身の一撃を咬まそうとしてきた。

「スピリットバーストブレイク!!」

「はあ…」

ギヤラガー三世はため息を付き、アルティメットゼログライジスは右腕のGグランプクローを下げ、シーザーはその重力操作で強制的に地面に叩きつけられてしまう。

「今さら、貴様が来てどうにかなるとでも思ったのか？」

更にアルティメットゼログライジスは片足をズシンと押し、同時に紫色の衝撃波が放たれ、シーザーたちは身動き出来ない状態になった。

駆けつけたキングたちも衝撃波で身動きが取れなくなり、

「な、何なんだ、これは？」

「これは、まさか！ デイメパルサーのファイナルマッドオクテットか!？」

「おいおい、その能力まで使えるなんて冗談じゃねえぜ！」

「先にあの小娘から喰おうと思ったが、そんなに死にたいなら、望み通りにしてやる。」

アルティメットゼログライジスはシーザーに近付き、片足を上げてシーザーを踏み潰

そうとしたその時、

「アブソルートショット!!」

現れたのはカティアアの乗るカーター大佐仕様のスナイプテラだった。スナイプテラはそのままアルティメットゼログライジスに向けて突進するが、アルティメットゼログライジスは難なくスナイプテラを鷲掴みにし、そのまま握り潰していった。それを見たウィルは、

「や、止めろー!!」

「おっと、そうだったな。まず貴様らからだったな。」

アルティメットゼログライジスはシーザーの目の前に来、シーザーを踏み潰そうとし、ストームたちがもはやこれまでかと言わんばかりの表情をしたその時、

「止めてー!!」

その時、エマの声がし、アルティメットゼログライジスの目の前にギルラプターエンペラーとデル、ベティ、レナが立っていて、ギルラプターエンペラーとデルにはエマとユリスが乗っていた。それを見たアルティメットゼログライジスはスナイプテラを落とすとし、

「遂に現れたか、かつて私を封印したレオ・コンラッドの血を引く小娘よ。しかもかつての真帝国皇帝ハンナ・メルピルの血を引く小娘まで現れるとは、これは嬉しいサービスだな。」

「もう止めてください。これ以上皆を傷付けないで。」

「では、私の軍門に下るということでいいのだな?」

「それでいいです! それで皆が助かるなら。」

それを聞いたウィルは、

「や、止める。エマ! 君はレイルの代わりに俺が守るんだ。君が犠牲になる必要な

んでないんだ。」

「いいの、ウィル。私は大丈夫よ。」

「いい覚悟だ。だが、その前に目障りなそのライガーを始末してからだ！」

「ウィル、ギルラプター、進化 解放！ エヴォブラストー!! 新・音速殺!!」

「デル、進化 解放！ エヴォブラストー!! ハウリングショット!!」

エヴォブラストしたエマのギルラプターエンペラーとユリスのデルの攻撃がアルティメットゼログライジスに直撃し、アルティメットゼログライジスはギルラプターエンペラーとデルを驚掴みにした。

「ほう、そんなに死を望むのか。よかろう。では貴様らから喰ってやる！」

かつての真帝国皇帝ハンナ・メルビルの血を引く小娘とかつて私を封印したレオ・コンラッドの血を引く小娘を喰うとどれだけパワーアップするかな？

「止めろー!!」

アルティメットゼログライジスは先にデルを食い、続けてギルラプターエンペラーも口の中に入れた。

バリバリ！

アルティメットゼログライジスはその味を味わうかのようにギルラプターエンペ

ラーを食ったアルティメットゼログライジスは、デスレックスのようにギルラプターエンペラーをエマと共に噛み砕きながら、喰っていった。それを見て絶望したような表情をしたウィルは、

「そんな… エマが、エマが… ウワァー!!」

悲痛の叫びを上げるウィル、エマをギルラプターエンペラーごと食ったアルティメットゼログライジスは全身が紫色に光り、凄まじい衝撃波が走った。

「フフフフ、ハハハハハ ウワーハッハッハッハッ!! 遂に、遂に奴を取り込んだ!

これで私を止める者はいない。今こそ、全てを破壊し、この私が究極の生命体、新たな創造主として全宇宙に君臨するのだ!」

ギヤラガー三世の言葉と共に、アルティメットゼログライジスの背中に幾つかのゲートが現れ、アルティメットゼログライジスはそのゲートにドーサルキャノンとインフィニティミサイルを向けて一斉に発射した。

ゲートを抜け、ドーサルキャノンのビームとインフィニティミサイルは世界中のネオデスメタル帝国の各都市や野生ゾイドたちにいる森まで無差別に刃を向き、オメガレックスの荷電粒子砲に匹敵する程の威力を出して次々と破壊していった。それを見たストームたちは、

「ちくしょう、俺たちは何て無力なんだ！あの化け物を止めることはもはや出来ないのか!!」

アルティメットゼログライジスの凄まじい力を見たウィルは落ち込んだように、

「俺には何も出来ないのか、レイルやりセルを失い、ユリスさんやエマまでも守れなかった。所詮俺は何も出来ない人間だったのか！」

ガオ〜!!

シーザーが咆哮を上げたその時、突然アルティメットゼログライジスの身体がオレンジ色に輝いた。

「なんだ？何が起こったというのだ!?!」

アルティメットゼログライジスの胸部から放たれたオレンジ色の光りがシーザーに直撃した。

その時、コクピットにいるウィルは光りに包まれ、気が付いたら、白い空間にいて、目の前にはエマとシーザー、そして死んだはずのウィルの父のデイビッドがいた。

「エマ、シーザー、父さん、どうしてここに？もしかして俺はアルティメットゼログライジスにやられて死んだのか？」

「いいえ、私のゾイド因子の力であなたの心に語りかけているの。」

「エマのゾイド因子が俺の心に？」

シーザーはウイルを見つめ、

「ウイル、俺はお前に出会って本当に良かった。君がいたから、俺は変わった。今こそ、俺と君の力でアルティメットゼログライジスを、いや、デスザウラーを倒すんだ！」

「シーザー……」

「ウイル！ お前はこんなところで終わる男じゃない。お前にはやるべきことがあるだろ！」

「父さん……」

レイルやリセル、ユリスも現れ、

「ウイル、僕は君のおかげで、僕は救われた。ネオデスマタル帝国に縛られた僕を、だから、僕を救ったように世界を救ってくれ！」

「ウイル、お前ならあいつを倒せる！」

「ウイル、あなたならきつと出来る！」

「シーザー、父さん、エマ、レイル、リセル、ユリスさん、皆ありがとう。俺はまだ負けない!! ウォー!!」

その時、シーザーの身体がオレンジ色に輝き、同時にアルティメットゼログライジスの身体の発光も更に激しくなり、アルティメットゼログライジスの口が強制的に開かれ、その口から今まで吸収したゾイド因子がオレンジ色になってシーザーに集まり、



シーザーはオレンジ色のゾイド因子の光りに包まれ、段々とボディと装甲が再生している、オレンジ色に輝く神々しい姿へと変化していった。それを見たギャラガー三世は、「まさか、あの小娘のゾイド因子の力が再び甦り、吸収した全てのゾイド因子をあのライガーに供給するとは……だが！」

アルティメットゼログライジスは強烈な火炎放射をシーザーに向けて放ち、シーザーは炎に包まれた。それを見たストームたちは、

「ウイール！ シーザー!!」

「ふん、ん?」

しかし、シーザーはEシールドで火炎放射を防いだ。

「少しはやるようだな。だが、こいつはどうかな?」

アルティメットゼログライジスは再び口を開き、今度は荷電粒子砲を放った。アルティメットゼログライジスの荷電粒子砲でシーザーもろとも周りの建物が破壊されていった。

「今度は木つ端微塵になったかな。」

煙が晴れると、何とシーザーはその荷電粒子砲すらもオレンジ色のEシールドで防ぎ、シーザーは全くの無傷だった。

「何!？」

「俺は負けない。エマや父さん、レイルや皆、そしてこの星に生きるゾイドのためにも負けるわけにはいかない。お前を倒すために!!」

「ち、よかろう。そこまで死を望むなら、最大出力を持って迎え撃つてやる。」

アルティメットゼログライジスの胸部が紫色に光り出し、それを見たストームたちは、

「まさか、あいつ、ゼロブラストを放つつもりか!？」

「冗談だろ? 太陽を1発で破壊したあのゼロブラストを放たれたら、いくらシーザーだって!」

ゼロブラストを放つ態勢を取るアルティメットゼログライジスを見たシーザーはウイルの方を向き、何か言いたいように頷いた。

「ああ、わかってるさ、シーザー。この一撃に俺たちの全てを込める! 行くぞ、シーザー!!」

ガオ!!

すかさず、シーザーもエヴォブラストを放つ態勢を取った。

「アルティメットゼログライジス、原始 解放! ゼロブラスト!! デッドエンド!!」

「シーザー、進化 解放！ エヴォブラストー!! スピリットバーストブレイク!!」  
アルティメットゼログライジスの胸部のゾイドコアから放たれたビームとエヴォブラストしたシーザーがぶつかり合い、その衝撃で周囲の全てが吹き飛ばされていった。  
シーザーはアルティメットゼログライジスのゼロブラストに耐えるも徐々に押されていく。

「く、うう…」

「馬鹿め！ いくらゾイド因子の力でパワーアップしたとはいえ、究極体となったこのアルティメットゼログライジスのゼロブラストに敵うはずがない。 今度こそくたばるがいい!!」

「うう、駄目か…」

「諦めないで！」

その時、エマの声がし、エマの幻影がウイルの手を優しく握り、

「エマ、」

「そうだ、ウイル、諦めるな。」

その横には幻影となったレイルもいた。

「レイル、」

「そうだ、行け、ウイル！」

ストームや同盟軍の皆や吸収された他の人たちの声がし、ウィルに諦めるなど言わんばかりにシーザーも吠えた。

「そうだな。行くぞ、皆!! 俺たちの未来のために!」

シーザーはそのままアルティメットゼログライジスのゼロプラスのビームを貫くように進んでいった。ギヤラガー三世は驚愕したような表情をし、

「なんだと!?!」

アルティメットゼログライジスのビームを突き進み、シーザーのアーマーが剥がれ、段々と別の姿に変えていった。

「行つけ!!」

スピードを上げたシーザーのブレードがギヤラガー三世と一体化しているアルティメットゼログライジスのゾイドコアを貫いた。

「ぐ…」

「これで終わりだ! デスザウラー!!」

「ぐ、ぐ、ぐ、グワァー!!」

シーザーのブレードはそのままアルティメットゼログライジスのゾイドコアを貫通し、アルティメットゼログライジスの背中のアーマーをぶち破って現れた。

アルティメットゼログライジスは身体とゾイドコアを撃ち抜かれ、大爆発炎上した。

それを見たストームたちは喜び、

「やったー!! 俺たちが勝ったぞ!」

シーザーの身体を包んだオレンジ色のゾイド因子は世界中に降り注ぎ、地球中全てオレンジ色に包まれ、今まで吸収された人々と野生ゾイドやその他のゾイドが石化から逃れ、息を吹き込み、帝都メガロポリスでアルティメットゼログライジスに敗れたジェノスピノとオメガレックスもボディにゾイドコアが戻り、石化が無くなり、コクピットにリセルやレイルも戻った。エマはギルラプターエンペラーと、ユリスはデルと共に戻り、ベティやレナも戻った。

「アルティメットゼログライジスが倒され、皆戻ったのか。」

それと同時に爆発炎上したアルティメットゼログライジスから完全に石化したゼロファントスとボディがボロボロになったデスレックスも現れ、コクピットにいたドクターマイルスやガネストも引きずり出された。

それを見たドレイクは驚き、

「ちよつと待てよ。何故あいつらまで?」

「もしかして、あいつらはデスザウラーのゾイド因子から解放されたのか?」

光りが消え、シーザーの身体のアーマーが全て剥がれ落ち、シーザーはウィルと初めて出会った時のビーストライガーの姿に戻った。それを見たウィルは驚き、

「シーザー、お前どうしてその姿に？」

ギルラプターエンペラーと共にシーザーの元に立ち寄ったエマは、

「きつと、シーザーが今までの力を出しきったから、その姿になったのよ。」

「エマ……」

「ありがとう、ウィル、シーザー。」

しかし、爆発炎上し、ボディが全て吹き飛び、ゾイドコアだけ残ったアルティメットゼログライジスのゾイドコアからオーガノイド体のギアラガー三世が現れ、エマに襲いかかった。

「許さん、許さんぞ〜!!」

「はー!」

「死ね〜!!」

オーガノイド体のギアラガー三世がエマを捕らえようとしたその時、ウィルとシーザーはすかさず、攻撃の態勢を取り、

「させない! シーザー!!」

ガオ〜!!

「ピーストオブクロブレイク!!」

「うお、」

シーザーのブレードがオーガノイド体のギヤラガー三世を切り裂き、ギヤラガー三世はアルティメットゼログライジスのゾイドコアにぶつかるところ。その時、再びゲートが開き、ゲートの中にはブラックホールがあった。

「我は不死身だ。貴様らゾイドと人間がいる限り、私は何度でも復活する… ウォー！！」

ギヤラガー三世はそのままゲートの中のブラックホールに吸い込まれ、ゲートも消え、アルティメットゼログライジスのゾイドコアは紫色の輝きを失い、正常な色になった。それを見たストームとグラッドは、

「これで終わったんだな。」

「ああ、終わった。長き戦いが。」

その時、メガロポリスから駆けつけたジェノスピノ、オメガレックスが現れた。コクピットにはリセルとレイルが乗っていた。

「ユリス！」

「エマ！」

それを見たユリスとエマは涙を浮かべながら2人の元に向かい、優しく抱き締めた。

「レイル、良かった。無事で。」

「僕も嬉しいよ。君が無事で。」

その様子を見たウイルとシーザーは互いに静かに見つめ合った。瓦礫の中からドクタースミスたちスレイマーズたちが現れ、

「おおい、皆。少しはワシらのことも心配してくれ！」

それから1年後、新地球暦1246年、アルティメットゼログライジスによって壊滅したネオデスマタル帝国に代わり、同盟軍主導で新たに連邦制を取るゾイド共和国ゾイドオブフリー、通称ゾフ（ZOF）が建国され、元ネオデスマタル帝国の帝都メガロポリスを首都に置き、新帝国、旧共和国はゾフの加盟国となり、かつてのゾイドクラシス後の領域の管轄を許され、互いの自治を認められた。



レッドケルベロス社は軍事企業からゾフ直轄の企業となり、またゾフ直属の治安組織であるゾイドコマンドフォース（ZCF）の結成にも協力し、ジェノスピノ、オメガレックスはレッドケルベロス社の元で嚴重に管理されることとなった。

ユリスは新帝国皇帝に復位し、カーター大佐はその宰相となった。

レイルとエマはユリスやりセルと共に新帝国の代表となつて新帝国の元で暮らすようになった。

アルティメットゼログライジスが倒された後、その融合から解放されたデスレックスは倒されたアルティメットゼログライジスにその力を吸収されたため、補食能力を失い、かつてのような脅威は無くなり、レイルによって引き取られ、彼の相棒となった。

同時にアルティメットゼログライジスから解放されたドクターマイルスとガネストもその力と記憶を失い、レッドケルベロス社に保護され、ガネストはギャラガー一族を正しい方へ導くためにブラック社長の秘書の大空ハナの元で育てられた。

ゾイドコアの存在だけとなったゼログライジスは2度と復活しないよう、メガロポリスの地下に嚴重に保管されることになった。

ゾフの首都メガロポリスの議会で、ゾフの大統領に就任したクルーガーと大統領補佐のクリスがレイルやエマユリスやりセル、デルタたち代表たちの前に立ち、演説を行つ

た。

「ネオデスマタル帝国との永き戦いに決着をつけ、我々はかつて完全体ゼログライジスを封印した帝国、共和国の合同軍のように真の平和を勝ち取った。

だが、これで終わったわけではない。デスザウラーの脅威は去ったとはいえ、ネオデスマタルの重鎮のようにゼログライジスの力を利用し、再び世界を混乱に招く者が現れるかもしれない！

しかし、それでも我々は人とゾイドが共に歩み、共に未来を築くために戦わなければならない。

この先、何があろうとも我々は世界の盾、抑止力として突き進むのです！」

その演説を聞いた代表たちは拍手喝采した。クリスはクルーガーに、

「ところで、大統領。本来ここにいるはずのウィルやリーダー、コマンダーたちはいないですが、これで良いんでしょうか？」

「彼らはきつとこの場に立つことを拒否するだろう。それにこれで彼らはもうすでに居場所を見つけただろう。」

会場にいるエマはレイルの方を向き、

「ねえ、レイル。」

「ん？」

「ウィルとシーザーは今でも元気かな？」

「元気さ。あいつはきつとシーザーと一緒に旅に出ているはずだからな。」

荒野を走るレックス、コクピットのグラッドは、

「総司令も政治もやっぱり俺には性に合わねえな。かといって密輸業者に戻るわけもいかねえし、これから何処に行く相棒？」

グオッ!!

「そうだな。ジョンたちも元の場所に戻ったわけだし、俺たちも自分の居場所を探しに行くか！」

グラッドの言葉を聞いて目一杯走るレックス、

別の地域では、ストームのキングとドレイクのジャンが共に歩き、

「ドレイク、お前、会社に戻らなくていいのか？」

「ネオデスメタル帝国の脅威は去ったとはいえ、それでも俺はどうもじつとしていない性分なんぞね。」

「じゃあ、俺とフリーダム団再結成といこうか？」

「遠慮する。俺はそういう趣味ではないからな。」

「またまた、照れちゃって！」

「なら、代わりに勝負しないか？」

「勝負？」

「まだ、古代秘宝Zは見つかっていないんだろ？」

「ああ、そうだ。俺はこの戦いが終わったら、残る全ての古代秘宝Zのゾイドを捜す旅に出かけるつもりだったからな。」

「バーニングライガーとゼノレックス、そしてライガー・ジ・アーサー。」

「ああ、それが残りの古代秘宝Zのゾイド。」

「ある情報によると、ドクターマイルスはそのライオン種とテイラノサウルス種を復元してネオデスメタル帝国の戦力に組み込むはずだったが、かつて故郷の惑星でゼログライジスと激しく対立したこともあって、ゼロファントスのマインドホーンやディメパルサーのファイナルマッドオクトゥトすら抵抗したため、やむなく復元を断念し、俺たち同盟軍の戦力に加えられないよう何処かに封印したそうだ。」

そして、そのバーニングライガーとゼロレックスはかつてゾイドクライシス後に完全体となって復活したゼログライジスを帝国、共和国による合同軍と共闘し、封印させたゾイドでもある。」

「それを聞いただけでもワクワクするぜ！」

「そいつらがどれ程の実力を持っているのか楽しみだな！」

「ああ、それが俺たちの本当の旅の目的だからな。」

「それにしても、ツインドファングは修復された方がいいが、お前、キャノンブルのキャノン砲、まだキングに装備させたままなんだな……」

「いいって、どうせ戦争は終わったし、カーター大佐やシュバルツ中佐だって持っていつてもいいって言ってたし、それにお前だってゾイドクライシス後の戦争に活躍したギルラプターLCの武器だって装備したままじゃねえか！」

「こ、これは… 外し忘れたただけだ。」

「ホントかねえ？」

「いいだろ！ 別に。」

「ま、お愛顧様だな。」

「そういや、あいつはいいのか？」

「あいつ？」

「あのライガーのガキだよ！」

「ウイルなら、きつと俺たちみたいの旅をしているはずさ。」

ウイルの故郷のタルト村のウイルの家で新聞を見ている叔父のリチャードは、

「アルティメットゼログライジスを倒し世界を救った英雄、受賞を辞退する……か。ウイル、すっかり人気者になったな。今となっては、世界を救った英雄か。危険な旅がまさか、あんなことになるなんてね。」

「あのライガーと会ってから、あの子の人生変わったもんね。ねえ、」  
「ん？」

「もし、あの子がライガーと出会わなかったら、今頃どうしてたと思う？」

「そうだね。村から一步も出なかつただろうし、もしかしたら今頃、ネオデスメタル帝  
国に攻められてこの村は滅んでいたかもしれないな。」

それに、天国のデイビッド兄さんはそのために僕にウイルを引き取ったんだろう。

兄さん、天国で喜んでいるかな？　ところで、ウイルは？」

「ライガーと一緒に村近くの遺跡に行ったわ。」

故郷のタルト村の近くの遺跡、1200年の年月が経っていることもあり、少なからずで原型は余り留めていないが、そこはかつてゾイドクライシスによつて荒廃した21世紀の街の跡だった。ウイルはシーザーに、

「そうか、ここでお前は復活してエマの先祖のレオと初めて会ったんだな。偶然だな。俺の故郷の村の近くに初めて最初の相棒と出会った場所があったなんて。」

しかも、このの近くにあった帝国軍の基地で俺とシーザーは初めて出会ったんだな。なあ、シーザー。」

グルル：

ウイルの言葉を聞いて振り向くシーザー、

「これからもずっと俺の側にいてくれるか？ お前の最初の相棒みたいになれるかはわからないけど……」

グルル：

シーザーはいいよと言うように頷いた。

「そっか、じゃあ、これからよろしくな！ シーザー。」

そうだ！ シーザー、旅に出ないか？ ストームさんはまだ見つけていない古代秘宝Zのゾイドを捜すって言ってたし、俺たちも旅に出てこの広い世界を駆け回らないか？」



ガオッ!!

「よし、行くぞ、シーザー! もっと早くもっと高くこの広い世界を突き進め!!」

コクピットにウイルを乗せたシーザーは天高く丸で空を飛ぶかのように舞い上がり、自由に走り回った。

モザイク都市ボスク、アルティメットゼログライジスの攻撃で崩壊された後、ゾフによつて復興され、都市の中心部にはウイルとビーストライガーの姿のシーザーの像が立っていた。それを以前ウイルと出会った少年獣機レイが見つめ、

「シーザー、ビーストライガー。いつか僕もビーストライガーのようなゾイドを相棒にしてみせる!」

そして、それから、300年後、新地球暦1548年、かつてゾイドクライシス後にゼログライジスを復活させ、帝国、共和国を混乱に招き入れた古代ゾイド人の生き残りである者が同じ古代ゾイド人であるドクターマイルスの子孫に当たる現ZCF総督のデビス・マイルスを操り、再びゼログライジスを復活させ、世界は混沌に陥ったが、新たにシーザー（ビーストライガー）の相棒になった獣機カイがZCFを率いり、かつてのレオやウイルのようにゼログライジスを古代ゾイド人と共に宇宙に追いやり、地球を救った英雄になった。

ZCFの歴史の書類を読み、ウイルとシーザー、レイルとエマ、ユリスとリセルが一緒に撮った記念写真を見た獣機カイの兄の獣機シユウザは、

「そうか、ZCF結成にこんな歴史があったのか。まさか、カイがかつてのライガーの相棒のように英雄になるとは思わなかったよ。」

それに、俺の先祖まで知ることになるなんてね。」

シュウザはレイルとエマ、ユリスとリセルと一緒に撮っている写真を見た。そして、シュウザの後を継いで新たな獣騎士となったカイが乗るライジングライガーはウイルと一緒に旅に出るシーザー（ビーストライガー）の姿に重ねあった。

The End